

茨城県教育財団文化財調査報告第83集

茨城県自然博物館（仮称）建設
用地内埋蔵文化財調査報告書 I

原 口 遺 跡

北 前 遺 跡

平成 5 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第83集

茨城県自然博物館（仮称）建設
用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

ほら ぐち 遺 跡
きた まえ 遺 跡
原 口 遺 跡
北 前 遺 跡

平成 5 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

高崎貝塚

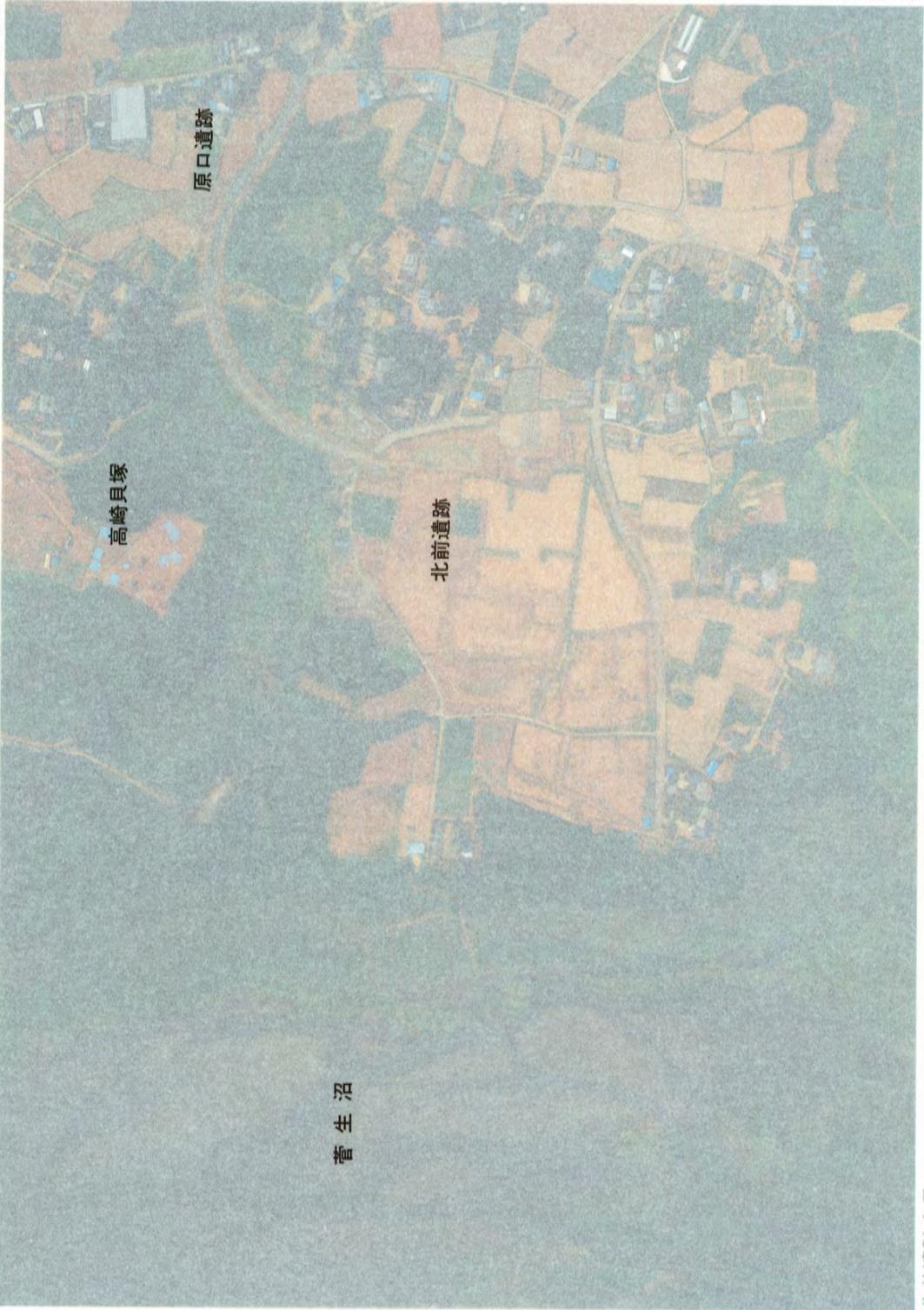
原口遺跡

菅生沼

北前遺跡



北前遺跡全景



北前遺跡全景



原口遺跡第3号住居跡出土
深鉢形土器



北前遺跡第35号住居跡出土壺



北前遺跡第16号住居跡出土遺物

序

今日、自然環境の保護は、地球規模で考えていかなければならない国際的課題です。自然に触れ、親しみ、楽しみながら地球の生い立ちや自然の仕組み、人間と環境を学ぶことを目的として、茨城県は、岩井市大字大崎に「茨城県自然博物館（仮称）」の建設を計画しました。その建設予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である原口遺跡、北前遺跡及び高崎貝塚が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成2年4月から平成4年3月まで埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成2・3年度に調査を行った原口遺跡、北前遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、ひいては、教育、文化の向上の一助として、広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び報告書の刊行にあたり、委託者である茨城県教育委員会をはじめ、岩井市、岩井市教育委員会等関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 磯田 勇

例 言

1 本書は、平成2・3年度に茨城県教育委員会の委託により、財団法人茨城県教育財団が、発掘調査を実施した茨城県岩井市に所在する、原口遺跡、北前遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は、次のとおりである。

原口遺跡 岩井市大字大崎字原口150-6ほか

北前遺跡 岩井市大字大崎字北前672ほか

2 原口遺跡、北前遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成4年度初めの組織改正により、従来の企画管理課は、企画管理課と経理課の二課に分かれることになった。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	小 林 元 角 田 芳 夫	昭和63年4月～平成3年7月 平成3年7月～	
常 務 理 事	小 林 洋 本 田 三 郎	平成元年4月～平成3年3月 平成3年4月～	
事 務 局 長	一 木 邦 彦 藤 枝 宣 一	平成元年4月～平成4年3月 平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年4月～平成4年3月
	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～(平成2年4月～平成4年3月 企画管理課長代理)
	主 任 調 査 員	小 山 映 一	平成2年4月～平成3年3月
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年4月～平成3年3月
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～平成4年3月
経 理 課	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～
	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～
調 査 課	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～(平成3年4月～平成4年3月 企画管理課)
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～(平成2年4月～平成4年3月 企画管理課)
調 査 課	課 長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～
	調 査 第 二 班 長	中 村 幸 雄	平成2年度
	調 査 第 三 班 長	柴 正	平成3年度
	主 任 調 査 員	大 森 雅 之	平成2年4月～平成3年6月調査
	主 任 調 査 員	鶴 見 貞 雄	平成3年4月～平成3年6月調査
	調 査 員	土 生 朗 治	平成2年4月～平成3年3月調査
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～
	主 任 調 査 員	大 森 雅 之	平成4年度整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号等については、第4章第1節「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4 本書の作成にあたり、遺構、遺物については栃木県立博物館主任研究員橋本澄朗氏から御指導をいただいた。獣骨、魚骨の鑑定及び貝の成長線分析等については、埼玉大学教授小池裕子氏の御指導を得た。炭化材の分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

5 遺跡の概略

遺跡名	原口遺跡・北前遺跡				
フリガナ	ハラグチイセキ・キタマエイセキ				
副題	茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ	茨城県教育財団文化財調査報告第83集				
著者	大森 雅之				
編集機関	財団法人 茨城県教育財団				
発行機関	財団法人 茨城県教育財団				
住所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番2号				
発行日	1993（平成5）年3月31日				
所収遺跡	市町村	コード	北緯	東経	標高
原口遺跡	岩井市	08218-35	36°0'01"	139°54'54"	17.8m
北前遺跡	岩井市	08218-36	36°0'08"	139°55'54"	18.0m
所収遺跡	主な時代	主な遺構	主な遺物		
原口遺跡	縄文時代後期	住居跡11軒，土坑60基	土器，土製品（耳飾・土器片錘） 石製品（打製・磨製石斧）		
北前遺跡	縄文時代前期 古墳時代前期	住居跡37軒，土坑80基， 掘立柱建物跡3棟，溝 5条，井戸2基	土器，土製品（土玉），石製品（管 玉・砥石），金属製品（刀子）		

目 次

口絵

序

例言

目次（図版・表・写真目次を含む）

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法	10
第1節 地区設定	10
第2節 基本層序の検討	10
第3節 遺構確認	13
第4節 遺構調査	13
第4章 遺構・遺物の記載方法	14
第1節 遺構の記載方法	14
第2節 遺物の記載方法	17
第5章 原口遺跡	22
第1節 遺跡の概要	22
第2節 遺構と遺物	22
1 竪穴住居跡	22
2 土坑	50
3 遺構外出土遺物	68
第3節 考察	76
1 縄文式土器について	76
2 遺構について	77

第6章 北前遺跡	81
第1節 遺跡の概要	81
第2節 遺構と遺物	81
1 縄文時代	81
(1) 竪穴住居跡	82
(2) 土坑	99
2 古墳時代	101
(1) 竪穴住居跡	102
(2) 土坑	241
3 その他の遺構と遺物	246
(1) 掘立柱建物跡	246
(2) 土坑	250
(3) 溝	259
(4) 井戸	265
4 遺構外出土遺物	267
第3節 考察	277
1 縄文時代	277
2 古墳時代	280
結語	299
附章（原口遺跡・北前遺跡出土動物遺体について／北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定）	301
写真図版	

插图目次

第 1 图	原口・北前遺跡周辺遺跡分布图	8	第 24 图	第 7 号住居跡実測图	45
第 2 图	原口・北前遺跡調査区全体图	9	第 25 图	第 7 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图	46
第 3 图	調査区呼称方法概念图	10	第 26 图	第 8 号住居跡実測图	47
第 4 图	原口遺跡基本土層图	10	第 27 图	第 9 号住居跡実測图	48
第 5 图	北前遺跡基本土層图	11	第 28 图	第 9 号住居跡出土遺物拓影图	49
第 6 图	調査地の模式地質想定断面图	12	第 29 图	土坑実測图(1)	53
第 7 图	原口遺跡全体图	19・20	第 30 图	土坑実測图(2)	54
第 8 图	第 1 - A 号住居跡実測图	23	第 31 图	土坑実測图(3)	55
第 9 图	第 1 - B 号住居跡実測图	25	第 32 图	土坑実測图(4)	56
第 10 图	第 1 - A・1 - B 号住居跡出土 遺物実測・拓影图	26	第 33 图	土坑実測图(5)	57
第 11 图	第 1 - B 号住居跡出土遺物 実測・拓影图	27	第 34 图	土坑出土遺物実測图(1)	61
第 12 图	第 2 - A・2 - B 号住居跡 実測图	28	第 35 图	土坑出土遺物実測图(2)	62
第 13 图	第 2 - A・2 - B 号住居跡出土 遺物実測・拓影图	30	第 36 图	土坑出土遺物拓影图(3)	63
第 14 图	第 3 号住居跡実測图	31	第 37 图	土坑出土遺物拓影图(4)	64
第 15 图	第 3 号住居跡出土遺物実測图(1)	33	第 38 图	土坑出土遺物実測・拓影图(5)	65
第 16 图	第 3 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(2)	34	第 39 图	遺構外出土遺物実測图(1)	71
第 17 图	第 4 号住居跡実測图	36	第 40 图	遺構外出土遺物拓影图(2)	72
第 18 图	第 4 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(1)	37	第 41 图	遺構外出土遺物拓影图(3)	73
第 19 图	第 4 号住居跡出土遺物実測图(2)	38	第 42 图	遺構外出土遺物実測・拓影图(4)	74
第 20 图	第 5 号住居跡実測图	39	第 43 图	遺構外出土遺物実測图(5)	75
第 21 图	第 5 号住居跡出土遺物拓影图	40	第 44 图	原口遺跡住居跡分布图	78
第 22 图	第 6 号住居跡実測图	41	第 45 图	第 25 号住居跡実測图	83
第 23 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图	43	第 46 图	第 25 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(1)	84
			第 47 图	第 25 号住居跡出土遺物拓影图(2)	85
			第 48 图	第 25 号住居跡出土遺物実測・ 拓影图(3)	86
			第 49 图	第 26 号住居跡実測图	89
			第 50 图	第 26 号住居跡出土遺物実測・	

	拓影图(1) ······90	第 75 图	第 6 号住居迹实测图·····124
第 51 图	第 26 号住居迹出土遗物实测 · 拓影图(2) ······91	第 76 图	第 6 号住居迹出土遗物实测图·····125
第 52 图	第 30 号住居迹实测图 ······93	第 77 图	第 7 号住居迹实测图·····128
第 53 图	第 30 号住居迹出土遗物实测 · 拓影图(1) ······94	第 78 图	第 7 号住居迹遗物出土位置图·····129
第 54 图	第 30 号住居迹出土遗物拓影图(2) ···95	第 79 图	第 7 号住居迹出土遗物实测图(1)··130
第 55 图	第 30 号住居迹出土遗物实测图(3) ···96	第 80 图	第 7 号住居迹出土遗物实测图(2)··131
第 56 图	第 34 号住居迹实测图 ······98	第 81 图	第 7 号住居迹出土遗物实测图(3)··132
第 57 图	第 34 号住居迹出土遗物实测 · 拓影图 ······99	第 82 图	第 7 号住居迹出土遗物实测图(4)··133
第 58 图	第 1 · 10 号土坑实测图·····100	第 83 图	第 7 号住居迹出土遗物实测图(5)··134
第 59 图	第 1 · 10 号土坑出土遗物实测 · 拓影图·····101	第 84 图	第 8 号住居迹实测图(1)·····140
第 60 图	第 1 号住居迹实测图·····103	第 85 图	第 8 号住居迹实测图(2)·····141
第 61 图	第 1 号住居迹出土遗物实测图·····104	第 86 图	第 8 号住居迹出土遗物实测图(1)··142
第 62 图	第 2 号住居迹实测图·····105	第 87 图	第 8 号住居迹出土遗物实测图(2)··143
第 63 图	第 2 号住居迹出土遗物实测图·····106	第 88 图	第 9 号住居迹实测图·····145
第 64 图	第 3 号住居迹实测图·····108	第 89 图	第 9 号住居迹出土遗物实测图·····145
第 65 图	第 3 号住居迹出土遗物实测图(1)··109	第 90 图	第 10 号住居迹实测图·····146
第 66 图	第 3 号住居迹出土遗物实测图(2)··110	第 91 图	第 10 号住居迹出土遗物实测图·····147
第 67 图	第 3 号住居迹出土遗物实测图(3)··111	第 92 图	第 11 号住居迹实测图·····149
第 68 图	第 4 号住居迹实测图(1)·····114	第 93 图	第 11 号住居迹出土遗物实测图·····150
第 69 图	第 4 号住居迹实测图(2)·····115	第 94 图	第 12 号住居迹实测图·····152
第 70 图	第 4 号住居迹出土遗物实测图(1)··116	第 95 图	第 12 号住居迹出土遗物实测图·····152
第 71 图	第 4 号住居迹出土遗物实测图(2)··117	第 96 图	第 13 号住居迹实测图·····154
第 72 图	第 5 - A · 5 - B 号住居迹 实测图(1)·····120	第 97 图	第 13 号住居迹出土遗物实测图(1)··156
第 73 图	第 5 - A · 5 - B 号住居迹 实测图(2)·····121	第 98 图	第 13 号住居迹出土遗物实测图(2)··157
第 74 图	第 5 - A · 5 - B 号住居迹出土 遗物实测图·····122	第 99 图	第 14 号住居迹实测图·····159
		第 100 图	第 14 号住居迹出土遗物实测图(1)··161
		第 101 图	第 14 号住居迹出土遗物实测图(2)··162
		第 102 图	第 15 号住居迹实测图·····163
		第 103 图	第 15 号住居迹出土遗物实测图·····164
		第 104 图	第 16 号住居迹实测图·····165
		第 105 图	第 16 号住居迹遗物出土位置图·····167
		第 106 图	第 16 号住居迹出土遗物实测图(1)··168

第107图	第16号住居跡出土遺物実測図(2)···169	第139图	第29号住居跡出土遺物実測図(1)···215
第108图	第16号住居跡出土遺物実測図(3)···170	第140图	第29号住居跡出土遺物実測図(2)···216
第109图	第16号住居跡出土遺物実測図(4)···171	第141图	第29号住居跡出土遺物実測図(3)···217
第110图	第16号住居跡出土遺物実測図(5)···172	第142图	第29号住居跡出土遺物実測図(4)···218
第111图	第16号住居跡出土遺物実測図(6)···173	第143图	第31号住居跡実測図·····220
第112图	第16号住居跡出土遺物実測図(7)···174	第144图	第31号住居跡出土遺物実測図·····221
第113图	第16号住居跡出土遺物実測図(8)···175	第145图	第32号住居跡実測図·····222
第114图	第17号住居跡実測図·····180	第146图	第32号住居跡出土遺物実測図·····223
第115图	第17号住居跡出土遺物実測図·····181	第147图	第33号住居跡実測図(1)·····226
第116图	第18号住居跡実測図·····182	第148图	第33号住居跡実測図(2)·····227
第117图	第18号住居跡出土遺物実測図·····184	第149图	第33号住居跡出土遺物実測 · 拓影図·····227
第118图	第19号住居跡実測図·····185	第150图	第35号住居跡実測図·····229
第119图	第19号住居跡出土遺物実測図·····186	第151图	第35号住居跡遺物出土位置図·····230
第120图	第20号住居跡実測図·····187	第152图	第35号住居跡出土遺物実測図(1)···231
第121图	第20号住居跡出土遺物実測図·····189	第153图	第35号住居跡出土遺物実測図(2)···232
第122图	第21号住居跡実測図·····191	第154图	第35号住居跡出土遺物実測図(3)···233
第123图	第21号住居跡遺物出土位置図·····192	第155图	第36号住居跡実測図(1)·····236
第124图	第21号住居跡出土遺物実測図(1)···193	第156图	第36号住居跡実測図(2)·····237
第125图	第21号住居跡出土遺物実測図(2)···194	第157图	第36号住居跡出土遺物実測図(1)···239
第126图	第22号住居跡実測図·····196	第158图	第36号住居跡出土遺物実測 · 拓影図(2)·····240
第127图	第22号住居跡出土遺物実測図·····198	第159图	第2 · 3 · 13 · 19号土坑実測図···242
第128图	第23号住居跡実測図·····199	第160图	第2号土坑出土遺物実測図·····243
第129图	第23号住居跡遺物出土位置図·····200	第161图	第3号土坑出土遺物実測図·····244
第130图	第23号住居跡出土遺物実測図(1)···202	第162图	第1号掘立柱建物跡実測図·····247
第131图	第23号住居跡出土遺物実測図(2)···203	第163图	第2号掘立柱建物跡実測図·····248
第132图	第24号住居跡実測図·····204	第164图	第3号掘立柱建物跡実測図·····249
第133图	第24号住居跡出土遺物実測図·····205	第165图	第4 ~ 9 · 24 · 27 · 31 · 33号 土坑実測図·····251
第134图	第27号住居跡実測図·····208	第166图	第34·36·37·44~48·55·58·59· 61·62号土坑実測図 ·····252
第135图	第27号住居跡出土遺物実測図·····209		
第136图	第28号住居跡実測図·····211		
第137图	第28号住居跡出土遺物実測図·····211		
第138图	第29号住居跡実測図·····213		

第167図	第63・66・69・71・72・74・75・77・78・ 80・84号土坑実測図……………253	第180図	遺構外出土遺物実測図(4)……………273
第168図	第86・90～92・96・99・101・102・ 104～106号土坑実測図……………254	第181図	遺構外出土遺物実測図(5)……………274
第169図	第107・108・110・112～114・ 116～118号土坑実測図……………255	第182図	縄文時代住居跡分布図……………278
第170図	第6・9・37・74・86号土坑・第1号掘立 柱建物跡出土遺物実測図……………256	第183図	縄文時代住居跡形態図……………279
第171図	第1・2号溝実測図……………261・262	第184図	黒浜期の主な遺跡……………280
第172図	第3・4号溝実測図……………263	第185図	北前II期土器集成図……………282
第173図	第5号溝実測図(1)……………264	第186図	北前III期土器集成図……………283
第174図	第5号溝実測図(2)……………265	第187図	北前IV期土器集成図(1)……………285
第175図	第1・2号井戸実測図……………266	第188図	北前IV期土器集成図(2)……………286
第176図	遺構外(D区)石器集中出土 地点……………269	第189図	北前IV期土器集成図(3)……………287
第177図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)…270	第190図	北前II期住居跡規模・主軸方向…288
第178図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2)…271	第191図	北前III期住居跡規模・主軸方向…290
第179図	遺構外出土遺物実測図(3)……………272	第192図	北前IV期住居跡規模・主軸方向…290
		第193図	古墳時代集落変遷図……………291
		第194図	古墳時代住居跡形態図(1)……………292
		第195図	古墳時代住居跡形態図(2)……………293
		第196図	古墳時代住居跡形態図(3)……………294
		付 図	北前遺跡全体図

附 章 挿 図 目 次

第 1 図	原口遺跡第1-B号住居跡出土具 分析図……………304	第 3 図	北前遺跡第30号住居跡出土具 分析図……………307
第 2 図	原口遺跡第35号土坑出土具 分析図……………305		

表 目 次

表 1	原口遺跡・北前遺跡周辺遺跡一覧表 ……7	表 7	北前遺跡古墳時代住居跡一覧表 ……240
表 2	地質層序表 ……12	表 8	北前遺跡古墳時代土坑一覧表 ……245
表 3	原口遺跡住居跡一覧表 ……49	表 9	北前遺跡その他土坑一覧表 ……257
表 4	原口遺跡土坑一覧表 ……67	表 10	北前 II ~ IV 期住居跡別出土土師器 一覧表 ……296
表 5	北前遺跡縄文時代住居跡一覧表 ……99		
表 6	北前遺跡縄文時代土坑一覧表 ……101		

写 真 目 次

P L 1	作業風景(1), 作業風景(2)		号土坑出土土器, 第37号土坑出土土器,
P L 2	完掘全景, トレンチによる試掘		第38号土坑遺物出土状況, 第39号土坑
P L 3	第1-A号住居跡, 第1-B号住居跡, 第1-B号住居跡具出土状況		出土土器
P L 4	第1-A・1-B号住居跡出土遺物, 第1-B号住居跡遺物出土状況, 第 1-B号住居跡炉	P L 11	第35号土坑具・魚骨出土状況, 第35号 土坑具出土状況(1)・(2), 第48号土坑具 出土状況
P L 5	第2-A・2-B号住居跡, 第2-A・ 2-B号住居跡出土遺物, 遺構説明風 景	P L 12	土坑出土土器(1)
P L 6	第3号住居跡, 第3号住居跡遺物出土 状況(1)・(2), 第3号住居跡出土土器	P L 13	土坑出土土器(2)
P L 7	第3号住居跡出土遺物, 第4・5号住居 跡	P L 14	土坑出土土製品, 遺構外出土遺物
P L 8	第4号住居跡出土遺物, 第5号住居跡 出土土器, 第4・5号住居跡遺物出土 状況	P L 15	遺跡遠景, 調査前全景, 完掘状況
P L 9	第6号住居跡, 第6号住居跡出土遺物, 第7号住居跡出土土器, 第9号住居跡 出土土器	P L 16	第1号住居跡, 第1号住居跡出土土器, 第1号住居跡遺物出土状況, 第2号住 居跡遺物出土状況, 第2号住居跡出土 土器
P L 10	第14号土坑遺物出土状況, 第14号土坑 出土土器, 第20号土坑出土土器, 第30	P L 17	第3号住居跡遺物出土状況, 管玉出土 状況, 第3号住居跡
		P L 18	第3号住居跡出土土器
		P L 19	第4号住居跡, 第4号住居跡遺物出土 状況(1)・(2)第4号住居跡出土遺物
		P L 20	第5-A・5-B号住居跡, 第5-A・ 5-B号住居跡出土土器, 第6号住居 跡, 第6号住居跡遺物出土状況, 第6

	号住居跡出土土器		住居跡出土土製品
P L 21	第7号住居跡, 第7号住居跡遺物出土狀況, 第7号住居跡出土土器(1)	P L 37	第20号住居跡遺物出土狀況(1)・(2), 第20号住居跡, 第20号住居跡出土遺物
P L 22	第7号住居跡出土土器(2)	P L 38	第21号住居跡遺物出土狀況, 第21号住居跡, 第21号住居跡出土土器(1)・(2)
P L 23	第7号住居跡出土土器(3)	P L 39	第21号住居跡出土土器(3)
P L 24	第8号住居跡出土土器, 貯藏穴内高坏出土狀況, 第8号住居跡遺物出土狀況	P L 40	第22号住居跡, 第22号住居跡出土土器, 第22号住居跡遺物出土狀況(1)・(2)
P L 25	第10号住居跡, 第9号住居跡, 第9号住居跡出土土器	P L 41	第23号住居跡遺物出土狀況, 第23号住居跡, 第23号住居跡炭化材出土狀況, 第23号住居跡出土遺物
P L 26	第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土狀況(1)・(2)	P L 42	第24号住居跡遺物出土狀況(1), 第24号住居跡, 第24号住居跡出土土器(1)
P L 27	第11号住居跡出土土器(1)・(2)	P L 43	第24号住居跡遺物出土狀況(2), ミニチュア土器出土狀況, 第24号住居跡出土土器(2)
P L 28	第12号住居跡遺物出土狀況(1)・(2), 第12号住居跡出土土器	P L 44	第25号住居跡遺物出土狀況, 磨製石斧出土狀況, 第25号住居跡, 第25号住居跡出土遺物
P L 29	第13号住居跡遺物出土狀況(1)・(2), 第13号住居跡出土土器	P L 45	第25号住居跡出土土器(1)
P L 30	第14号住居跡, 第14号住居跡遺物出土狀況, P ₂ 内器台出土狀況, 第14号住居跡出土土器(1)	P L 46	第25号住居跡出土土器(2)
P L 31	第14号住居跡出土土器(2), 第15号住居跡出土土器, 第15号住居跡遺物出土狀況, 第15号住居跡	P L 47	第26号住居跡, 第26号住居跡遺物出土狀況(1)・(2), 磨製石斧出土狀況, 第26号住居跡出土遺物
P L 32	第16号住居跡遺物出土狀況, 第16号住居跡炉, 第16号住居跡, 第16号住居跡出土土器(1)	P L 48	第26号住居跡出土土器
P L 33	第16号住居跡出土土器(2)	P L 49	第27号住居跡遺物出土狀況(1)~(3)
P L 34	第16号住居跡出土土器(3)	P L 50	第27号住居跡出土土器(1)・(2)
P L 35	第17号住居跡, 第17号住居跡遺物出土狀況, 第18号住居跡, 第18号住居跡遺物出土狀況	P L 51	第29号住居跡遺物出土狀況(1)・(2), 第29号住居跡
P L 36	第18号住居跡出土遺物, 第19号住居跡遺物出土狀況, 第19号住居跡, 第19号	P L 52	第29号住居跡出土土器, 第29号住居跡遺物出土狀況(3)
		P L 53	第30号住居跡遺物出土狀況, 磨製石斧

- 出土状況, 第30号住居跡貝出土状況(1),
第30号住居跡
- P L 54 第30号住居跡貝出土状況(2), 第30号住
居跡出土遺物(1)
- P L 55 第30号住居跡出土遺物(2)
- P L 56 第31号住居跡, 第31号住居跡遺物出土
状況(1)・(2)
- P L 57 第32号住居跡, 第32号住居跡遺物出土
状況(1)・(2), 第32号住居跡出土土器
- P L 58 第33号住居跡, 第33号住居跡遺物出土
状況, 第33号住居跡出土遺物
- P L 59 第34号住居跡遺物出土状況(1)・(2), 第
34号住居跡出土土器
- P L 60 第35号住居跡遺物出土状況, 壺出土状
況, 第35号住居跡
- P L 61 第35号住居跡出土土器
- P L 62 第36号住居跡遺物出土状況, 第36号住
居跡P₅内高坏出土状況, 第36号住居跡
壺出土状況
- P L 63 第36号住居跡出土土器, 第36号住居跡
- P L 64 第2号土坑, 第2号土坑遺物出土状況,
第10号土坑遺物出土状況
- P L 65 第13号土坑遺物出土状況, 第1号土坑
出土土器, 第2号土坑出土土器, 第6
号土坑出土石製品, 第10号土坑出土遺
物, 第1号掘立柱建物跡出土石製品
- P L 66 第1号掘立柱建物跡, 第3号掘立柱建
物跡, 第1号溝
- P L 67 第2号溝遺物出土状況, 第1号井戸,
第2号井戸
- P L 68 遺構外出土遺物, 北前遺跡・炭化材の
顕微鏡写真

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県教育委員会は、野鳥観察地で自然環境に恵まれ、緑豊かな菅生沼西岸台地の岩井市大字大崎に「茨城県自然博物館（仮称）」の建設を計画した。自然博物館は、児童、生徒をはじめ多くの人々が自然界の仕組みや茨城の自然の特色などを楽しく学び、自然を愛する豊かな人間性及び科学する心を養える博物館として計画されたものである。

この建設事業に先立ち、茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室は、茨城県教育委員会へ建設予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、現地調査を実施し、建設予定地内に原口遺跡、北前遺跡及び高崎貝塚の3遺跡が所在することを回答した。平成2年2月に、茨城県教育委員会は、茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室と文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

その結果、現状保存が困難であることから、記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室との間に埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成2年4月1日から原口遺跡、北前遺跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

原口遺跡、北前遺跡の発掘調査は、平成2年4月1日から平成3年6月30日までの1年3か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、その概要を月ごとに記述する。

(平成2年度)

- 4 月 9日から発掘調査に必要な事務所や原口遺跡の現場倉庫設置、調査機材搬入などの諸準備を行った。19日には、発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、鍬入れ式を挙行した。原口遺跡の遺構確認は、調査区を西部からA・B・C・Dの4区に区分し、東西方向のトレンチによる試掘を実施した。
- 5 月 A・B・C区は、4分の1まで試掘を行ったが、遺構を確認することができなかった。東部D区は、南部のトレンチから遺構が確認された。そこで、D区の南部は、人力による表土除去を実施した。遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑60基等を確認した。D区の中央部から北部にかけては、遺構は確認できなかった。第1号住居跡から第3号住居跡の遺構調査を18日から開始した。

- 6 月 第4号住居跡から第9号住居跡の調査に入り、実測図の作成及び写真撮影を行った。土坑内貝塚も確認され、貝のほか魚骨等も出土した。28日に原口遺跡の竪穴住居跡9軒、土坑60基の調査を終了し、北前遺跡へ現場倉庫を移設した。
- 7 月 北前遺跡の調査に入り、A区の除草作業を行った。9日からグリッドによる試掘を開始した。その結果、竪穴住居跡、土坑及び多量の土師器片が検出されたので、25日から重機による表土除去を開始し、併せて遺構確認作業を行った。
- 8 月 第1号住居跡から第8号住居跡の調査に入り、実測図の作成及び写真撮影を行った。第4号住居跡は、一辺が約8mの方形の住居跡で、掘り込みも深く、時間がかかった。
- 9 月 5日に岩井市立長須小学校6年生77名、25日に岩井市立第一小学校6年生115名が校外学習で見学に来た。B区のグリッドによる試掘を開始し、竪穴住居跡等が確認された。
- 10 月 9日からB区の重機による表土除去を開始し、並行して遺構確認作業を実施した。A区、第16号住居跡までの調査を終了し、補足調査により、第4・8号住居跡の炉周辺床面から炭化米を検出した。
- 11 月 15日からC区のグリッドによる試掘を開始した。その結果、溝、土坑等を確認した。
- 12 月 B区の第25号住居跡内地点貝塚の貝（カキが主）を取り上げ、第24号住居跡までの調査を終了した。3日から補足調査と並行して図面整理等を実施した。5日からC区の重機による表土除去を開始し、並行して遺構確認作業を実施した。28日から年末、年始の休業に入った。
- 1 月 7日から調査を再開した。C区の第25号住居跡から第28号住居跡の調査と併行して、D区のグリッドによる試掘を開始した。23日にはD区の試掘を終了した。その結果、竪穴住居跡や土坑等を確認した。29日から現地説明会の準備を進めた。
- 2 月 2日に原口・北前遺跡の現地説明会を実施し、遺構、遺物を一般公開した。見学者は、269名を数える程の盛況であった。5日に、北前遺跡のA・B・C区の航空写真撮影を実施した。重機により、D区の表土除去を開始し、並行して遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡8軒、土坑81基、溝2条、井戸1基を確認した。
- 3 月 8日に発掘調査報告会を実施した。C区は、第28号住居跡までの調査を終了した。11日からC区の補足調査、安全対策を実施し、14日から遺物搬出作業、現場テントの撤収を行った。25日に岩井市役所、岩井市教育委員会等への報告を以て、平成2年度の調査を終了し、現場事務所を閉鎖した。

(平成3年度)

- 4 月 9日から現場作業を開始し、D区の第29号住居跡、第71号土坑から遺構調査を開始した。第30号住居跡から地点貝塚が検出され、調査を慎重に進めた。

- 5 月 調査は、第29号住居跡から第36号住居跡まで掘り込み、実測図の作成及び写真撮影を行った。第35号住居跡からは、南関東系の壺が出土した。雨天の日が続き、やや調査の遅れが目立ってきた。
- 6 月 北前遺跡D区の遺構調査も終了に近づき、第30号住居跡の貝の調査は50cmの方眼メッシュを組み、セクション図の作成や貝の取り上げを行った。27日にD区の航空写真を撮影し、高崎貝塚への現場倉庫移設準備を行った。30日に北前遺跡D区の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

原口遺跡、北前遺跡の2遺跡は、茨城県岩井市大字大崎に所在し、岩井市役所の南南東約5.6kmに位置している。

岩井市は、茨城県の南西端に位置し、市域は、南北にやや長く、東西約12km、南北約16km、面積は91.46km²である。人口は43,743人(平成4年5月1日現在)を擁している。北は猿島町、東は水海道市、西は境町、南は利根川を挟んで千葉県野田市に接している。当市は東京都心から45km、常磐自動車道の谷和原ICから約15分という近距離にあり、市の中心部を県道土浦野田線、古河岩井線、結城岩井線が通り、県西と県南地域、茨城県と千葉県を結ぶ交通の要衝である。さらに、市の北部を首都圏中央連絡自動車道(圏央道)が横断する計画もある。

当市は、猿島台地の南東部に所在し、洪積台地である当台地と利根川、飯沼川、東仁連川やその支流に形成された沖積低地から成り立っている。猿島台地は、北西から南東方向へ伸びており、標高15~20mの台地で、利根川をはじめ飯沼川・東仁連川支流の小河川により開析された沖積低地が樹枝状に入り込み、非常に複雑な地形を形成している。この台地は、畑地として利用され、特産品には「ねぎ、レタス」等の野菜生産が盛んで、千葉、東京方面に出荷する都市近郊型の農業を行っている。沖積低地は、水田地帯になっており、特に利根川の流域には多く見られる。

猿島台地の露頭では、台地を構成している地層及び貝化石の観察ができる。この貝化石は、特に、鬼怒川の河岸、河床の露頭に見つけることができる。当台地を構成している地層には、貝化石、貝砂を含む成田層下部と成田層上部がある。この貝化石を含む地層には小形有孔虫の化石も入っており、この有孔虫を調べることにより、古東京湾時代の気候や植生などの古環境を考察することができる。さらに、成田層の上に黄褐色砂や黄褐色粗砂を含む竜ヶ崎砂礫層、その上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして、表土の下を厚く覆う赤褐色の関東ローム層となっている。

原口、北前両遺跡は、菅生沼の西岸にあり、原口遺跡は、調査面積3,092m²で、菅生沼から西に入り込んだ谷津の谷津頭南側台地の縁辺部に所在し、標高17~18mで現況は畑である。北側は、沖積低地で水田になっており、当遺跡との比高は4m程である。北前遺跡は、調査面積26,908m²で、菅生沼に舌状に突き出した台地上に所在し、調査区は中央部からほぼ南方向に緩やかに傾斜している。標高17~19mで、現況は畑である。当遺跡のある台地北側は、菅生沼から西へ入り込んだ沖積低地で、水田となっている。台地と水田との比高は7~9m程である。

第2節 歴史的環境

猿島台地の南東端部に位置する岩井市や飯沼川及び菅生沼の右岸の台地上には、『茨城県遺跡地図』⁽¹⁾によれば、数多くの遺跡が分布している。しかし、現在までのところ岩井市内の遺跡発掘調査は、極めて少ない。岩井市史編さん委員会では、昭和50年に上出島古墳群⁽²⁾の発掘調査を行っている。さらに、平成2年度に拾二ゴゼ貝塚⁽³⁾、駒寄遺跡⁽⁴⁾、高山古墳<9>⁽⁵⁾の発掘調査を実施している。これらの調査によって、原始、古代の様子が明らかになりつつある。ここでは、岩井市及びその周辺の遺跡について、時代をおって述べることにする。

岩井市内では、現在のところ先土器時代に編年されている遺跡、遺物は発見されていないが、縄文時代になると多くの遺跡が確認されている。飯沼川から菅生沼及び鬼怒川流域の台地上には、貝塚が数多く見られる。飯沼川、(古)鬼怒川流域は、貝塚の形成と海進、海退による汀線の変動の研究に重要な地域である。水海道市北部に位置する縄文時代早期の花鳥貝塚は、昭和16年に日本古代文化学会によって調査が行われ、ヤマトシジミを主体としてサルボウ、マガキ、ハマグリ、オキシジミ等⁽⁶⁾を出土している。同時期の遺跡は、茨城県教育財団が発掘調査した奥山C遺跡<33>⁽⁷⁾がある。前期の遺跡としては、花鳥貝塚の北西部に位置し、当教育財団が発掘調査した大生郷遺跡⁽⁸⁾、当遺跡の南西約2kmに香取神社脇貝塚<14>がある。中期から後期にかけての遺跡としては、矢作貝塚<6>、高崎貝塚<5>、法師貝塚⁽⁹⁾、宝光院貝塚<16>などがあげられ、加曾利E式から加曾利B式の土器片が採集されているが、今は湮滅している。現況は、畑、宅地である。高崎貝塚は、平成3年度に当教育財団によって発掘調査されている。後期の遺跡としては、菅生古谷遺跡<20>、内守谷本郷遺跡<29>、東浦遺跡<17>などがあげられる。後期から晩期の遺跡は、内守谷館の台遺跡<30>、拾二ゴゼ遺跡などがある。拾二ゴゼ遺跡は、利根川の氾濫原に西面する台地端のゆるい傾斜地上に位置し、晩期前半の住居跡1軒を確認している。

弥生時代の遺跡としては、当遺跡の付近に、大崎遺跡⁽¹⁰⁾、上野B遺跡<27>、向山遺跡<22>などが確認されている。弥生時代の遺跡は、数少ないが、今後の発掘調査を待つことにしたい。

古墳時代の遺跡は数多く確認され、水海道市内守谷町に、当教育財団が発掘調査した奥山A遺跡<32>、西原遺跡<34>⁽⁷⁾がある。奥山A遺跡では、前期の住居跡3軒、西原遺跡では、後期の住居跡15軒が検出されている。古墳は、岩井西高校建設に伴い発掘調査をした上出島古墳群をあげることができる。第1号墳から第3号墳のうち、特に第2号墳は全長56mの前方後円墳であり、その後円部頂と墳丘の裾部から壺形埴輪の配列が検出されている。さらに、後円部に設けられた粘土柳からは、滑石製勾玉、管玉、鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄針が出土しており、このような出土遺物から、上出島第2号墳の築造年代は5世紀代の前半と考えられる。同じような古墳として、茨城県下の鬼怒川流域では最大級の墳丘規模(約70m)をもつ八千代町香取神社古墳をあげること

ができる。⁽¹¹⁾ 当遺跡の北約 6.5kmにある高山古墳^{たかやま}は、岩井市を代表する円墳であるが、明治45年に土取りにより破壊され、その際出土した直刀、刀、金環などは東京国立博物館に収められている。平成2年度、筑波大学により再調査されたが、遺存状況が悪く、墳形、規模を確認することができなかった。主体部は、雲母片岩(筑波石)を使用した横穴式石室である。半谷古墳群^{はんや}は、現在、方墳と円墳の2基が残っている。高山古墳の南には^{へた}辺田古墳群〈7〉、矢作古墳群〈8〉などがあげられる。さらに、飯沼川、菅生沼右岸の台地上には、^{かみかどやま}上神田山古墳群〈10〉があり、その中の1つで延命院の境内にある約9mの円墳は「^{まさかどやま}将門山古墳」と呼ばれ、10世紀に上野、下野と下総地方を支配した平将門の胴体が納められていると伝えられている。^{しもかどやま}下神田山古墳群〈12〉には、約20mの円墳、^{ぼうちづか}坊地塚古墳〈13〉や前方後円墳が数基残っている。下神田山古墳群の南に隣接する^{おおつかのしやま}大塚戸篠山古墳群〈38〉には、昭和30年代の頃、前方後円墳3基、円墳28基が確認された⁽¹²⁾が、多くが破壊され、現存するのは数基である。調査された古墳から、箱式石棺が検出され、この中から各種玉類、鉄鏃などが出土している⁽¹³⁾。

律令制以後、岩井市は下総国相馬郡に属した。承平5年(935年)に始まった平将門の乱では岩井市が表舞台となっている。『将門記』によると、将門の館は岩井市と八千代町にあり、この二つの館の近くには、「長州馬牧」、「大結馬牧」という二つの官牧がある。この長州牧は、岩井市^{ながす}長須に比定される。将門は、天慶3年(941年)2月に岩井市の北山で討たれているが、現在、毎年11月に“将門まつり”として武者行列が行われている。中世の城館跡としては、大塚戸城跡〈18〉、⁽¹⁴⁾菅生城跡〈19〉があり、この菅生城にまつわる民話が伝えられている⁽¹⁵⁾。江戸時代に入ると、新田開発が飯沼を中心に積極的に行われていった。

※遺跡名の次の〈 〉内の数字は、表1第1図の該当遺跡番号と同じである。

注・参考文献

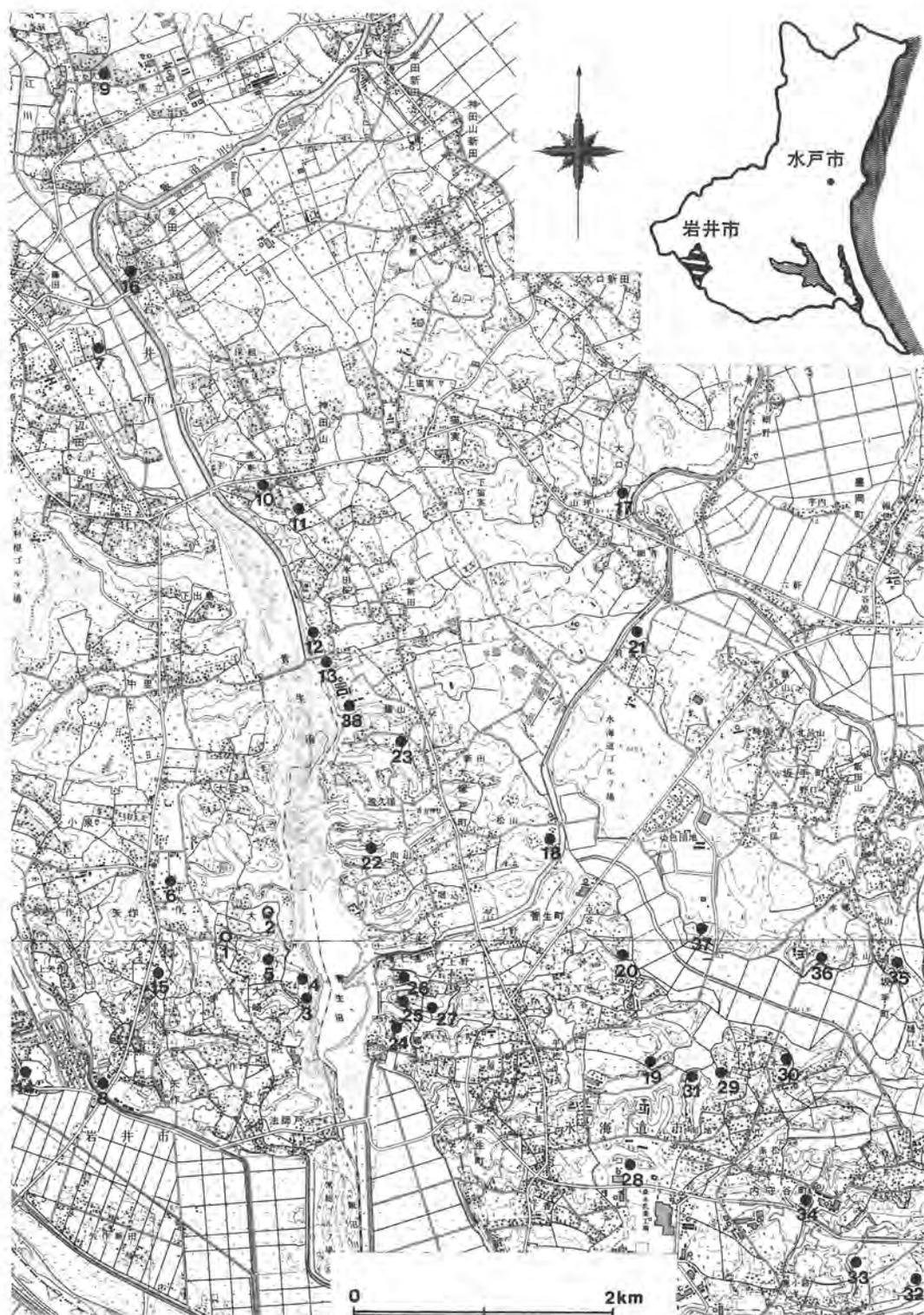
- (1) 茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 1990年
- (2) 岩井市教育委員会 「上出島古墳群」 1975年
- (3)~(5) 茨城県教育委員会 「茨城県・遺跡・古墳発掘調査報告書VI」 1988~1990年
- (6) 江坂輝弥・吉田格 「貝柄山貝塚」 『古代文化』 13-9 1942年
長良信夫・江坂輝弥 「貝柄山貝塚及び指扇五味戸貝塚発見の貝類」 『古代文化』
13-9 1942年
江坂輝弥 「貝柄山貝塚」 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年
- (7) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 第31集

1986年

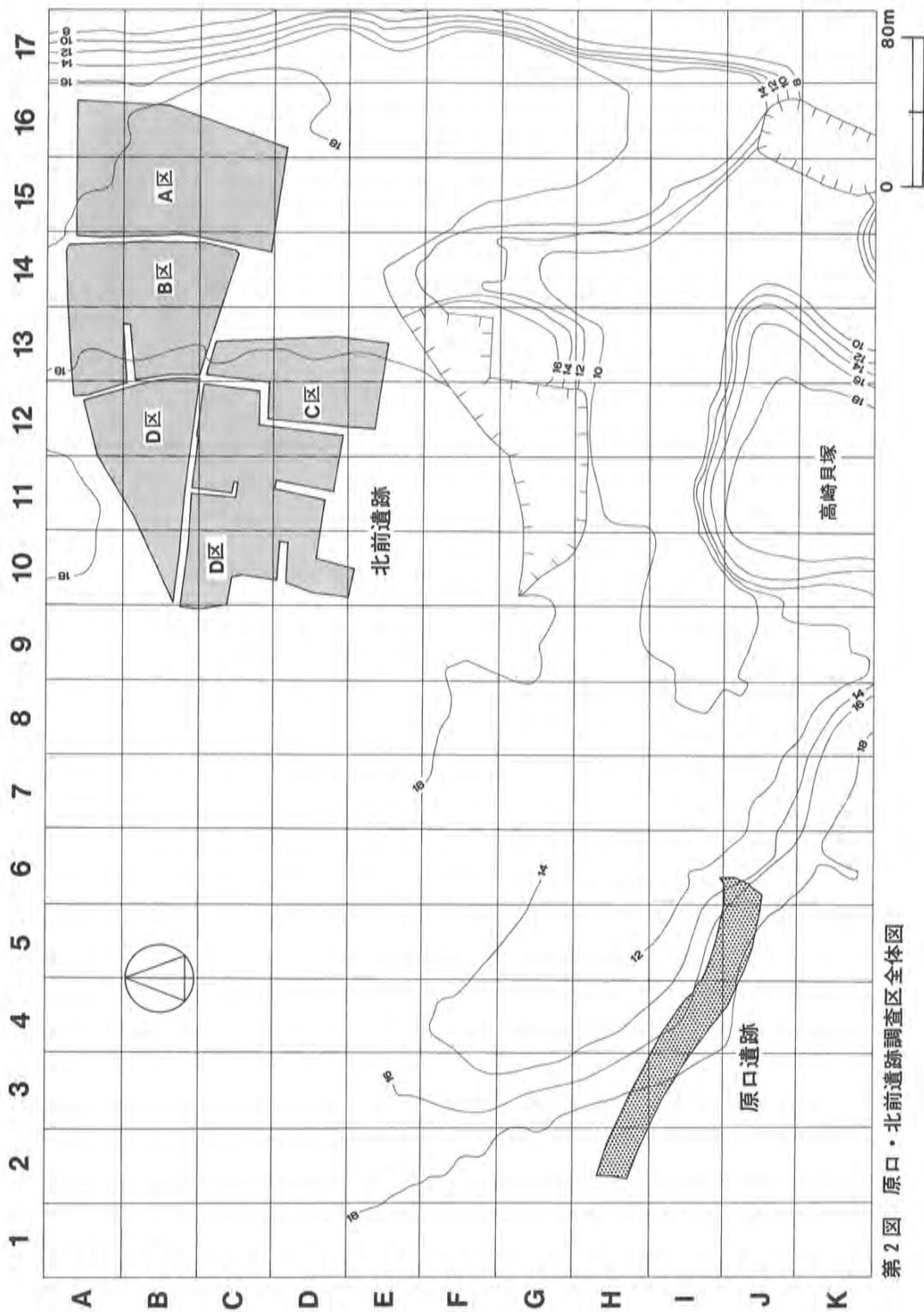
- (8) 稲葉嶽男 「岩井郷土めぐり(上)」 1984年
- (9) 茨城県教育委員会 「重要遺跡調査報告書1」 1982年
- (10) 今井隆助 「北下総地方史」 1974年
- (11) 筑波大学先史学・考古学研究調査報告5 「古墳測量調査報告書1」 1991年
- (12) 茨城県教育委員会 「茨城県古墳総覧」 1959年
- (13) 水海道市史編さん委員会 「水海道市史(上巻)」 1983年
- (14) 茨城県教育委員会 「重要遺跡調査報告書(城館跡)」 1985年
- (15) 岩井市教育委員会 「岩井の民話」 1988年

表1 原口遺跡・北前遺跡周辺遺跡一覧表

番号	名 称	時 代				番号	名 称	時 代			
		縄文	弥生	古墳	奈・平以降			縄文	弥生	古墳	奈・平以降
1	原 口 遺 跡	○				20	菅生古谷遺跡	○			
2	北 前 遺 跡	○		○		21	坂手見置遺跡	○			
3	大 崎 遺 跡		○			22	向 山 遺 跡	○	○		
4	高崎台地遺跡	○				23	篠山B遺跡				
5	高崎貝塚	○				24	中 郷 古 墳			○	
6	矢作貝塚	○				25	上 野 古 墳			○	
7	辺田古墳群			○		26	上野A遺跡	○			
8	矢作古墳群			○		27	上野B遺跡	○	○		
9	高山古墳			○		28	向地遺跡			○	
10	上神田山古墳群			○		29	内守谷本郷遺跡	○			
11	将門山古墳			○		30	内守谷館の台遺跡	○			
12	下神田山古墳			○		31	内守谷向地遺跡	○		○	
13	坊地塚古墳			○		32	奥山A遺跡			○	
14	香取神社脇貝塚	○				33	奥山C遺跡	○			
15	稲荷塚古墳			○		34	西原遺跡			○	
16	宝光院貝塚	○				35	坂手日之王神遺跡	○			
17	東浦遺跡	○				36	坂手萱場貝塚	○			
18	大塚戸城跡				○	37	坂手剣崎古墳			○	
19	菅生城跡				○	38	大塚戸篠山古墳群			○	



第1図 原口・北前遺跡周辺遺跡分布図



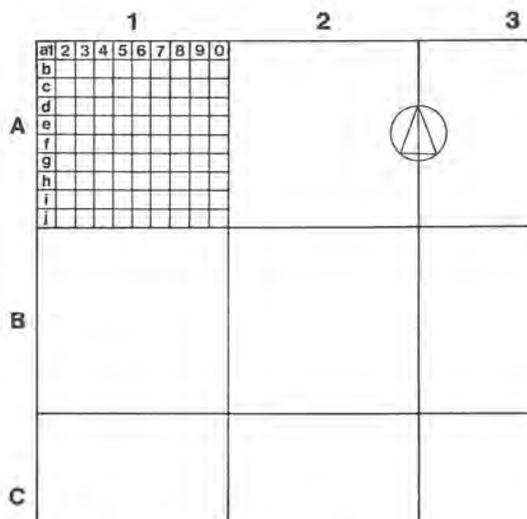
第2図 原口・北前遺跡調査区全体図

第3章 調査方法

第1節 地区設定

原口遺跡、北前遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）+320m、Y軸（東西）+7,200mの交点を基準として40m方眼を設定し、この40m四方の区画を大調査区とした。さらに、この大調査区を東西、南北にそれぞれ10等分して、4m四方の小調査区を設定した。調査区の名前は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。大調査区は、北から南へA、



第3図 調査区呼称方法概念図

B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、……10とし、小調査区の名前は、大調査区の名を冠し、「A1d₁」「B2e₂」のように呼称した。

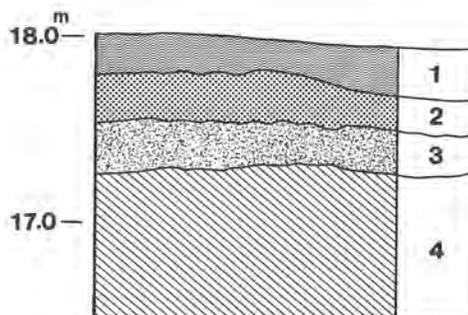
なお、基準点の杭打ち測量は、財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

第2節 基本層序の検討

1 原口遺跡

原口遺跡においては、遺構の発見された調査区域（D地区）にテストピットを設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、暗褐色の表土層（耕作土）であり、厚さは18~20cmを測る。第2層は、明褐色の耕作土を含むソフトローム層で、ローム小ブロックを中量、炭化粒子、焼土粒子を少量含む。厚さは16~28cmである。第3層は、



第4図 原口遺跡基本土層図

厚さ18~24cmの褐色土であり、層中にブラックバンドが認められ、粘土質の縮まりのある大小のロームブロックを含む。第4層は、明褐色のハードローム層である。

原口遺跡の遺構は、第2層の上面で確認されている。

2 北前遺跡

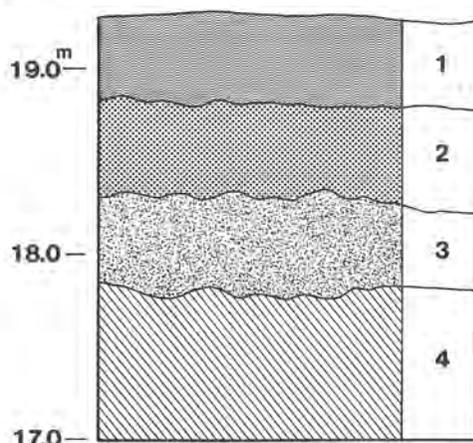
北前遺跡においては、調査区域の西部 B11 c₂区にテストピットを設定し、第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、約42~50cmの厚さを有する表土層（耕作土）である。第2層は、48~54cmの厚さを有する明褐色のソフトローム層である。炭化粒子、焼土粒子を少量含む。第3層は、38~50cmの厚さを有する褐色のローム層で、粘土質の大小のロームブロックを帯状に含み

縮まりがある。第4層は、明褐色の大変縮まりの良いハードローム層である。北前遺跡の遺構は、第2層の上面で確認されている。

3 北前遺跡南側沖積低地内地質調査

「茨城県自然博物館（仮称）」園内橋の新築工事に先立ち、計画されている橋梁の設計、施工上で必要とされる地盤の状況及び土質の特性等の資料を得ることを目的として、茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室が沖積低地内の地質調査を実施した。北前遺跡南側の沖積低地2か所のボーリング調査結果を掲載する。



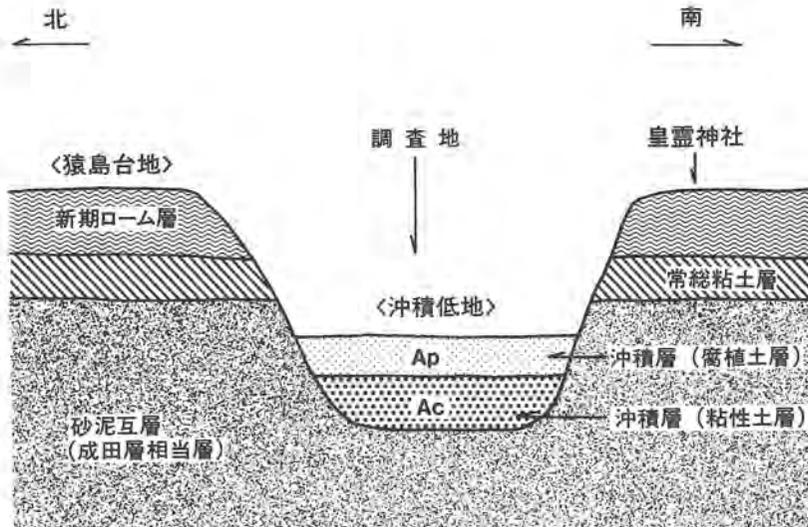
第5図 北前遺跡基本土層図

表2 地質層序表

地質時代	地質名	記号	主な土質名	層厚	
第 新 世	沖積層	腐植土層	Ap	腐植土	4.80~ 5.25
		粘性土層	Ac	シルト	2.50~ 3.75
		砂質土層	As	中砂	2.00
第 四 紀	成田層	第1粘性土層	Dc1	粘土	1.30~ 1.70
		第1砂質土層	DS1	細砂	1.00~ 1.30
		第2粘性土層	Dc2	砂質粘土 砂混じり粘土	3.05~ 3.20
	成田層 相当層	第2砂質土層	DS2	砂土質微細砂 細砂	0.90~ 1.95
		第3粘性土層	Dc3	砂質粘土	0.90~ 2.10
		第3砂質土層	DS3	細砂	1.95~ 2.00
		第4粘性土層	Dc4	粘土	1.60~ 1.65



- 北前遺跡
- 原口遺跡
- 調査地
- 皇霊神社



第6図 調査地の模式地質想定断面図

第3節 遺構確認

原口遺跡は、調査区域全体にトレンチを設定し、調査面積の16分の1、次いで8分の1の割合で試掘を行った。調査面積の4分の1まで試掘を行ない、調査区のD区に数軒の住居跡及び数基の土坑を確認した。次いで、遺構が確認されたトレンチを拡張していく方法を採用し、人力による表土除去と遺構確認作業を実施した。その結果、住居跡11軒、土坑60基を確認した。

北前遺跡は、調査区域全体にグリッドを設定し、試掘を行った。その結果、縄文式土器、土師器の破片とともに、住居跡や土坑と思われる落ち込みが確認された。B、C、D区においても、グリッドによる試掘を行ったが、遺構の存在することが認められるので、担当者間で協議し、重機を導入して速やかに調査を進められるように図った。重機で表土を除去した後、人力による遺構確認を行い、A、B、C、D区を併せて、住居跡37軒、土坑150基や井戸2基、溝5条を確認した。

第4節 遺構調査

原口、北前両遺跡における遺構の調査は、次のように実施した。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し、四分割して掘り込む「四分割法」を基本とし、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は、長径方向で二分して掘り込む「二分法」で実施した。溝の調査は、適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し、掘り込みを実施した。

土層観察は、色調、含有物、混入物の種類や量及び粘性、締まり具合等を観察し、分類の基準とした。色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で実施した。

また、土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準とし、標高を測って水平にセットした水糸を基準にして実測した。遺物は、原位置を保ち、遺物番号、出土位置及びレベル等を遺物出土状況図や遺物台帳に記録して収納した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、そのつど野帳に記録し、これを調査記録カードや遺構カードに整理した。

第4章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

1 使用記号

名称	住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝	井戸	ピット (住居跡)
記号	S I	S B	S K	S D	S E	P, P ₁ ...

2 遺構の実測図中の表示



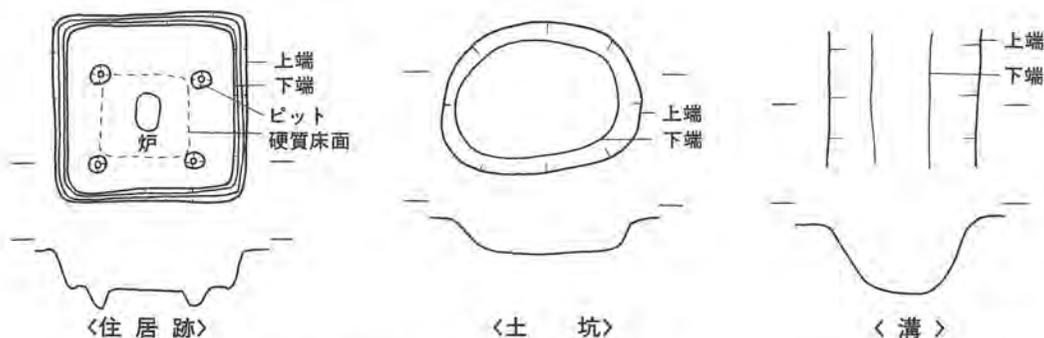
3 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

4 土層の分類

土層観察における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用し、図版実測図中に記載した。攪乱層については「K」と表記した。

5 遺構実測図の作成方法と掲載方法



(1) 各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組し、それをさらに3分の1に縮小して掲載することを基本とした。

(2) 溝は、縮尺100分の1の原図をトレースして版組し、それをさらに2分の1に縮小して掲載した。

(3) 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。

(4) 本文中の記載について

- ① 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- ② 「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記した。
- ③ 「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形、長方形、円形及び楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。

方形、円形……………短軸〔径〕：長軸〔径〕= 1： 1.1未満

長方形、楕円形……………短軸〔径〕：長軸〔径〕= 1： 1.1以上

- ④ 「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸〔径〕、短軸〔径〕をm単位で表記した。
なお、()を付したものは現存値を表し、[]を付したものは推定値を表す。
- ⑤ 「主軸方向」は、炉または竈を通る線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。なお、[]を付したものは推定を表す。
- ⑥ 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が 81°～ 90°を垂直、65°～ 80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに 90°以上を内傾とした。壁高は、残存壁高の計測値である。
- ⑦ 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。規模は床面からの計測値とした。
- ⑧ 「床」は傾斜や床質等を表記した。
- ⑨ 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P1・P2はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- ⑩ 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径及び深さを示した。
- ⑪ 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。
- ⑫ 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態を記述した。また、遺構の平面図中に第2節1に示した記号を用い、出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した番号は、遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。
- ⑬ 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

6 一覧表の見方について

(1) 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m) 〔径〕	壁高(cm)						

- ① 住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。
- ② 位置は、小調査区（小グリッド）名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、遺構の占める割合が最も大きい小調査区をもって表示した。
- ③ 主軸方向は、座標北をN-0°とし、東（E）、西（W）に何度傾いているかを表示した。なお、[] を付したものは推定を表す。

【例】 N-10°-E, [N-10°-W]

- ④ 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形、長方形、円形及び楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。なお、[] を付したものは推定を表す。
 方形、円形……………短軸〔径〕：長軸〔径〕= 1：1.1未満
 長方形、楕円形……………短軸〔径〕：長軸〔径〕= 1：1.1以上
- ⑤ 規模の欄の長軸〔径〕、短軸〔径〕は、平面形の上端面の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。なお、() を付したものは現存値を示し、[] を付したものは推定値を示す。
- ⑥ 床面は、凹凸、平坦及び緩い起伏等の様子を示し、締まり等は解説の項で述べた。
- ⑦ 柱穴数は、住居跡に伴うものと考えられる総数を表示した。
- ⑧ 炉は、その種別を記し、検出されない住居跡については「無」とした。
- ⑨ 覆土は、堆積状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、不明のものは「不明」と記した。
- ⑩ 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と出土土器片の数を記した。
- ⑪ 備考は、重複関係や特徴等を記した。

(2) 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向〔長軸〕	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径〔軸〕(m)	短径〔軸〕(m)	深さ(cm)						

- ① 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。
- ② 平面形は、円形、楕円形及び長方形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。
 円形……………短径：長径= 1：1.1未満
 楕円形、長方形……………短径〔軸〕：長径〔軸〕= 1：1.1以上
- ③ 規模の欄の長径〔軸〕・短径〔軸〕は上端部の計測値（m）で表した。なお、() を付し

たものは現存値を示し、[] を付したものは推定値を示す。

④ 深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値 (cm) で表した。

⑤ 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

81°～90°の傾き 65°～80°の傾き 65°未満の傾き
垂直  外傾  緩斜 

⑥ 底面は、下記の基準で分類し表示した。

1 平坦  2 皿状  3 凹凸 

⑦ その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

第2節 遺物の記載方法

本書における遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。また、遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

1 使用記号

土器	土製品	石器・石製品	鉄製品	骨
P	D P	Q	M	B

● 土器 ○ 赤彩土器 ★ 土製品 △ 石器・石製品 □ 金属製品

2 遺物実測図の作成方法と掲載方法

(1) 土器の実測は、四分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を示した。

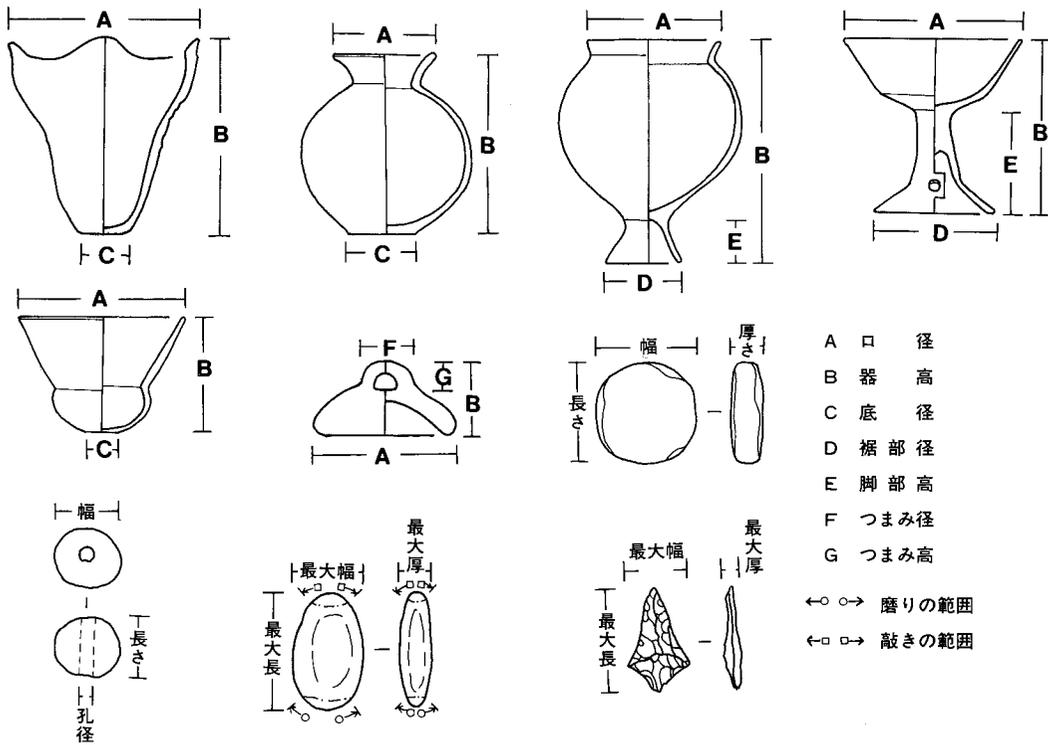
(2) 石器・石製品及び土製品は、展開図法を基本とした。

(3) 実測図中の表示方法

 赤彩  繊維 (断面)

(4) 遺物は、原則として実測図をトレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。

(5) 各部位の名称と法量表現



(6) 遺物に付した番号は、土器、土製品、石器・石製品、鉄製品ごとに通し番号をつけ、遺構実測図、図版、写真及び一覧表の備考欄に記した。

3 出土遺物観察表について

(1) 土器観察表

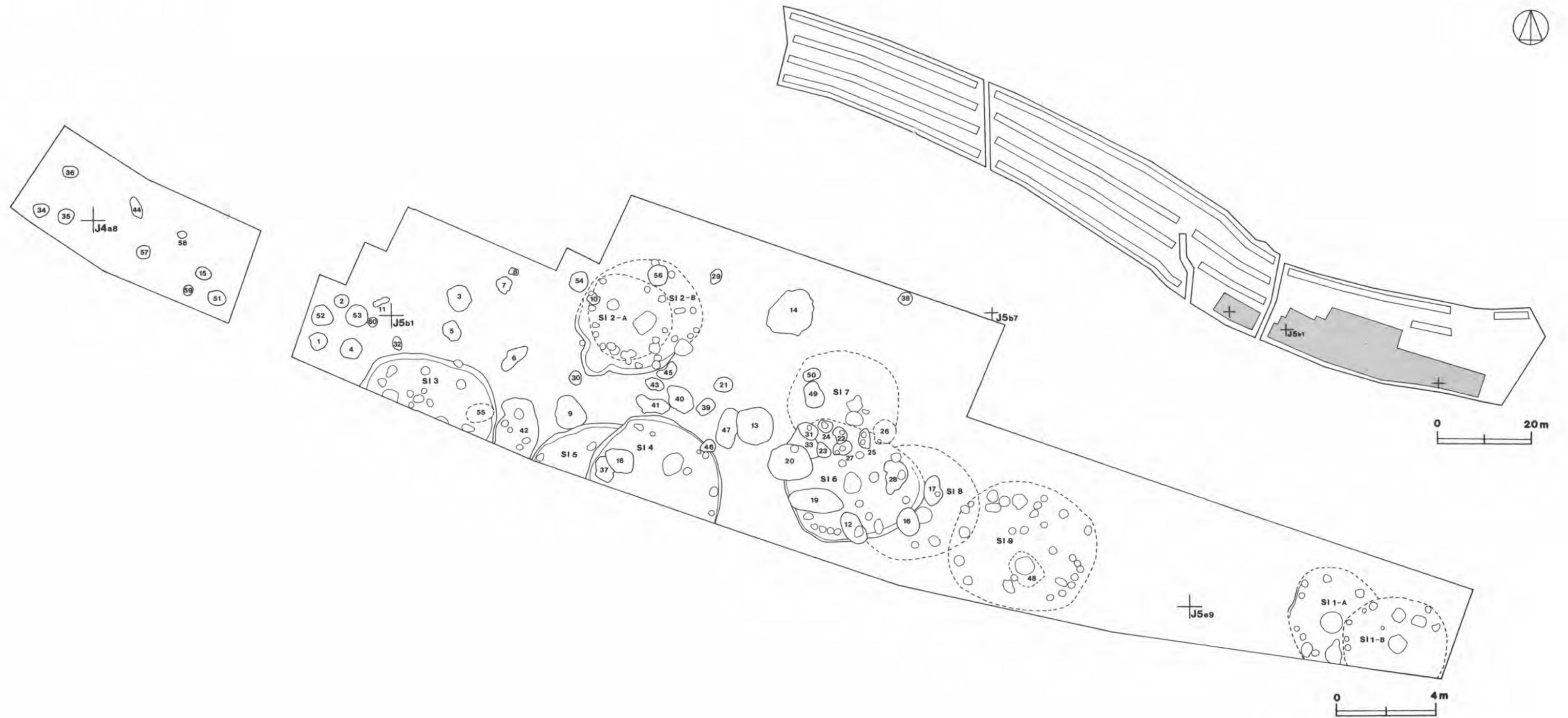
ア 縄文式土器

図版番号	器 種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考

イ 土師器

図版番号	器 種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考

第7図 原口遺跡全体図



- ① 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
 - ② 法量は、A…口径、B…器高、C…底径とする。なお、()を付したものは現存値を表し、[]を付したものは復元推定値を表す。
 - ③ 器形の特徴は、底部、体部等の各部位について土器観察の結果を記した。
 - ④ 手法の特徴は、土器の成形、整形について記した。
 - ⑤ 胎土、色調、焼成の順で述べ、色調は「新版標準土色帖」を使用した。焼成については、「良好」、「普通」、「不良」に分類し、硬く焼き締まっているものは良好、焼きがあまく器面が剥離しやすいものは不良とし、その中間のものを普通とした。
 - ⑥ 備考は、土器の完存率、実測(P)番号、出土位置、その他必要と思われる事項を記した。
- (2) 土製品一覧表

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					

- ① 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
 - ② 重量の欄で、()を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。
 - ③ 備考の欄は、実測(DP)番号、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 石器・石製品

図版番号	器種	法 量				石質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

- ① 遺物番号は、実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。
 - ② 備考の欄は、実測(Q)番号、その他必要と思われる事項を記した。
- (4) 鉄製品

図版番号	器種	法 量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	

- ① 遺物番号は、実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。
- ② 備考の欄は、出土位置、実測(M)番号、その他必要と思われる事項を記した。

第5章 原口遺跡

第1節 遺跡の概要

原口遺跡は、岩井市の南南東部に位置し、猿島台地南東部の菅生沼西岸、標高17～18mの台地上に立地している。今回の調査区域は、「茨城県自然博物館（仮称）」への進入路にあたり、幅南北に約18m、長さ東西に約172m、面積3,092m²である。現況は、畑であり、調査前から縄文時代後期の縄文式土器片などの遺物が散布していることが確認されていた。

今回の調査によって検出された遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡11軒、土坑60基である。

竪穴住居跡の平面形は円形あるいは楕円形を呈し、床中央部から炉が検出されている。その他、土坑の中の地点貝塚からは、ヤマトシジミを主体として魚骨なども出土している。

遺物は遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱程出土している。縄文時代後期に比定される掘ノ内式土器片、加曽利B式土器片などが、住居跡の覆土及び床面から出土している。深鉢形土器、浅鉢形土器等の他に注口土器の一部なども出土している。また、土製品では、耳飾、蓋が出土している。石器では、磨製石斧、石鏃、凹石、磨石等が出土している。さらに、土器片錘や土製円板等も少量であるが出土している。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から検出された竪穴住居跡は11軒である。これらの竪穴住居跡は、調査区の東部から検出され、縄文時代後期のもので、重複しあっているものが大半を占めている。

以下、検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

第1-A号住居跡（第8図）

位置 調査区の東端、J5e₀区を中心に確認されている。本跡の南部は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の東部は、第1-B号住居跡の西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径 [3.85] m、短径 [3.63] mの不整円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-13°-W]

壁 耕作による攪乱で壁の立ち上がりを確認することができないが、西壁の一部が遺存し、壁高は13～18cmである。

床 炉周辺は、やや凹凸があり硬く踏み固められているが、その他は、平坦で軟らかい。

ピット 10か所 (P₁~P₁₀) 検出されている。P₁~P₁₀は、径22~78cmの円形を呈し、深さ18~67cmで、いずれも壁際を回るように検出されているので、壁柱穴と思われる。

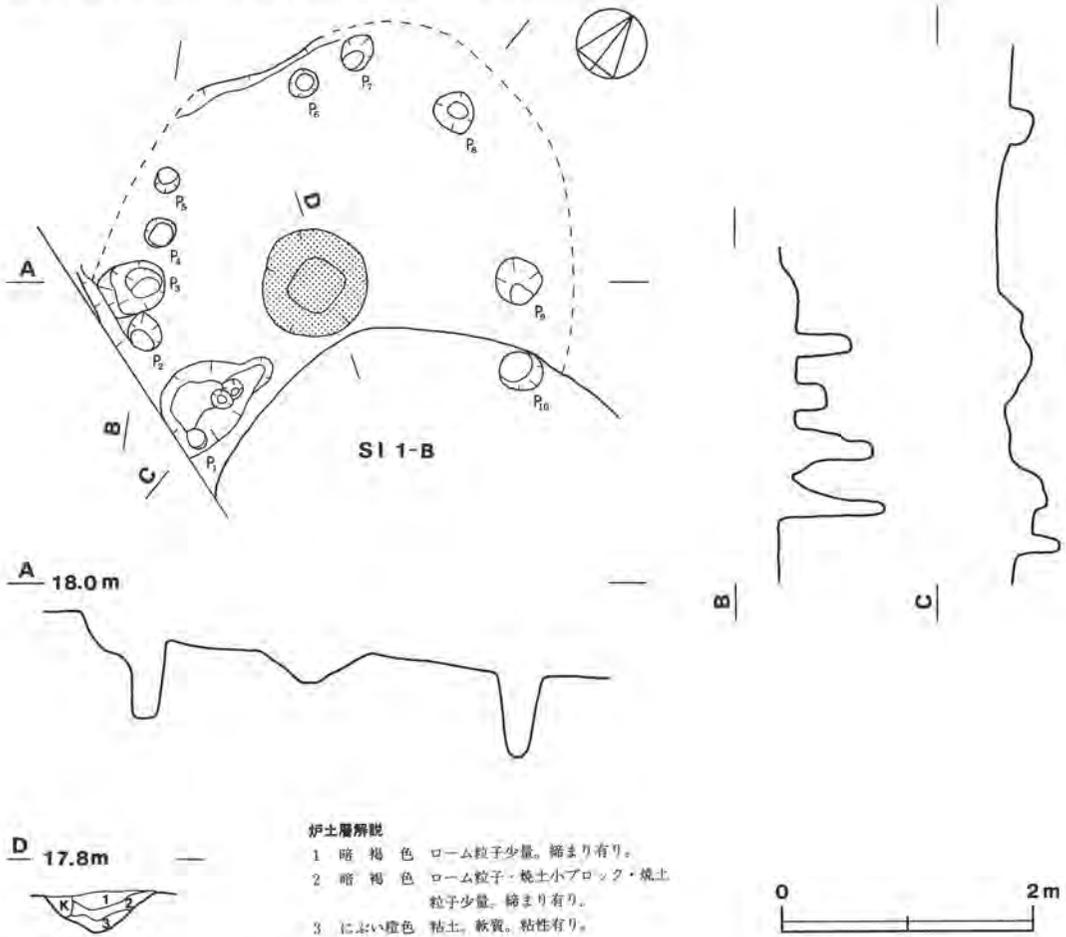
炉 ほぼ床中央部に検出されている。平面形は径90cmの円形を呈し、床を24cm程掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。炉内には、にぶい橙色の焼土に、粘土が含まれている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土及び炉直上からは、縄文式土器片 (細片16点) が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第1-B号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

第10図1・2は、第1-A号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部で、横位回転の単節縄文LRを施している。口唇部に小突起をもち頂部は押圧され凹んでいる。2は胴部で、縄文を地文とし蕨手文が垂下している。



第8図 第1-A号住居跡実測図

第1-B号住居跡（第9図）

位置 調査区の東端，J6e₁区を中心に確認されている。本跡の南部は調査区域外に延びてゐる。

重複関係 本跡の西部は，第1-A号住居跡の東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径 [4.20] m，短径 [3.94] mのほぼ円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-25°-W]

壁 攪乱により壁の立ち上がりを確認できなかった。

床 耕作による攪乱が見られるが，床面は平坦で軟らかい。炉周辺は，やや踏み固められて硬い。

ピット 9か所(P₁~P₉)検出されている。P₁~P₈は径20~63cmの円形を呈し，深さ15~52cmで，壁際を回るように検出され，壁柱穴と思われる。P₉は，径16cm，深さ35cmで，性格は不明である。

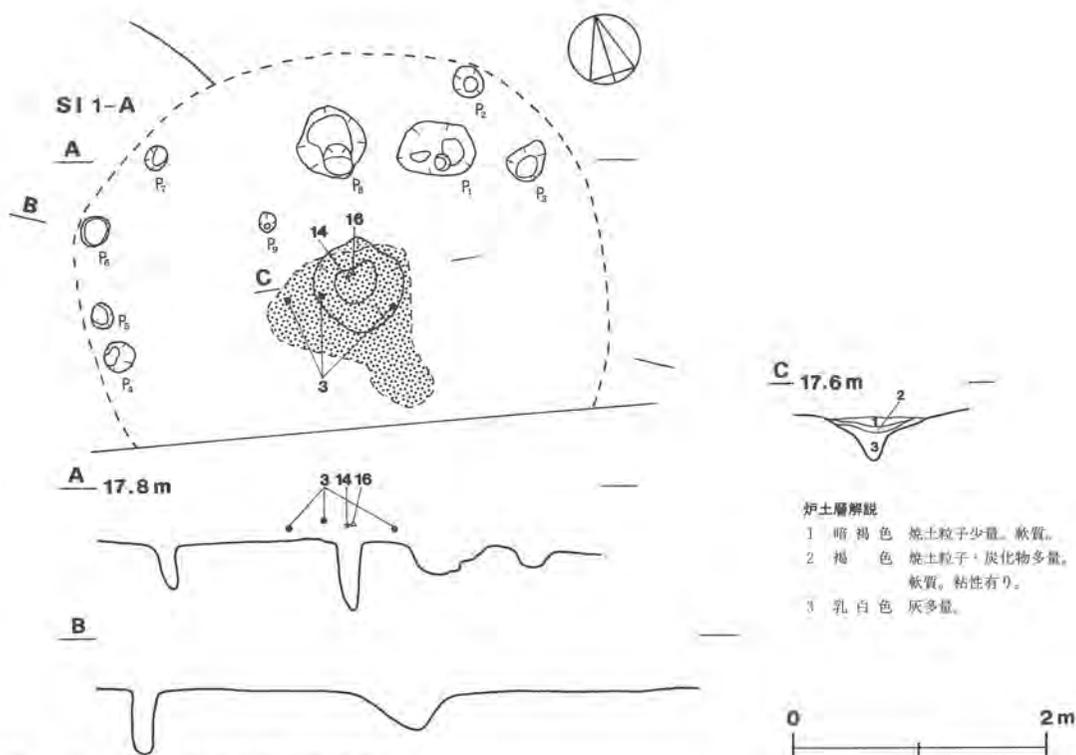
炉 ほぼ床中央部に検出されている。平面形は，径75cmの円形を呈し，床を30cm程掘り窪めた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。さらに，炉内には木炭の細片を多く含む乳白色の灰が充満している。

覆土 自然堆積。

遺物 炉直上及び炉周辺からは，縄文式土器片（深鉢4，細片491点）やヤマトシジミを主体にハマグリ・シオフキ・オオタニシ等の貝やニホンジカ・イノシシ等の獣骨が出土している。第10図3の深鉢形土器片は，炉直上から貝とともに出土している。第11図15の牙玉状の垂飾は，南東部の覆土上層から，第11図16の石鏃は，炉の南側の直上からそれぞれ出土している。

所見 本跡は，重複関係から第1-A号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

第10・11図7~13は，第1-B号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。7~13は，炉直上の貝塚出土の土器片である。7~10は波状口縁部で，7は横位回転の単節縄文LRを地文として，沈線を縦位や斜位に施し，沈線内や波頂部下から蛇行文を垂下している。頂部は円形に凹んでいる。8は横位回転の単節縄文LRを地文として，横位に沈線を施し波頂部から縦に隆帯を貼付している。頂部は円形に凹んでいる。9は，口縁部上位に斜位の沈線と刺突文が施され，斜位回転の単節縄文LRを地文として，沈線が垂下している。10は口縁部上位に沈線を横位に，下位には微隆起線を施し「8」の字状の刺突文が見られる。11・12は口縁部で，11は横位回転の単節縄文LRを地文として，蛇行文が垂下している。12は口縁部上位に1条の沈線を横位に巡らし，以下横位回転の単節縄文LRが施されている。13は胴部で横位回転の単節縄文LRを地文として，縦位に平行沈線が施されている。

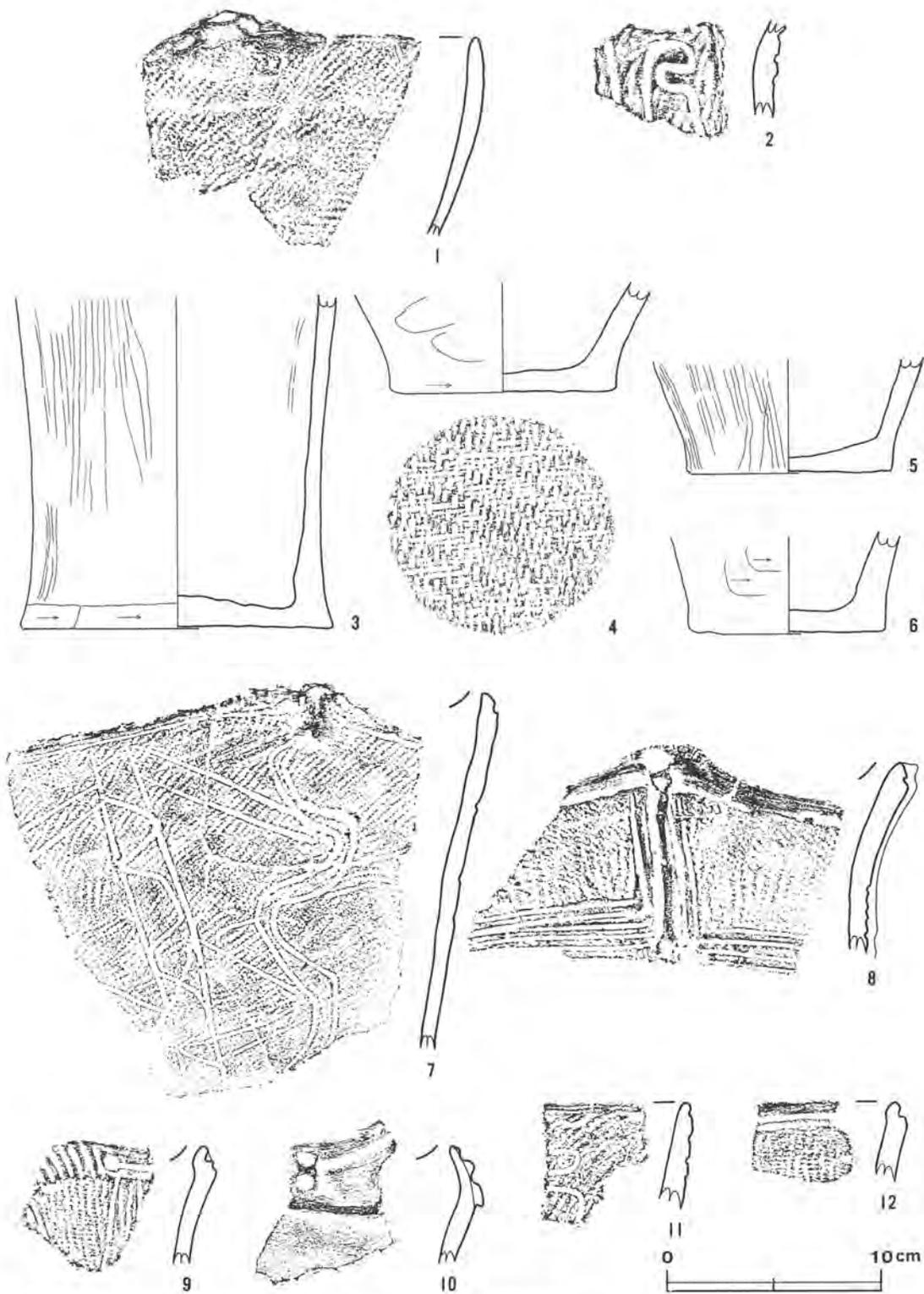


第9図 第1-B号住居跡実測図

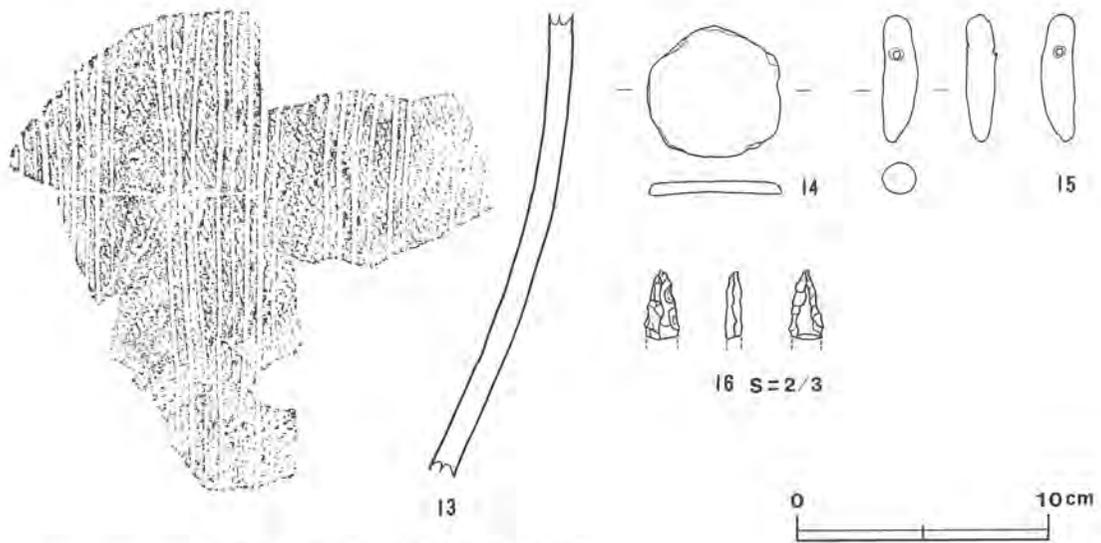
第1-B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第10図 3	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (15.7) C 14.6	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がり、底端部は張り出す。内・外面へラ削り後磨き。	砂粒・スコリア・石英・雲母にふい褐色普通	P 1 PL 4 20% 炉直上
4	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (5.2) C 10.6	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。内・外面へラ削り後磨き。底部網代痕有り。	砂粒・スコリア・雲母にふい橙色普通	P 2 PL 4 10% 覆土
5	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (5.4) C 9.4	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部外面へラ削り後丁寧な磨き。内面へラナデ。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P 3 10% 覆土
6	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (4.8) C 9.0	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。	砂粒・スコリア・雲母にふい赤褐色普通	P 4 PL 4 10% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第11図14	円板	(5.2)	(5.2)	0.5	—	(22.1)	95	炉直上	DP1
15	垂飾	5.1	1.4	1.2	4	7.7	100	覆土上層	DP2 牙玉状



第10图 第1-A·1-B号住居跡出土遺物実測・拓影図



第11図 第1-B号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第11図16	石 鏃	(1.4)	0.7	0.3	(0.3)	チャート	炉直上	Q1

第2-A号住居跡 (第12図)

位置 調査区の中央部, J5b₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第2-B号住居跡によって全体が掘り込まれているが, 床面は第2-B号住居跡の床と高低差はほとんどない。

規模と平面形 長径 [3.62] m, 短径 [3.36] mの不整形円形を呈しているものと推定される。

主軸方向 [N-36°-W]

壁 第2-B号住居跡の構築によって削平されている。

床 炉周辺が良く踏み固められている他は, 平坦で軟らかい。

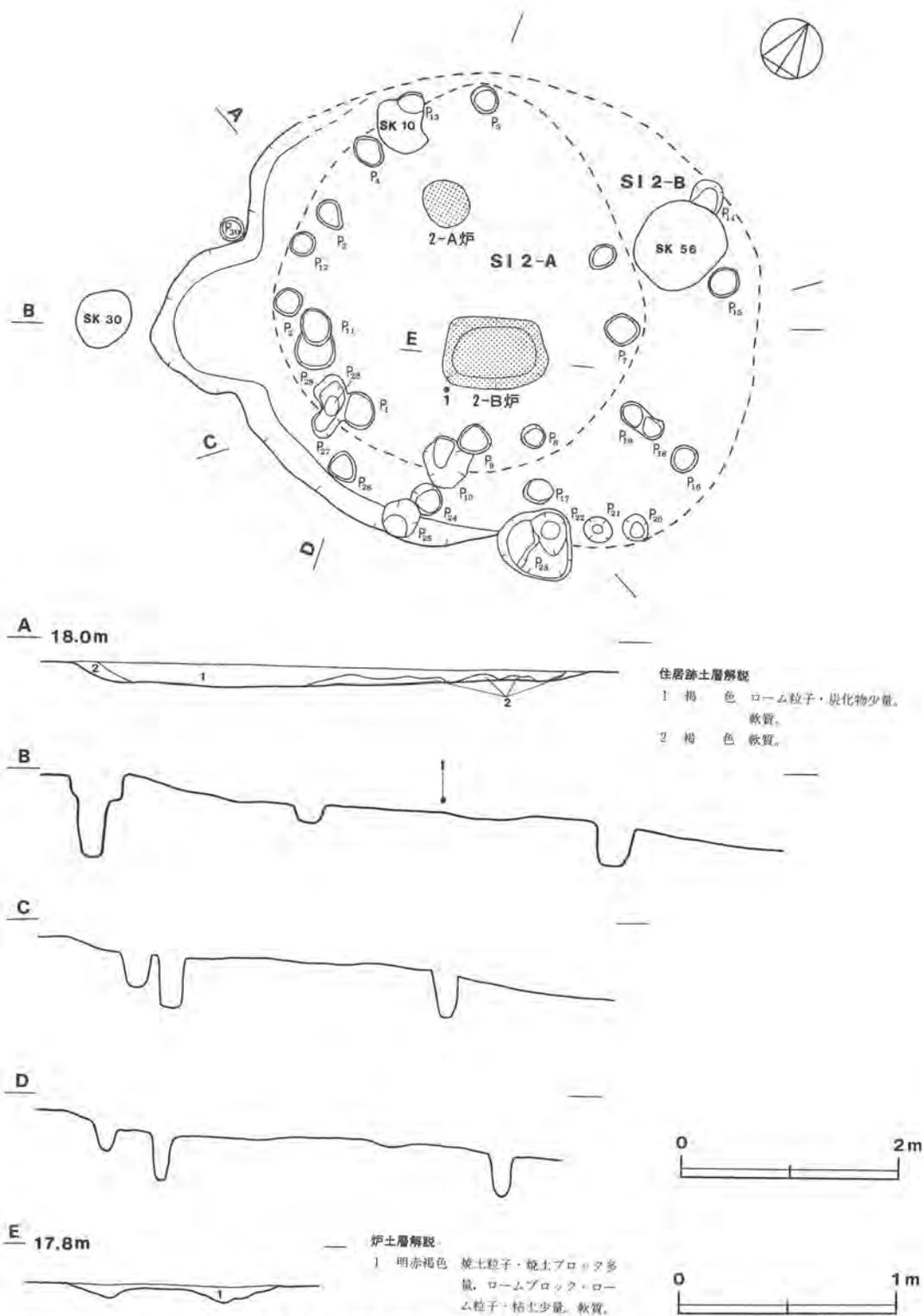
ピット 9か所 (P₁~P₉) 検出されている。P₁~P₉は, 径24~35cmの円形を呈し, 深さ15~54cmで, 覆土は, 暗褐色で焼土粒子, 炭化粒子を少量含み, やや締まりがある。いずれも壁際を回るように検出され, 壁柱穴と思われる。

炉 床中央から西寄りに検出されている。平面形は径47cmの円形を呈し, 床を約11cm掘り窪めた地床炉である。炉床は, 焼土がブロック状になっている。

覆土 不明。

遺物 縄文式土器の細片が, 床面から少量出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第2-B住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。



第12図 第2-A・2-B号住居跡実測図

第2-B号住居跡（第12図）

位置 調査区の中央部，J5b₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は，第2-A号住居跡全体を掘り込んでいるが西壁は第10号土坑に，北部は第56号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径 [5.60] m，短径 [4.37] mの楕円形を呈し，南西部に出入り口施設をもつ柄鏡形住居になるものと推定される。

主軸方向 [N-47°-E]

壁 壁高は6～10cmで，外傾して立ち上がっている。北壁は削平されているため確認できない。

床 平坦であり，炉周辺は硬く踏み固められている。南西部の出入り口施設は，幅1.31m，長さ1.03mで，外から内側にかけ緩やかな傾斜をもち，幾分凹凸がある。

ピット 21か所(P₁₀～P₃₀)検出されている。P₁₁～P₁₇は，径23～49cmの円形を呈し，深さ12～33cmで，いずれも壁際を回るように検出され，壁柱穴と思われる。P₁₈は，径21cmの円形を呈し，深さ36cmで，補助柱穴と思われる。P₁₉～P₃₀は，径24～43cm，深さ12～52cmで，性格は不明である。

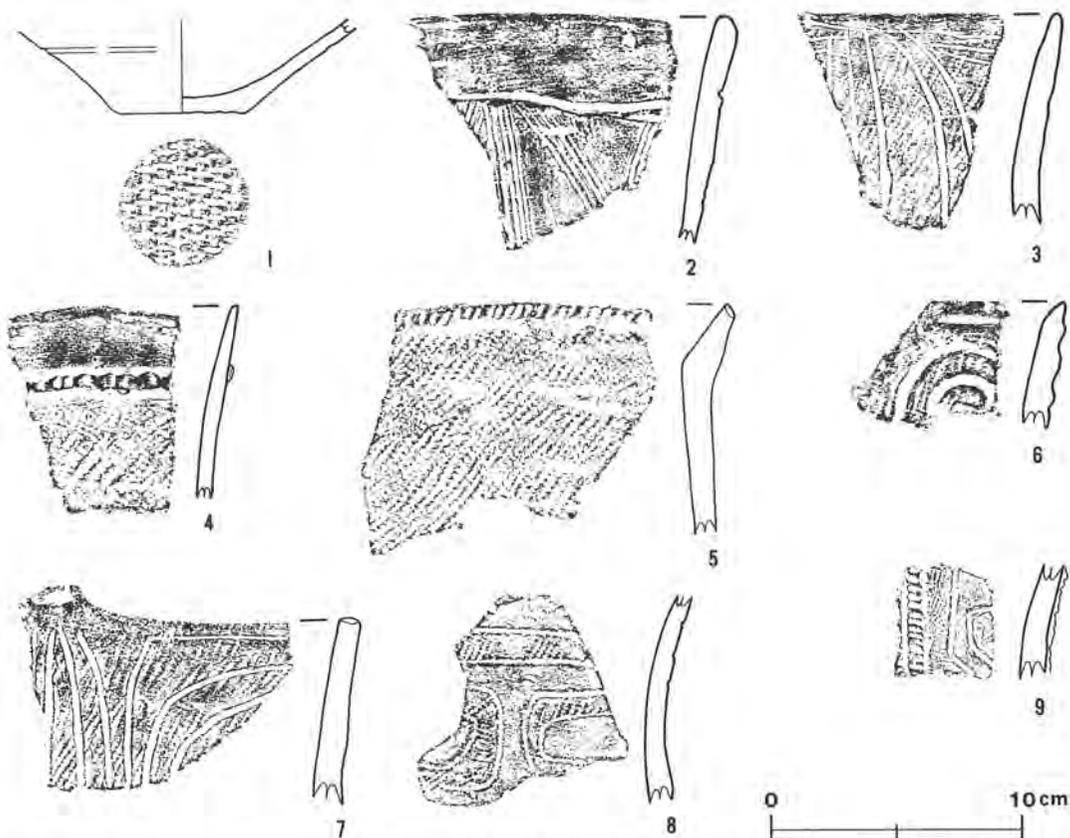
炉 ほぼ床中央部に検出されている。平面形は，長径97cm，短径66cmの楕円形を呈し，床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉内には焼土粒子，焼土ブロック，ローム小ブロックを含み，炉床は焼けている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層から上層にかけては，縄文式土器片（深鉢1，細片485点）が出土している。第13図1の深鉢形土器片は，中央部覆土下層から出土している。

所見 本跡は，重複関係から第10号・第56号土坑より古く，第2-A号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期中葉の柄鏡形の住居跡と考えられる。

第13図2～9は，第2-A・B号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。2～6は口縁部で，2は沈線を口縁にそって巡らし口縁無文体と胴部施文体に区画され，胴部は5本単位の櫛歯状工具で沈線を斜位に施している。3は横位回転の単節縦位LRを地文として，沈線を曲線に施している。4は口縁部中位にキザミ目をもつ隆起線を横位に巡らせ，口縁無文体と胴部施文体に区画し，胴部に横位回転の単節縄文LRが施されている。5は横位回転の単節縄文LRを施し，口唇部にキザミ目をもつ。6は縄文を地文として，渦巻文が施されている。7は口唇部に小突起をもち，横位回転の単節縄文LRを地文として，沈線が曲線に施されている。突起の頂部は円形に凹んでいる。8・9は胴部で，8は縄文を地文として沈線が曲線に施され，沈線間は磨消されている。9は縄文を地文として沈線を曲線に施し，キザミ目をもつ隆起線を縦位に貼付している。



第13図 第2-A・2-B号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2-B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	浅鉢形土器 (加曾利B)	B (3.7) C 5.0	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は大きく外傾して立ち上がる。胴部下位は横位の沈線によって区画し、以下を磨消している。内面へラナデ後磨き。底部網代痕有り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P5 PL5 10% 中央部覆土下層

第3号住居跡 (第14図)

位置 調査区の南西部, J5b₁区を中心に確認されている。本跡の南西部は調査区域外に伸びている。

重複関係 本跡の東部は, 第55号土坑全体を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径5.78m, 短径 [5.54] mの円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-66°-W]

壁 壁高は3~11cmで, 緩やかに外傾して立ち上っている。

床 全体的に平坦で, 良く踏み固められて硬い。

ピット 12か所(P₁~P₁₂)検出されている。P₆は, 径67cm, 深さ60cmで, 主柱穴と思われる。P₁

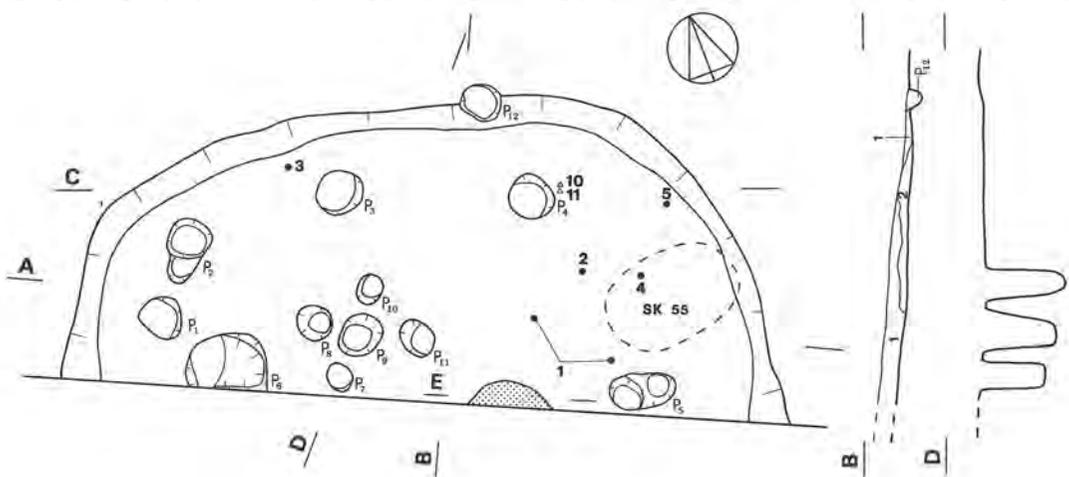
~P₅は、径37~54cm、深さ30~54cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₇~P₁₁は、径24~38cm、深さ40~64cmで、性格は不明である。

炉 床中央部からやや南東側に検出されている。平面形は、長径55cm、短径(18)cmの楕円形を呈し、床を14cm程掘り窪めた地床炉である。炉床は、ロームが赤変硬化している。

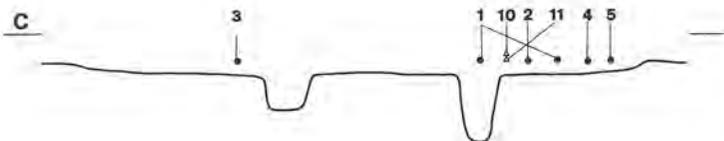
覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層から中層にかけては、縄文式土器片(深鉢3、浅鉢1、注口1、細片 509点)が出土している。特に南東部から縄文式土器片が多く出土している。第15図1の深鉢形土器は、南東部覆土下層から横位のつぶれた状態で、第15図5の注口土器の注口片は、北東壁付近の覆土下層から、第16図10の磨製石斧は、炉の北東部覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、第55号土坑より新しく、遺構の形態や遺物等から縄文時代後期中葉の住居跡と考



A 18.2m



E



住居跡土層解説

- 1 褐色
ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、縮まり有り。
- 2 褐色
ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量。

炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化物少量、縮まり有り。
- 2 明赤褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・粘土少量、軟質。

第14図 第3号住居跡実測図

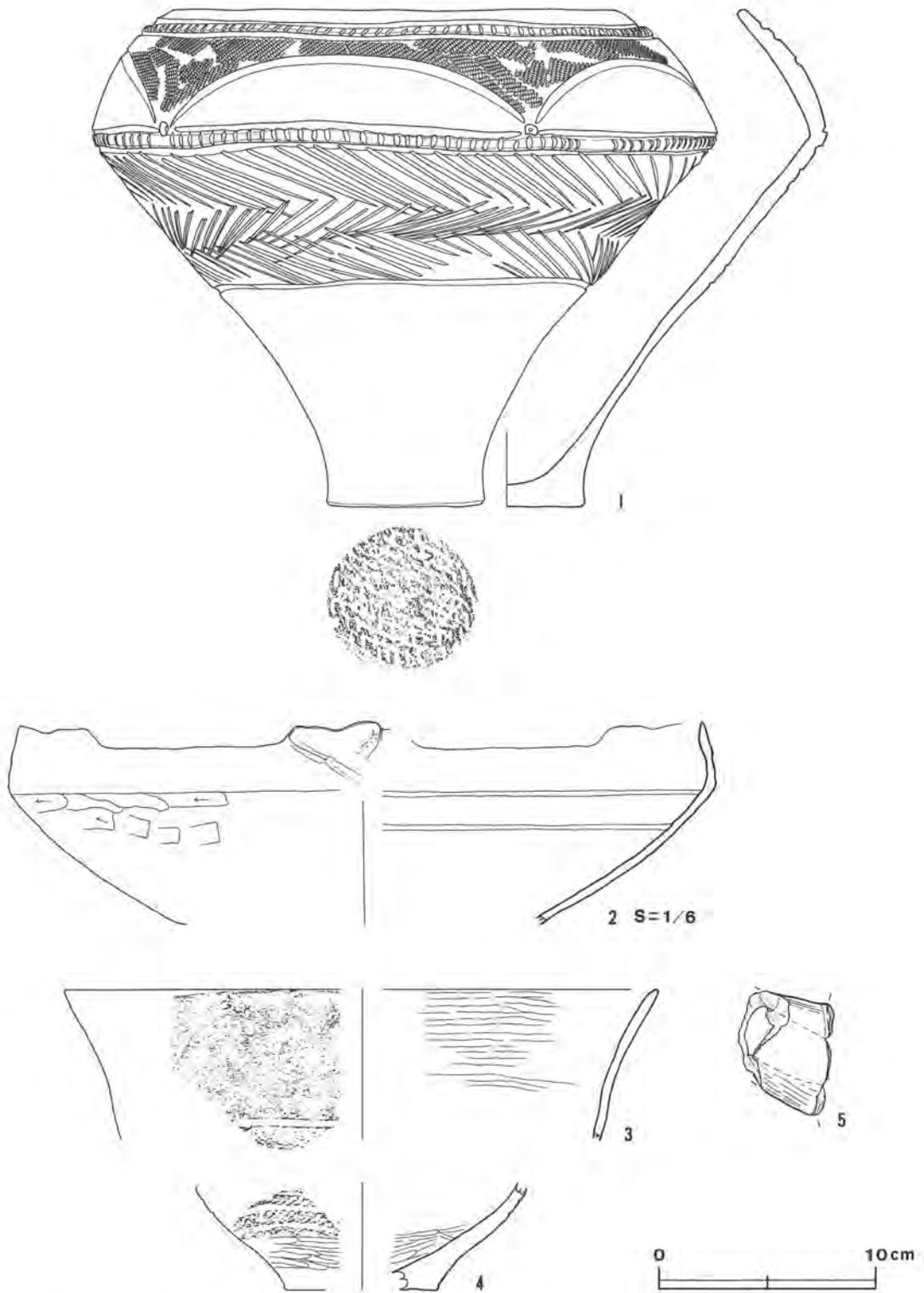
えられる。

第16図6～9は、第3号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。6～9は口縁部で、6は口唇部にキザミ目をもち、横位回転の単節縄文LRを地文として横位に沈線を施し、沈線間は磨消されている。7は縄文を地文として横位に3条沈線を巡らし、さらに沈線間に弧状沈線が施され、口縁部下位にキザミ目をもつ微隆起線が口縁にそって巡っている。8は縄文を地文として沈線が横位に施されている。9は波状口縁で、口縁にそって微隆起線を巡らし無文である。波頂部の小突起が凹んでいる。

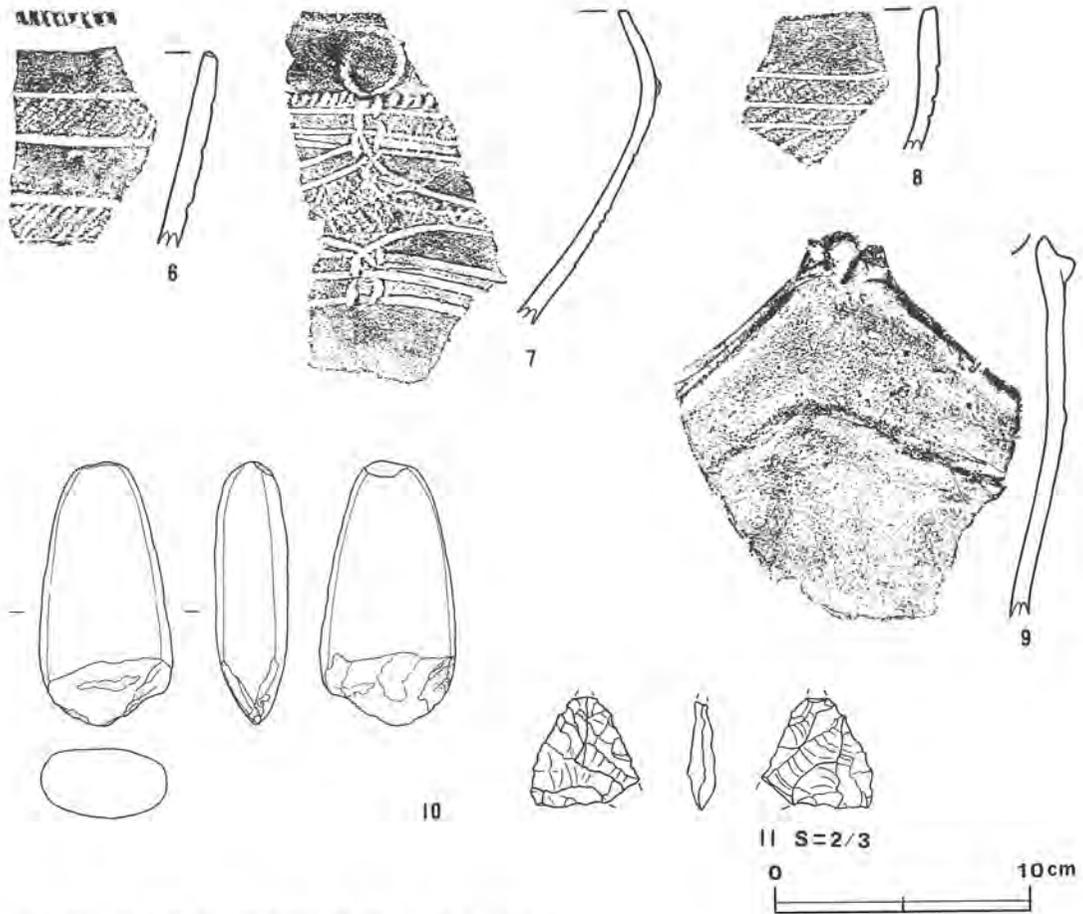
第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	深鉢形土器 (加曾利B)	B 20.6 C 23.4 D 7.2	平底。底部から垂直気味に立ち上がり、その後大きく外傾して反り気味に立ち上がり、胴部上位で大きく内彎している。胴部上位に最大径をもつ。口縁部には、2条の沈線を巡らし、沈線間にキザミ目を施している。口縁部下位から肩部にかけて縄文地文を弧状の沈線で5単位に区画し、区画内を磨消している。弧状の沈線の接合部分には刺突文が施されている。その下にキザミ目を有する微隆起線が巡っている。胴部中位には緩杵状の沈線が施されている。底部網代痕有り。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P 6 PL 6 95% 南東部覆土下層
2	浅鉢形土器 (加曾利B)	A [63.6] B (19.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部下半からやや内彎しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて大きく内彎する。口唇部には斜位方向に棒状工具によるキザミ目が施されている。口縁部は微隆起線により区画され丁寧な磨きが施されている。口唇部にハート形の突帯。胴部外面へら削り。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P 7 PL 6 20% 粗製土器 南東部覆土下層
3	深鉢形土器 (加曾利B)	A [27.8] B (7.1)	幅の広い無文帯を有する口縁部片。口縁部は胴部から外反して立ち上がる。口縁部は縄文地文を丁寧なへらナデにより整形している。頸部に横位の沈線が入り、以下縄文が充填されている。器厚がうすい。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P 8 PL 7 15% 覆土中層
4	深鉢形土器 (加曾利B)	B (5.1) C [7.0]	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は、緩やかに内彎して立ち上がる。胴部下位は2条の沈線が横位に巡り、沈線間には横位回転の単節縄文LRが充填されている。底部網代痕有り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 9 PL 7 5% 東部覆土下層
5	注口土器 (加曾利B)	基部外径 5.2 基部内径 2.1 長さ (3.9)	注口部片。注口部片の基部には沈線が巡り、下方がやや膨らんでいる。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P 10 PL 7 5% 北東壁付近覆土下層

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第16図10	磨製石斧	(10.6)	5.3	2.9	(248.6)	角閃片岩	覆土中層	Q2
11	石鏃	(2.3)	(2.2)	0.5	(2.2)	チャート	覆土下層	Q3



第15图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第4号住居跡 (第17図)

位置 調査区の南部, J5c₃区を中心に確認されている。本跡の南西部は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の西部が第5号住居跡の東部を掘り込んでいる。さらに、西部は第18・37・46号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径5.62m, 短径 [5.54] mの円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-27°-E]

壁 壁高は5~43cmで、外傾して立ち上がっている。

床 炉周辺はやや凹凸であるが、全体には平坦で、良く踏み固められ硬い。

ピット 7か所 (P₁~P₇) 検出されている。P₁~P₆は、径17~38cmの円形を呈し、深さ11~46cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₇は、径31cm, 深さ47cmで、性格は不明である。

炉 床中央から北東部寄りに検出されている。長径100cm, 短径77cmの楕円形を呈し、床を約16cm

掘り窪めた地床炉である。炉床は、暗赤褐色に焼けている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の中層から上層にかけては、縄文式土器片（深鉢2，細片2,141点）が出土している。第18図2の深鉢形土器片は、西部の覆土中層から、第18図9の耳飾は、中央部の覆土下層から、第19図10の磨製石斧は、中央部の覆土上層から、それぞれ出土している。第39図4・5の深鉢形・浅鉢形土器は、流れ込みである。

所見 本跡は、重複関係から第5号住居跡より新しく、第18・37・46号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

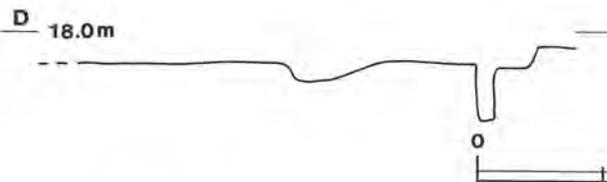
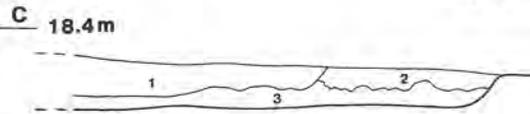
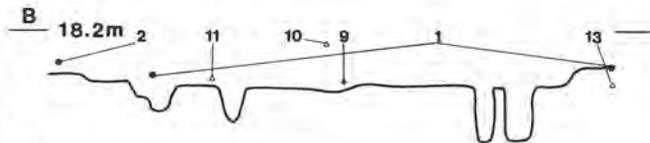
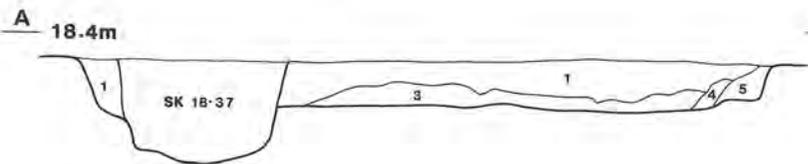
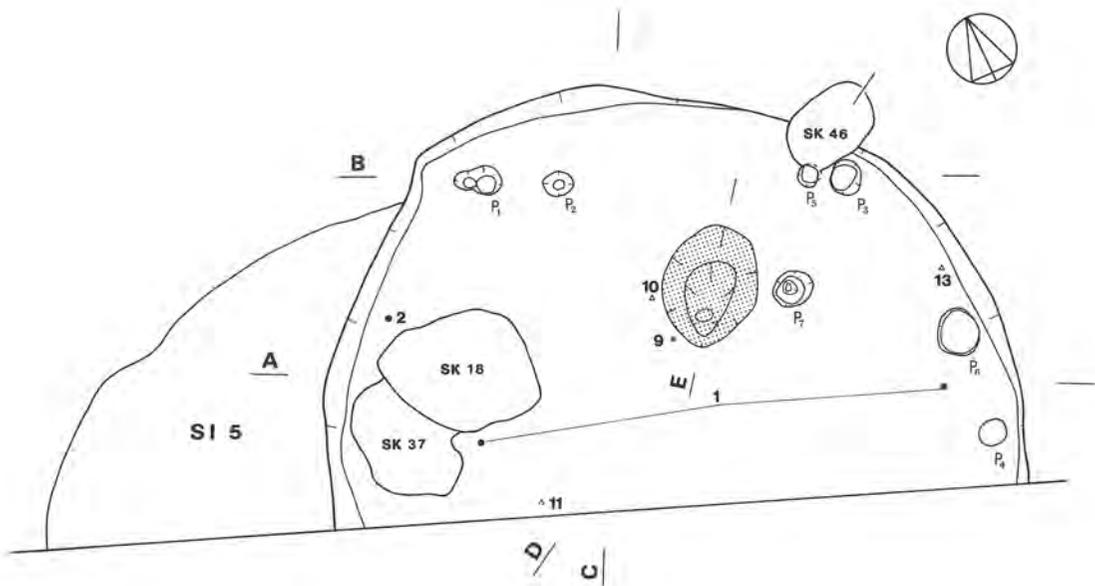
第18図3～8は、第4号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。3・4は口縁部で、3は横位回転の単節縄文LRを地文として、口縁部上位に横位に沈線が巡り平行沈線が縦位、斜位に施されている。4は無節縄文Rを地文として、蛇行文を垂下させ口縁上位に微隆起帯を貼付している。5～7は波状口縁で、5は口縁部上位深く横位の沈線や波頂部の下に刺突をもち、縄文を地文として沈線が斜位に施されている。6は横位回転の単節上位LRを地文として沈線を垂下させ、口縁上位に深く沈線を口縁にそって巡らしている。7は口縁上位に深く沈線を巡らせ、波頂部の下位に刺突をもち、横位回転の単節縄文LRを地文に沈線を垂下させ沈線内に蛇行文が施されている。8は胴部で、縦位回転の単節縄文RLを地文とし、平行沈線を垂下させ沈線間に蛇行文や斜位沈線文が施されている。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第18図1	深鉢形土器 (堀ノ内)	A [29.6] B (21.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はやや膨らみをもち、頸部から口縁部に向け外反して立ち上がる。口縁部上位に1条の沈線を横位に巡らし、以下全面に単節縄文LRを地文とし、沈線により曲線的なモチーフを描いている。モチーフは、3条又は4条の沈線により渦巻状の入組文や垂下文を描き、斜線文ないし曲線文を施文している。	砂粒・スコリア・ 礫・雲母 にふい黄橙色 普通	P12 PL8 20% 東部覆土下層
2	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (11.6) C 10.8	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、底端部はやや張り出す。底部及び外面はへら削り後磨き。	砂粒・スコリア・ 雲母 橙色 普通	P13 PL8 10% 西部覆土中層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図9	耳飾	(0.9)	(1.3)	—	—	(1.0)	90	覆土下層	DP3 白型赤彩

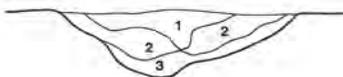
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第19図10	磨製石斧	(9.4)	4.8	2.8	(150.2)	角閃片岩	覆土上層	Q4
11	磨石	9.2	6.5	3.8	342.7	安山岩	覆土下層	Q5
12	磨石	6.0	5.4	3.8	187.7	安山岩	覆土	Q6
13	浮石	(5.6)	6.2	1.7	(9.2)	軽石	床面	Q7



住居跡土層解説

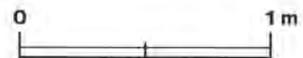
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。硬質。
- 2 褐色 ローム粒子中量，炭化物少量。締まり有り。
- 3 明褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量，ロームブロック極少量。硬質。
- 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。締まり有り。
- 5 にふい褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量。硬質。

E 18.0m

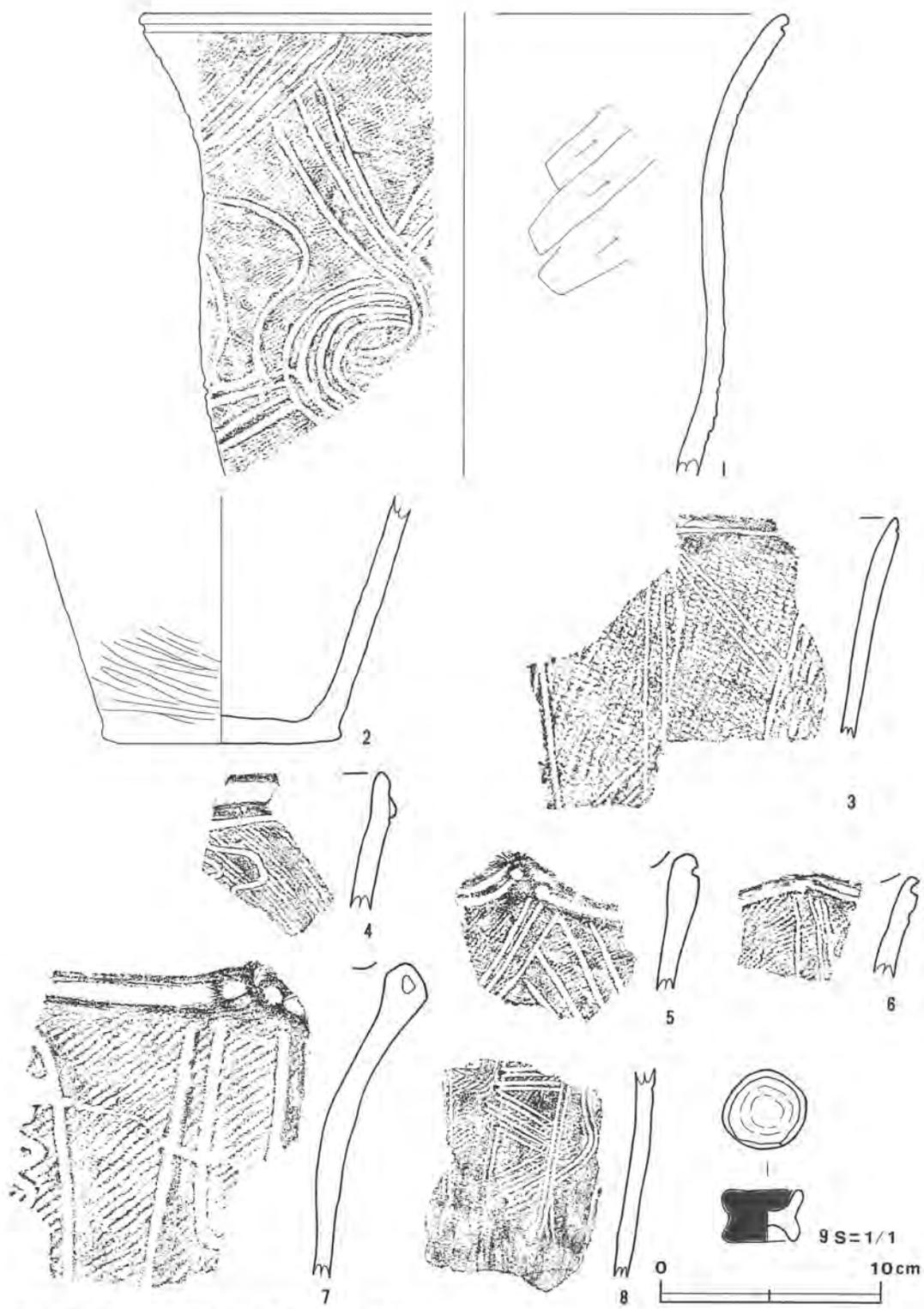


炉土層解説

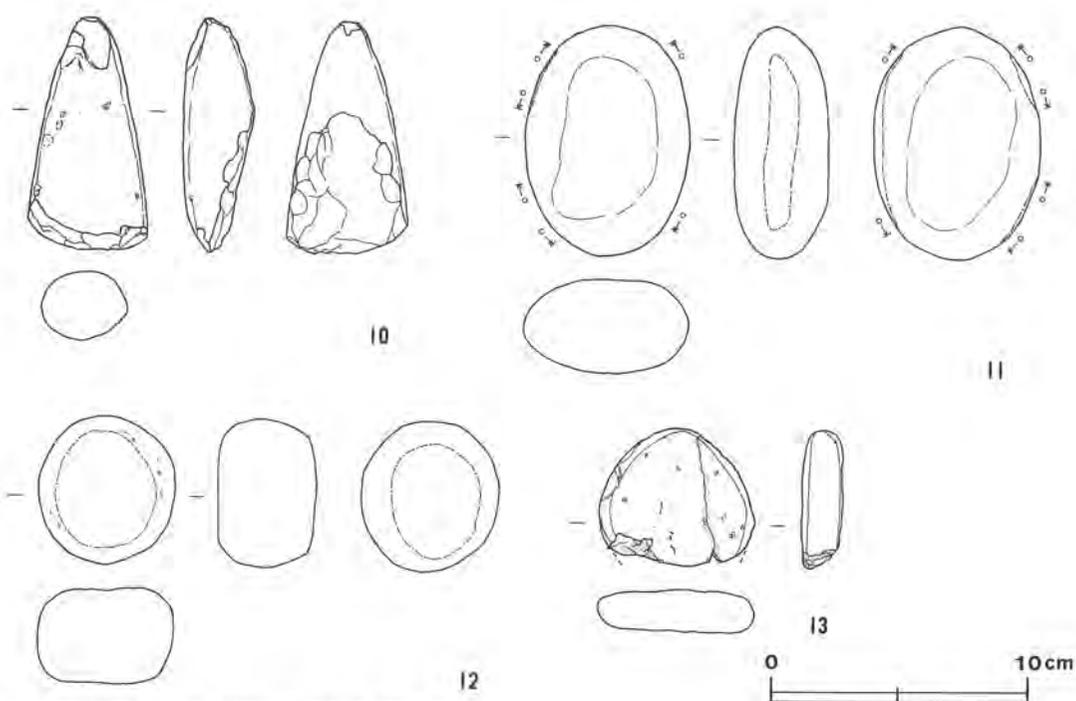
- 1 にふい赤褐色 ローム粒子少量。締まり，粘性有り。
- 2 赤褐色 焼土小ブロック少量。締まり有り。
- 3 にふい赤褐色 ロームブロック少量。粘性有り。



第17図 第4号住居跡実測図



第18図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第19図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第5号住居跡 (第20図)

位置 調査区の南部、J5c₂区を中心に確認されている。本跡の南西部は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の東部は、第4号住居跡の西部に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡は、重複部分が多く全体の約6分の1しか確認できないため、規模を推定することは困難である。

壁 壁高は16~17cmで、外傾して立ち上がっている。

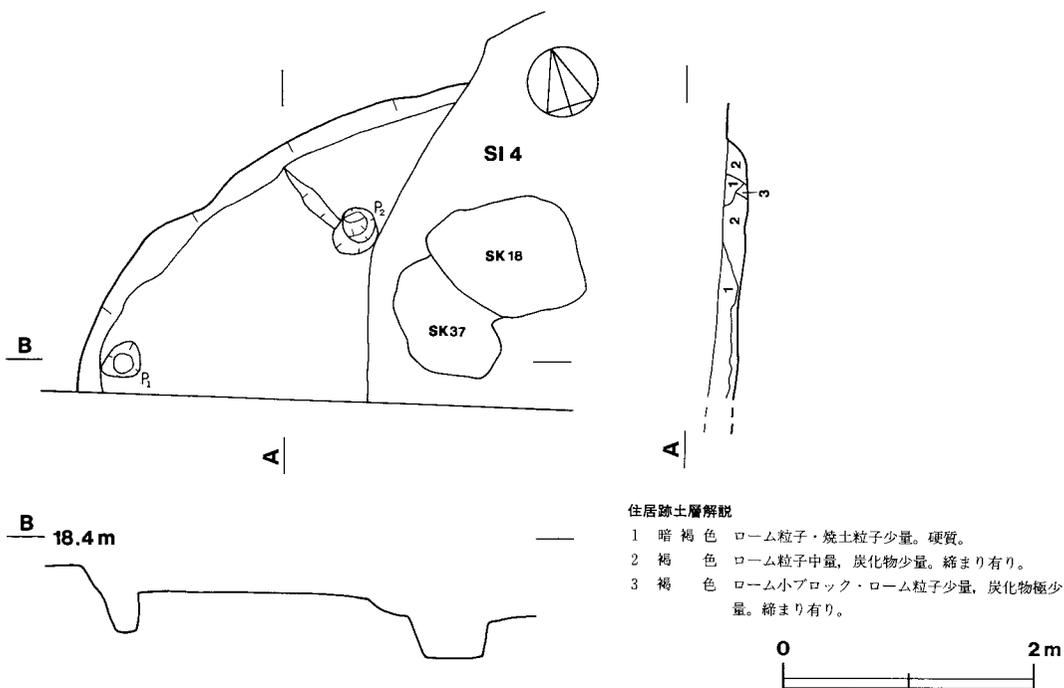
床 全体的に平坦で、締まりがあるが、北部がやや凹んでいる。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は、径36・33cmの円形を呈し、深さ38・47cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の中層から上層にかけては、縄文式土器片 (細片 693点) が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第4号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。



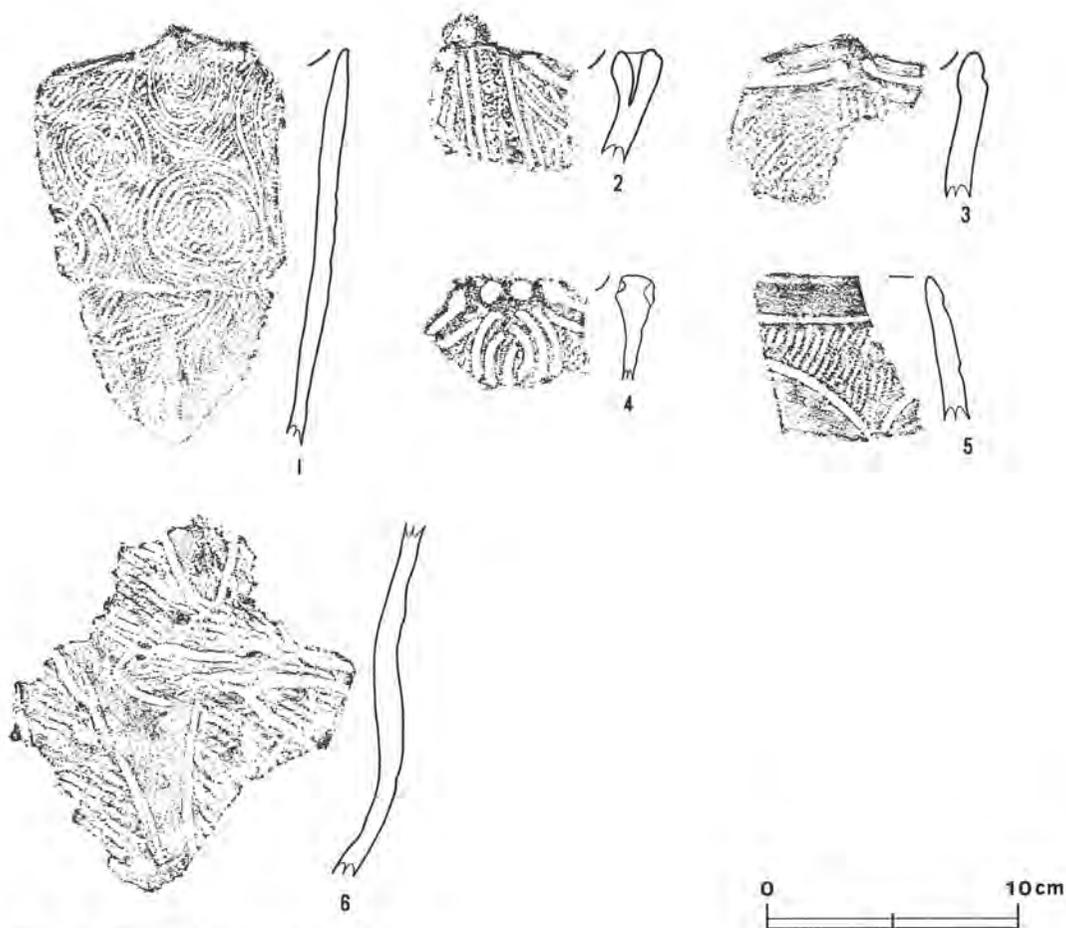
第20図 第5号住居跡実測図

第21図1～6は、第5号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1～4は、波状口縁部で、1は縄文を地文に渦巻文や同心円文が密に施されている。2は口縁上位に沈線を横位に巡らし、波頂部下位の沈線内に深く円形の刺突をもち、以下沈線を密に施し波頂部から垂下した沈線間に円形の刺突が縦位に施されている。3は口縁上位に沈線が横位に巡り波頂部下位の沈線内に刺突が施されている。また、横位回転の単節縄文LRを地文として波頂部から沈線が垂下している。4は口唇部に1条の沈線が巡り波頂部下位に刺突が施されている。また、縦位回転の単節縄文RLを地文として曲線の沈線が密に施されている。5は口縁部で、横位回転の単節縄文LRを地文として口縁上位に横位に沈線が巡り、さらに弧状の沈線を施し沈線間は磨消されている。6は胴部で、無節縄文Rを地文として沈線を曲線に施し、沈線間は磨消されている。

第6号住居跡（第22図）

位置 調査区の中央部，J5e_s区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は、第7号住居跡の南部を、東部は第8号住居跡の西部を掘り込んでいる。さらに、北部は第22～25・27・31・33号土坑に、西部は第20号土坑に、南西部は第19号土坑に、南部は第12号土坑に、南東部は第16号土坑に、東部は第17・28号土坑によって掘り込まれている。



第21図 第5号住居跡出土遺物拓影図

規模と平面形 長径 [5.91] m, 短径 [5.54] mの不整形円形を呈するものと推定される。

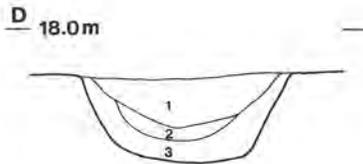
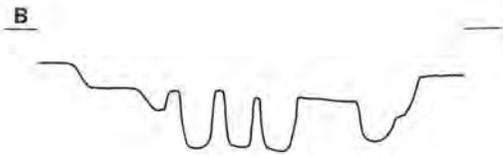
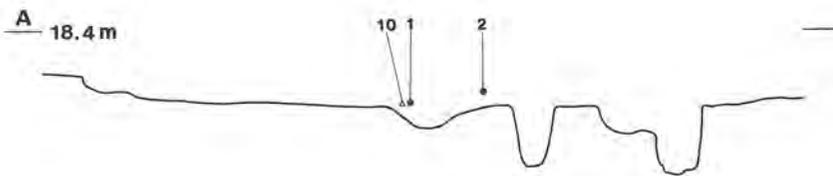
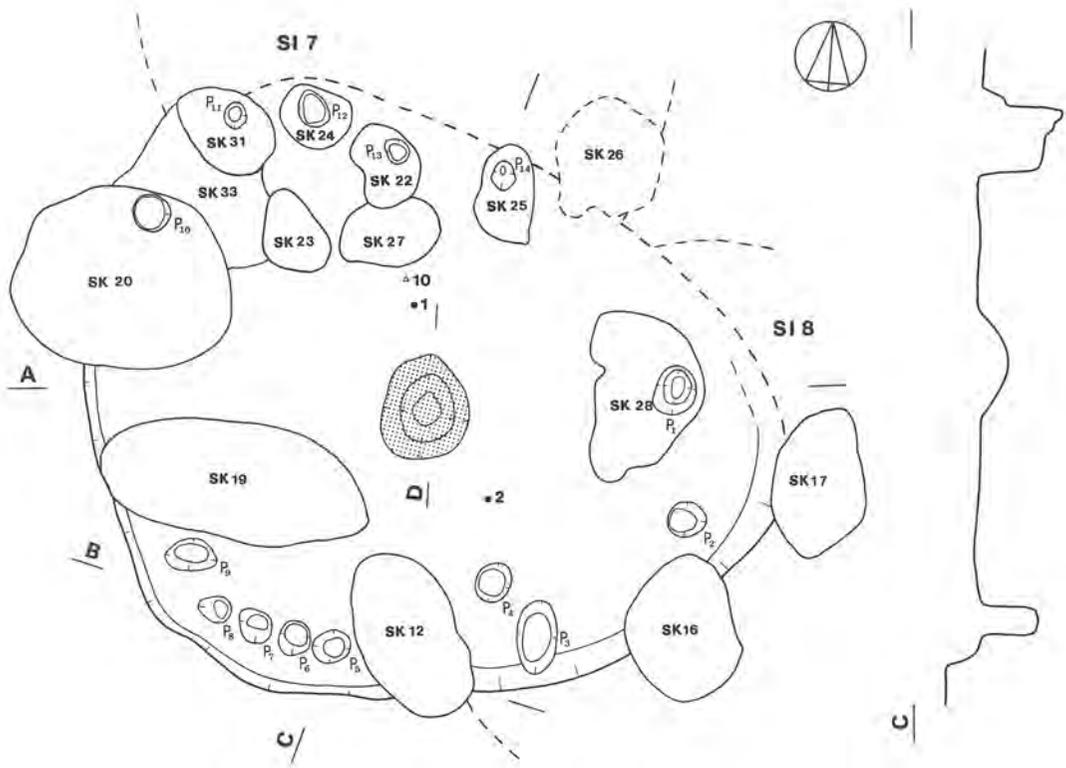
主軸方向 [N-74°-W]

壁 他の遺構によって削平され、ほとんどの壁は確認できないが、南壁の一部が遺存しており、壁高は11~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 他の遺構によって削除されて確認できない部分が多くあるが、炉周辺には床が遺存しており、平坦で良く踏み固められ硬い。

ピット 14か所 (P₁~P₁₄) 検出されている。P₁~P₁₄は、径26~61cmの円形を呈し、深さ20~100cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。

炉 床中央部に検出されている。長径84cm, 短径67cmの楕円形を呈し、床を約21cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。



炉土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土粒子少量。締まり有り。
- 2 明赤褐色 焼土ブロック少量。
- 3 赤褐色 焼土ブロック多量。硬質。



第22図第6号住居跡実測図

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層から上層にかけては、縄文式土器片（深鉢2，細片 604点）が出土している。第23図1の深鉢形土器片は中央部の床面から，第23図2の深鉢形土器片は南部の覆土下層から，第23図10の石鏃は南東部の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は，重複関係から第7・8号住居跡より新しく，第12・16・17・19・20・22～25・27・28・31・33号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期中葉の住居跡と思われる。

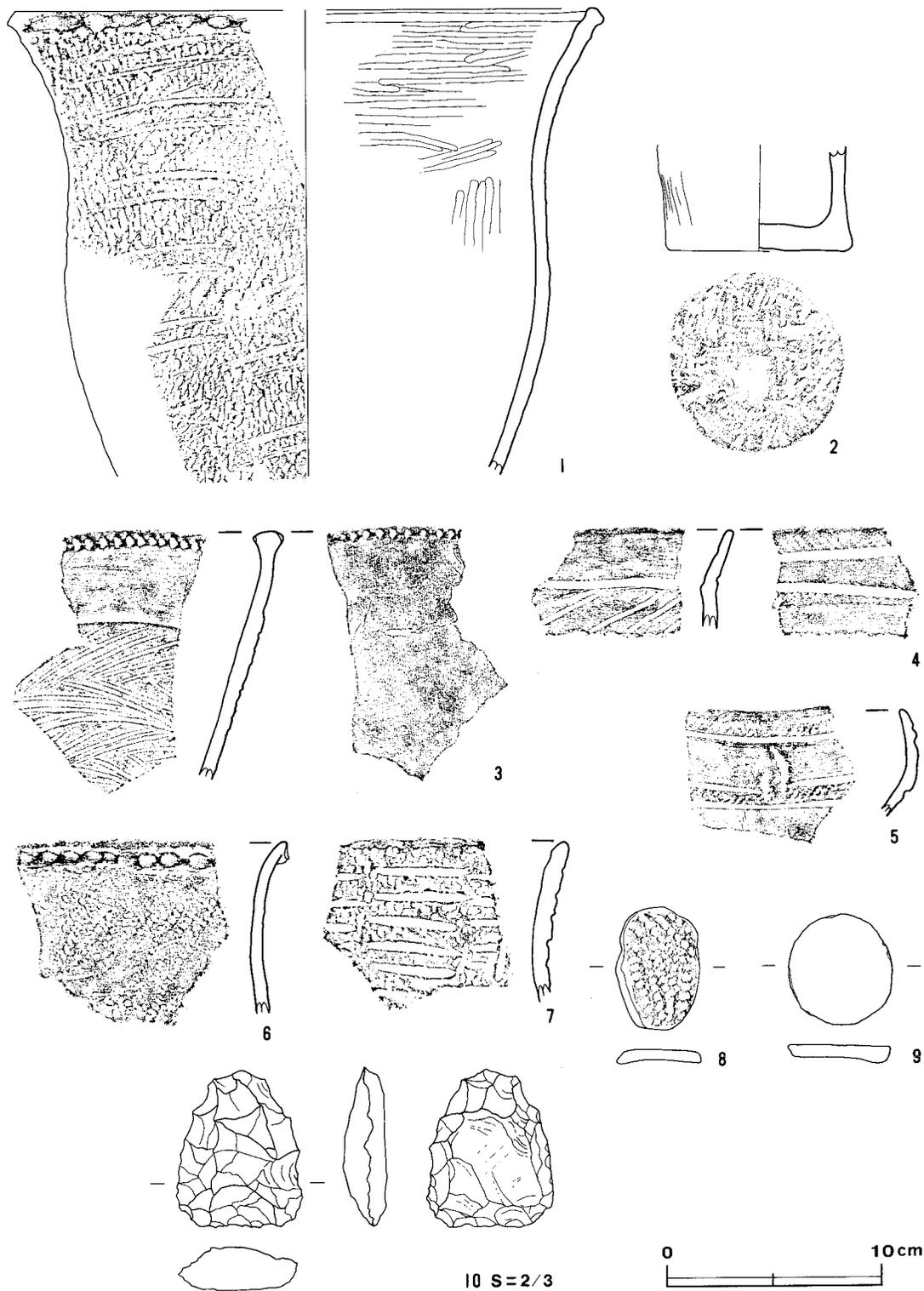
第23図3～7は，第6号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。3～7は口縁部で，3は口唇部の内・外面にキザミ目をもつ微隆起線を貼付し，綾杉状の沈線が施されている。内面へラ磨きである。4は横位の沈線により口縁無文体と胴部施文体に区画され，胴部は斜位に沈線が施されている。内面は，口縁上位に横位回転の単節縄文RLを施し，以下2条の沈線が口縁にそって巡っている。5は横位回転の単節縄文LRを地文として横位に沈線が施され，沈線間は磨消され対弧文が施されている。6は横位回転の単節縄文LRを地文として，口縁上位に連続指頭押圧による微隆起線が施されている。7は縄文を地文として横位の沈線が短く施されている。内面は横位の沈線が2条巡っている。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第23図1	深鉢形土器 (加曾利B)	A [26.2] B (22.1)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は膨らみをもち，頸部から縁部にかけて外反して立ち上がる。口縁部上位には，粘土紐を貼付し，指頭押圧によるキザミ目を施している。全面に横位回転の節の粗い単節縄文LRを地文として，沈線を短く横位に施している。口縁部内面上位には1条の沈線が巡っている。	砂粒・スコリア・雲母 にふい褐色 普通	P15 PL9 15% 粗製土器 中央部床面
2	深鉢形土器 (加曾利B)	B (5.0) C 8.4	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がり，底端部はやや張り出す。内・外面丁寧なへらナデ。底部網代痕有り。	砂粒・スコリア・雲母 にふい褐色 普通	P16 PL9 10% 南部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第23図8	円板	5.7	3.9	0.5	—	22.0	100	覆土	DP4
9	円板	5.1	4.7	0.9	—	23.4	100	覆土	DP5

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第23図10	石鏃	(3.6)	2.9	1.0	(12.3)	チャート	床面	Q8



第23图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡（第24図）

位置 調査区の中央部、J5c₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、第6号住居跡の北部や第22・25・27・31・33号土坑に、北西部は、第49・50号土坑に掘り込まれている。本跡の南東部は、第26号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径 [5.00] m、短径 [4.94] mの不整形円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-39°-W]

壁 削平され確認できない。

床 全体的に平坦で、特に炉周辺は良く踏み固められ硬い。

ピット 9か所（P₁～P₉）検出されている。P₁～P₃は、径22～32cmの円形を呈し、深さ28～37cmで壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₄～P₉は、第27号土坑内に検出され、径21～23cm、深さ48～75cmで、性格は不明である。

炉 2か所検出されているが、炉1の南部は、炉2の北部を掘り込んでいる。炉1は、径65cmの不整形円形を呈し、床を約18cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。炉2は、径26cmの円形を呈し、床を約26cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

覆土 不明。

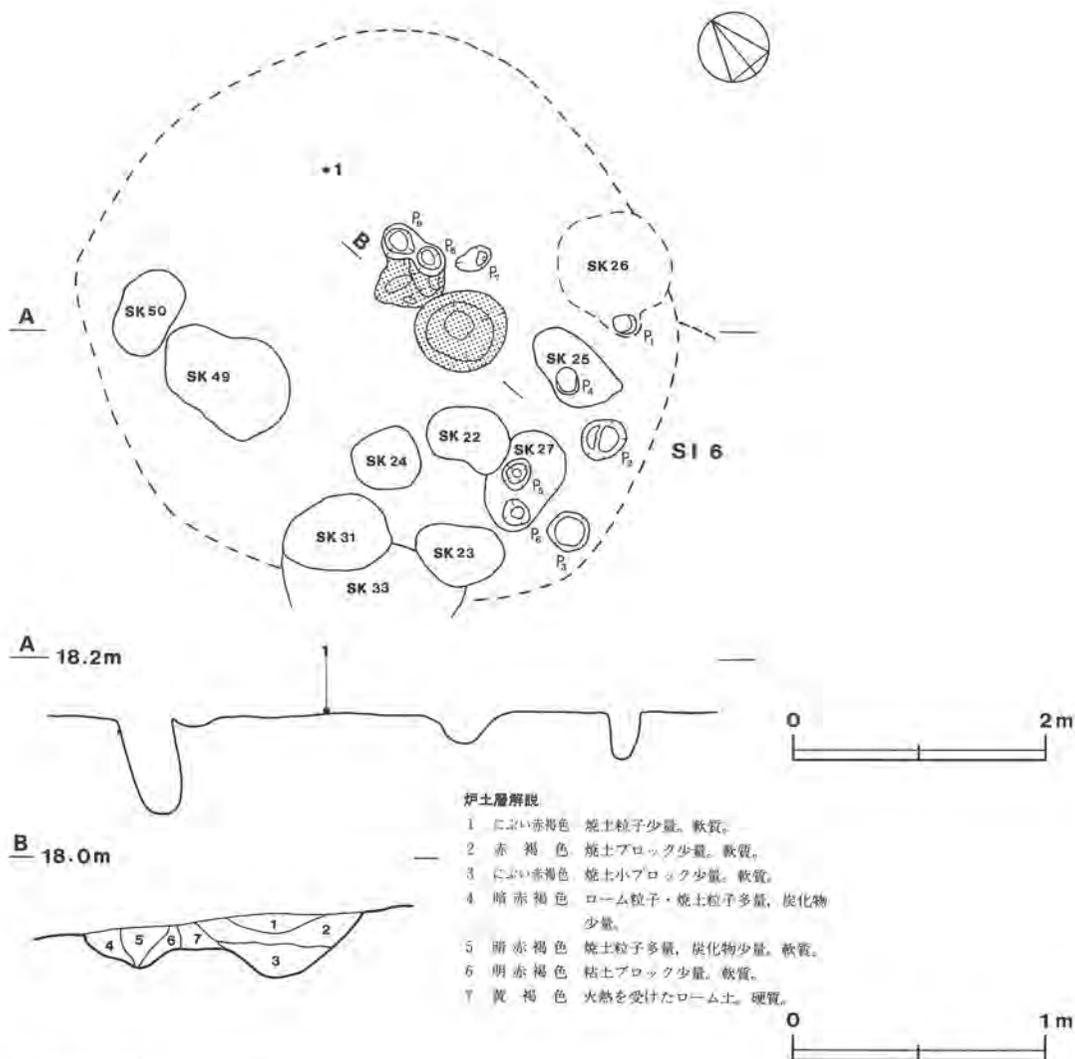
遺物 覆土の下層から上層にかけては、縄文式土器片（深鉢1，細片31点）が出土している。第25図1の深鉢形土器片は、中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第6号住居跡、第22～25・27・31・33・49・50号土坑より古く、第26号土坑より新しい時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から、縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

第25図2～5は、第7号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。2～5は炉直上から出土している。2は口縁部で、口唇部に横位の沈線が巡り、横位回転の単節縄文LRを地文として沈線が曲線に施されている。3～5は胴部で、3は渦巻文が施されている。4は横位回転の単節縄文LRを地文として平行沈線が垂下している。5は無節縄文Lを地文として沈線が斜位に施されている。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	深鉢形土器 (堀ノ内)	A [27.7] B (24.4)	胴部下半欠損。胴部は外反して立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は波状口縁で、口縁上位には1条の沈線が横位に巡っている。胴部は、縄文を地文として、波頂部から4条の沈線を垂下して、文様体を区画している。区画内は、同心円状の渦巻文1個を中心に4条の沈線が放射状に入るモチーフと、同心円状の渦巻文3個を中心に2条の沈線が入組状に入るモチーフが施文されている。	砂粒 にふい黄橙色 良好	P17 PL9 60% 中央部床面



第24図 第7号住居跡実測図

第8号住居跡（第26図）

位置 調査区の南東部，J5c₆区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は，第6号住居跡の東部に，北部は第17・28号土坑に，南西部では第12号土坑に掘り込まれている。さらに，本跡の東部は，第9号住居跡の西部と重複している。

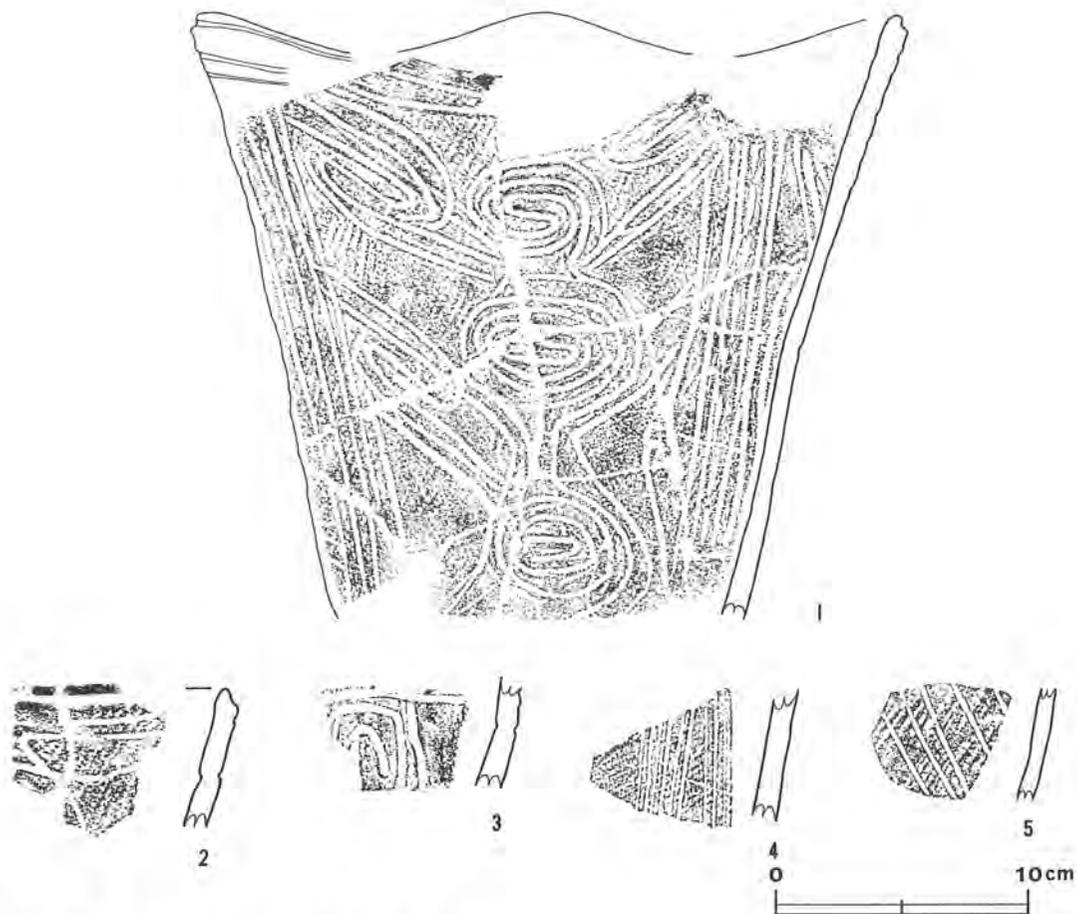
規模と平面形 長径 [4.91] m，短径 [4.67] mの不整形円形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-67°-E]

壁 他の遺構に削平され，確認することができなかった。

床 全体的に平坦で軟らかいが，炉周辺は，硬く踏み固められている。

ピット 9か所 (P₁~P₉) 検出されている。P₁~P₆は，径21~78cmの円形を呈し，深さ43~63cm



第25図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

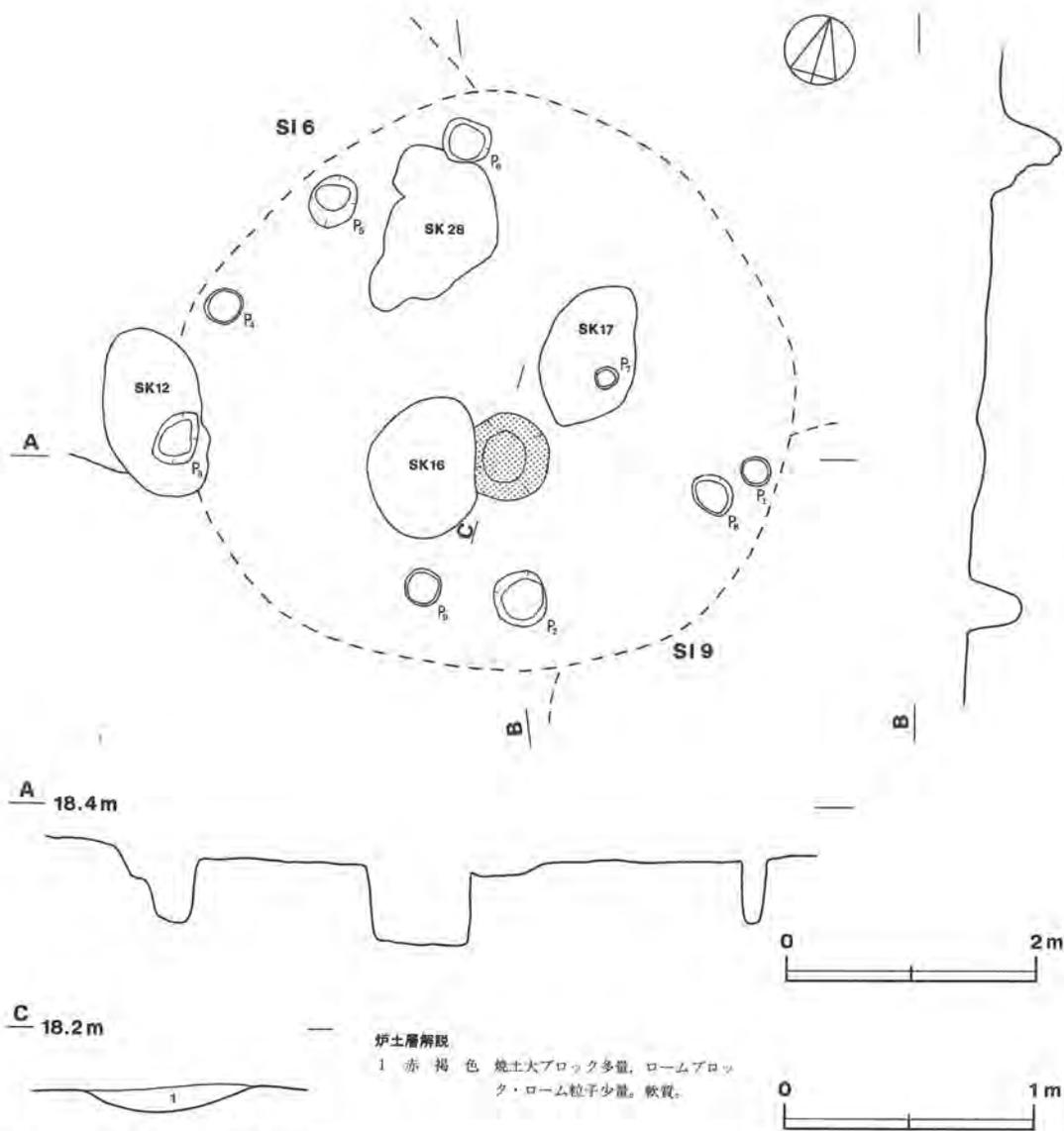
で、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₇・P₈は、径17・28cm、深さ64・16cmで、性格は不明である。

炉 床中央部から南東寄りに検出されている。径70cmの円形を呈し、床を8cm程掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

覆土 不明。

遺物 縄文式土器片（細片2点）が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第6号住居跡、第12・16・17・28号土坑より古い時期に構築されている。第9号住居跡との新旧関係は、不明である。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。



第26図 第8号住居跡実測図

第9号住居跡 (第27図)

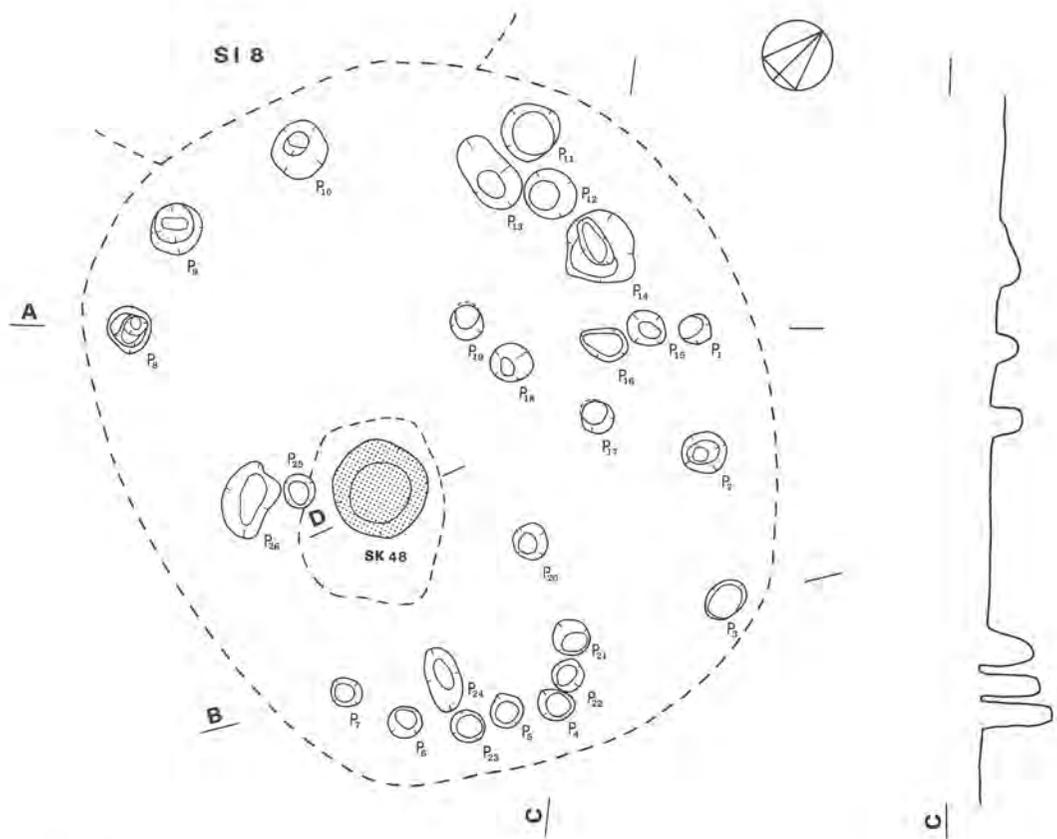
位置 調査区の南東部、J5d₇区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は、第8号住居跡の東部と重複している。本跡の中央部は、第48号土坑を掘り込んでいる。

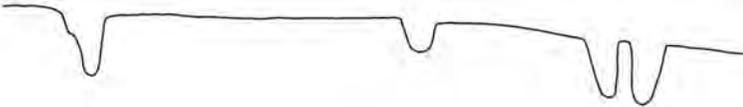
規模と平面形 長径 [5.95] m, 短径 [5.40] mを呈する不整形円形と推定される。

主軸方向 [N-29°-W]

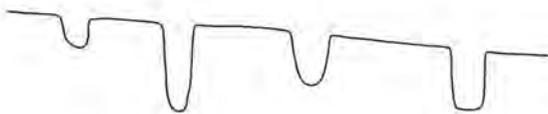
壁 攪乱により、壁の立ち上がりを確認することができない。



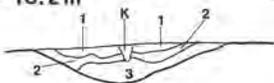
A 18.2 m



B



D 18.2 m



炉土層解説

- 1 褐色 炭土粒子・炭化物少量。礫まり有り。
- 2 赤褐色 炭化物多量、ローム粒子少量。軟質。
- 3 明赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量。軟質。



第27図 第9号住居跡実測図

床 全体的に平坦であるが、炉周辺は少し凹凸があり、踏み固められ硬い

ピット 26か所 (P₁~P₂₆) 検出されている。P₁~P₁₄は、径25~48cmの円形を呈し、深さ24~64cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₁₅~P₂₆は、径26~63cm、深さ17~64cmで、性格は不明である。

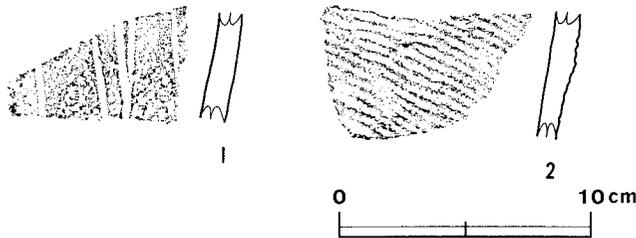
炉 中央部から南寄りに検出されている。径76cmの円形を呈し、床を約14cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

覆土 不明。

遺物 縄文式土器片 (細片26点) が、炉直上から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第48号土坑より新しい時期に構築されているが、第8号住居跡との新旧関係は不明である。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

第28図1・2は、第9号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1・2は炉直上から出土した胴部である。1は縄文を地文として沈線が垂下している。2は縦位回転の単節縄文LRが施されている。



第28図 第9号住居跡出土遺物拓影図

表3 原口遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	備考	
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]							壁高 (cm)
1-A	J5c ₀	[N-13°-W]	[不整円形]	[3.85] × [3.63]		13~18	平坦	10	1	自然	縄文式土器片16点。	第1-B号住居跡より古い。
1-B	J6e ₁	[N-25°-W]	[円形]	[4.20] × [3.94]		-	平坦	9	1	自然	縄文式土器片494点、土製円板1点、垂飾1点、獣骨片3点、貝、石鏃1点。	第1-A号住居跡より新しい。
2-A	J5b ₃	[N-36°-W]	[不整円形]	[3.62] × [3.36]		-	平坦	9	1	-	縄文式土器細片。	第2-B号住居跡より古い。
2-B	J5b ₃	[N-47°-E]	[楕円形]	[5.60] × [4.37]		6~10	平坦	21	1	自然	縄文式土器片486点。	第2-A号住居跡より新しく、第10・56号土坑より古い。
3	J5b ₁	[N-66°-W]	[円形]	5.78 × [5.54]		3~11	平坦	12	1	自然	縄文式土器片514点、石器1点、石鏃1点。	第55号土坑より新しい。
4	J5c ₃	[N-27°-E]	[円形]	5.62 × [5.54]		5~43	平坦	7	1	自然	縄文式土器片2,143点、耳飾り1点、石器4点。	第5号住居跡より新しく、第18・37・46号土坑より古い。
5	J5c ₂	-	-	-		16~17	平坦	2	-	自然	縄文式土器片693点。	第4号住居跡より古い。
6	J5e ₃	[N-74°-W]	[不整円形]	[5.91] × [5.54]		11~22	平坦	14	1	自然	縄文式土器片606点、土製円板2点、石鏃1点。	第7-8号住居跡より新しく、第12-16-17-19-20-22-25-27-28-31-33号土坑より古い。
7	J5c ₃	[N-39°-W]	[不整円形]	[5.00] × [4.94]		-	平坦	9	2	-	縄文式土器片32点。	第6号住居跡・第22~25・33・49・50号土坑より古い。
8	J5c ₆	[N-67°-E]	[不整円形]	[4.91] × [4.67]		-	平坦	9	1	-	縄文式土器片2点。	第6号住居跡・第12-16-17-28号土坑より古い。第9号住居跡と重複。
9	J5d ₇	[N-29°-W]	[不整円形]	[5.95] × [5.40]		-	平坦	26	1	-	縄文式土器片26点。	第48号土坑より新しい。第8号住居跡と重複。

2 土 坑

当調査区からは、土坑が60基検出されている。形状や規模には、それぞれ差異が認められるものの、一部を除いては出土遺物が少なく、時期や性格について不明のものが多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物に特徴がある7基の土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表にまとめた。

第14号土坑（第30図）

位置 調査区の中央部から北東寄り、J5b₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.12m、短径1.65mの不整楕円形を呈し、深さ84cmである。

長径方向 N-46°-E

壁面 東側は、緩やかに外傾し、その他は外傾して立ち上がっている。

底面 やや凹凸。

覆土 攪乱が見られ、ローム粒子・小ブロック及び褐色のローム土を斑状に含み、人為堆積と思われる。

遺物 覆土上層から下層にかけては、縄文式土器片（蓋1、細片37点）が出土している。第34図1の土器の蓋が覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第18号土坑（第30図）

位置 調査区の南部、J5c₃区の第4号住居跡内に確認されている。

重複関係 本跡は、第4号住居跡の西部及び第37号土坑の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.27m、短径0.96mの楕円形を呈し、深さ52cmである。

長径方向 N-55°-W

壁面 ほぼ外傾して立ち上がっている。

底面 凹凸。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層及び底面からは、縄文式土器片（細片43点）が出土している。

所見 本跡は、第4号住居跡、第37号土坑より新しい時期に構築されている。出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第20号土坑（第30図）

位置 調査区の中央部からやや南東寄り、J5c₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部は、第6号住居跡の西部壁を、北部は、第6号住居跡及び第33号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.74m、短径1.42mの楕円形を呈し、深さ29cmである。

長径方向 N-81°-W

壁面 ほぼ外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土からは、縄文式土器片（蓋1、細片6点）が出土している。第34図2の土器の蓋片は、中央部の覆土上層から斜位の状態で出土している。

所見 本跡は、第6号住居跡、第33号土坑より新しい時期に構築されている。出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第35号土坑（第31図）

位置 調査区の西部、I4j7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径0.72m、短径0.62mの楕円形を呈し、深さ112cmである。

長径方向 N-65°-E

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 暗褐色土でローム小ブロックを含み軟らかいため、人為堆積と思われる。

遺物 底面から中層にかけては、縄文式土器片（細片53点）が出土している。第37図38の深鉢形土器片は、中央部の覆土中層から、第37図39の深鉢形土器片は、中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。さらに、下層から中層の覆土からはヤマトシジミ単一種の貝ブロックやその貝ブロック内からはハゼ科の魚骨やシカ・イノシシ等の獣骨も検出されている。

所見 本跡は、土坑内から地点貝塚が検出されている。出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第37号土坑（第30図）

位置 調査区の南部、J5c3区の第4号住居跡内に確認されている。

重複関係 本跡は、第4号住居跡の西部を掘り込み、北部は第18号土坑の南部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.07m、短径〔0.83m〕の楕円形を呈し、深さ38cmを測る。

長径方向 N-13°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦。底面の西部が厚さ約3～7cmの粘土で覆われて、やや締まっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土及び底面からは、縄文式土器片（深鉢3，浅鉢1，細片15点）が出土している。第34図6の深鉢形土器片は、中央部の底面から横位の状態で、第34図5の深鉢形土器の底部片は、正位の状態で中央部の底面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、第4号住居跡より新しく、第18号土坑より古い時期に構築されている。出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第38号土坑（第31図）

位置 調査区の中央部から北東より、J5a₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径0.57m，短径0.53mの円形を呈し、深さ34cmである。

長径方向 N-84°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状。

覆土 暗褐色土でローム小ブロック，ローム粒子を含み軟らかく、一時期に埋め戻した状態を示しているので人為堆積と思われる。

遺物 覆土からは、縄文式土器片（台付鉢1，細片33点）が出土している。第35図8の台付鉢形土器の台部は、中央部の覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉の土坑と考えられる。

第48号土坑（第32図）

位置 調査区の南東部、J5d₇区の第9号住居跡内に確認されている。

重複関係 本跡の上面には第9号住居跡が構築されている。

規模と平面形 長径1.46m，短径1.12mの楕円形を呈し、深さ88cmである。

長径方向 N-39°-W

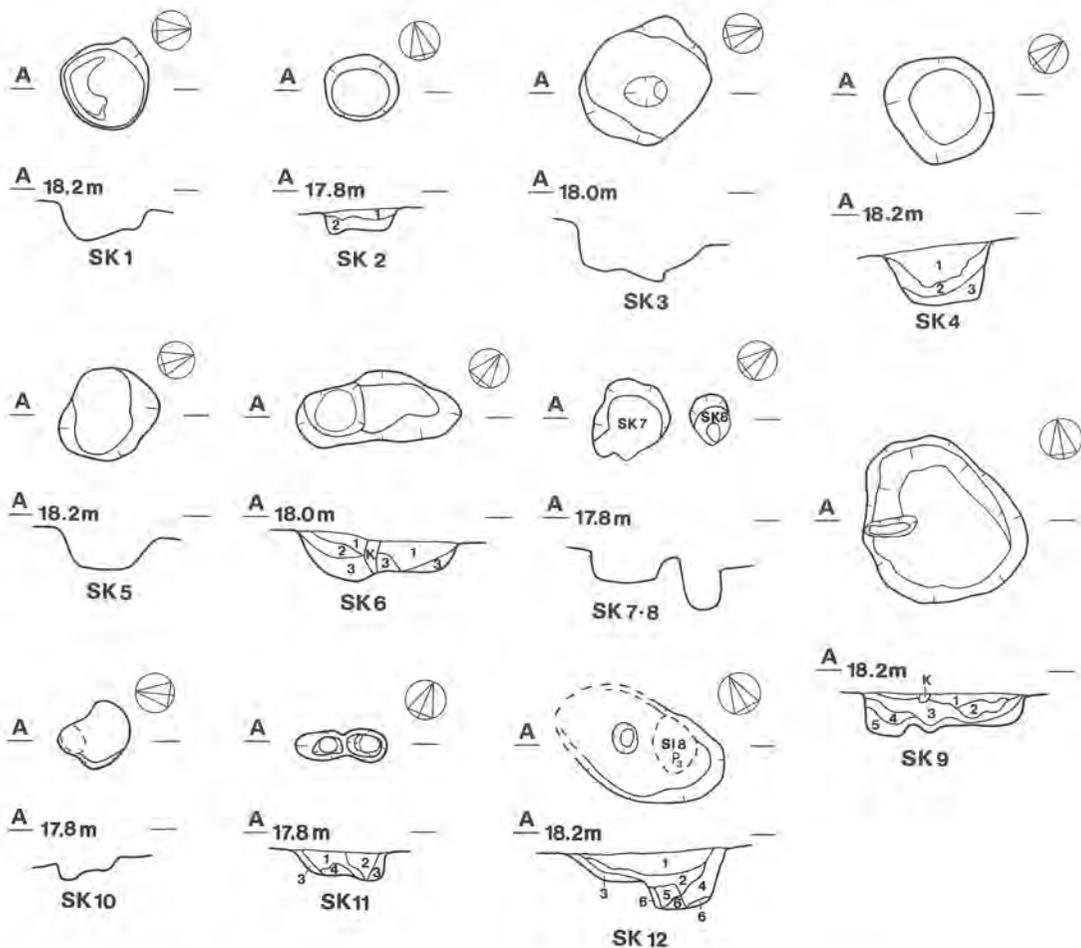
壁面 ローム土で締めりがあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 一部攪乱を受けているが、自然堆積と思われる。

遺物 覆土上層から下層にかけては、縄文式土器片（細片11点）が出土している。覆土中層にヤマトシジミの単一種の貝ブロックが出土している。

所見 本跡には、地点貝塚が検出されている。第9号住居跡より古い時期に構築され、出土遺物の特徴から、縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。



第2号土坑土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 2 明褐色 ロームブロック少量。硬質。

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ロームブロック少量。炭化物少量。縮まり有り。

第6号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。硬質。
- 2 明褐色 焼土粒子・粘土ブロック少量。軟質。
- 3 明褐色 ロームブロック少量。硬質。

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子多量。硬質。
- 2 褐色 焼土粒子多量。硬質。
- 3 明褐色 焼土粒子・炭化物多量。焼土ブロック少量。硬質。
- 4 明褐色 焼土粒子少量。硬質。
- 5 明褐色 ロームブロック少量。硬質。

第11号土坑土層解説

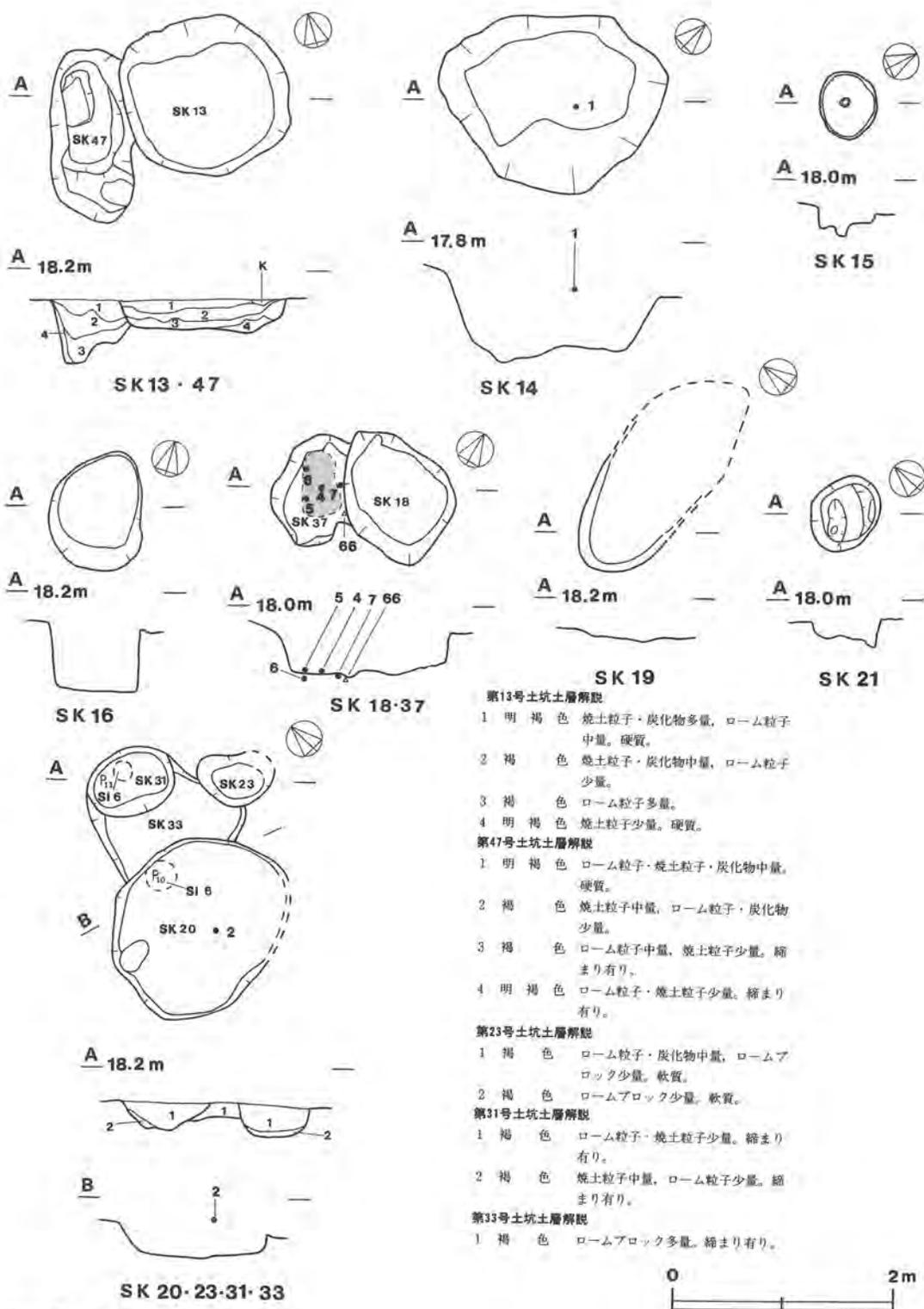
- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。硬質。
- 2 褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 明褐色 ロームブロック少量。硬質。
- 4 明褐色 ロームブロック少量。硬質。

第12号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量。焼土粒子・炭化物少量。
- 2 明褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。硬質。
- 3 明褐色 ローム粒子多量。焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 4 明褐色 焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 5 褐色 焼土粒子少量。硬質。
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量。硬質。



第29図 土坑実測図(1)



第30図 土坑実測図(2)

第13号土坑土層解説

- 1 明褐色 焼土粒子・炭化物多量，ローム粒子中量。硬質。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化物中量，ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 明褐色 焼土粒子少量。硬質。

第47号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量。硬質。
- 2 褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化物少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量。締まり有り。
- 4 明褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。締まり有り。

第23号土坑土層解説

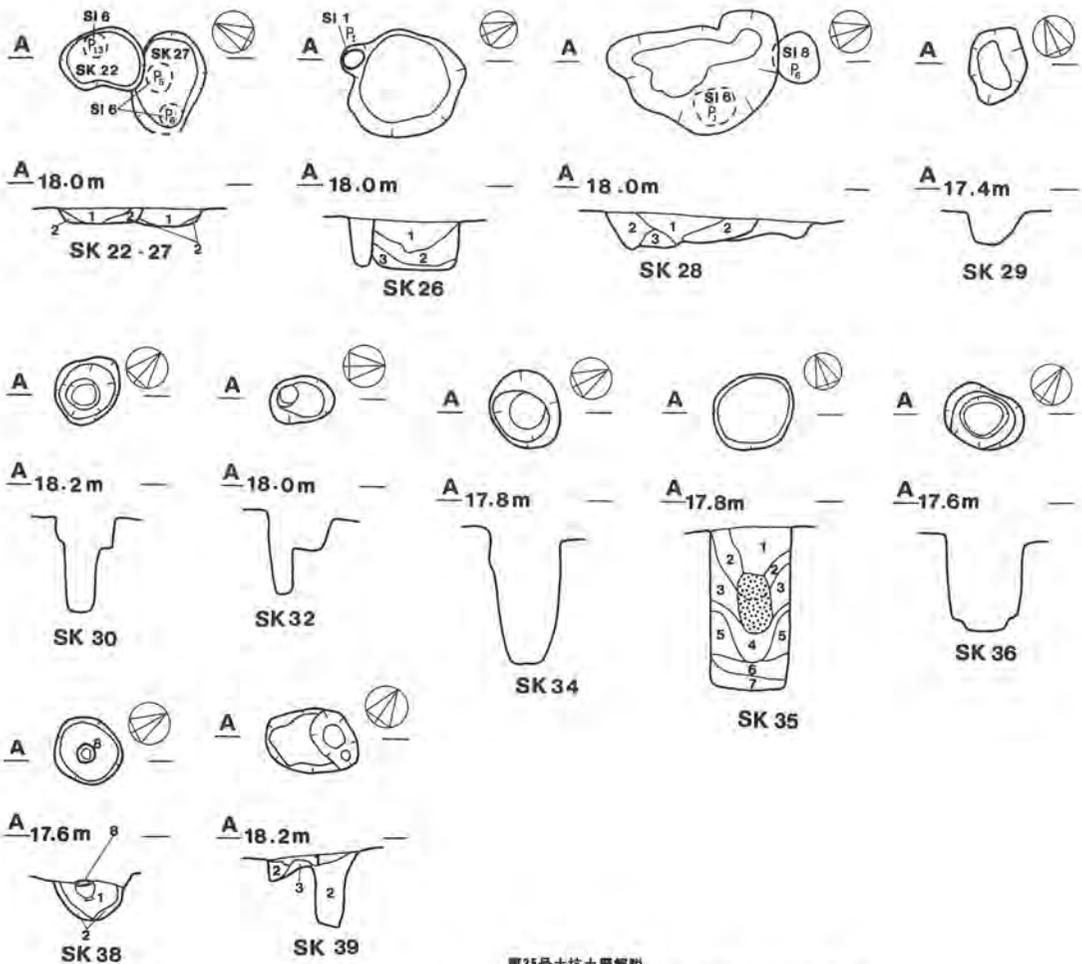
- 1 褐色 ローム粒子・炭化物中量，ロームブロック少量。軟質。
- 2 褐色 ロームブロック少量。軟質。

第31号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。締まり有り。
- 2 褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量。締まり有り。

第33号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量。締まり有り。



第22号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量。縮まり有り。
- 2 褐色 ロームブロック多量。

第27号土坑土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 2 褐色 ロームブロック少量。

第26号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。縮まり有り。
- 2 褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子少量。硬質。
- 3 褐色 ローム粒子・炭化物少量。軟質。

第28号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量。縮まり有り。
- 2 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ロームブロック少量。縮まり有り。

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量。炭化粒子中量。焼土粒子少量。軟質。
- 2 褐色 ロームブロック少量。焼土粒子・炭化粒子極微量。縮まり有り。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子極微量。軟質。
- 4 褐色 焼土粒子微量。軟質。
- 5 褐色 ローム粒子多量。焼土粒子少量。軟質。
- 6 褐色 ローム粒子少量。軟質。
- 7 褐色 ローム粒子少量。軟質。

第38号土坑土層解説

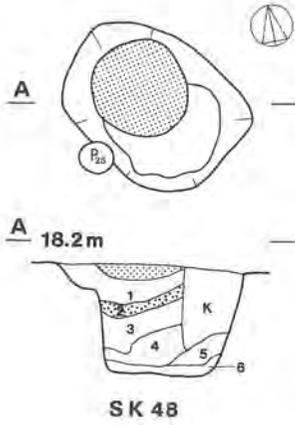
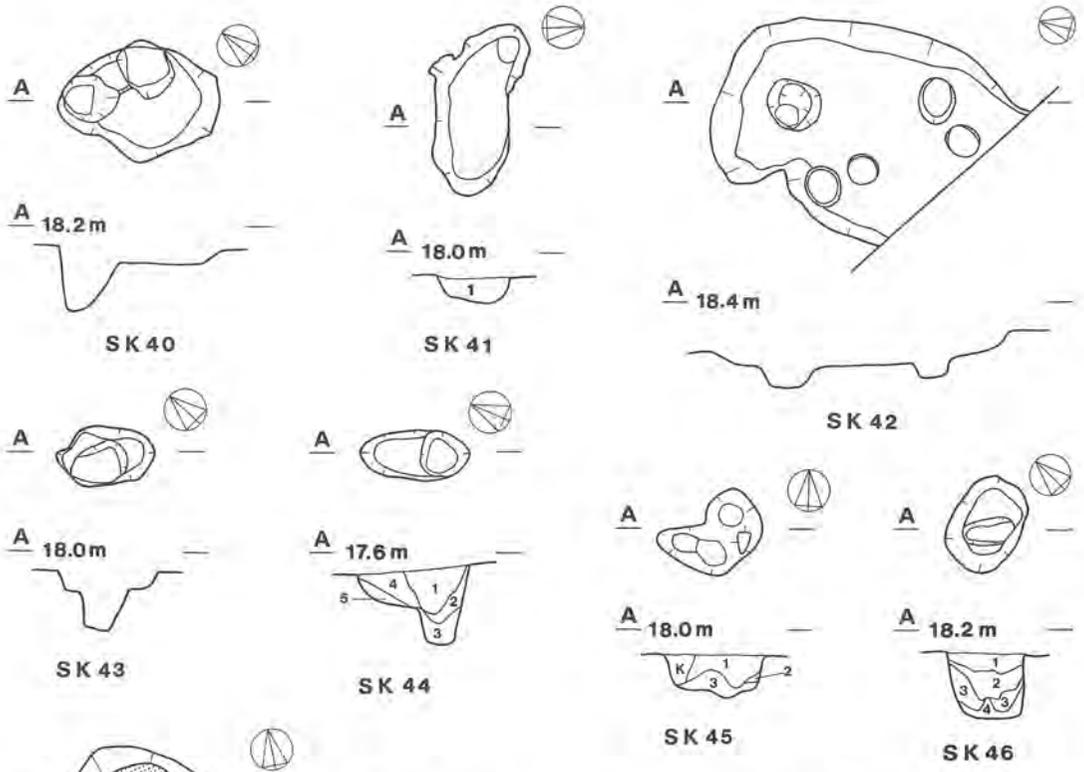
- 1 暗褐色 ローム粒子中量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子少量。軟質。

第39号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 焼土粒子極少量。軟質。



第31図 土坑実測図(3)



第41号土坑土層解説

1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量。縮まり有り。

第44号土坑土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。縮まり有り。
- 2 褐色 ローム粒子少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子少量。硬質。
- 4 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量。縮まり有り。
- 5 褐色 縮まり有り。

第45号土坑土層解説

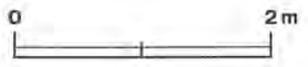
- 1 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量。縮まり有り。
- 2 明褐色 焼土粒子多量、炭化物少量。縮まり有り。
- 3 明褐色 焼土粒子・炭化物少量、ロームブロック極少量。縮まり有り。

第46号土坑土層解説

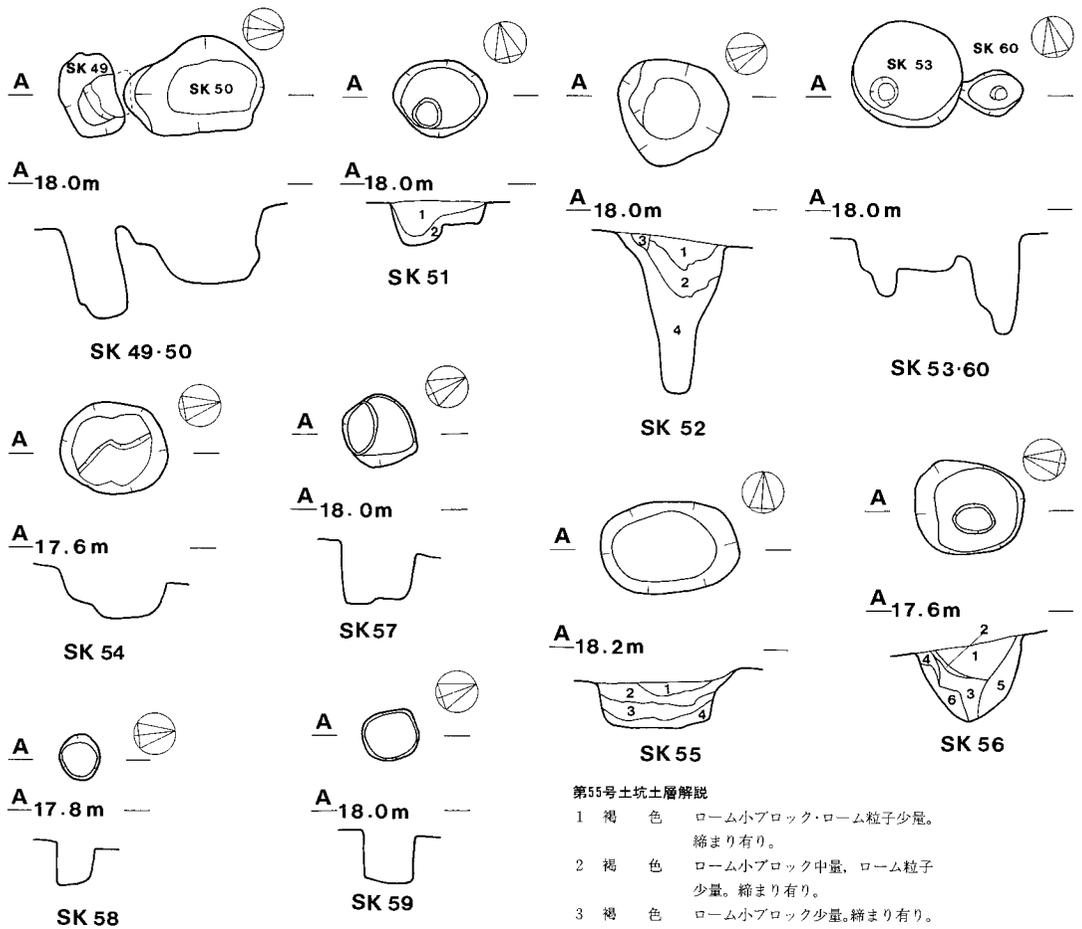
- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 2 明褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 明褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物極少量。硬質。
- 4 明褐色 ロームブロック・焼土粒子極少量。硬質。

第48号土坑土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、炭化物・炭化粒子中量、ロームブロック・ローム粒子・粘土少量。縮まり有り。
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・貝ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量。軟質。
- 3 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量、炭化物少量。縮まり有り。
- 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量。縮まり有り。
- 5 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量。縮まり有り。
- 6 泥い褐色 ロームブロック少量。軟質。



第32図 土坑実測図(4)



第51号土坑土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子多量。硬質。
- 2 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。

第52号土坑土層解説

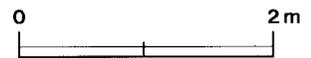
- 1 褐色 焼土ブロック中量、焼土粒子少量。硬質。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化物多量。縮まり有り。
- 3 におい褐色 焼土粒子少量。硬質。
- 4 褐色 焼土粒子少量。縮まり有り。

第55号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。
- 2 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ローム小ブロック少量。縮まり有り。
- 4 褐色 ローム粒子中量。縮まり有り。

第56号土坑土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・炭化物中量。縮まり有り。
- 2 褐色 焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 4 におい褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量。
- 5 におい褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。縮まり有り。
- 6 明褐色 炭化物極少量。縮まり有り。



第33図 土坑実測図(5)

土坑出土縄文式土器拓影図解説 (第36図10～第38図57)

10は第1号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、口縁部上位に微隆起線を横位にめぐらし、横位回転の単節縄文LRが施されている。

11は第3号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、沈線間に縦位回転の単節縄文RLが施されている。

12は第9号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、縦位回転の単節縄文RLを地文として、沈

線が垂下している。

13・14は第13号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、13は縦位回転の単節縄文RLを地文として、沈線を垂下し沈線間を磨消している。14は横位回転の単節縄文LRを地文として、半截竹管による沈線で区画し、区画内は蛇行沈線文が垂下している。

15～19は第14号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片である。15は横位回転の単節縄文LRを地文として、口縁部上位と中位に横走沈線が施されている。16は口縁部上位に棒状工具による刺突文が施され、沈線を垂下している。17は波状口縁部片で、斜位回転の単節縄文LRを地文として、波頂部から微隆起線を垂下させ、上端に刺突文を施している。18は口縁部上位に1条の沈線を巡らし、さらに沈線を垂下させている。19は縄文地文に沈線が4条横位に施されている。

20～22は第16号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。20・21は口縁部片で、20は横走沈線により口縁無文帯と頸部施文体に区画され、施文体には横位回転の単節縄文LRが施されている。21は口縁上位に横走沈線が巡り、横位回転の単節縄文RLを地文として、沈線が弧状に施されている。22は胴部片で、横位回転の単節縄文LRを地文として、渦巻文を施している。

23・24は第17号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、23は横位回転の単節縄文LRが全面に施されている。24は口縁部上位に微隆起帯を呈し、斜位回転の単節縄文LRが施されている。

25は第18号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、横位回転の単節縄文LRを地文として、斜位に平行沈線が施されている。

26・27は第20号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。26は波状口縁部片で、波頂部に突起を呈し、無文で横位に1条の沈線を巡らしている。27は胴部片で、横位回転の単節縄文LRを地文として、沈線が垂下している。

28は第22号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、弧状の沈線内は三角形の刺突文を有し、沈線が粗く施されている。

29は第26号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、口縁部上位には横位に1条の沈線が巡り、沈線内は斜位に短く沈線が施されている。

30～35は第28号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。30は波状口縁部片で、波頂部に小突起を呈し、口縁部中位に横走沈線が巡り、沈線内に対弧文が施されている。31は口縁部片で、横位回転の単節縄文RLを施し、口縁部上位に連続指頭圧文の隆帯を貼付している。32は口縁部片で、綾杉状に沈線が施されている。33は胴部片で、横位回転の単節縄文RLを地文として、胴部上位に横走沈線が2条巡っている。34は胴部片で、横位回転の単節縄文RLを地文として、横位に短く沈線が施され、連続指頭押圧文の隆帯が貼付されている。35は胴部片で、8本櫛歯状の流水文が施されている。

36は第32号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、口縁部上位に微隆起帯を施し、横位回

転の単節縄文LRを地文として、弧状に沈線が施されている。

37は第34号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、口縁部に隆帯を三角形に貼付し、下位に鋸歯状の沈線が施されている。

38・39は第35号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、38は無文で横走の沈線が施され、さらに縦位に粘土紐が貼付されている。口縁部内面は、横位回転の単節縄文LRが施され横位に深く沈線を巡らしている。39は口縁に刺突文や微隆起帯が施されている。

40は第37号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、横位回転の単節縄文LRを地文として、半截竹管により弧状文や蛇行文が施されている。

41は第38号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、胴部上位はキザミ目を有する微隆起線文が横位に2条施され、さらに微隆起線文上に小突起が貼付されている。胴部は粗くヘラナデ。

42～47は第39号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。42は胴部片で、縦位回転の単節縄文RLを地文として沈線が斜位に施されている。43は波状口縁部片で、口縁部上位に1条の沈線を深く横位に巡らし、波頂下の沈線内に刺突文が入り、以下全面に斜位回転の単節縄文LRが施されている。44は口縁部片で、微隆起線により口縁無文体と胴部施文体に区画され、胴部は縦位回転の単節縄文RLを地文として沈線が逆U字形に垂下し、沈線間は磨消している。45は波状口縁部片で、横位回転の単節縄文LRを地文とし、口縁上位に沈線が1条横位に巡り、波頂部下に刺突及び沈線が弧状に垂下している。46は波状口縁部で、斜位回転の単節縄文LRを地文として、口縁上位に横位の沈線が巡っている。さらに2条の沈線が楕円形に描かれ、沈線内にはキザミ目の隆帯が横位に施されている。47は胴部片で、横位回転の単節縄文RLを地文に渦巻文が施されている。

48～51は第40号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片と胴部片である。48～50は口縁部片で、48は口縁上位に微隆起線を横位に巡らし、以下横位回転の単節縄文RLが施されている。49は口唇部にキザミ目を呈し、横位回転の単節縄文LRを地文とし、横位に沈線が施され、沈線間は磨消されており縄文帯に対弧文や円形の刺突が施文されている。50は口縁部上位に1条の沈線が横位に巡り、横位回転の単節縄文LRが施されている。51は横位回転の単節縄文RLを地文として、横位の沈線が巡り、沈線間には磨消又は斜位の沈線が施されている。

52は第41号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、斜位に沈線を施し、さらに横位に平行沈線を描き、沈線内にキザミ目を加えている。

53・54は第42号から出土した縄文式土器の口縁部片と胴部片である。53は横位の沈線により口縁無文体と胴部施文体に区画し、胴部は横位沈線間に円形の刺突が2列に施されている。54は横位回転の単節縄文LRを地文として、蛇行文を垂下させている。

55は第51号土坑から出土した縄文式土器の口縁部片で、口縁上位は微隆起帯で円形の刺突が施され、以下縄文地文に横位及び斜位に沈線が施されている。

56は第54号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、縦位回転の単節縄文RLを地文として、曲線の沈線を描いている。

57は第58号土坑から出土した縄文式土器の胴部片で、沈線が垂下している。

第14号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	蓋 (堀ノ内)	A 7.8	円形を呈し、断面形は浅い半円状の膨らみをもつ。外面中央部に環状把手がつくほかは、無文でナデが施されている。内面は中央部が凹む形状を示し、無文でナデが施されている。	砂粒 にふい 橙色 普通	P18 P L10 90% 覆土下層
		B 4.8			
		F 3.9			
		G 1.8			

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図59	土器片 錘	6.2	4.7	0.6	—	28.1	100	覆土	DP7
60	円板	5.7	(3.2)	0.7	—	(16.8)	50	覆土上層	DP8

第20号土坑出土遺物観察表

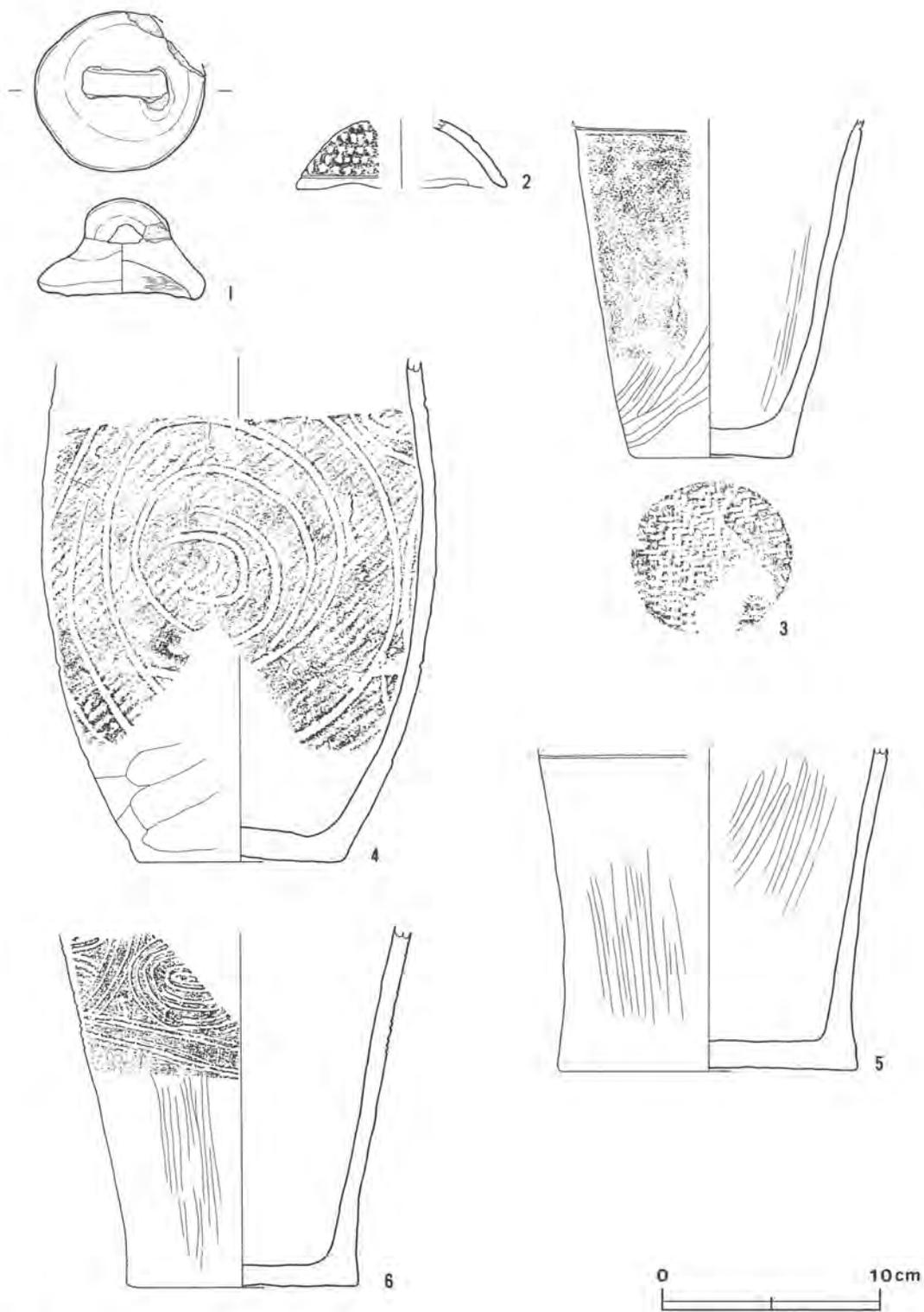
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 2	蓋 (三十稲場)	A [9.6] B (3.2)	蓋部片。円形を呈し、断面形は浅い半円状の膨らみをもつ。外面下端の沈線交点に円形の貼付文をもち、その中央に刺突を有す。内面ナデ。	砂粒・スコリア にふい 橙色 普通	P30 P L10 15% 覆土上層

第30号土坑出土遺物観察表

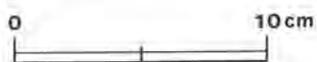
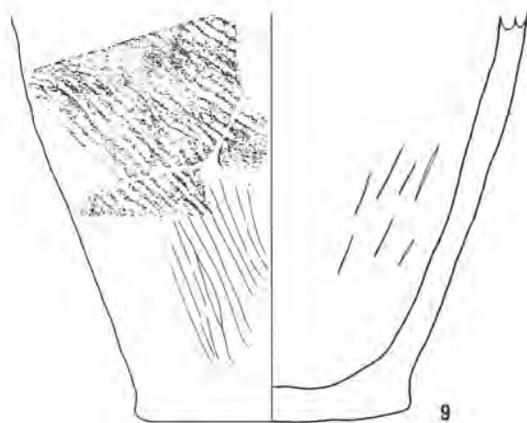
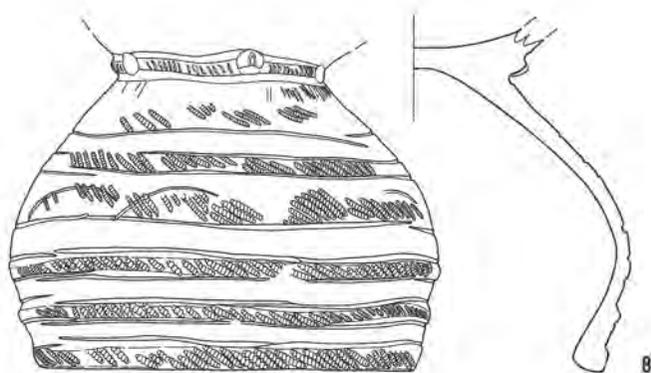
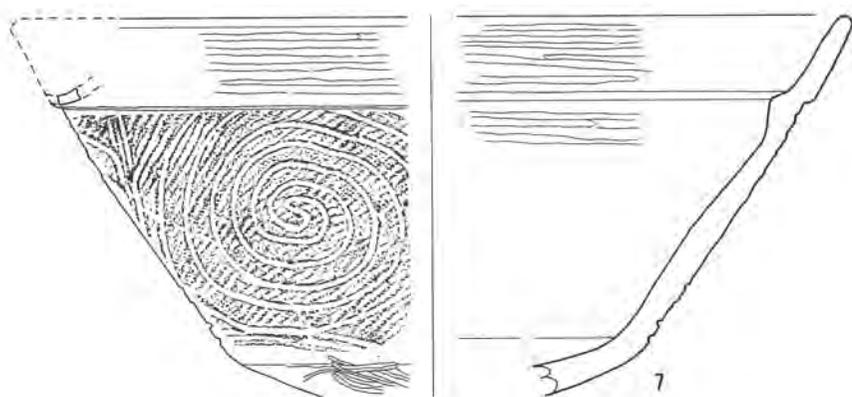
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 3	深鉢形土器 (加曾利B)	B (15.8)	胴部上半欠損。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は縄文地文として、胴部下位に沈線が横位に巡っている。沈線下は磨消している。底部網代痕有り。	砂粒・スコリア にふい 橙色 普通	P19 P L10 30% 覆土中層
		C 7.5			

第37号土坑出土遺物観察表

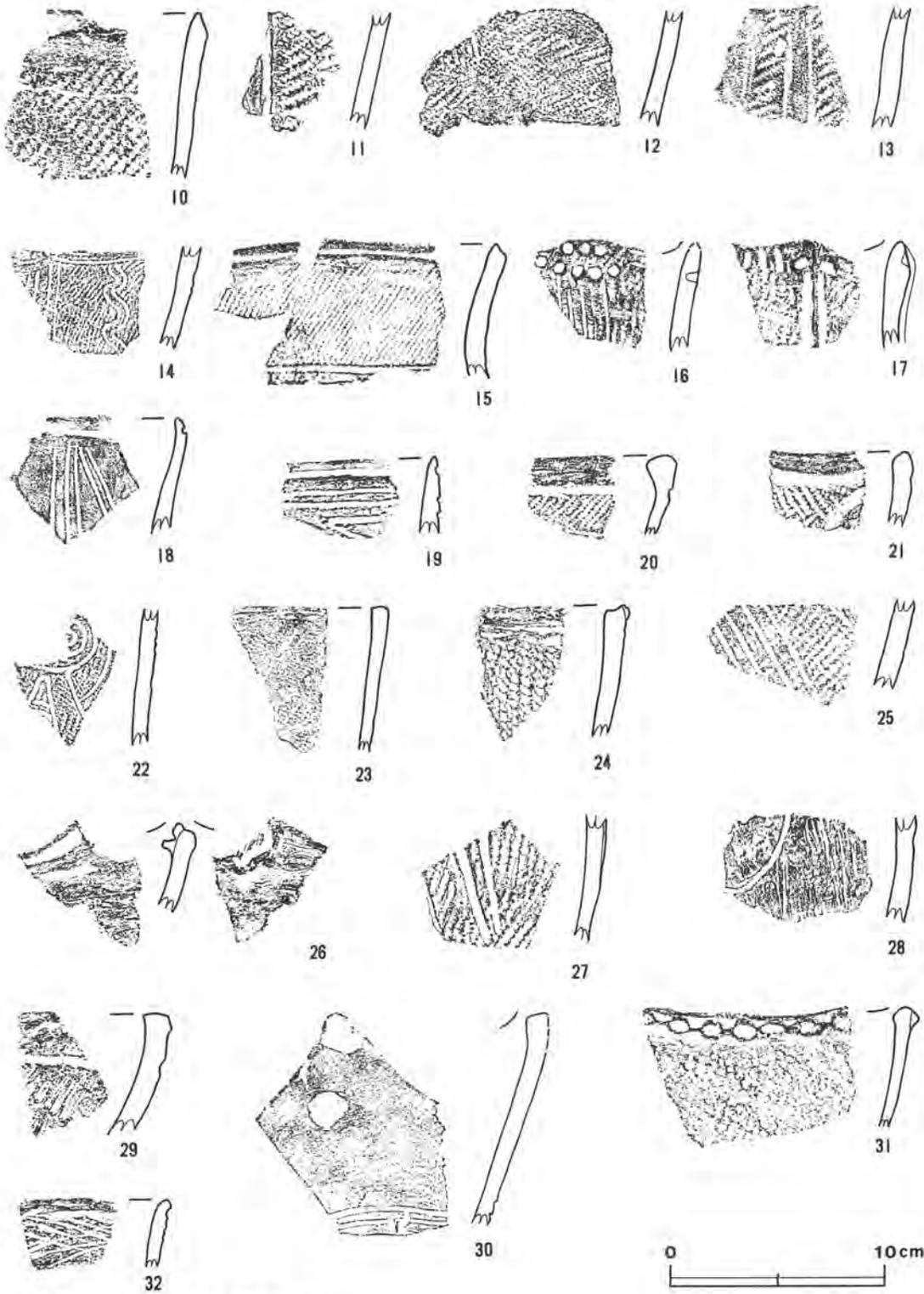
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第34図 4	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (23.1)	口縁部欠損。平底。胴部は底部から内傾して立ち上がる。無節の縄文を地文として、沈線による渦巻文が施されている。胴部下位はヘラ削り。	砂粒・礫・スコリア にふい 橙色 普通	P20 P L10 50% 底面
		C 9.4			
5	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (15.0)	胴部上半欠損。平底。胴部は底部からやや外反して立ち上がり、底端部は張り出している。ヘラ削り後磨き。	砂粒・礫・スコリア ・雲母 橙色 普通	P21 P L10 15% 底面
		C 13.8			
6	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (16.8)	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部は、縄文を地文とし、2条の沈線で区画し、区画内を渦巻文や曲線をモチーフとしている。胴部下半はヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P22 P L10 20% 中央部底面
		C 10.6			
第35図 7	鉢形土器 (堀ノ内)	A [33.4]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は底部からやや内傾して立ち上がり、その後外傾して口縁部にいたる。口縁部は無文帯で内面に稜をもつ。胴部は横位回転の単節縄文LRを地文として、胴部上位と下位を2条の横位沈線で区画し、さらに縦位の2条の沈線で区画し、その中に渦巻文を描いている。	砂粒・スコリア・ 雲母 にふい 赤褐色 良好	P23 PL10 20% 底面
		B (15.4)			



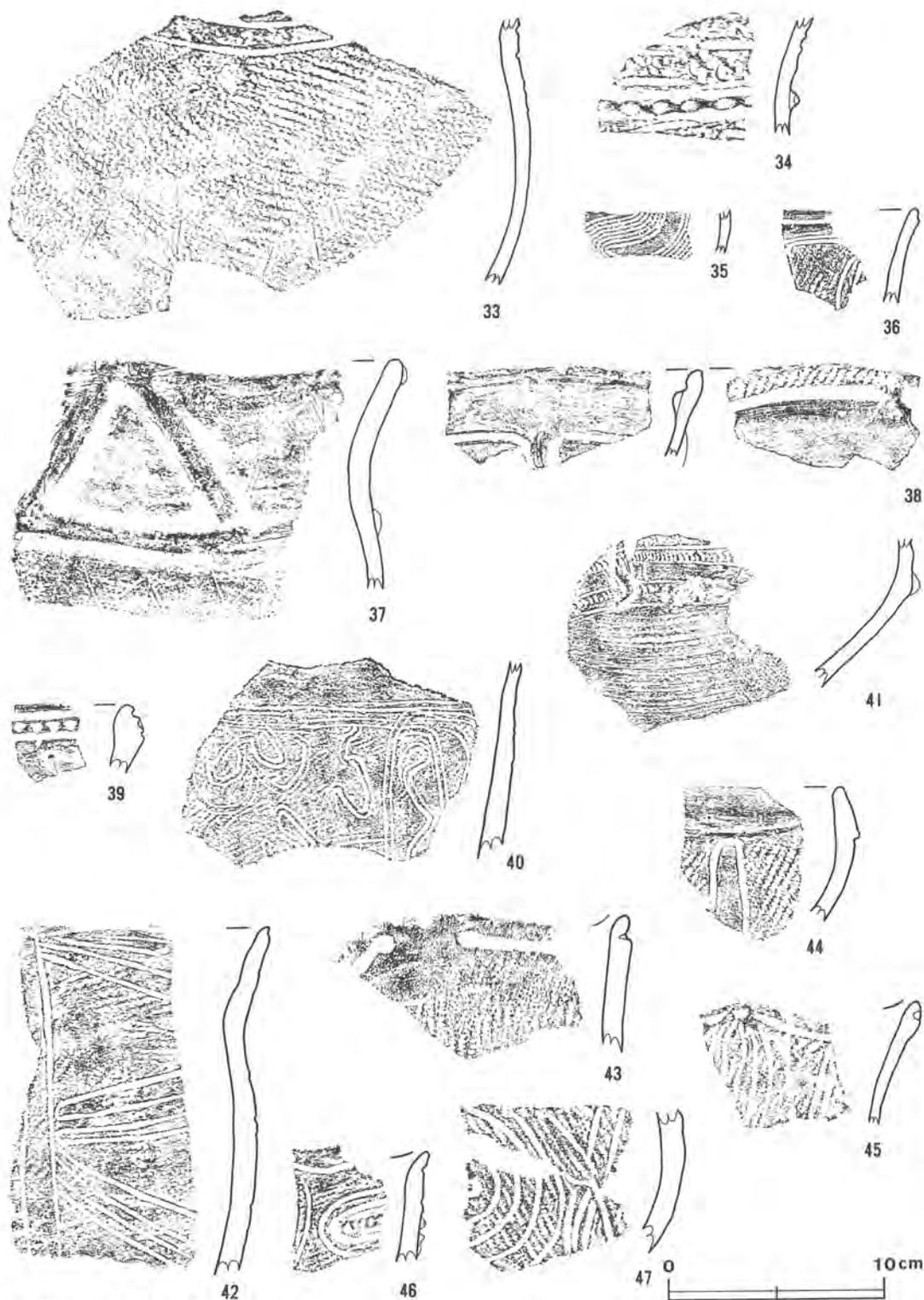
第34图 土坑出土遗物实测图(1)



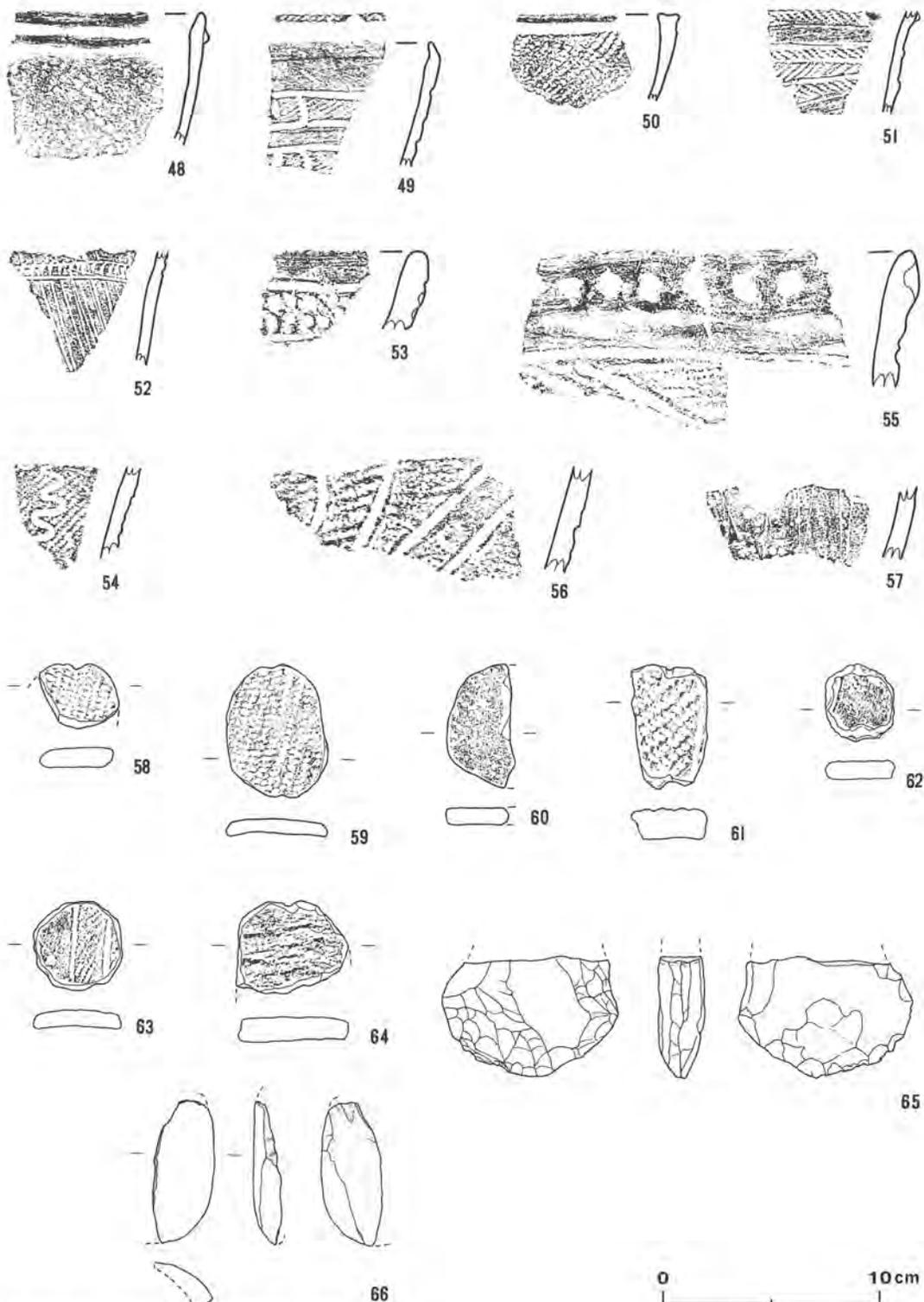
第35图 土坑出土遺物実測図(2)



第36图 土坑出土遗物拓影图(3)



第37图 土坑出土遗物拓影图(4)



第38图 土坑出土遗迹物实测·拓影图(5)

第37号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第38図 66	磨製石斧	(6.7)	(2.9)	(1.4)	(31.8)	角閃片岩	底 面	Q10

第38号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第35図 8	台付土器 (安行)	B (13.7) C 14.8	台部片。台部は 状を呈し、台部底面は粗くザラザラしている。台部上半は連弧文に磨消縄文を施している。台部下半は横位回転の単節縄文RLを3段の隆起帯に配している。鉢部と台部の接合部にキザミ目と小突起を有している。内面は粗いヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P24 20% 中央部覆土上層

第39号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第35図 9	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (16.4) C 10.8	胴部上半欠損。平底。胴部は底部からやや内彎気味に立ち上がり底端部は張り出す。無節縄文が施され、胴部下半へラ削り後磨き。	砂粒・スコリア・雲母 淡橙色 普通	P25 P L10 40% 覆土上層

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図62	円 板	(3.6)	(3.2)	0.9	—	(13.4)	90	覆 土	DP10
63	円 板	4.2	4.1	0.9	—	16.7	100	覆 土	DP11

第12号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図58	土器片錘	(3.0)	(3.7)	1.0	—	(11.3)	25	覆 土	DP6

第21号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図61	土器片錘	6.8	(3.5)	1.4	—	(35.7)	80	覆 土	DP9

第47号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図64	土器片錘	(4.4)	5.2	1.2	—	(29.5)	50	覆 土	DP12

第9号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第38図65	打製石斧	(5.7)	8.2	2.1	(112.6)	安山岩	覆 土	Q9 分銅型

表4 原口遺跡土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)						
1	J4b ₆	N-66°-W	不整円形	0.75	0.73	30	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片2点。		第29図
2	J4a ₆	N-48°-W	円形	0.58	0.54	20	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片10点。		"
3	J5a ₁	N-39°-W	不整円形	1.06	0.94	49	緩斜	凹凸	人為	縄文式土器片3点。		"
4	J4b ₆	N-61°-E	不整円形	0.90	0.87	50	外傾	平坦	自然	縄文式土器片8点。		"
5	J5b ₁	N-1°-W	不定形	0.84	0.73	34	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片10点。		"
6	J5b ₂	N-47°-E	不整楕円形	1.31	0.57	43	外傾	皿状	人為	縄文式土器片7点。		"
7	J5a ₂	N-7°-W	不整楕円形	0.71	0.58	25	外傾	平坦	自然	縄文式土器片12点。		"
8	J5a ₂	N-66°-W	不整楕円形	0.39	0.31	41	外傾	皿状	自然			"
9	J5c ₂	N-26°-W	楕円形	1.43	1.20	32	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片19点, 石器1点, 石1点。		"
10	J5a ₃	N-18°-W	不定形	0.58	0.51	17	外傾	凹凸	人為	石1点。	第2号住居跡より新しい。	"
11	J4a ₆	N-67°-E	長楕円形	0.73	0.27	43	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片3点。		"
12	J5d ₅	[N-31°-W]	[楕円形]	[1.41]	0.78	40	外傾	平坦	人為	縄文式土器片21点, 土器片鏝1点。	第6-8号住居跡より新しい。	"
13	J5c ₄	N-45°-W	円形	1.65	1.52	34	外傾	平坦	自然	縄文式土器片110点, 石2点。		第30図
14	J5b ₁	N-46°-E	不整楕円形	2.12	1.65	84	緩斜	凹凸	人為	縄文式土器片37点, 土製円板2点, 蓋1点。	縄文時代後期前葉。	"
15	J4a ₉	N-53°-W	楕円形	0.63	0.51	27	垂直	凹凸	自然			"
16	J5d ₆	N-0°	不整楕円形	1.18	0.92	64	垂直	平坦	自然	縄文式土器片48点。	第6-8号住居跡より新しい。	"
17	J5c ₅	N-9°-E	楕円形	1.23	0.76	66	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片18点, 石2点。	第6-8号住居跡より新しい。	"
18	J5c ₃	N-55°-W	楕円形	1.27	0.96	52	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片43点。	第4号住居跡・第37号土坑より新しい。縄文時代後期前葉。	第30図
19	J5c ₅	[N-85°-W]	[長楕円形]	[2.19]	[1.25]	11	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片6点。	第6号住居跡より新しい。	"
20	J5e ₄	N-81°-W	楕円形	1.74	1.42	29	外傾	平坦	自然	縄文式土器片6点, 蓋1点。	第6号住居跡・第3号土坑より新しい。縄文時代後期前葉。	"
21	J5b ₄	N-73°-E	楕円形	0.75	0.60	27	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片83点, 土器片鏝1点, 石1点。		"
22	J5c ₅	N-25°-W	不整楕円形	0.68	0.49	16	外傾	平坦	自然	縄文式土器片6点。	第6-7号住居跡・第27号土坑より新しい。	第31図
23	J5c ₅	[N-44°-W]	[楕円形]	[0.68]	0.48	24	外傾	平坦	人為		第6-7号住居跡・第33号土坑より新しい。	第30図
24	J5c ₅	N-40°-W	不整円形	0.55	0.51	46	垂直	凹凸	自然		第6-7号住居跡より新しい。	"
25	J5c ₅	N-4°-E	不整楕円形	0.75	0.49	20	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片3点。	第6-7号住居跡より新しい。	"
26	J5c ₅	N-30°-E	不整円形	1.00	0.90	42	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片29点。	第6-7号住居跡より新しい。	第31図
27	J5c ₅	[N-65°-E]	[楕円形]	[0.82]	[0.58]	21	外傾	平坦	—	縄文式土器片1点。	第6-7号住居跡より新しく, 第22号土坑より古い。	"
28	J5c ₆	N-9°-W	不定形	1.35	0.89	22	緩斜	凹凸	人為	縄文式土器片59点。	第6-8号住居跡より新しい。	"
29	J5a ₄	N-38°-E	楕円形	0.65	0.46	25	外傾	皿状	自然			"
30	J5b ₂	N-6°-W	楕円形	0.61	0.49	77	垂直	凹凸	自然	縄文式土器片20点。		"
31	J5c ₅	N-48°-W	楕円形	0.72	0.60	30	外傾	平坦	自然		第6-7号住居跡・第33号土坑より新しい。	第30図
32	J5b ₁	N-7°-W	楕円形	0.52	0.38	68	垂直	凹凸	人為	縄文式土器片20点。		第31図
33	J5c ₅	N-20°-E	[不定形]	[1.47]	[1.36]	13	—	平坦	人為	縄文式土器片1点。	第6-7号住居跡より新しく, 第20-23:31号土坑より古い。	第30図
34	I4j ₇	N-83°-E	円形	0.64	0.55	110	垂直	平坦	自然	縄文式土器片20点。		第31図
35	I4j ₇	N-65°-E	楕円形	0.72	0.62	112	垂直	平坦	人為	縄文式土器片53点, 獣骨片3点, 自然遺物(貝・魚骨)。	縄文時代後期前葉。地点貝塚。	"
36	I4j ₇	N-0°	楕円形	0.64	0.48	83	垂直	凹凸	人為	縄文式土器片94点。		"
37	J5c ₃	N-13°-W	楕円形	1.07	[0.83]	38	垂直	平坦	自然	縄文式土器片19点, 石器1点。	第4号住居跡より新しく, 第18号土坑より古い。縄文時代後期前葉。	第30図
38	J5a ₆	N-84°-E	円形	0.57	0.53	34	外傾	皿状	人為	縄文式土器片34点。	縄文時代後期後葉。	第31図
39	J5b ₄	N-53°-E	楕円形	0.73	0.51	67	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片164点, 土製円板2点。		"
40	J5b ₂	N-42°-W	楕円形	1.29	0.98	58	垂直	凹凸	自然	縄文式土器片110点。		第32図
41	J5b ₃	N-70°-W	楕円形	1.41	0.65	34	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片68点。		"

42	J5c ₂	N-20°-E	[不定形]	(2.05)	1.74	66	緩斜	凹凸	人為	縄文式土器片25点。		〃
43	J5b ₃	N-65°-W	楕円形	0.80	0.49	48	外傾	凹凸	人為			〃
44	I4j ₈	N-25°-W	楕円形	0.87	0.40	62	垂直	凹凸	人為	縄文式土器片2点。		〃
45	J5b ₃	N-82°-E	不定形	0.85	0.63	56	外傾	凹凸	自然			〃
46	J5c ₁	N-73°-E	楕円形	0.77	0.55	53	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片7点。	第4号住居跡より新しい。	〃
47	J5c ₁	N-0°	[楕円形]	1.63	0.76	63	外傾	平坦	自然	縄文式土器片44点、土器片鏝1点。		第30図
48	J5d ₇	N-39°-W	楕円形	1.46	1.12	88	垂直	平坦	自然	縄文式土器片11点。貝。	第9号住居跡より古い。地点貝塚。縄文時代後期前葉。	第32図
49	J5b ₃	N-10°-W	楕円形	1.11	0.77	61	外傾	平坦	人為	縄文式土器片72点。		第33図
50	J5b ₃	N-67°-E	楕円形	0.70	0.47	74	垂直	皿状	自然			〃
51	J4a ₉	N-64°-W	楕円形	0.73	0.62	63	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片3点。		〃
52	J4a ₀	N-33°-W	不整形	0.89	0.89	130	外傾	皿状	自然	縄文式土器片7点。		〃
53	J4a ₀	N-30°-E	円形	0.86	0.84	46	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片1点。		〃
54	J5a ₂	N-15°-E	楕円形	0.86	0.71	41	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片2点。		〃
55	J5b ₁	N-87°-E	楕円形	1.11	0.74	41	外傾	平坦	人為		第3号住居跡より古い。	〃
56	J5a ₃	N-10°-W	楕円形	1.85	0.72	66	垂直	凹凸	自然		第2号住居跡より新しい。	〃
57	J4a ₈	N-42°-E	円形	0.62	0.57	50	垂直	凹凸	自然			〃
58	J4a ₈	N-87°-E	円形	0.38	0.32	35	垂直	平坦	自然			〃
59	J4a ₈	N-16°-E	円形	0.43	0.38	44	垂直	平坦	自然			〃
60	J4b ₀	N-11°-E	不整形楕円形	0.48	0.39	81	垂直	凹凸	人為			〃

3 遺構外出土遺物

当調査区からは、直接遺構には伴わない縄文式土器片や土製品・石製品等が少量出土している。ここではこれらの出土遺物のうち特徴的なものについて取り上げて記載する。

(1) 縄文式土器

出土した土器は、縄文時代後期の土器片である。縄文式土器を時期や特徴から第1～第3群に分類し記載する。

第1群 後期前葉の土器群 (第40図7～20・第41図21～25)

堀之内式の土器片である。7～6は一欄表に掲載した。7～17は口縁部で、7は横位回転の単節縄文LRを地文として、2本単位の沈線が菱形状ひ描かれている。8は縄文地文として弧状の沈線や蛇行文が垂下している。9は横位回転の単節縄文LRを地文として、口縁部上位に1条の沈線を横位に施し、さらに曲線や蛇行文が垂下している。10は口縁にキザミ目を有する微隆起帯を巡らし、横位回転の単節縄文RLが施されている。11は口縁部上位に微隆起帯を巡らし、横位回転の単節縄文LRを地文として、蛇行沈線文が垂下している。12は口縁に一条の沈線を巡らし、横位回転の単節縄文RLを地文として、弧状の沈線を施し、さらにキザミ目を有する隆帯を縦位に貼付している。13は口縁に一条の沈線を巡らし、斜位回転の単節縄文LRを地文として、沈線粗く垂下させている。14は波状口縁部で、口縁部上位に一条の沈線が巡り、4本の沈線を斜位に施し、上下に密に弧状の沈線が施されている。15は口唇部に小突起を有し1条の沈線が巡る。口縁上位に微隆起線が施され、縦位回転の単節縄文LRを地文として、沈線を斜位に施し沈線間を磨消している。16は波状口縁で、横位回転の単節縄文LRを地文として波頂部から沈線が斜位、縦位及び蛇行文が

施されている。波頂部は押圧され凹んでいる。17は波状口縁部で、縄文を地文として連続に渦巻文が縦に施されている。18は胴部で、縦位回転の単節縄文RLを地文として渦巻文が施されている。19は波状口縁部片で波頂部に突起をもち、縄文を地文として沈線を綾杉状に施し、キザミ目を呈する隆帯が縦位に貼付している。波頂部には単孔があり、突起の頂部に指頭押圧が見られる。20は口縁部で、深く横位の沈線を施し沈線内に不規則に円形の刺突が見られる。口唇部内面に円形の刺突が施されている。21は胴部で、縄文を地文として曲線による沈線が施されている。22は胴部で、横位回転の単節縄文RLを地文として曲線による沈線が施され、沈線間刺突が施されている。

23は波状口縁部で波頂部に小突起を有し、斜位回転の単節縄文RLが施されている。口縁部上位に単孔がある。24は口縁部で、横位回転の単節縄文LRを地文に横位に沈線を施し、口縁部上位を磨消し円形の刺突が平行に施されている。

25は注口土器で、胴部上位は横位回転の単節縄文LRを地文として、曲線による沈線が施されている。胴部下位はヘラ磨きである。

第2群 後期中葉の土器群 (第41図26～38・第42図39～41)

加曾利B式の土器片である。26～31は口縁部で、26は地文を縄文として、指頭押圧される隆起線が口縁にそって2条貼付されている。内面には2上の沈線が巡っている。27は横位に沈線を施し、沈線間にはキザミ目を有する。内面は丁寧な磨きである。28は縄文を地文として、指頭押圧による隆起線を口縁にそって巡らし、半截竹管による斜格子文が施されている。内面には3条の沈線が巡っている。29は縄文を地文として沈線が横位に6条施されている。内面は沈線が5条横位に巡っている。30は縄文を地文として、沈線が曲線に施され沈線間は磨消されている。31は口縁部中位にキザミ目をもつ隆起線を施し口縁無文体と胴部施文体に区画している。胴部は縄文を地文とし弧状に沈線を施し、弧状内は磨消されている。注口土器片と思われる。32～35は胴部で、32は横位回転の単節縄文LRを地文として沈線を施し、指頭押圧による隆起線を横位に貼付している。33は縄文を地文として横位に沈線が施されている。34は横位回転の単節縄文LRを地文として沈線が斜位に施されている。35は横位回転の単節縄文LRを地文として沈線が横位に入り、沈線内に刺突が施され、胴部上位は磨消されている。

36～41は口縁部で、36は縄文を地文とし口縁部中位に横位の沈線、弧状の沈線を施し沈線内は磨消され、沈線の集合部に対弧文が施されている。37は縄文を地文として2条の沈線が横位に施され沈線内に対弧文、沈線間に弧状の沈線を施し沈線内は磨消されている。煤、煮こぼれ痕付着。38は横位回転の単節縄文LRを地文として、沈線を横位に2条巡らし沈線間を磨消し、口縁上位の沈線下にキザミ目をもつ微隆起線を貼付している。39は縦位回転の単節縄文LRを地文として沈線を直線に施し沈線間を磨消している。40は口唇部にキザミ目をもち、口縁部下位に横位に平行の沈線を施している。41はキザミ目を口唇部にもち、突起を施し、口縁上位にキザミ目をもつ微隆

起線を口縁にそって巡らしている。突起部は深く沈線と円形の刺突が施されている。

第3群 後期後葉の土器群 (第42図42・43)

安行式の土器片である。42・43は口縁部で、42は口縁にそって縄文を施す隆起帯が巡っている。43は口縁にそって縄文を施す隆起帯が巡り、隆起帯の上下に刺突文が平行に施されている。

(2) 金属製品 (第43図55)

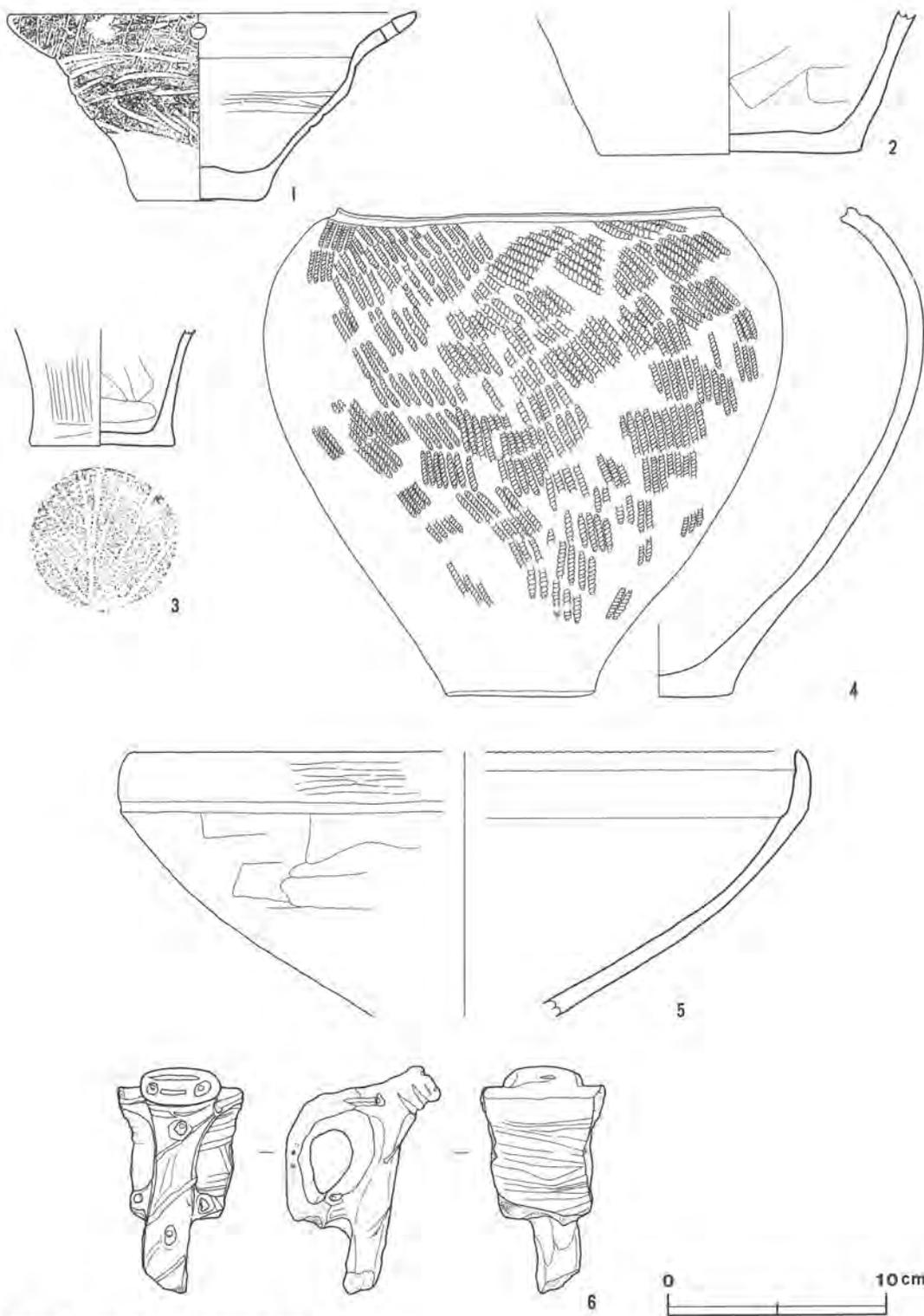
金属製品は煙管1点が出土している。調査区のD区から表採されたもので、雁首と吸口に分けられ、一連のものと思われる。雁首は、火皿部を残し、首部や羅字に近い部分は欠損している。火皿の口径は1.7cmである。吸口は現存長5.6cm、最大径1.3cmである。雁首と吸口はともに銅製である。季刊考古学第13号 古泉弘氏(東京都教育委員会)の編年によると、18世紀前半に位置づけられると思われる。

(3) 土製品・石製品 (第42図44～51)

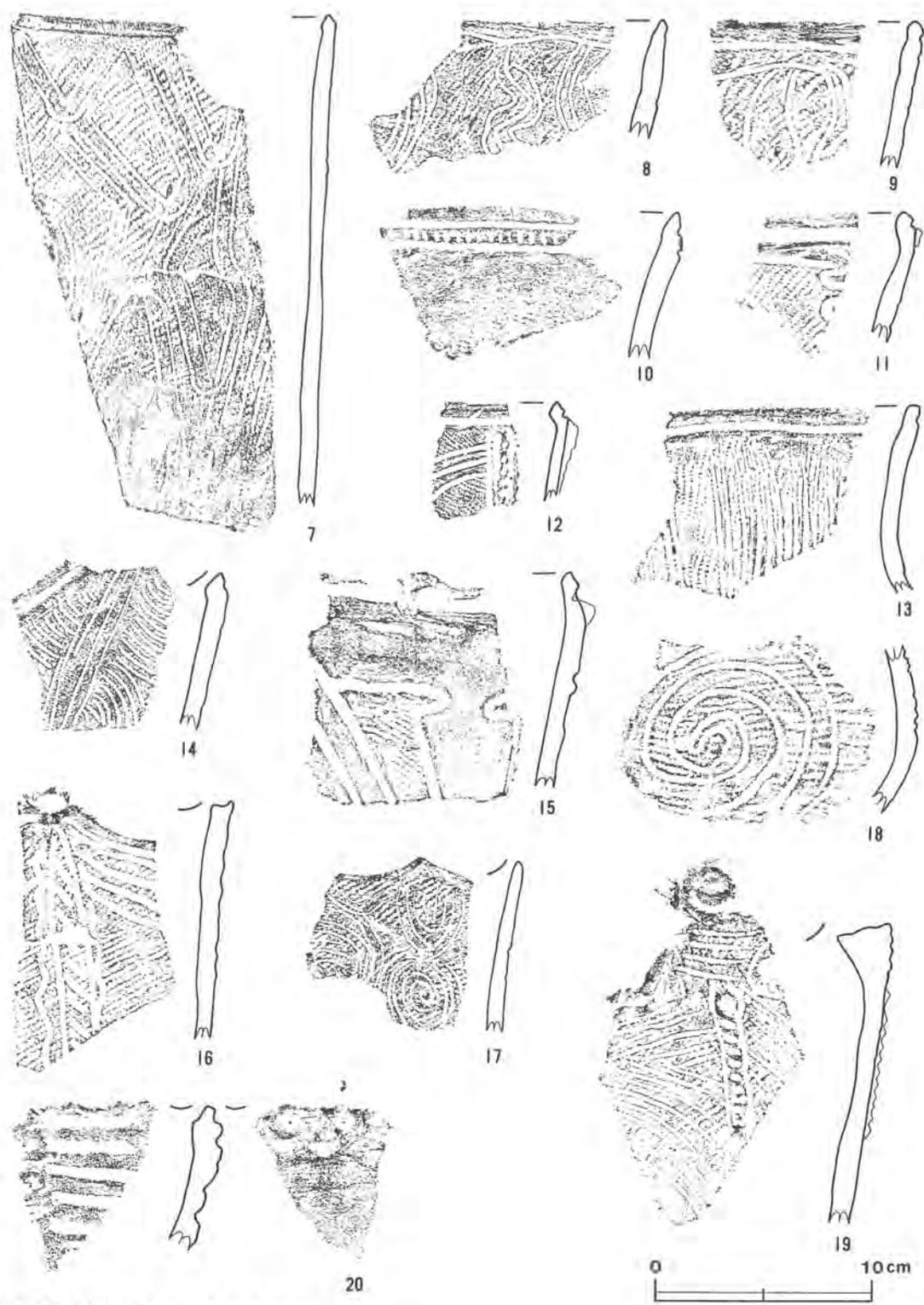
遺構外から出土した土製品(土製円板6点)・石製品(磨製石斧1点、凹石2点、石皿1点、浮子1点)を一覧表に掲載した。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	浅鉢形土器 (加曾利B)	A 18.8 B 8.2 C 5.7	胴部から口縁部にかけての一部欠損。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がり、胴部上位で内彎し、さらに口縁部にかけて大きく外反する。胴部中位に1条の沈線を巡らして区画し、区画内を綾杉状に沈線が粗く施文されている。口縁部に2孔が確認できる。	砂粒・長石・礫・スコリア・雲母 赤褐色 普通	P26 PL14 70% 粗製土器 表採
2	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (6.6) C [11.9]	底部片。平底。底部から外傾して立ち上がる。ヘラ削り後磨き。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P27 PL14 10% 表採
3	深鉢形土器 (堀ノ内)	B (5.4) C 6.6	底部片。底部から外反気味に立ち上がり、底端部は張り出している。底部木葉痕有り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P28 PL14 10% 表採
4	深鉢形土器 (加曾利B)	A 17.4 B 22.3 C 6.8	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり口縁部にいたる。口縁部上位には1条の沈線を巡らしている。胴部は横位回転の単節縄文RLを施している。胴部下位はヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P11 PL14 80% SI-4
5	浅鉢形土器 (加曾利B)	A [30.6] B (12.3)	胴部片。胴部は底部から内彎して立ち上がり口縁部にいたる。口唇部にキザミ目を有し、口縁部上位に1条の沈線が巡っている。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P14 10% SI-4
6	把手 (堀ノ内)	最大長 [10.6] 最大幅 [5.8]	把手片。口唇部外側に貼付される環状の把手で、突起部上位は楕円形を呈し、その中の両側に刺突が施されている。把手部には、2条の横位沈線や斜位の沈線が施され、上下に各1個、両側に各2個の刺突が施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P29 PL14 表採



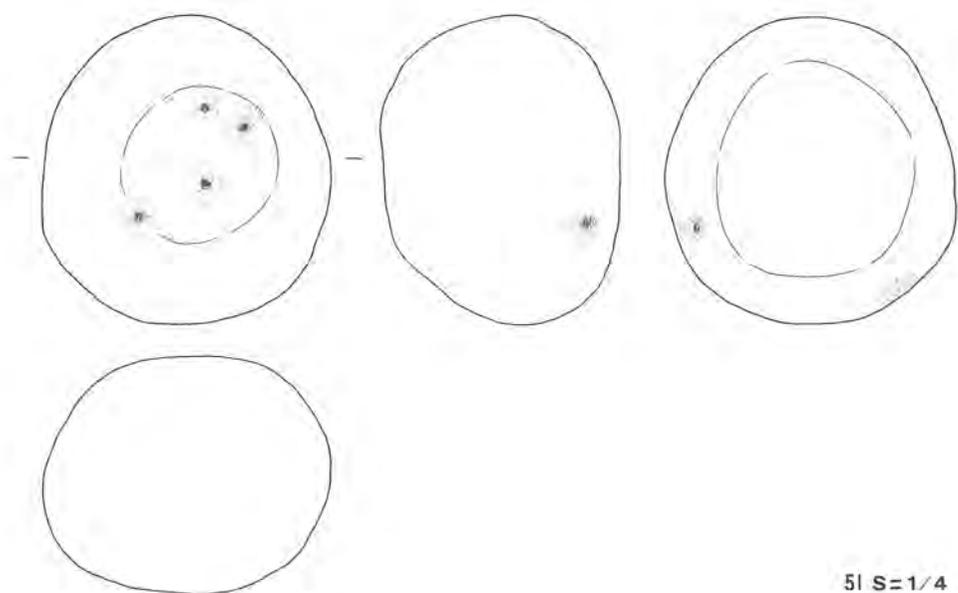
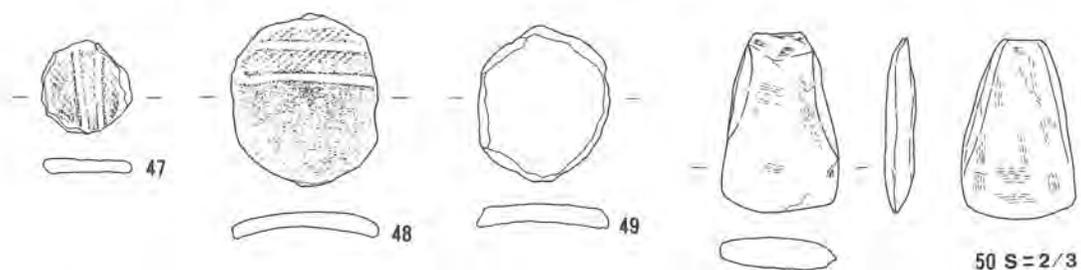
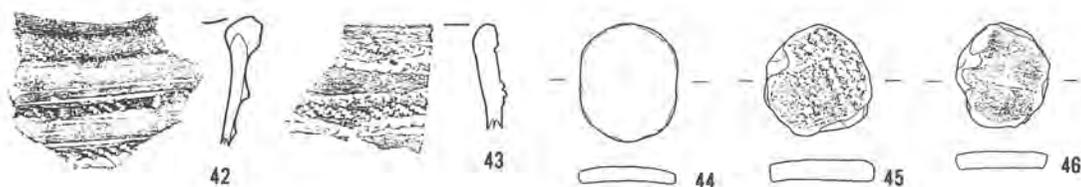
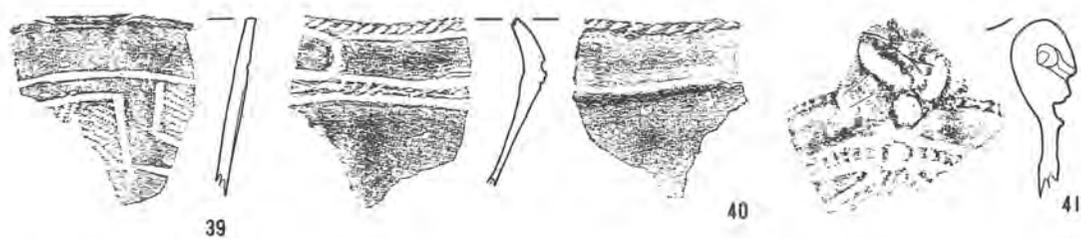
第39図 遺構外出土遺物実測図(1)



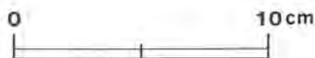
第40图 遺構外出土遺物拓影图(2)



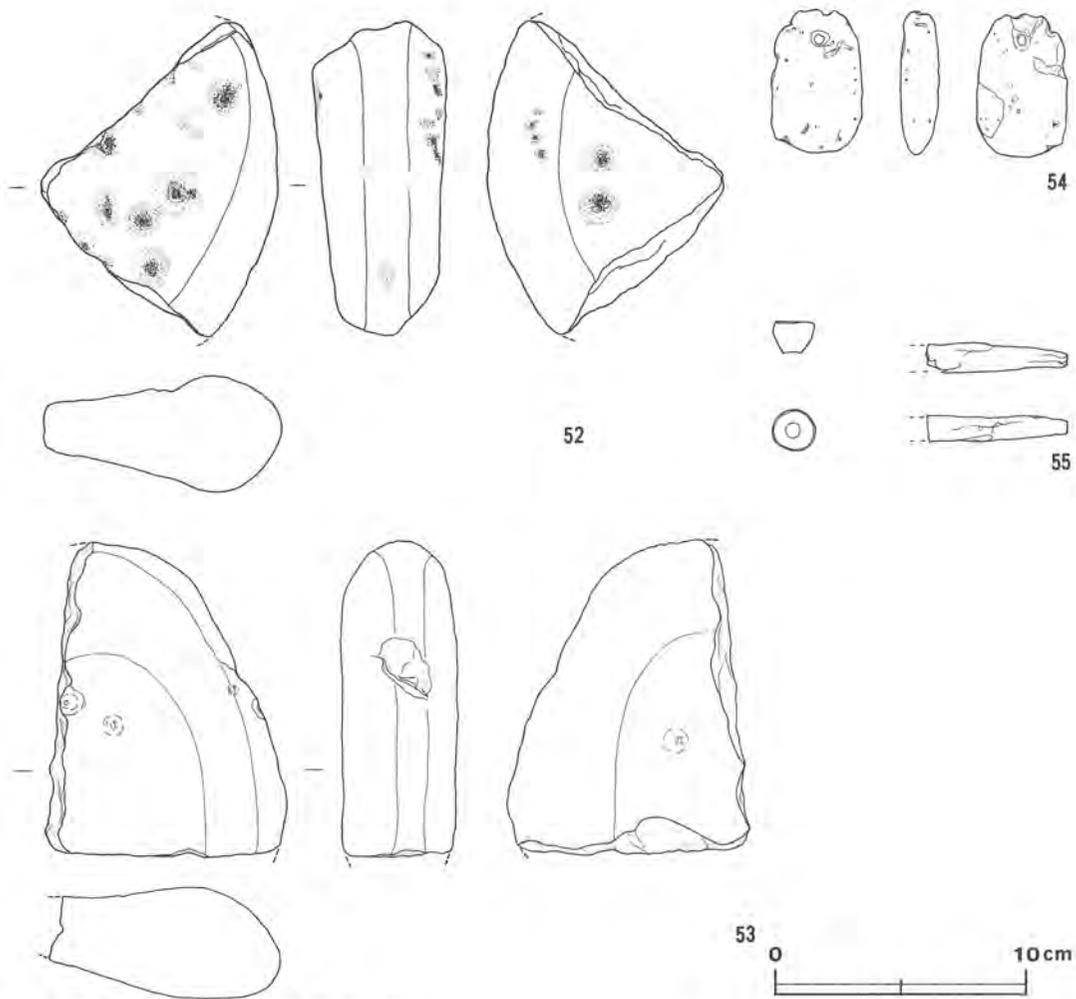
第41图 遺構外出土遺物拓影图(3)



51 S=1/4



第42図 遺構外出土遺物実測・拓影図(4)



第43図 遺構外出土遺物実測図(5)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第42図44	円板	4.7	3.9	0.6	—	15.0	100	D区南側	DP13
45	円板	(4.5)	(4.1)	0.9	—	(22.3)	90	D区南側	DP14
46	円板	4.3	3.7	0.7	—	14.3	100	D区南側	DP15
47	円板	3.8	3.6	0.7	—	9.3	100	D区	DP16
48	円板	6.9	5.8	0.7	—	42.8	100	D区	DP17
49	円板	6.3	5.4	1.0	—	35.4	100	D区	DP18

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第42図50	磨製石斧	3.1	2.3	0.6	8.9	角閃片岩	D区	Q11
51	凹石	16.4	15.4	12.7	4756.9	安山岩	D区	Q12
第43図52	凹石	(16.7)	(12.7)	7.2	(1358.3)	安山岩	D区	Q13
53	石皿	(12.6)	(4.7)	4.5	(752.9)	安山岩	D区	Q14
54	浮子	5.7	3.2	1.6	7.1	軽石	D区	Q17

第3節 考 察

原口遺跡から検出された遺構は、出土遺物から縄文時代後期と考えられる。ここでは、縄文時代後期の土器をⅠ～Ⅲ期に区分し、各期ごとにその特徴を述べ、若干の考察と検討を加えて行くことにする。

集落の構成については、道路幅という限定された範囲の調査であり、集落の全容をとらえることができないが、集落は、調査の結果や地形等から、さらに調査区域外の南側の台地にまで広がっていることが考えられる。

1 縄文式土器について

当調査区からは、縄文時代後期の土器片が比較的多量に出土しているので、ここではその特徴について述べる。

原口Ⅰ期(後期前葉)

本期には、第1-A・1-B・2-A・4・5・7・8・9号住居跡の8軒が該当する。堀之内Ⅰ～Ⅱ式に比定される土器群で、縄文を地文として沈線が斜位、菱形状(三角形)、弧状、渦巻等の文様モチーフを作り出している。さらに、磨消縄文や沈線区画内に文様を施しているものなど様々である。沈線区画の手法は、堀之内Ⅱ式になると縦位から横位の沈線区画を施し、区画内に渦巻文が施されている(第35図7)。口縁部は、単口縁や波状口縁で、口縁部上位に1条の沈線が深く口縁にそって巡り、第1-B号住居跡(第11図7～10)には、沈線内や波頂部下などに円形の刺突文が施されているのが多く見られる。底部は平底で、第1-B住居跡(第11図3)や第4号住居跡(第18図2)のように底端部がやや張り出しているのが特徴で、胴部下位はていねいな磨きが施されているのがほとんどである。出土土器は、深鉢形土器がほとんどであるが、わずかに浅鉢形・注口土器も出土している。第20号土坑出土の蓋(第34図2)は、「三十稲場式」に比定され、堀之内Ⅰ式併行で、北・西関東地方に多く出土している。この土器片は、ただ1点の出土品であるが、搬入されたものと思われ、当時の原口に住む縄文人の交流の広さを考えさせられる。

原口Ⅱ期(後期中葉)

本期は、第2-B・3・6号住居跡の3軒が該当する。加曽利BⅠ～Ⅱ式に比定される土器群で、器厚は薄手で磨きが内・外面に施されている。胴部から口縁部にかけて横位の平行沈線や沈線間に磨消縄文を施しているものが多い。底部は平底がほとんどで、第2-B住居跡(第13図1)のように網代圧痕が施されているものが目立つ。口縁部上位には、小突起やキザミ目が施され、内面には、沈線が口縁にそって巡っている。出土土器は、深鉢形土器が多く、浅鉢形土器は少な

い。第3号住居跡出土の深鉢形土器(第15図1)は、器厚が薄く器面全体が磨かれ焼きも良く、口縁部下位の弧状沈線と沈線区画内の磨消縄文及びキザミ目を施した横位の微隆起線、胴部中位に綾杉状の沈線が施文され東京都大田区大森貝塚出土の土器⁽¹⁾と類似している。

原口Ⅲ期(後期後葉)

安行Ⅰ～Ⅱ式に比定される土器群で、隆起帯縄文や貼瘤、連続刺突文などが施され極めて少量の出土である。第38号土坑出土(第35図8)の台付鉢形土器の台部片は、鉢部と台部の接合部に貼瘤・連続刺突文をもち、磨消の連弧文や台部下位に隆起帯縄文が施され、安行Ⅰ式に比定される。同様な土器は、取手市内の中妻貝塚や神明遺跡からも出土している。

2 遺構について

(1) 竪穴住居跡

原口遺跡の調査区から検出された住居跡は11軒で、標高17.0～18.5mの台地縁辺部に所在している。住居跡の覆土は、耕作による攪乱や自然流出をしており、遺存状況は、悪く壁の立ち上がりの確認が困難で、住居跡の規模も不明確なものが多い。これらの住居跡を、出土した土器の形式から、Ⅰ・Ⅱ期の2期に分類し、その住居跡の形態について述べる。また、Ⅲ期の竪穴住居跡は検出されていないので、ここでは省略する。

Ⅰ期(後期前葉)

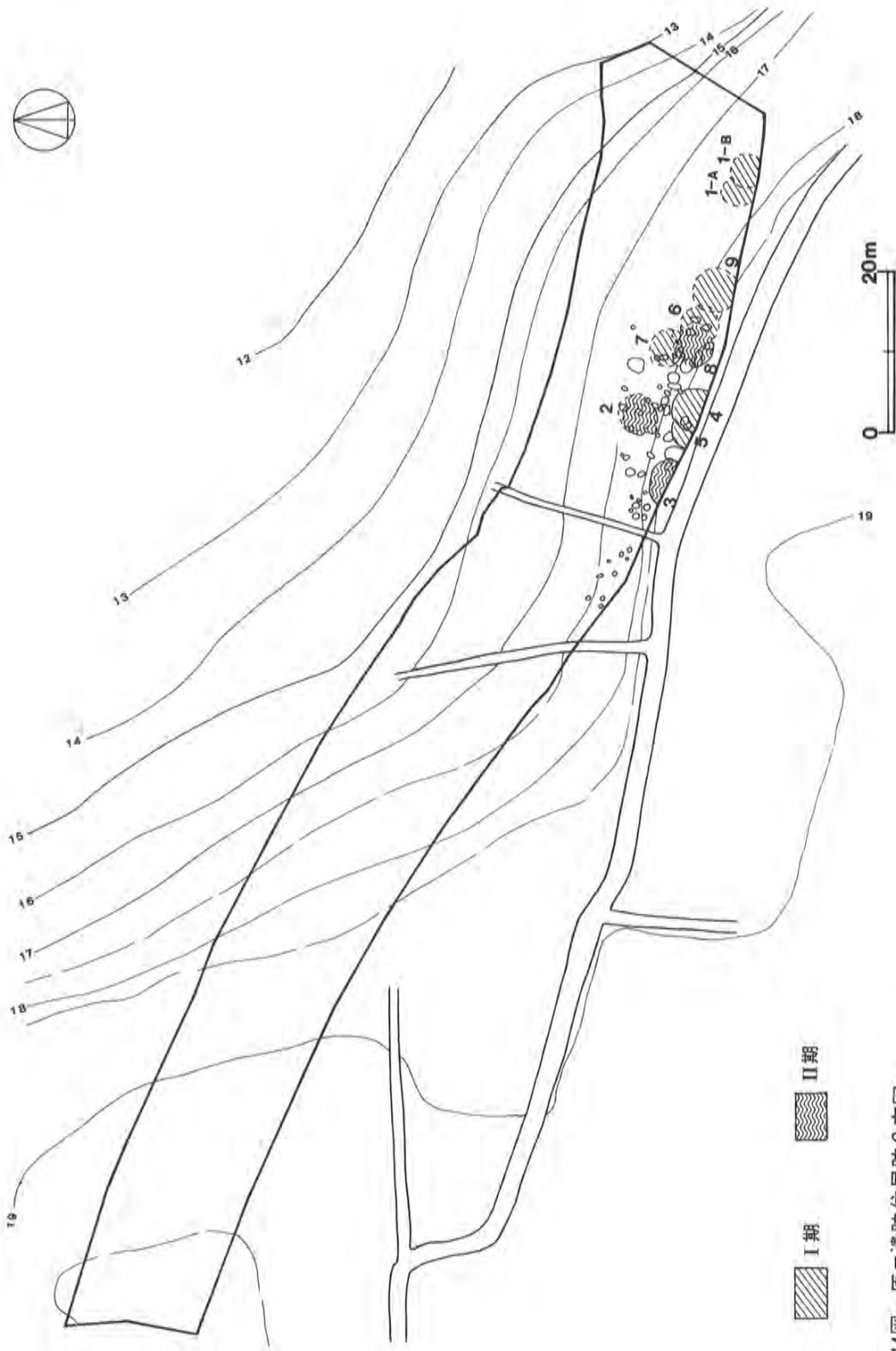
第1-A・1-B・2-A・4・5・7・8・9号住居跡

Ⅱ期(後期中葉)

第2-B・3・6号住居跡

原口Ⅰ期(後期後葉)

当該期に比定される住居跡は、調査区の中央部から南部及び南東部に8軒検出されている。また、第1-A号と第1-B号・第4号と第5号・第8号と第9号住居跡のように重複があり、同時期でも多少の時間差があることが考えられる。しかし、住居跡内の出土土器からは、これ以上細かく分けることができない。平面形は、すべて円形(不整円形を含む。)である。床面積は、10～15㎡(3軒)、18～30㎡(5軒)で規模の変化がやや見られる。炉跡は、すべて地床炉で住居跡のほぼ中央部付近から検出されている。第1-B号住居跡の炉跡は、床を約30cm掘り窪めた「U」状をしており、炉内から細かい木炭片を含む乳白色の灰が多量に検出されている。また、炉直上からは、ヤマトシジミを主体とした地点貝塚となっている。柱穴は、すべて壁の内側にそって検出されている。本期の集落は、調査区の南東部に所在し、住居跡が北側の谷津に向かって3～8cmの間隔で検出されている。なお、同期の地点貝塚は、廻り地遺跡や野田市周辺⁽²⁾に見られる。



第44图 原口遺跡住居跡分布图

原口Ⅱ期(後期中葉)

当該期に比定される住居跡は、調査区の中央部から南部に3軒検出されている。平面形は、円形が2軒、柄鏡形が1軒である。床面積は、25～30㎡で規模の変化はほとんど見られない。炉跡は、すべて地床炉で住居跡のほぼ中央部付近から検出されている。柱穴は、すべて壁の内側にそって検出されている。柄鏡形の住居跡は、第2-B号住居跡で調査区の中央部付近に検出され、第2-A号住居跡を掘り込んでおり、北壁の壁は、確認がしにくく柱穴の配列をもとにした推定の平面形状である。平面形は、楕円形を呈し、南西部に幅1.31m、長さ1.03mの張り出し部をもっている。この張り出し部を出入り口施設と考えている。一般に柄鏡形の住居跡は、南関東地方に集中して分布し、縄文時代中期後葉から後期堀之内式の短期間に多く見られ、敷石施設や張り出し部に埋甕が検出される類例が多い。当住居跡は、時期的に新しく縄文時代後期中葉の加曽利B式期で、敷石施設や張り出し部の埋甕等も検出されていないが、村田文夫氏の分類による「平面形状はⅢ型(円形短柄型)、敷石施設をもたないD類⁽³⁾」に属するものと思われる。

本期の集落は、調査区の南東部に所在し、住居跡が北側の谷津に向かって4～6cmの間隔で検出されている。

(2) 土坑内地点貝塚

第35・48号土坑内から地点貝塚が検出されている。2基の土坑は、出土土器からすべて原口Ⅰ期に属するものと考えられる。第35号土坑は、径約0.70m、深さ1.12mの円筒形を呈し、覆土中層の中央から貝等がブロックで検出されている。貝はヤマトシジミを主体として魚骨や獣骨も出土しているが、分析の結果は、「貝は2年貝で、ヤマトシジミの貝殻成長線の示す採取季節が若干推移するが、春期を示している。魚骨はクロダイの鱗棘や約7cmの小形魚、獣骨はイノシシの後臼歯やシカの焼骨片等である。」と報告されている。第48号土坑は、第9号住居跡の炉跡下から検出されている。平面形は、長径1.46m、短径1.12mの楕円形で、深さ88cmである。貝はヤマトシジミ単一で、覆土中層から貝等がブロックで出土している。分析の結果は、第35号土坑出土の内容と同じである。猿島郡五霞村冬木貝塚の貝組成とそのテリトリ分析を行った赤澤威氏や小宮孟氏が分析した土浦市上高津貝塚の結果からは、堀之内期に海進海退が繰り返された可能性があるとしている⁽⁴⁾。このことをふまえて考えて見ると、本貝塚はヤマトシジミを主体とした汽水域の貝種であり、魚骨等の分析結果から小形魚及びハゼ科の稚魚が考えられ、この時期には海退がかなり進み、原口遺跡の東側や菅生沼は淡水と海水との混合している汽水湖であつたことが考えられる。また、シカやイノシシの獣骨から、菅生沼周辺やこの台地は、この時代の人々にとって狩猟をする上で最適地であったことが考えられる。この2か所の地点貝塚の分析からは、原口に住む縄文人の生業や生活の一端を窺い知ることができる。

注

- (1) 近藤義朗・佐原 真訳 「大森貝塚」『東京大学理学部紀要第1巻第1冊 エドワーズエスモース』 1977年
- (2) 野田市教育委員会 「大崎貝塚・東金野井貝塚」 野田市文化財妙報7 「大崎貝塚」
野田市文化財妙報9 1988年
- (3) 村田文夫 「柄鏡形住居址考」『古代文化』 第27巻第11号 1975年
- (4) 茨城県教育財団 「廻り地A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 1981年

参考文献

- (1) 一の谷遺跡調査会 「松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書」 1984年
- (2) 岩槻市遺跡調査会 「黒谷田端前遺跡」 1976年
- (3) 山内清男編 「日本先史土器図譜」 先史考古学会 1967年
- (4) 取手市史 原始古代(考古)資料編 1989年
- (5) 鈴木正博他編 「取手と先史文化—中妻貝塚の研究 上巻・下巻」 取手市教育委員会
1981年
- (6) 茨城県 「先史・縄文時代」『茨城県史料 考古資料編』 1979年
- (8) 千葉県文化財センター 「千葉東南部ニュータウン10・小金沢貝塚」 1982年
- (9) 小山台貝塚調査団 「小山台貝塚」 1976年
- (10) 芹沢長介監修 「縄文土器大成 3」 講談社 1981年
- (11) 小林達雄編集 「縄文土器大観 4」 小学館 1989年

第6章 北前遺跡

第1節 遺跡の概要

北前遺跡は、岩井市の南東部、大崎地区の標高17～19m程の菅生沼に面した舌状台地上に立地し、現況は畑地である。縄文式土器や土師器などの土器片が散布している。

今回の調査は、調査区をA区からD区に区画して調査を実施し、縄文時代前期、古墳時代前期の複合遺跡であることが確認された。検出された遺構は、竪穴住居跡37軒（縄文時代4軒、古墳時代33軒）、土坑80基、掘立柱建物跡3棟、溝5条、井戸2基である。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡4軒が検出されている。調査区の中央部や北西部（B・D区）から竪穴住居跡が各々2軒ずつ検出され、そのうち2軒の住居跡内からは地点貝塚も検出されている。貝は、海生の物で、マガキ、ハマグリ等が主体である。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡が33軒で、調査区の北東部から北西部に多く検出されている。平面形は隅丸方形、隅丸長方形を呈するものが多く、中央部から北寄りに炉が検出されている。さらに、貯蔵穴、出入口施設に伴うピット等が住居跡内から検出されている。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に60箱程出土している。縄文時代の遺物は、縄文時代前期に比定される黒浜式土器片が、住居跡の覆土及び床面から出土している。土坑の覆土からは、縄文時代中期から後期の土器片が出土している。石器は、磨製石斧、くぼみ石なども出土している。古墳時代の遺物は、土師器の壺、甕、甑、高坏、器台等が多く出土している。土製品は、土玉、石製品は、砥石、管玉等、鉄製品は、刀子等が出土している。その他、炭化した粳も出土している。

第2節 遺構と遺物

1 縄文時代

当調査区の中央部や北西部からは、縄文時代の住居跡が4軒（B区2軒、D区2軒）検出されている。そのうち2軒の竪穴住居跡が、古墳時代の竪穴住居跡と重複し合っている。土坑は、当調査区の東部に2基検出されている。

以下、検出された竪穴住居跡及び土坑の特徴や出土遺物について記載していくことにする。

(1) 竪穴住居跡

第25号住居跡 (第45図)

位置 調査区の中央部, B13c₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は, 第24号住居跡の南西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径4.15m, 短径 [3.63] mの不整楕円形を呈しているものと推定される。

長径方向 N- 67°-W

壁 壁高は28~40cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 やや凹凸があり, 中央部が良く踏み固められ硬い。

ピット 24か所(P₁~P₂₄)検出されている。P₁~P₈は, 径15~22cmの円形を呈し, 深さ13~48cmで, 壁に沿って回るように検出されているので, 主柱穴と思われる。P₉~P₂₄は, 径10~26cmの円形を呈し, 深さ11~28cmで, 補助柱穴と思われる。

炉 ほぼ中央部に検出されている。平面形は, 長径 [47] cm, 短径38cmの楕円形を呈し, 床を約10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてレンガ状に赤変硬化している。

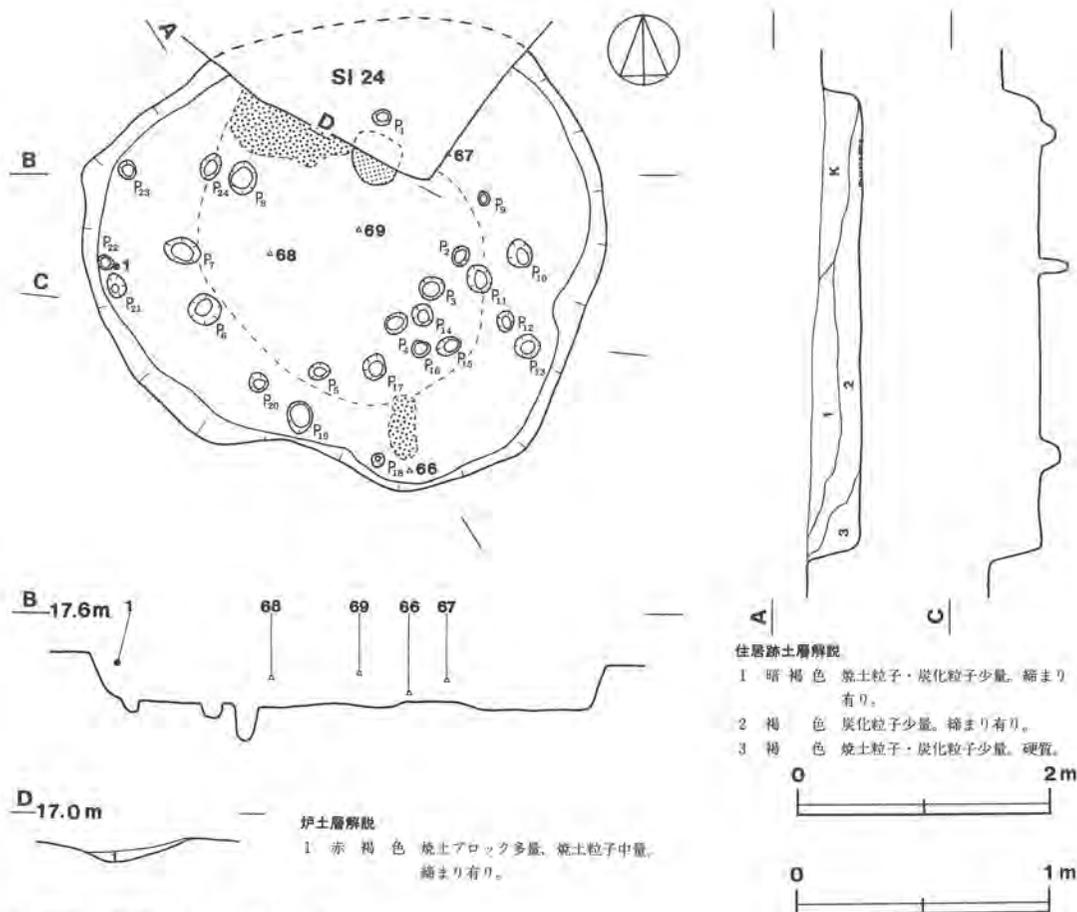
覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけては, 縄文式土器片(深鉢1)や縄文式土器の細片(664点)が出土している。その他, 石製品は覆土下層から中層にかけて出土している。覆土下層からはカキを主体にアカニシが極少量含まれる貝ブロックが2か所から出土している。第46図1の深鉢形土器片は西コーナー付近の覆土上層から出土している。第48図66の磨製石斧は南コーナー付近の覆土下層から, 第48図69の打製石斧は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第24号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代前期の住居跡と考えられる。

第46~48図2~64は第25号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図であり, すべての土器片に繊維が含まれている。2は口縁部で頸部より下位に単節RL, 無節Rの羽状縄文, 口縁部には横位回転の単節LRが施文されている。3は口縁部で横位回転の単節LR, 4・5は胴部で横位回転の単節RL, 6・7は胴部で横位回転の単節LRが施文されている。8は口縁部で横位回転の無節L, 9・10は胴部で横位回転の無節L, 11は胴部で横位回転の無節R, 12・13は異方向の無節縄文が施文されている。14は口縁部で地文に無節Lを施し, ループ文がともなう。15は胴部で組紐文が施文されている。16は口縁部で縦位に無節縄文圧痕が施文されている。17は口縁部で無文である。18・19は横位に平行沈線文, 20・21は波状に横位の沈線が施され沈線内に刺突が入り, 22は弧状に横位の沈線文, 23・24は横位に短い沈線文, 25は肋骨状沈線文, 26は斜位の沈線が施され, 口縁部上位に補修孔がある。27は入り組み状に沈線が施され, 28は半截竹管により斜位の沈線文,

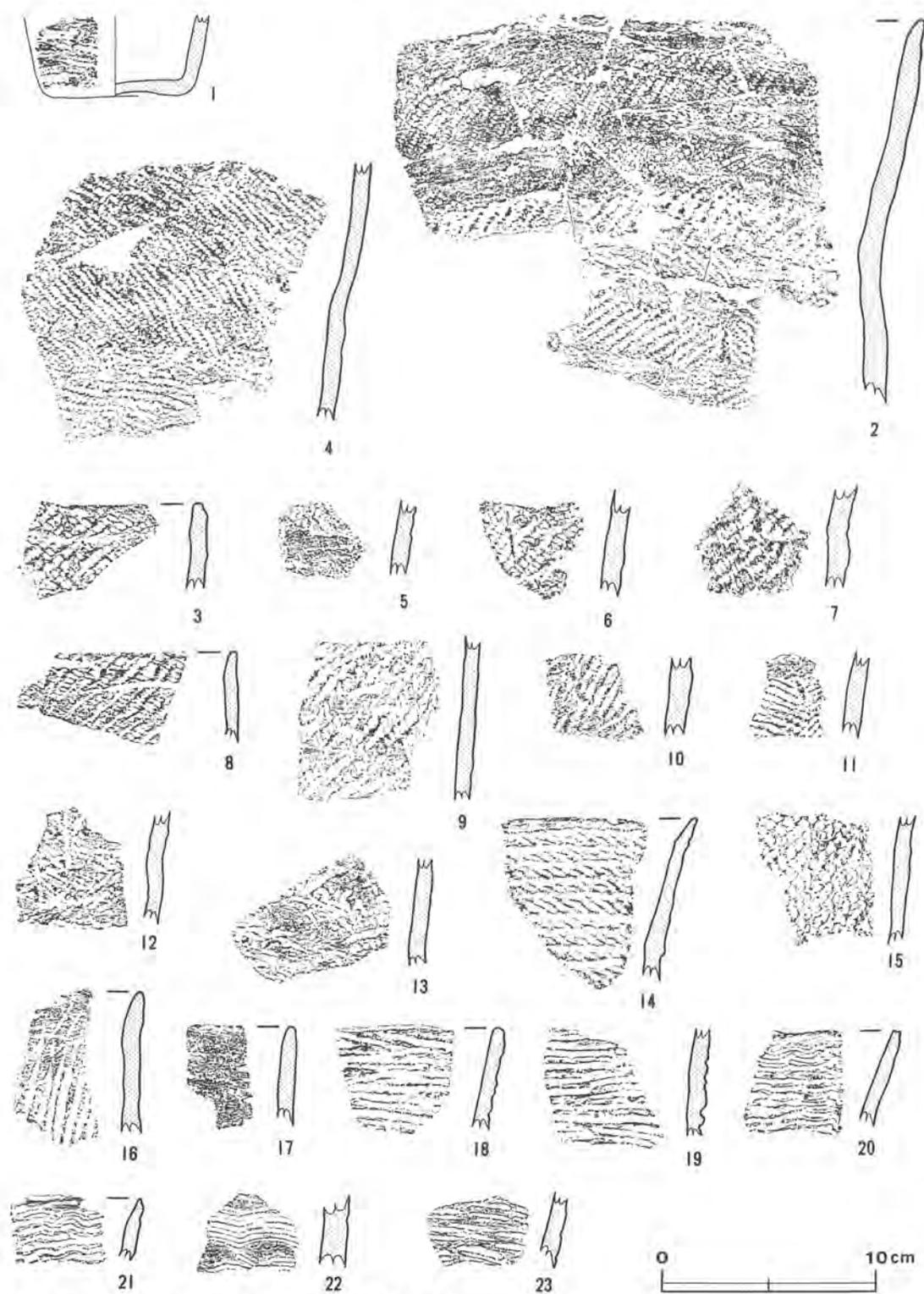
29~31は斜格子目文, 32は撚糸文地文に斜位に沈線, 33・34は底部で, 33は円弧状に沈線が施され, 34は斜位に条線文, 35~41は半截竹管により横位に波状の沈線文, 42は半截竹管により弧状に横位の沈線文が施文されている。43は口縁部でコンパス文が2条施文されている。44は半截竹管による刺突文が2条施文されている。45は棒状工具による刺突文, 46は縄文地文に円形の刺突文が施文されている。47~49は網目状撚糸文が施文されている。50は撚糸文, 51・52は異方向の撚糸文が施文されている。53~58は2本1対の撚糸文が施文されている。59は付加条縄文が施文されている。60~64は貝殻腹縁文が施文されている。



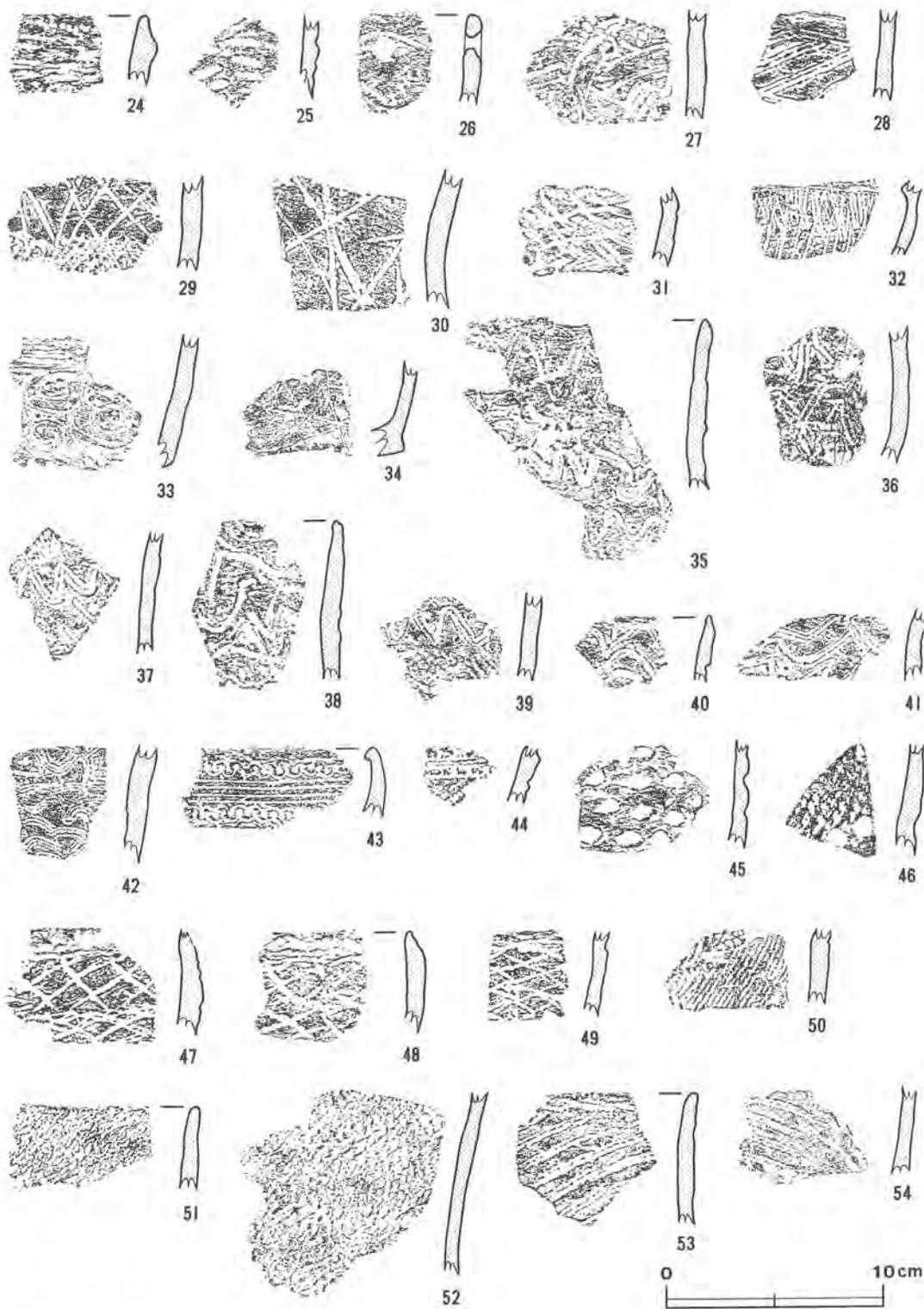
第45図 第25号住居跡実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

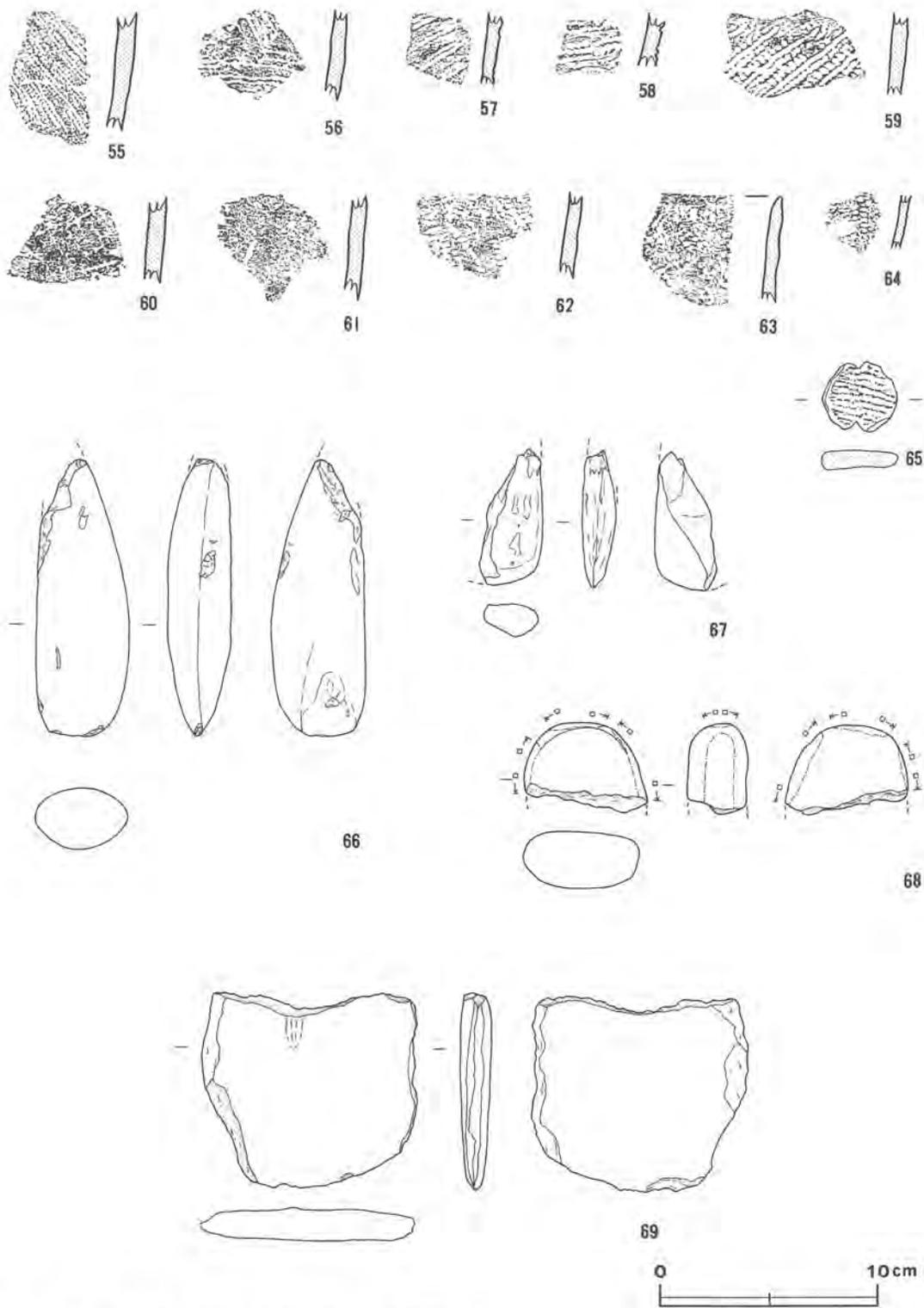
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	深鉢形土器 縄文式土器	B (3.8) C 6.4	底部片。底部はやや上げ底状を呈し、外傾して立ち上がる。沈線文を斜位に施している。	砂粒・繊維を含む 橙色 普通	P223 5% 西コーナー付近 覆土上層



第46图 第25号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第47图 第25号住居跡出土遺物拓影图(2)



第48图 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第48図65	土器片錘	3.3	3.5	0.9	—	10.3	100	覆土	DP198

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第48図66	磨製石斧	(12.8)	4.4	2.9	(241.7)	緑泥片岩	覆土下層	Q15
67	磨製石斧	(6.4)	(2.9)	1.6	(33.8)	緑泥片岩	覆土下層	Q16
68	敲石	(4.2)	(5.6)	(2.7)	(81.4)	石英片岩	覆土中層	Q17
69	鋸形打製石斧	(9.1)	10.0	1.5	(215.3)	輝緑岩	覆土中層	Q18

第26号住居跡 (第49図)

位置 調査区の北部, A13h₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径5.15m, 短径5.05mの円形を呈している。

長径方向 N-19°-E

壁 壁高は, 49~60cmでやや外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 踏み固められやや硬い。

ピット 10か所 (P₁~P₁₀) 検出されている。P₁~P₁₀は, 径18~76cmの円形を呈し, 深さ14~66cmで, 壁に沿って回るように検出されているので, 支柱穴と考えられる。

炉 中央部から北東寄りに2か所 (炉1, 炉2), 北寄りに2か所 (炉3, 炉4) 検出されている。炉1の平面形は, 長径46cm, 短径24cmの長楕円形を呈し, 炉2の平面形は, 長径37cm, 短径29cmの楕円形を呈し, 炉3の平面形は, 長径36cm, 短径28cmの不整楕円形を呈し, 炉4の平面形は, 長径30cm, 短径14cmの長楕円形を呈し, とともに床を約2~3cm掘り窪めた地床炉である。炉床はいずれも焼けて赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけては, 縄文式土器片 (深鉢1) や縄文土器の細片 (409点) が出土している。その他, 南西部の覆土下層や覆土中層からは石製品が出土している。第50図1の尖底土器片は南西壁付近の覆土下層から出土している。第51図35の磨製石斧は南壁付近の覆土下層から, 第51図36の凹石は南西壁付近の床面から出土している。

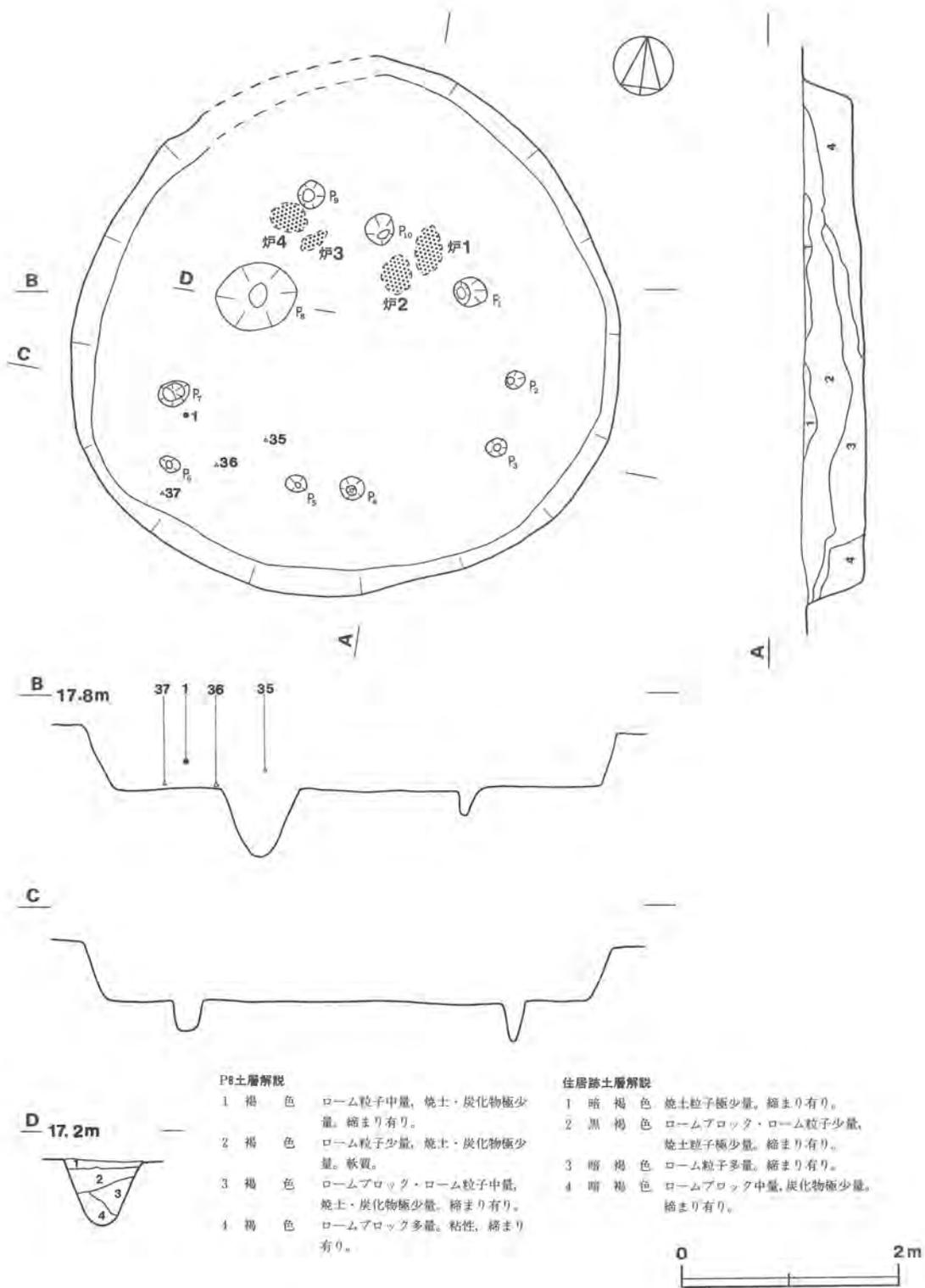
所見 本跡は, 遺構の形態や出土遺物等から縄文時代前期の住居跡と考えられる。

第50・51図2～34は第26号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図であり、すべての土器片に繊維が含まれている。2・3は口縁部で横位回転の単節LRが施文されている。4は横位回転の無節R、5は横位回転の無節Lが施文されている。6・7は胴部で羽状縄文が施文されている。8は胴部で地文に無節Rを施し、ループ文がともなう。9は胴部で組紐文が施文されている。10～12は半截竹管により横位に短く沈線を施文している。13は口縁部で縄文地文に半截竹管で横位に1条の沈線を施している。14・15は胴部で半截竹管により横位の沈線が施されている。16は胴部で半截竹管により横位に波状の沈線が施されている。17は胴部で竹管により不規則に刺突文が施文されている。18～21は撚糸文が施されている。22は撚糸文を地文として鋸歯状沈線文が施文されている。23～26は撚糸文を地文として波状の沈線が横位に施文されている。27は胴部で撚糸文圧痕が施文されている。28は2本1対の撚糸が異方向から施文され菱形状のモチーフを作り出している。29～31は胴部で網目状撚糸文が施文されている。32は口縁部で2本1対の撚糸文を地文に横位の沈線が弧状に施文されている。33は異方向の斜縄文を地文に半截竹管による刺突文が1条横位に巡っている。34は横位回転の単節LR, 単節RLの羽状縄文を地文として半截竹管による刺突文が2条巡っている。

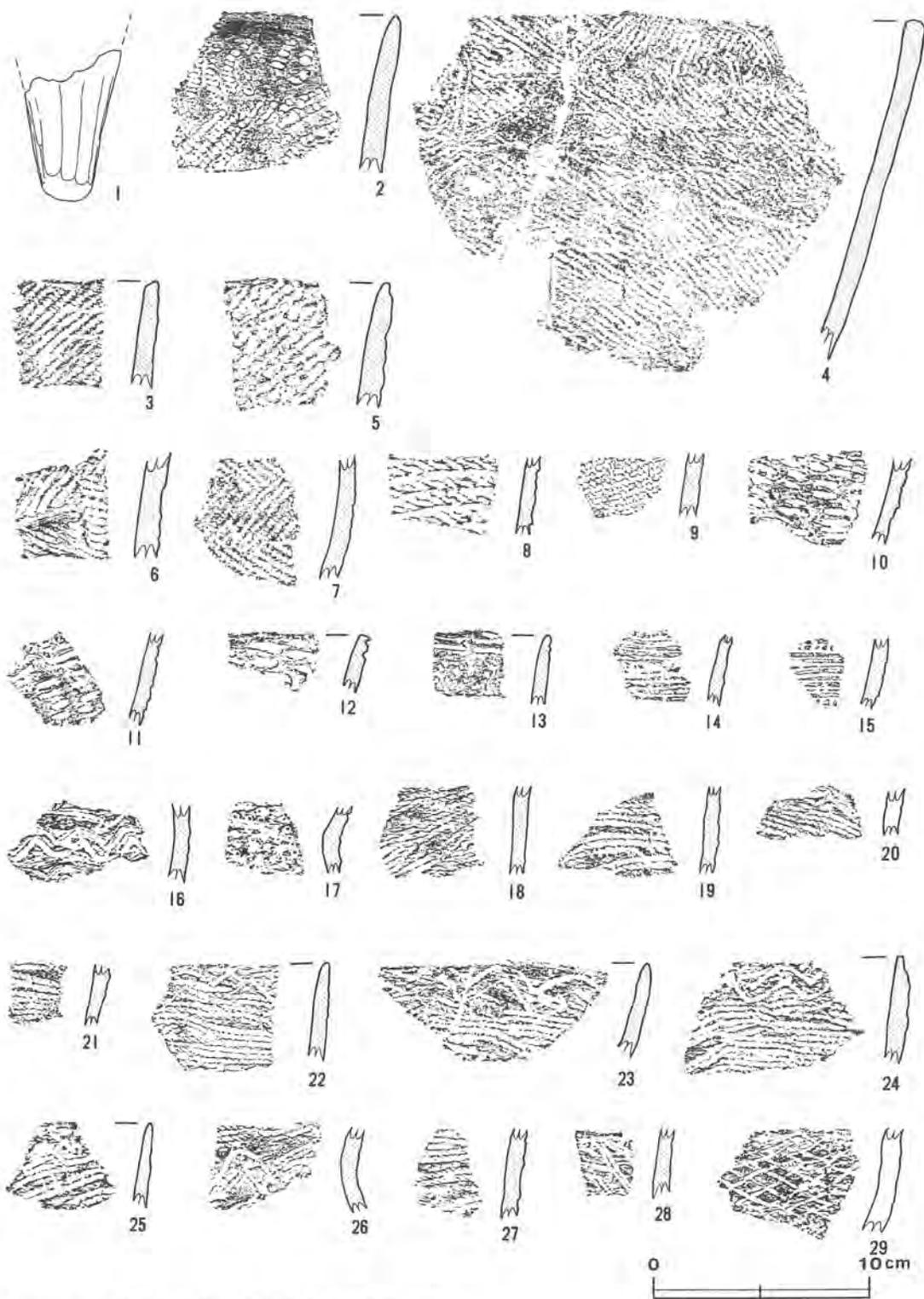
第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	尖底土器 縄文式土器	B (7.2)	鋭角的な尖底部片。所謂天狗の鼻状を呈している。外面は縦位の丁寧なヘラナデが施されている。	砂粒・石英 明褐色 普通	P224 PL47 5% 南西壁付近覆土 下層

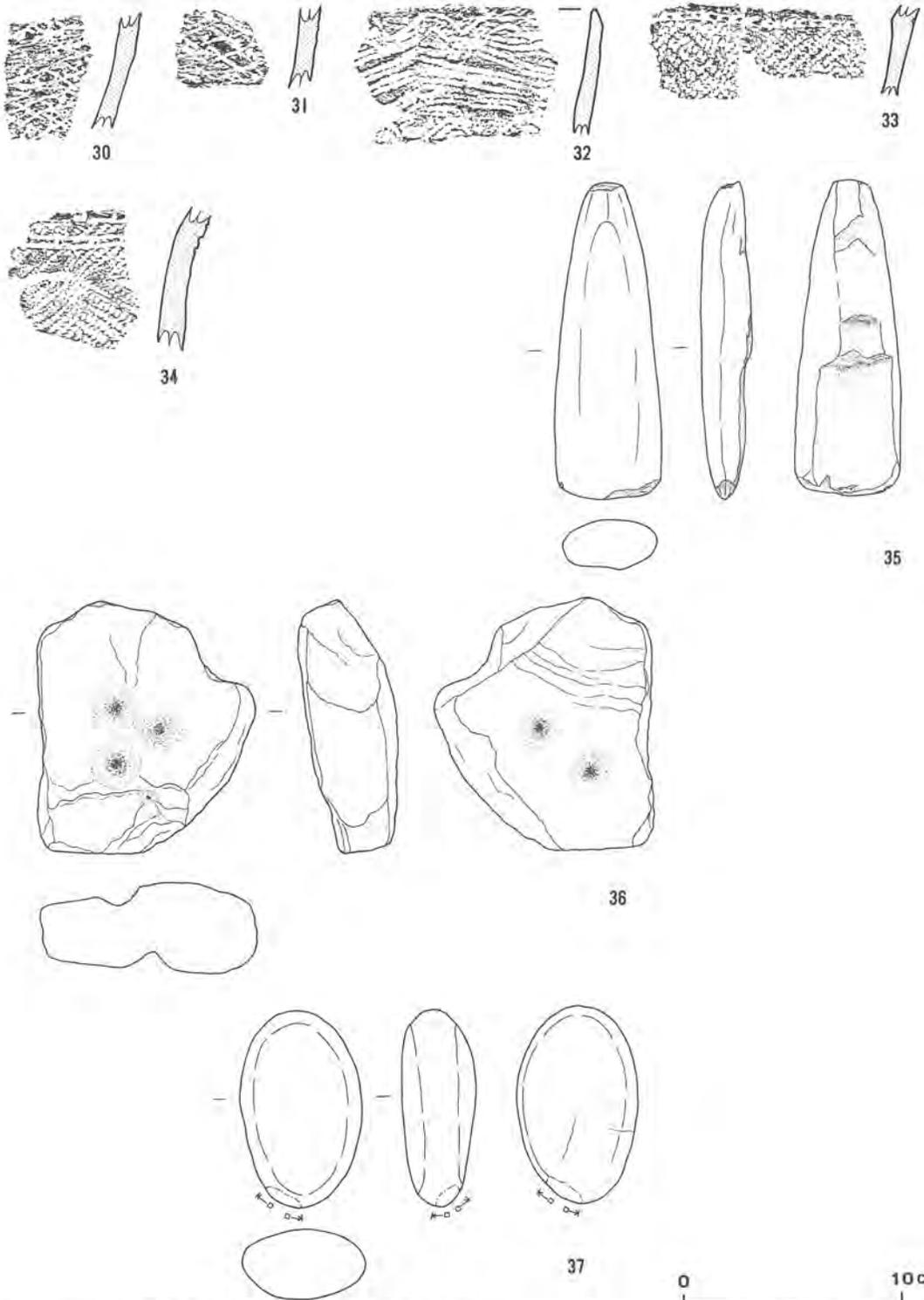
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第51図35	磨製石斧	(14.6)	5.0	2.3	(252.6)	角閃片岩	覆土下層	Q19
36	凹石	15.4	13.4	6.1	1522.3	雲母片岩	床面	Q20
37	敲石	9.1	5.6	3.4	230.8	砂岩	覆土下層	Q21



第49図 第26号住居跡実測図



第50图 第26号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第51图 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第30号住居跡（第52図）

位置 調査区の北西部，B12a₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.20m，短軸4.60mの隅丸長方形を呈している。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は46～60cmで，外傾して立ち上がっている。

床 やや凹凸があり，全体的に良く踏み固められ硬い。北部と南東壁付近に電柱痕及びその支柱痕の攪乱がある。

ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₃は，径30～43cmの円形を呈し，深さ14～48cmで，ほぼ直線的に位置し，主柱穴と思われる。P₄は，径25cmの円形を呈し，深さ15cmで，補助柱穴と思われる。

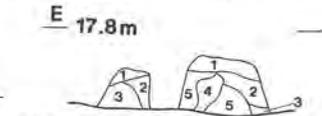
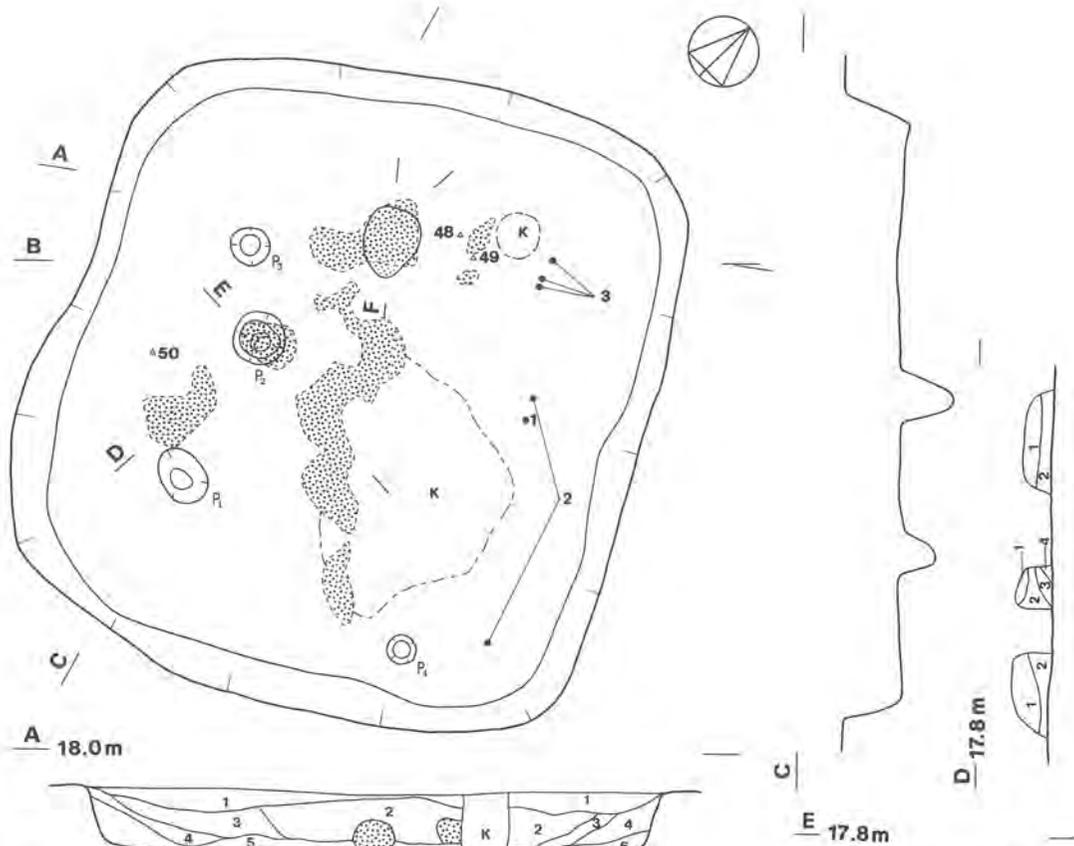
炉 中央部から北西寄りに検出されている。平面形は，長径58cm，短径45cmの楕円形を呈し，床を約9cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてレンガ状に赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から中層にかけては，マガキを主体としてアサリ，ハマグリ，サルボウ，ウミナ等の貝がブロック状に出土している。床面や貝層内及び覆土上層から縄文式土器片（深鉢3）や縄文式土器片の細片（850点）が出土している。北コーナー付近の覆土下層から石器が出土している。第53図3の深鉢形土器片は北コーナー付近の覆土下層から破片の状態で，第53図1の深鉢形土器片は北東壁中央付近の床面から出土している。第55図48の磨製石斧は北コーナー付近の覆土下層から，第55図49の磨製石斧は北コーナー付近の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物等から縄文時代前期の住居跡と考えられる。

第53・54図4～46は第30号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図であり，すべての土器片に繊維が含まれている。4は口縁部で縦位回転の単節LR，5は胴部で横位回転の単節LRが施されている。6～10は横位回転の無節L，11・12は横位回転の無節Rが施されている。13は口縁部で横位回転の単節LRを地文とし，ループ文がともなう。14は口縁部で単節LR，単節RLの羽状縄文を地文として竹管による刺突文が施文されている。15は胴部で棒状工具による刺突文が施文されている。16～20は羽状縄文であり，16～18は口縁部で無節L，無節Rが施され，19・20は単節LR，単節RLが施されている。21は口縁部で羽状縄文を地文として，半截竹管による沈線が横位に2条巡り，口縁部上位に瘤が貼付されている。22～24は口縁部で横位回転の無節Lを地文として横位に平行沈線が巡っている。25・26は口縁部，27は波状口縁部，28は底部でともに横位に短く沈線が施されている。29は口縁部で横位に沈線が巡っている。30は口縁部で沈線が垂下している。31は胴部で斜位による沈線が施されている。32～34は半截竹管により横位に波状沈線が施され，沈



住居跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子中量。縮まり有り。
- 4 褐色 焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 5 褐色 ロームアブロック少量。縮まり有り。
- 6 褐色 ローム中ブロック少量、炭化物極少量。縮まり有り。

炉土層解説

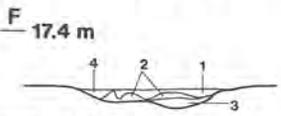
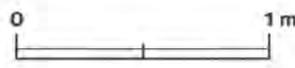
- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。
- 2 赤褐色 焼土大ブロック中量、焼土粒子少量。硬質。
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量。縮まり有り。
- 4 褐色 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。縮まり有り。

貝ブロック層解説 (D)

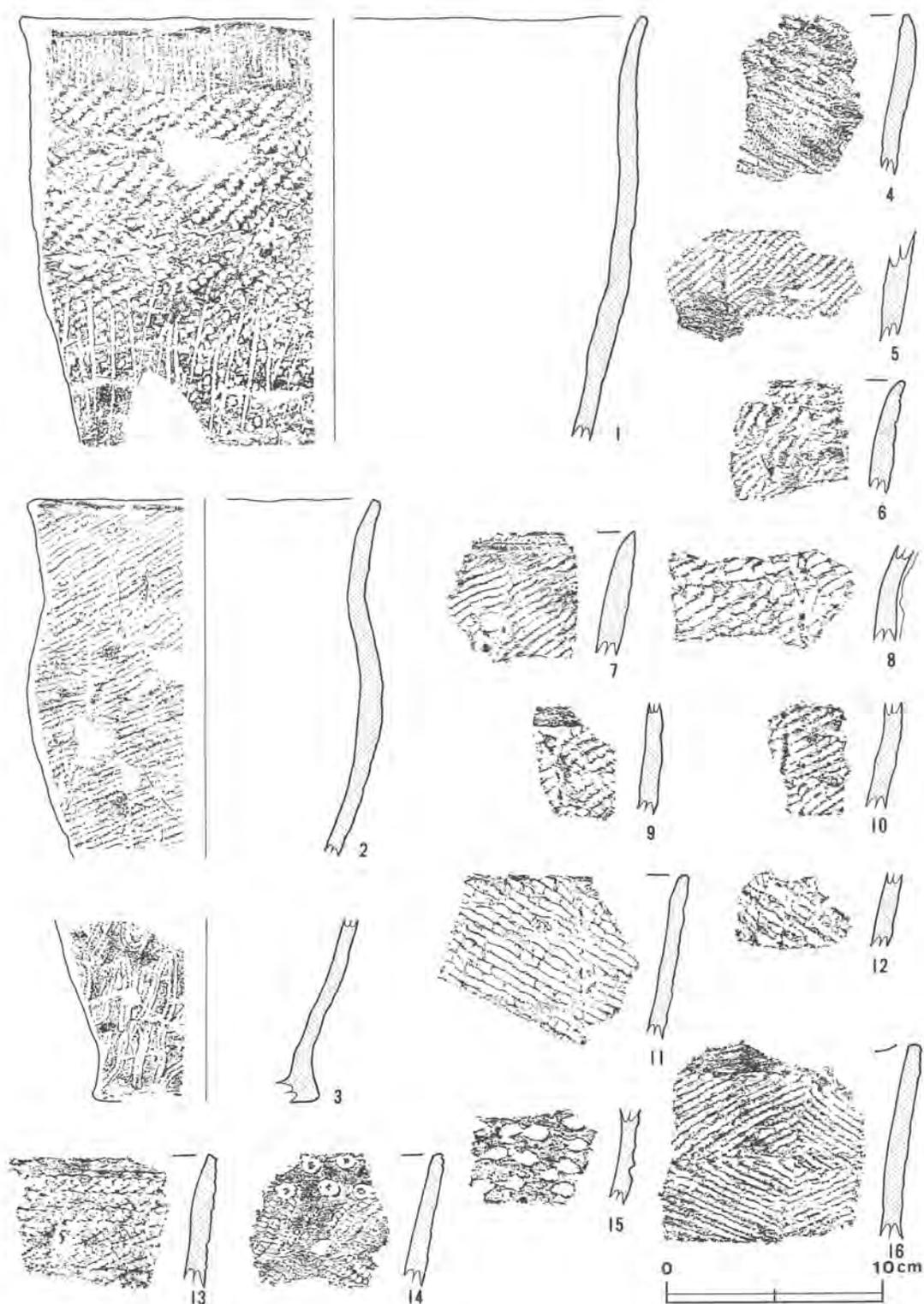
- 1 混土貝層 暗褐色 カキ、ハマグリ、ハイカイ、オキシジミ等を含むローム土。
- 2 明褐色 ロームアブロック中量、貝細片少量。縮まり有り。
- 3 混貝土層 暗褐色 カキ、アサリ、ハイカイ等を含む。
- 4 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。

貝ブロック層解説 (E)

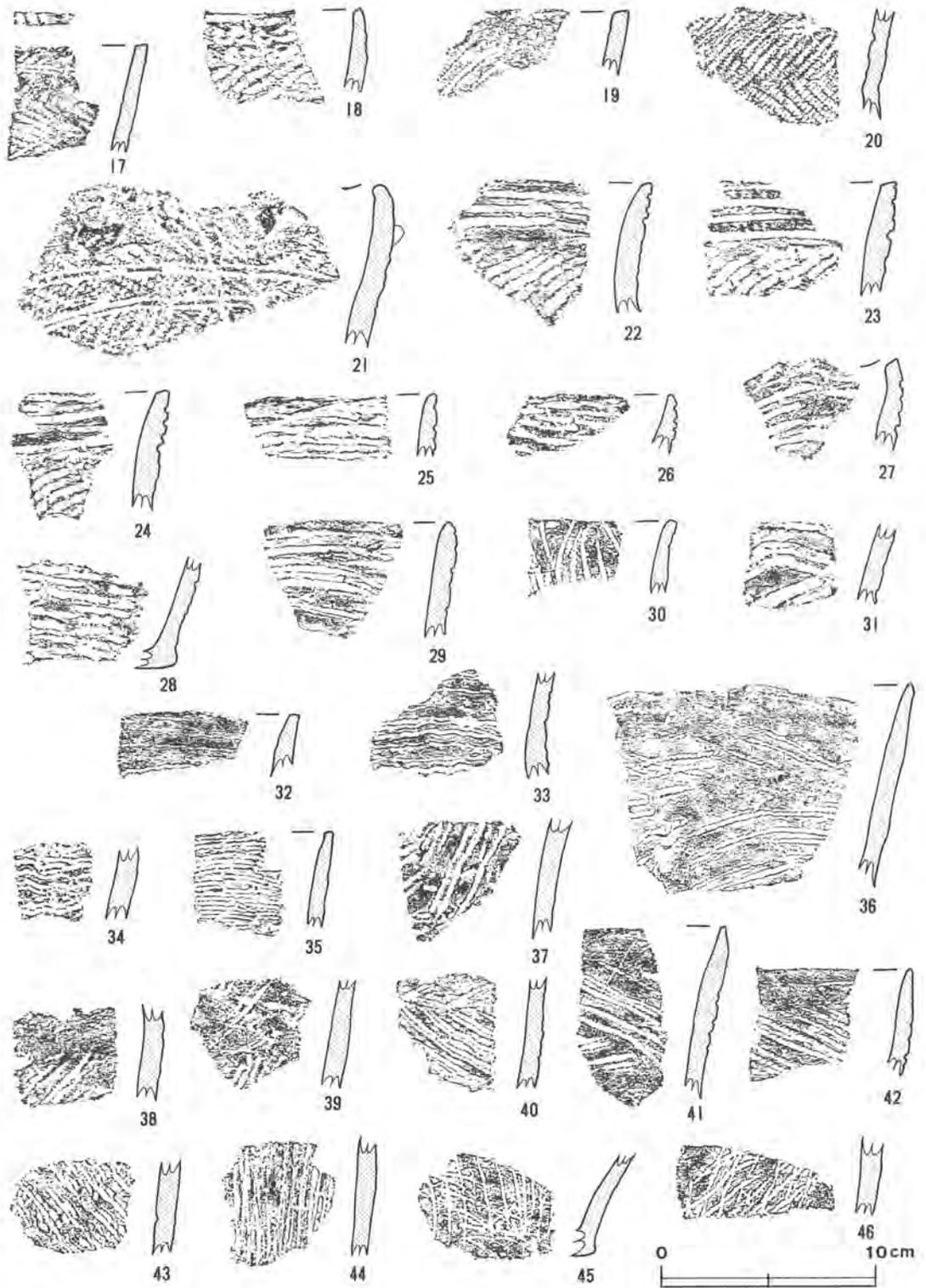
- 1 混土貝層 黒褐色 オキシジミ、アサリ、カキ、ハイカイ等を含む。ローム粒子・炭化物少量。
- 2 混貝土層 極暗褐色 カキ、アカニシ等を含む。ローム粒子・炭化物・灰少量。軟質。
- 3 黒褐色 貝細片、小貝含む。ローム小ブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。
- 4 暗褐色 ローム小中ブロック多量。軟質。
- 5 褐色 ローム中・大ブロック多量。焼土粒子・炭化物少量。



第52図 第30号住居跡実測図

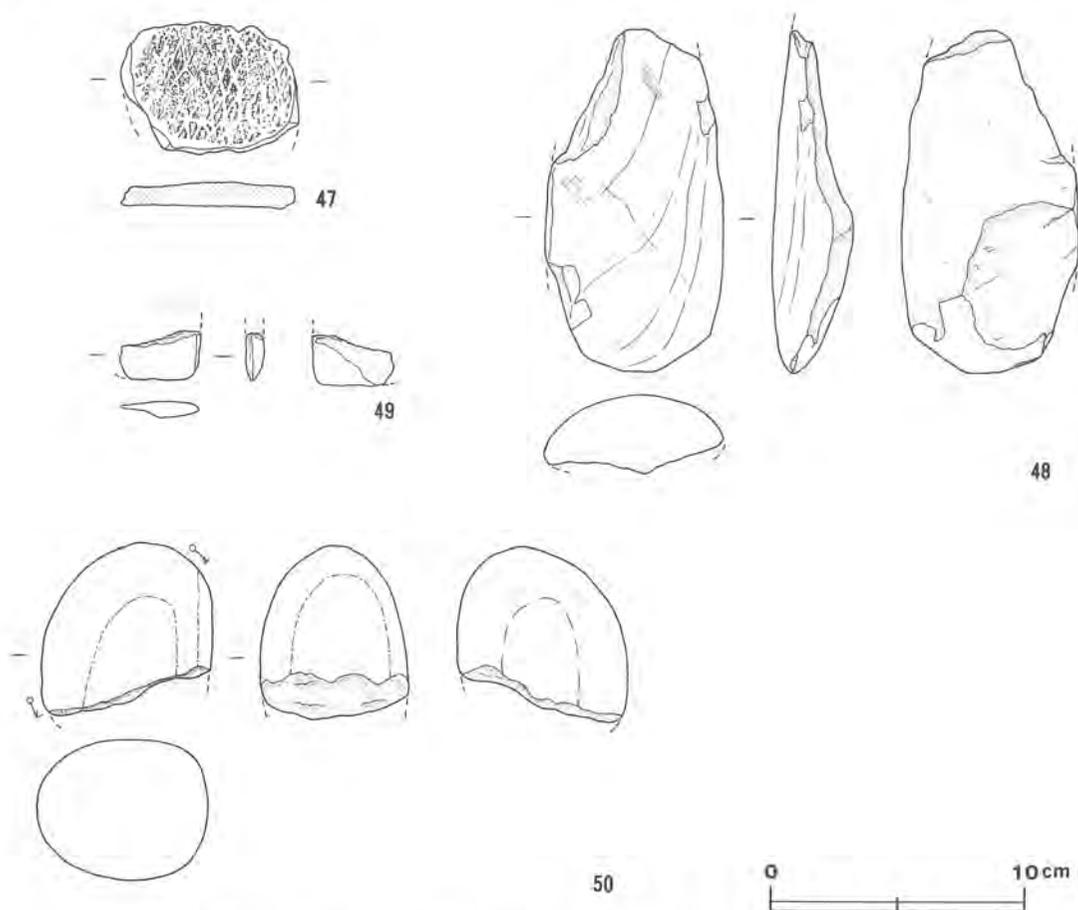


第53图 第30号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第54图 第30号住居迹出土遗物拓影图(2)

線内に刺突が施文されている。35は口縁部で横位に貝殻条痕文が施文されている。36～40は撚糸文で2本1対の撚糸文が施され、40は羽状になっている。41・42は口縁部で撚糸文圧痕が施されている。43・44は胴部で、43は付加条縄文、44は縦位に条線文が施されている。45・46は網目状撚糸文が施されている。



第55図 第30号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A [29.0] B (20.0)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部からやや外反する。横位回転の単節縄文LRを地文とし、口縁部と胴部中位に縦位の沈線が施されている。	砂粒・繊維を含む 赤褐色 普通	P254 PL54 10% 北東壁中央付近 床面
2	深鉢形土器 縄文式土器	A [15.8] B (16.8)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部はやや内彎気味に立ち上がり、頸部でわずかに括れ、頸部から口縁部にかけて開く。全面に横位回転の無節縄文Lが施されている。	砂粒・雲母・繊維 を含む 明赤褐色 普通	P255 PL54 20% 北東壁中央付近 床面

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第53図 3	深鉢形土器 縄文式土器	B (8.6) C [10.6]	底部片。平底。底部からやや内彎気味に立ち上がり、 底端部は張り出す。文様構成は、半截竹管により不規則的な曲線が描かれている。	砂粒・繊維を含む 明赤褐色 普通	P256 PL54 10% 北コーナー付近 覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第55図47	土器片錘	5.3	7.1	1.0	—	(47.3)	80	覆土	DP202

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第55図48	磨製石斧	13.8	7.1	3.2	363.4	角閃片岩	覆土下層	Q22
49	磨製石斧	(2.0)	(3.2)	(0.7)	(5.1)	緑泥片岩	覆土上層	Q23
50	磨石	7.0	6.8	5.9	355.2	安山岩	覆土上層	Q24

第34号住居跡 (第56図)

位置 調査区の北西部，A12i₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は，第33号住居跡の北東部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径5.40m，短径 [3.90] mの不整楕円形を呈するものと推定される。

長径方向 [N-25°-E]

壁 壁高は28～40cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，硬い。

ピット 検出されない。

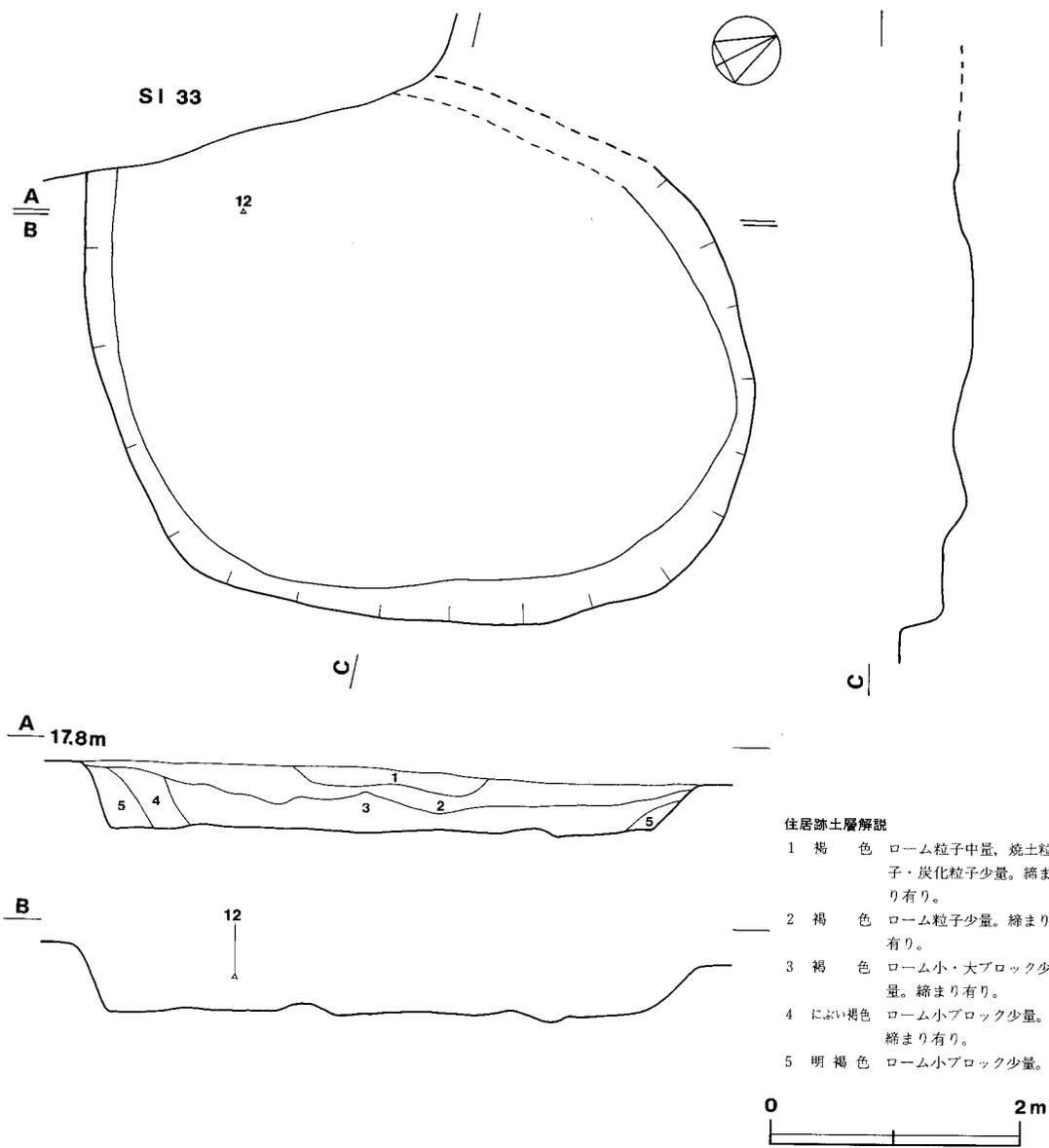
炉 検出されない。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけては，縄文式土器の細片 (11点) が出土している。第57図12の磨製石斧は，南部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は，重複関係から第33号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から縄文時代前期の住居跡と考えられる。

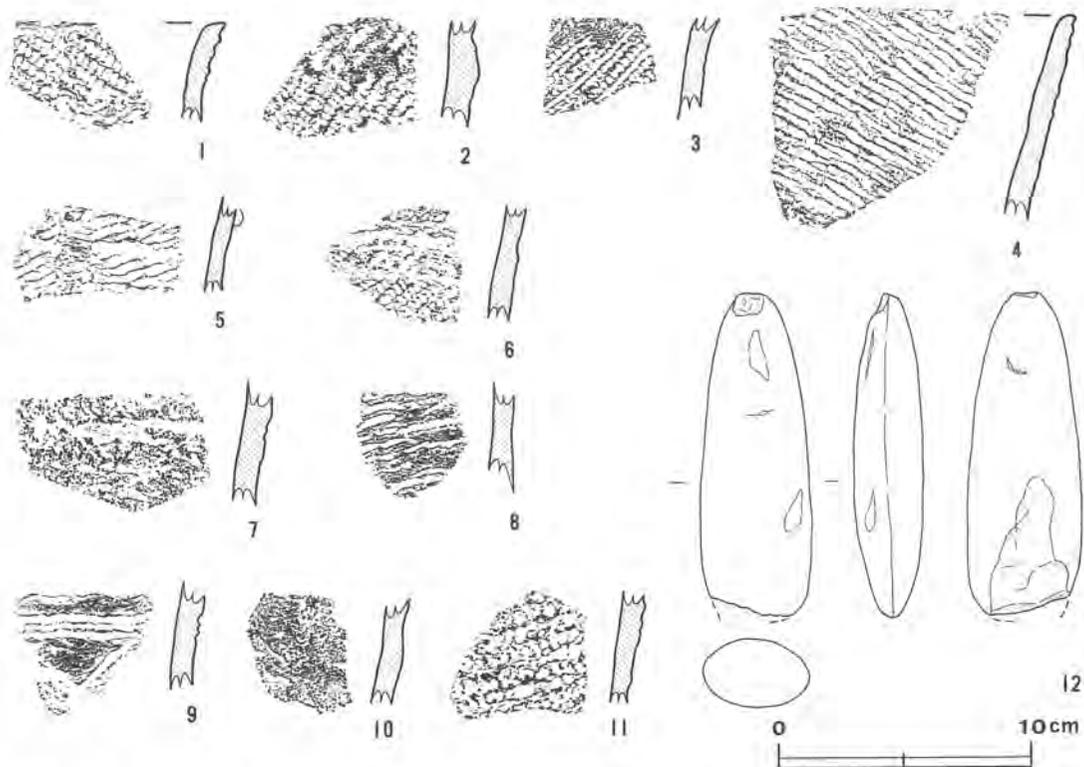
第57図1～11は第34号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図であり，すべての土器片に繊維が含まれている。1は口縁部で横位回転の単節RL，2・3は胴部で横位回転の単節LRが施されている。4は口縁部で無節R，5は胴部で無節Lが施されている。6は胴部で，横位回転の単節LRを地文として刺突文が施されている。7・8は，縄文地文として横位の沈線が施されている。9は胴部で，横位の平行沈線が3条，斜位に1条施文されている。10は胴部で，無文である。11は胴部で，異方向の斜位縄文が施されている。



第56図 第34号住居跡実測図

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第57図12	磨製石斧	(12.9)	4.5	2.8	(236.4)	緑泥片岩	覆土中層	Q28



第57図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図

表5 北前遺跡縄文時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	備考	
				長軸(m) 〔径〕	短軸(m) 〔径〕							
25	B13c _a	N-67°-W	[不整形円形]	4.15	3.63	28~40	凹凸	24	1	自然	縄文式土器片665点, 土製品1点, 石器4点。	貝ブロック。第24号住居跡より古い。
26	A13h _a	N-19°-E	円形	5.15	5.05	49~60	平坦	10	4	自然	縄文式土器片410点, 石器3点。	
30	B12d _a	N-35°-W	隅丸長方形	5.20	4.60	46~60	凹凸	4	1	自然	縄文式土器片853点, 土製品1点, 石器3点。	貝ブロック。
34	A12i	[N-25°-E]	[不整形円形]	5.40	3.90	28~40	平坦	-	-	自然	縄文式土器片11点, 石器1点。	第33号住居跡より古い。

(2) 土坑

縄文時代の土坑は2基検出されているが、ここでは第10号土坑1基について解説し、あとの1基は、遺存状態が悪いため一覧表に掲載する。

第10号土坑 (第58図)

位置 調査区の東部, B15e_a区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.00m, 短径0.87mの楕円形を呈し, 深さ29cmである。

長径方向 N-10°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 皿状。

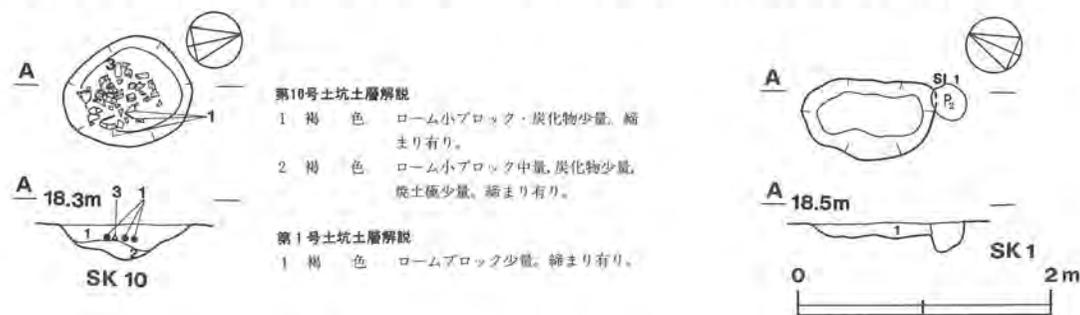
覆土 ローム小ブロックを含み、一時期に埋め戻された状態を示しているので人為堆積と思われる。

遺物 覆土下層から中層にかけては、縄文式土器片や凹石、自然石等が積み重ねられて出土している。覆土下層の南東部からは粘土ブロックや火熱を受けている石片が出土している。第59図1の深鉢形土器の口縁部片は中央部の覆土中層から石片とともに重なり合って出土している。第59図3の凹石は西部の覆土中層から多くの石片とともに出土している。

所見 本跡は、土器片や石片を使用した集石遺構と考えられる。出土遺物の特徴から縄文時代中期の土坑と考えられる。

第59図2は第10号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口唇部に沈線が口縁にそって巡り、口縁部の隆帯に波状に微隆起線を貼付し、沈線が施されている。胴部は無文である。

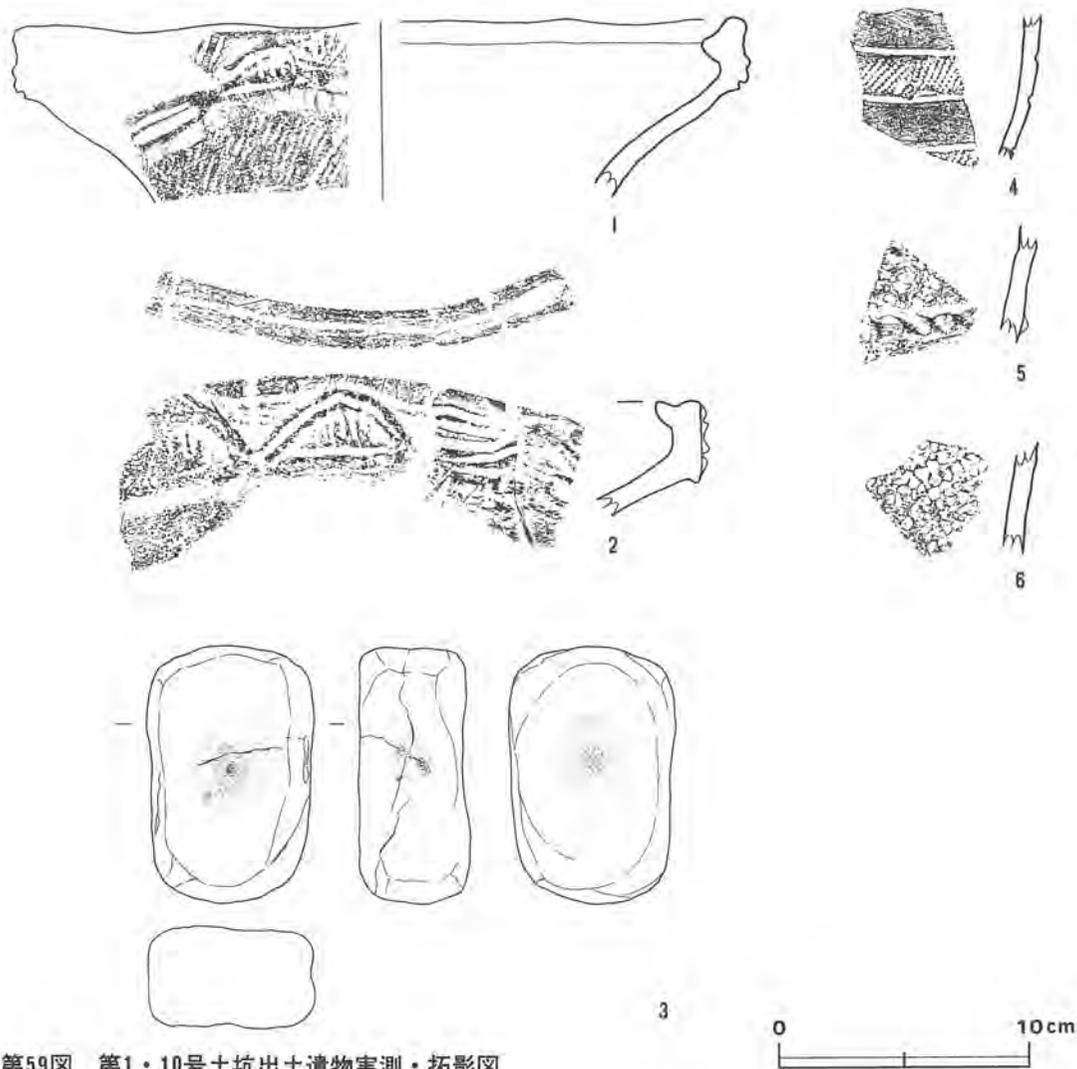
第59図4～6は、第1号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。4～6は胴部で、4は横位回転の単節縄文LRを地文として、横位に沈線を施し沈線間は磨消である。5は縄文地文に横位に連続指頭押圧による微隆起線が施され、6は横位回転の単節縄文LRが施されている。



第58図 第1・10号土坑実測図

第10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考			
第59図 1	深鉢形土器 (加曾利E)	A [38.2] B (9.5)	口縁部片。口縁部は胴部から大きく外反し、口縁部上位はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部上位の内面に隆線をもつ。口縁部文様は、隆線によって区画され、区画内は沈線が施されている。胴部は縦位回転の単節縄文RLが施されている。	砂粒・雲母・石英 にふい橙色 普通	P314 PL65 10% 中央部			
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第59図3	凹石	10.3	6.7	4.5	492.1	流紋岩	覆土中層	Q32



第59図 第1・10号土坑出土遺物実測・拓影図

表6 北前遺跡縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向 〔長軸〕	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径(軸)(m)	短径(軸)(m)	深さ(cm)						
1	A14e	〔N-23°-W〕	〔楕円形〕	1.04	0.65	47	緩斜	凹凸	不明	縄文式土器片4点。	第1号住居跡より古い。縄文時代後期。	第58図
10	B15e	N-10°-E	楕円形	1.00	0.87	29	緩斜	皿状	人為	縄文式土器片50点、土師器片2点、石器片11点、石29点。	築石遺構。縄文時代中期。	〃

2 古墳時代

当調査区の東部から北部、さらに北西部にかけて33軒（A区19軒、B区8軒、D区6軒）の竪穴住居跡が中央部の緩やかな低地を囲むように検出されている。重複している竪穴住居跡が少なく、遺存状態も良い。土坑は、当調査区の中央部及び北東部の竪穴住居跡周辺に4基検出されている。

以下、検出された竪穴住居跡及び土坑の特徴や出土遺物について記載していくことにする。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第60図)

位置 調査区の北東部, A14f₀区を中心に確認されている。本跡の西部は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の東コーナーは, 第1号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 本跡は, 全体の東側約5分の1しか確認できなかったが, 長軸 [5.55] m, 短軸 [2.84] m の方形を呈するものと推定される。

長軸方向 [N-20°-W]

壁 壁高は25~30cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 北壁下を除き, 全周している。上幅9~15cm, 深さ4~12cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

床 全体的に平坦であるが, 南壁付近にはやや凹凸が見られる。中央部は特に踏み固められて硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁は, 径62cmのほぼ円形を呈し, 深さ43cmで, 規模から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は調査区外のため検出されていない。P₂は径36cmの円形を呈し, 深さ19cmで, 出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₃~P₄は, 径21~28cmの円形を呈し, 深さ16~32cmで, 補助柱穴と思われる。

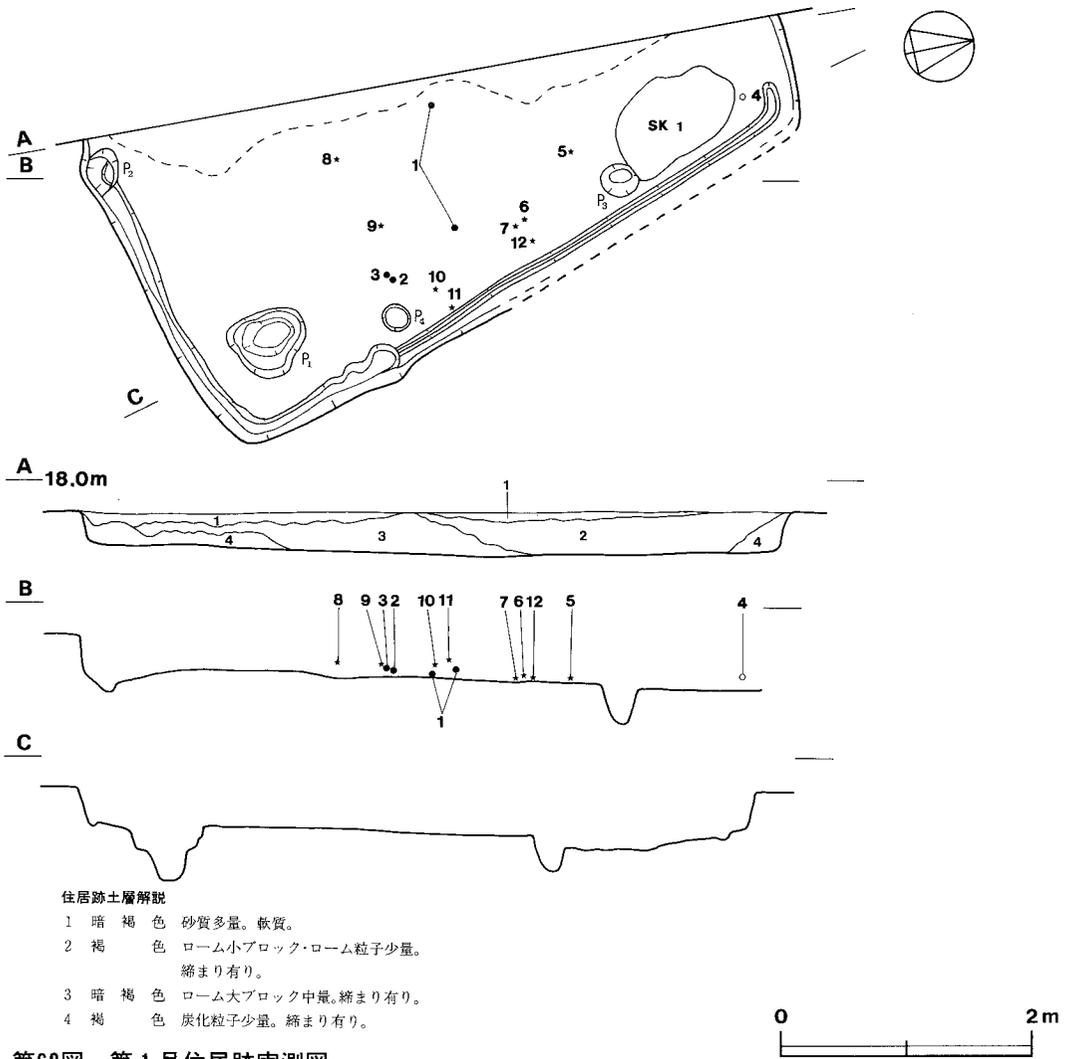
覆土 覆土下層は自然堆積であるが, 覆土中・上層はロームブロックを含んでおり, 人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土中層にかけては, 土師器片 (甕2, 甑1, 高坏1) や土師器の細片 (200点) が出土している。その他, 南東部の床面や覆土下層からは土製品が出土している。第61図2・3の甕・甑は南東部の覆土下層からつぶれた状態で, 第61図1の甕は中央部の床面から破片の状態で, 第61図4の高坏脚部は覆土中層からそれぞれ出土している。第61図5~14の土玉は南東部の床面や覆土下層から10点出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第1号土坑より新しい時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

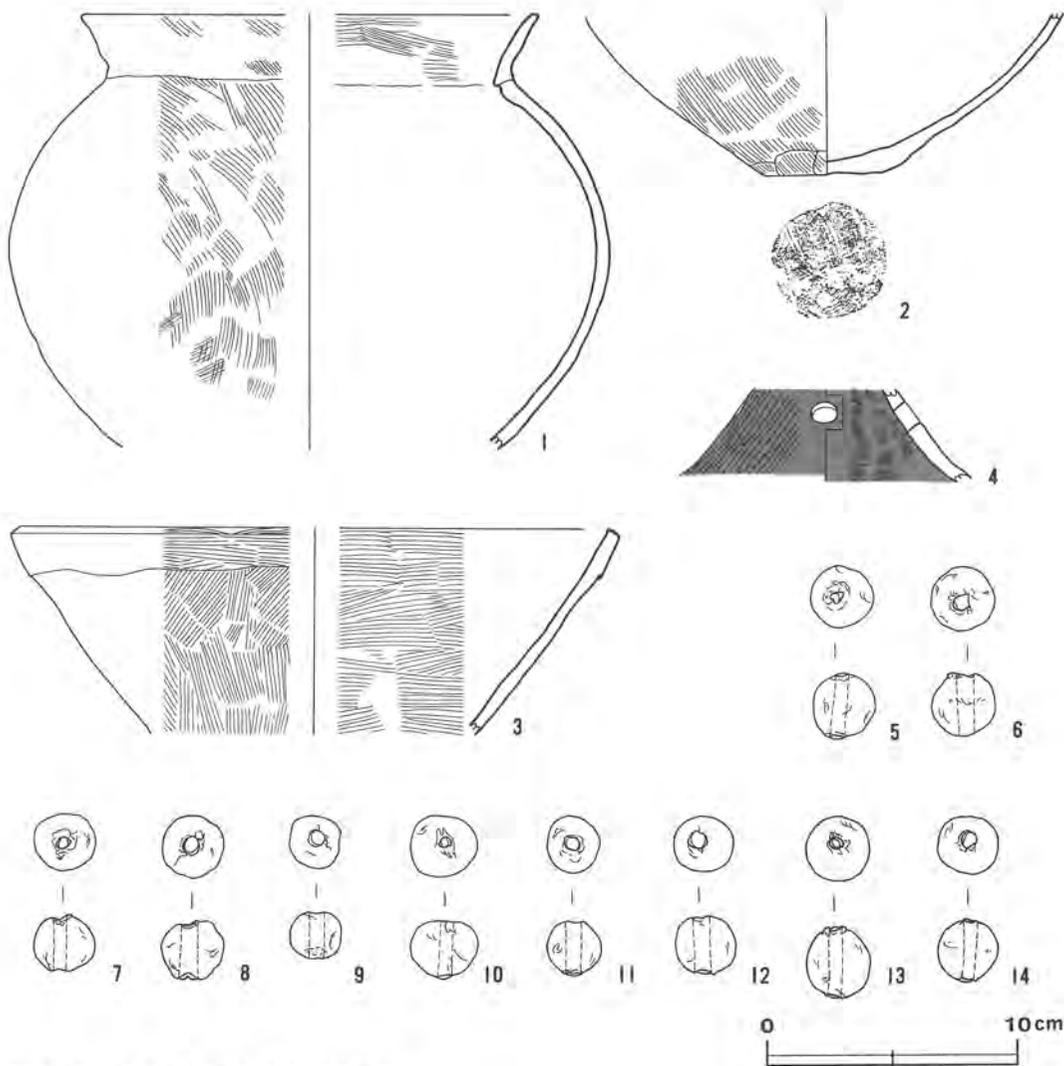
第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	甕 土師器	A [18.2] B (17.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し, 最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ, 内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形, 内面ヘラナデ。胴部内面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1 50% 全面煤付着 中央部床面



第60図 第1号住居跡実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 61 図 2	甕 土師器	B (6.4) C 4.9	底部の破片。平底。胴部はやや内彎して立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。胴部内面まだらに剝離。底部外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P 2 10% 南東部覆土下層
3	甕 土師器	A [24.4] B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、最大径を口縁端部にもつ。口縁部は薄い複合口縁。	内・外面の器面全体深いハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア にふい黄橙色 普通	P 3 PL16 10% 南東部覆土下層
4	高坏 土師器	B (3.7)	脚部。ラッパ状に下方へ開く。2孔が確認できる。	脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P 4 5% 覆土中層



第61図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第61図5	土玉	2.7	2.4	—	0.5	12.8	100	床面	DP 1
6	土玉	2.6	2.5	—	0.7	12.5	100	床面	DP 2
7	土玉	2.3	2.5	—	0.6	10.0	100	床面	DP 3
8	土玉	2.4	2.5	—	0.7	11.3	100	覆土下層	DP 4
9	土玉	1.9	2.0	—	0.7	6.7	100	覆土下層	DP 5
10	土玉	2.3	2.2	—	0.5	13.4	100	床面	DP 6
11	土玉	2.2	2.1	—	0.6	8.2	100	覆土下層	DP 7
12	土玉	2.4	2.4	—	0.7	10.5	100	床面	DP 8
13	土玉	2.9	2.6	—	0.5	16.2	100	覆土	DP 9
14	土玉	2.5	2.4	—	0.6	11.4	100	覆土	DP10

第2号住居跡 (第62図)

位置 調査区の北東部, A15g₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.85m, 短軸2.65mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-74°-E

壁 壁高は7~13cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 全体的に平坦で軟らかい。

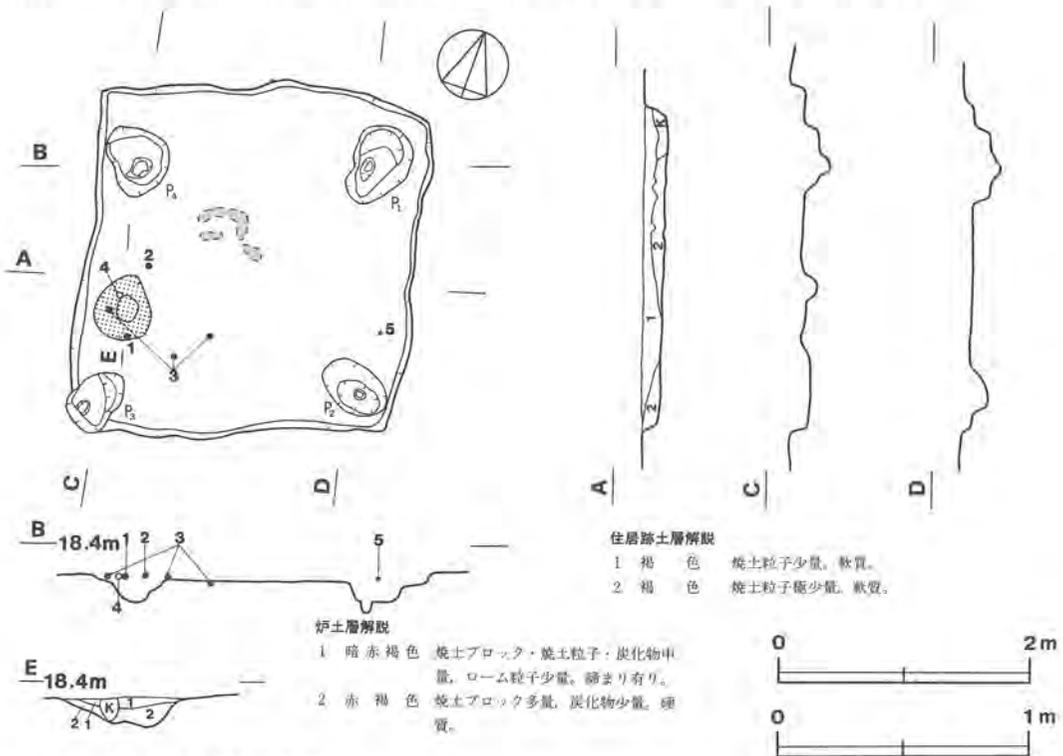
ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は, 径50~68cmの円形を呈し, 深さ17~24cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

炉 中央部から西寄りのP₃付近に検出されている。平面形は, 長径52cm, 短径46cmの不整楕円形を呈し, 床を約12cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼土がブロック状に赤変硬化している。

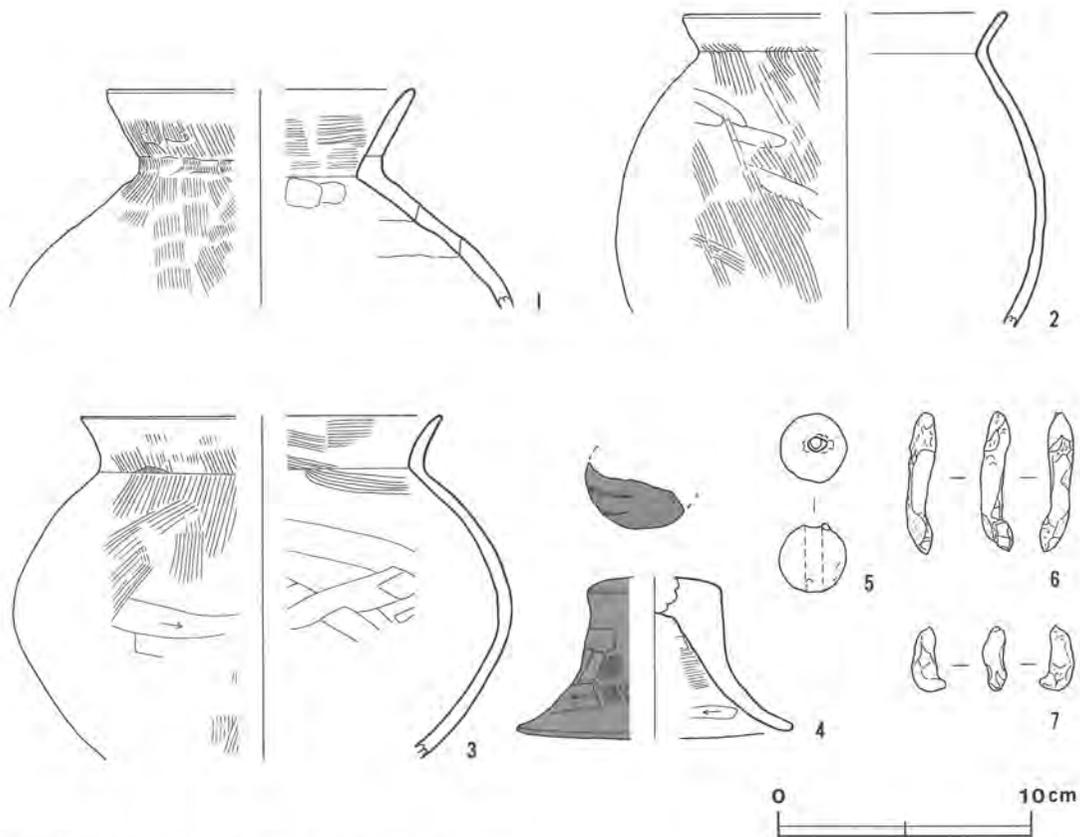
覆土 自然堆積。

遺物 中央部から南西部にかけては, 土師器片 (壺1, 甕2, 器台1) や土師器の細片 (229点) が出土している。第63図1の壺は, 炉直上からつぶれた状態で, 第63図3の甕は南西部の床面からつぶれた状態で, 第63図4の器台は炉直上からそれぞれ出土している。第63図5の土玉は東壁付近の床面から1点出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第62図 第2号住居跡実測図



第63図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	壺 土師器	A 12.2 B (8.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にふい黄橙色 良好	P 7 10% 炉直上
2	甕 土師器	A [12.8] B (12.7)	胴部下半欠損。胴部はやや長胴気味で、中位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は短く、外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内面ハケ目整形後ナデ。胴部外面斜位のハケ目整形後粗くヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P 5 PL16 40% 西壁中央部付近
3	甕 土師器	A [14.2] B (13.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部中位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形後ナデ。胴部外面粗くヘラ削り後ハケ目整形、内面ヘラ削り。	砂粒・スコリア にふい橙色 良好	P 6 PL16 40% 南西部床面
4	器台 土師器	A 5.4 B 6.5 C [12.0]	脚部はほぼ垂直に下がり、中位からラップ状に下方へ開く。器受部はほぼ平坦である。異形器台。	脚部内外面ハケ目整形後ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P 8 PL16 50% 黒斑及び煤付着 炉直上

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第63図5	土玉	2.8	2.6	—	0.8	16.3	100	床面	DP11
6	不明土製品	5.6	1.1	1.3	—	4.7	100	炉内	DP12-1
7	不明土製品	2.6	1.4	0.9	—	2.1	100	炉内	DP12-2

第3号住居跡 (第64図)

位置 調査区の北東部, A15h₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.52m, 短軸4.13mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は12~26cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 支柱穴の内側は良く踏み固められ硬い。

間仕切り溝 1条(a) 検出されている。南壁のやや南西コーナー寄りから床中央部に向かって延びている。長さ1.00m, 上幅8~12cm, 深さ約10cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

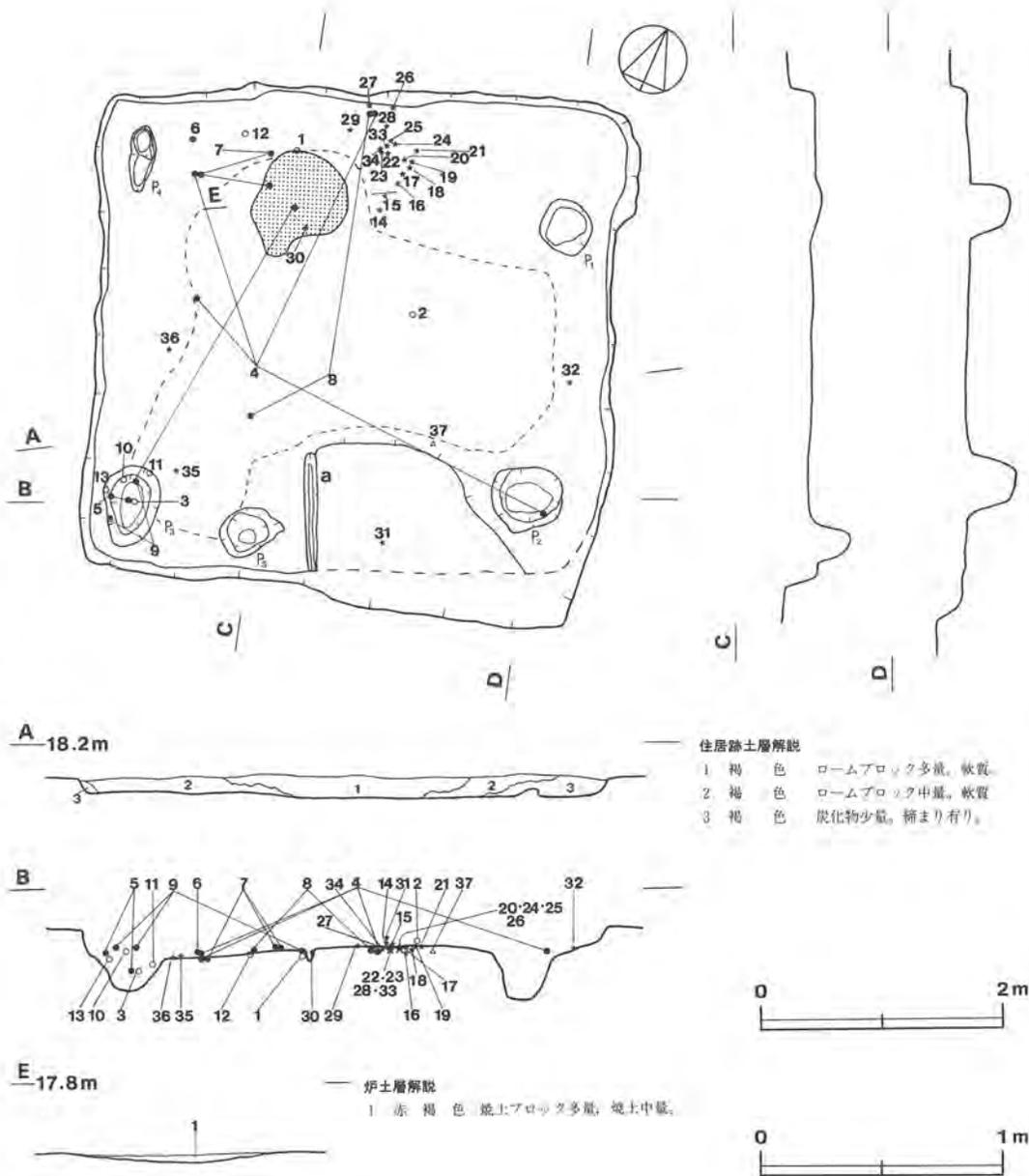
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₄は, 径21~69cmの円形を呈し, 深さ26~43cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は, 径47cmの円形を呈し, 深さ33cmで, 出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 中央部から北西寄りのP₄付近に検出されている。平面形は, 長径92cm, 短径74cmの不整楕円形を呈し, 床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は, 焼土がブロック状に赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 中央部から北西部及び南西コーナー付近にかけては, 土師器片 (壺2, 甕5, 台付甕1, 甗2, 鉢1, 埴2, 器台1) や土師器の細片 (247点) が出土し, その他は, 北西部の床面や南西部の覆土中層から土製品が多く出土している。第65図4・第66図6の甕は, 北西部の床面から正位の状態で, 第65図1の甕は, 炉直上から横位の状態で, 第65図2の壺は中央部の床面からつぶれた状態で, 第66図12の埴は北西コーナー付近の床面から横位の状態でそれぞれ出土している。南西コーナーのP₃覆土上層からは, 第65図5の甕が横位の状態で, 第65図3の壺が正位の状態で, 第66図9の甗が正位の状態で, 第66図10の鉢が正位の状態でそれぞれ出土している。第66・67図の土玉は, 炉直上及びその周辺からまとまって23点出土し, その他は東壁, 南壁付近の床面から点在して出土している。第67図37の管玉は覆土中層から出土している。

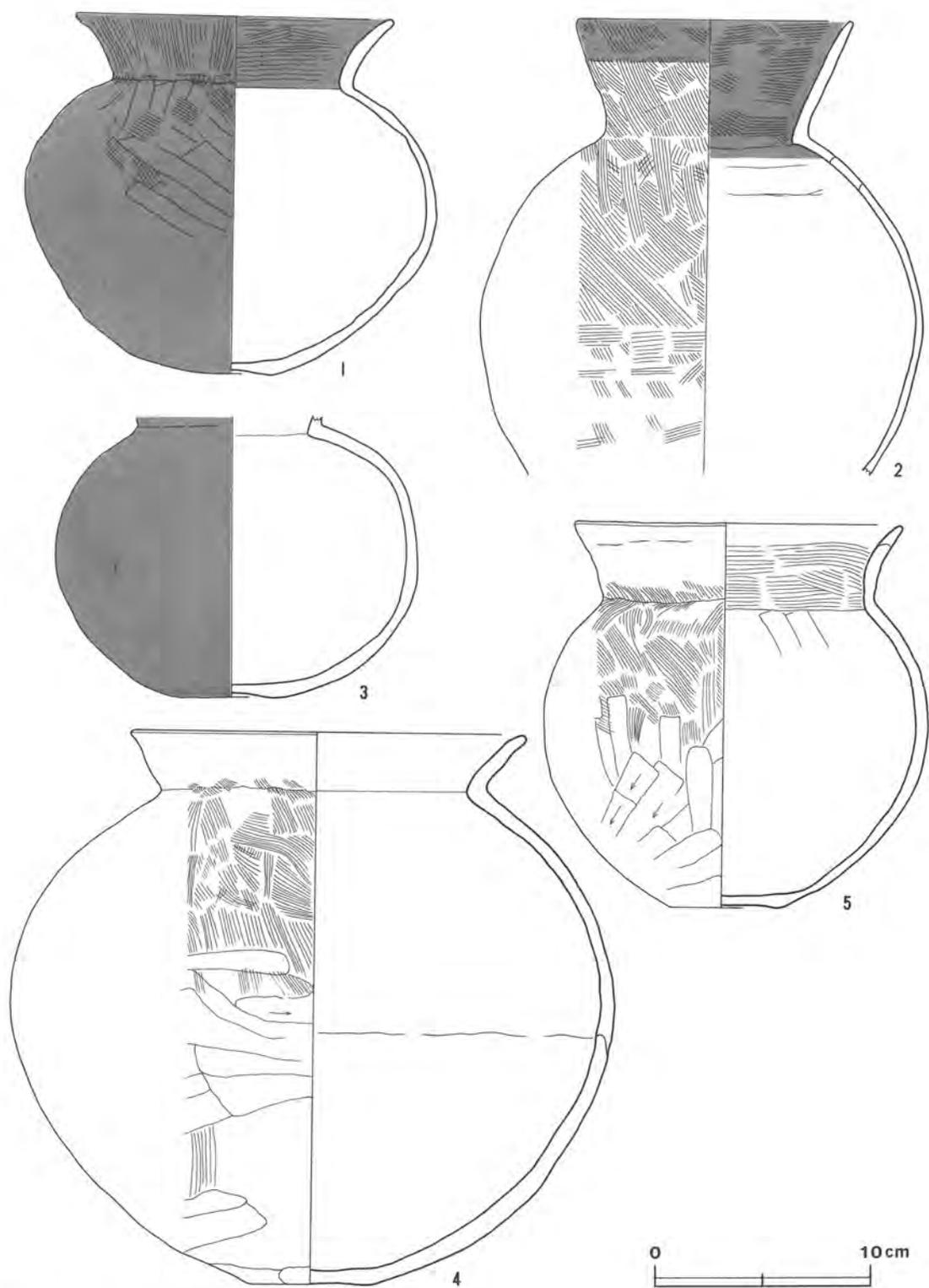
所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



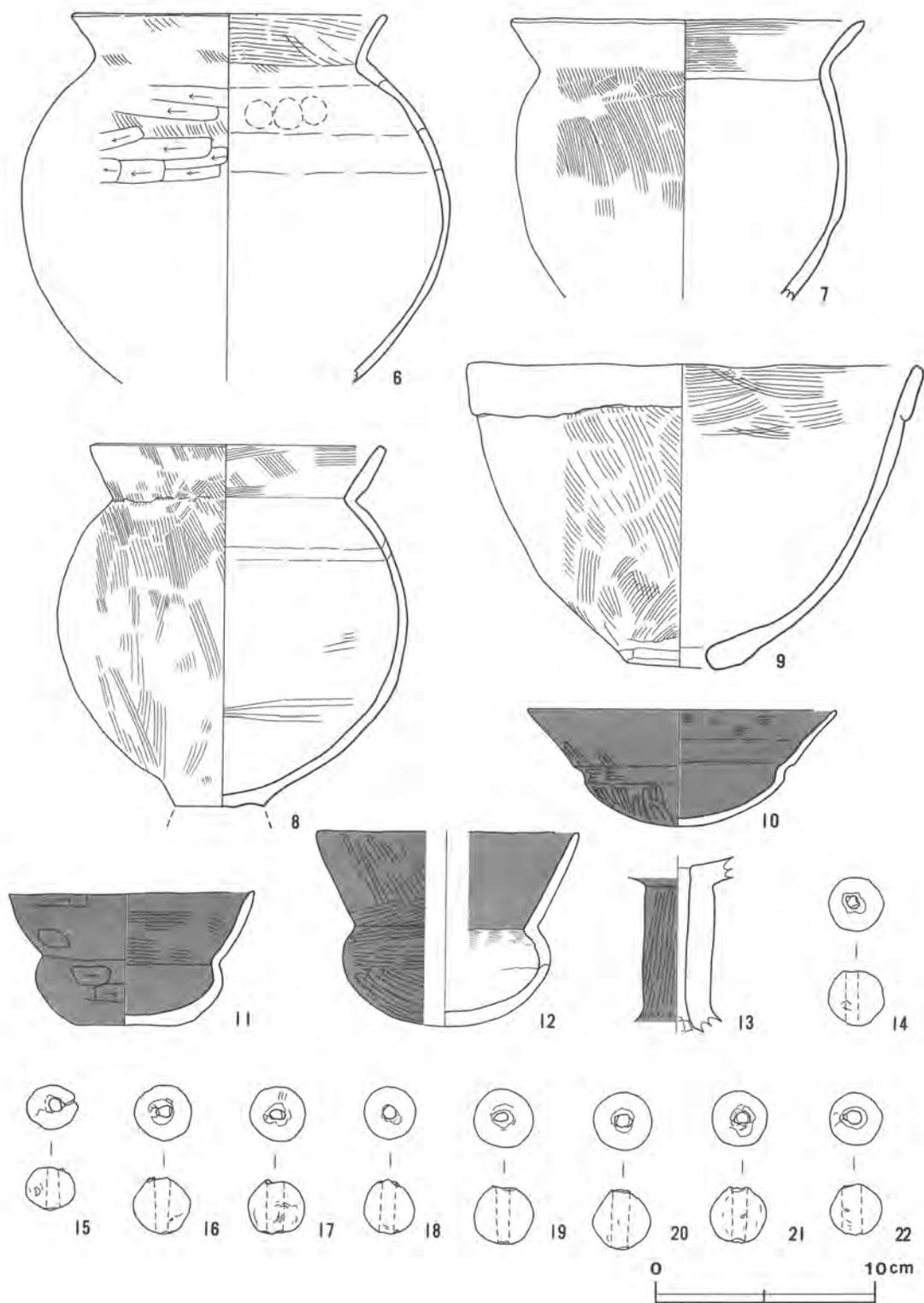
第64図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

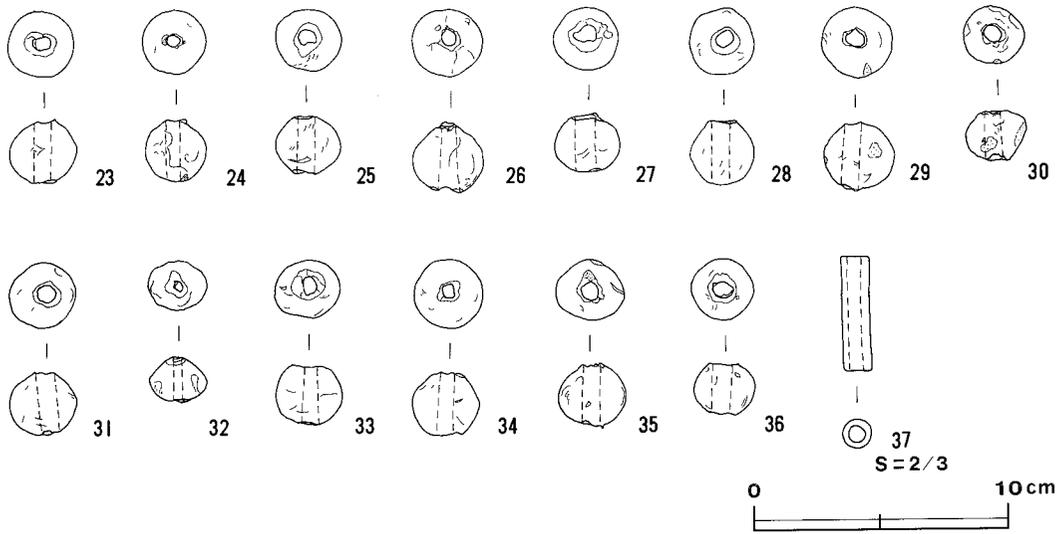
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	壺 土師器	A 14.8 B 17.1 C 3.6	底部はやや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後丁寧なヘラ磨き。胴部外面ハケ目整形後丁寧なヘラナデ、内面ヘラナデ。内・外面ただらに剥離。胴部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P10 PL18 90% 煤付着 二次焼成 炉直上



第65图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第66图 第3号住居跡出土遺物実測図(2)



第67図 第3号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 2	壺 土師器	A 13.0 B (22.6)	胴部下半を欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上る。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面深いハケ目整形、内面ヘラナデ。内・外面まだらに剝離。口縁部上位及び内面赤彩。	砂粒・長石 にふい黄橙色 普通	P15 PL18 70% 中央部床面
3	壺 土師器	B (13.4) C 4.5	口縁部欠損。底部は上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面ヘラ削り後丁寧なヘラナデ、内面ヘラナデ。内・外面まだらに剝離。胴部外面赤彩。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 良好	P16 PL18 80% P3覆土上層
4	甕 土師器	A 18.7 B 26.9 C 5.6	平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状にやや外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラ削り、内面ヘラナデ。胴部外面下位ヘラ削り、中位から上位にかけて斜位のハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P9 PL18 80% 西北部床面
5	甕 土師器	A 15.4 B 18.3 C 4.8	底部はやや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面下位ヘラ削り、中位から上位にかけてハケ目整形、内面ヘラ削り。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P11 PL18 95% 煤付着 P3覆土上層
第66図 6	甕 土師器	A 14.5 B (17.3)	胴部下半を欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ヘラ削り内面ヘラナデ。内・外面まだらに剝離。指頭圧痕、輪積み痕有り。	砂粒 橙色 普通	P12 PL18 60% 西北部床面
7	甕 土師器	A 16.4 B (13.1)	胴部下半を欠損。胴部はやや長胴で最大径を口径にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ヘラナデ、内面ハケ目整形後ナデ。胴部外面下位ヘラナデ、中位から上位にかけてハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P13 PL18 60% 西北部床面

図版番号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第66図 8	甕 土 師 器	A 13.9 B 17.0	上部を欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P14 PL18 70% 口縁部煤付着 台付甕再利用 南西コーナー付 近床面
9	甗 土 師 器	A 21.1 B 14.4 C 4.2	平底。内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁。単孔。	口縁部外面ハケ目整形後丁寧なナデ、内面ハケ目整形。体部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・雲母・礫・スコリア 橙色 普通	P17 PL18 90% P3覆土上層
10	埴 土 師 器	A 14.3 B 5.5	丸底。体部は半球状を呈し、中位に稜を有し、口縁部は大きく外反して立ち上がる。	口縁部外面ヘラナデ後磨き、内面ハケ目整形後ナデ。体部内・外面丁寧なヘラナデ。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 明赤褐色 良好	P18 PL18 90% P3覆土上層
11	埴 土 師 器	A 11.4 B 6.4 C 4.7	平底。胴部は扁平な半球形を呈し、口縁部は頸部からやや内彎気味に立ち上がる。	口縁部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ナデ。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア・長石 明赤褐色 普通	P19 PL18 100% P3覆土上層
12	埴 土 師 器	A [12.1] B 9.2	丸底。胴部は半球形を呈し、口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き、内面丁寧なナデ。底部から胴部内・外面ヘラ磨き内面まだらに剝離。胴部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P20 PL18 60% 北西コーナー付 近床面
13	器 台 土 師 器	B (8.3) E (7.0)	脚部片。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。脚部中央に単孔。	脚部外面丁寧なヘラ磨き、内面ヘラ削り。赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P21 30% 南西コーナー付 着

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第66図14	土 玉	2.5	2.5	—	0.6	14.8	100	床 面	DP13
15	土 玉	2.0	2.5	—	0.6	7.9	100	床 面	DP14
16	土 玉	2.6	2.7	—	0.8	16.2	100	床 面	DP15
17	土 玉	2.6	2.6	—	0.8	14.4	100	床 面	DP16
18	土 玉	2.5	2.4	—	0.6	11.9	100	床 面	DP17
19	土 玉	2.7	2.8	—	0.6	16.3	100	床 面	DP18
20	土 玉	2.7	2.8	—	0.8	15.6	100	床 面	DP19
21	土 玉	2.6	2.6	—	0.7	14.2	100	床 面	DP20
22	土 玉	2.3	2.4	—	0.9	11.6	100	床 面	DP21
第67図23	土 玉	2.4	2.6	—	0.7	13.8	100	床 面	DP22
24	土 玉	2.4	2.5	—	0.6	12.9	100	床 面	DP23
25	土 玉	2.3	2.6	—	0.7	12.4	100	床 面	DP24
26	土 玉	2.8	2.7	—	0.5	16.5	100	床 面	DP25
27	土 玉	2.3	2.5	—	0.9	12.2	100	床 面	DP26
28	土 玉	2.5	2.0	—	0.7	14.3	100	床 面	DP27
29	土 玉	2.7	2.8	—	0.6	17.2	100	床 面	DP28
30	土 玉	1.9	2.3	—	0.6	8.1	100	床 面	DP29

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第67図31	土玉	2.5	2.6	—	0.7	14.8	100	覆土中層	DP30
32	土玉	1.8	2.3	—	0.3	7.2	100	覆土下層	DP31
33	土玉	2.4	2.6	—	0.6	13.1	100	床面	DP32
34	土玉	2.5	2.7	—	0.5	15.6	100	床面	DP33
35	土玉	2.6	2.6	—	0.6	13.2	100	床面	DP34
36	土玉	2.0	2.4	—	0.8	11.0	100	床面	DP35

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第67図37	管玉	2.3	0.6	—	1.2	滑石	覆土中層	Q1

第4号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区の北東部, A15f₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.81m, 短軸7.56mの方形を呈している。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は48~50cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 北東壁下を除いて全周している。上幅10~17cm, 深さ4~6cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

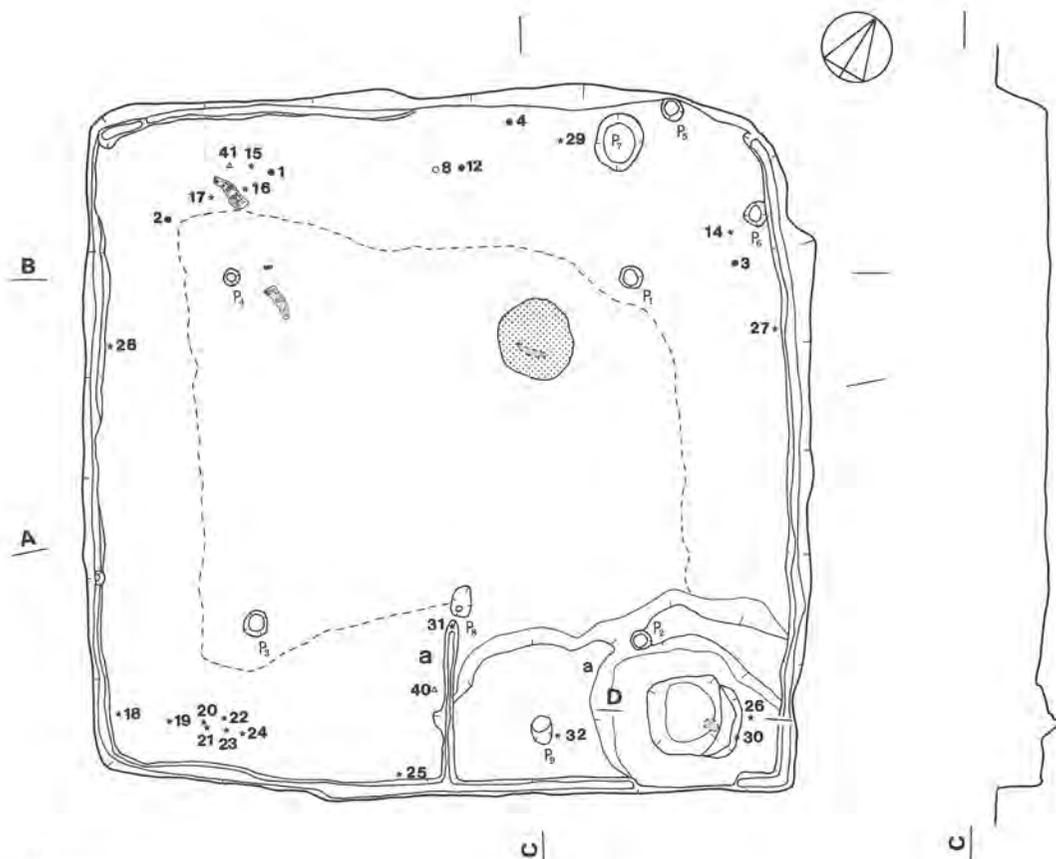
間仕切り溝 1条(a)検出されている。南東壁のほぼ中央から床中央部に向かって, P₂とP₃を結ぶ線まで延びている。長さ1.75m, 上幅11~19cm, 深さ10~14cmで, 断面形は「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で, 支柱穴の内側は, 特に良く踏み固められて硬い。南東壁中央部付近には出入口部と考えられる長方形の高まりが確認されており, その中央には梯子ピット (P₉) が確認されている。出入口部と床との比高は6~10cmである。東コーナー付近の貯蔵穴の周りにはベルト状の高まりが確認されている。ベルト状の高まりと床との比高は6~10cmである。

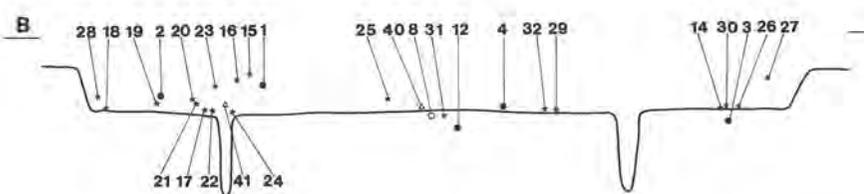
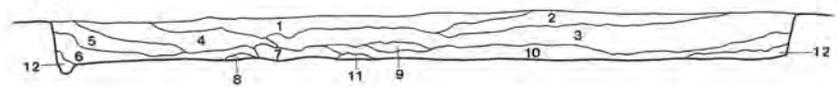
ピット 9か所 (P₁~P₉) 検出されている。P₁~P₄は, 径17~22cmの円形を呈し, 深さ84~88cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。P₉は, 径29cmの円形を呈し, 深さ24cmで, 出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₅~P₈は, 径24~60cmの円形を呈し, 深さ14~19cmで, 補助柱穴と思われる。

炉 中央部から北寄りのP₁付近に検出されている。平面形は, 径88cmの円形を呈し, 床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼土がブロック状に赤変硬化している。また, 炉内の南部には, 長さ約35cm, 幅4~7cmの棒状の柔らかい粘土塊が確認されている。

貯蔵穴 東コーナーに検出されている。平面形は, 長径102cm, 短径81cmの隅丸長方形を呈し, 深

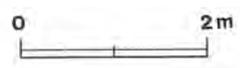


A 18.0m



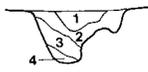
住居跡土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土・炭化物中量, ロームブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。 | 7 褐色 | ローム粒子多量, 焼土・炭化物少量。縮まり有り。 |
| 2 褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土・炭化物少量。縮まり有り。 | 8 褐色 | ロームブロック・焼土・炭化材中量。縮まり有り。 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子・焼土・炭化物多量。縮まり有り。 | 9 明褐色 | ローム粒子中量, 焼土・炭化材少量。縮まり有り。 |
| 4 褐色 | ロームブロック・ローム粒子・焼土少量。縮まり有り。 | 10 暗褐色 | 炭化材多量, ローム粒子・焼土少量。粘性, 縮まり有り。 |
| 5 明褐色 | ロームブロック多量, 焼土・炭化材少量。縮まり有り。 | 11 褐色 | ローム粒子・焼土・炭化物・炭化材多量。粘性, 硬質。 |
| 6 暗褐色 | 焼土・炭化材多量, ロームブロック・ローム粒子中量。縮まり有り。 | 12 褐色 | ロームブロック中量。縮まり有り。 |



第68図 第4号住居跡実測図(1)

D 17.6m



貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量、炭化材少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量。軟質。
- 3 暗褐色 ローム中ブロック少量。軟質。
- 4 黒褐色 締まり有り。



第69図 第4号住居跡実測図(2)

さ56cmである。貯蔵穴の東部は、階段状に掘り込まれ、北東壁の段の平坦部からは粘土塊が出土している。

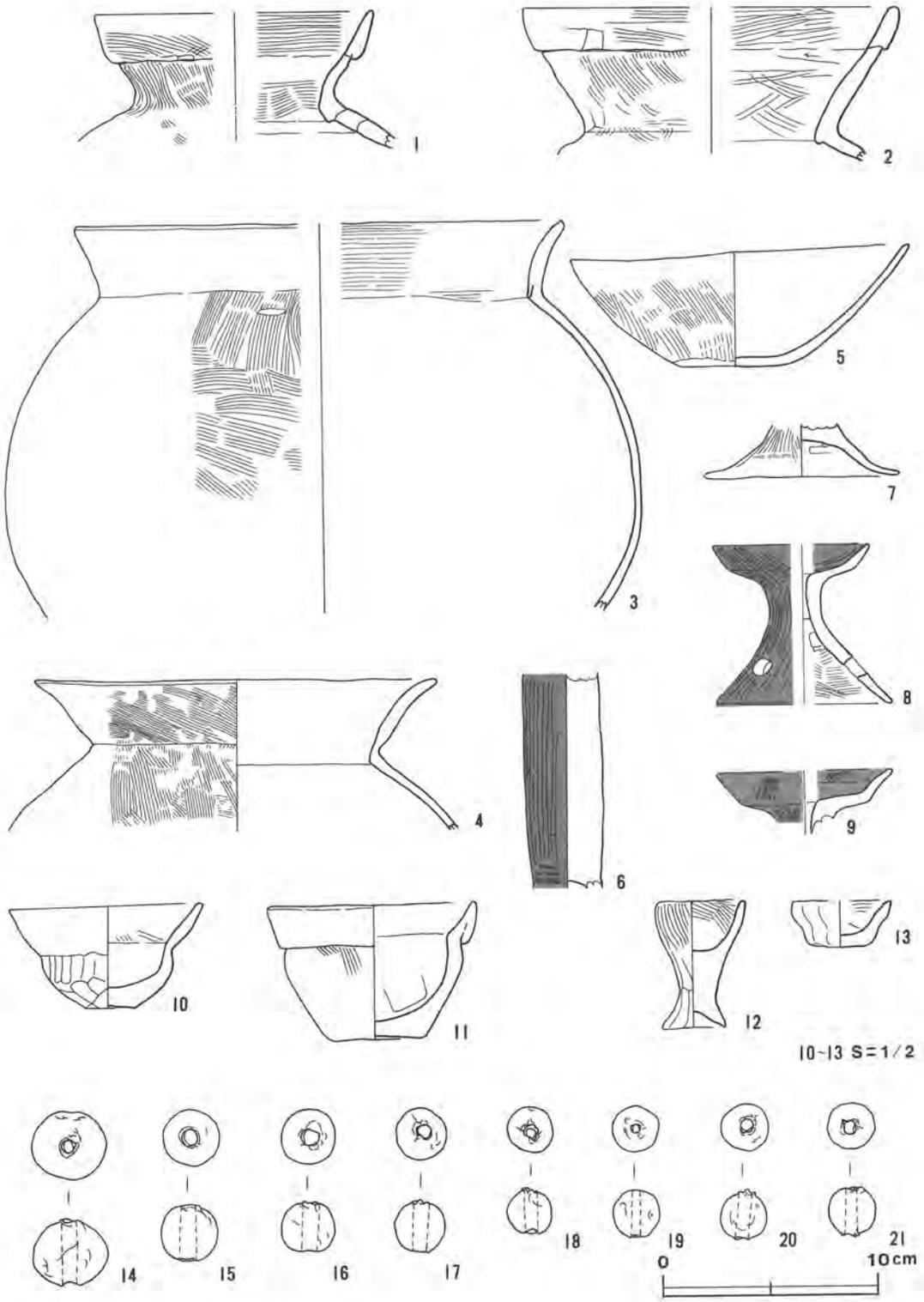
覆土 覆土上層は、自然堆積である。覆土中層から下層は、ロームブロックを均一に含み、最下層部は、焼土、炭化材、ロームブロック及び6~10cmのローム土を含み人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片(壺2, 甕2, 鉢1, 高坏2, 器台2, ミニチュア4)や土師器の細片(778点)が出土している。その他、土製品や石製品は床面から覆土中層にかけて少量出土している。第70図3の甕は北東壁際の床面につぶれた状態で、第70図1の壺は北西壁の西コーナー付近の覆土中層から、第70図8の器台は北西壁中央部付近の床面から横位の状態で出土している。第70・71図14~39の土玉は壁付近から点在して26点出土している。第71図40の砥石は南東壁中央部付近の床面から出土している。さらに、炭化米が炉内や貯蔵穴内及び中央部から北東壁にかけての床面、床内から多量に出土している。

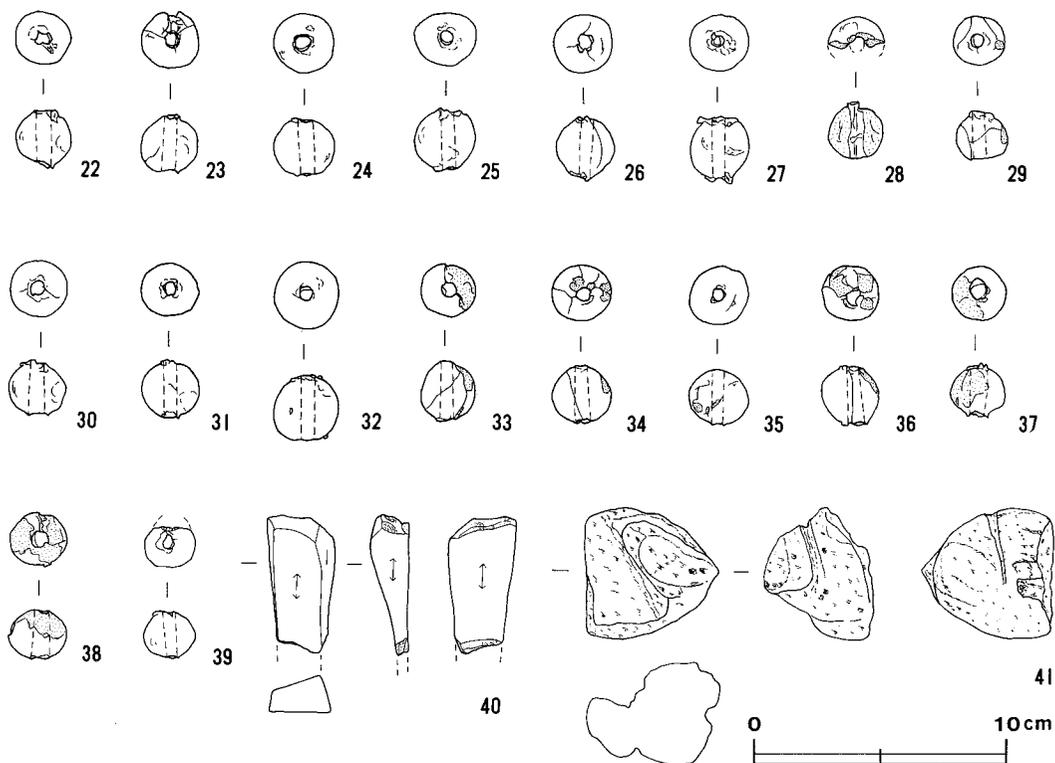
所見 本跡は、当遺跡の中では一番大きな住居跡である。全域にわたり焼土や炭化材や炭化米等が出土していることから、火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	壺 土師器	A [13.0] B (6.4)	胴部上半から口縁部にかけての破片。頸部はやや外反し、口縁部で内彎気味に立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P24 PL19 10% 内・外面煤付着 西コーナー付近 北西壁の覆土中層
2	壺 土師器	A [17.6] B (7.2)	口縁部の破片。口縁部は頸部から「く」の字状を呈し、やや内彎気味に立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後粗くヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P25 10% 外面煤付着 西コーナー付近 覆土下層
3	甕 土師器	A [22.8] B (18.3)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部より外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・スコリア にふい黄色 普通	P22 PL19 40% 外面黒斑及び煤付着 北東壁際床面



第70图 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第71図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 4	甗 土師器	A 18.8 B (7.1)	胴部上半から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒 20% 普通	P23 口縁部内面黒斑及び煤付着 覆土下層
5	鉢 土師器	A 15.7 B 5.6 C 4.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。単口縁。	体部内・外面ハケ目整形後ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒 にふい橙色 普通	P26 PL19 60% 内面煤付着 覆土
6	高土師 坏器	E (10.1)	脚部片。やや中位に膨らみをもつ中実柱状の脚部である。	丁寧なヘラ磨き。赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にふい赤橙色 普通	P27 20% 北コーナー付近 覆土上層
7	高土師 坏器	D 9.2 E (2.5)	脚部片。ラッパ状に下方へ開く。	脚部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P28 20% 貯蔵穴内覆土中層
8	器台 土師器	A [7.4] B 7.5 D [8.2] E 5.7	脚部から器受部にかけての破片。脚部は器受部から「ハ」の字状に下方へ開く。器受部の下位に稜をもち大きく外傾して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面丁寧なヘラ磨き。脚部外面丁寧なヘラ磨き、内面ハケ目整形。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P29 50% 北西壁中央部付近床面

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 9	器台器 土師器	A [8.2] B (3.0)	器受部片。器受部下端に稜をもち、外反して立ち上がり、器受部内面中位にもわずかに稜をもつ。器受部中央に単孔。	器受部内・外面丁寧なヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P30 25% 北東壁中央部付 近覆土
10	ミニチュア 土器 土師器	A 6.0 B 3.3 C 1.6	埴形。体部一部欠損。平底で、体部は半球状を呈し、口縁部は外傾し、中位からやや内彎気味に立ち上がる。	口縁部外面ヘラナデ、内面ハケ目整形後ヘラナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・バミス にふい黄橙色 普通	P31 70% 東コーナー付近 覆土上層
11	ミニチュア 土器 土師器	A 6.6 B 4.2 C 3.0	鉢形。底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は半球状を呈し、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部外面ハケ目整形後ナデ、内面ヘラ削り。	砂粒 黒色 普通	P32 50% 覆土
12	ミニチュア 土器 土師器	A 2.8 B 4.0 D 2.0 E 1.1	台付埴形。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。器厚を減じながら、埴部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。	埴部内・外面粗いハケ目整形後ナデ。台部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P33 100% 北西壁中央部付 近床面
13	ミニチュア 土器 土師器	A [3.0] B 1.5 C 1.8	鉢形。口縁部欠損。平底。体部はやや内彎し、上位で器厚を減じながらほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P34 60% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第70図14	土玉	3.2	3.5	—	0.7	29.4	100	床面	DP36
15	土玉	2.7	2.3	—	0.7	15.7	100	覆土上層	DP37
16	土玉	2.4	2.5	—	0.8	13.1	100	覆土中層	DP38
17	土玉	2.4	2.4	—	0.7	11.4	100	床面	DP39
18	土玉	2.2	2.2	—	0.6	7.7	100	床面	DP40
19	土玉	2.2	2.2	—	0.4	8.8	100	床面	DP41
20	土玉	2.4	2.2	—	0.6	8.6	100	覆土下層	DP42
21	土玉	2.3	2.2	—	0.5	8.7	100	床面	DP43
第71図22	土玉	2.4	2.2	—	0.6	8.8	100	床面	DP44
23	土玉	2.9	2.2	—	0.5	9.0	100	覆土中層	DP45
24	土玉	2.3	2.4	—	0.6	10.4	100	床面	DP46
25	土玉	2.5	2.5	—	0.5	10.3	100	覆土下層	DP47
26	土玉	2.7	2.3	—	0.5	7.5	100	床面	DP48
27	土玉	2.7	2.4	—	0.5	11.5	100	覆土中層	DP49
28	土玉	2.3	2.2	—	0.5	(3.9)	50	覆土下層	DP50
29	土玉	2.0	2.1	—	0.5	6.2	100	床面	DP51
30	土玉	2.3	2.3	—	0.5	8.7	100	床面	DP52
31	土玉	2.3	2.3	—	0.5	9.1	100	床面	DP53
32	土玉	2.7	2.6	—	0.5	15.8	100	床面	DP54
33	土玉	2.4	2.2	—	0.5	8.9	100	覆土	DP55
34	土玉	2.4	2.4	—	0.5	9.4	100	覆土	DP56
35	土玉	2.3	2.4	—	0.5	2.1	100	覆土	DP57
36	土玉	2.4	2.3	—	0.5	8.9	100	覆土	DP58
37	土玉	2.2	2.2	—	0.7	7.2	100	覆土	DP59

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第71図38	土玉	2.0	2.3	—	0.6	(7.4)	90	覆土	DP60
39	土玉	1.9	2.1	—	0.5	(5.2)	80	覆土	DP61

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第71図40	砥石	(5.6)	(2.7)	(1.5)	25.1	凝灰岩	床面	Q2
41	浮石	5.3	5.3	4.4	34.4	軽石	覆土下層	Q3 砥石に転用

第5-A号住居跡 (第72・73図)

位置 調査区の北東部, A15e₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部を第5-B号住居跡によって, 3分の2程掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [2.57] m, 短軸2.50 mの長方形を呈するものと推定される。

主軸方向 N-69°-E

壁 壁高は32cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 やや凹凸があるが, ローム土で締まりがあり硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は, 径23・24cmの円形を呈し, 深さ7・14cmで支柱穴と考えられる。

炉 床中央部の東側から検出されている。平面形は, 長径45cm, 短径32cmの楕円形を呈し, 床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。

覆土 焼土粒子, 炭化物, ローム小ブロック, ローム中ブロックが含まれ, 人為堆積と思われる。

遺物 覆土下層から土師器の細片 (43点) が少量が出土している。第74図7~12の土玉は, 北東壁中央部付近の床面や覆土から点在して6点出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第5-B号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第5-B号住居跡 (第72・73図)

位置 調査区の北東部, A15f₈区を中心に確認されている。

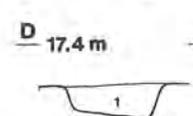
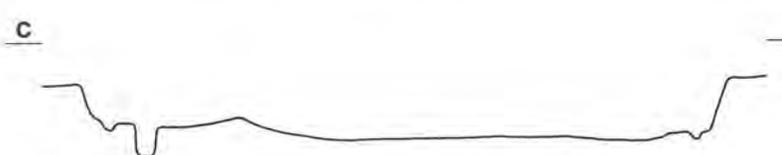
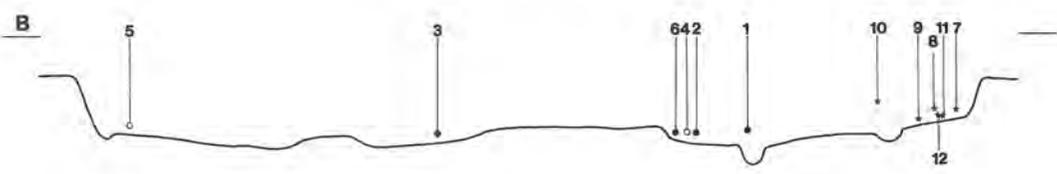
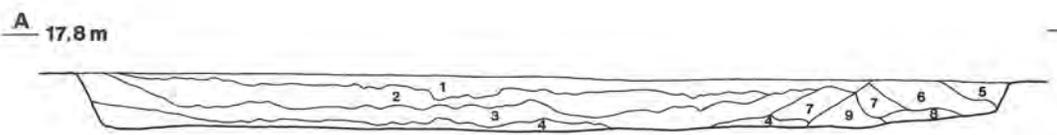
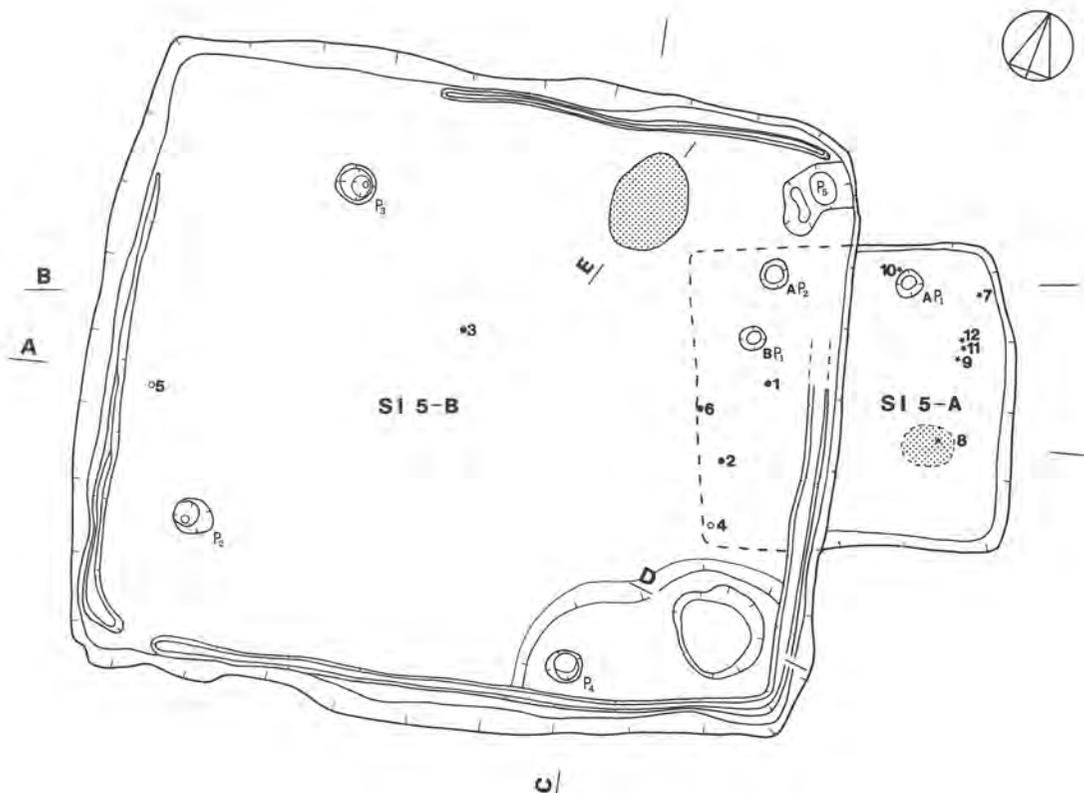
重複関係 本跡の北東部は, 第5-A号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.92m, 短軸5.25mの長方形を呈している。

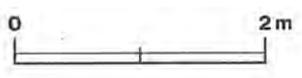
主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は40~55cmで, 外傾して立ち上がっている。

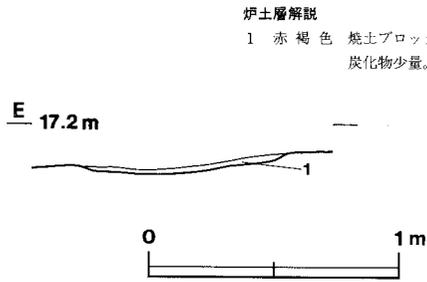
壁溝 北壁の一部を除き壁下を回っている。上幅8~23cm, 深さ6~8cmで, 断面形は, 「U」字



貯蔵穴土層解説
 1 褐色 焼土小ブロック・炭化物中量。締まり有り。



第72図 第5-A・5-B号住居跡実測図(1)



第73図 第5-A・5-B号住居跡実測図(2)

住居跡土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物少量。縮まり有り。
2	褐色	焼土・炭化物少量、ローム中ブロック極少量。縮まり有り。
3	褐色	ローム中ブロック・ローム粒子・焼土・炭化物少量。縮まり有り。
4	明褐色	ローム中・大ブロック・炭化物少量。硬質。
5	にぶい褐色	焼土・炭化物少量、ローム粒子極少量。縮まり有り。
6	褐色	ローム中ブロック・焼土・炭化物少量。縮まり有り。
7	褐色	ローム中ブロック・焼土・炭化物少量。縮まり有り。
8	明褐色	ロームブロック・焼土・炭化物少量。縮まり有り。
9	明褐色	ローム中・大ブロック少量。硬質。

状を呈している。

床 全体的に軟らかく、わずかの凹凸が見られる。南東コーナー付近には半円形の出入口部と考えられる高まりが確認されており、その南西部には梯子ピット（P₄）が確認されている。出入口部と床との比高は10～14cmで踏み固められ硬い。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₂・P₃は、径33cmの円形を呈し、深さ24・25cmで主柱穴と思われる。P₄は、径38cmの円形を呈し、深さ36cmで出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₁は、径20cmの円形を呈し、深さ13cmで、補助柱穴と思われる。P₅は、径41cm、深さ10cmで、性格は不明である。

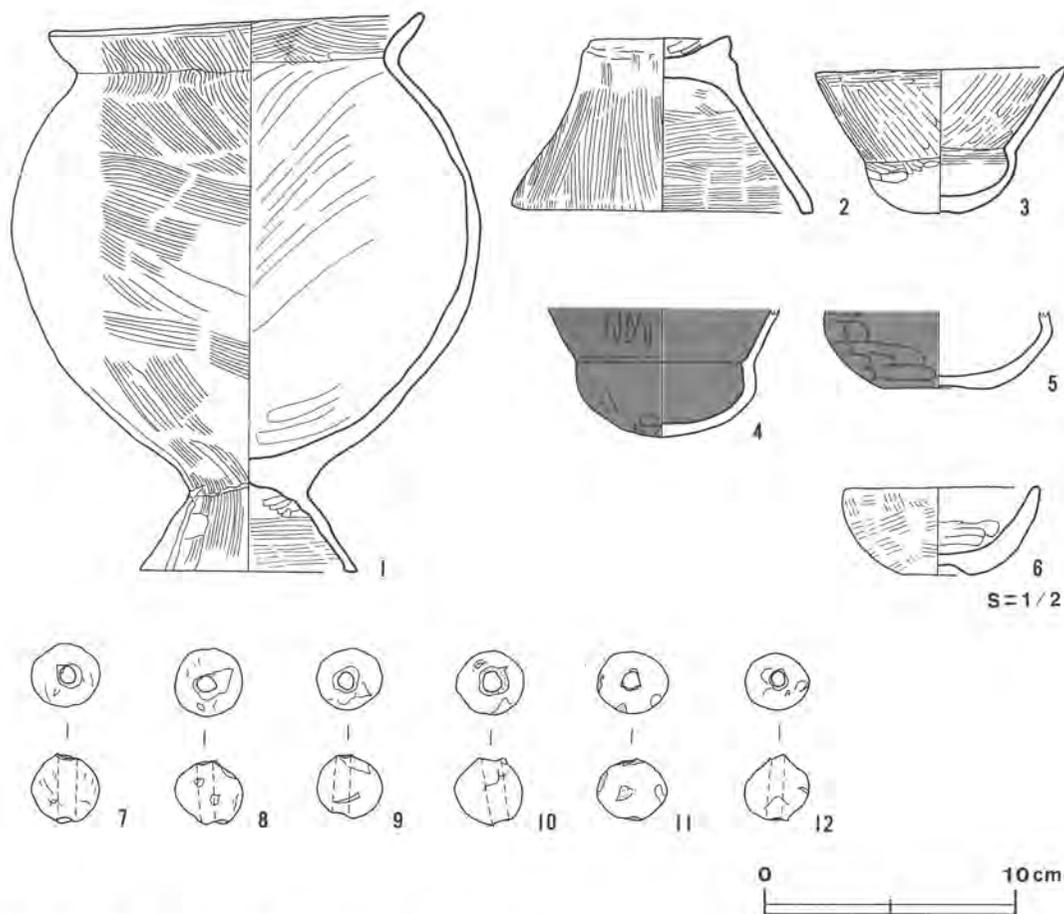
炉 中央から北東寄りに検出されている。平面形は、長径82cm、短径62cmの楕円形を呈し、床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、焼土がレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 南東コーナーから検出されている。平面形は、径76cmの不整円形を呈し、深さ28cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけて、土師器片（台付甕2、埴3、ミニチュア1）や土師器の細片（201点）が出土している。第74図1の台付甕は、東壁中央部付近の床面からつぶれた状態で、第74図2の台付甕の台部は、東壁やや南寄りの床面から正位の状態で、第74図4の埴は中央部の床面から破片の状態で、第74図3の埴は床中央部の覆土下層から、第74図6の鉢形ミニチュア土器は東壁中央部付近の床面から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第5-A号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と思われる。



第74図 第5-A・5-B号住居跡出土遺物実測図(3)

第5-A・5-B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	台付 土師器	A 15.3 B 22.5 D 8.7 E 3.2	胴部一部欠損。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形後中位へラ削り、内面へラナデ。台部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア 赤黒色 普通	P35 PL20 80% 全面煤付着 二次焼成 東壁中央部付近床面
2	台付 土師器	B (7.1) D 12.0 E 5.4	台部片。台部は「ハ」の字状に下方へ開き、下位でやや内彎気味に裾部に至る。	台部内・外面ハケ目整形。	砂粒 にふい・橙色 普通	P36 PL20 20% 二次利用 東壁中央部からやや南寄りの床面
3	埴 土師器	A 10.0 B 6.0 C 1.8	体部から口縁部の一部欠損。やや上げ底。体部は半球形状を呈し、最大径を頸部下位にもつ。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P37 PL20 70% 覆土下層

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 74 図 4	埴 土 師 器	B (5.2)	丸底。口縁部一部欠損。体部は半球形を呈し、最大径を頸部下位にもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部内・外面へラ磨き。内面磨耗が著しい。内・外面とも赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P 38 50% 中央部床面覆土
5	埴 土 師 器	B (3.1) C 4.0	体部から口縁部にかけての破片。やや上げ底。体部は扁平な半球形を呈し、最大径を頸部下位にもつ。	体部外面へラ削り、内面へラナデ。内面まだらに剥離。体部内面を除き赤彩。	砂粒・長石・スコ リア・雲母 明赤褐色 普通	P 39 30% 西壁中央部付近 覆土上層
6	ミニチュア 土 器 土 師 器	A 5.0 B 2.4 C 1.5	碗形。上げ底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後ナデ、内面へラ削り後ナデ。	砂粒・バミス にふい橙色 普通	P 40 PL20 100% 東壁中央部付近 床面

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第74図7	土 玉	2.8	2.9	—	0.7	14.6	100	床 面	DP62
8	土 玉	2.5	2.7	—	0.7	13.7	100	床 面	DP63
9	土 玉	2.5	2.6	—	0.6	11.6	100	床 面	DP64
10	土 玉	2.6	2.7	—	0.7	12.5	100	覆 土	DP65
11	土 玉	2.4	2.8	—	0.7	13.4	100	覆 土	DP66
12	土 玉	2.6	2.6	—	0.5	11.6	100	覆 土	DP67

第 6 号住居跡 (第75図)

位置 調査区の北東部、A15j₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.76m、短軸3.61mの方形を呈している。

長軸方向 N-28°-W

壁 壁高は10~28cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 全体的にやや凹凸があるが、軟らかい。南東壁中央部から南コーナー付近にかけて出入口部と考えられる長方形の高まりが確認されている。出入口部と床との比高は6~8cmで踏み固められて硬い。

ピット 7か所(P₁~P₇)検出されている。P₁~P₄は、径45~75cmの円形を呈し、深さ22~26cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅~P₇は、径22~49cmの円形を呈し、深さ28~49cmで、補助柱穴と思われる。

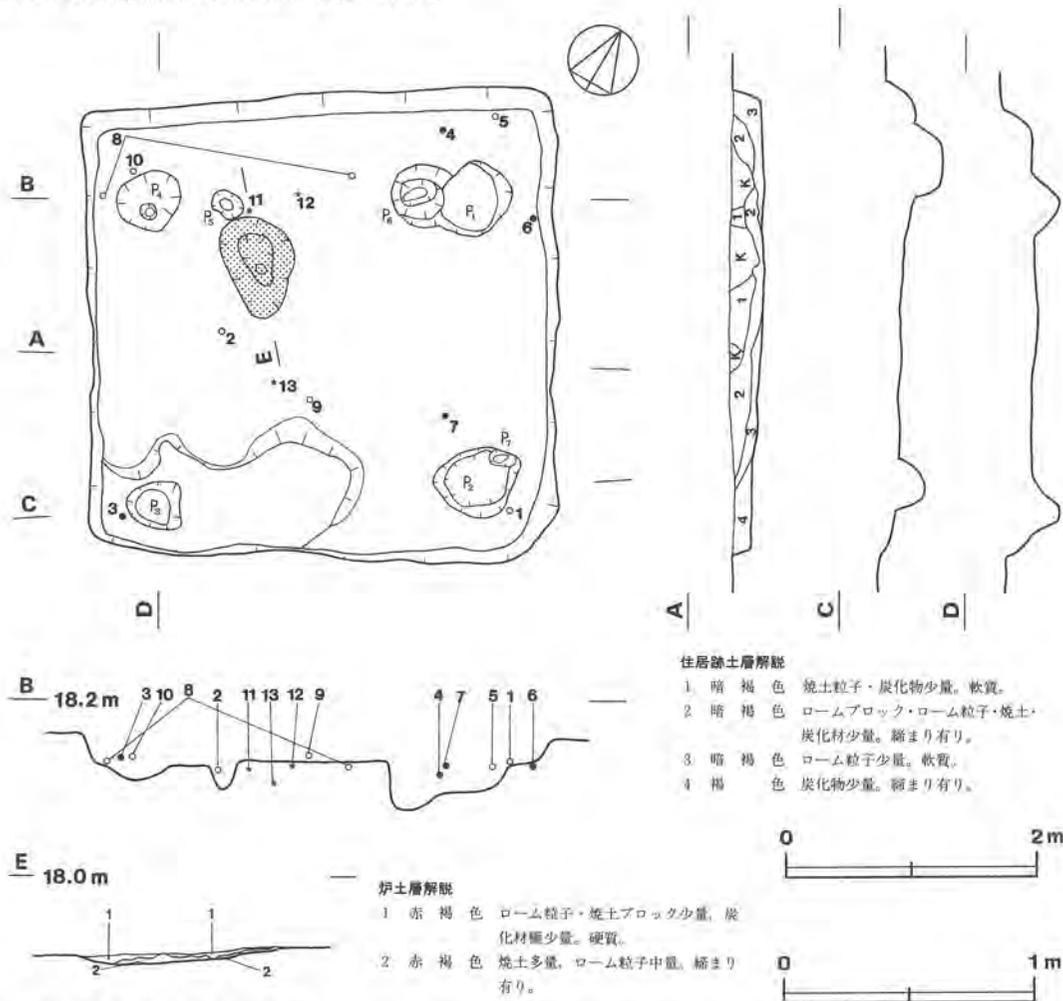
炉 中央部から西寄りのP₄付近に検出されている。平面形は、長径82cm、短径55cmの楕円形を呈し、床を約7cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱をうけてブロック状に赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片(壺2, 台付甕1, 鉢1, 埴2, 高坏3, 器台1)や土師器の細片(302点)が出土している。第76図3の台付甕の底部は、南コーナー際の覆土中層から横位の状態で、第76図1の壺は、東コーナー付近の床面から破片の状態で、第76図4・5の

鉢・甗は、北コーナー際の床面からつぶれた状態で、第76図7の高坏は東部中央の床面から、第76図10の器台の脚部は北コーナーの床面から出土している。第76図11~13の土玉は、中央部床面から点在して3点出土している。

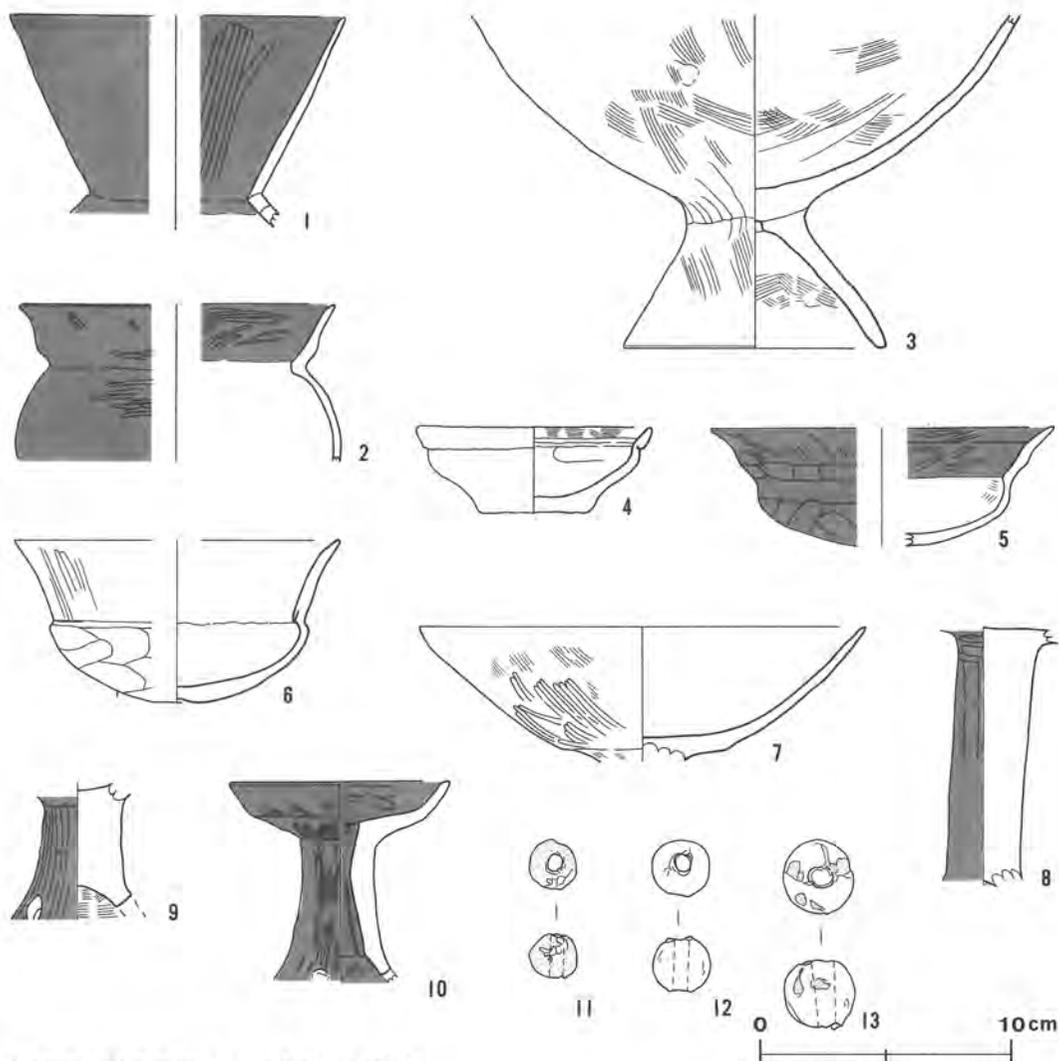
所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状況から火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第75図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	壺 土師器	A [13.8] B (8.6)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は器厚を減しながらやや外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面へラナテ、内面へラ磨き。頸部に輪積み痕有り。内・外面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 良好	P42 20% 外面煤付着 東コーナー付近 床面



第76図 第6号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 2	壺 土師器	A [12.6] B (6.3)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部に膨らみをもち、外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へラ磨き。胴部外面横位のへラ磨き、内面へラナデ。外面・口縁部内面赤彩。	砂粒 明褐色 良好	P43 10% 中央部覆土上層
3	台付 土師器	B (13.4) D 10.5 E 5.5	胴部中位から口縁部欠損。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は内彎して立ち上がる。台部と胴部の接合を確認できる。	胴部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後へラナデ。台部内・外面ハケ目整形後裾部へラナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P41 PL20 30% 内・外面煤付着 南コーナー際覆土中層
4	鉢 土師器	A 9.4 B 3.5 C 4.2	体部、口縁部の二分の一を欠損。底部から外反し、体部上位で膨らみをもち外傾して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目調整。体部外面ナデ、内面へラ削り後ナデ。外面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア にふい黄褐色 普通	P46 PL20 50% 北コーナー際床面

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 5	埴 土師器	A [13.8] B (4.8)	体部、口縁部の三分の一欠損。丸底。体部は扁平な半球形を呈し、頸部の下位に最大径をもつ。口縁部は頸部から屈曲して大きく外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ハケ目整形後ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ハケ目調整後ヘラナデ。内面まだらに剝離。外面、口縁部内面赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 良好	P44 30% 北コーナー際床面
6	埴 土師器	A [13.0] B 6.5 C 1.9	体部、口縁部の約二分の一を欠損。やや上げ底。扁平の半球形を呈し、頸部下位に最大径をもつ。口縁部は外反して立ち上がる。頸部内面に稜をもつ。単口縁。	口縁部外面ヘラ磨き、内面磨耗が著しく不明。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面磨耗が著しく不明。	砂粒・礫 橙色 普通	P45 PL20 60% 北東壁際覆土上層
7	高 土師器	A 17.8 B (5.4)	坏部片。坏部下端に稜をもち、内彎気味に大きく立ち上がる。	坏部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 良好	P47 PL20 50% 内・外面煤付着 東部中央床面
8	高 土師器	B (10.3)	脚部片。脚部は中実柱状で長い。	脚部外面ヘラ磨き。赤彩。外面まだらに剝離。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	P48 20% 北西壁中央部付 近床面
9	高 土師器	B (5.4)	脚部片。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。3孔。	脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコ リア 赤色 普通	P49 PL20 30% 中央部床面
10	器 土師器	A 8.9 B (8.0) E (5.6)	脚部一部欠損。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。器受部は下位に緩やかな稜をもち、外傾して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ハケ目調整後ナデ。脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P173 65% 北コーナー付近 床面

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第76図11	土玉	1.9	1.9	—	0.5	4.9	100	床面	DP68
12	土玉	2.2	2.3	—	0.7	9.7	100	床面	DP69
13	土玉	2.9	2.9	—	1.0	19.2	100	床面	DP70

第7号住居跡 (第77・78図)

位置 調査区の北東部、A15j₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.47m、短軸5.35mの方形を呈している。

主軸方向 N-44°-W

壁 壁高は30～35cmで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅13～27cm、深さ8～12cmで、断面形は、逆台形を呈している。

間仕切り溝 1条(a)検出されている。北東壁のほぼ中央から床中央部に向かって、P₂とP₃を結ぶ線までのびている。長さ1.15m、上幅20～45cm、深さ約16cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 平坦で、支柱穴の内側は特に踏み固められ硬い。東コーナー付近には、貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴の周りにはベルト状の高まりが確認されており、ベルトと床との比高は4～6cmで踏み固められ硬い。

ピット 6か所(P₁～P₆)検出されている。P₁～P₄は、径15～28cmの円形を呈し、深さ45～57cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は、径22cmの円形を呈し、深さ27cmで、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₆は、径33cmの円形を呈し、深さ44cmで補助柱穴と思われる。

炉 中央部からやや北寄りのP₁付近に検出されている。平面形は、長径76cm、短径57cmの不整形円形を呈し、床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けブロック状に赤変硬化している。

貯蔵穴 東コーナーから検出されている。長軸51cm、短軸45cmの隅丸長方形を呈し、深さ35cmである。底面は平坦で、壁は外傾してたちあがって、南西側は階段状に緩やかに立ち上がっている。

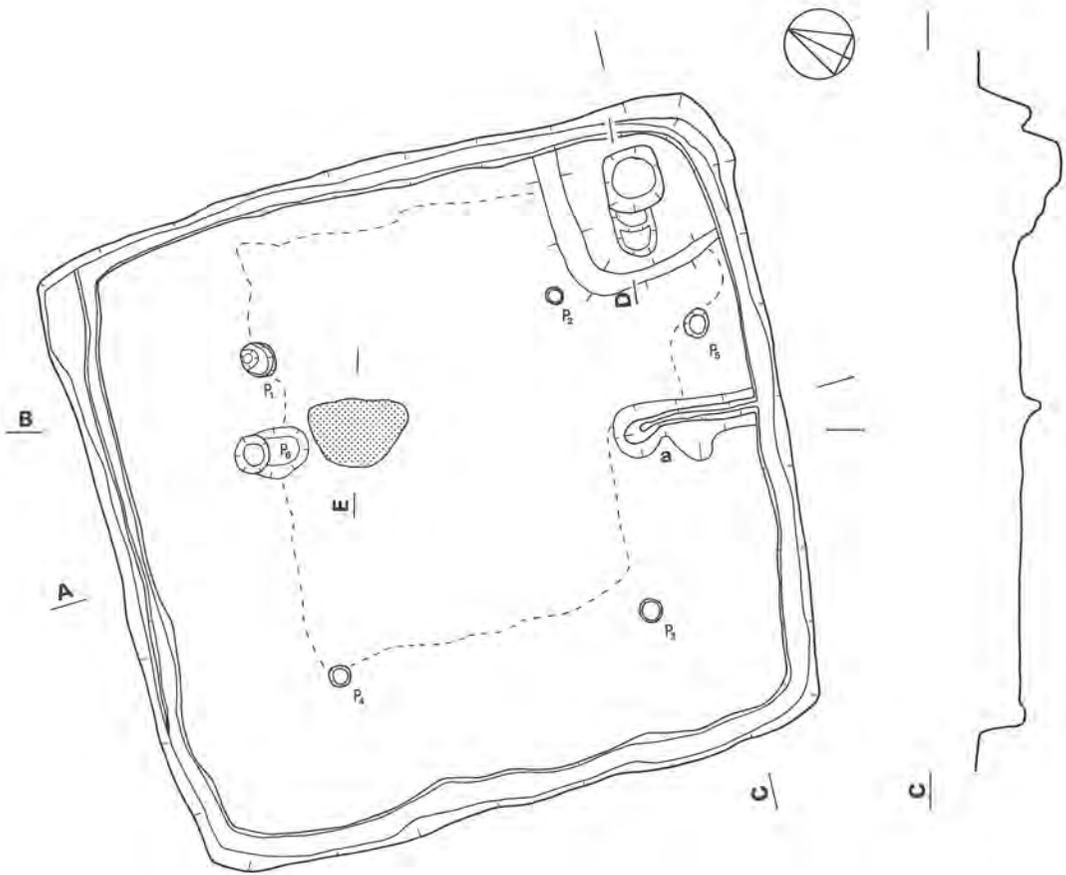
覆土 覆土下層は自然堆積であり、覆土中層から上層にかけて焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物やローム小・中ブロック及びブロック状のローム土が多量に含まれ、人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片(壺7、甕10、台付甕4、甑1、埴1、埴2、高坏7、器台1、ミニチュア1)や土師器の細片(458点)が出土している。その他、壁付近からは土製品が多量に出土している。第80図8の甕は西部中央の床面から横位の状態で、第82図18の台付甕は炉直上から横位の状態で、第82図20・21の台付甕は炉の北側床面から横位の状態で、第82図19の台付甕は中央部床面から斜位の状態で、第79図4の壺は北西壁中央部付近の覆土下層からつぶれた状態で、第82図22の甑は北西壁中央部付近の覆土中層からつぶれた状態で、第82図25の高坏は炉直上から横位の状態で、第83図34のミニチュア土器は東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。第83図35～53の土玉は北東部の床面から覆土中層にかけて点在して19点出土している。

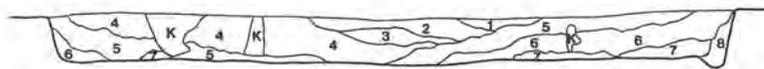
所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状況から、火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	壺 土師器	A 21.2 B (7.2)	頸部から口縁部にかけての有段口縁の破片。頸部はやや外反し、口縁部は内面に稜をもち、大きく外反して立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。頸部内・外面ハケ目整形後へラナデ。	砂粒・スコリア に お い い 橙 色 良 好	P63 PL22 20% 外面一部煤付着 北西壁中央部付 近覆土中層
2	壺 土師器	B (10.0) C 9.9	底部片。突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形後へラナデ、内面摩耗著しく不明。外面赤彩。底部木葉痕有り。	砂粒・スコリア に お い い 黄 橙 色 普 通	P64 20% 北西壁中央部付 近覆土下層



A 18.2m



D 17.8m



貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・粘土少量。軟質。
- 2 褐色 ロームブロック少量。軟質。
- 3 明褐色 ロームブロック少量。軟質。

住居跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量。軟質。
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化材少量。軟質。
- 3 褐色 ロームブロック多量。軟質。
- 4 褐色 ロームブロック少量。軟質。
- 5 暗褐色 炭化材多量、砂粒(大)少量。軟質。
- 6 褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量。軟質。
- 7 褐色 ローム粒子・炭化材・粘土少量。硬質。
- 8 褐色 ロームブロック少量。軟質。

E 17.6m

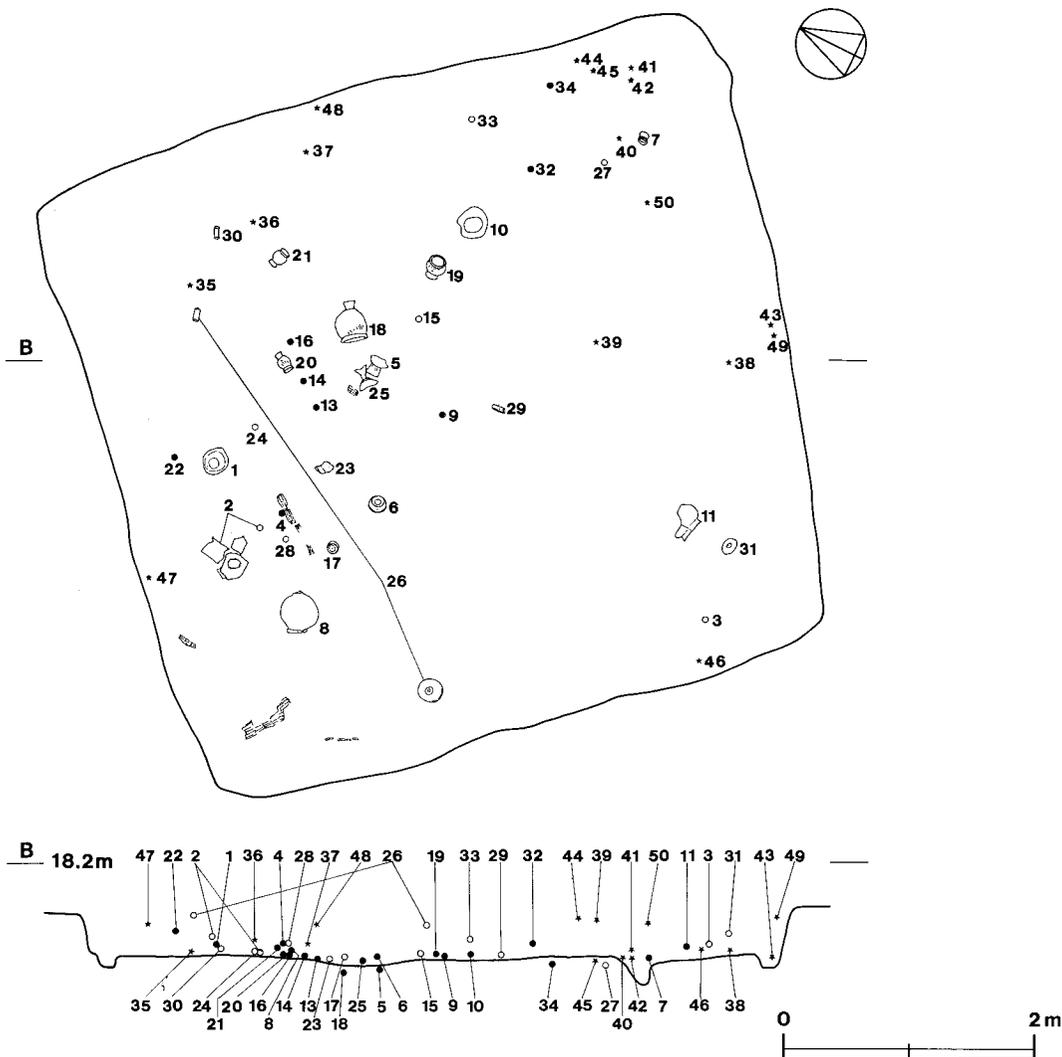


炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック多量、炭化物中量。

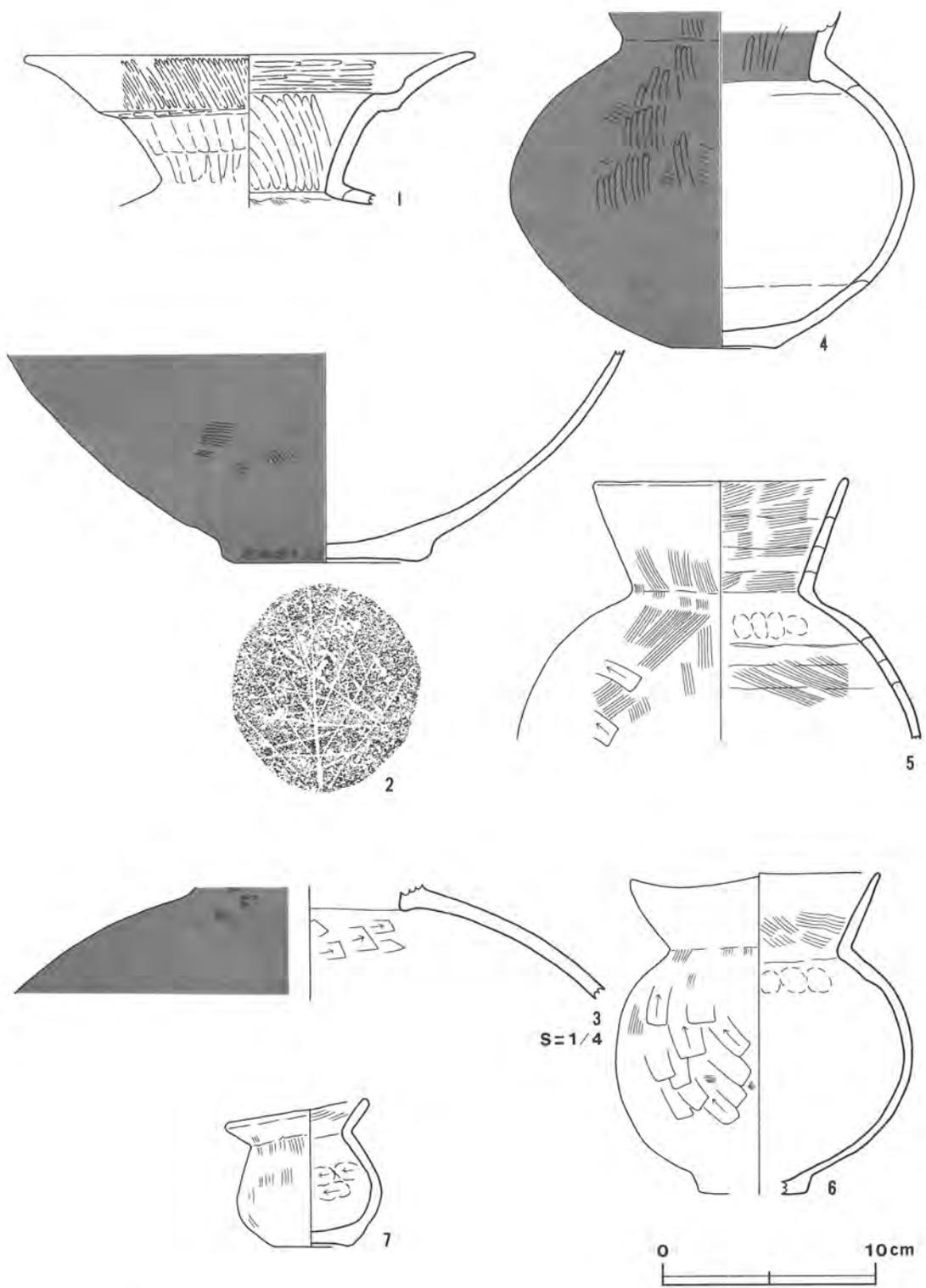


第77図 第7号住居跡実測図

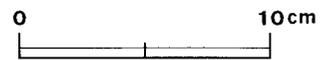
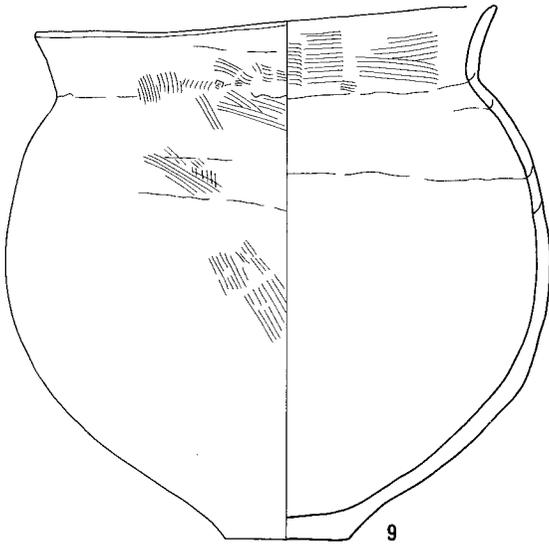
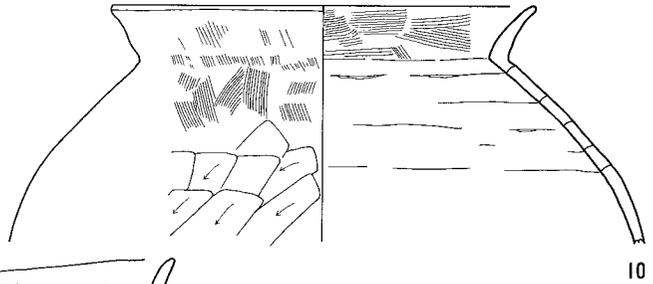
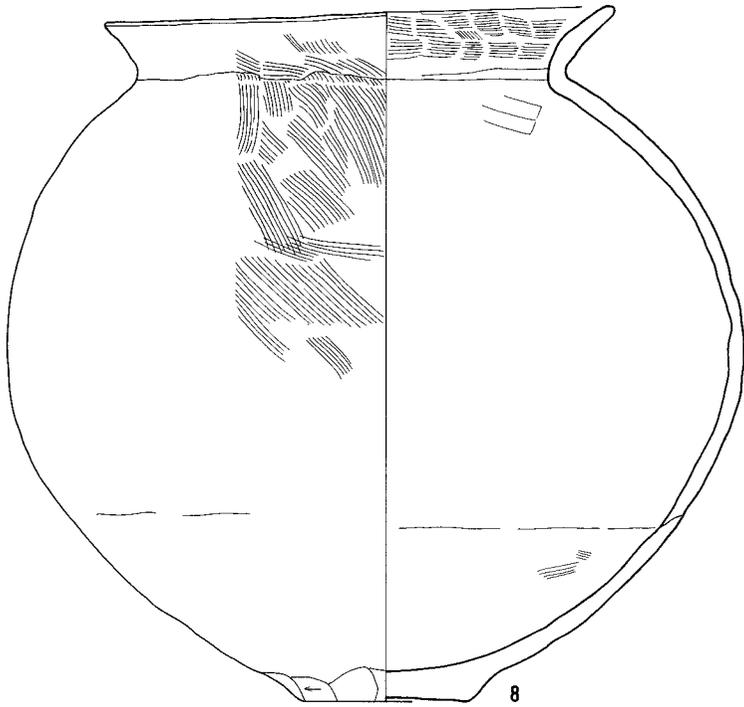


第78図 第7号住居跡遺物出土位置図

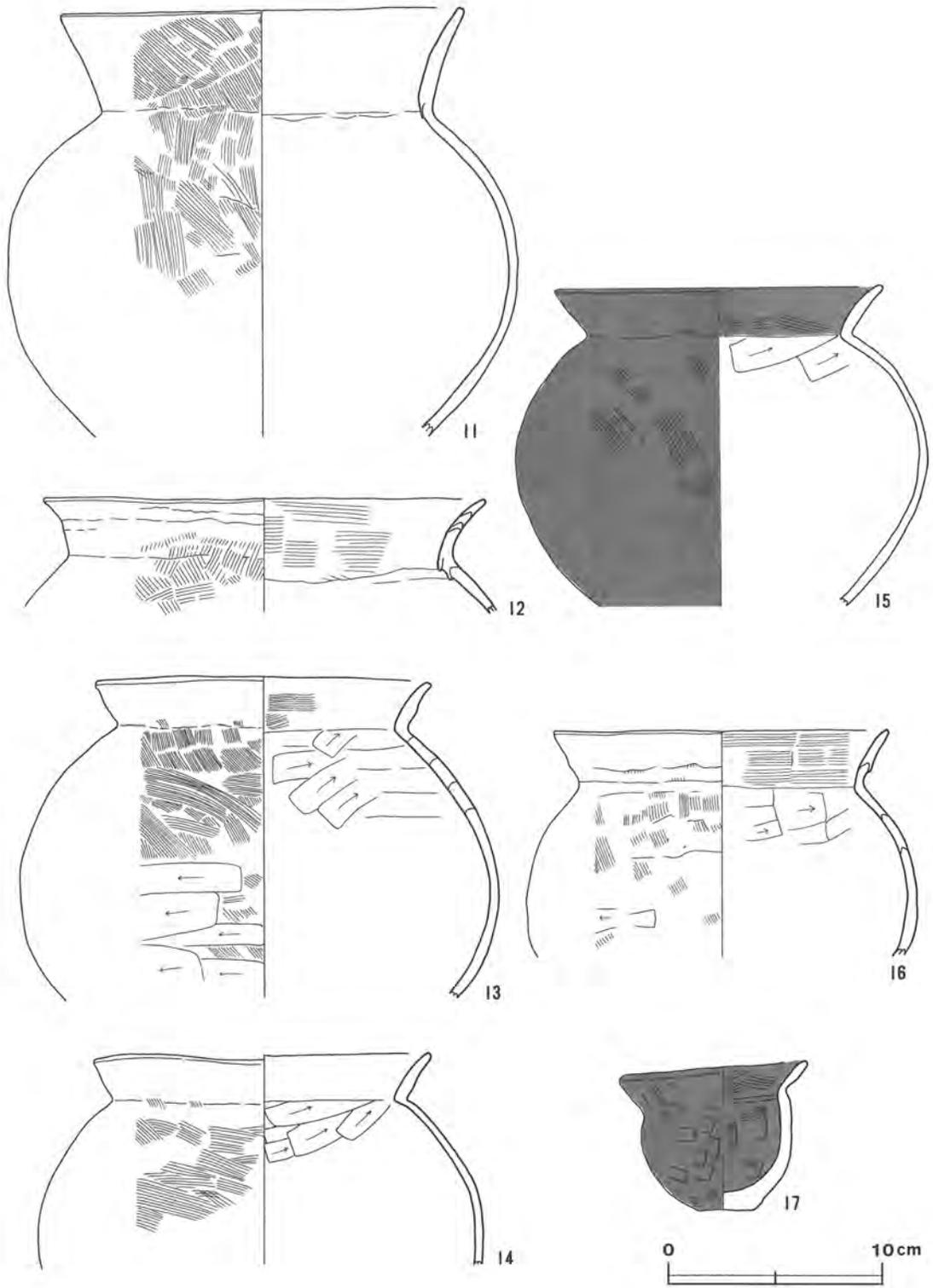
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 3	壺 土師器	B (8.3)	胴部上半から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形後丁寧なヘラナデ、内面ヘラ削り後ナデ。内・外面まだらに剝離。外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 良好	P65 10% 南コーナー付近 近覆土下層
4	壺 土師器	B (15.9) C 5.0	口縁部欠損。やや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は内面に稜をもち、「く」の字状に立ち上がる。単口縁。	胴部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラナデ。外面まだらに剝離。胴部内面を除き赤彩。輪積み痕有り。	砂粒 赤褐色 良好	P66 PL22 80% 外面煤付着 北西壁中央部付 近覆土下層
5	壺 土師器	A 12.0 B (12.4)	胴部下半欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面下半ハケ目整形、上半ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア 黄褐色 普通	P67 PL22 40% 炉直上



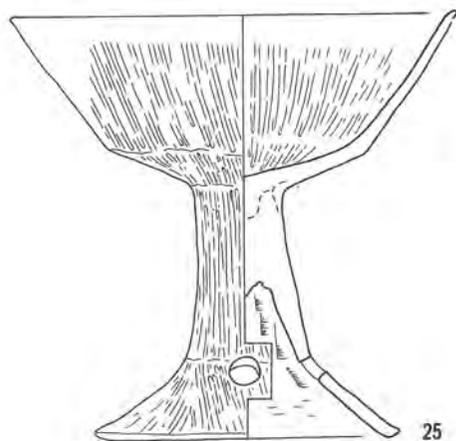
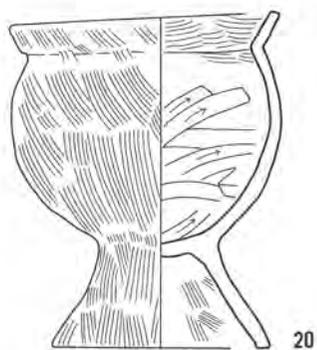
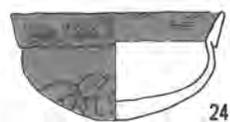
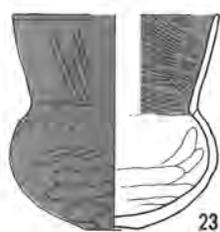
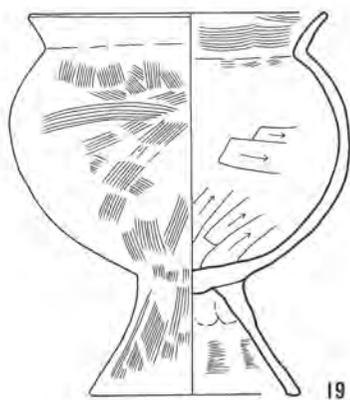
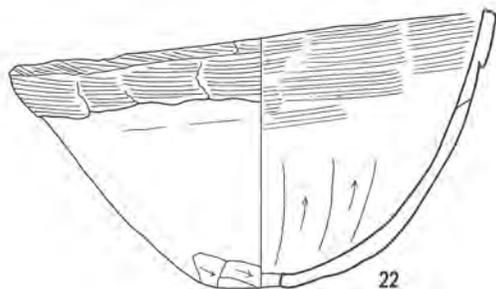
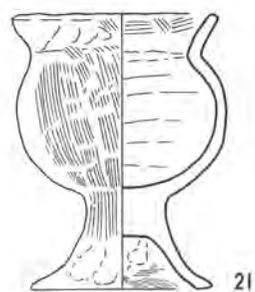
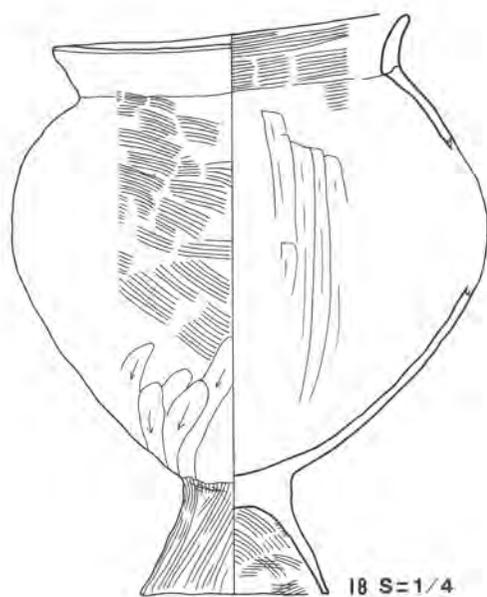
第79図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



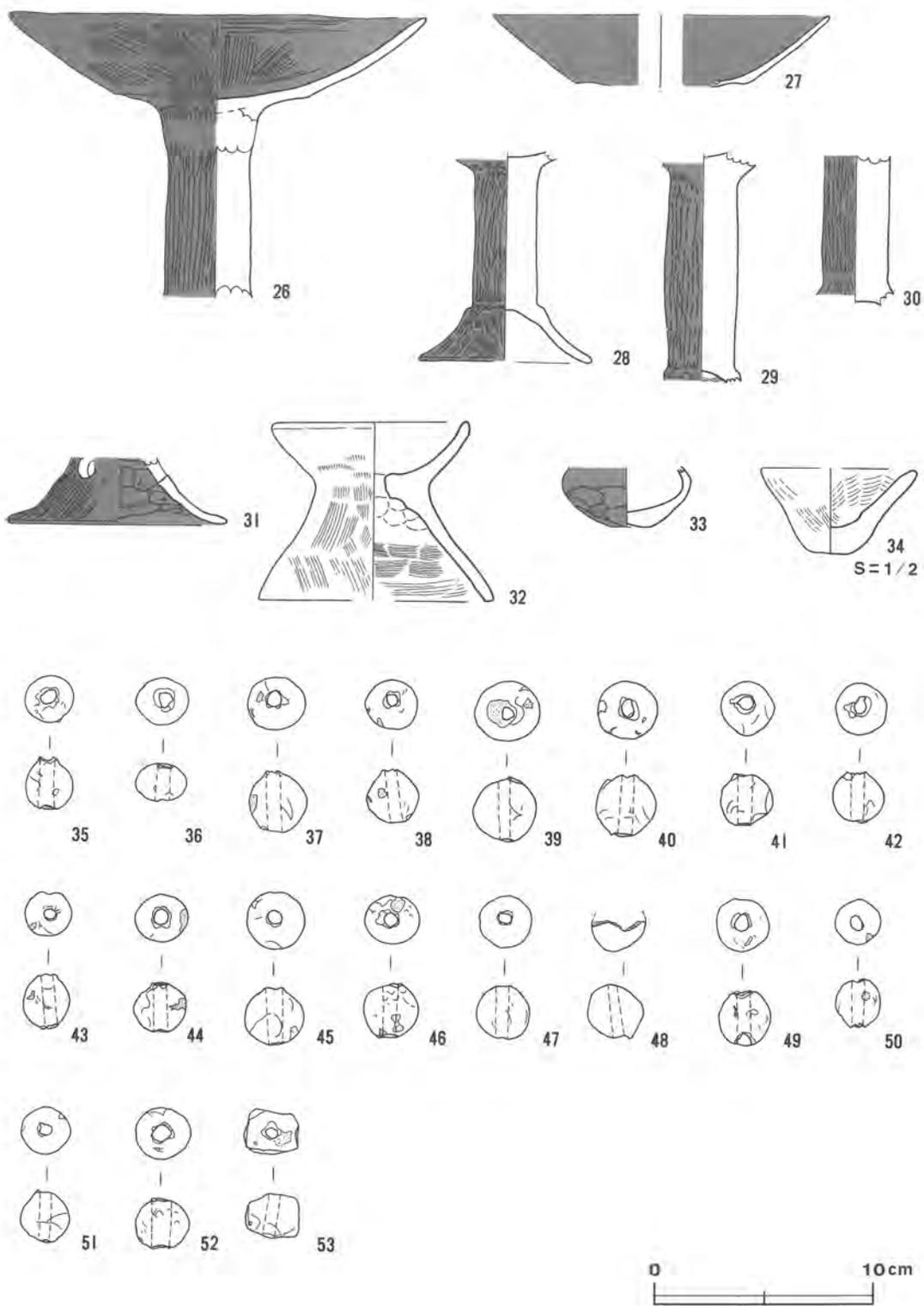
第80図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)



第81图 第7号住居跡出土遺物実測図(3)



第82图 第7号住居跡出土遺物実測図(4)



第83图 第7号住居跡出土遺物実測図(5)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 6	壺 土師器	A 11.8 B 15.2 C [5.0]	突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面摩耗著しく不明、内面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目調整後ヘラ削り、内面粗くヘラナデ。口縁部歪み。	砂粒・スコリア にふい 橙色 普通	P68 PL22 80% 外面煤付着 中央部覆土下層
7	壺 土師器	A 6.9 B 7.0 C 3.6	やや上げ底。胴部はやや扁平状の球形を呈し、最大径を下位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ヘラ削り。	砂粒・長石 にふい 黄橙色 普通	P83 PL23 100% 東コーナー付近 覆土下層
第80図 8	甕 土師器	A 20.4 B 28.0 C 6.8	やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部はやや短く「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後口唇部ヘラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面下半部ヘラナデ、上半部ハケ目整形、内面ハケ目調整後ヘラナデ。内面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア・礫 黄橙色 普通	P50 PL22 90% 外面黒斑、煤付着 西部中央床面
9	甕 土師器	A 18.4 B 21.5 C 4.9	胴部一部欠損。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にふい 黄橙色 普通	P51 PL22 70% 外面黒斑、煤付着 二次焼成 中央部覆土下層
10	甕 土師器	A 17.0 B (9.5)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部はやや短く頸部から「く」の字状に大きく外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ヘラ削り、頸部下位はハケ目整形、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア 黄橙色 普通	P52 30% 外面煤付着 東部中央部覆土 下層
第81図 11	甕 土師器	A 18.9 B (20.3)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや長く、外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にふい 橙色 普通	P53 PL22 40% 外面煤付着 二次焼成 南コーナー付近 覆土下層
12	甕 土師器	A 20.7 B (5.4)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。輪積み痕有り。	砂粒・バミス にふい 黄橙色 普通	P54 PL22 10% 外面煤付着 東コーナー付近 覆土下層
13	甕 土師器	A 15.9 B (15.1)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや短く外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ヘラナデ、内面ハケ目調整。胴部外面ハケ目整形後中位ヘラ削り、内面ヘラ削り後ナデ。内面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P55 PL22 50% 二次焼成 炉直上
14	甕 土師器	A 15.9 B (10.0)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ヘラナデ。胴部内面剝離著しい。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラ削り。口縁部歪み。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P56 PL22 30% 炉直上
15	甕 土師器	A 15.4 B (15.0)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後丁寧なヘラナデ。胴部外面ハケ目整形後丁寧なヘラナデ、内面ヘラ削り後ナデ。胴部内面剝離が著しい。外面・口縁部内面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 赤褐色 普通	P57 PL22 50% 外面煤付着 中央部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 81 図 16	甕 土師器	A 15.8 B (10.7)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面へラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面へラ削り。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P58 40% 炉北側覆土下層
17	甕 土師器	A 8.8 B 8.0 C 2.7	平底。長胴気味で最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。胴部外面ハケ目調整後へラ削り内面ハケ目整形。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 暗赤褐色 良好	P82 PL23 100% 内・外面煤付着 西コーナー付近 覆土下層
第 82 図 18	台付甕 土師器	A 19.0 B 31.2 D 10.0 E 6.3	胴部一部欠損。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面へラナデ、内面ハケ目整形。台部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、下半部へラ削り、内面へラ削り。歪みがひどい。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	P59 PL23 80% 黒斑、煤付着 二次焼成 炉直上
19	台付甕 土師器	A 11.8 B 15.3 D 8.3 E 4.1	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。台部と胴部の接合が確認できる。単口縁。	口縁部外面へラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面へラ削り。台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P60 PL23 100% 外面煤付着 中央部床面
20	台付甕 土師器	A 10.8 B 13.5 D 8.6 E 3.6	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面へラ削り。台部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P61 PL23 95% 外面煤付着 炉北側床面
21	台付甕 土師器	A 8.2 B 11.1 D 7.2 E 3.5	台部はラッパ状に下方へ開き、底面に粘土紐を貼り付け平らにしている。胴部は円形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面へラナデ。台部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P62 PL23 100% 外面煤付着 炉北側床面
22	甕 土師器	A 19.7 B 11.0	丸底で、体部は内彎気味に立ち上がる。複合口縁。単孔。	口縁部内・外面ハケ目整形。体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラ削り。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	P70 PL23 100% 北西壁中央部付 近覆土中層
23	埴 土師器	A [8.2] B 8.6 C 2.1	体部から口縁部にかけて約二分の一欠損。やや上げ底。体部はやや扁平な球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部はやや内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部外面丁寧なへラナデ、内面ハケ目整形後ナデ。体部外面下半へラ削り後ナデ、上半へラナデ、内面へラ削り後ナデ。体部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P71 PL23 40% 炉西側覆土下層
24	埴 土師器	A 8.5 B 4.4 C 1.1	体部一部欠損。平底。体部はやや扁平な半球形を呈し、最大径を頸部下位にもつ。口縁部は複合口縁で外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。体部外面下半へラ削り後ナデ、上半へラナデ、内面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	P72 60% 炉北西側覆土下層
25	高土師 坏器	A 17.8 B 17.0 D 12.0 E 10.0	脚部一部欠損。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。坏部は下位に稜をもち外傾して大きく立ち上がる。3孔。	坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形後丁寧なナデ。外面まだらに剝離。	砂粒・礫・スコリア 橙色 良好	P74 PL23 80% 外面一部煤付着 炉直上

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 83 図 26	高 土 師 器 高 土 師 器	A 19.2 B (14.3) E (9.8)	脚部下半欠損。脚部は中実柱状である。坏部は下位に稜をもちやや内彎気味に大きく立ち上がる。脚部の高さに対して坏部の高さは低い。	坏部内・外面へラ磨き。坏部内面まだらに剝離。脚部外面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 普通	P75 PL23 70% 南西壁中央部付近覆土上層
27	高 土 師 器	A [15.4] B (3.3)	坏部の破片。坏部は下端に稜をもち、大きく外傾して立ち上がる。	坏部内・外面丁寧なへラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P76 20% 内・外面煤附着 東コーナー付近覆土下層
28	高 土 師 器	B (9.8) D [8.0] E 9.0	脚部片。脚部は中実柱状で裾部はラッパ状に開く。脚部と裾部に接合が確認できる。	脚部内・外面へラ磨き。外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P77 PL23 40% 北西壁中央部付近覆土下層
29	高 土 師 器	B (10.8)	脚部片。脚部は中実柱状でやや中位に膨らみをもつ。	脚部外面へラ磨き。赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P78 30% 中央部覆土下層
30	高 土 師 器	B (7.0)	脚部の破片。脚部は中実柱状である。	脚部外面へラ磨き。赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P79 20% 北コーナー付近覆土中層
31	高 土 師 器	D 10.1 E (3.2)	脚部の破片。脚部はラッパ状に開く。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P81 30% 外面一部煤附着 南コーナー付近覆土下層
32	器 台 師 器 土 師 器	A 9.1 B 8.3 D [10.8] E 4.2	二分の一を欠損。脚部は「ハ」の字状に下方へ開き、裾分は内彎気味である。器受部は内彎して立ち上がる。器受部中央に単孔。	器受部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。脚部内・外面ハケ目整形。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P80 PL23 50% 東部中央覆土中層
33	埴 土 師 器 土 師 器	B (2.8) C 2.0	口縁部欠損。体部は扁平な半球形を呈し、最大径を上位にもつ。	体部外面下半へラ削り後ナデ、上半へラナデ、内面へラナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P84 PL23 60% 北東壁中央部付近覆土中層
34	ミニチュア 土 器 師 器 土 師 器	A [4.8] B 2.7 C 1.4	鉢形。平底。体部は外反して立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。	砂粒 黒褐色 普通	P73 PL23 70% 東コーナー付近床面

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第83図35	土 玉	2.3	2.2	—	0.7	8.8	100	床 面	DP71
36	土 玉	1.8	2.4	—	0.6	6.9	100	覆 土 下 層	DP72
37	土 玉	2.9	2.7	—	0.6	14.8	100	覆 土 下 層	DP73
38	土 玉	2.9	2.4	—	0.6	11.7	100	床 面	DP74
39	土 玉	3.0	3.1	—	0.5	21.3	100	覆 土 上 層	DP75
40	土 玉	2.9	2.8	—	0.5	17.4	100	床 面	DP76
41	土 玉	2.3	2.4	—	0.7	12.1	100	覆 土 下 層	DP77
42	土 玉	2.3	2.3	—	0.5	11.7	100	床 面	DP78
43	土 玉	2.5	2.2	—	0.6	9.1	100	床 面	DP79
44	土 玉	2.3	2.5	—	0.6	10.5	100	覆 土 上 層	DP80

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第83図45	土玉	2.7	2.6	—	0.7	16.4	100	床面	DP81
46	土玉	2.6	2.5	—	0.6	11.9	100	覆土下層	DP82
47	土玉	2.4	2.4	—	0.6	13.5	100	覆土上層	DP83
48	土玉	2.5	(2.5)	—	0.3	(6.4)	50	覆土上層	DP84
49	土玉	2.6	2.3	—	0.6	12.7	100	覆土上層	DP85
50	土玉	2.5	2.1	—	0.5	7.8	100	覆土上層	DP86
51	土玉	2.4	2.3	—	0.6	9.2	100	覆土	DP87
52	土玉	2.3	2.6	—	0.9	11.5	100	覆土	DP88
53	土玉	2.1	2.5	—	0.6	10.6	100	覆土	DP89

第8号住居跡 (第84・85図)

位置 調査区の北東部, B15c₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は, 調査区域外に延びている。

規模と平面形 本跡の東側約2分の1しか確認できないが, 長軸7.44m, 短軸[7.15]mの方形を呈するものと推定される。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は46~60cmで, 垂直に立ち上がっている。

壁溝 北壁下を除き全周している。上幅11~16cm, 深さ6~10cmで, 断面形は, 「V」字状を呈している。

間仕切り溝 1条(a)検出されている。南壁中央部から床中央部に向かって, 長さ1.20m, 上幅12~14cm, 深さ約10cmで, 断面形は, 「U」字状を呈している。

床 平坦であり, 全体的に良く踏み固められ硬いが, 炉の北側は楕円形状にさらに踏み固められて硬い。南壁中央部には出入口部の施設と考えられる長方形の高まりがあり, 床との比高は6~8cmである。そのほぼ中央に梯子ピット(P₃)が確認されている。南東コーナーの貯蔵穴の周りには床面より一段高いベルトが確認されている。ベルトと床との比高は6~8cmである。

ピット 12か所(P₁~P₁₂)検出されている。P₁・P₂は, 径43・21cmの円形を呈し, 深さ69・45cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は調査区外にあるものと思われる。P₃は, 出入口施設に伴う梯子ピットで径26cmの円形を呈し, 深さ45cmで, 南壁側に傾斜している。P₄~P₇は, 径18~26cmの円形を呈し, 深さ11~24cmで, 補助柱穴と思われる。P₈~P₁₂は, 径6~11cm, 深さ7~16cmで, 南東コーナーの貯蔵穴を西側から区画するように一直線に並んで検出されている。

炉 床中央部からやや北寄りに検出されている。平面形は, 長径98cm, 短径73cmの卵形を呈し, 床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。炉内には, 焼土小・中ブロック, ローム粒子, 炭化物や小石が極少量含まれている。

貯蔵穴 南東コーナーに検出されている。平面形は、長軸11.5cm、短軸10.6cmの隅丸方形を呈し、深さ61cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

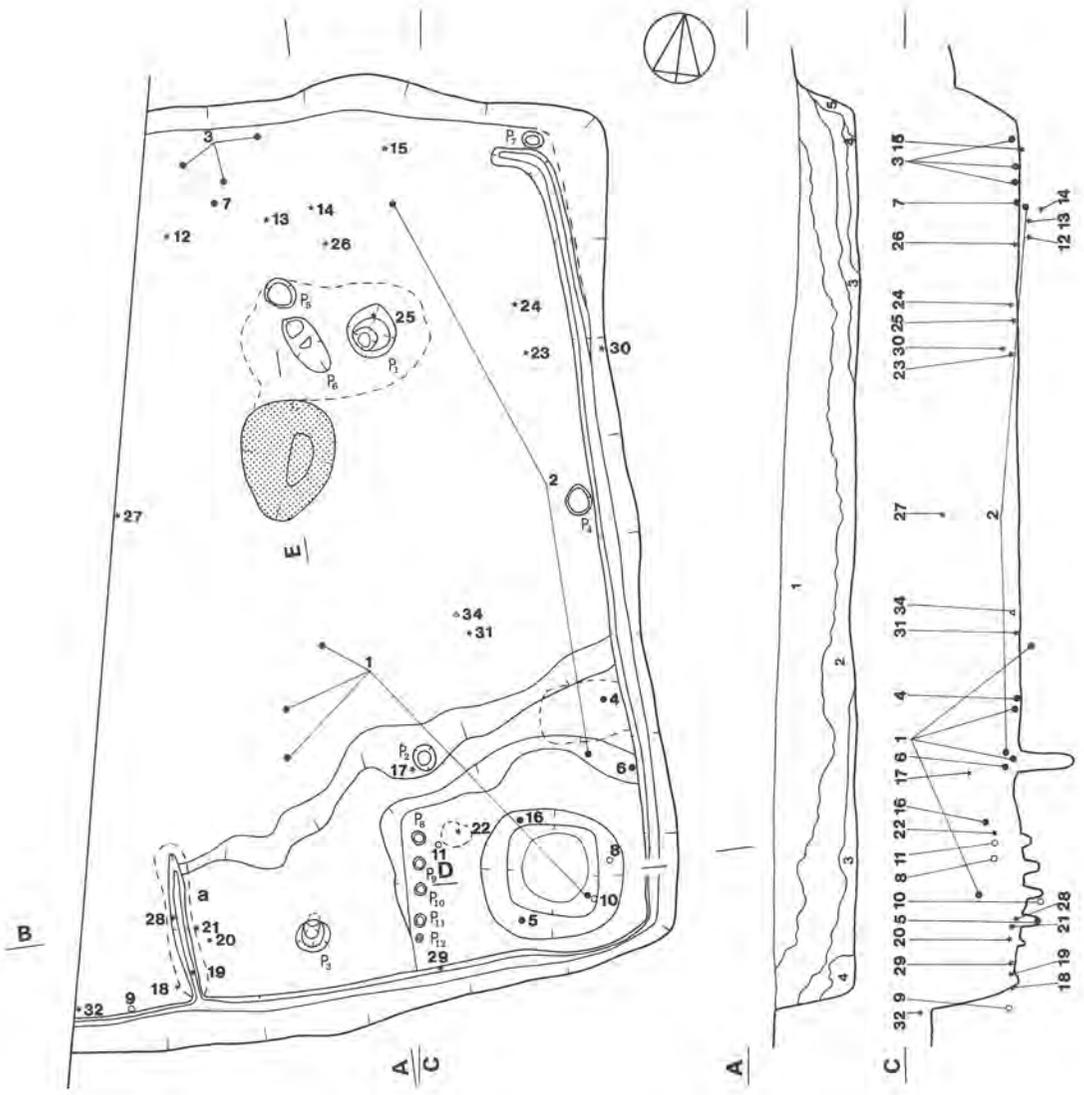
覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片（壺1、甕3、台付甕1、甗1、鉢1、鉢2、高坏2）や土師器の細片（380点）が出土している。その他、土製品、石製品が床面から出土している。第86図1の壺は、南東部のP₂付近の床面から破片の状態で、第86図6の甗は、南東コーナー際の覆土下層からつぶれた状態で、第86図5の台付甕・第86図10の高坏は、貯蔵穴の覆土上層から横位の状態でそれぞれ出土している。第87図12～33の土玉は、各壁付近から点在して22点出土している。第87図34の砥石は、南東コーナー付近の床面から出土している。炭化米は貯蔵穴の壁際上層から出土している。また、粘土塊が貯蔵穴の西側の床面から出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状況から、火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

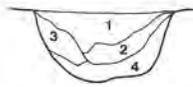
第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	壺 土師器	A [21.5] B (10.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は有段口縁で、大きく外反して立ち上がる。	口縁部、頸部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形後丁寧なヘラナデ、内面ナデ。胴部内面を除き赤彩。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P91 PL24 20% 南東部P ₂ 付近 床面
2	甕 土師器	A 20.5 B (20.9)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面下半ハケ目整形後ヘラナデ、上半ハケ目整形、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P86 PL24 60% 外面煤付着 南東コーナー付 近床面
3	甕 土師器	A [13.2] B (14.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は長胴で最大径を下位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P87 30% 北壁中央部付近 床面
4	甕 土師器	B (6.7) C 4.3	底部から胴部にかけての破片。やや上げ底。胴部は内彎して立ち上がる。	底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。外面磨耗。	砂粒・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P89 20% 外面煤付着 二次焼成 南東コーナー付 近床面
5	台付甕 土師器	A 8.6 B 11.5 D 6.9 E 4.2	台部はラッパ状に下方に開く。胴部はやや扁平な球形を呈し、最大径を上位にもつ。口縁部は複合口縁で、外傾して立ち上がる。	口縁部外面ナデ内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ヘラ削り、内面ヘラ削り。台部内・外面ハケ目整形後ナデ。口縁部指頭圧痕。胴部内面黒色。	砂粒 にふい黄橙色 普通	P90 PL24 90% 貯蔵穴覆土上層
6	甗 土師器	B (4.2) C 5.3	底部片。やや突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。単孔。	胴部内・外面、底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P92 10% 南東コーナー際 床面



B 18.0m

D 17.4m

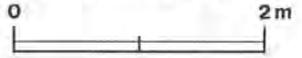


貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土中ブロック中量。締まり有り。
- 2 暗褐色 焼土大ブロック多量。焼土粒子・炭化材少量。締まり有り。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化材少量。軟質。
- 4 黒褐色 締まり有り。

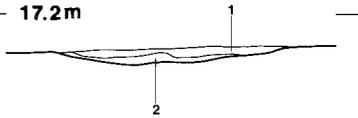
住居跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量。軟質。
- 2 褐色 ロームブロック少量。軟質。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化物少量。軟質。
- 4 暗褐色 炭化粒子・炭化材多量。ローム粒子中量。焼土粒子少量。締まり有り。
- 5 褐色 ロームブロック多量。締まり有り。



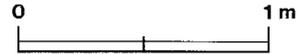
第84図 第8号住居跡実測図(1)

E 17.2m



炉土層解説

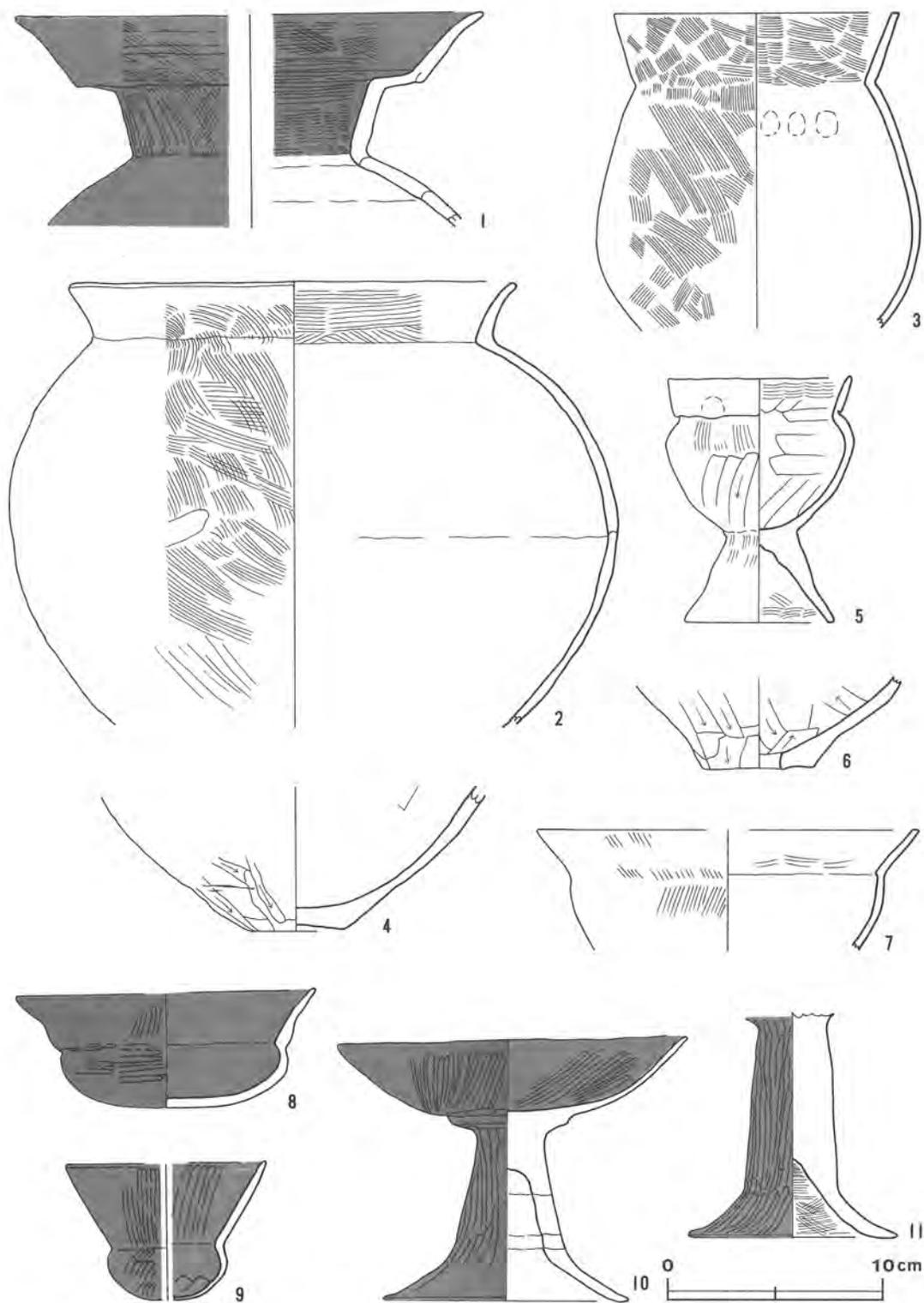
- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土小・中ブロック少量。縮まり有り。
- 2 赤褐色 焼土中・大ブロック多量, 炭化物少量。縮まり有り。



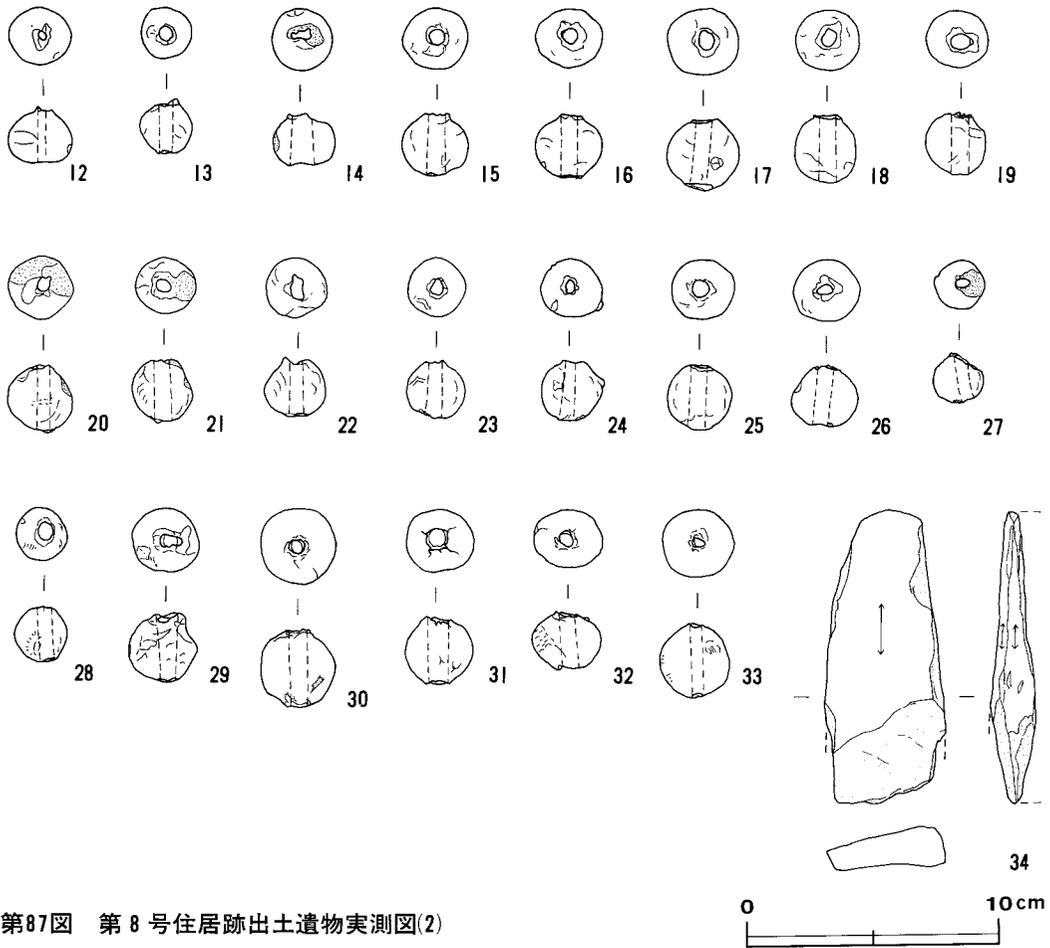
第85図 第8号住居跡実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 7	埴土師器	A [17.8] B (5.6)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜をもち外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ヘラナデ。胴部外面ハケ目整形, 内面丁寧なナデ。	砂粒 灰黄褐色 良好	P88 10% 北壁中央部付近床面
8	埴土師器	A [14.0] B 5.5	丸底。体部は扁平な半球形を呈する。口縁部は下半に膨らみをもち, 器厚を減じながら外反して立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き, 内面丁寧なヘラナデ。体部外面ヘラ磨き, 内面丁寧なヘラナデ。内面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	P93 PL24 80% 南東コーナー付近覆土下層
9	埴土師器	A [9.4] B 6.4	体部から口縁部の二分の一を欠損。丸底。体部は半球形を呈する。口縁部は外傾して立ち上がり, 口唇部でやや内彎する。	口縁部内・外面ヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラ削り後ナデ。内面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 良好	P94 PL24 40% 南壁中央部付近床面
10	高土師器	A 16.3 B 12.5 D 11.4 E 8.0	脚部は中空でラッパ状に下方へ開く。坏部は内彎しながら立ち上がる。坏部と脚部の接合が確認できる。脚部の高さに対して坏部の高さは低い。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目整形後ナデ。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P85 PL24 95% 貯蔵穴覆土上層
11	高土師器	D 9.8 E 10.4	坏部欠損。脚部は中実柱状で, 裾部はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ磨き, 内面ハケ目整形後ナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P95 PL24 40% 南東コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第87図12	土玉	2.3	2.5	—	0.3	11.4	100	床面	DP 91
13	土玉	2.1	2.0	—	0.5	7.0	100	床面	DP 92
14	土玉	2.1	2.4	—	0.8	11.7	100	床面	DP 93
15	土玉	2.5	2.6	—	0.6	13.1	100	床面	DP 94
16	土玉	2.6	2.6	—	0.6	13.1	100	床面	DP 95
17	土玉	2.8	2.9	—	0.6	19.0	100	覆土中層	DP 96
18	土玉	2.8	2.6	—	0.6	15.5	100	床面	DP 97
19	土玉	2.5	2.5	—	0.8	11.2	100	床面	DP 98
20	土玉	2.7	2.6	—	0.6	13.2	100	床面	DP 99
21	土玉	2.5	2.4	—	0.6	10.4	100	床面	DP100
22	土玉	2.3	2.4	—	0.5	11.4	100	覆土下層	DP101
23	土玉	2.3	2.3	—	0.5	10.2	100	床面	DP102
24	土玉	2.4	2.5	—	0.4	11.7	100	床面	DP103
25	土玉	2.6	2.6	—	0.6	14.2	100	床面	DP104



第86图 第8号住居迹出土遗物实测图(1)



第87図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第87図26	土玉	2.4	2.6	—	0.6	14.3	100	床面	DP105
27	土玉	2.0	2.0	—	0.5	5.9	100	覆土上層	DP106
28	土玉	2.2	2.1	—	0.6	6.9	100	床面	DP107
29	土玉	2.7	2.6	—	0.8	13.8	100	覆土上層	DP108
30	土玉	3.2	3.0	—	0.7	24.2	100	床面	DP109
31	土玉	2.7	2.7	—	0.9	15.0	100	床面	DP110
32	土玉	2.3	2.8	—	0.7	12.5	100	覆土上層	DP111
33	土玉	3.0	2.8	—	0.5	20.1	100	覆土	DP112

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第87図34	砥石	(11.8)	(4.9)	(1.7)	(93.7)	頁岩	床面	Q7

第9号住居跡 (第88図)

位置 調査区の東部, B15b₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.53m, 短軸2.88mの隅丸長方形を呈している。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高は8~13cmで, 緩やかに外傾して立ち上がっている。北西壁や北東壁は, 攪乱により壁の立ち上がりを確認することができなかった。

床 平坦で, 中央部から西コーナーにかけて特に良く踏み固められて硬い。

ピット 検出されていない。

炉 床中央部から西寄りに検出されている。平面形は, 長径50.5cm, 短径48cmの卵形を呈し, 床を約16cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けレンガ状に赤変硬化している。

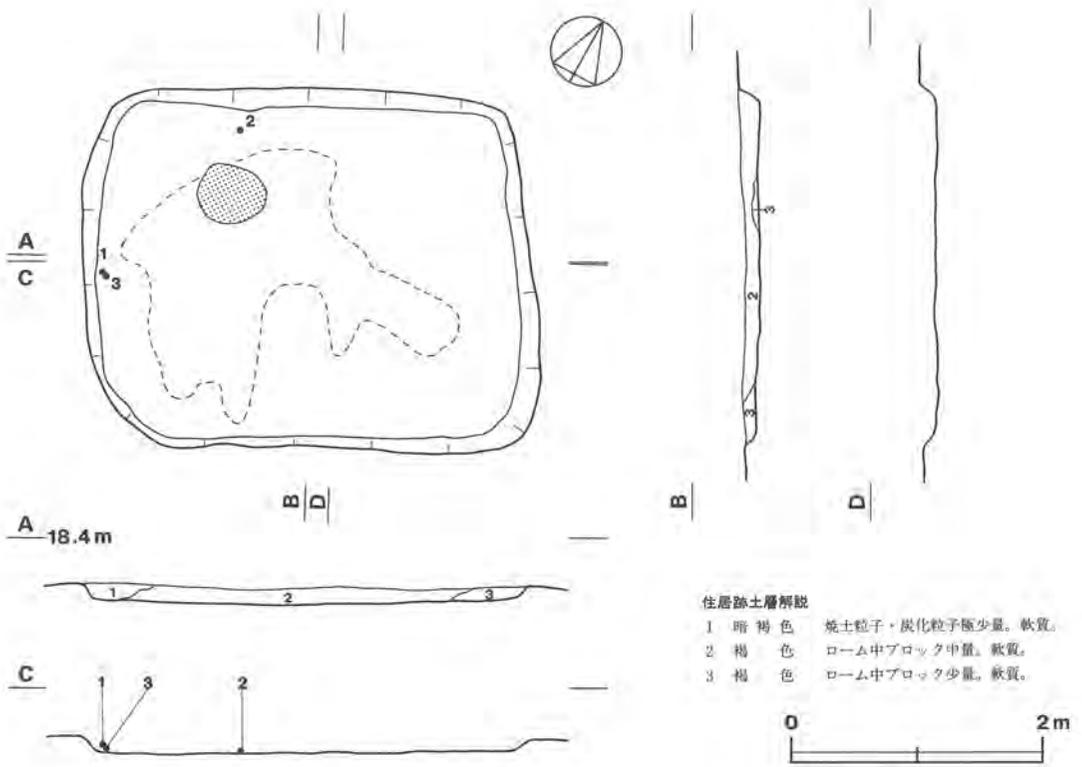
覆土 ロームブロックや焼土粒子, 炭化物を含み軟らかく, 人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは, 土師器片(壺1, 甕1, 甗1)や土師器の細片(82点)が出土している。第89図2の甕は炉の北側床面から逆位の状態で, 第89図1の壺は, 南西壁中央部付近覆土下層から正位の状態で, 第89図3の甗は1の壺の上に置かれた状態で出土している。

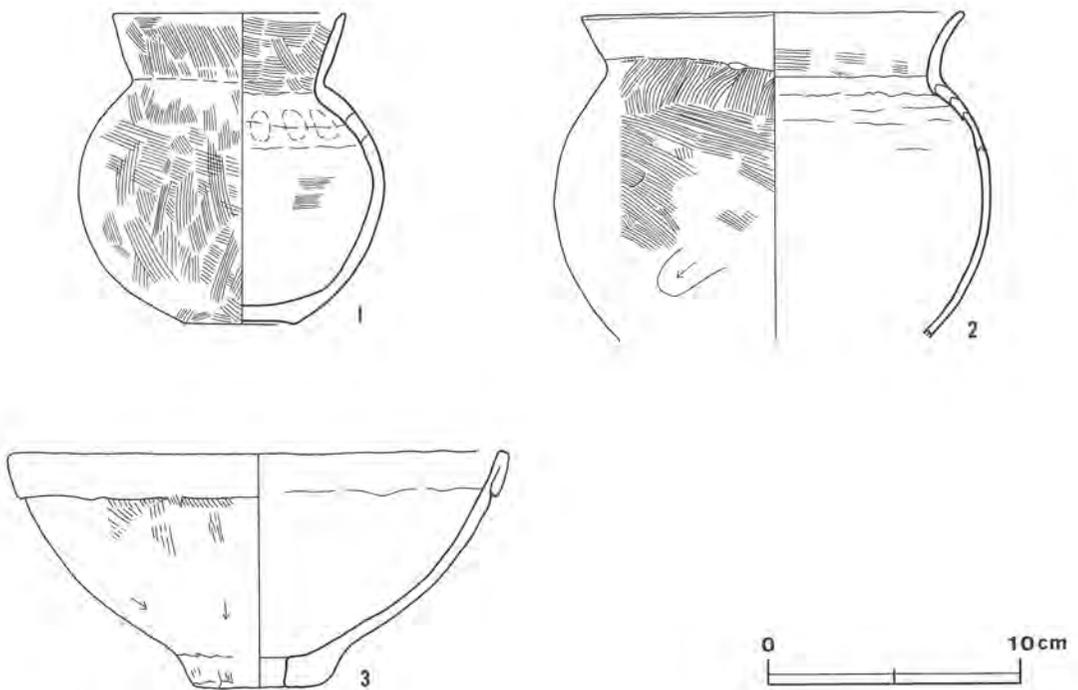
所見 本跡は, 遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	壺 土師器	A [9.2] B 15.5 C 4.4	やや上げ底。胴部は球形を呈し, 最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形, 内面ハケ目整形後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリアにふい黄橙色 良好	P69 PL25 90% 二次焼成 南西壁中央部付近覆土下層
2	甕 土師器	A 15.1 B (13.2)	底部欠損。胴部は球形を呈し, 最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し, 口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面下半へラ削り, 上半ハケ目整形。内面まだらに剥離。	砂粒・長石 橙色 普通	P151 PL25 60% 炉北側床面
3	甗 土師器	A [19.9] B 9.5 C 5.1	底部から口縁部にかけての破片。突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。複合口縁。単孔。	体部外面ハケ目整形後へラナデ, 内面ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P96 PL25 40% 二次焼成 南西壁中央部付近 P69上



第88図 第9号住居跡実測図



第89図 第9号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡（第90図）

位置 調査区の東部，B15b₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.30 m，短軸3.20 mの方形を呈している。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は12~14cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，軟らかい。南コーナーから南東壁中央部にかけては踏み固められて硬い。

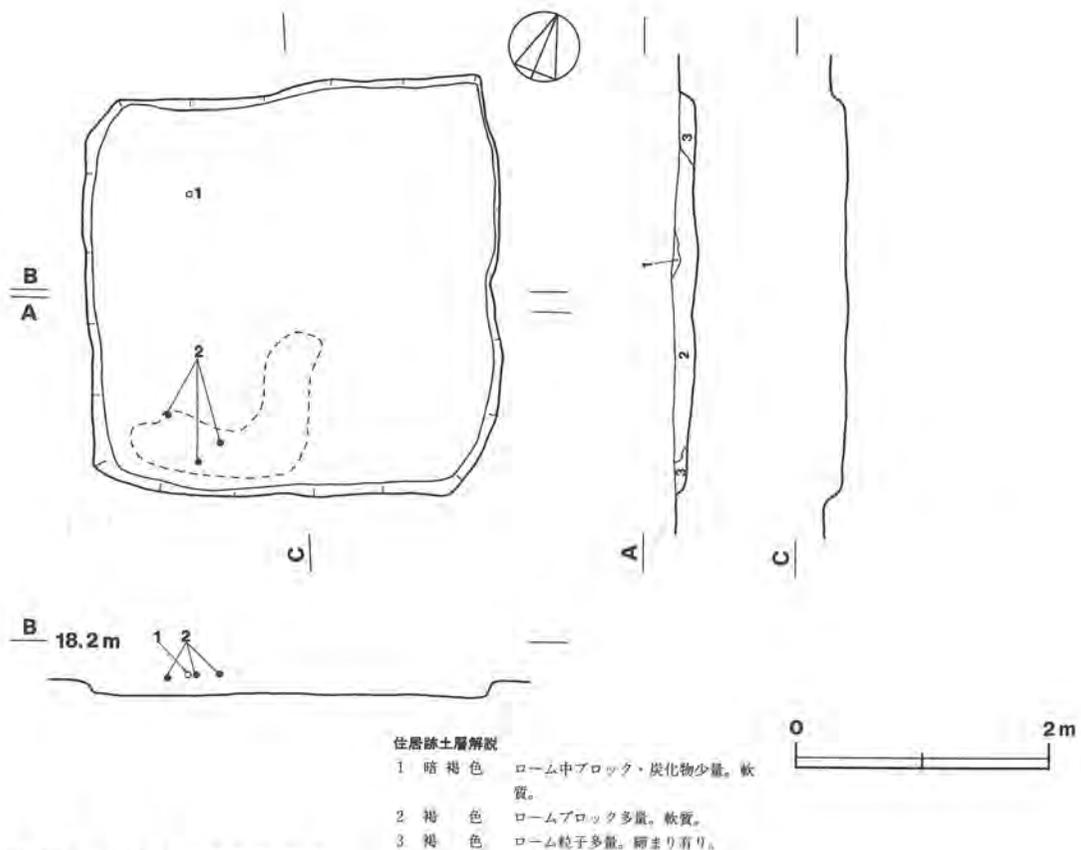
ピット 検出されていない。

炉 検出されていない。

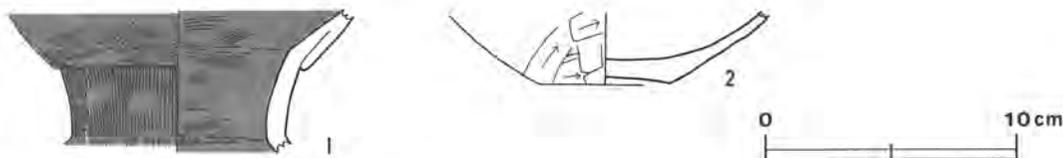
覆土 覆土上層は自然堆積であるが，その他はロームブロックやローム粒子，炭化物を含み軟らかく，人為堆積と思われる。

遺物 本跡からの出土遺物は少なく，土師器片（壺1，甕1）や土師器の細片（30点）が出土している。第91図2の甕は南コーナー付近の覆土上層から破片の状態で出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第90図 第10号住居跡実測図



第91図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	壺 土師器	B (5.9)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は内面に稜をもち、頸部から外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部、頸部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P98 10% 西コーナー付近 覆土上層
2	壺 土師器	B (2.9) C 5.1	底部片。やや上げ底。胴部は内彎して立ち上がる。	底部外面へラ削り、内面へラナデ。	砂粒 にふい褐色 普通	P97 10% 南コーナー付近 覆土上層

第11号住居跡 (第92図)

位置 調査区の東部，B15d₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.10m，短軸4.18mの長方形を呈している。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高は23～31cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10～14cm，深さ10～12cmで，断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 2条(a・b)検出されている。南コーナーを区画するように，aは南東壁のほぼ中央からと，bは南西壁のほぼ中央南寄りから溝が床中央部に向かってのびている。ともに長さ1.07～1.12m，上幅16～32cm，深さ10～14cmで，断面形は「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で，支柱穴の内側は，良く踏み固められ硬い。

ピット 5か所(P₁～P₅)検出されている。P₁～P₄は，径26～34cmの円形を呈し，深さ38～42cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は，径20cmの円形を呈し，深さ37cmで，南東壁側に傾斜しており出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 中央部から西寄りに3か所(炉1～3)検出されている。炉1は，長径80cm，短径73cmの不整円形を呈し，炉2は，長径58cm，短径(45)cmの楕円形を呈し，炉3は，長径63cm，短径43cmの長楕円形を呈し，ともに床を約4～8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。炉1は，炉2に掘り込まれている。炉2は，炉3に掘り込まれている。

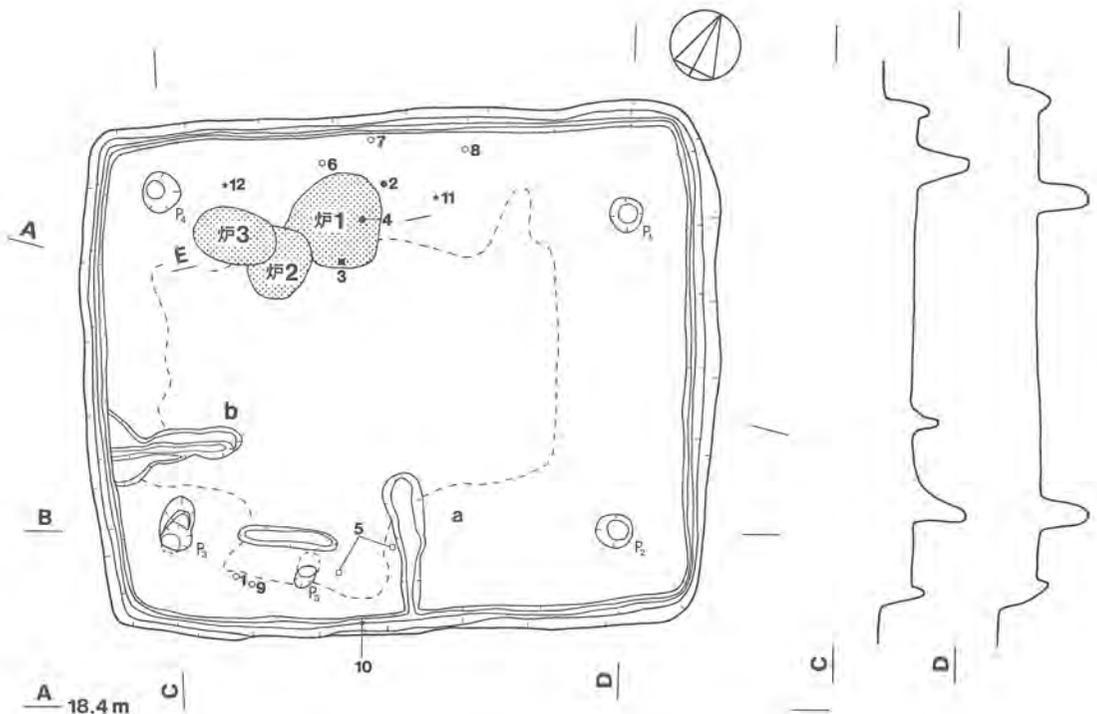
覆土 自然堆積。

遺物 炉を中心に床面や覆土下層からは、土師器片（壺1，甕3，埴2，高坏1，器台2）や土師器の細片（108点）が出土している。第93図4の甕は炉直上から横位のつぶれた状態で、第93図3の甕は炉直上から逆位の状態で、第93図7の高坏は炉の北側の床面から横位の状態で、第93図9の器台は南コーナーの床面からそれぞれ出土している。第93図10～12の土玉は各壁付近の床面から点在して3点出土している。

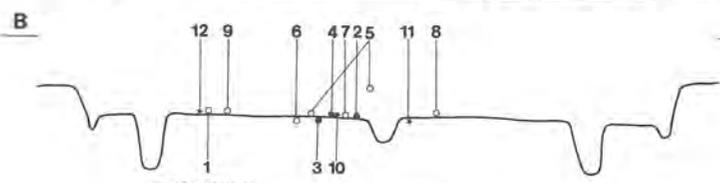
所見 本跡は、焼土及び炭化物や炭化材の出土状態から火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 1	壺 土師器	A 13.5 B (10.0)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は内彎気味に器厚を減じながら立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へラ磨き。内面まだらに剥離。赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 良好	P102 PL27 20% 南コーナー付近床面
2	甕 土師器	A 17.0 B (18.3)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面へラ削り後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア・礫 淡橙色 普通	P99 PL27 70% 二次焼成 炉直上
3	甕 土師器	A 18.2 B (17.0)	底部欠損。胴部はやや長胴で、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がっている。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部内・外面ハケ目整形後へラナデ。輪積み痕有り。	砂粒 橙色 普通	P100 PL27 70% 二次焼成 内面煤付着 炉直上
4	甕 土師器	A [17.8] B (17.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面へラナデ。内・外面まだらに剥離。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P101 40% 二次焼成 炉直上
5	埴 土師器	A 11.2 B 6.0 C 2.5	体部一部欠損。平底。体部は扁平な半球形を呈する。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。体部と口縁部の接合が確認できる。	口縁部外面へラナデ、内面ハケ目調整後へラナデ。体部外面下半へラ削り、上半へラ磨き、内面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P103 PL27 80% 外面煤付着 南東壁中央部付近覆土下層
6	埴 土師器	A 10.3 B 6.4	体部一部欠損。丸底。体部は扁平な半球形を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。内面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒・石英 赤褐色 普通	P104 PL27 80% 炉北側覆土下層
7	高坏 土師器	A 15.6 B 13.4 D 11.4 E 8.0	脚部は中空でラップ状に開く。坏部は下位に稜をもち、やや内彎気味に大きく立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面へラ削り。脚部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P105 PL27 100% 炉北側床面
8	器台 土師器	A 7.8 B 6.9 D 8.4 E 4.1	脚部一部欠損。脚部はラップ状に下方へ開く。器受部は緩やかに二段の稜をもち、内彎気味に立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内面まだらに剥離。器受部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面へラ削り。脚部内面除き赤彩。	砂粒 赤色 普通	P106 PL27 80% 北西壁中央部付近床面
9	器台 土師器	A 7.2 B 5.9 D 8.6 E 4.0	脚部はラップ状に下方へ開く。器受部は二段の稜をもち、内彎気味に立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面へラナデ。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。脚部内面を除き赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P107 PL27 100% 南コーナー付近床面



A 18.4m



- 住居跡土層解説**
- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック少量。灰質。
 - 2 褐色 ローム小・中ブロック多量。縮まり有り。
 - 3 暗褐色 ローム小・中ブロック中量。焼土粒子・炭化材少量。縮まり有り。
 - 4 褐色 焼土ブロック多量。炭化材中量。

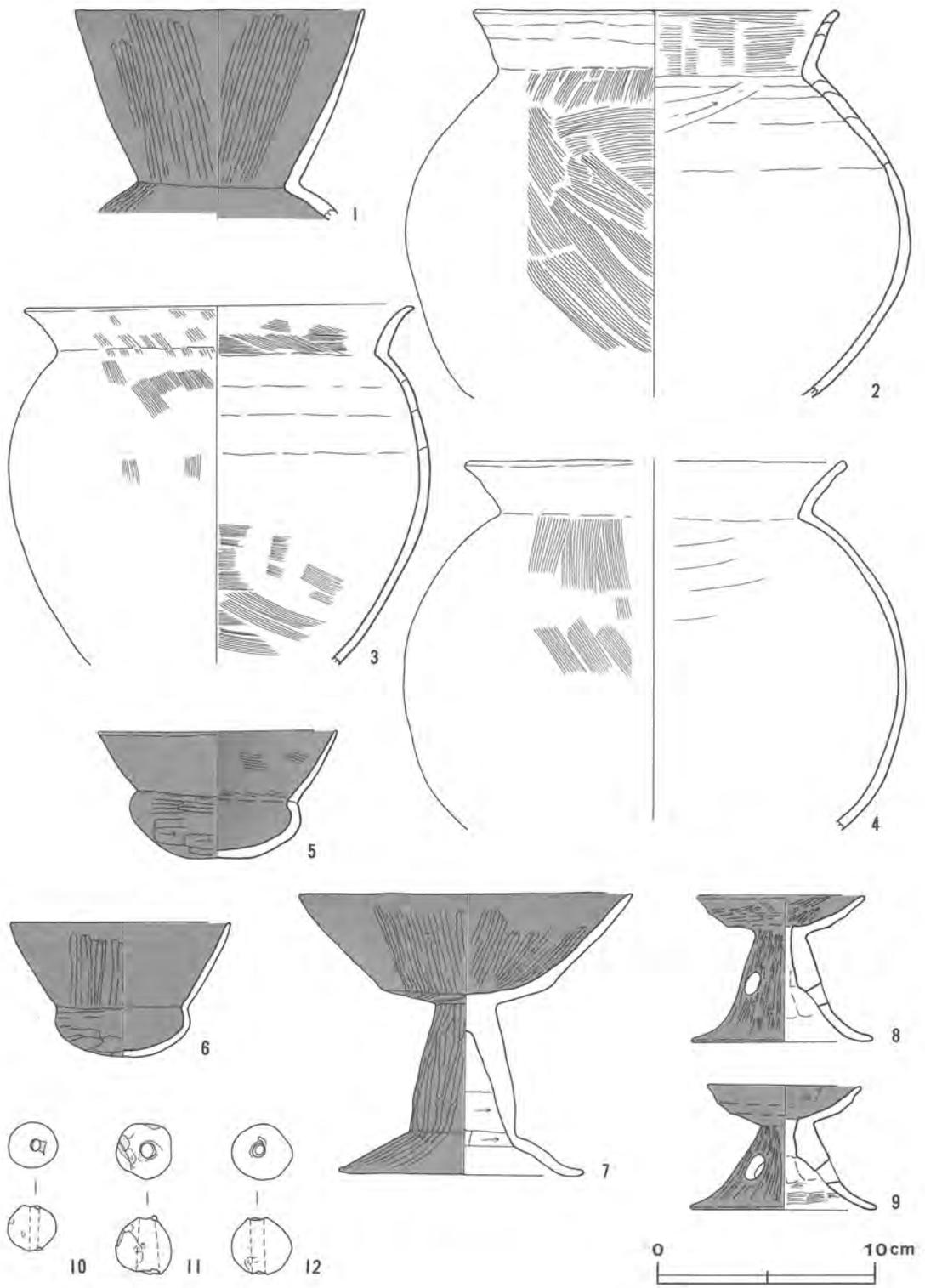
E 18.0m



- 炉土層解説**
- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック多量。炭化物中量。
 - 2 暗赤褐色 ローム小ブロック多量。焼土小ブロック中量。炭化物少量。
 - 3 暗赤褐色 焼土小ブロック多量。ローム小ブロック・炭化物少量。



第92図 第11号住居跡実測図



第93图 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第93図10	土玉	2.1	2.3	—	0.5	8.8	100	床面	DP113
11	土玉	2.8	2.6	—	0.8	14.7	100	床面	DP114
12	土玉	2.7	2.8	—	0.6	14.8	100	床面	DP219

第12号住居跡 (第94図)

位置 調査区の東部, B15e₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.60m, 短軸2.31mの隅丸長方形を呈している。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は12~20cm, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 軟らかい。床中央部から北東コーナー付近が, 良く踏み固められ硬い。

ピット 検出されない。

炉 検出されない。

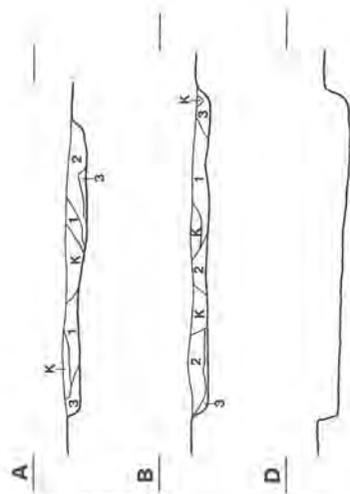
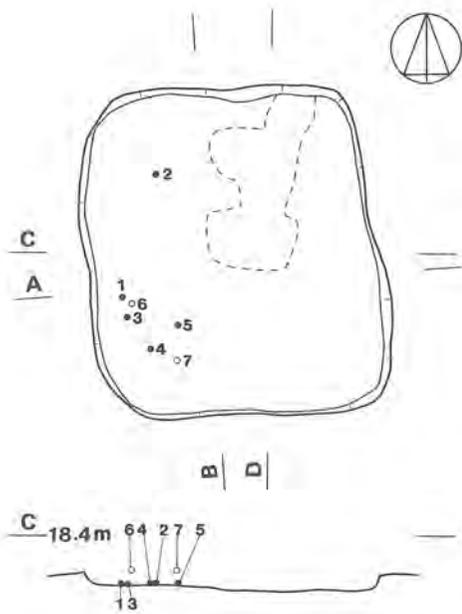
覆土 覆土の上層から下層にかけて攪乱を受けているが, ローム小・中ブロックを含み, 人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは, 土師器片 (甕2, 台付甕3, 器台2) や土師器の細片 (36点) が出土している。その他, 流れ込みと考えられる石鏃が出土している。第95図1の甕は西壁中央部付近の床面から破片の状態, 第95図2の台付甕の台部は北西コーナー付近の床面から, 第95図7の器台は南西コーナー付近の覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図1	甕 土師器	A 17.5	やや突出した平底。胴部は球形を呈し, 最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し, 口縁部は上位でやや内彎して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後後端部へラナデ。胴部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P108 70% 外面煤附着 西壁中央部付近床面
		B 19.3				
		C 5.8				
2	台付甕 土師器	B (7.8)	台部から胴部下半にかけての破片。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形, 内面へラ削り。台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P109 PL28 40% 北西コーナー付近床面
		D 6.6				
		E 4.2				
3	台付甕 土師器	B (6.9)	台部から胴部下半にかけての破片。台部はやや内彎して下方に開く。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形, 内面へラ削り。台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア にふい黄橙色 普通	P110 40% 西壁中央部付近床面
		D 6.8				
		E 4.4				

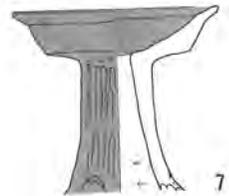
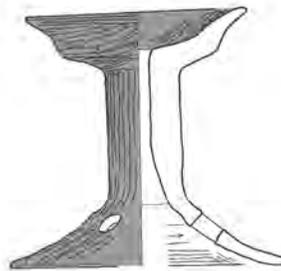
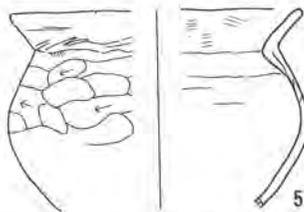
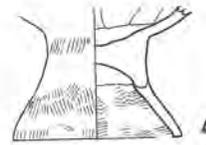
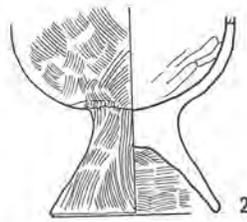
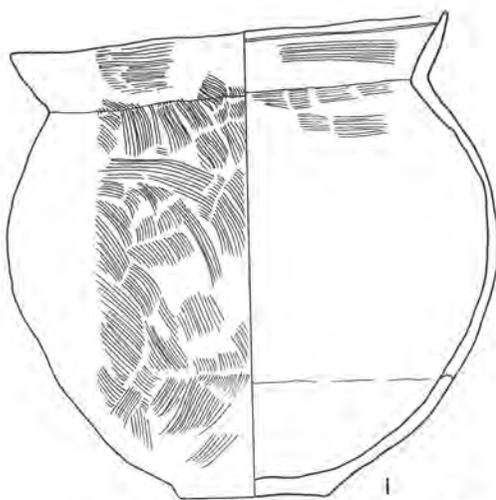


住居跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量、縮まり有り。
- 2 褐色 ローム小・中ブロック中量、ローム
粒子少量、縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子多量、縮まり有り。



第94図 第12号住居跡実測図



第95図 第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 4	台付甕 土師器	B (5.2) D 6.7 E 4.0	台部から胴部下半にかけての破片。台部は「ハ」の字状に下方へ開き、裾部はやや内彎する。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ヘラ削り。台部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・バミス にふい黄橙色 普通	P111 PL28 30% 外面煤付着 南西コーナー付 近床面
5	甕 土師器	A [11.8] B (8.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ヘラナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P112 PL28 20% 南西コーナー付 近床面
6	器台 土師器	A 8.8 B 10.3 D [11.0] E 7.8	脚部一部欠損。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。器受部は下位に稜をもち、外反して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形後ナデ。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P113 PL28 80% 西壁中央部付近 覆土上層
7	器台 土師器	A 8.2 B (7.4)	脚部下半欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は下位、口縁部内面に稜をもち、外反して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面丁寧なナデ。脚部外面ヘラ磨き。内面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	P114 PL28 60% 南西コーナー付 近覆土下層

第13号住居跡（第96図）

位置 調査区の東部、B15g₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.51m、短軸4.97mの長方形を呈している。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高は、41～44cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

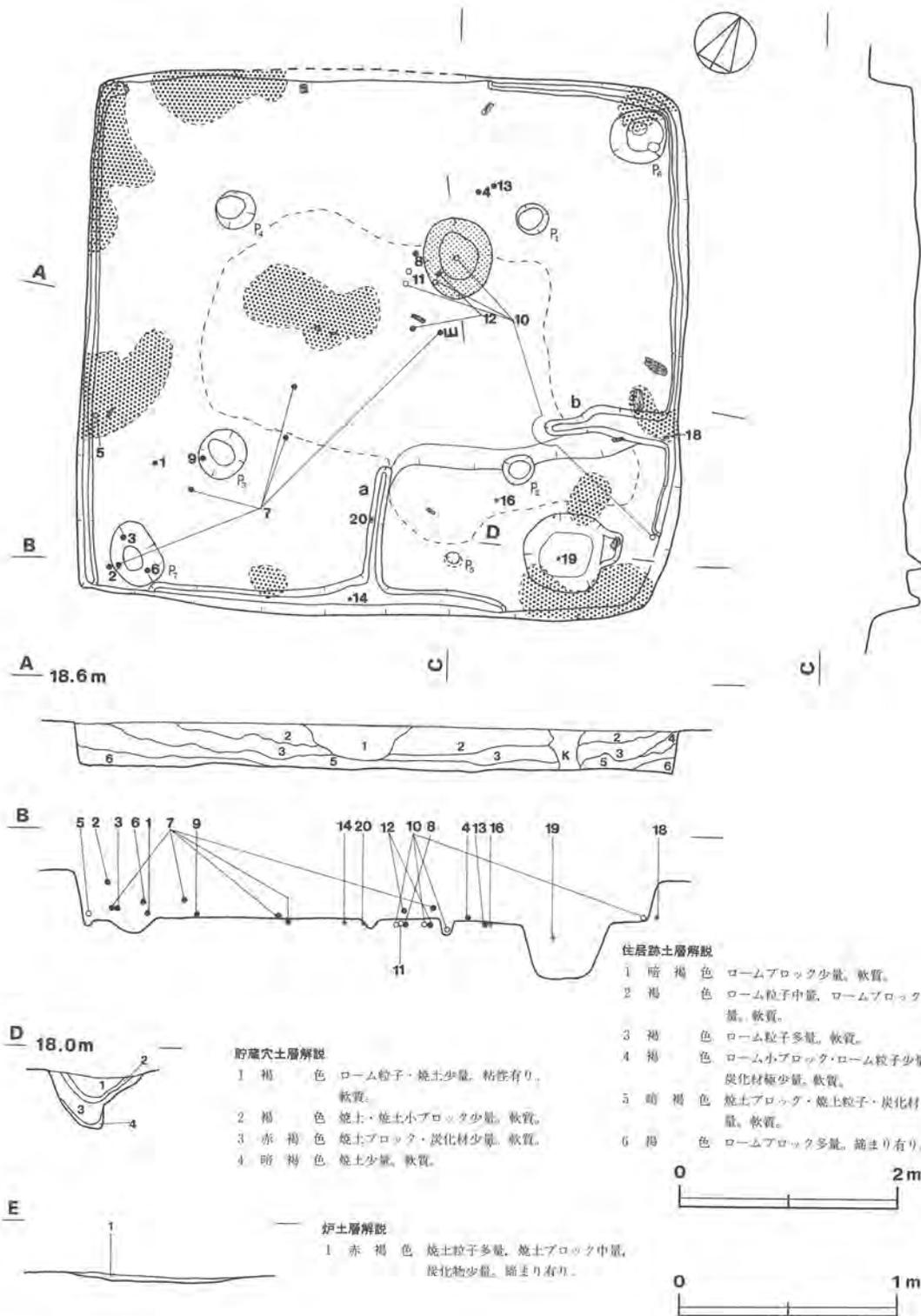
壁溝 北西壁下、東コーナー壁下を除き回っている。上幅7～14cm、深さ4～8cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

間仕切り溝 2条（a・b）検出されている。aは南東壁のほぼ中央からと、bは北東壁のやや東コーナー寄りからそれぞれ床中央部に向かって東コーナーを区画するようにのびている。a・bはともに長さ1.15～1.20m、上幅12～32cm、深さ12～15cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、主柱穴の内側は特に良く踏み固められ硬い。南東壁中央部から東コーナー寄りに入出口部の施設と考えられる長方形の高まりがあり、その南西部に梯子ピット（P₉）が確認されている。出入口部と床との比高は2～4cmである。

ピット 7か所（P₁～P₇）検出されている。P₁～P₄は、径27～45cmの円形を呈し、深さ57～70cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は、径17cmの円形を呈し、深さ14cmで、わずかに南東壁側に傾斜し、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₆・P₇は、径51～62cmの円形を呈し、深さ40・16cmで、補助柱穴と思われる。

炉 中央部から北寄りのP₁付近に検出されている。平面形は、長径73cm、短径62cmの楕円形を呈し、



第96図 第13号住居跡実測図

床を約15cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 東コーナーに検出されている。平面形は、長軸74cm、短軸73cmの隅丸方形を呈し、深さ50cmである。底面は緩やかに外傾して立ち上がっている。

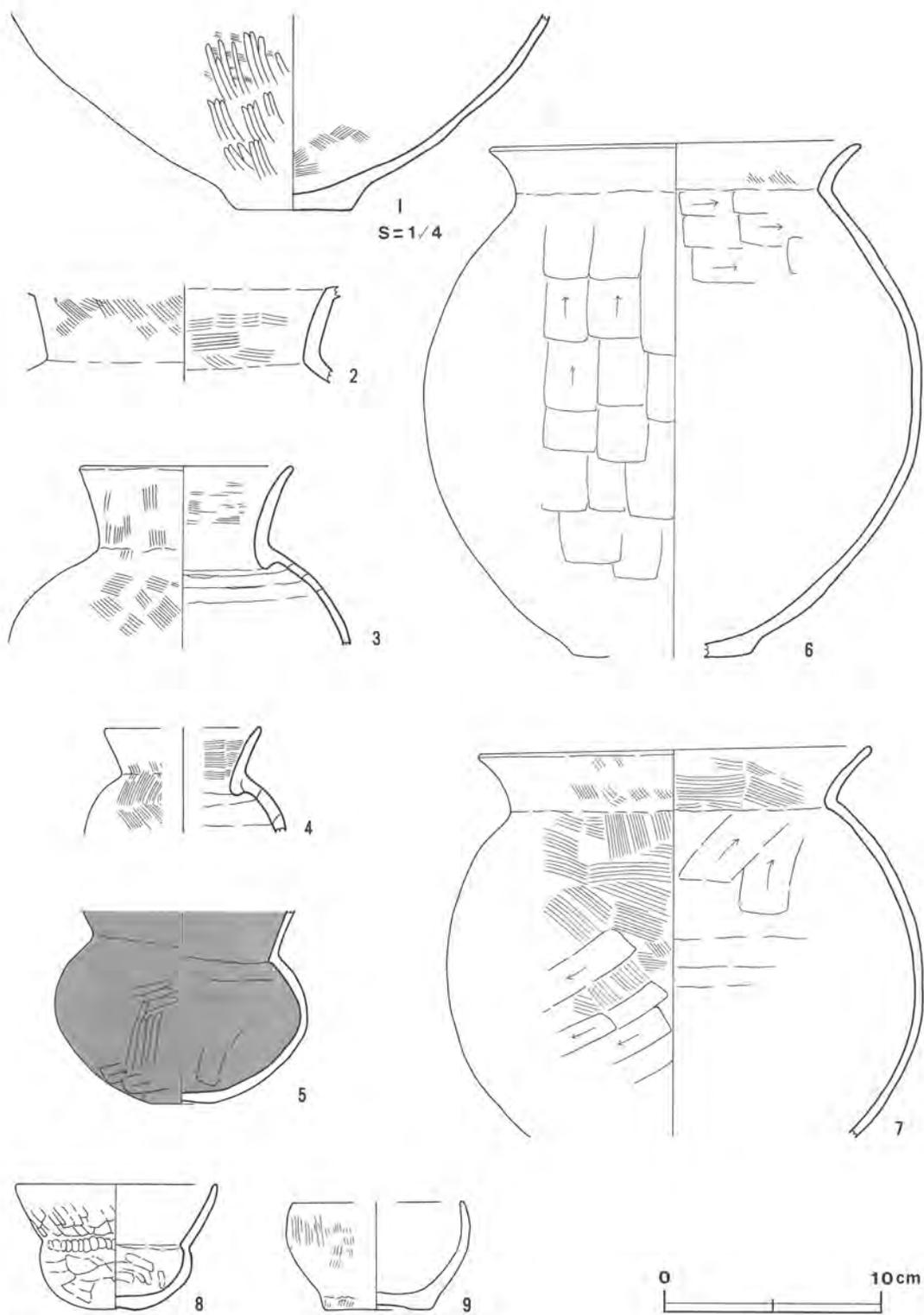
覆土 覆土下層は自然堆積であるが、その他は焼土粒子、炭化物やローム小・中ブロックを含んでおり、人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土下層にかけて土師器片（壺5、甕2、埴1、埴1、高坏2、器台2）や土師器の細片(270点)が出土している。第97図6の甕は南コーナー付近の覆土下層から破片の状態で、第97図1・3の壺は南コーナー付近の覆土下層から破片の状態で、第98図11の高坏の脚部は炉直上から、第97図8の埴は炉直上から逆位の状態で、第98図12の器台は炉直上から破片の状態で、第97図9の埴は南コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。第98図14～20の土玉は各壁付近床面から点在して出土している。

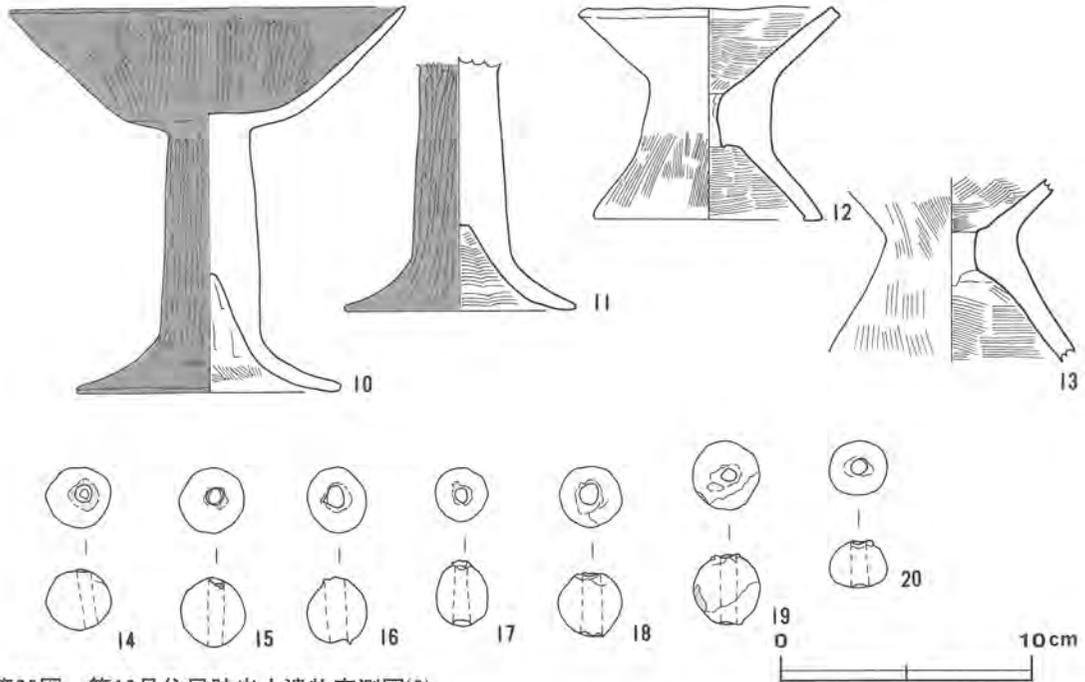
所見 本跡は、中央部の床面が火熱を受けており、焼土及び炭化材の出土状況から火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	壺 土師器	B (12.1) C 7.2	底部片。やや突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形後へラ磨き、内面ハケ目整形。内面まだらに剥離。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 良好	P117 PL29 30% 南コーナー付近 覆土下層
2	壺 土師器	B (4.4)	頸部片。外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	頸部内・外面ハケ目整形後ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P118 10% 南コーナー付近 覆土上層
3	壺 土師器	A 9.9 B (8.3)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P119 40% 南コーナー付近 覆土下層
4	壺 土師器	A [7.3] B (4.9)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P120 30% 炉北側床面
5	壺 土師器	B (9.0) C 2.8	胴部一部欠損。やや上げ底。胴部はやや扁平な球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面丁寧なナデ。胴部外面へラ磨き、内面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 良好	P121 80% 外面煤付着 南西壁際覆土下層
6	甕 土師器	A 17.1 B 23.9 C [8.4]	平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面へラ削り。	砂粒・長石・礫 にふい黄橙色 普通	P115 PL29 90% 内・外面煤付着 二次焼成 南コーナー付近 覆土下層



第97图 第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第98図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 7	壺 土師器	A 18.2 B (18.3)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面下半へラ削り、上半ハケ目整形、内面へラ削り。	砂粒・スコリア・石英にふい黄橙色普通	P116 PL29 60% 内・外面煤付着 中央部覆土下層
8	埴 土師器	A 9.4 B 5.8 C 2.0	やや上げ底。体部は半球形で、最大径を上位にもつ。口縁部は頸部からやや内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面丁寧なナデ。体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリアにふい黄橙色普通	P122 PL29 90% 内面黒斑、煤付着 炉直上
9	埴 土師器	A [7.9] B 5.0 C 4.9	体部の二分の一欠損。やや突出した上げ底。体部は内彎して器厚を減じながら立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。内面まだらに剝離。	砂粒にふい橙色普通	P123 50% 南コーナー付近 床面
第98図 10	高 土師器	A 15.9 B 15.4 D 10.5 E 10.5	脚部一部欠損。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。坯部は下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	坯部内・外面ハケ目整形後へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目調整後へラ磨き。内・外面まだらに剝離。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 良好	P124 PL29 70% 炉直上
11	高 土師器	B (10.3) D 9.4	脚部片。中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形後ナデ。赤彩。	砂粒 明黄褐色 普通	P125 40% 外面煤付着 炉直上

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 98 図 12	器 台 土 師 器	A 10.6 B 8.5 D 9.1 E 4.5	脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部は外反して立ち上がる。底面に粘土紐の貼り付け痕を確認できる。器受部中央に単孔。	器受部外面ナデ、内面ハケ目整形。脚部内・外面ハケ目整形。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 良好	P126 PL29 100% 炉直上
13	器 台 土 師 器	B (7.4)	脚部と器受部の破片。脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部は外傾して立ち上がる。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ハケ目整形。脚部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。	砂粒 にふい黄橙色 普通	P127 40% 炉北側床面

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第98図14	土 玉	2.4	2.6	—	0.7	13.5	100	床 面	DP115
15	土 玉	2.8	2.6	—	0.6	17.0	100	覆 土	DP116
16	土 玉	2.6	2.4	—	0.9	12.7	100	床 面	DP117
17	土 玉	2.6	2.1	—	0.5	9.8	100	覆 土	DP118
18	土 玉	2.5	2.5	—	0.8	12.8	100	床 面	DP119
19	土 玉	2.8	2.8	—	0.7	17.2	100	床 面	DP120
20	土 玉	1.9	2.3	—	0.6	6.6	100	床 面	DP121

第14号住居跡（第99図）

位置 調査区の東部，B15h₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.44m，短軸4.30mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は43～52cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅5～10cm，深さ4～6cmで，断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 1条(a)検出されている。南東壁のほぼ中央から床中央部に向かってのびている。

長さ0.95m，上幅4～6cm，深さ4～5cmで，断面形は「V」字状を呈している。

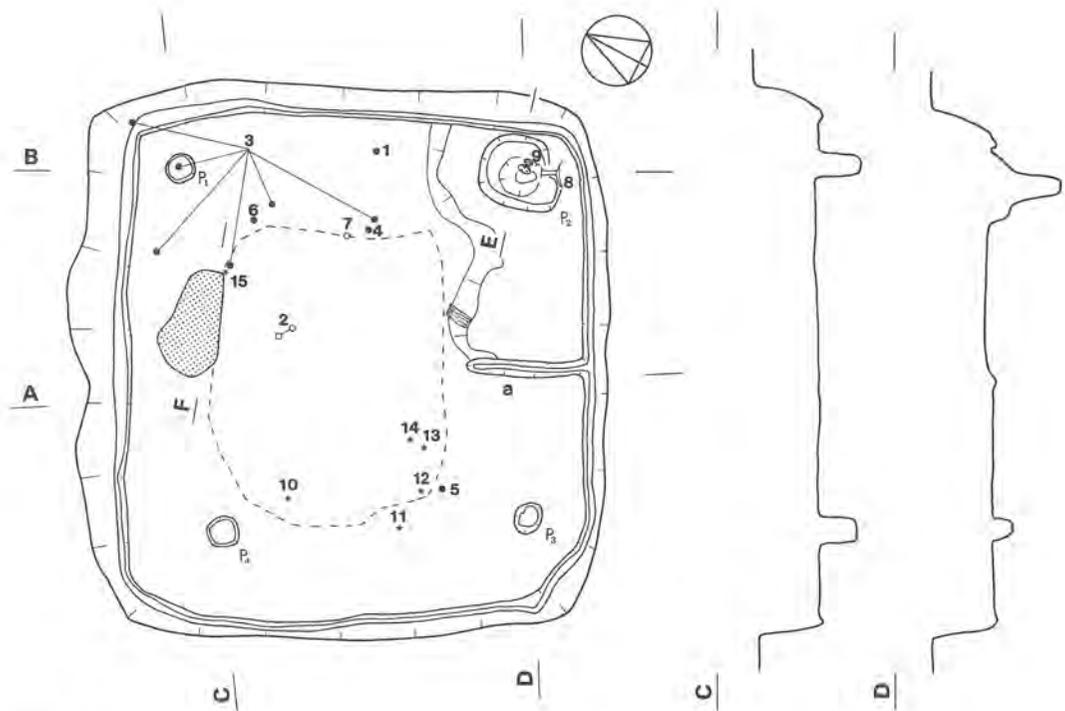
床 平坦で，支柱穴の内側は特に良く踏み固められ硬い。南東壁中央部から東コーナーにかけて出入口部と考えられる長方形の高まりが確認されている。梯子ピットは確認されていない。出入口部の高まりと床との比高は6～8cmである。

ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁～P₄は，径23～59cmの円形を呈し，深さ17～58cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。

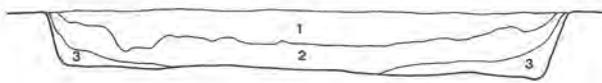
炉 中央部から北寄りに検出されている。平面形は，長径78cm，短径49cmの楕円形を呈し，床を約3cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けレンガ状に赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけては，土師器片（壺2，甕2，台付甕1，鉢1，碗1，高坏1，



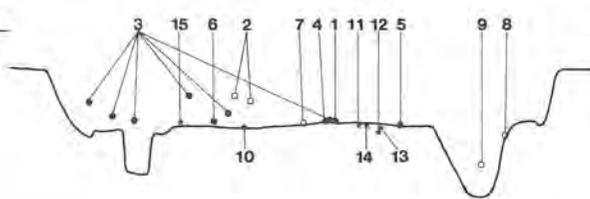
A 18.2m



住居跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少量。締まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子多量。締まり有り。

B



E 17.8m



貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量。締まり有り。
- 2 褐色 ローム粒子・焼土大ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量。軟質。
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子多量。軟質。

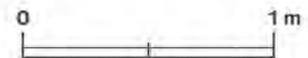


F 17.6m



炉土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量。締まり有り。



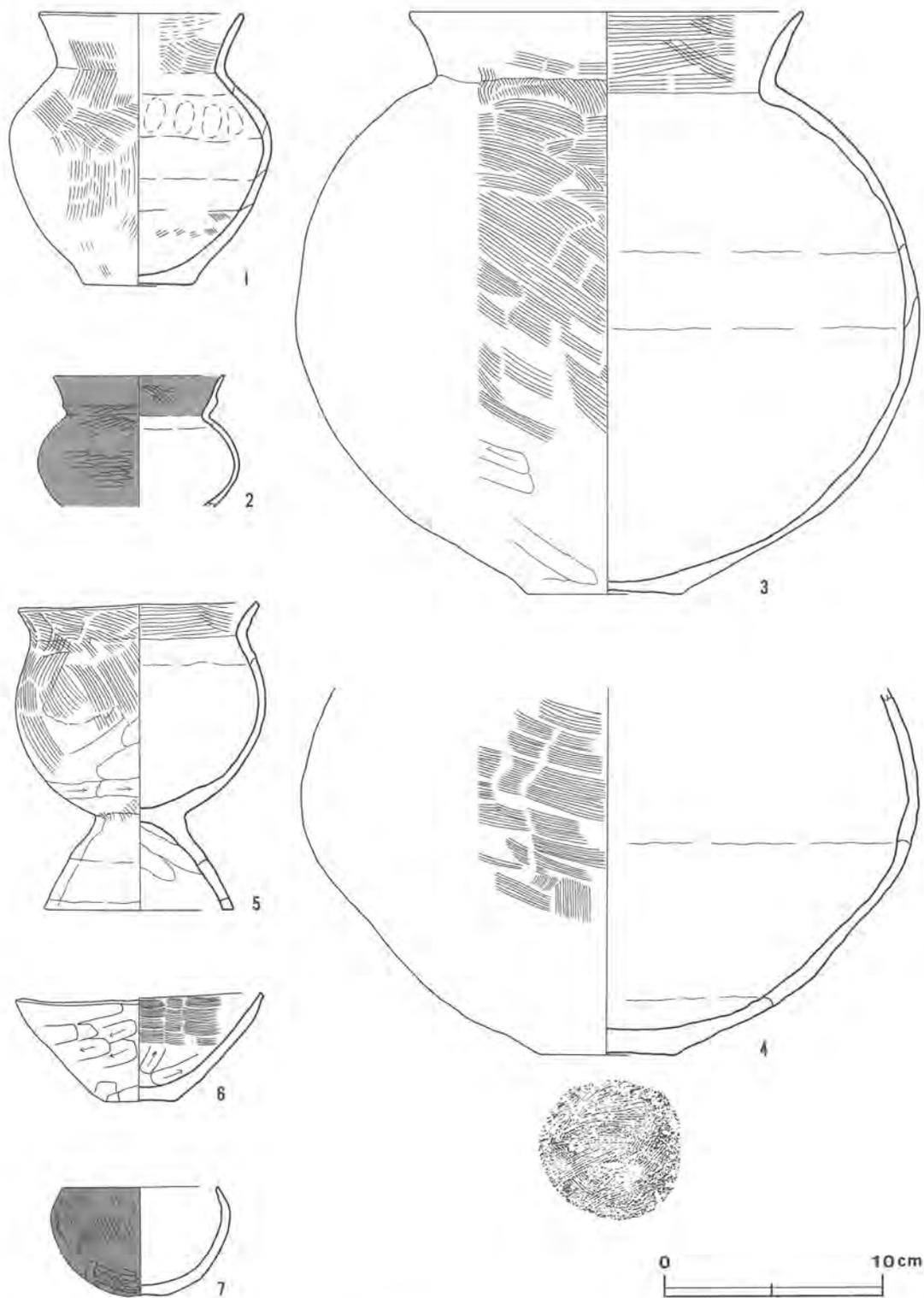
第99図 第14号住居跡実測図

器台1)や土師器の細片(100点)が出土している。第100図3の甕は北コーナー付近の床面から破片の状態、第100図5の台付甕は南コーナー付近の床面から破片の状態、第101図8の高坏はP₂の覆土上層から正位の状態、第101図9の器台はP₂の覆土中層から逆位の状態で出土している。第101図10~16の土玉は中央部の床面から点在して7点出土している。

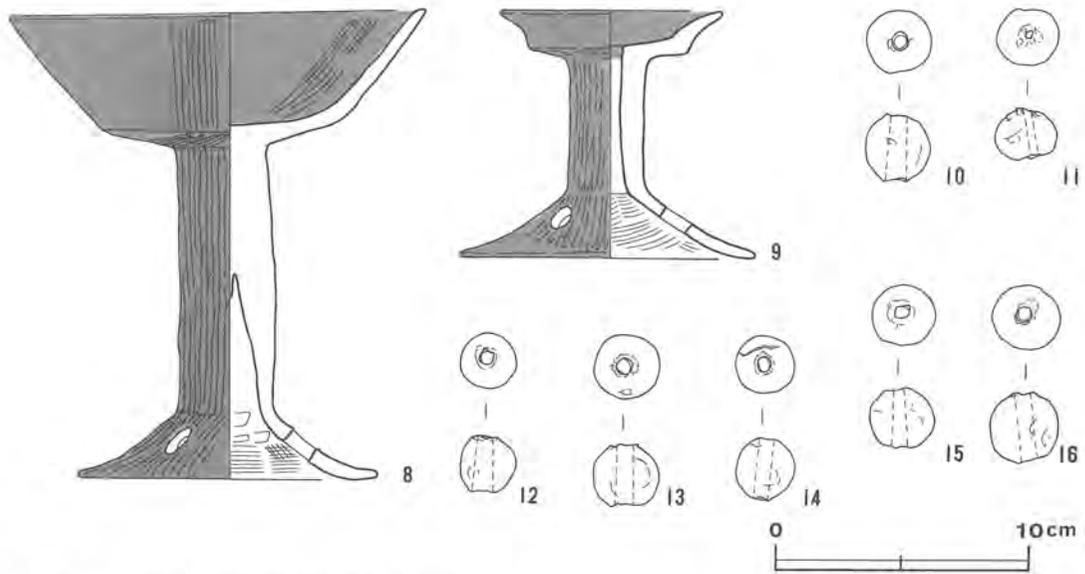
所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	壺 土師器	A [9.5] B 12.3 C 5.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。胴部はやや扁平した球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリアにふい黄橙色 普通	P131 PL31 50% 北東壁中央部付近床面
2	壺 土師器	A 8.0 B (6.0)	底部欠損。体部はやや扁平な球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は下位に明瞭な稜をもち、外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面へラ磨き、内面へラナデ。体部内面除き赤彩。	砂粒 赤色 良好	P133 PL31 80% 中央部覆土中層
3	甕 土師器	A 18.2 B 27.4 C 7.2	やや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面下半部へラ削り、上半部ハケ目整形、内面磨耗著しく不明。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P128 PL31 90% 外面煤付着 北コーナー付近床面
4	甕 土師器	B (17.2) C 6.4	胴部上半欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形、内面ナデ、底部外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P129 50% 外面煤付着 北東壁中央部付近床面
5	台付甕 土師器	A 11.3 B 14.5 D 8.8 E 4.4	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面下半へラ削り、上半ハケ目整形。台部内・外面へラ削り後ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P130 PL31 90% 外面煤付着 南コーナー付近床面
6	鉢 土師器	A 11.5 B 5.2 C 3.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎気味である。	体部外面へラ削り、内面ハケ目整形後下半へラ削り。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P132 PL31 100% 北コーナー付近床面
7	碗 土師器	A 7.2 B 5.1 C 1.6	体部一部欠損。やや上げ底。体部は半球形を呈する。口縁部は内彎気味につまみ上げて立ち上がる。	体部外面ハケ目整形後ナデ、下半部へラ磨き、内面へラナデ。内面まだらに剝離。外面赤彩。	砂粒 にふい黄橙色 普通	P134 PL31 60% 北東壁中央部付近床面
第101図 8	高坏 土師器	A 16.7 B 18.9 D 11.9 E 13.3	脚部一部欠損。脚部は中実柱状で二分の一中空、裾部はラッパ状に開く。坏部は下位に稜をもち、やや外反して立ち上がる。3孔。	坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形後ナデ。脚部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P135 PL31 80% 外面煤付着 P2覆土上層
9	器台 土師器	A 8.7 B 10.0 D 11.6 E 8.0	脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。器受部は下位に稜をもち、大きく外反して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 良好	P136 PL31 95% P2覆土中層



第100图 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第101図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第101図10	土玉	2.8	2.6	—	0.7	14.7	100	床面	DP122
11	土玉	2.1	2.5	—	0.3	9.9	100	床面	DP123
12	土玉	2.3	2.2	—	0.6	9.5	100	床面	DP124
13	土玉	2.6	2.6	—	0.6	15.2	100	床面	DP125
14	土玉	2.6	2.3	—	0.6	11.8	100	床面	DP126
15	土玉	2.5	2.6	—	0.5	13.4	100	覆土下層	DP127
16	土玉	2.9	2.6	—	0.6	17.4	100	覆土	DP128

第15号住居跡 (第102図)

位置 調査区の東部, B15i₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.45m, 短軸3.24mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は22~26cmで, 外傾して立ち上がっている。

壁溝 北東コーナーの壁下を除いて回っている。上幅17~23cm, 深さ8~14cmで, 断面形は, 逆台形を呈している。

床 平坦で, 支柱穴の内側は特に良く踏み固められ硬い。

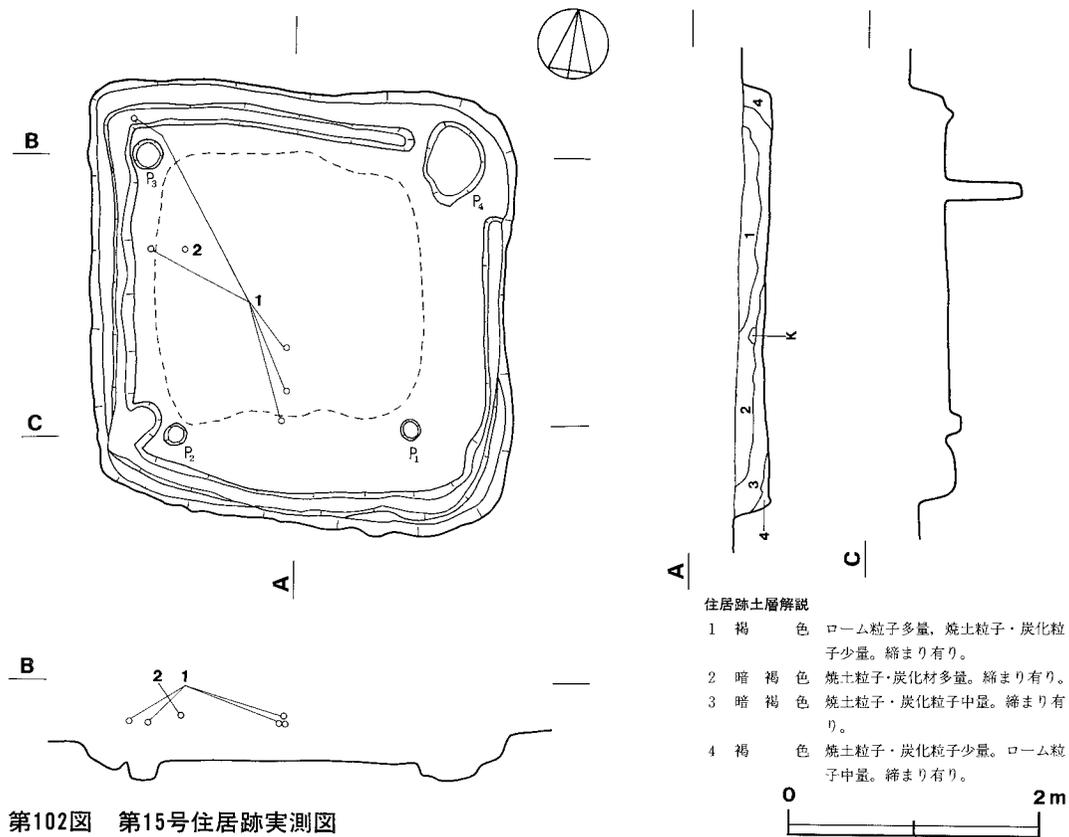
ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₃は, 径17~25cmの円形を呈し, 深さ11~59cm, P₄は, 長径69cm, 短径50cmの楕円形を呈し, 深さ14cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。

炉 検出されない。

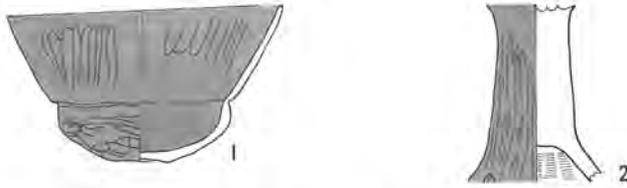
覆土 自然堆積。

遺物 床面や覆土下層からは土師器片（高坏1， 埴1）や土師器の細片（63点）が出土している。第103図1の埴は中央部付近の床面から破片の状態で， 第103図2の高坏の脚部は西壁中央部付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は， 焼土及び炭化物や炭化材の出土状態から火災住居跡と思われる。遺構の状態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第102図 第15号住居跡実測図



第103図 第15号住居跡出土遺物実測図



第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	埴 土 師 器	A 11.0 B 6.4 C 2.1	上円底。体部は扁平な半球形を呈し、最大径を上位にもつ。口縁部はやや内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面へラ磨き、内面剥離痕が著しく不明。内・外面赤彩。	砂粒・暗赤色 普通	P137 PL31 90% 中央部付近床面
2	高 杯 土 師 器	B (7.6)	脚部片。脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。脚部に1孔確認できる。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。外面赤彩。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P138 20% 西壁中央部付近 覆土下層

第16号住居跡 (第104・105図)

位置 調査区の東部、C15d₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.78m, 短軸5.44mの方形を呈している。

主軸方向 N-35°-W

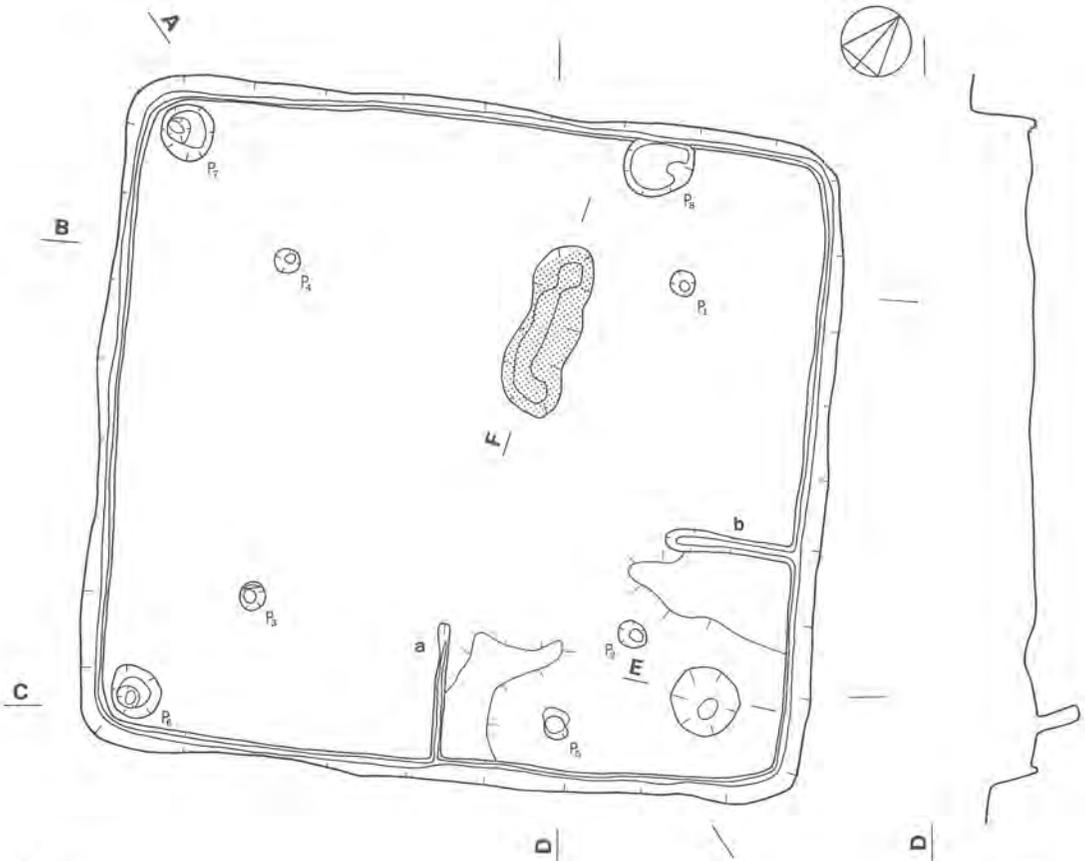
壁 壁高は35~47cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅8~12cm, 深さ4~6cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

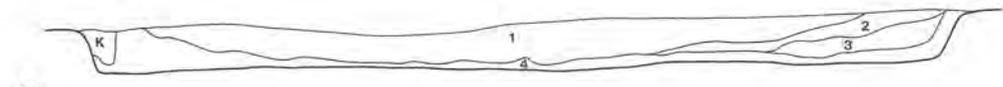
間仕切り溝 2条(a・b)検出されている。aは南東壁のほぼ中央から、bは北東壁の東コーナー寄りから床中央部に向かって東コーナーを区画するようにのびている。長さ1.05~1.10m, 上幅8~18cm, 深さ8~15cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、全面が良く踏み固められ硬い。間仕切り溝(a)の北東側には、出入口部と考えられる半円形の高まりがあり、その北東部には梯子ピット(P₅)が確認されている。半円形の高まりと床との比高は4~8cmである。間仕切り溝(b)の南東側には、楕円形の高まりがあり、その南部に貯蔵穴が確認されている。楕円形の高まりと床との比高は4~8cmである。また、火熱を強く受けた中央部の床面は、焼けて赤変硬化している。

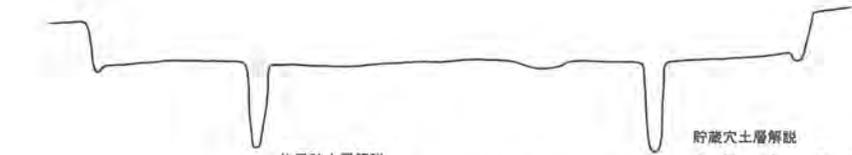
ピット 8か所(P₁~P₈)検出されている。P₁~P₄は、径20~22cmの円形を呈し、深さ61~73cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は、径17cmの円形を呈し、深さ34cmで、南東壁に傾斜しており、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₆・P₇は、径45cmの円形を呈し、深さ



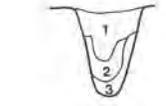
A 18.8m



B



E 18.2m



住居跡土層解説

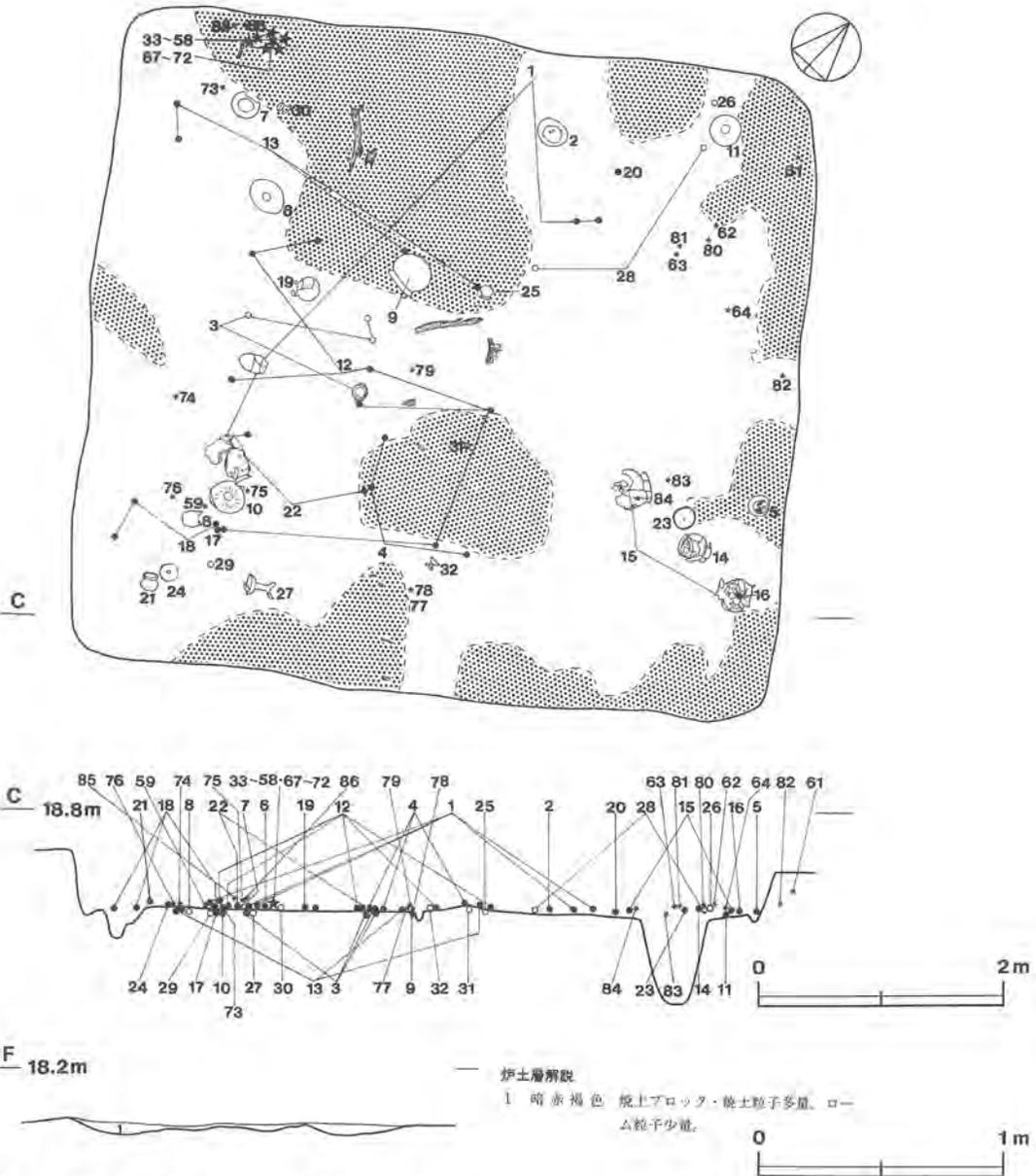
- 1 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子・炭化物多量, ローム小・中ブロック中量, 焼土ブロック・炭化材少量。軟質。
- 3 明褐色 ローム小・中ブロック・ローム粒子・焼土・炭化材少量。軟質。
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 焼土・炭化材少量。縮まり有り。
- 5 濃い赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量。縮まり有り。
- 6 明褐色 ローム小・中ブロック少量。粘性, 縮まり有り。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック中量, 焼土・炭化粒子・炭化材少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子・炭化物・炭化材多量。軟質。
- 3 褐色 焼土多量, 炭化粒子・ローム粒子少量。軟質。



第104図 第16号住居跡実測図



第105図 第16号住居跡遺物出土位置図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	壺 土師器	A 14.9	胴部一部欠損。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径をやや下位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部上位はやや内彎気味に立ち上がる。頸部突帯貼り付け。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・スコリア におい橙色 普通	P154 PL33 80% 南コーナー付近 床面
		B 29.5				
		C 8.0				

35・30cmで、補助柱穴と思われる。P₃は、径50cm、深さ19cmで性格不明である。

炉 中央部から北寄りに検出されている。平面形は、長径 140cm、短径48cmの長楕円形を呈し、床を約 8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。

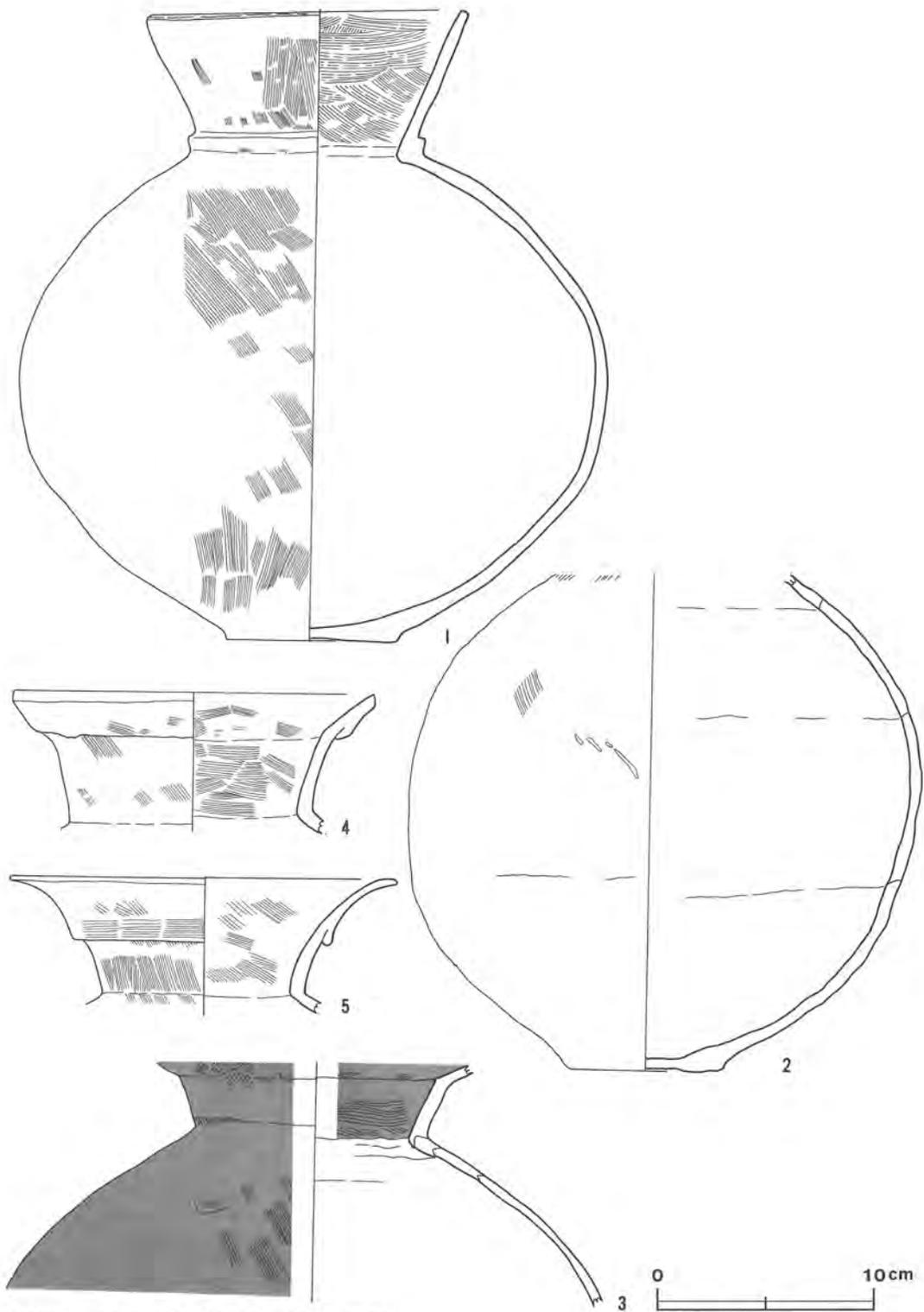
貯蔵穴 東コーナーに検出されている。平面形は、径50cmの円形を呈し、深さ69cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 ロームブロック、炭化物、焼土小ブロックを多量に含み、人為堆積と思われる。

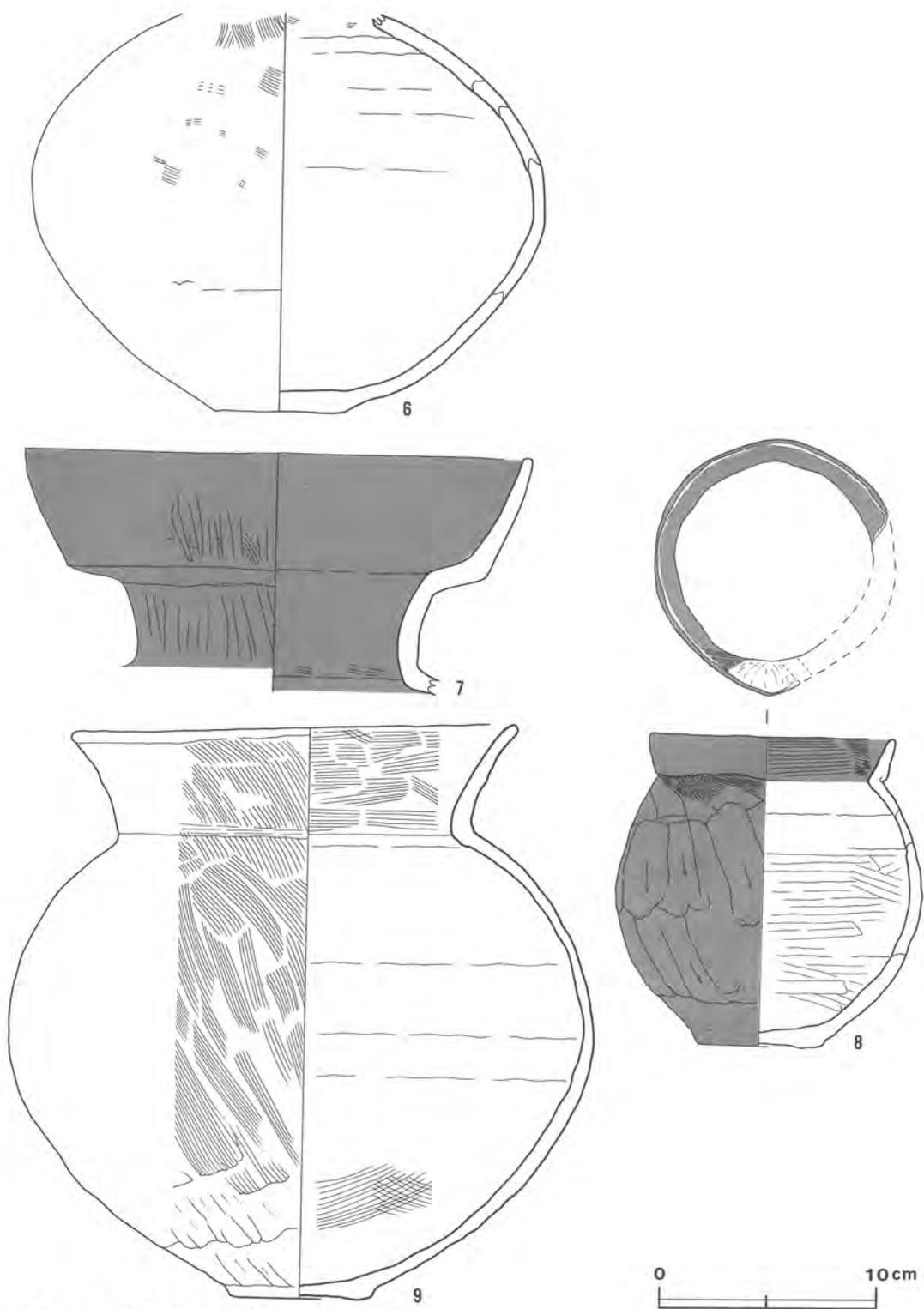
遺物 床面や覆土下層からは土師器片（壺 8、甕13、台付甕 1、甗 2、鉢 1、埴 1、高坏 3、器台 3）や土師器の細片（144点）が出土している。その他、土製品は西コーナー付近から多量に出土している。第108図10の甕は南コーナー付近のP₃上から逆位の状態で、第108図11の甕は北コーナー付近の床面から逆位の状態で、第107図 9 の甕は中央部の床面から横位の状態で、第107図 6 の壺は西コーナー付近のP₄上から逆位の状態で、第111図23の甗は東コーナー付近の床面から正位の状態で、第111図24の甗は南コーナー付近の床面から横位の状態で、第111図27の高坏は南コーナー付近の床面から横位の状態で、第111図25の有孔の埴は炉直上から横位の状態で、第112図32の器台は南東壁中央部付近の床面から横位の状態で出土している。第112・113図33～87の土玉は床面の全域から点在して55点出土しているが、特に西コーナー際からは多量の土玉がまとまって出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状況から火災住居跡と思われる。甕や高坏、器台及び有孔の埴等の出土状況から、祭祀を行った住居跡と推定される。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

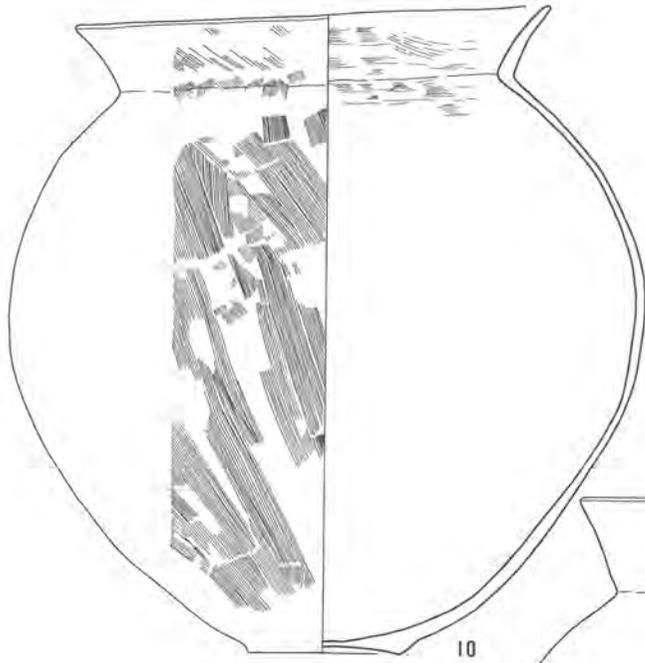
図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 106 図 2	壺 土 師 器	B (23.1) C 7.0	口縁部欠損。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面ハケ目調整後ヘラナデ、内面ナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P155 PL33 80% 外面煤付着 炉北側床面
3	壺 土 師 器	B (11.2)	胴部上半から口縁部の破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は内面に稜をもち、外反して立ち上がる。	頸部内・外面ハケ目整形。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。胴部内面陰き赤彩。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P156 20% 中央部付近床面
4	壺 土 師 器	A 16.8 B (6.6)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は内面に緩やかな稜をもち、外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P157 PL33 20% 南東部中央部付近床面
5	壺 土 師 器	A 18.1 B (6.3)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒 橙色 普通	P158 PL33 20% 北東壁際床面



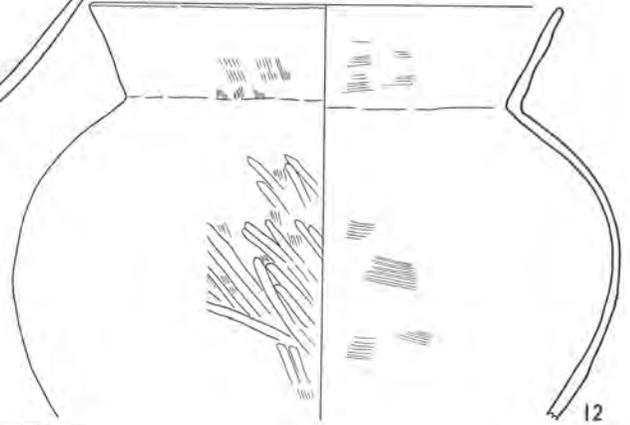
第106图 第16号住居跡出土遺物実測図(1)



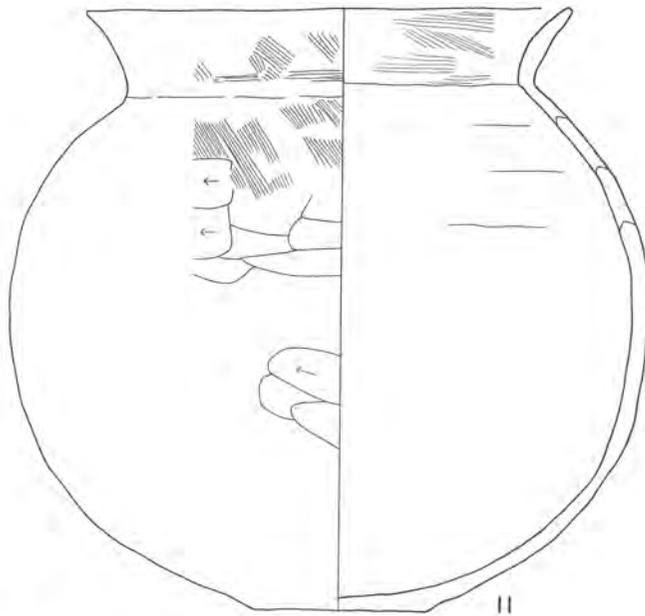
第107图 第16号住居跡出土遺物実測図(2)



10



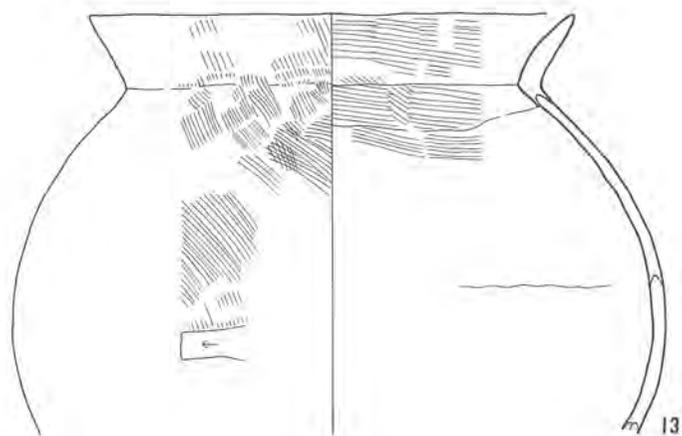
12



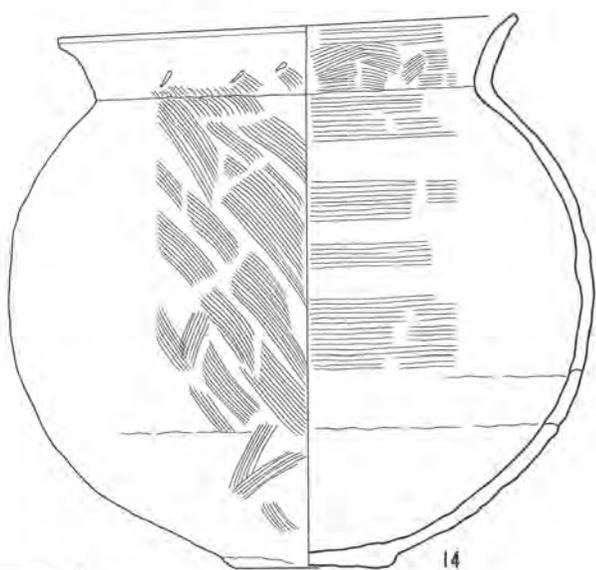
11



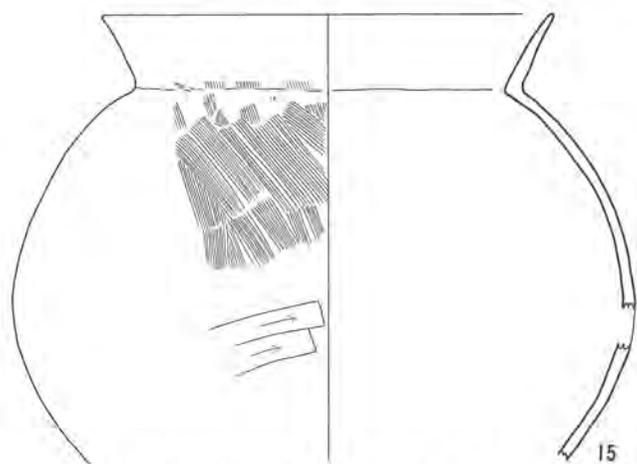
第108図 第16号住居跡出土遺物実測図(3)



13



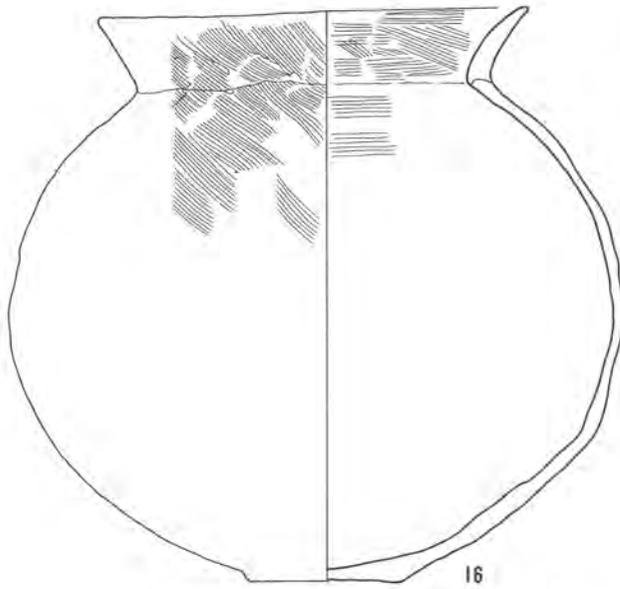
14



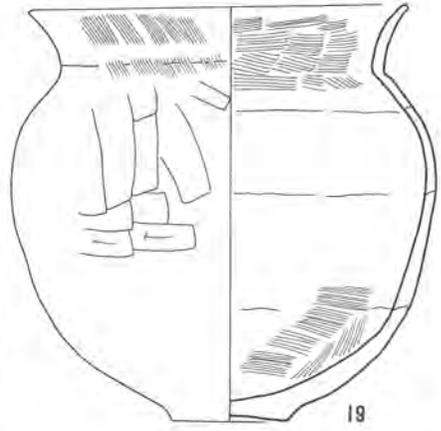
15



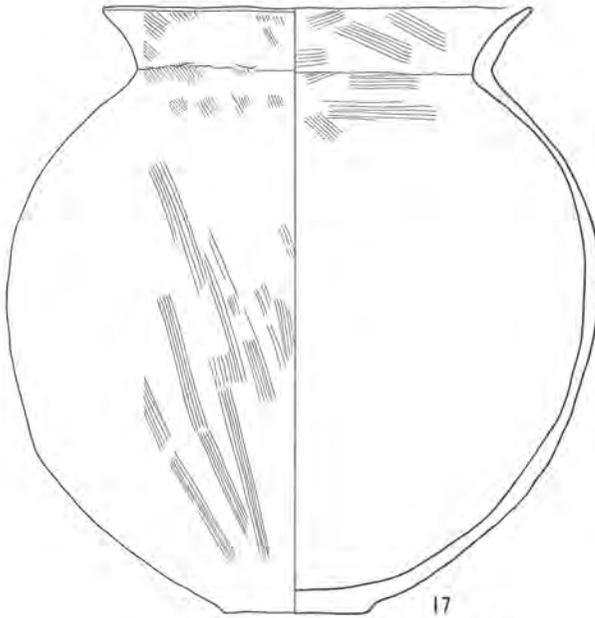
第109图 第16号住居跡出土遺物実測図(4)



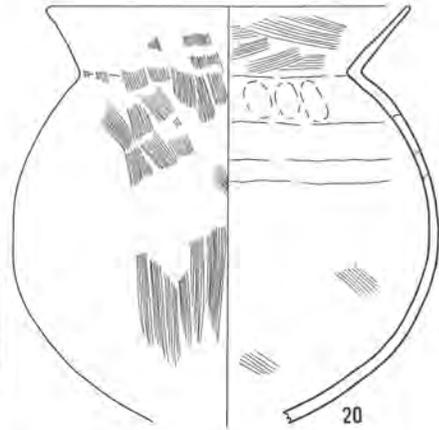
16



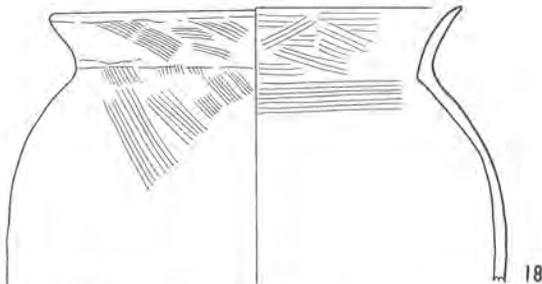
19



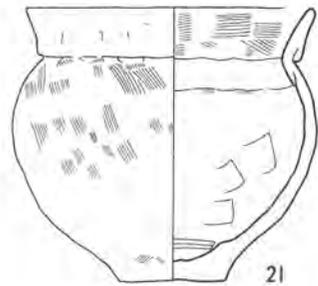
17



20



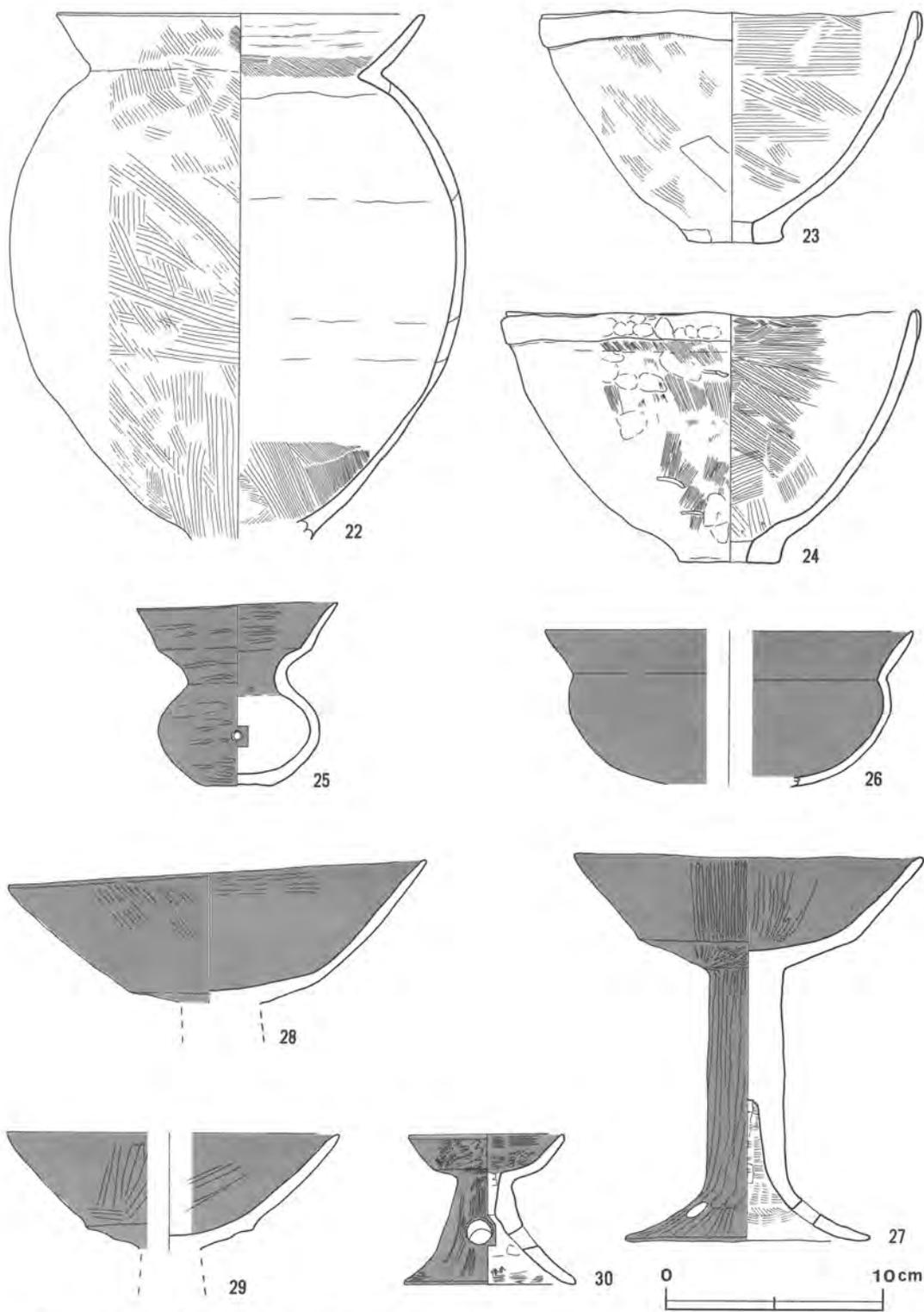
18



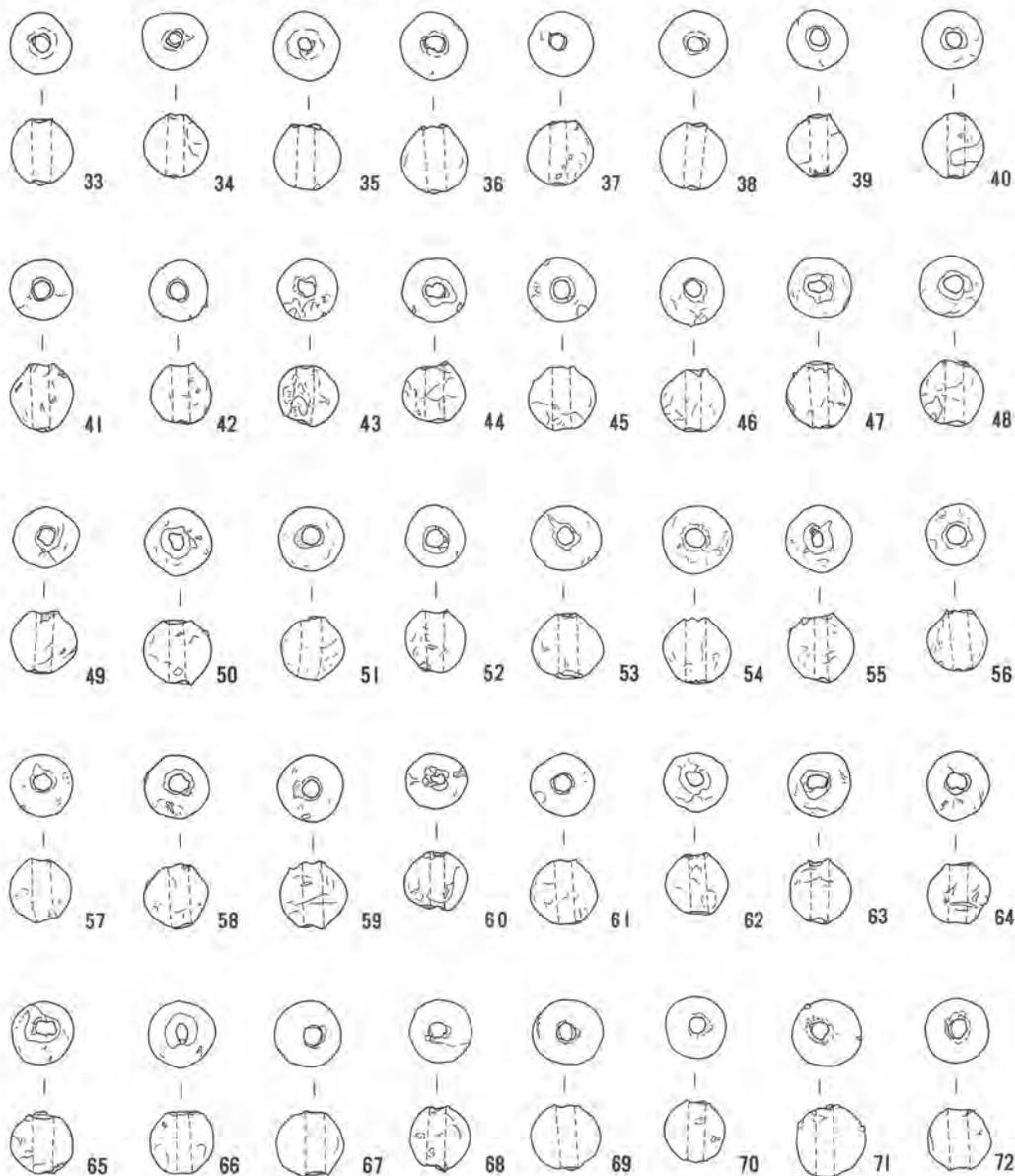
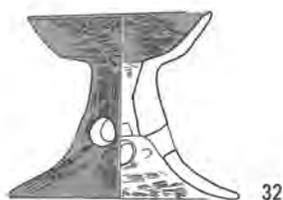
21



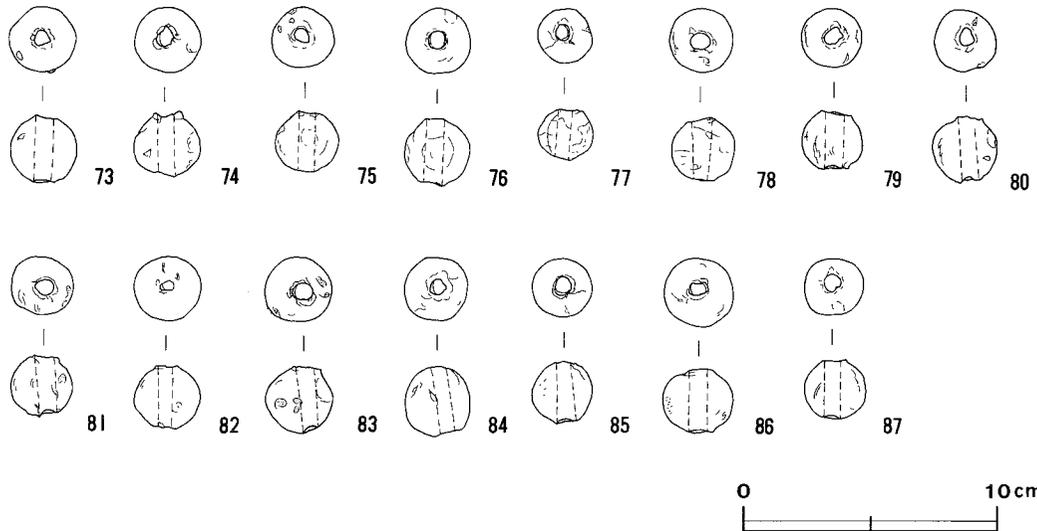
第110図 第16号住居跡出土遺物実測図(5)



第111図 第16号住居跡出土遺物実測図(6)



第112图 第16号住居跡出土遺物実測図(7)



第113図 第16号住居跡出土遺物実測図(8)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 6	壺 土師器	B (18.8) C 5.8	口縁部欠損。平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部中位はやや膨らみをもつ。	胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P159 PL33 80% 西コーナー付近 (P ₄ 上)床面
7	壺 土師器	A 23.4 B (11.2)	口縁部片。有段口縁で、頸部から外反し、内面に稜をもち内彎しながら立ち上がる。	口縁部外面へラ磨き、内面磨耗が著しく不明。内・外面赤彩。	砂粒・礫 暗赤色 普通	P160 PL33 30% 西コーナー付近 覆土下層
8	壺 土師器	A 11.1 B 14.5 C 5.8	片口壺。平底。胴部はやや長胴で、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部内面に擦痕有り。複合口縁。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。内・外面まだらに剝離。胴部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P161 PL33 90% 南コーナー付近 床面
9	甕 土師器	A 20.4 B 27.2 C 6.4	やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後へラナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P139 PL33 100% 外面煤付着 中央部床面
第108図 10	甕 土師器	A 18.8 B 26.1 C 6.0	やや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P140 PL33 95% 外面煤付着 南コーナー付近 (P ₉ 上)床面
11	甕 土師器	A 19.4 B 24.3 C 7.0	平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	胴部外面下半部へラ削り、上半部ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P141 PL33 100% 内・外面煤付着 北コーナー付近 床面

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 12	甕 土師器	A 25.2 B (22.1)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ヘラナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・スコリアにぶい黄橙色 普通	P142 60% 二次焼成 南西壁中央部付近覆土下層
第109図 13	甕 土師器	A 19.3 B (16.9)	底部から胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形。内面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P143 40% 内・外面煤付着 西コーナー付近覆土下層
14	甕 土師器	A 18.5 B 22.2 C 6.4	胴部一部欠損。平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P144 PL33 80% 二次焼成 東コーナー付近床面
15	甕 土師器	A 18.0 B (18.0)	底部から胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面下半ヘラ削り、上半ハケ目整形、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・スコリアにぶい橙色 普通	P145 50% 外面煤付着 東コーナー付近床面
第110図 16	甕 土師器	A 17.0 B 23.2 C 6.0	胴部一部欠損。平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリアにぶい橙色 普通	P146 PL33 60% 二次焼成 東コーナー付近床面
17	甕 土師器	A (17.2) B 24.3 C 5.8	胴部から口縁部の一部欠損。平底。胴部はやや長胴で、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒にぶい黄橙色 普通	P147 PL34 60% 外面煤付着 南コーナー付近床面
18	甕 土師器	A 16.4 B (11.1)	底部から胴部下半欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P148 30% 南コーナー付近床面
19	甕 土師器	A 15.0 B 16.7 C 4.7	やや突出した上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ハケ目整形。内面まだらに剝離。	砂粒 橙色 普通	P149 PL34 95% 外面煤付着 中央部付近床面
20	甕 土師器	A 14.4 B (16.8)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。内・外面まだらに剝離。輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P150 PL34 70% 北コーナー付近床面
21	甕 土師器	A 11.5 B 11.0 C 4.2	突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ナデ、内面ヘラナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・長石にぶい黄橙色 普通	P153 PL34 100% 南コーナー付近床面
第111図 22	台付甕 土師器	A 16.8 B (24.6)	台部欠損。胴部はやや長胴で、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はヘラナデ。やや内彎して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P152 PL34 50% 外面煤付着 南コーナー付近覆土下層

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第111図 23	土 師 器	A 17.4	突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はさらに粘土紐を貼り付け、複合口縁状を呈している。単孔。	体部内・外面ハケ目整形。内面まだらに剥離。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P162 PL34 100% 外面煤付着 コーナー付近床面
		B 10.8				
		C 4.4				
24	土 師 器	A 19.5	突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はさらに粘土紐を貼り付け、複合口縁状を呈している。単孔。	体部内・外面ハケ目整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P163 PL34 100% 南コーナー付近床面
		B 12.0				
		C 4.6				
25	土 師 器	A 9.3	やや上げ底。体部はやや扁平な球形を呈し、中位に小単孔を穿つ。口縁部は下位に明瞭な稜をもち、外反して立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面丁寧なへラ磨き、内面ナデ。内・外面まだらに剥離。体部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P165 PL34 100% 外面煤付着炉直上
		B 8.5				
		C 2.9				
26	土 師 器	A [17.0]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は半球形を呈している。口縁部は内面に緩やかな稜をもち、立ち上がる。	口縁部内・外面へラナデ。胴部内・外面ハケ目調整後丁寧なへラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P164 20% 北コーナー付近床面
		B (7.2)				
27	高 土 師 器	A 16.1	脚部は中実柱状で、裾部はラッパ状に開く。坏部は下位に稜をもち、外反して立ち上がる。口縁部上位はやや内彎する。3孔。	坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。内面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒・石英 赤色 良好	P166 PL34 100% 南コーナー付近床面
		B 18.1				
		D 11.3				
		E 12.8				
28	高 土 師 器	A 19.1	坏部片。坏部下位に緩やかな稜をもち、外反気味に立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P167 30% 内・外面煤付着炉直上
		B (6.8)				
29	高 土 師 器	A [15.3]	坏部片。坏部下位に明瞭な稜をもち、やや内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。内面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒・石英 暗赤色 普通	P168 30% 南コーナー付近床面
		B (5.5)				
30	器 土 師 器	A 7.2	脚部はラッパ状に下方に開く。器受部は下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。脚部内面除き赤彩。	砂粒 赤色 普通	P169 PL34 100% 西コーナー付近覆土下層
		B 7.0				
		D 7.9				
		E 4.7				
第112図 31	器 土 師 器	A 7.1	脚部はラッパ状に下方に開く。器受部は下位に明瞭な稜をもち、外反して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ハケ目整形後丁寧なナデ。脚部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。脚部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P170 PL34 90% 中央部付近床面
		B 9.0				
		D 10.4				
		E 6.7				
32	器 土 師 器	A 7.3	脚部はラッパ状に下方に開く。器受部は下位に明瞭な稜をもち、外傾して立ち上がる。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面丁寧なへラ磨き脚部外面丁寧なへラ磨き、内面へラ削り後ハケ目整形。内・外面まだらに剥離。内・外面赤彩	砂粒 赤色 普通	P171 PL34 100% 南東壁中央部付近床面
		B 7.5				
		D 9.1				
		E 5.3				

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第112図33	土 玉	2.7	2.5	—	0.7	13.4	100	床 面	DP129
34	土 玉	2.5	2.6	—	0.6	13.1	100	床 面	DP130
35	土 玉	2.7	2.7	—	0.6	17.4	100	床 面	DP131
36	土 玉	2.8	2.7	—	0.9	16.2	100	床 面	DP132
37	土 玉	2.6	2.6	—	0.7	14.6	100	床 面	DP133

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第112図38	土玉	2.7	2.7	—	0.8	16.3	100	床面	DP134
39	土玉	2.5	2.4	—	0.7	11.6	100	床面	DP135
40	土玉	2.6	2.5	—	0.6	13.3	100	床面	DP136
41	土玉	2.7	2.6	—	0.7	14.4	100	床面	DP137
42	土玉	2.4	2.3	—	0.7	12.2	100	床面	DP138
43	土玉	2.4	2.4	—	0.7	12.4	100	床面	DP139
44	土玉	2.5	2.6	—	0.8	13.4	100	床面	DP140
45	土玉	2.6	2.8	—	0.6	15.0	100	床面	DP141
46	土玉	2.6	2.6	—	0.7	14.9	100	床面	DP142
47	土玉	2.7	2.6	—	0.7	13.9	100	床面	DP143
48	土玉	2.6	2.5	—	0.8	14.8	100	床面	DP144
49	土玉	2.5	2.6	—	0.7	14.2	100	床面	DP145
50	土玉	2.5	2.7	—	0.5	16.2	100	床面	DP146
51	土玉	2.6	2.6	—	0.8	14.6	100	床面	DP147
52	土玉	2.6	2.4	—	0.7	13.0	100	床面	DP148
53	土玉	2.6	2.9	—	0.7	16.2	100	床面	DP149
54	土玉	2.7	2.8	—	0.8	16.1	100	床面	DP150
55	土玉	2.7	2.7	—	0.5	16.1	100	床面	DP151
56	土玉	2.5	2.4	—	0.7	11.6	100	床面	DP152
57	土玉	2.6	2.5	—	0.8	13.4	100	床面	DP153
58	土玉	2.6	2.6	—	0.8	14.2	100	床面	DP154
59	土玉	2.7	2.7	—	0.7	16.9	100	床面	DP155
60	土玉	2.3	2.6	—	0.5	10.7	100	床面	DP156
61	土玉	2.7	2.6	—	0.7	14.4	100	覆土中層	DP157
62	土玉	2.5	2.6	—	0.6	12.1	100	床面	DP158
63	土玉	2.7	2.5	—	0.7	13.3	100	床面	DP159
64	土玉	2.5	2.6	—	0.7	14.7	100	床面	DP160
65	土玉	2.5	2.5	—	1.0	13.9	100	床面	DP161
66	土玉	2.6	2.6	—	0.6	16.3	100	床面	DP162
67	土玉	2.7	2.8	—	0.7	16.5	100	床面	DP163
68	土玉	2.7	2.5	—	0.7	13.5	100	床面	DP164
69	土玉	2.7	2.8	—	0.7	16.8	100	床面	DP165
70	土玉	2.5	2.4	—	0.7	13.3	100	床面	DP166
71	土玉	3.0	2.8	—	0.7	19.1	100	床面	DP167
72	土玉	2.6	2.6	—	0.8	13.8	100	床面	DP168
第113図73	土玉	2.8	2.7	—	0.7	15.9	100	床面	DP169
74	土玉	2.7	2.7	—	0.6	14.4	100	床面	DP170
75	土玉	2.6	2.5	—	0.6	12.5	100	床面	DP171
76	土玉	2.7	2.7	—	0.7	14.1	100	床面	DP172
77	土玉	2.1	2.3	—	0.5	7.8	100	床面	DP173
78	土玉	2.6	2.5	—	0.8	13.8	100	床面	DP174
79	土玉	2.4	2.4	—	0.8	11.3	100	床面	DP175
80	土玉	2.7	2.6	—	0.6	13.9	100	床面	DP176

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第113図81	土玉	2.4	2.5	—	0.8	11.1	100	床面	DP177
82	土玉	2.5	2.7	—	0.6	15.0	100	覆土下層	DP178
83	土玉	2.7	2.7	—	0.7	15.2	100	覆土下層	DP179
84	土玉	2.9	2.6	—	0.6	16.6	100	覆土下層	DP180
85	土玉	2.6	2.5	—	0.6	11.3	100	覆土下層	DP181
86	土玉	2.6	2.8	—	0.7	17.1	100	覆土下層	DP182
87	土玉	2.4	2.5	—	0.6	11.9	100	覆土下層	DP183

第17号住居跡 (第114図)

位置 調査区の東部，C16e₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.94m，短軸 [3.85] mの隅丸方形を呈するものと推定される。

主軸方向 N-57°-E

壁 壁高は18～30cmで，外傾して立ち上がっている。南東壁は，攪乱により壁の立ち上がりを確認できない。

壁溝 南東壁が攪乱を受けているため確認できないが，その他の壁下には壁溝が全周している。上幅13～18cm，深さ8～12cmで，断面形は，逆台形を呈している。

床 平坦で，軟らかいが，中央部の床面は踏み固められ硬い。西コーナー付近には，P₁を囲むようにベルトが確認されているが，その性格は不明である。ベルトと床との比高は，4～6cmである。

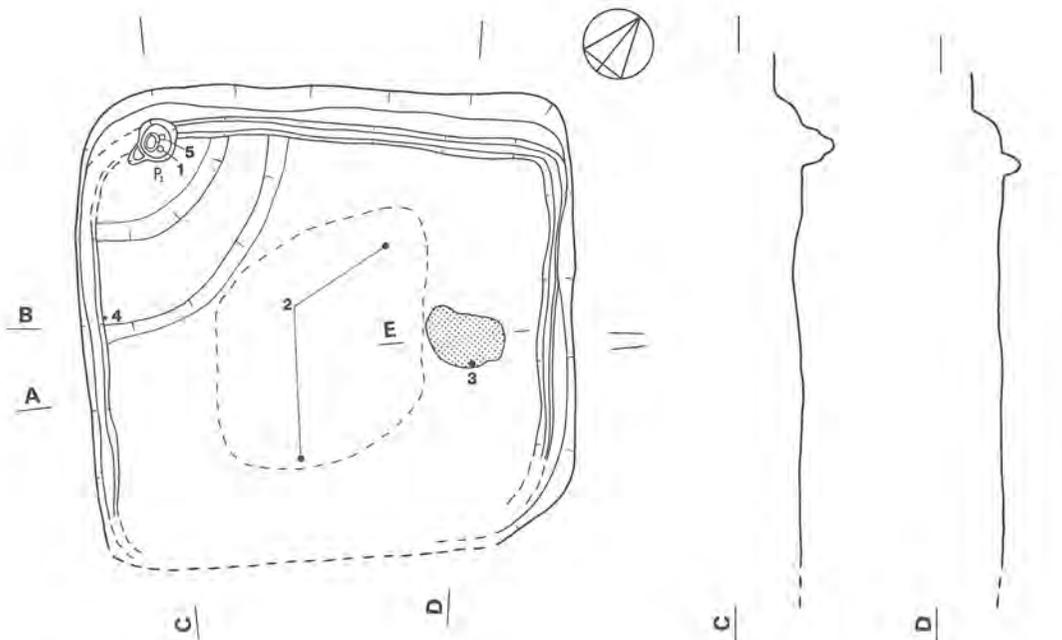
ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は，径35cmの円形を呈し，深さ23cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は検出されていない。

炉 中央部から北東寄りに検出されている。平面形は，長径64cm，短径42cmの不整楕円形を呈し，床を約15cm掘り窪めた地床炉である。炉床は，ブロック状に赤変硬化している。

覆土 南東壁が攪乱を受けているが，ローム小・中ブロックを含み，軟らかい褐色土であり，人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土中層にかけては，土師器片 (壺1，甕1，甗1) や土師器の細片 (133点) が出土している。その他，鉄製品は，西コーナーから出土している。第115図1の壺の口縁部は，P₁内の覆土上層から正位の状態で，第115図3の甗は炉直上からつぶれた状態で出土している。第115図5の刀子はP₁内の覆土上層から出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

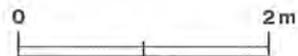
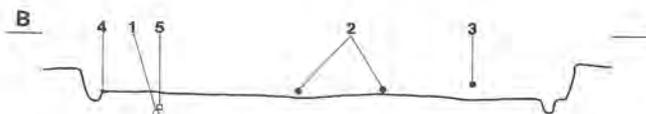


A 18.6 m



住居跡土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子極少量。ローム粒子少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子多量。軟質。
- 3 褐色 ローム中ブロック多量。軟質。
- 4 褐色 ローム小ブロック少量。軟質。
- 5 褐色 ローム粒子少量。軟質。



E 18.2 m



炉土層解説

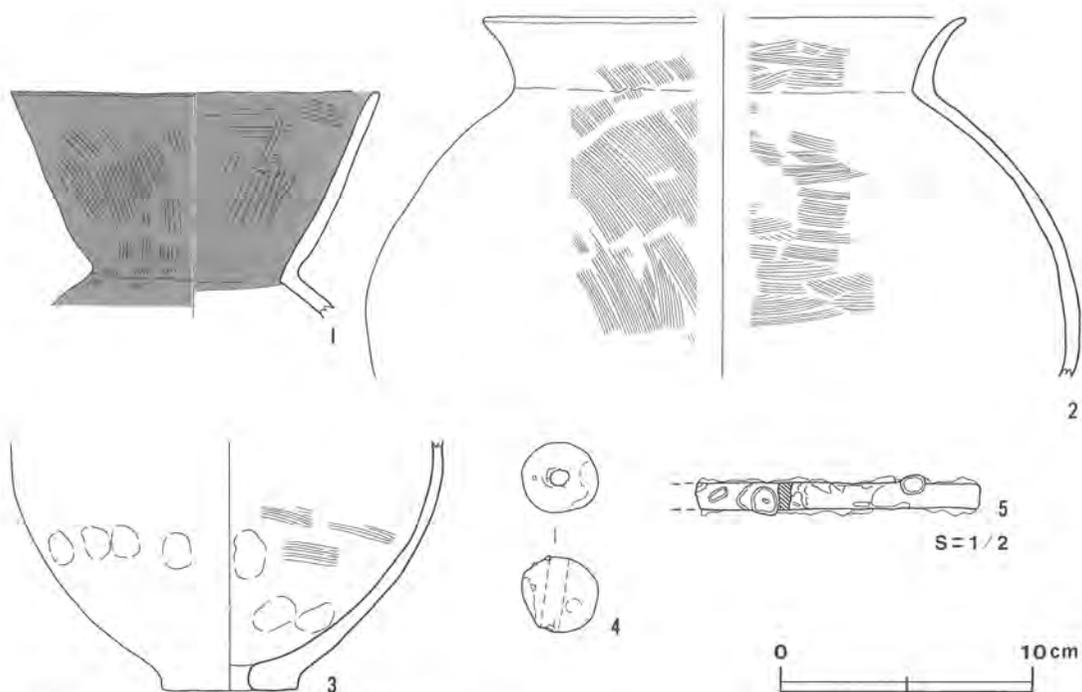
- 1 赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量。軟質。



第114図 第17号住居跡実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	壺 土師器	A 14.6 B (9.1)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後丁寧なナデ。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 赤褐色 良好	P175 20% P ₁ 内覆土土層
2	甕 土師器	A 19.1 B (14.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面ハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P174 20% 外面煤付着 中央部付近床面



第115図 第17号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 3	瓶 土師器	B (10.0) C 5.4	底部から体部にかけての破片。 突出した平底。体部は内彎して 立ち上がる。単孔。	体部外面ナデ。内面ハケ目調整 後ナデ。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P176 20% 炉直上

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第115図4	土玉	3.2	3.0	—	0.8	23.5	100	床面	DP184

図版番号	器種	法量				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第115図5	刀子	(7.5)	1.0	3.0	(4.7)	M2 P ₁ 内

第18号住居跡 (第116図)

位置 調査区の北東部, A14₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 東部が調査区域外に延びている。

規模と平面形 本跡は, 全体の南西側約5分の1しか確認できないが, 長軸[5.89]m, 短軸[2.02]mの隅丸方形を呈するものと推定される。

長軸方向 [N-21°-W]

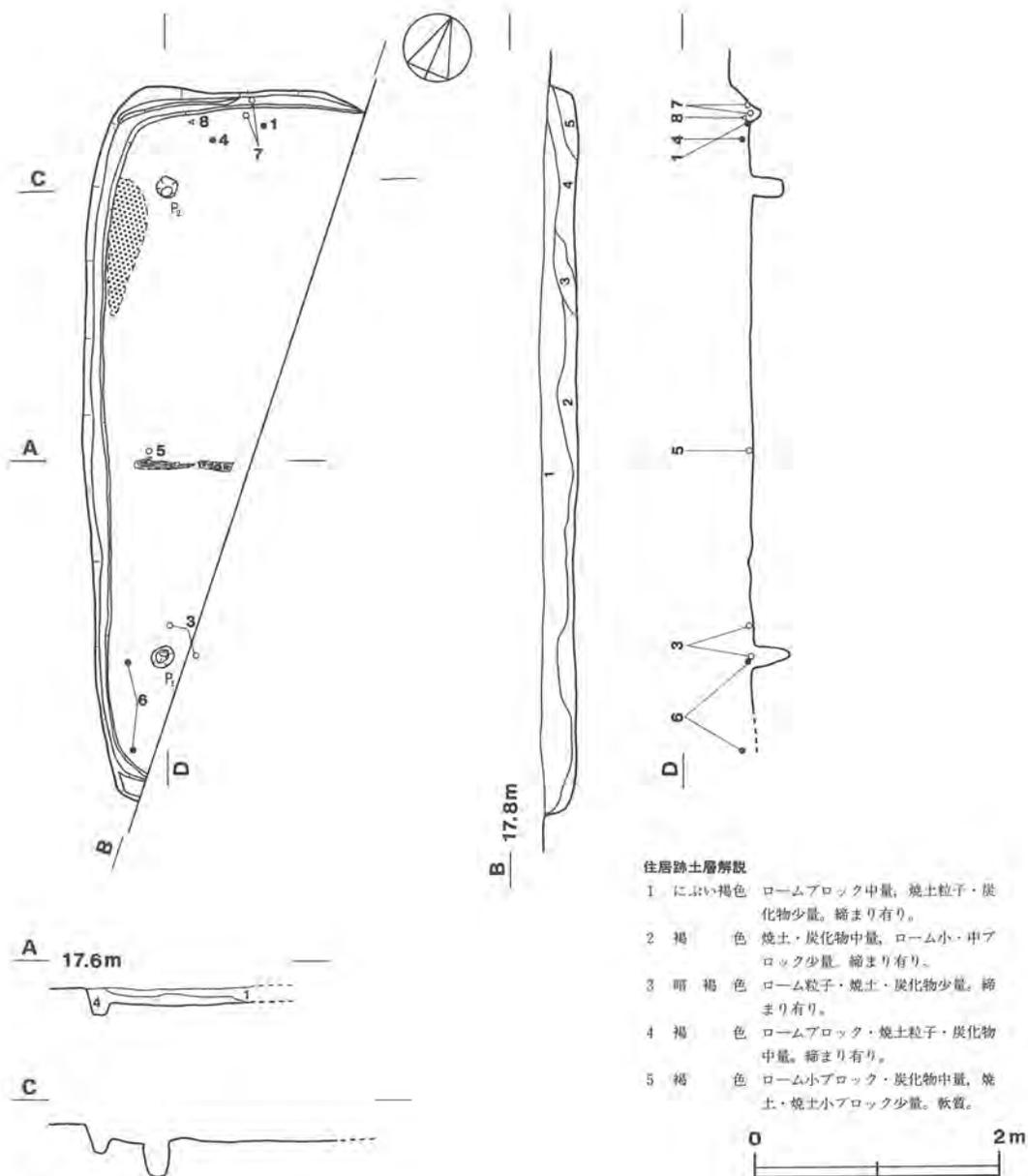
壁 壁高は13~14cmで, 外傾して立ち上がっている。

壁溝 南西壁と北西壁下を回っている。上幅11~15cm、深さ8~12cmで、断面形は、逆台形を呈している。

床 平坦で、支柱穴の内側は特に良く踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は、径18・20cmの円形を呈し、深さ34・26cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。他の支柱穴は調査区外にあるものと思われる。

炉 検出されない。



第116図 第18号住居跡実測図

覆土 ロームブロック，褐色のローム土を斑状に含み，人為堆積と思われる。

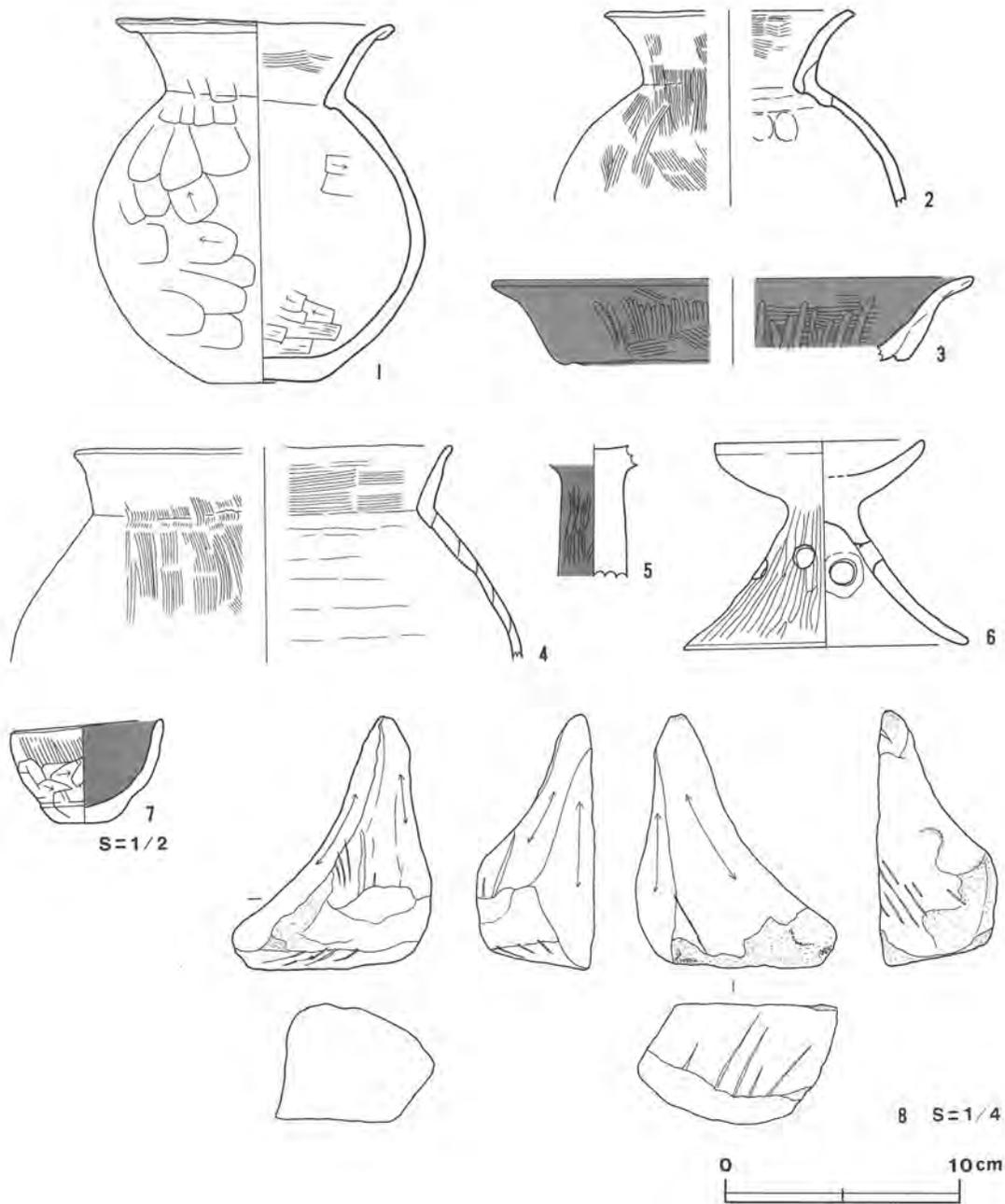
遺物 床面から覆土下層にかけては，土師器片（壺3，甕1，高坏1，器台1，ミニチュア1）や土師器の細片（91点）が出土している。第117図4の甕は北西壁際の床面からつぶれた状態で，第117図1の壺は，北西壁際の床面から横位の状態で，第117図5の高坏の脚部は南西壁中央部付近の床面から，第117図6の器台は南コーナーの壁際の床面から破片の状態で，第117図7のミニチュア土器は北西壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は，焼土及び炭化材の出土状態から火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	壺 土師器	A 12.0 B 15.8 C 4.6	平底。胴部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は大きく外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面ナデ，内面ハケ目調整後ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・スコリア にふい黄橙色 普通	P178 PL36 90% 北西壁際床面
2	壺 土師器	A 10.8 B (8.5)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し，頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外反して立ち上がる。胴部と口縁部との接合痕有り。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形，内面ナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・スコリア にふい黄橙色 普通	P179 PL36 20% 北西壁付近覆土
3	壺 土師器	A 20.8 B (3.6)	口縁部の破片。複合口縁で外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目整形後ヘラ磨き。内・外面まだらに剝離。赤彩。	砂粒 赤色 良好	P180 5% 南コーナー付近床面
4	甕 土師器	A 16.2 B (9.3)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形，内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリア にふい橙色 普通	P177 PL36 10% 二次焼成 北西壁際床面
5	高坏 土師器	B (5.7)	脚部片。脚部は中実柱状である。	脚部ヘラ磨き。赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P181 10% 南西壁中央部付近床面
6	器台 土師器	A 9.0 B 8.8 D 12.2 E 6.0	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開く。器受部はやや内彎し，上端部で稜をもち，ほぼ垂直に立ち上がる。脚部に6孔。	器受部内・外面丁寧なヘラナデ。脚部外面ヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 良好	P182 PL36 80% 内・外面黒斑痕 南コーナー壁際床面
7	ミニチュア 土師器 土師器	A 6.7 B 4.4 C 2.6	鉢形。体部から口縁部の一部欠損。平底。体部下位に緩やかな稜をもち，内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ハケ目調整，内面丁寧なナデ。内面赤彩。	砂粒・雲母 にふい黄橙色 普通	P183 PL36 55% 北西壁際床面

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第117図8	砥石	14.5	11.4	6.8	773.7	砂岩	床面	Q9



第117图 第18号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡 (第118図)

位置 調査区の北東部, B14e7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.66m, 短軸3.56mの隅丸方形を呈している。

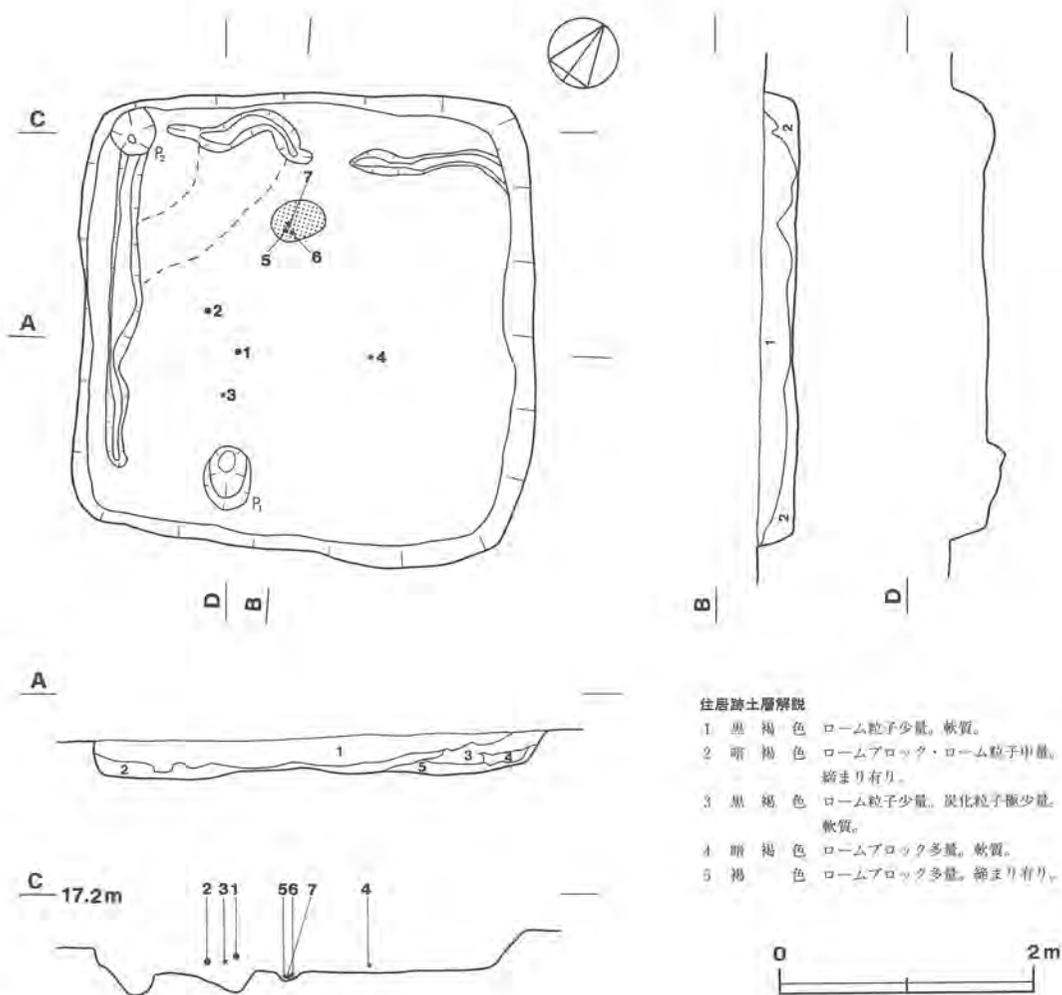
主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は, 28~31cmで外傾して立ち上がっている。

壁溝 北東壁下と南東壁下を除き回っている。上幅14~22cm, 深さ2~5cmで, 断面形は皿状を呈している。

床 平坦で, 軟らかいが, 西コーナーは踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₂は, 径35cmの円形を呈し, 深さ19cmで, 支柱穴と思われる。P₁は, 長径50cm, 短径37cmの楕円形を呈し, 深さ15cmで, 出入口施設に伴う梯子ピット



第118図 第19号住居跡実測図

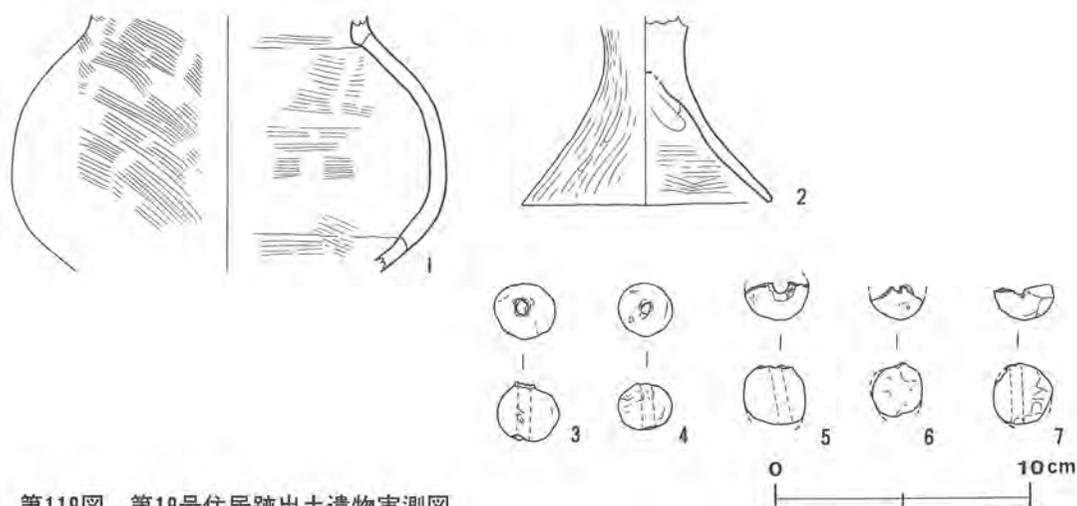
トと考えられる。

炉 中央部から北西寄りに検出されている。平面形は、長径42cm、短径33cmの楕円形を呈し、床を約3cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土上層にかけては、土師器片（壺1，器台1）や土師器の細片（40点）が出土している。第119図1の壺は中央部の覆土下層から破片の状態で、第119図2の器台の脚部は中央部の覆土下層から破片の状態それぞれ出土している。第119図3～7の土玉は中央部床面から覆土下層にかけて点在して5点出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第119図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	壺 土師器	B (10.3)	胴部片。胴部はやや下膨れで、最大径を下位にもつ。	胴部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・ス コリア・礫 明赤褐色 普通	P 185 40% 外面煤付着 中央部覆土下層
2	器台 土師器	D 10.0 E 7.6	脚部片。ラッパ状に下方へ開く。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形。	砂粒・雲母・ス コリア にふい橙色 普通	P 184 30% 中央部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第119図3	土玉	2.5	2.5	—	0.5	10.3	100	覆土下層	DP185
4	土玉	2.0	2.2	—	0.4	7.3	100	覆土下層	DP186
5	土玉	(2.3)	(2.5)	—	0.6	(6.5)	50	床面	DP187
6	土玉	(2.3)	(2.2)	—	0.4	(4.2)	40	床面	DP188
7	土玉	(2.5)	2.4	—	0.4	(6.8)	50	床面	DP189

第20号住居跡 (第120図)

位置 調査区の東部, B14g7区を中心に確認されている。

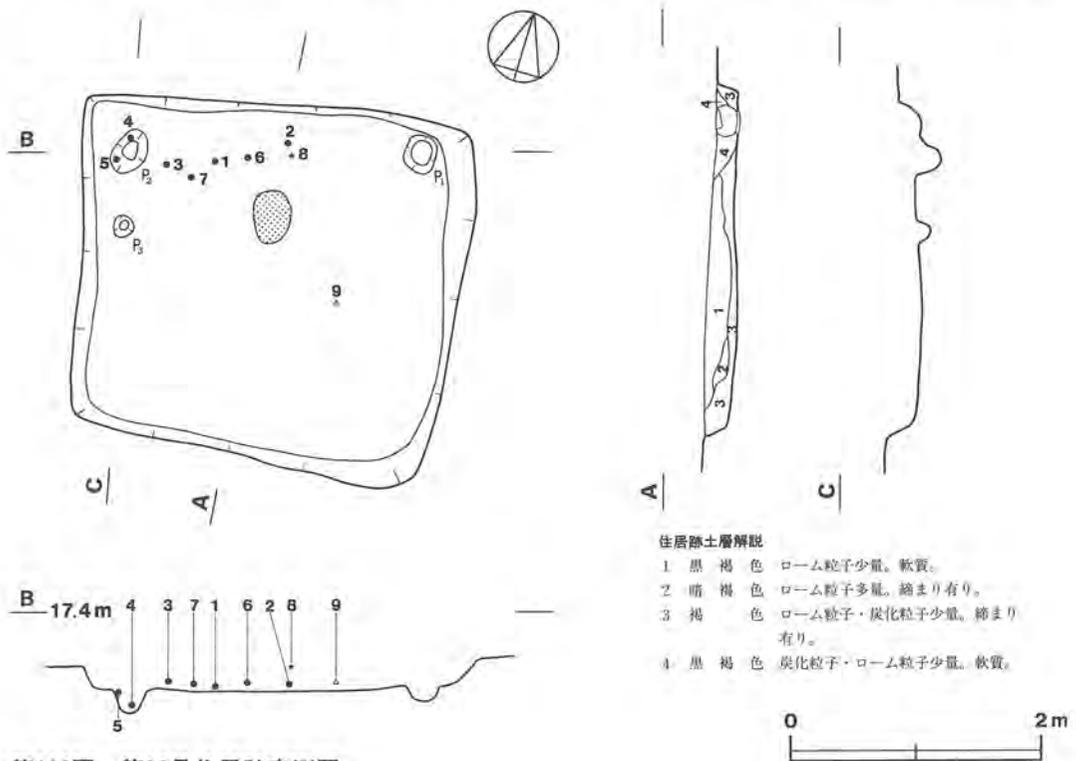
規模と平面形 長軸3.04m, 短軸2.85mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は20~24cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 軟らかい。

ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁・P₂は, 径30・36cmの円形を呈し, 深さ13・20cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。P₃は, 径18cmの円形を呈し, 深さ11cmで補助柱穴と思



第120図 第20号住居跡実測図

われる。

炉 中央部から北寄りに検出されている。平面形は、長径47cm、短径30cmの楕円形を呈し、床を約2cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてわずかに赤変硬化している。

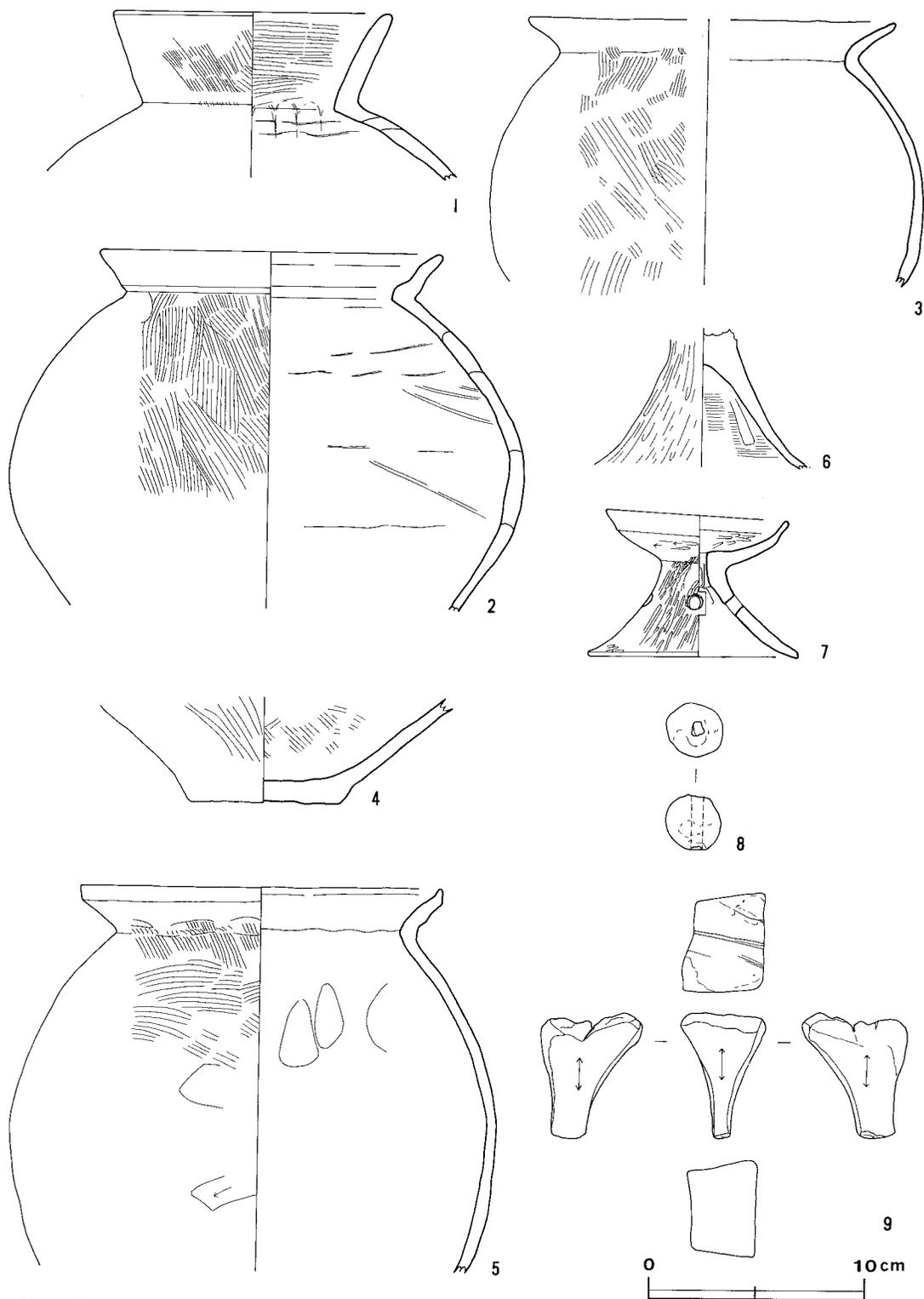
覆土 覆土上層は自然堆積であるが、覆土中・下層はローム小ブロックを多量に含む暗褐色土で、人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは土師器片（壺1、甕4、高坏1、器台1）や土師器の細片（44点）が出土している。その他、中央部の床面からは石製品が出土している。第121図5の甕は北西コーナー付近の床面から横位の状態で、第121図2の甕は炉北側の床面から逆位の状態で、第121図1の壺の口縁部は北西コーナー付近の床面から、第121図7の器台の脚部は北西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。第121図8の土玉は、炉の北側の覆土上層から1点出土している。第121図9の砥石は中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	壺 土師器	A 13.0 B (7.7)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石 橙色 普通	P189 30% 北西コーナー付近床面
2	甕 土師器	A 16.0 B (16.8)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は緩やかなS字状を呈し、外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P186 PL37 70% 炉北側床面
3	甕 土師器	A [17.0] B (12.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P187 30% 北西コーナー付近床面
4	甕 土師器	B (5.0) C 7.0	底部片。やや突出した平底。やや内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ、内面ハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒にふい褐色 普通	P188 10% 内・外面煤付着 北西コーナー付近床面
5	甕 土師器	A 16.9 B (18.1)	底部欠損。胴部はやや長胴で、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は上位で稜をもち、つまみ上げるように立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形後ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P190 PL37 70% 内・外面黒斑付着 北西コーナー付近床面



第121图 第20号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 6	高土師器 坏器	E (6.5)	脚部片。ラッパ状に下方へ開く。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P191 20% 炉北側床面
7	器台 土師器	A 8.6 B 7.0 D 9.8 E 4.5	脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部はやや内彎し、さらに中に稜をもち、外反して立ち上がる。脚部に4孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P192 PL37 100% 内・外面煤付着 北西コーナー付 近床面

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第121図8	土玉	2.7	2.6	—	0.6	14.5	100	覆土上層	DP190

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第121図9	砥石	(5.9)	3.9	4.5	(72.9)	凝灰岩	床面	Q10

第21号住居跡 (第122・123図)

位置 調査区の北部、A14e₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.40m、短軸3.76mの長方形を呈している。

主軸方向 N-28°-W

壁 壁高は13~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10~13cm、深さ4~6cmで、断面形は、「V」字状を呈している。

間仕切り溝 1条(a)検出されている。南東壁のほぼ中央から床中央部に向かってのびている。長さ1.40m、上幅14~16cm、深さ10~12cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で、中央部から東コーナー付近にかけては特に良く踏み固められ硬い。

ピット 8か所(P₁~P₈)検出されている。P₁~P₃は径16~27cmの円形を呈し、深さ8~12cmで、配列から主柱穴と思われる。P₄~P₇は径15~28cmの円形を呈し、深さ9~19cmで、補助柱穴と思われる。P₈は、径23cmの円形を呈し、深さ21cmで、南東壁寄りに傾斜しており、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 中央部からやや北寄りに検出されている。平面形は、径81cmの不整形円形を呈し、床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は赤褐色に焼けて赤変硬化している。

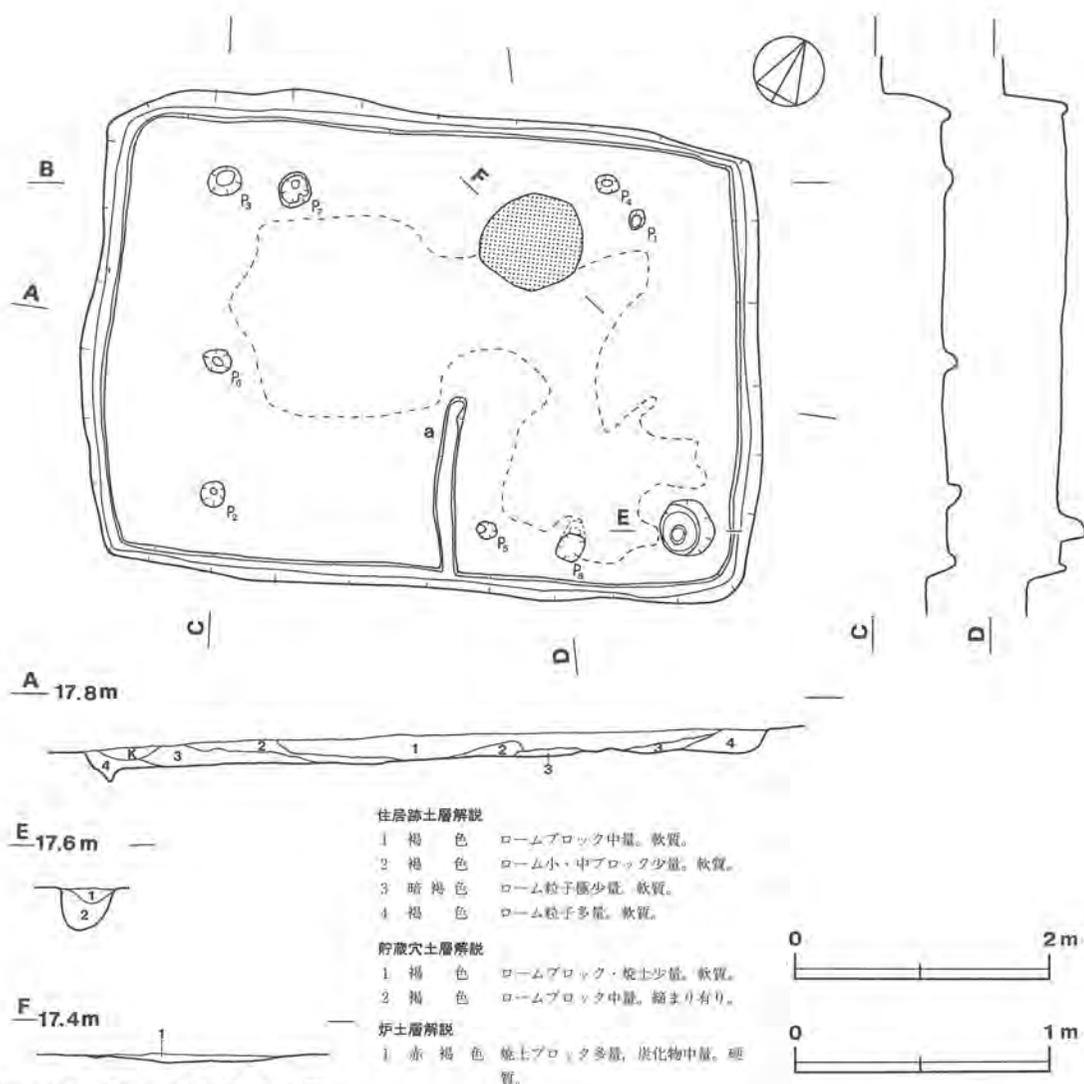
貯蔵穴 東コーナーに検出されている。平面形は、径46cmの不整形円形を呈し、深さは34cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

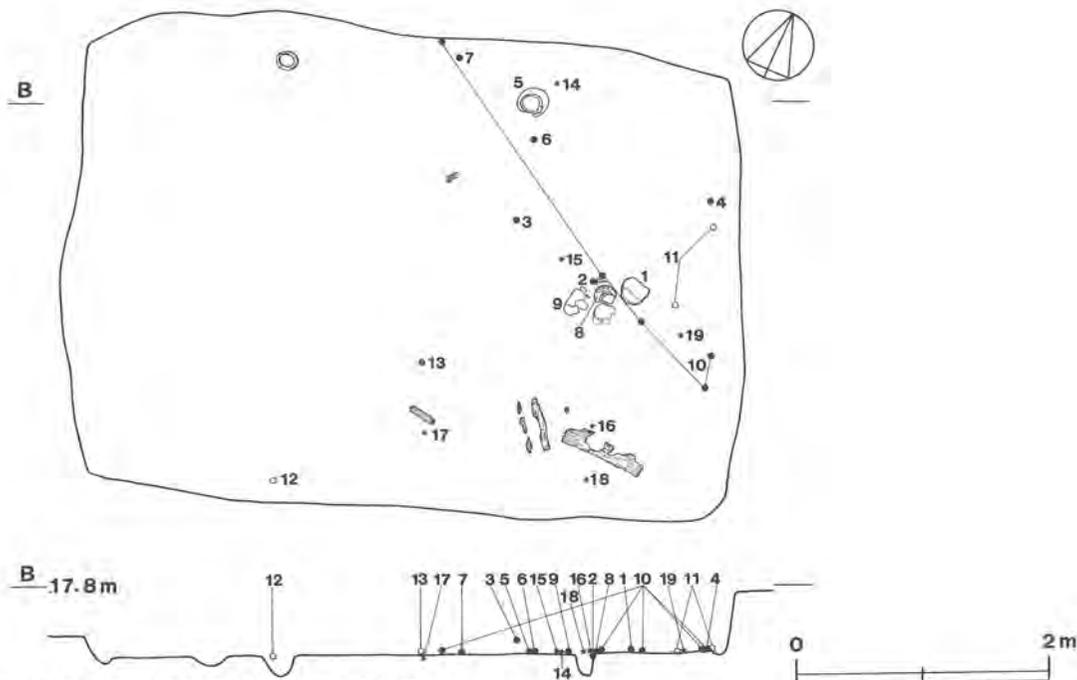
遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片(壺2, 甕6, 甌2, 高坏1, ミニチュア2)や

土師器の細片（179点）が出土している。その他、北部の床面からは土製品が少量出土している。第124図5の甕は炉直上から正位の状態、第124図1の壺は中央部から東寄りの床面からつぶれた状態で、第125図10の甗は北東壁中央部付近の床面から破片の状態、第125図13のミニチュア土器は中央部から南寄りの覆土下層から正位の状態、第125図12のミニチュア土器は南東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。第125図14～18の土玉は北部の床面から点在して5点出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状態から火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



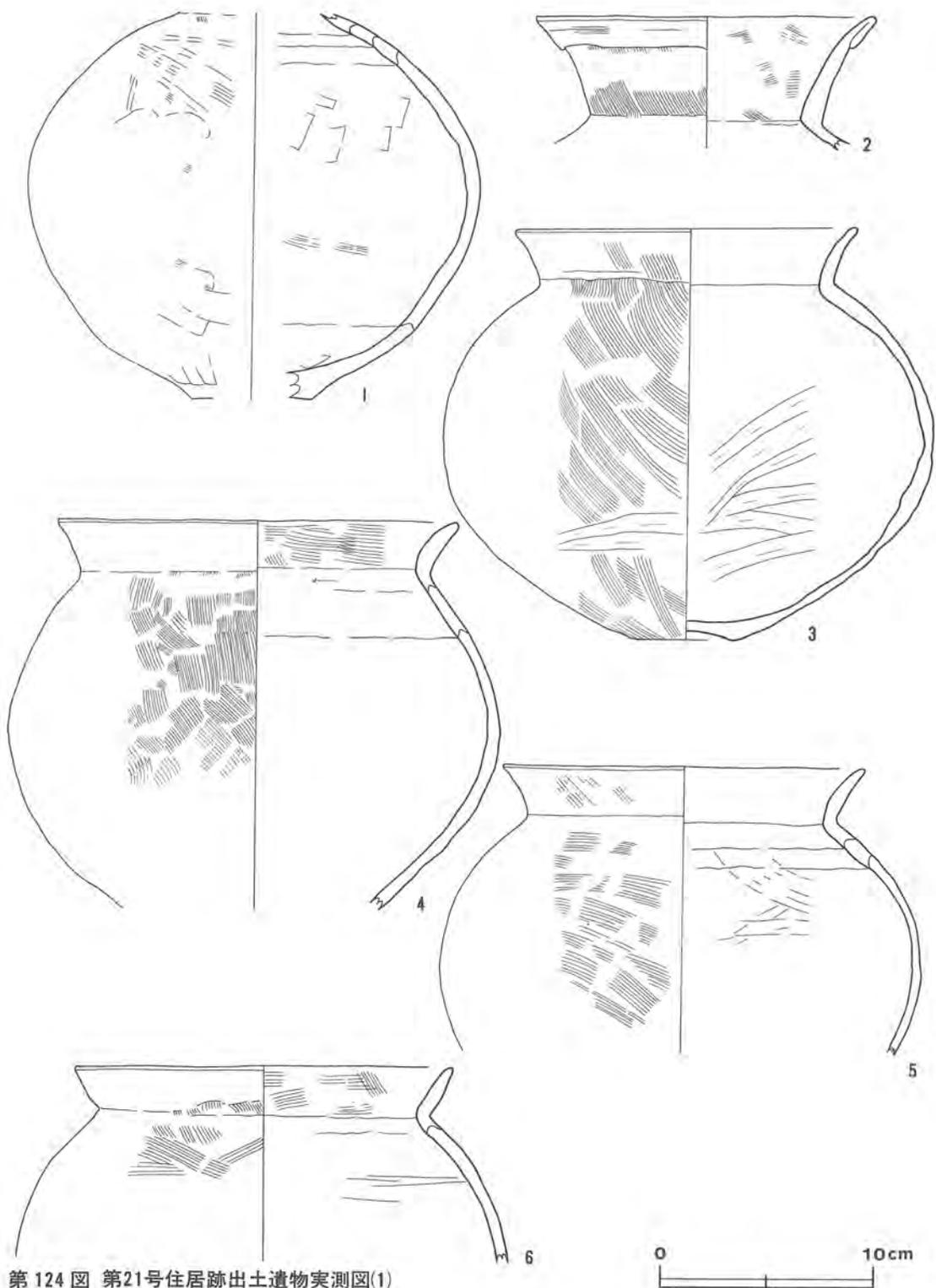
第122図 第21号住居跡実測図



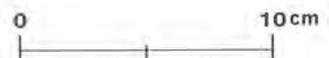
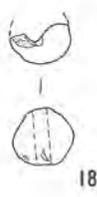
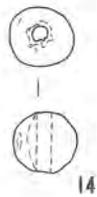
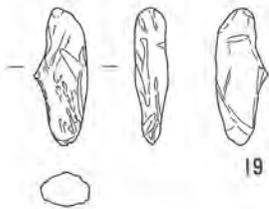
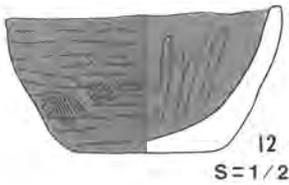
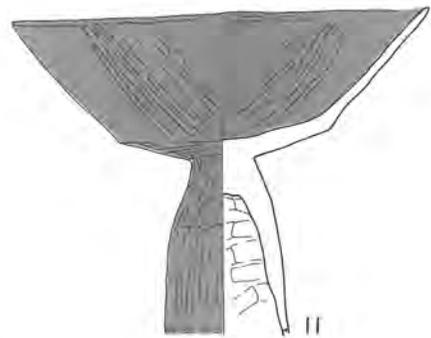
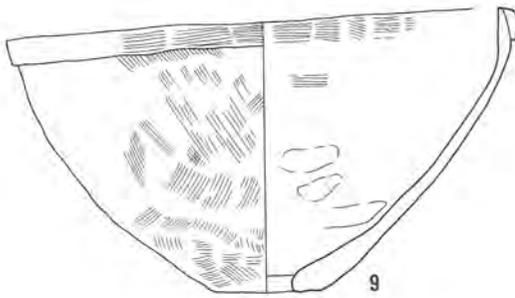
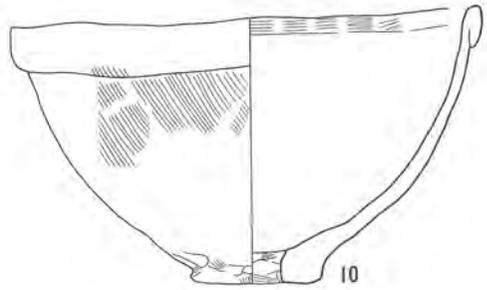
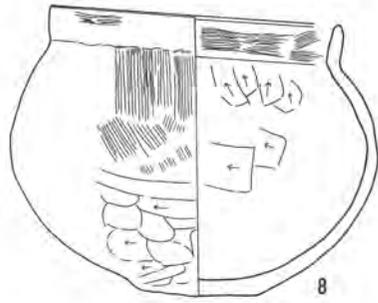
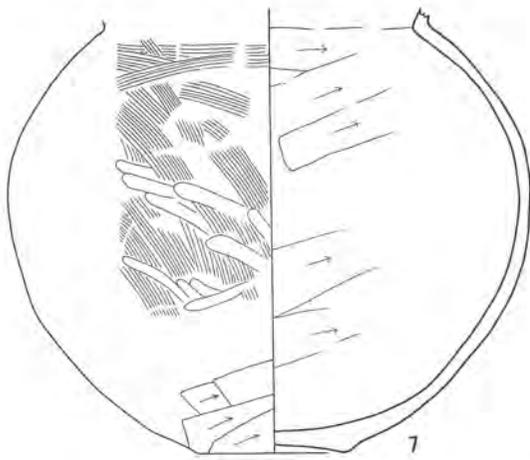
第123図 第21号住居跡遺物出土位置図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	壺 土師器	B (18.4) C [4.6]	胴部片、やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部内・外面ハケ目調整後ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P199 30% 中央部東寄り床面
2	壺 土師器	A 15.9 B (6.3)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・石英 赤色 普通	P200 20% 二次焼成 中央部東寄り床面
3	甕 土師器	A 15.8 B 19.7 C 4.8	上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P193 PL39 90% 外面煤付着 炬南側覆土下層
4	甕 土師器	A 18.7 B (18.5)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P194 PL39 80% 内・外面煤付着 北東壁中央部付 近覆土下層
5	甕 土師器	A 16.7 B 13.7	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。外面磨耗。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・スコリア 赤橙色 普通	P195 PL39 40% 二次焼成 炬直上



第 124 图 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第125图 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 6	甕 土師器	A 17.9 B (9.3)	胴部下半欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。外面磨耗。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P196 PL39 30% 二次焼成 炬直上
第125図 7	甕 土師器	B (18.3) C 6.0	底部から胴部にかけての破片。やや上げ底。胴部は球形を呈し、ナデ、内面ヘラナデ。	胴部外面ハケ目整形後下半ヘラナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P197 40% 北西壁中央部付 近床面
8	甕 土師器	A 11.6 B 11.7 C 4.6	胴部から口縁部の一部欠損。平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は短く内彎気味に垂直に立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。胴部外面下半ヘラ削り、上半ハケ目整形。	砂粒・長石 橙色 普通	P198 PL39 60% 二次焼成 北東壁中央部付 近床面
9	甕 土師器	A 20.4 B 11.3 C 4.4	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は粘土紐を貼り付け複合口縁状になっている。単孔。	口縁部内・外面ハケ目整形。体部外面ハケ目整形、内面ナデ。	砂粒・スコリア 雲母 にぶい赤褐色 普通	P201 PL39 70% 二次焼成 北東壁中央部付 近床面
10	甕 土師器	A 18.6 B 11.0 C 4.7	体部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁。単孔。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。体部外面ハケ目整形、内面ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P202 PL39 60% 内・外面煤付着 北東壁中央部付 近床面
11	高 土師器 坏	A 16.5 B (13.1) E (7.2)	脚部下半欠損。脚部はラッパ状に下方へ開く。坏部は下位に明瞭な稜をもち、外反して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P203 PL38 50% 外面煤付着 北東壁中央部付 近覆土下層
12	ミニチュア 土師器 土師器	A 7.0 B 3.9 C 3.8	壺形。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ハケ目調整後ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P204 PL39 100% 南東壁際床面
13	ミニチュア 土師器 土師器	A 2.0 B 2.3 C 1.4	壺形。平底。やや扁平な球形を呈する。口縁部は複合口縁で短く垂直に立ち上がる。	胴部外面ハケ目調整後ヘラナデ、内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母 赤灰色 普通	P205 PL39 100% 中央部南寄り覆 土下層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第125図14	土玉	2.6	2.6	—	0.6	13.3	100	覆土下層	DP191
15	土玉	2.9	3.0	—	0.6	19.5	100	覆土下層	DP192
16	土玉	2.5	2.5	—	0.9	11.4	100	床面	DP193
17	土玉	2.9	2.8	—	0.6	17.2	100	覆土下層	DP194
18	土玉	2.8	2.4	—	0.6	(5.9)	50	床面	DP195
19	不明土製品	5.5	2.1	1.3	—	9.7	—	床面	DP196
20	不明土製品	1.6	1.8	3.3	—	6.9	—	覆土	DP197

第22号住居跡 (第126図)

位置 調査区の北部, A13g₂区を中心に確認されている。

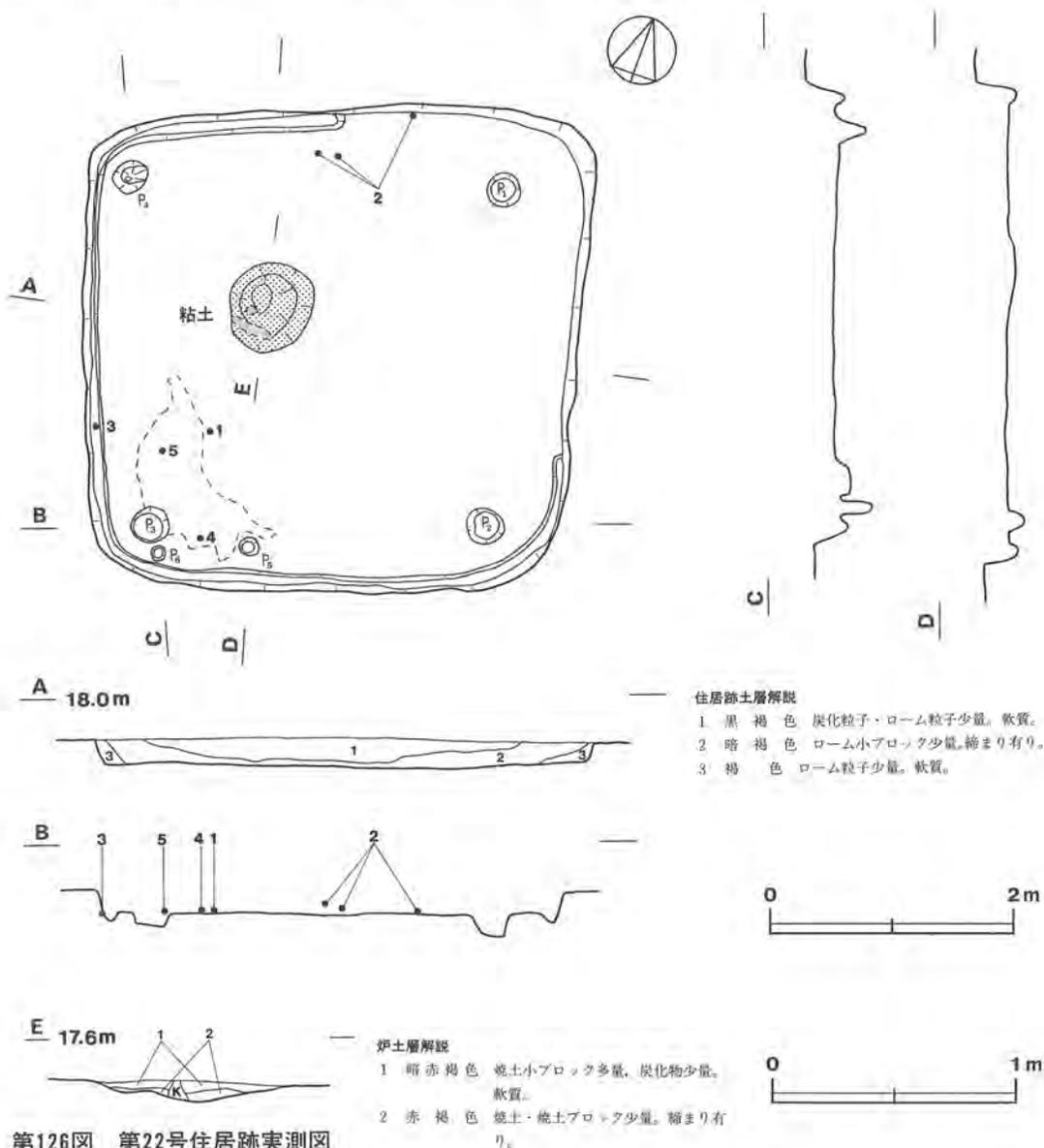
規模と平面形 長軸4.08m, 短軸4.00mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は15~26cmで, 垂直に立ち上がっている。

壁溝 北西壁下を除いて回っている。上幅6~13cm, 深さ6~8cmで, 断面形は, 「U」字状を呈している。

床 平坦で, 南コーナー付近が良く踏み固められ硬い。



第126図 第22号住居跡実測図

ピット 6か所 (P₁~P₆) 検出されている。P₁~P₄は、径28~33cmの円形を呈し、深さ11~24cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₅は、径16cmの円形を呈し、深さ15cmで、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₆は、径14cmの円形を呈し、深さ26cmで、補助柱穴と思われる。

炉 中央部からやや西寄りに検出されている。平面形は、長径78cm、短径68cmの楕円形を呈し、床を約10cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。また、炉の南西寄りには、長さ32cm、幅6~10cmの棒状の軟らかい粘土塊と径10cmの円形状の軟らかい粘土塊が遺存している。

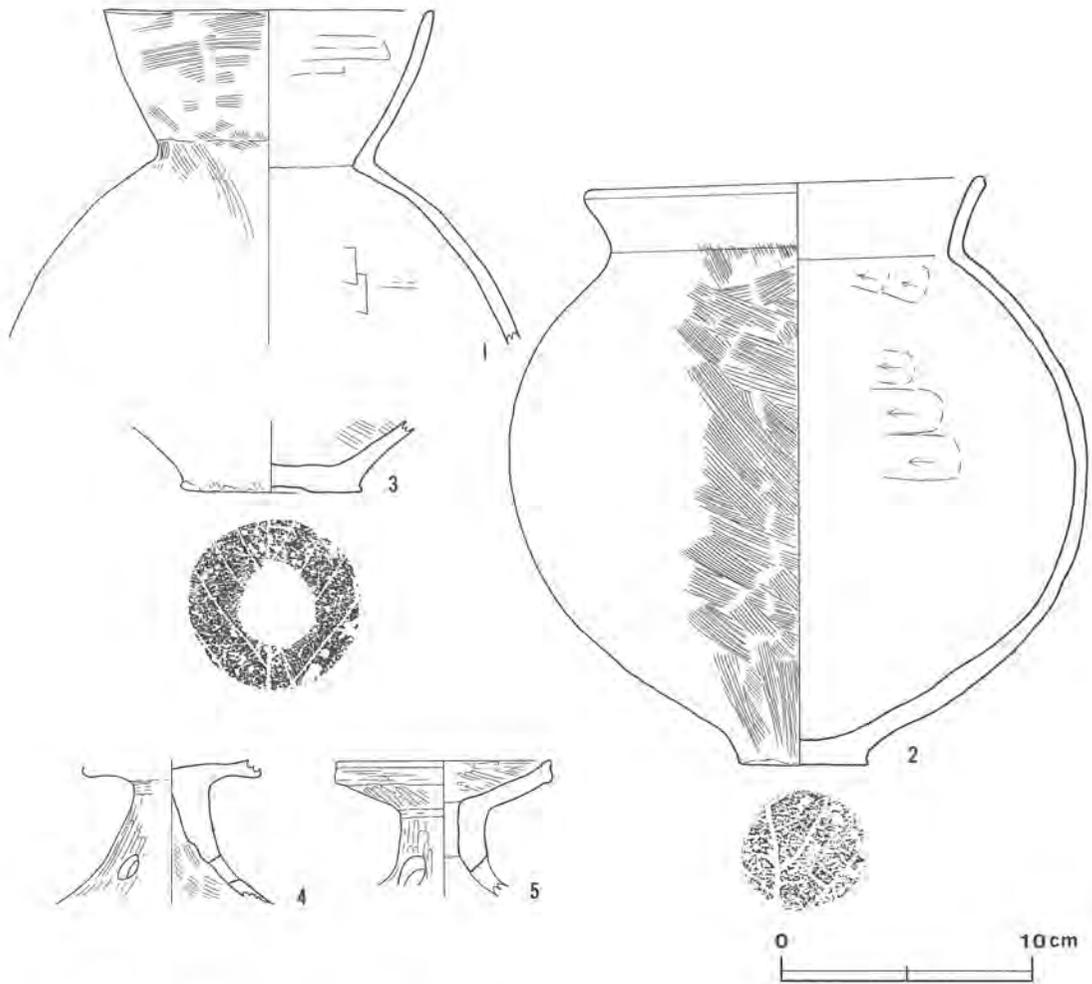
覆土 自然堆積。

遺物 床面や覆土下層からは土師器片(壺1, 甕2, 高坏1, 器台1)や土師器の細片(39点)が出土している。その他、流れ込みと思われる敲石・磨石は南コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。第127図2の甕は北西壁中央部付近の床面からつぶれた状態で、第127図1の壺は南コーナー付近の床面から破片の状態で、第127図4の高坏は南コーナー付近の床面からつぶれた状態で、第127図5の器台は南コーナー付近の床面からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 1	壺 土師器	A 12.9 B (13.5)	胴部下半欠損。胴部は内罇して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや内罇気味に立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ヘラナデ。胴部内・外面ハケ目調整後ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P208 PL40 40% 東コーナー付近床面
2	甕 土師器	A 16.0 B 23.7 C 5.2	突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。底部木葉痕。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P206 PL40 95% 内・外面煤付着 南西壁中央部付近床面
3	甕 土師器	B (2.9) C 7.0	底部片。突出した平底。胴部はやや外反して立ち上がる。	内・外面ハケ目整形。底部木葉痕。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P207 10% 外面煤付着 南西壁際中央部床面
4	高坏 土師器	B (5.8) E (4.8)	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。3孔。	脚部外面ヘラ磨き、内面ハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	P209 30% 東コーナー付近床面
5	器台 土師器	A [8.4] B (5.5) E (3.5)	脚部下半欠損。脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部の上位に稜をもち、さらに口縁端部をつまみ上げている。脚部に3孔。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P210 50% 坏部内面煤付着 東コーナー付近床面



第127図 第22号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡 (第128・129図)

位置 調査区の中央部, B13d₆区を中心に確認されている。

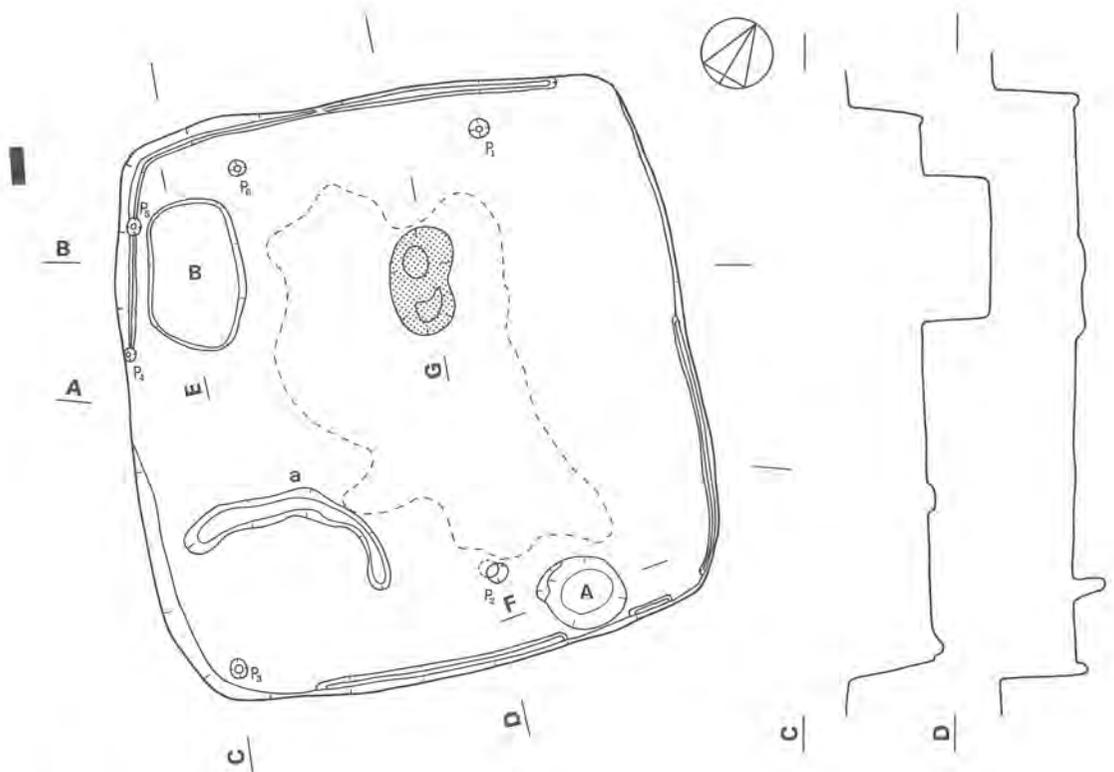
規模と平面形 長軸4.69m, 短軸4.43mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-39°-W

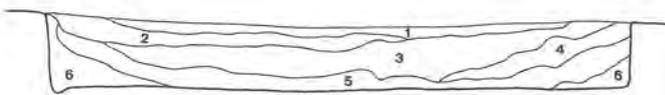
壁 壁高は54~71cmで, 垂直に立ち上がっている。

壁溝 北東壁下や南西壁下の一部を除き回っている。上幅6~9cm, 深さ4~8cmで, 断面形は、「U」字状を呈している。

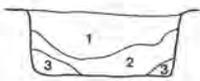
間仕切り溝 1条 (a) 検出されている。aは南コーナーを区画するように「L」字状に検出され, 長さ1.95m, 上幅12~24cm, 深さ4~6cmで, 断面形は, 皿状を呈している。



A 17.8m



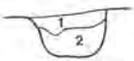
E 17.2m



貯蔵穴土層解説 (E)

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化材多量。軟質。
- 2 黒褐色 炭化材多量。軟質。
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。

F



貯蔵穴土層解説 (F)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・炭化材少量。軟質。
- 2 暗褐色 ロームブロック中量。炭化材少量。軟質。

G 17.0m



炉土層解説

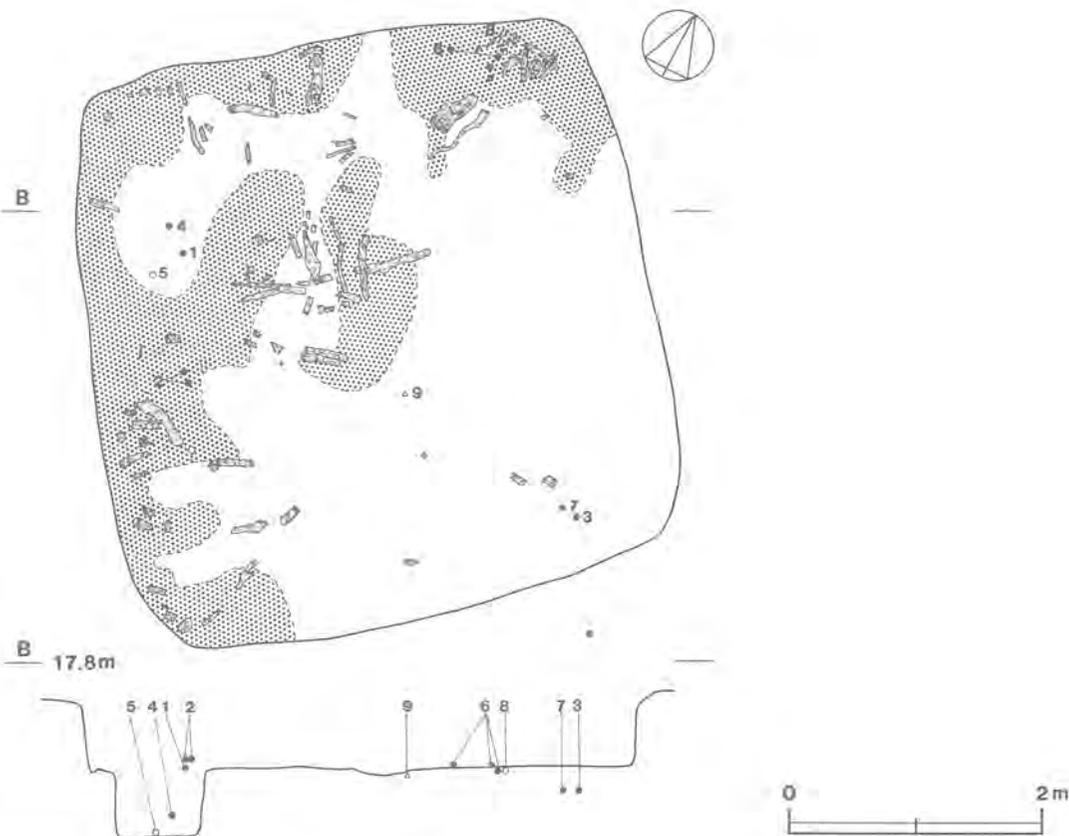
- 1 黒褐色 焼土粒子多量。締まり有り。

住居跡土層解説

- 1 黒褐色 砂粒中量。ローム粒子少量。軟質。
- 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子・砂粒少量。締まり有り。
- 3 褐色 ローム大ブロック中量。焼土粒子少量。締まり有り。
- 4 褐色 ロームブロック少量。軟質。
- 5 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材多量。ローム小・中ブロック少量。締まり有り。
- 6 暗褐色 ローム小ブロック中量。炭化材少量。



第128図 第23号住居跡実測図



第129図 第23号住居跡遺物出土位置図

床 ほぼ平坦で、全体的に良く踏み固められ硬いが、特に中央部の床面は硬い。

ピット 6か所 ($P_1 \sim P_6$) 検出されている。 $P_1 \sim P_3$ は、径13~17cmの円形を呈し、深さ6~15cmで、支柱穴と思われる。 P_4 は、径17cmの円形を呈し、深さ25cm、南東壁に傾斜しており、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。 $P_5 \cdot P_6$ は、径10・13cmの円形を呈し、深さ14・15cmで、壁溝内に検出され壁柱穴と思われる。

炉 中央部からやや北寄りに検出されている。平面形は、長径78cm、短径50cmの不整楕円形を呈し、床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。炉内は、黒褐色土主体の焼土を多量に含んでいる。

貯蔵穴 東コーナー (A) と西コーナー (B) の2か所から検出されている。Aの平面形は、長径73cm、短径63cmの楕円形を呈し、深さ38cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。Bの平面形は、長軸122cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、深さ52cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。

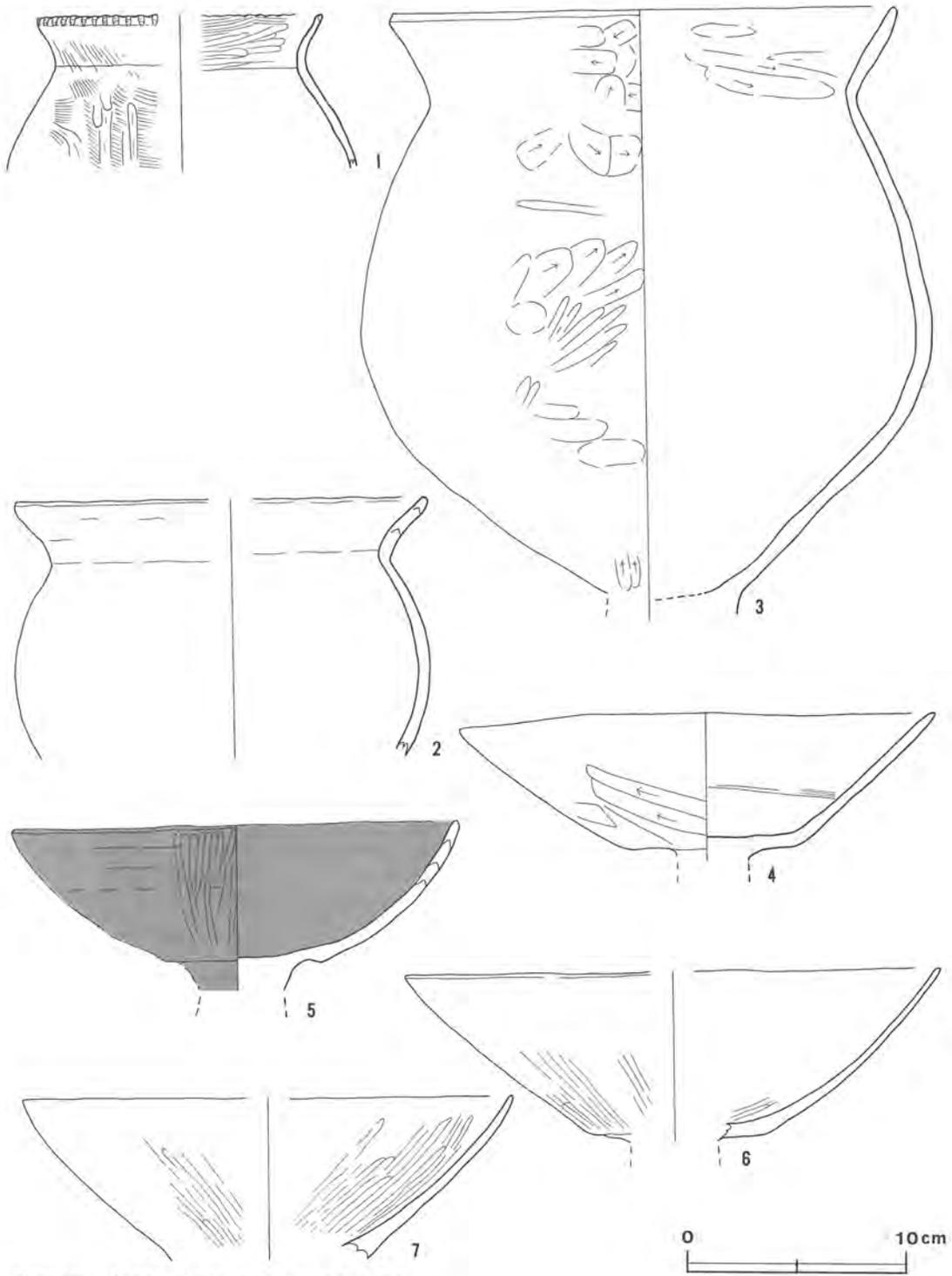
覆土 自然堆積。

遺物 床面や覆土下層及び貯蔵穴内からは、土師器片（甕2，台付甕1，高坏5）や土師器の細片（69点）が出土している。その他、流れ込みと思われる磨製石斧は西コーナー付近の床面から出土している。第130図3の台付甕は貯蔵穴A内の覆土上層からつぶれた状態で、第131図8の高坏の脚部は北コーナー付近の床面から、第130図4・5の高坏の坏部は貯蔵穴Bの底面からそれぞれ出土している。第131図9の浮石は中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、中央部の床面から壁際にかけて炭化材が多く出土し、さらに、中央部の床面は火熱を受け赤変硬化も見られることから、火災住居跡と考えられる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	甕 土師器	A [13.0] B (7.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口唇部にキザミ目を施し、キザミ目内に木目痕をもつ。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P211 10% 外面煤付着 西コーナー付近床面
2	甕 土師器	A [18.9] B (11.9)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ハケ目整形後ナデ。外面輪積み痕有り。	砂粒にふい橙色普通	P213 10% 外面煤付着 南西壁中央部付近覆土下層
3	台付甕 土師器	A 23.3 B (28.0)	台部欠損。胴部はやや長胴で、最大径を下位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へら削り後ナデ。胴部外面へら削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリアにふい橙色普通	P212 PL41 80% 外面煤付着 貯蔵穴A覆土上層
4	高坏 土師器	A 21.7 B (6.8)	坏部片。坏部は下位端部に稜をもち、外傾して立ち上がる。	坏部外面へら削り後ナデ、内面ハケ目調整後ナデ。	砂粒赤橙色普通	P214 PL41 50% 二次焼成 貯蔵穴B底面
5	高坏 土師器	A 20.5 B (7.8)	坏部片。坏部は下位端部に稜をもち、内彎して立ち上がる。	坏部外面へら磨き、内面丁寧なナデ。内・外面赤彩。輪積み痕有り。	砂粒赤褐色普通	P215 PL41 50% 内・外面煤付着 貯蔵穴B底面
6	高坏 土師器	A 24.4 B (7.9)	坏部片。坏部下位に稜をもち、やや内彎して大きく立ち上がる。	坏部内・外面へら磨き。	砂粒・雲母・スコリア赤褐色普通	P216 20% 二次焼成 北コーナー付近床面



第130图 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



第131図 第23号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 7	高 土 師 器	A [22.4] B (7.5)	坏部の破片。坏部はやや内彎して立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P217 10% 内面煤付着 貯蔵穴A覆土上層
第131図 8	高 土 師 器	B (7.5) D [12.3] E 6.8	脚部片。脚部は「ハ」の字状に下方に開き、裾部はやや内彎気味になる。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面へラ削り後ナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤橙色 普通	P218 20% 北コーナー付近 床面

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第131図9	浮石	8.0	7.0	5.7	48.8	軽石 珠面	Q14	

第24号住居跡 (第132図)

位置 調査区の中央部、B13b₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は、第25号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.50m、短軸3.33mの方形を呈している。

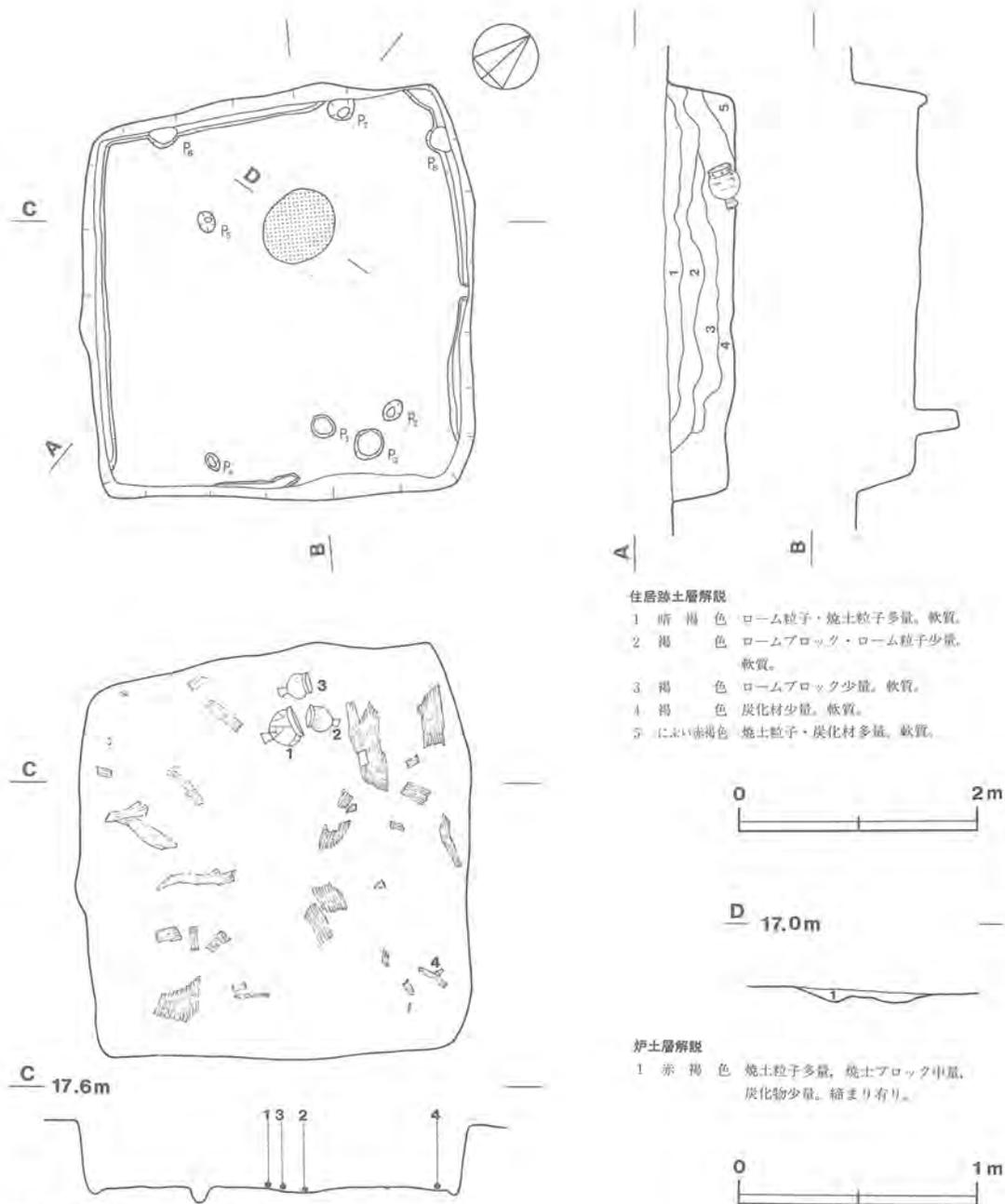
主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は47~54cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 南西壁下を除き回っている。上幅7~12cm、深さ5~8cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 平坦で、全体的に良く踏み固められ硬い。

ピット 8か所 (P₁~P₈) 検出されている。P₂は、径20cmの円形を呈し、深さ57cmで支柱穴と思われる。P₃~P₅は、径15~27cmの円形を呈し、深さ10~15cmで、補助柱穴と思われる。P₆~P₈は、径21~24cmの円形を呈し、深さ20~32cmで、壁溝内に検出され壁柱穴と思われる。P₁は、径20cm

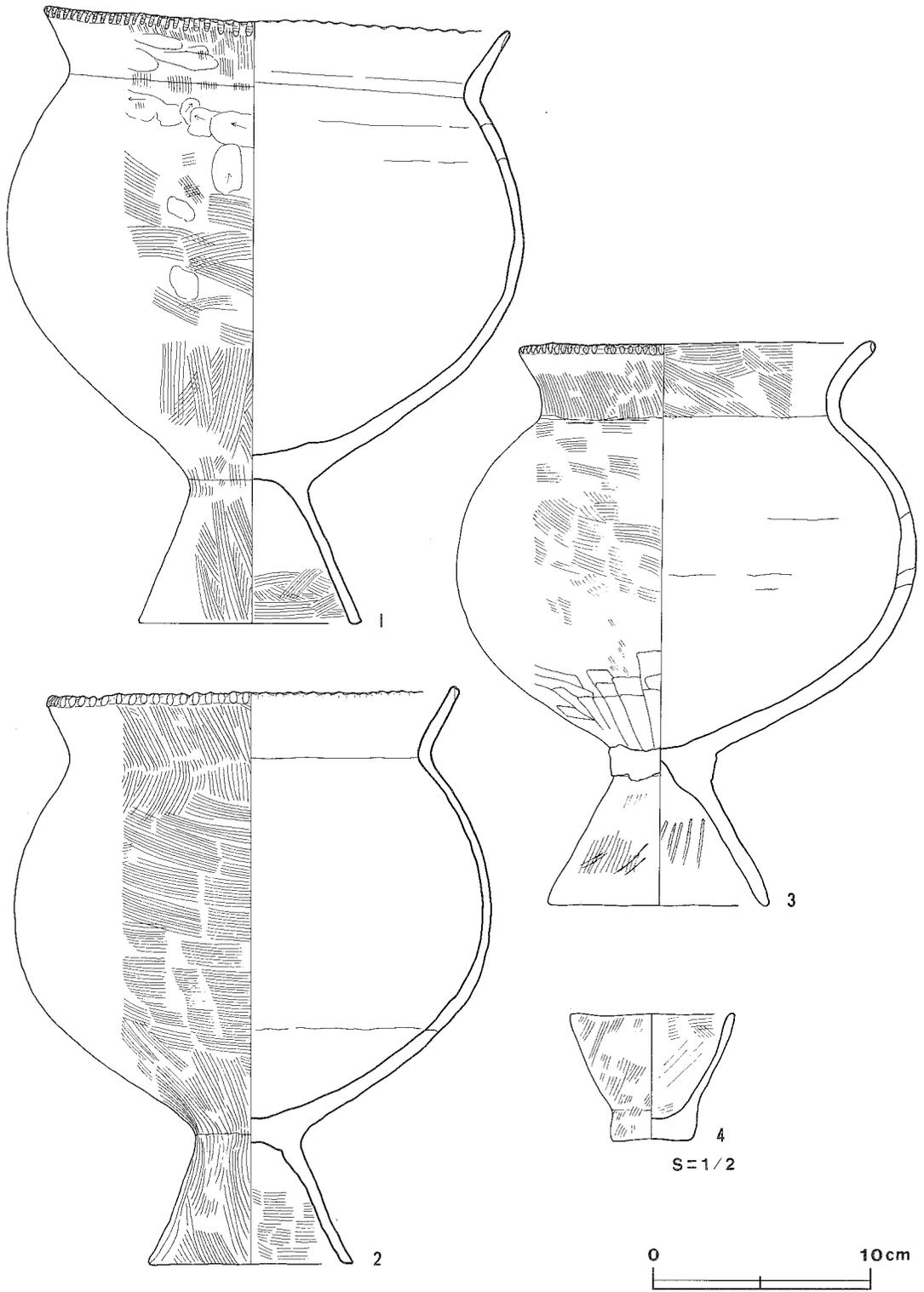


第132図 第24号住居跡実測図

の円形を呈し、深さ38cmで、出入口施設に伴う梯子ビットと考えられる。

炉 中央部から北寄りに検出されている。平面形は、長径70cm、短径53cmの楕円形を呈し、床を約6cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。

覆土 ロームブロック及びローム小ブロックを不均一に含み、下層には木炭片、焼土を多量に含



第133图 第24号住居跡出土遺物実測図

んでおり、人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは土師器片（台付甕3，ミニチュア1）や土師器の細片（1点）が出土している。第133図1～3の台付甕は炉の北西側床面から横位の状態で、第133図4のミニチュア土器は東コーナー壁際の床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、重複関係から第25号住居跡より新しい時期に構築されている。床全面に、焼土及び炭化材が多量に出土していることから火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133図 1	台付甕 土師器	A 21.6 B 29.0 D 10.5 E 6.3	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口唇部にキザミ目を施し、キザミ目内に木目痕をもつ。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形、内面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・スコリア 橙色 良好	P219 PL43 100% 内・外面煤付着 炉北西側床面
2	台付甕 土師器	A 18.8 B 27.3 D 9.4 E 6.0	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口唇部にキザミ目をもち。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形、内面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 良好	P220 PL43 100% 外面煤付着 炉北西側床面
3	台付甕 土師器	A 16.6 B 26.6 D 10.3 E 7.2	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径をやや上位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部にキザミ目をもち。台部と胴部の接合面に粘土紐を張り付けている。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ナデ、内面ナデ。台部内・外面ハケ目整形後ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 良好	P221 PL43 100% 外面煤付着 炉北西側床面
4	ミニチュア 土器 土師器	A 5.0 B 4.0 C 2.4	口縁部一部欠損。鉢形。突出した平底。体部はやや内彎して立ち上がる。単口縁。	体部外面ハケ目整形、内面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P222 PL43 80% 東コーナー壁際 床面

第27号住居跡（第134図）

位置 調査区の北東部、A15h₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.35m，短軸3.30mの隅丸方形を呈する。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は26～32cmで、垂直に立ち上がっている。南壁と西壁及び北西コーナーの一部は攪乱を受けている。

壁溝 壁下を全周している。上幅5～13cm，深さ3～5cmで、断面形は「V」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、中央部から西壁にかけて特に良く踏み固められ硬い。南壁中央部付近から南西

コーナーにかけて出入口部と考えられる馬蹄形状の高まりがあり、その中央部は攪乱のため梯子ピットは確認されていない。出入口部と床との比高は3～6cmである。

ピット 1か所(P₁) 検出されている。径52cmの円形を呈し、深さ21cmで、主柱穴と考えられる。

炉 中央部から北西寄りに検出されている。平面形は、長径81cm、短径60cmの不整楕円形を呈し、床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 西壁中央部付近に検出されている。平面形は、長軸74cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈し深さは38cmである。底面は、ほぼ平坦であるが西壁寄りがやや深く傾斜しており、壁は外傾して立ち上がっている。

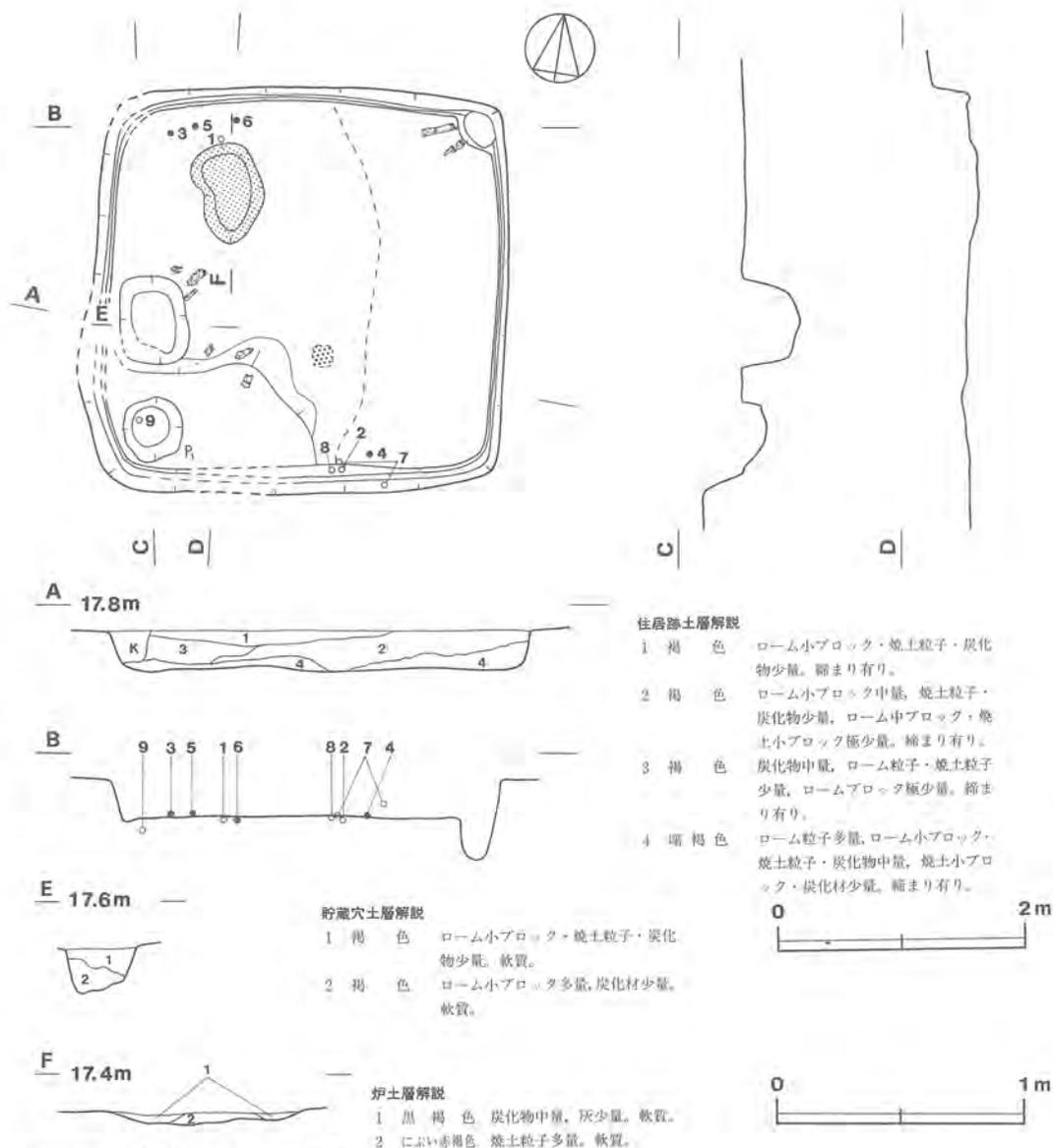
覆土 一部分に攪乱が入っている。覆土中層から下層にかけて、ローム小ブロックを多く含み、覆土下層には炭化物や炭化材、焼土を含み、人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは、土師器片(壺2、甕4、埴2、鉢1)や土師器の細片(126点)が出土している。第135図3の甕は北西コーナーの床面からつぶれた状態で、第135図4の甕は南壁中央部付近の床面から逆位の状態で、第135図5の甕は北西コーナー付近の床面から横位の状態で、第135図6の甕は北西コーナー付近の床面から正位の状態で、第135図1の壺は北西コーナー付近の床面から逆位の状態で、第135図2の壺は南壁中央部の床面から横位の状態で、第135図9の埴はP₁内の覆土上層から横位の状態で出土している。炭化米は4の甕内から極少量出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材が多く出土していることから火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

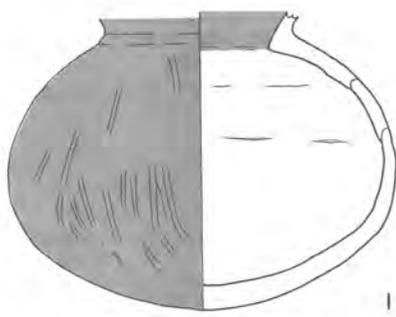
第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 1	壺 土師器	B (12.0)	口縁部欠損。丸底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面へラ磨き、内面ナデ。胴部内面除き赤彩。	長石・スコリア 橙色 普通	P231 PL50 80% 底部外面煤付着 北西コーナー付 近床面
2	壺 土師器	B (8.8) C 2.5	口縁部欠損。やや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。胴部下位に単孔を穿つ。頸部に擦痕有り。	胴部外面へラ磨き、内面ナデ。外面赤彩。輪積み痕有り。	砂粒・雲母・石英 赤褐色 良好	P232 PL50 70% 南壁中央部床面
3	甕 土師器	A 15.2 B (17.1)	底部欠損。やや長胴で最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面剥離痕著しく不明。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P225 PL50 70% 内・外面煤付着 北西コーナー床 面

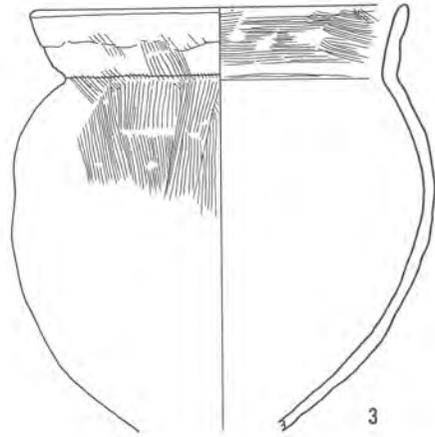


第134図 第27号住居跡実測図

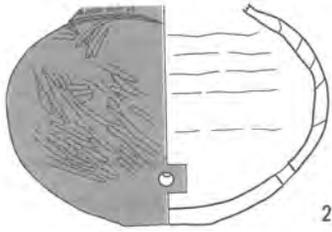
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 4	甕 土師器	A 13.0	やや突出した平底。胴部は内瓣して立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後へラナデ、内面へラ削り。胴部外面ハケ目整形、内面へラ削り。	砂粒 100% 黄橙色 普通	P226 PL50 内面煤付着 南壁中央部付近床面
		B 10.2				
		C 4.4				
5	甕 土師器	A 12.2	やや上げ底。胴部は長胴気味で最大径をやや上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。胴部内・外面ハケ目調整後へラナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・雲母・石英 95% 橙色 普通	P227 PL50 北西コーナー付近床面
		B 12.9				
		C 6.6				



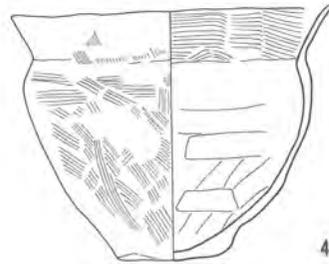
1



3



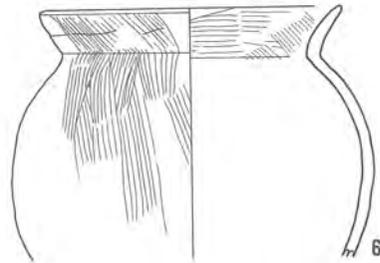
2



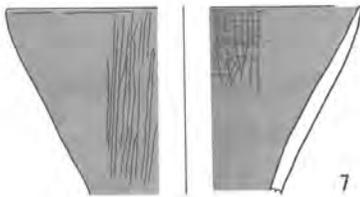
4



5



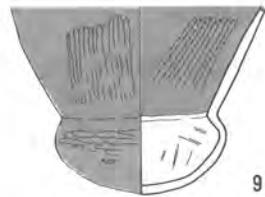
6



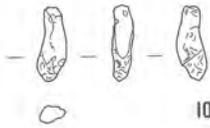
7



8



9



10



第135图 第27号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第135図 6	甕 土 師 器	A 12.1 B (10.0)	胴部下半欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。内・外面まだらに剥離。	長石・石英 浅黄橙色 普通	P228 PL50 60% 二次焼成 北西コーナー付近床面
7	埴 土 師 器	A [14.1] B (7.5)	口縁部の破片。内彎気味に器厚を減じて立ち上がる。	外面へラ磨き、内面ハケ目調整後へラ磨き。内・外面赤彩。	長石・雲母・礫 赤色 良好	P229 15% 南壁中央部付近床面
8	鉢 土 師 器	A 10.8 B 4.6 C 2.6	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。胴部外面下半へラ削り、上半はハケ目整形、内面へラ削り。口縁部内・外面赤彩。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P230 PL50 100% 内・外面煤付着 南壁中央部付近床面
9	埴 土 師 器	B (7.5)	丸底。口縁端部欠損。体部はやや扁平な半球形を呈し、最大径を上位にもつ。口縁部は内面に稜をもち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。体部外面へラ磨き、内面へラナデ。体部内面を除き赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 良好	P233 PL50 95% P ₁ 内覆土上層

図版番号	器 種	法 量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第135図10	不明土製品	3.0	1.7	0.8	—	2.0	100	炉 内	DP199

第28号住居跡（第136図）

位置 調査区の北東部、A14j₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸 [2.25] m、短軸 [2.00] mの隅丸長方形を呈するものと推定される。

主軸方向 [N-9°-W]

壁 削平され壁の立ち上がりを確認することができなかった。

床 やや凹凸であり、軟らかい。

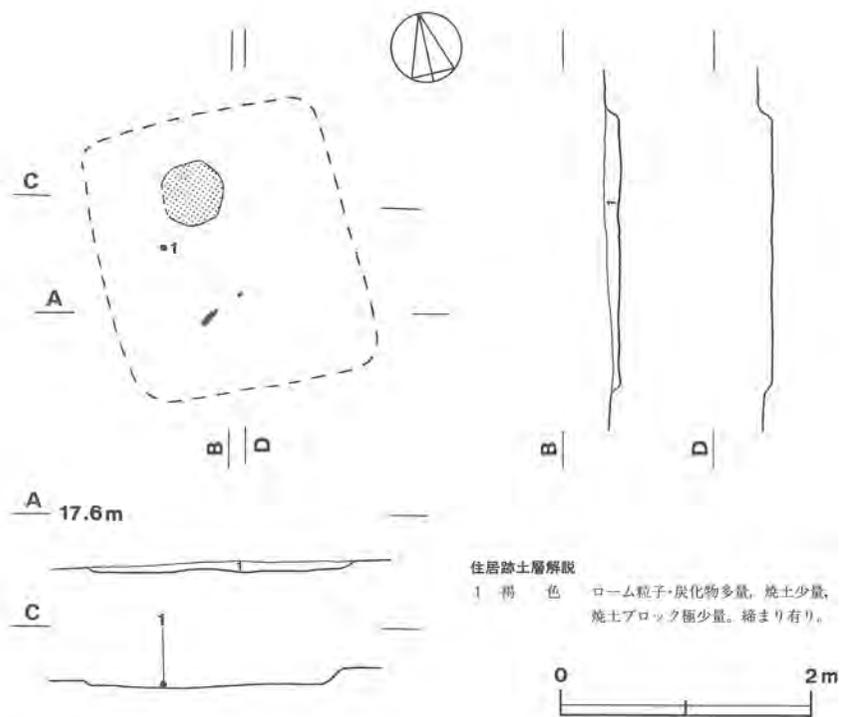
ピット 検出されない。

炉 中央部から北西寄りに検出されている。平面形は、長径50cm、短径48cmの不整円形を呈し、床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてレンガ状に赤変硬化している。

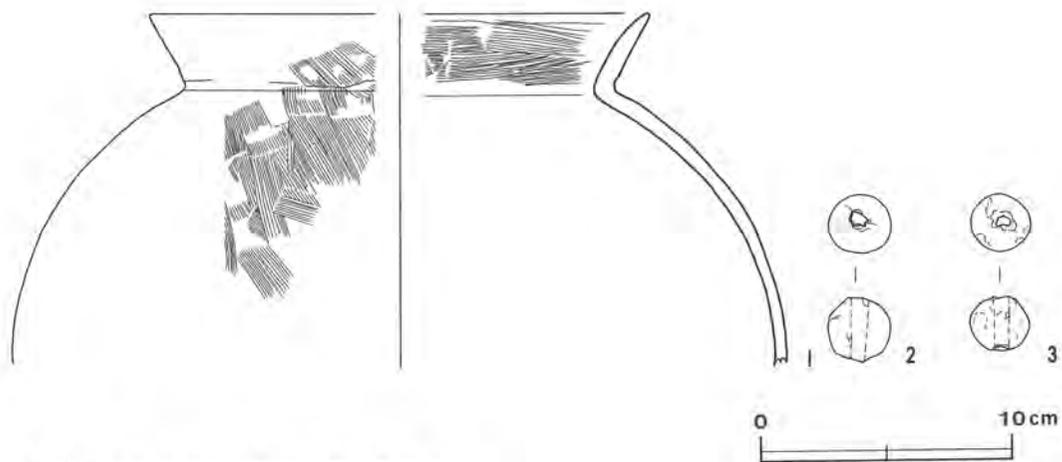
覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土下層にかけては、土師器片（甕1）や土師器の細片（231点）が出土している。第137図1の甕は炉の南西側床面に破片の状態で出土している。第137図2・3の土玉は覆土から2点出土している。

所見 本跡は、中央部の床面から焼土及び炭化材が多く出土していることから火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第136図 第28号住居跡実測図



第137図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第137図 1	甕 土師器	A [20.0] B (14.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後、口唇部ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	長石・石英にふい黄橙色普通	P234 10% 炉南西側床面

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第137図2	土玉	2.6	2.5	—	0.7	13.1	100	覆土	DP200
3	土玉	2.3	2.5	—	0.6	10.4	100	覆土	DP201

第29号住居跡 (第138図)

位置 調査区の北西部, A12j₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.73m, 短軸3.69mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は45~60cmで, 垂直に立ち上がっている。

床 中央部から西側が一段高くベット状に構築されており, 全体的に良く踏み固められ硬い。南東コーナーには貯蔵穴が確認されている。その周りには, 床より一段と高いベルトがあり, ベルトと床との比高は5~7cmである。

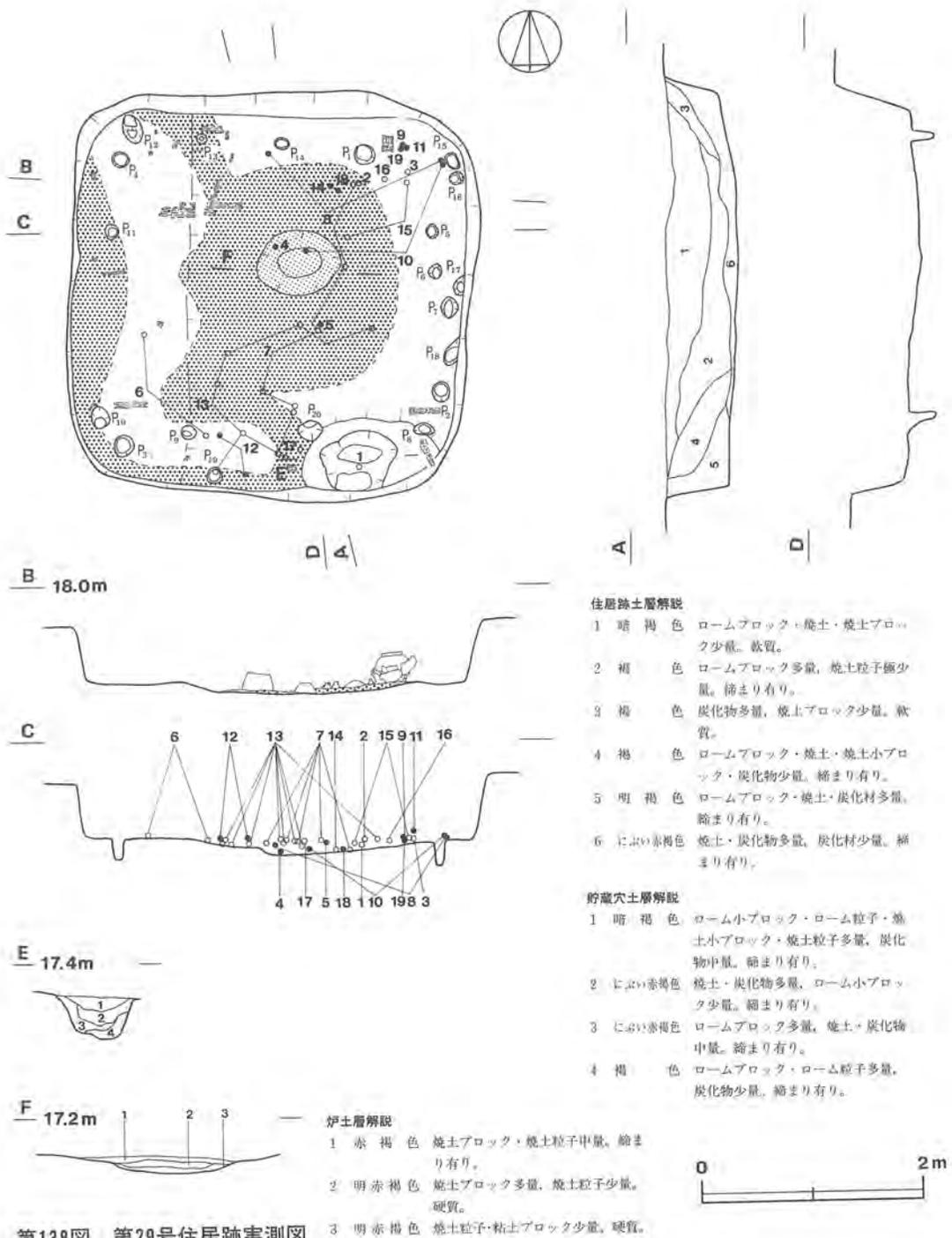
ピット 20か所 (P₁~P₂₀) 検出されている。P₁~P₄は, 径15~20cmの円形を呈し, 深さ21~25cmで支柱穴と考えられる。P₅~P₁₄は, 径12~21cm, 深さ13~32cmで補助柱穴と思われる。P₁₅~P₁₉は, 東壁際から南壁寄りに検出されており, 壁柱穴と思われる。P₂₀は, 径20cmの円形を呈し, 深さ25cmで, 南壁寄りに傾斜しており, 出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 ほぼ中央部に検出されている。平面形は, 長径78cm, 短径56cmの楕円形を呈し, 床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 南東コーナーに検出されている。平面形は, 長径70cm, 短径55cmの不定形を呈し, 深さ42cmである。底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がっている。

覆土 覆土下層は, 全体的に壁際に焼土が厚く堆積しており, ロームブロックが斑状に含まれ, 人為堆積と思われる。覆土中層から覆土上層は自然堆積である。

遺物 床面から覆土中層にかけては, 土師器片 (壺7, 甕3, 台付甕2, 高坏4, 器台2, ミニチュア1) や土師器の細片 (576点) が出土している。第141図8の甕は北壁中央部付近の床面から正位の状態で, 第141図9の甕は北東コーナーの11の台付甕の上から正位の状態で, 第141図11の台付甕は北東コーナーの床面から正位の状態で, 第139図1の壺は貯蔵穴内の覆土上層からつぶ



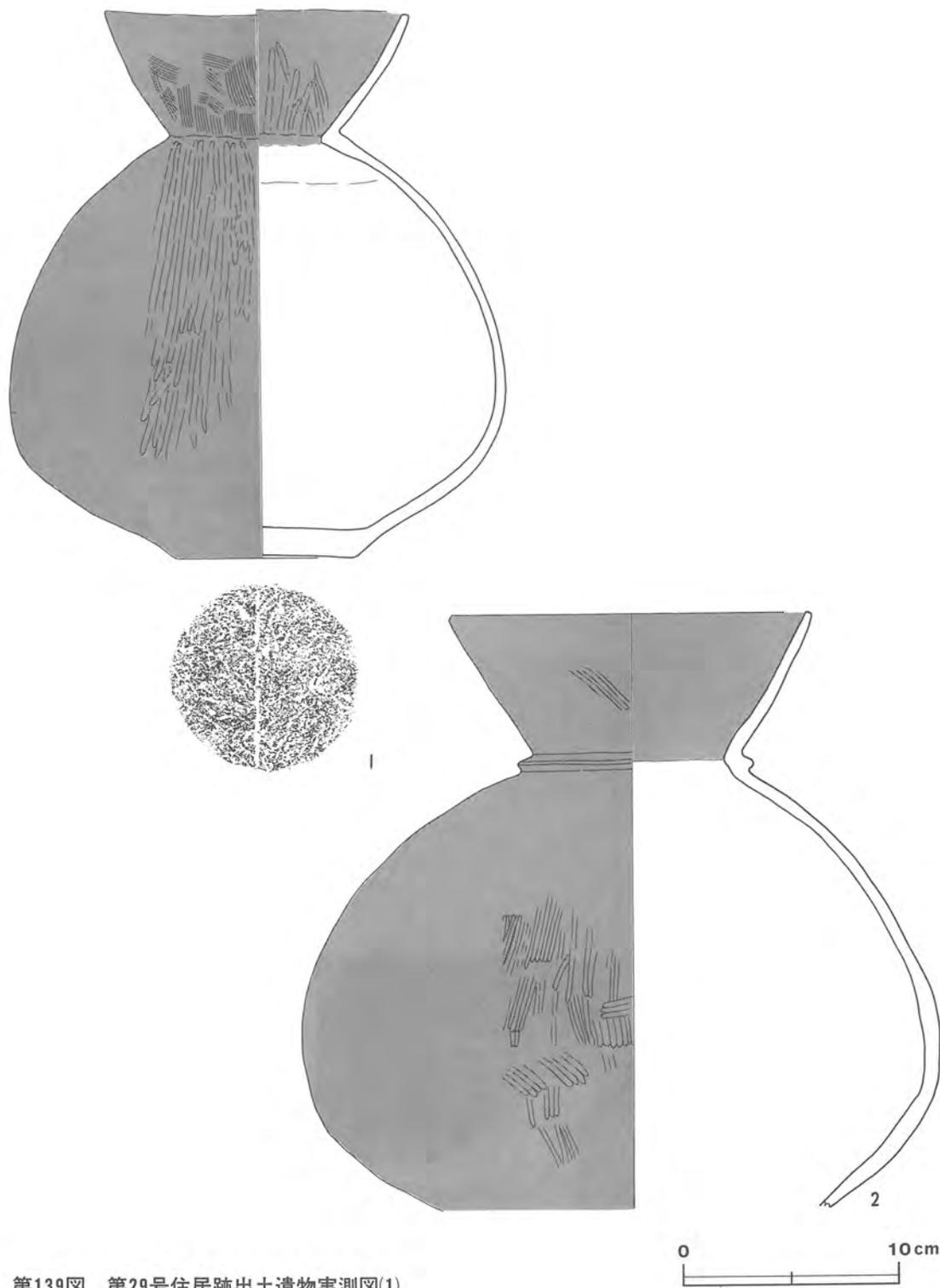
第138図 第29号住居跡実測図

れた状態で、第142図14・16の高坏の脚部は北壁中央部付近の床面から正位の状態、第142図18の器台の脚部は北壁中央部付近の床面から正位の状態、第142図19のミニチュア土器は9の甕の中から逆位の状態それぞれ出土している。

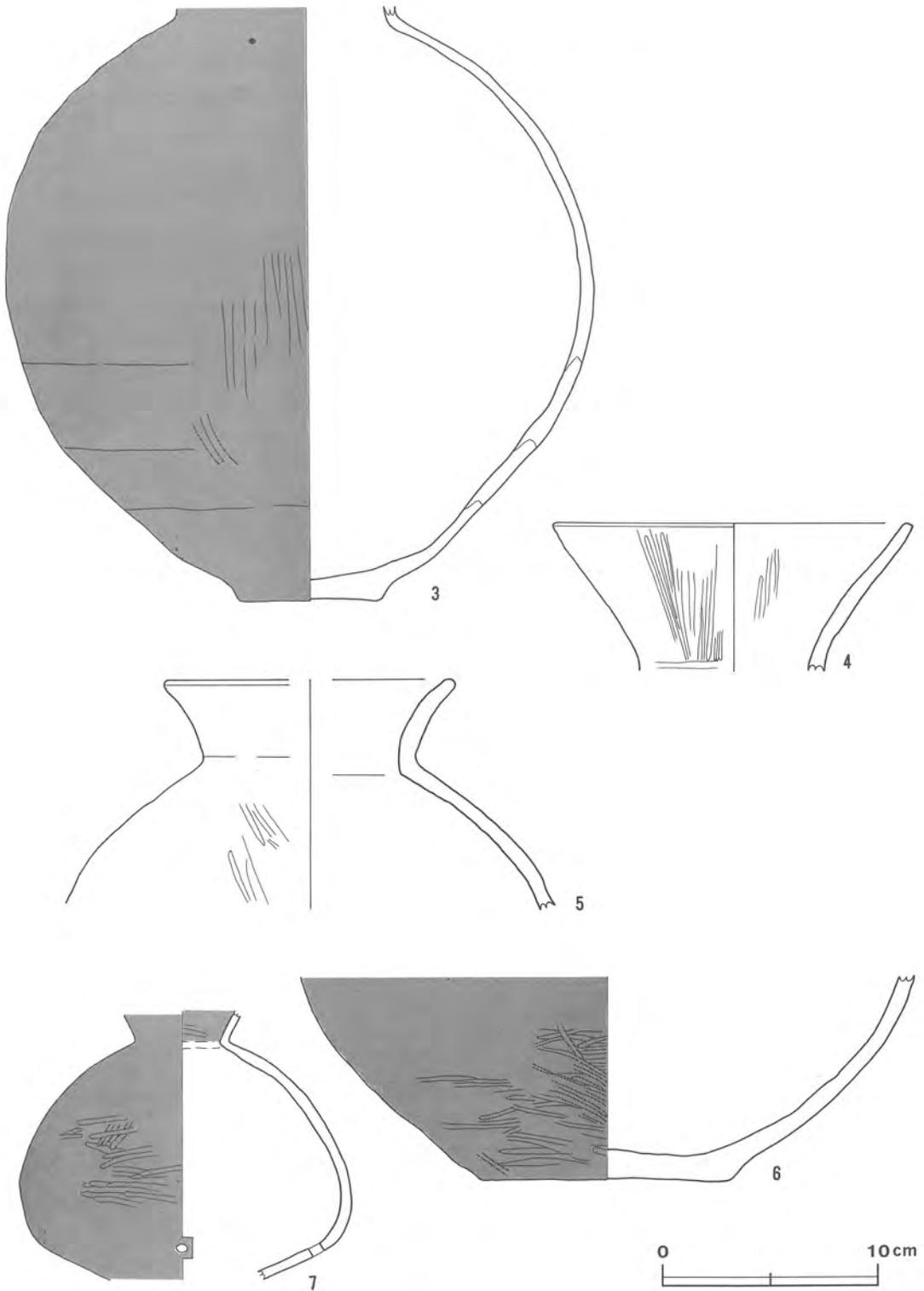
所見 本跡は、全体的に焼土及び炭化材が多量に出土していることから火災住居跡と思われる。中央部から西壁付近には高坏や器台等が出土しており、祭祀を行った住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

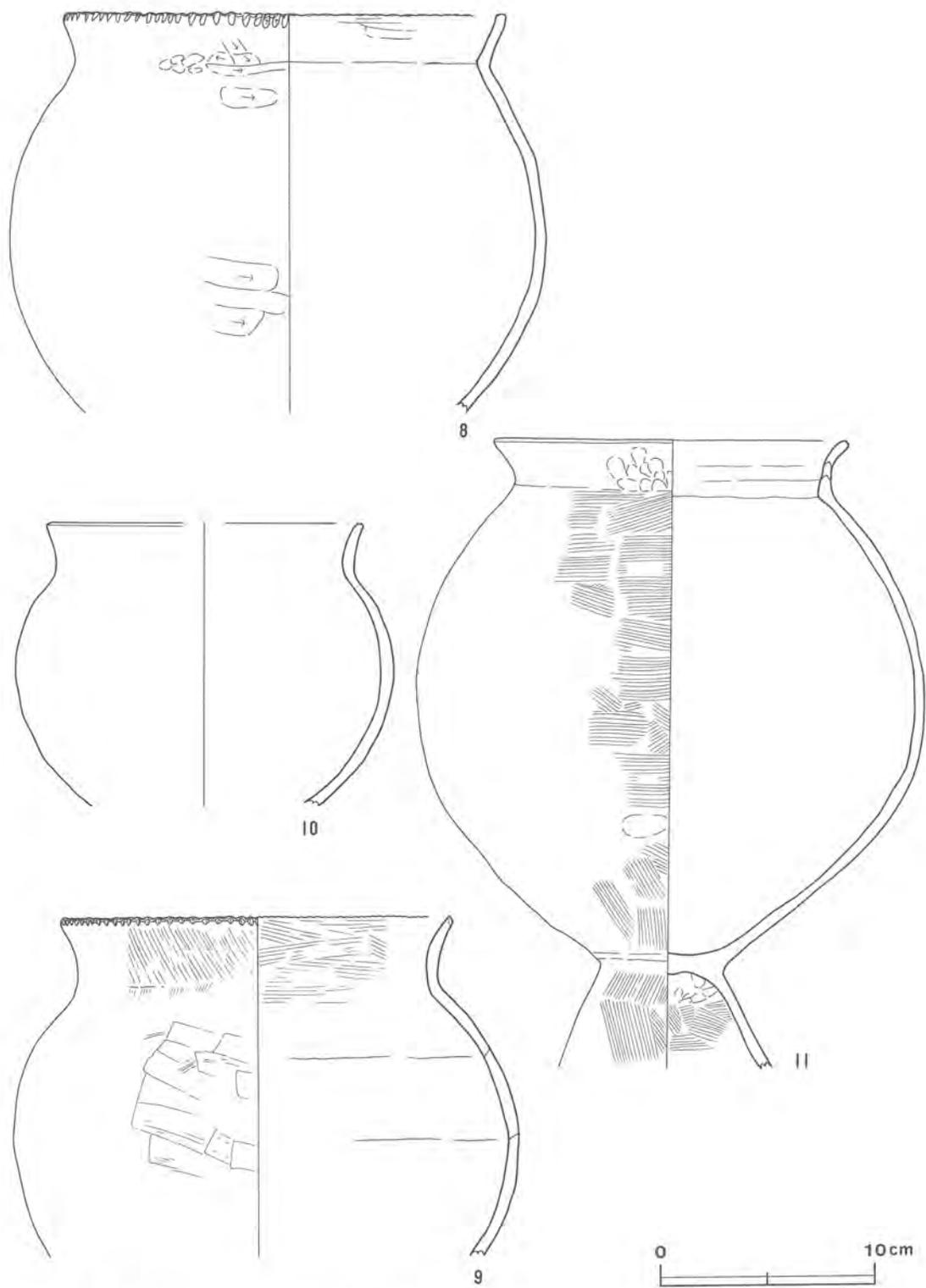
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	壺 土師器	A 14.0 B 26.0 C 8.4	胴部一部欠損。平底。胴部は下膨れで、最大径を下位にもつ。口縁部はやや内彎して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ヘラナデ。胴部外面ヘラ磨き、内面剥離が著しく不明。胴部内面除き赤彩。底部木葉痕。	砂粒・スコリア 明赤色 普通	P241 PL52 70% 二次焼成 貯蔵穴内覆土上層
2	壺 土師器	A 16.8 B (28.1)	底部欠損。胴部は下膨れで、最大径を下位にもつ。口縁部はやや内彎して立ち上がる。頸部に突帯をもつ。単口縁。	口縁部外面ヘラ磨き、内面ナデ。胴部外面ヘラ磨き、内面磨耗が著しく不明。外面まだらに剥離。胴部内面除き赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	P240 PL52 50% 北東コーナー付 近床面
第140図 3	壺 土師器	B (28.0) C 6.6	口縁部欠損。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P242 80% 北東コーナー付 近床面
4	壺 土師器	A 16.8 B (7.0)	口縁部片。頸部から外反して立ち上がり、口唇部はやや内彎する。単口縁。	口縁部内・外面ヘラ磨き。内・外面まだらに剥離。	長石・スコリア ・石英 にふい橙色 普通	P243 20% 二次焼成 炉西側床面
5	壺 土師器	A [13.6] B (10.8)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面、胴部内面磨耗が著しく不明。胴部外面ヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P244 15% 二次焼成 中央部床面
6	壺 土師器	B (9.6) C 11.8	底部片。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面下半部ヘラ磨き、内面磨耗が著しく不明。外面赤彩。	砂粒・長石 橙色 普通	P245 20% 南壁中央部付近 床面
7	壺 土師器	B (12.7)	底部及び口縁部欠損。胴部は下膨れで、最大径を下位にもつ。胴部下位に単孔を穿つ。	胴部外面ヘラ磨き、内面ナデ。内面まだらに剥離。外面赤彩。	砂粒 暗赤褐色 良好	P246 PL52 50% 北東コーナー付 近床面
第141図 8	甕 土師器	A 20.8 B (18.9)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は内面に稜をもち、やや内彎気味に立ち上がる。口唇部にキザミ目をもつ。単口縁。	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P235 PL52 70% 外面煤付着 北壁中央部付近 床面
9	甕 土師器	A 18.4 B (16.1)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は外反して立ち上がる。口唇部にキザミ目をもつ。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面粗いヘラナデ、内面ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・スコリア ・石英 明赤褐色 普通	P236 PL52 60% 内面煤付着 北東コーナー P238台付甕上
10	甕 土師器	A [14.8] B (13.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ヘラナデ。内・外面まだらに剥離。	長石・スコリア 橙色 普通	P237 20% 炉直上



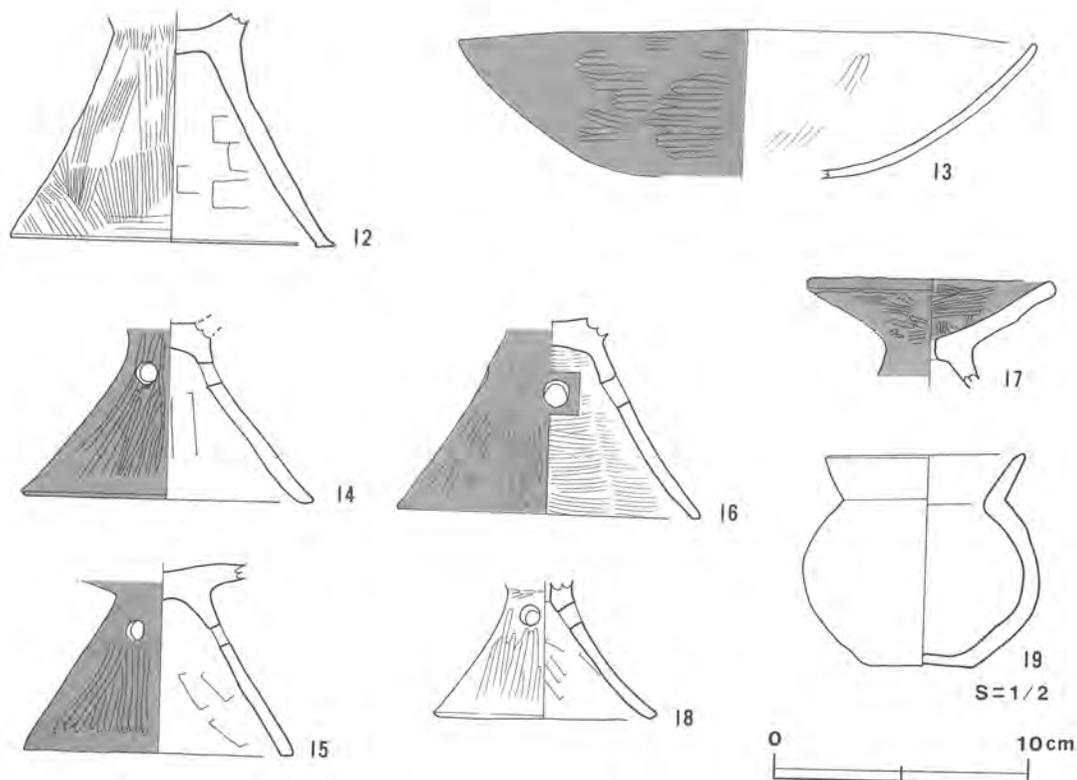
第139图 第29号住居跡出土遺物実測図(1)



第140図 第29号住居跡出土遺物実測図(2)



第141図 第29号住居跡出土遺物実測図(3)



第142図 第29号住居跡出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 11	台付甕 土師器	A 16.8 B (29.8) E (4.5)	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。台部内・外面ハケ目整形。内・外面まだらに剥離。	砂粒・スコリア 橙色 良好	P238 PL52 90% 外面煤付着 北東コーナ一付 近床面
第142図 12	台付甕 土師器	B (9.3) D 12.8	台部片。「ハ」の字状に下方へ開く。台部底面に粘土紐の貼り付け痕が確認できる。	台部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒 暗灰黄色 普通	P239 20% 外面煤付着 南壁中央部付近 床面
13	高坏 土師器	A 23.0 B (5.6)	坏部の破片。坏部は内彎して立ち上がる。坏部に歪みが見られる。	内・外面ヘラ磨き。内・外面まだらに剥離。内・外面赤彩。	砂粒 暗赤色 普通	P247 30% 内・外面煤付着 中央部床面
14	高坏 土師器	B (7.2) D 11.6 E 6.0	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。3孔。	外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。内・外面まだらに剥離。外面赤彩。	長石・スコリア 明赤褐色 普通	P248 PL52 50% 北壁中央部付近 床面
15	高坏 土師器	B (7.7) D 10.6 E 6.1	脚部片。脚部は「ハ」の字状に下方へ開く。3孔。	外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。外面まだらに剥離。外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P249 PL52 50% 炉直上

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第142図 16	高 環 土 師 器	B (7.9) D 12.1 E 7.0	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。4孔。	外面ハケ目整形後ナデ、内面ハケ目整形。外面赤彩。	砂粒 にぶい橙色 普通	P250 PL52 30% 外面煤付着 北壁中央部付近 床面
17	器 台 土 師 器	A 9.8 B 4.4	器受部片。器受部は外傾して立ち上がり、口縁直下は垂直になる。器受部中央に単孔。	器受部内・外面ハケ目調整後へラ磨き。内・外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P251 60% 外面煤付着 南壁中央部付近 覆土下層
18	器 台 土 師 器	D 9.0 E 5.5	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部中央に単孔。脚部に3孔。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目整形後ナデ。	砂粒・長石・パ ミス 赤褐色 普通	P252 PL52 50% 外面煤付着 北壁中央部付近 床面
19	ミニチュア土器 土 師 器	A 5.3 B 5.8 C 2.9	甕形。やや上げ底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面へラ削り後丁寧なナデ、内面ナデ。	長石・石英 黒褐色 普通	P253 PL52 100% P236甕内

第31号住居跡 (第143図)

位置 調査区の北西部，A12j₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.00m，短軸2.85mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高は12～25cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 南コーナーを除いて壁下を回っている。上幅9～15cm，深さ4～6cmで，断面形は、「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で，西コーナーから北東壁中央部にかけて特に良く踏み固められ硬い。

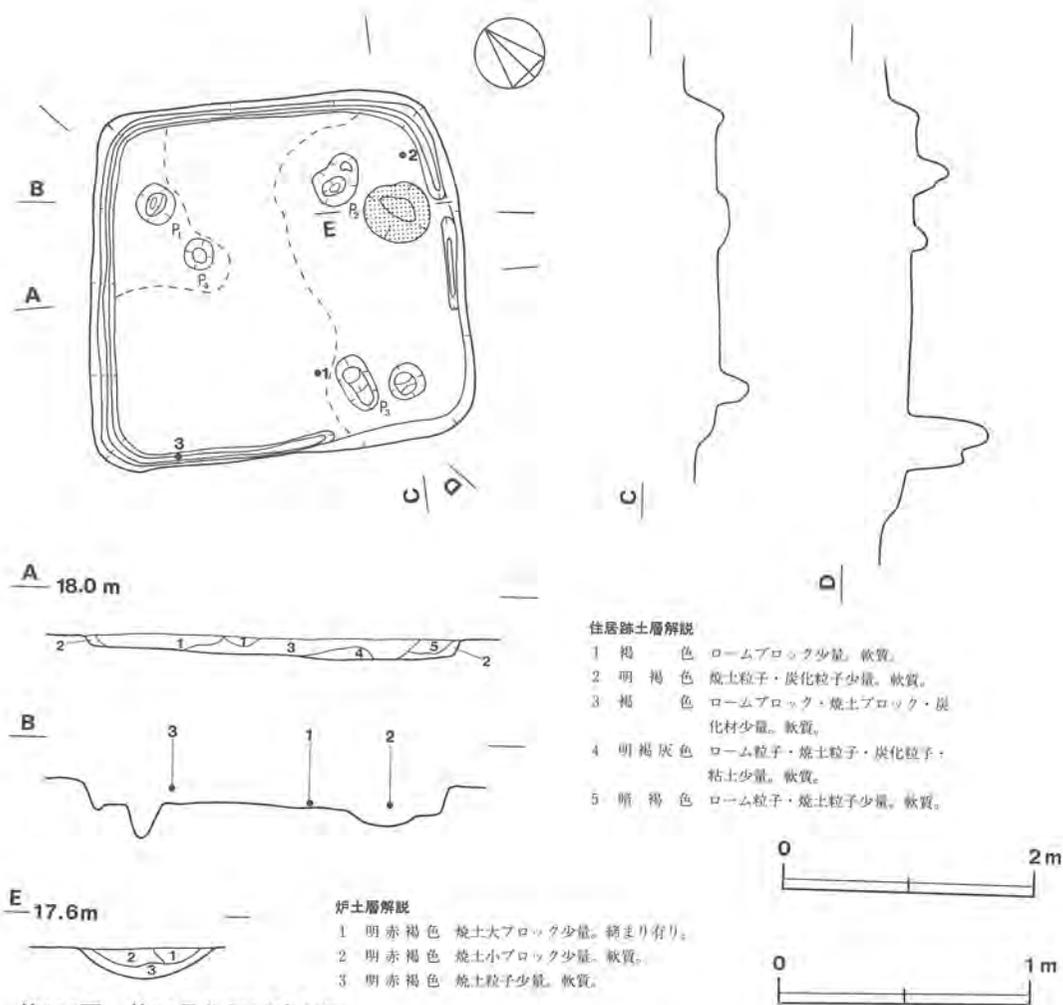
ピット 4か所 (P₁～P₄) 検出されている。P₁～P₃は，径30～41cmの円形を呈し，深さ18～65cmで，規模や配列から支柱穴と考えられる。P₄は，径22cmの円形を呈し，深さ16cmで，補助柱穴と思われる。

炉 中央部から南東寄りに検出されている。平面形は，長径53cm，短径47cmの楕円形を呈し，床を約16cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてブロック状に赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナー付近に検出されている。平面形は，径28cmの円形を呈し，深さ26cmである。底面は平坦で，壁は南西壁が段になり外傾して立ち上がっている。

覆土 ロームブロック及び焼土粒子，炭化物を含み，人為堆積と思われる。

遺物 床面や覆土下層からは土師器片 (壺2，高環1) や土師器の細片 (30点) が出土している。



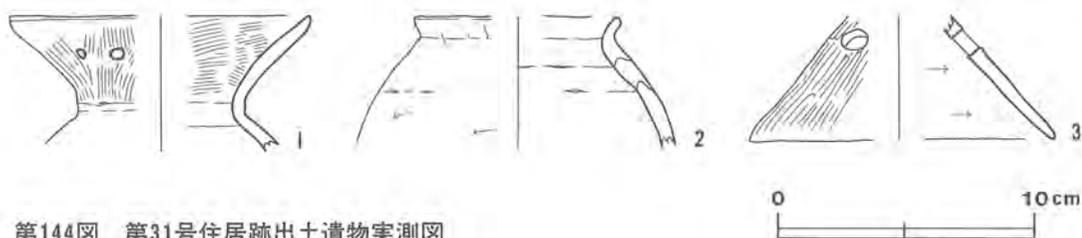
第143図 第31号住居跡実測図

第144図1の壺は南コーナー付近の覆土下層から破片の状態で、第144図2の壺は炉の東側床面から破片の状態で、第144図3の高坏の脚部は西コーナー付近の覆土下層から出土している。粘土塊は炉の西側床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	壺 土師器	A [11.8] B (5.5)	口縁部の破片。頸部から外反して立ち上がる。口縁部上位に2個1組の孔(焼成前)をもつ。単口縁。	口縁部粗くヘラナデ、内面ハケ目調整後ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P257 10% 南コーナー付近 覆土下層



第144図 第31号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 2	壺 土師器	A [8.2] B (5.3)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は短く外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面へラ削り、内面ナデ。輪積み痕有り。内・外面まだらに剝離。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P258 10% 炉東側床面
3	高 土師器	B (5.0) D [10.0]	脚部の破片。脚部はラッパ状に下方へ開く。	脚部外面へラ磨き、内面へラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P259 10% 西コーナー付近 覆土下層

第32号住居跡 (第145図)

位置 調査区の北西部、B11a₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.10m、短軸3.00mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は26~34cmで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 南壁下を除いて回っている。上幅11~14cm、深さ4~6cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

間仕切り溝 1条 (a) 検出されている。北西壁の西コーナー寄りから床中央部に向かってのびている。長さ1.00m、上幅11~15cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、踏み固められやや硬い。

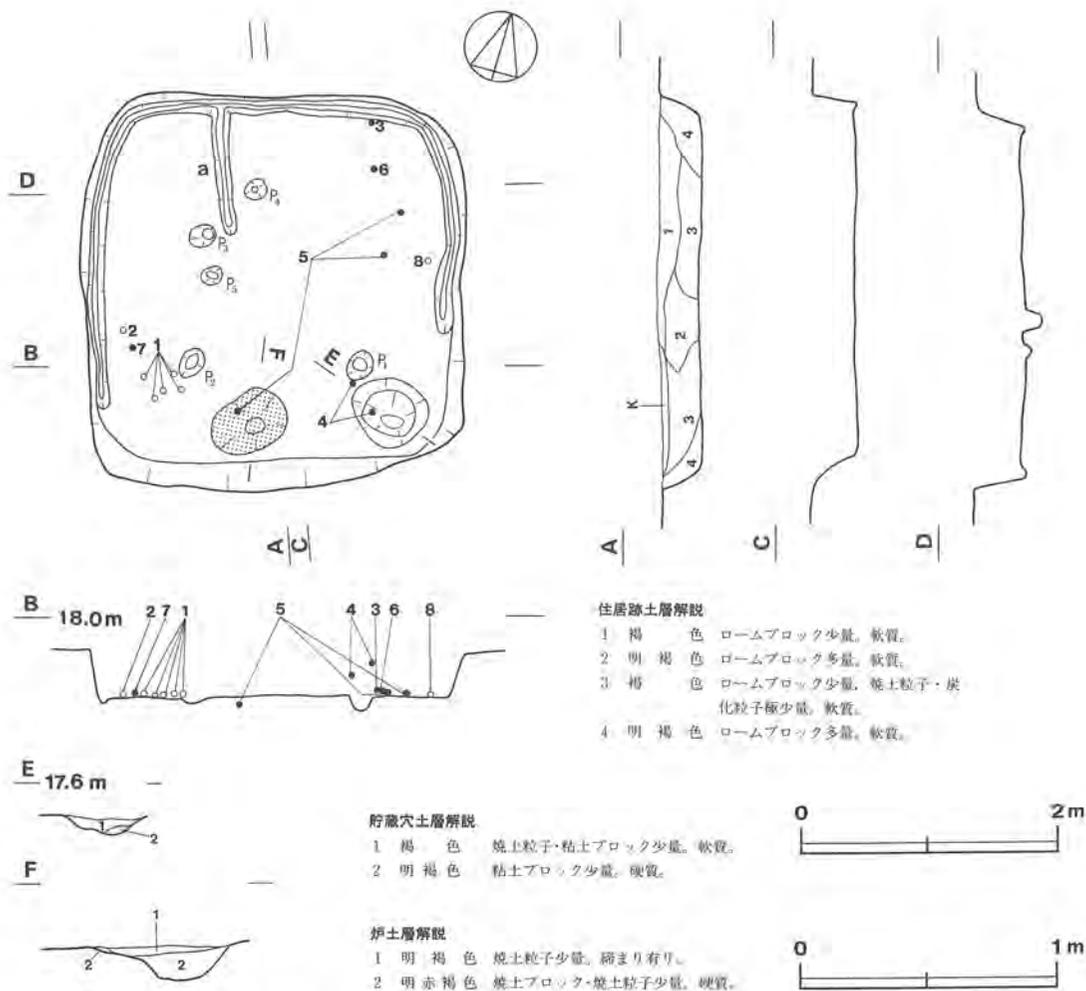
ピット 5か所 (P₁~P₅) 検出されている。P₁~P₃は、径21~25cmの円形を呈し、深さ6~15cmで、規模や配列から支柱穴と思われる。P₄は、径18cmの円形を呈し、深さ15cmで、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₅は、径17cmの円形を呈し、深さ13cmで、補助柱穴と思われる。

炉 中央部から南寄りに検出されている。平面形は、長径63cm、短径47cmの楕円形を呈し、床を約15cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けて赤変硬化している。

貯蔵穴 東コーナー付近に検出されている。平面形は、長径61cm、短径53cmの不整楕円形を呈し、深さ22cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 褐色土のローム土及びローム小・中ブロックを多量に含み、人為堆積と思われる。

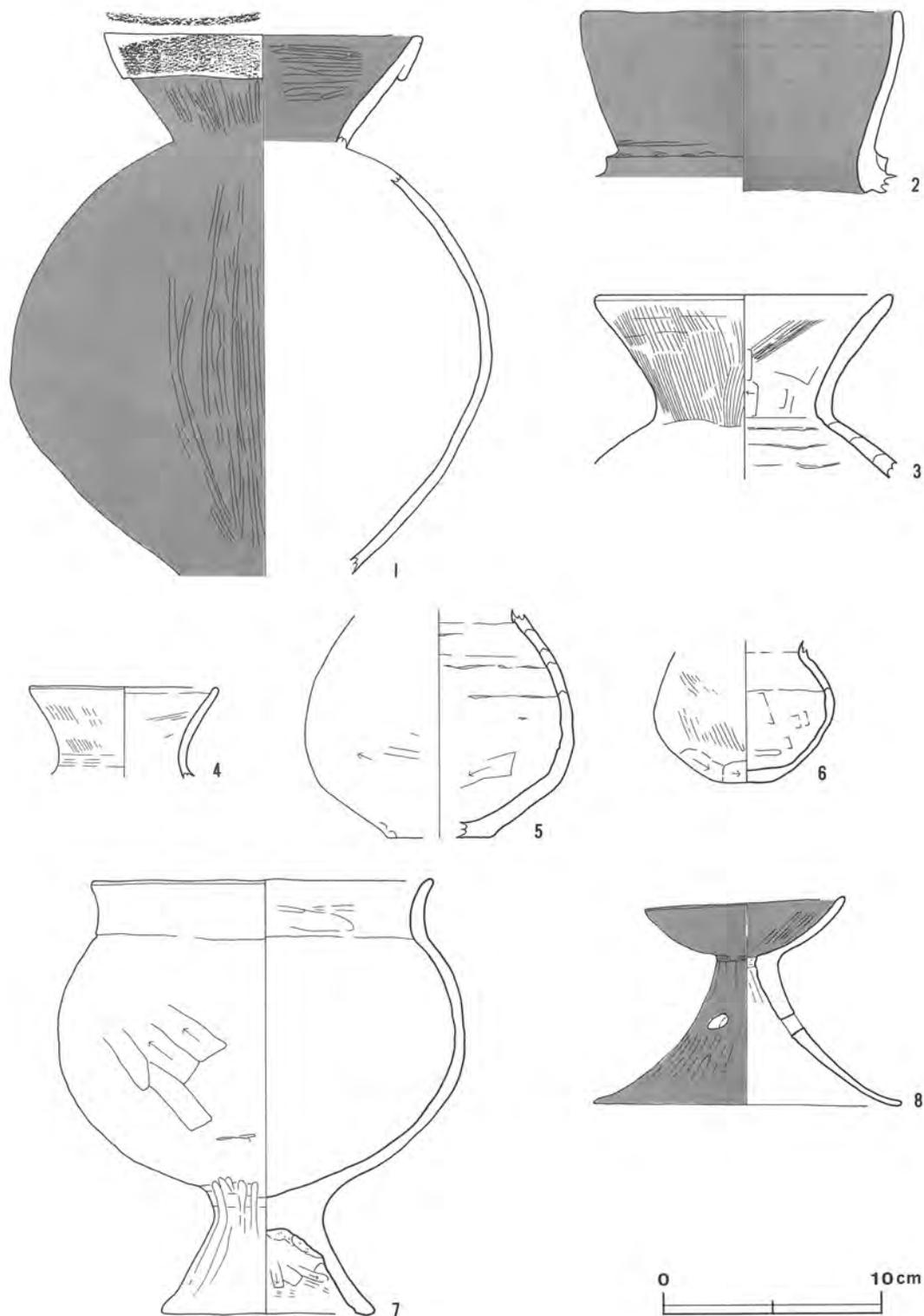
遺物 床面から覆土上層にかけては、土師器片 (壺6, 台付甕1, 器台1) や土師器の細片 (59



第145図 第32号住居跡実測図

点)が出土している。第146図7の台付甕は南コーナー付近の床面から横位の状態で、第146図8の壺は北コーナー付近の床面から破片の状態で、第146図8の器台の脚部は北東壁中央部付近の床面から破片の状態でそれぞれ出土している。第146図1の壺は南コーナー付近の床面から出土し、第35号住居跡の土師器片と接合されている。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第146图 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第146図 1	壺 土 師 器	A 19.5 B (31.4)	底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口唇部でやや内彎する。複合口縁。	口縁部外面網目状燃糸文、内面へら磨き。胴部外面へら磨き、内面へらナデ。胴部内面、口縁部外面を除き赤彩。口縁部外面に凹形の赤彩。	砂粒・スコリア 暗赤色 普通	P261 PL57 70% 南コーナー付近 床面
2	壺 土 師 器	A 14.7 B (8.5)	口縁部片。口縁部は頸部からやや外傾して立ち上がり、口縁部上位で内彎する。頸部に突帯をもつ。単口縁。	口縁部内・外面丁寧なへらナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P262 PL57 30% 南コーナー付近 床面
3	壺 土 師 器	A 13.8 B (8.5)	口縁部片。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形、内面ハケ目調整後ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P263 PL57 30% 北コーナー付近 覆土下層
4	壺 土 師 器	A 8.4 B (4.2)	口縁部片。頸部から外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後丁寧なナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P264 10% 東コーナー付近 覆土中層
5	壺 土 師 器	B (20.5) C [4.8]	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は下膨れで最大径を下位にもつ。	胴部外面へら削り、内面ナデ。輪積み痕有り。内面まだらに剝離。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P265 40% 北東壁中央部付 近床面
6	壺 土 師 器	B (6.5) C 2.7	口縁部欠損。平底。胴部はやや扁平な球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面ハケ目調整後へらナデ、内面へらナデ。	砂粒・スコリア・雲母 明褐色 普通	P266 50% 外面煤付着 北コーナー付近 覆土下層
7	台付甕 土 師 器	A 15.5 B 20.2 D 9.8 E 5.0	台部はラッパ状に下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。台部底面に粘土紐貼り付け。	口縁部内・外面ナデ。胴部外面へら削り後ナデ、内面ナデ。台部外面へらナデ、内面へら削り。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P260 PL57 100% 内・外面煤付着 南コーナー付近 床面
8	器台 土 師 器	A 9.0 B 9.5 D 14.1 E 6.8	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に下方へ開く。器受部は皿状を呈し、中央に単孔をもつ。脚部に3孔。	器受部内・外面へら磨き。脚部外面へら磨き、内面ナデ。脚部内面除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P267 PL57 70% 北東壁中央部付 近床面

第33号住居跡 (第147・148図)

位置 調査区の北西部、A12i₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は、第34号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.45m、短軸6.35mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-70°-W

壁 壁高は24~34cmで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10~17cm、深さ5~7cmで、断面形は「U」字状を呈している。

間仕切り溝 1条(a)検出されている。東壁中央部から床中央部に向かってのびている。上幅9~12cm、深さ9~12cmで断面形は「U」字状を呈している。

床 やや凹凸であり、全体的に良く踏み固められ硬い。

ピット 13か所(P₁~P₁₃)検出されている。P₁~P₃は、径18~38cmのほぼ円形を呈し、深さ19~26cmで、規模や配列から支柱穴と思われる。P₄~P₁₁は、径23~36cmの円形を呈し、深さ9~31cmで、補助柱穴と思われる。P₁₂は、径42cmの円形を呈し、深さ33cmで、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P₁₃は、径42cmの円形を呈し、深さ12cmで梯子ピットの補助柱穴と思われる。

炉 中央部に2か所(炉1・炉2)検出されている。炉1の平面形は、長径76cm、短径62cmの不定形を呈し、床を約5cm掘り窪めた地床炉である。炉2の平面形は、長径125cm、短径82cmの不整楕円形を呈し、床を約12cm掘り窪めた地床炉である。炉床は、ともに焼けてレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 東壁中央部に検出されている。平面形は、長径75cm、短径58cmの楕円形を呈し、深さ49cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 覆土中・上層は自然堆積である。覆土下層はローム土を斑状に多く含み、人為堆積と思われる。

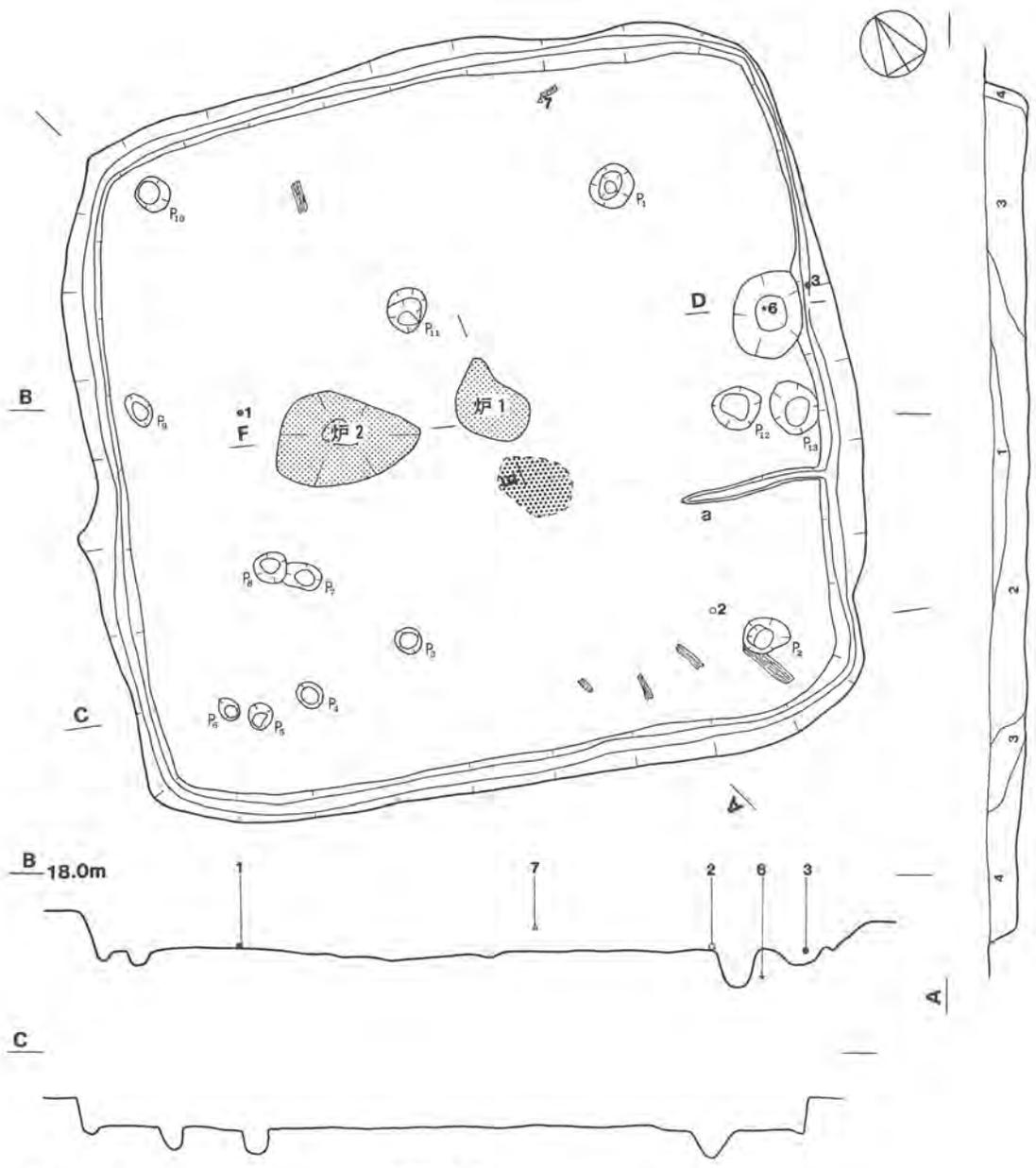
遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片(台付甕1、高坏2)や土師器の細片(36点)が出土している。第149図1の台付甕は炉2の西側の床面からつぶれた状態で、第149図2の高坏の脚部は南東コーナー付近の床面から、第149図7の砥石は北東コーナー付近の覆土下層から、第149図6の土玉は貯蔵穴内の覆土中層からそれぞれ出土している。また、北壁中央部付近からP₁付近にかけての床面からわずかであるが鉄滓が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第34号住居跡より新しい時期に構築されている。また、焼土及び炭化材が壁際から多く出土していることから火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第149図4・5は第33号住居跡から出土した土師器片の拓影図である。4は複合口縁部で、口唇部及び内面に網目状捺糸文が施文されている。内・外面赤彩。5は壺の頸部で、円形浮文が3個貼付され、以下細かい網目状捺糸文が施文されている。円形浮文赤彩。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	分量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	台付甕 土師器	A 23.5 B (27.6) E (1.1)	台部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部にキザミ目をもつ。単口縁。	口縁部内・外面へラナデ。胴部外面へラナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P268 PL58 80% 二次焼成 炉2西側床面

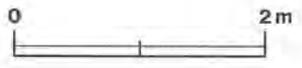
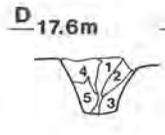


住居跡土層解説

- 1 黒褐色 焼土多量、炭化物少量、軟質。
- 2 極暗褐色 焼土・炭化物中量、ローム粒子少量、縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子多量、焼土・炭化物少量、縮まり有り。
- 4 褐色 ローム粒子多量、炭化物極少量、縮まり有り。

貯蔵穴土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土・炭化物中量、ローム粒子少量、縮まり有り。
- 2 暗赤褐色 焼土・焼土ブロック多量、炭化物少量、縮まり有り。
- 3 褐色 ローム中ブロック多量、焼土粒子中量、炭化物極少量、縮まり有り。
- 4 褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化物極少量、縮まり有り。
- 5 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化物極少量、縮まり有り。



第147図 第33号住居跡実測図(1)

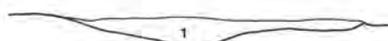
E 17.6m



炉土層解説 (E)

1 濃い赤褐色 焼土小ブロック・炭化物多量。縮まり有り。

F

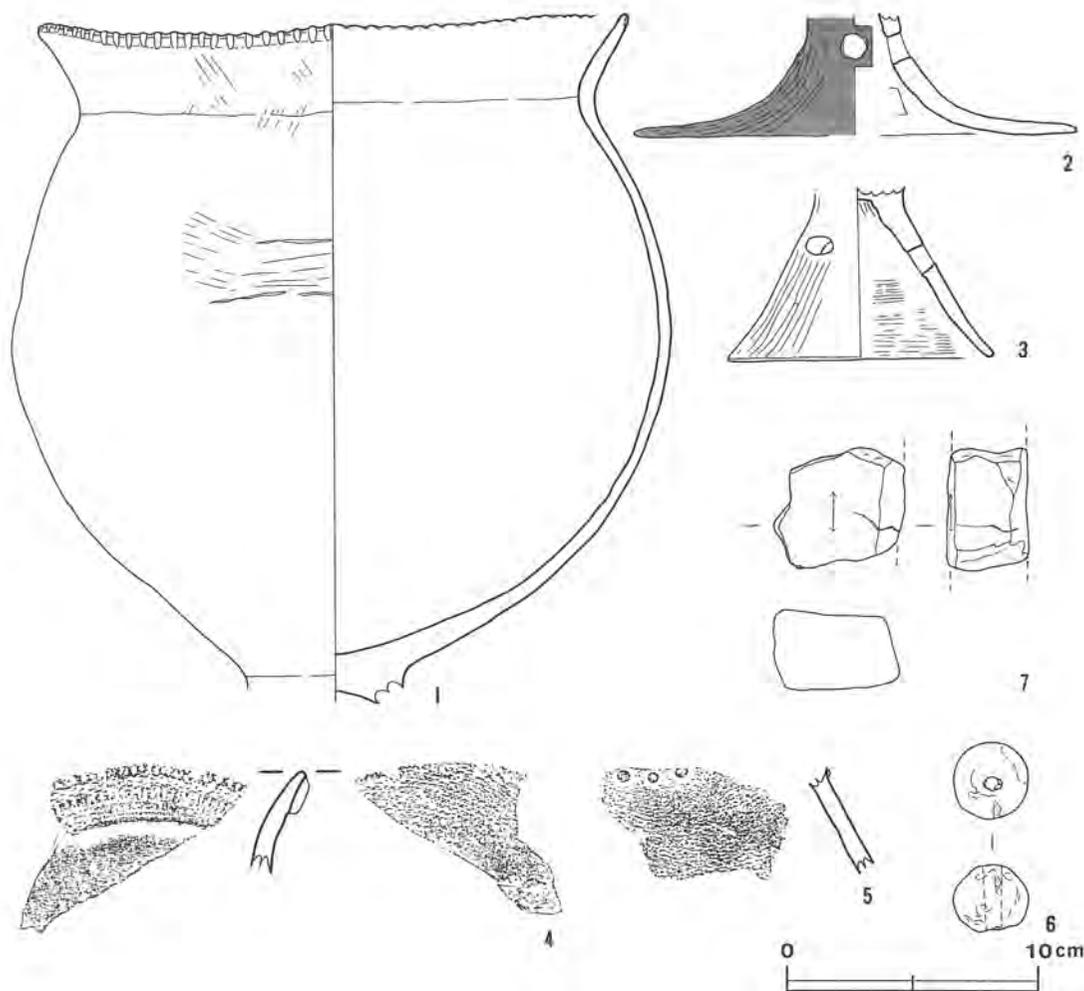


炉土層解説 (F)

1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土・焼土小・中ブロック・炭化物多量。縮まり有り。



第148図 第33号住居跡実測図(2)



第149図 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 2	高土師器 坏器	B (5.0) D [17.6]	脚部の破片。脚部はラッパ状に大きく下方に開く。脚部に2孔確認できる。	脚部外面へラ磨き、内面丁寧なナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P269 PL58 20% 南東コーナー付近床面
3	高土師器 坏器	B (6.9) D 10.6 E (6.9)	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面丁寧なナデ。	砂粒・雲母 淡黄色 普通	P270 50% 東壁中央部付近床面

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第149図6	土玉	2.7	3.0	—	0.8	20.1	100	貯蔵穴内	DP203

図版番号	器種	法量 (cm)				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第149図7	砥石	(4.9)	(5.3)	3.2	(109.4)	砂岩	覆土下層	Q25

第35号住居跡 (第150・151図)

位置 調査区の西部、B11d₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.46m、短軸4.40mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は46~54cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅10~17cm、深さ12~18cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 やや凹凸であり、中央部の床面は特に良く踏み固められ硬い。

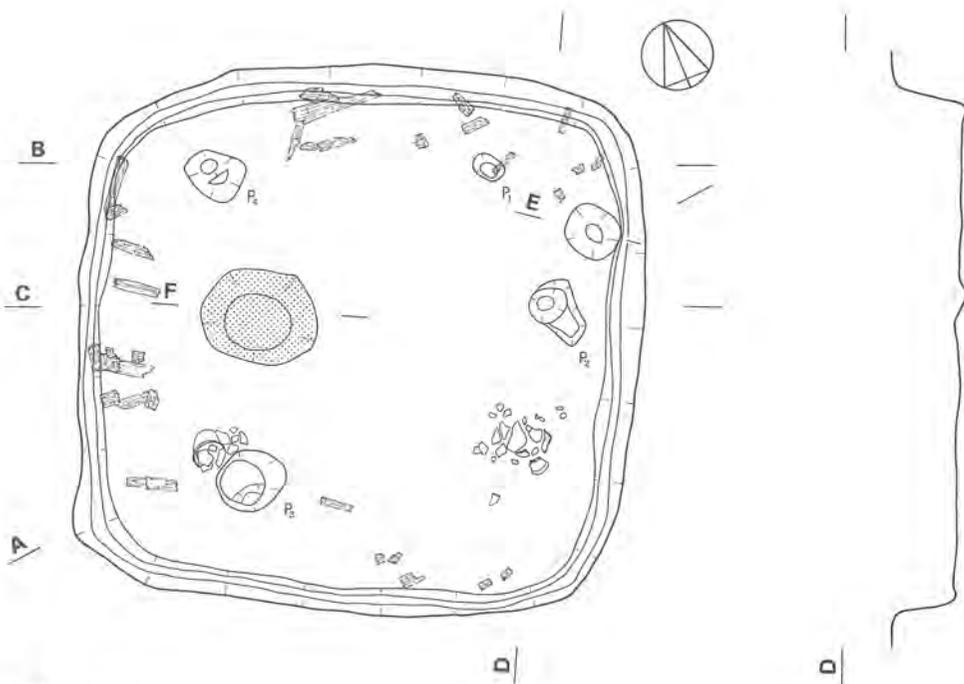
ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₃は、径25~55cmの円形を呈し、深さ18~23cmで、規模や配列から支柱穴と思われる。P₄は、径37cmの円形を呈し、深さ40cmで、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 中央部から北西寄りに検出されている。平面形は、長径98cm、短径73cmの楕円形を呈し、床を約7cm掘り窪めた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

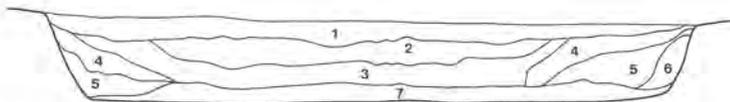
貯蔵穴 東コーナーの壁際に検出されている。平面形は、径48cmほどの円形を呈し、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面から覆土中層にかけては、土師器片 (壺6、甕4、台付甕5、高坏5、器台3) や土師器の細片 (339点) が出土している。第153図10の甕は西コーナー付近の床面からつぶれた状態で、第153図14の台付甕は中央部の床面からつぶれた状態で、第152図1の壺は南コーナー付近の床面及び覆土下層の焼土内からつぶれた状態で、第154図17の高坏の坏部は東コーナー付近の床面から破片の状態で、第154図22の器台は中央部から東寄りの床面からそれぞれ出土している。



A 18.2m



C



住居跡土層解説

- 1 におい褐色 ローム小ブロック中量, ロームブロック・焼土・炭化物少量, 締まり有り。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック・炭化物少量, 焼土極少量, 締まり有り。
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ロームブロック・炭化物少量, 焼土極少量, 締まり有り。
- 4 褐色 ローム粒子多量, 炭化物中量, 焼土・焼土小ブロック少量, 締まり有り。
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土・焼土小ブロック・炭化物多量, 締まり有り。
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 焼土・炭化物少量, 締まり有り。
- 7 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土・焼土ブロック・炭化物・炭化材多量, 締まり有り。

F 17.4m



E 17.4m



貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 軟質。
- 2 明褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化材少量, 軟質。
- 3 におい褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 軟質。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 軟質。
- 5 褐色 焼土粒子多量, 締まり有り。

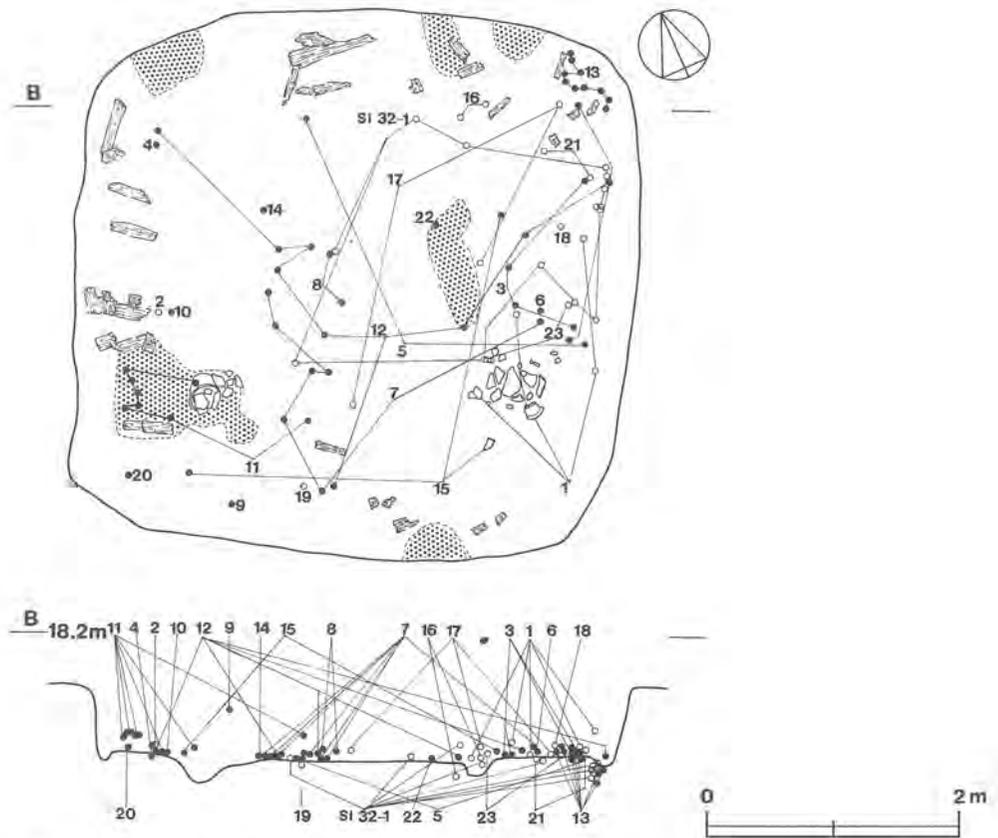


炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化材少量, 締まり有り。
- 2 極暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 軟質。
- 3 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 軟質。



第150図 第35号住居跡実測図



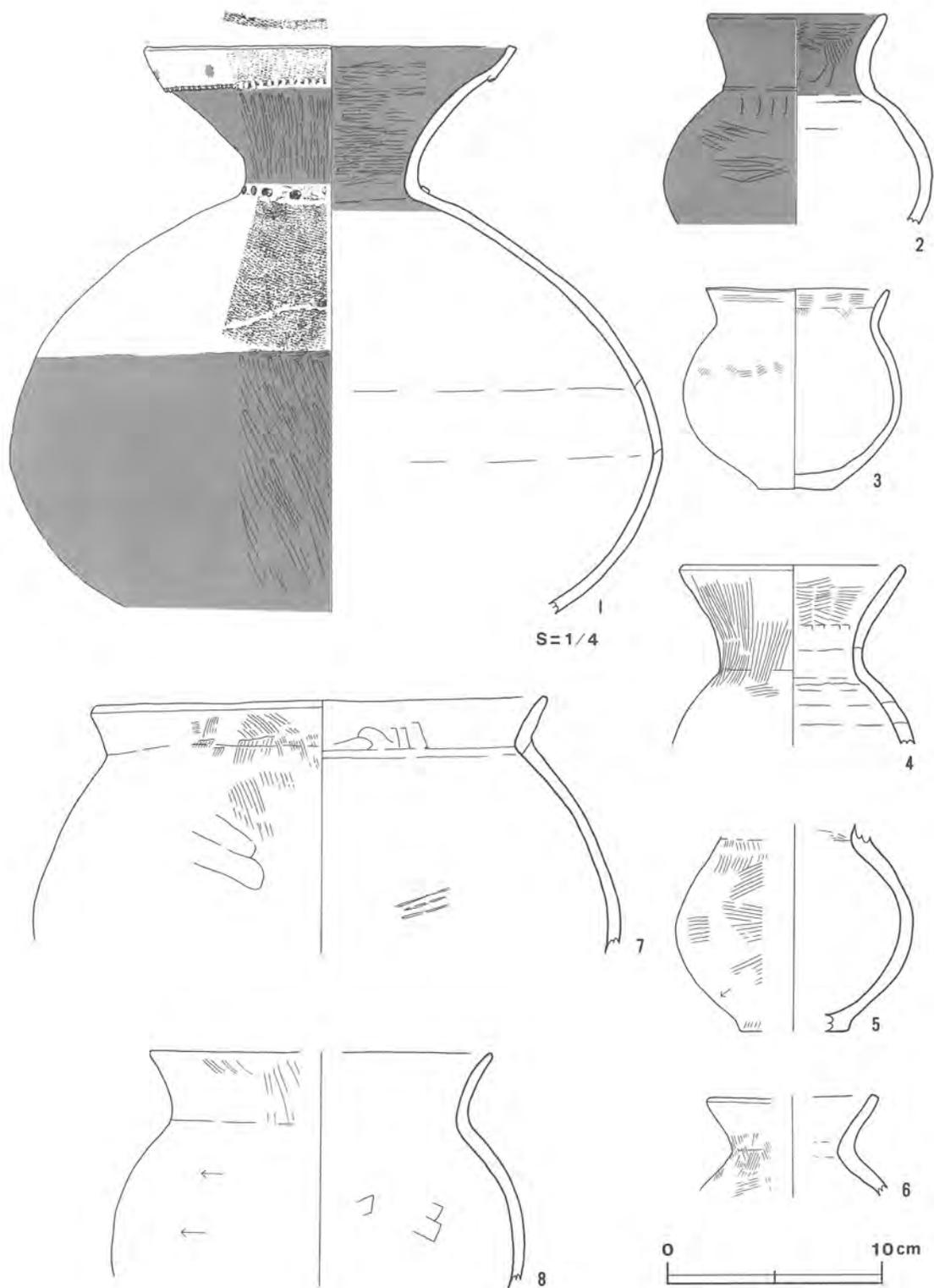
第151図 第35号住居跡遺物出土位置図

第32号住居跡の第146図1の壺片の一部は、貯蔵穴内の覆土から床面にかけて出土している。

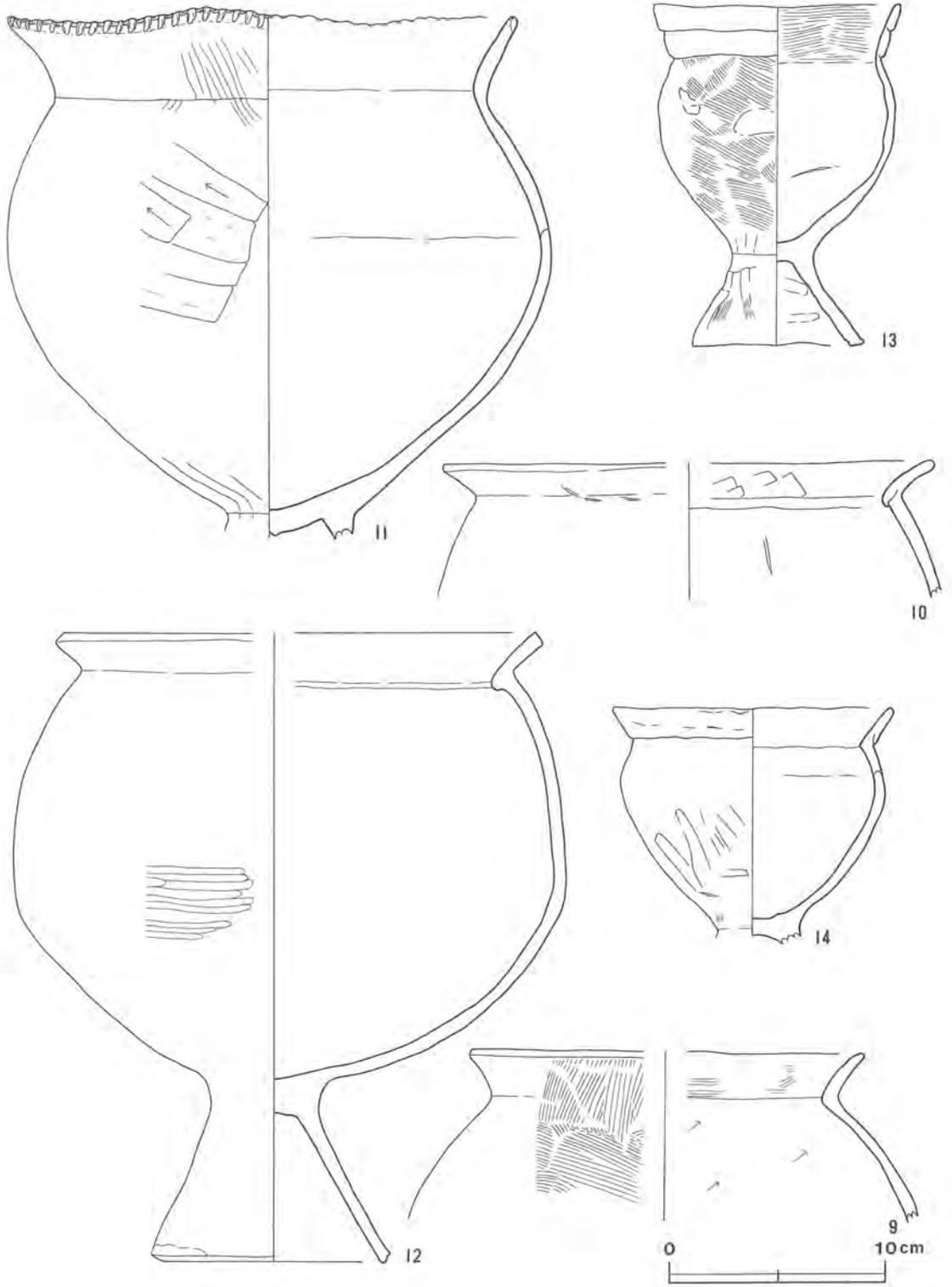
所見 本跡は、全体的に焼土が厚く堆積し、炭化材も壁際から多く出土していることから火災住居跡と思われる。遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

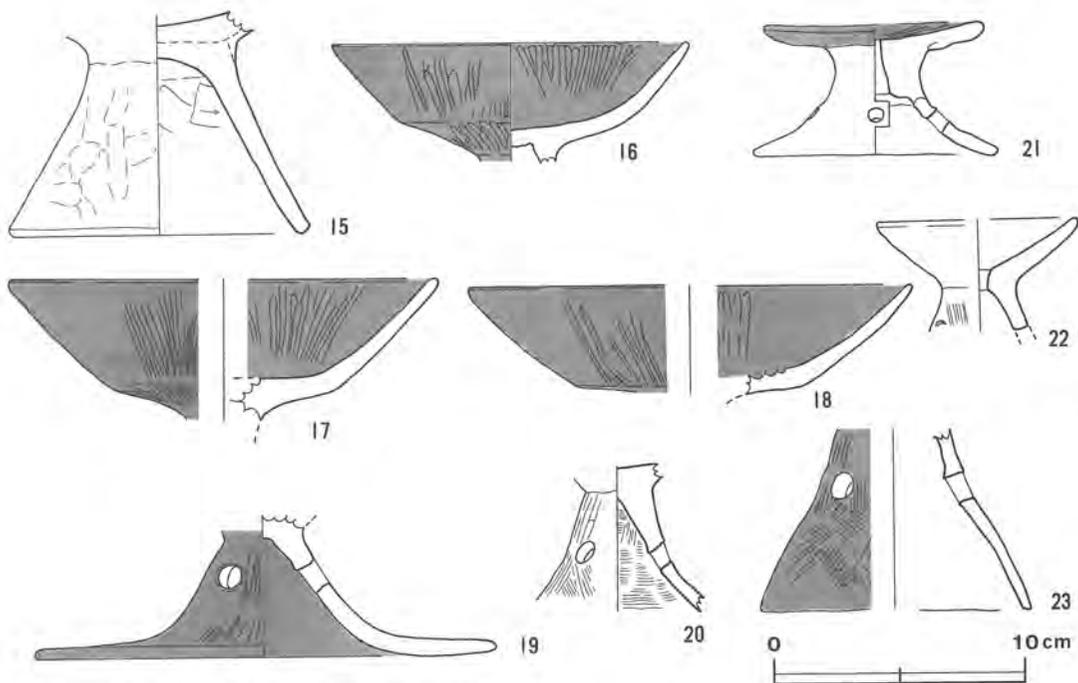
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	壺 土師器	A 22.7 B (35.8)	底部欠損。胴部は下膨れで、最大径を下位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。頸部に円形浮文貼り付け。口唇部にキザミ目文をもつ。複合口縁。	口縁部外面網目状捺糸文、内面へラ磨き。胴部外面へラ磨き、上位網目状捺糸文、内面へラナア。口縁部外面に円形の赤彩、胴部内面網目状捺糸文帯を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P280 PL61 80% 南コーナー付近床面
2	壺 土師器	A 8.5 B (10.0)	胴部下半から底部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面へラナア、内面ハケ目整形。胴部外面へラ磨き、内面剥離著しく不明。胴部内面を除き赤彩。	長石 にふい橙色 普通	P281 50% 北西壁中央部付近床面



第152图 第35号住居迹出土遗物实测图(1)



第153图 第35号住居跡出土遺物実測図(2)



第154図 第35号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 3	壺 土師器	A 8.7 B 9.5 C 3.5	胴部から口縁部の一部欠損。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目調整後ナデ。胴部内・外面ハケ目調整後ヘラナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P282 PL61 70% 外面煤付着 南東壁中央部付近床面
4	壺 土師器	A 10.7 B (8.5)	胴部中位以下欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。胴部外面ハケ目調整後ヘラナデ、内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P283 PL61 50% 北コーナー付近 覆土下層
5	壺 土師器	B (9.8) C [5.0]	胴部片。やや突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。	胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・バミス・スコリア 明褐色 普通	P284 20% 南東壁中央部付近 覆土下層
6	壺 土師器	A [8.1] B (4.8)	口縁部の破片。頭部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。内面まだらに剥離。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P293 10% 北コーナー付近 覆土下層
7	甕 土師器	A 21.0 B (12.2)	胴部中位以下欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頭部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや短く外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部ハケ目調整後ナデ。胴部外面ハケ目整形後ナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P271 PL61 30% 二次焼成 中央部覆土下層
8	甕 土師器	A [16.1] B (11.1)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。胴部外面ハケ目調整後ナデ、内面ナデ。	砂粒・バミス 黒褐色 普通	P272 20% 外面煤付着 中央部覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 9	甕 土師器	A [18.4] B (8.0)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。	砂粒・バミス 赤色 普通	P273 10% 西コーナー付近 覆土中層
10	甕 土師器	A [22.9] B (6.5)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ヘラナデ。胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P274 10% 外面煤付着 西コーナー付近 床面
11	台付甕 土師器	A 23.7 B (24.6)	台部欠損。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部にキザミ目をもつ。単口縁。	口縁部内・外面ヘラナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P275 PL61 70% 内・外面煤付着 西コーナー付近 覆土下層
12	台付甕 土師器	A [23.0] B 29.7 D 11.2 E 8.0	台部は「ハ」の字状を呈し、下方へ開く。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。頸部は内面に稜をもつ。	口縁部内・外面ヘラナデ。胴部外面丁寧なヘラナデ、内面ヘラナデ。台部内・外面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P276 PL61 60% 二次焼成 中央部覆土下層
13	台付甕 土師器	A 11.2 B 16.2 D 7.8 E 4.3	胴部一部欠損。台部は「ハ」の字状を呈し、下方へ開く。胴部はやや長胴で、最大径を上位にもつ。口縁部は2段の輪積み痕を残し、外反して立ち上がる。台部と胴部の接合を確認できる。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目整形。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。台部外面ヘラ削り後ハケ目調整、内面ナデ。内面まだらに剝離。	砂粒・雲母・スコリア にふい褐色 普通	P277 PL61 60% 外面煤付着 東コーナー際覆 土下層
14	台付甕 土師器	A 13.1 B (11.2)	台部欠損。胴部はやや長胴で、最大径を上位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ナデ。胴部内・外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	P278 PL61 60% 二次焼成 中央部床面
第154図 15	台付甕 土師器	B (9.0) D 12.0 E 7.0	台部片。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。	台部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石 橙色 普通	P279 20% 西コーナー付近 床面
16	高土師 土師器	A 14.3 B (4.8)	坏部片。坏部下位に緩やかな稜をもち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。内・外面赤彩。内面まだらに剝離。	長石 赤色 普通	P285 40% 東コーナー付近 覆土下層
17	高土師 土師器	A [17.2] B (5.7)	坏部片。坏部下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。内・外面赤彩。内・外面まだらに剝離。	石英・バミス 明赤褐色 普通	P286 30% 中央部東寄り覆 土下層
18	高土師 土師器	A [17.8] B (4.4)	坏部片。坏部下位に稜をもち、内彎気味に大きく立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。内・外面赤彩。内・外面まだらに剝離。	石英・バミス にふい赤褐色 普通	P287 15% 東コーナー付近 覆土下層

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第154図 19	高 坏 土 師 器	B (5.7) D [18.4]	脚部片。脚部はラッパ状に大きく開く。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面丁寧なへラナデ。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒・バミスにふい黄橙色普通	P288 PL61 30% 外面煤付着 南西壁中央部付近覆土下層
20	高 坏 土 師 器	B (6.0) E (5.0)	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ下がるものと思われる。	脚部外面ハケ目調整後へラナデ、内面ハケ目整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P289 30% 西コーナー付近覆土下層
21	器 台 土 師 器	A 8.4 B 5.4 D 9.6 E 4.0	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は緩やかな皿状を呈し、中央に単孔をもつ。脚部に3孔。	器受部外面ナデ、内面へラ磨き脚部外面へラナデ、内面ナデ。脚部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P290 PL61 70% 東コーナー付近床面
22	器 台 土 師 器	A [8.1] B (4.6)	器受部片。器受部はやや内彎して立ち上がり、中央部に単孔をもつ。	器受部内・外面丁寧なへラナデ。	長石・石英 浅黄橙色 普通	P291 50% 中央部東寄り床面
23	器 台 土 師 器	B (7.3) D [10.8]	脚部片。脚部は「ハ」の字状に下方へ開き、脚部下位でやや内彎する。	脚部外面ハケ目整形、内面ナデ。外面赤彩。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P292 10% 南東壁中央部付近覆土下層

第36号住居跡 (第155・156図)

位置 調査区の西部、B11f₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.44m、短軸6.40mの隅丸方形を呈している。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高は50～54cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅8～15cm、深さ5～8cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

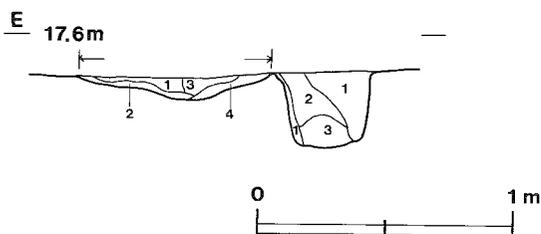
間仕切り溝 1条(a)検出されている。南東壁中央部から床中央部に向かってのびている。長さ0.55m、上幅12～17cm、深さ9～14cmで、断面形は、「U」字状を呈している。

床 ほぼ平坦で、主柱穴の内側は特に良く踏み固められ硬い。

ピット 7か所(P₁～P₇)検出されている。P₁は、径52cmの円形を呈し、深さ57cmで、P₂～P₄は、長径95～111cm、短径66～79cmの不整楕円形を呈し、深さ58～59cmで、P₁～P₄は、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅・P₇は、径62・48cmの円形を呈し、深さ32・26cmで、補助柱穴と思われる。P₆は、径37cmの円形を呈し、深さ38cmで、南東壁寄りに傾斜しており、出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

炉 中央部から北寄りに検出されている。平面形は、長径82cm、短径75cmの不整円形状を呈し、床を約8cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けてレンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 南東壁の中央から東コーナー寄りの壁際に検出されている。平面形は、長径103cm、短径75cmの不整楕円形を呈し、深さ34cmである。底面は平坦で、北西壁は二段で、緩やかに外傾して立ち上がっている。



貯蔵穴土層解説

- 1 橙 色 ロームブロック・炭化粒子少量。縮まり有り。
- 2 明 褐 色 ローム小ブロック・ロームブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。
- 3 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。
- 4 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。軟質。
- 5 明 褐 色 ローム小ブロック少量。縮まり有り。
- 6 褐 色 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量。縮まり有り。

炉土層解説

- 1 橙 色 焼土粒子・炭化粒子少量。縮まり有り。
- 2 橙 色 焼土ブロック・炭化粒子少量。縮まり有り。
- 3 明 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量。軟質。
- 4 明 赤 褐 色 焼土粒子少量。軟質。

P5土層解説

- 1 橙 色 焼土ブロック・焼土粒子少量。縮まり有り。
- 2 極 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・灰少量。軟質。
- 3 褐 色 ローム粒子・焼土・焼土粒子・炭化粒子・灰少量。軟質。

住居跡土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子多量、焼土・炭化物少量。軟質。
- 2 明 褐 色 ローム小ブロック多量、ロームブロック少量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 3 に ぶ い 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 4 明 褐 色 ローム小ブロック中量、ロームブロック・焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 5 に ぶ い 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 6 暗 褐 色 焼土・炭化物中量、ローム粒子・ローム小ブロック少量。縮まり有り。
- 7 褐 色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 8 褐 色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック少量、焼土・炭化物極少量。縮まり有り。
- 9 褐 色 ローム小ブロック中量、ロームブロック・炭化物・焼土少量。縮まり有り。
- 10 褐 色 ローム小ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量、焼土極少量。縮まり有り。
- 11 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化物中量、焼土少量。縮まり有り。
- 12 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化物少量、焼土少量。縮まり有り。
- 13 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・ロームブロック少量、炭化物極少量。縮まり有り。
- 14 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・ロームブロック中量、焼土・炭化物少量。縮まり有り。

第156図 第36号住居跡実測図(2)

覆土 ローム粒子，ローム小・中ブロックを含み，人為堆積と思われる。

遺物 床面から覆土上層にかけては，土師器片(壺4，高坏5，器台1)や土師器の細片(302点)が出土している。第157図3の壺は中央部の床面から逆位の状態で，第157図4の壺は貯蔵穴内の覆土から南東壁中央部付近の床面にかけて破片の状態で，第157図6の高坏の坏部は東コーナーの覆土中層から斜位の状態で，第157図5の高坏の坏部はP₅内の覆土下層から逆位の状態で，第157図7の高坏の脚部はP₁内の覆土上層からそれぞれ出土している。第157図10の装飾器台は中央部の床面から細片で出土している。第158図14～16の土玉は南東壁中央部付近から貯蔵穴内の覆土中層にかけて点在して3点出土している。

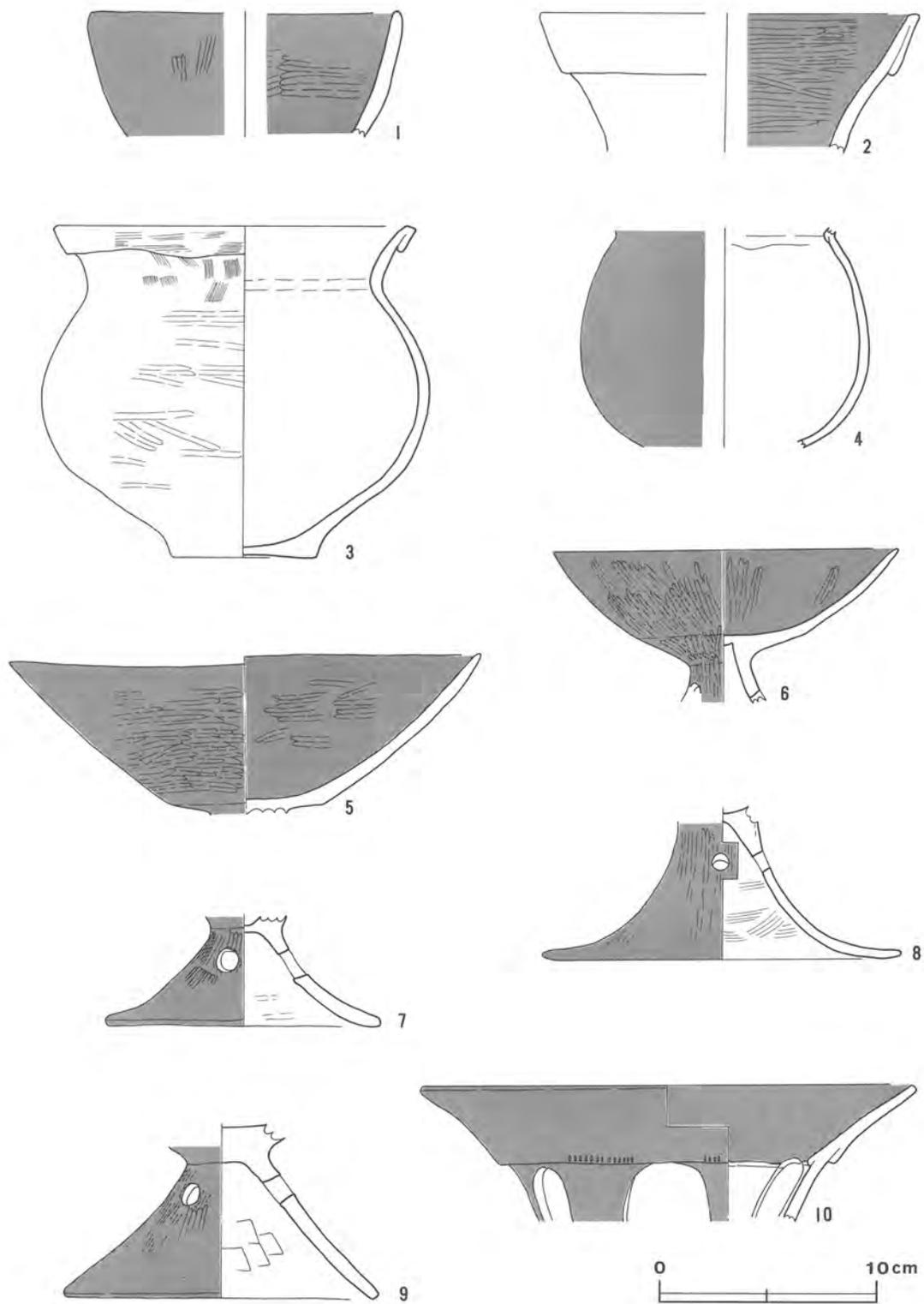
所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第158図11～13は第36号住居跡から出土した土師器片の拓影図である。11は複合口縁部で，下位に木目痕のキザミ目が施文され，頸部に細い網目状撚糸文が施文されている。12は壺の胴部で，胴部上位から付加状1種(付加2条)，撚糸文，付加状1種(付加2条)と羽状に施文され間を磨

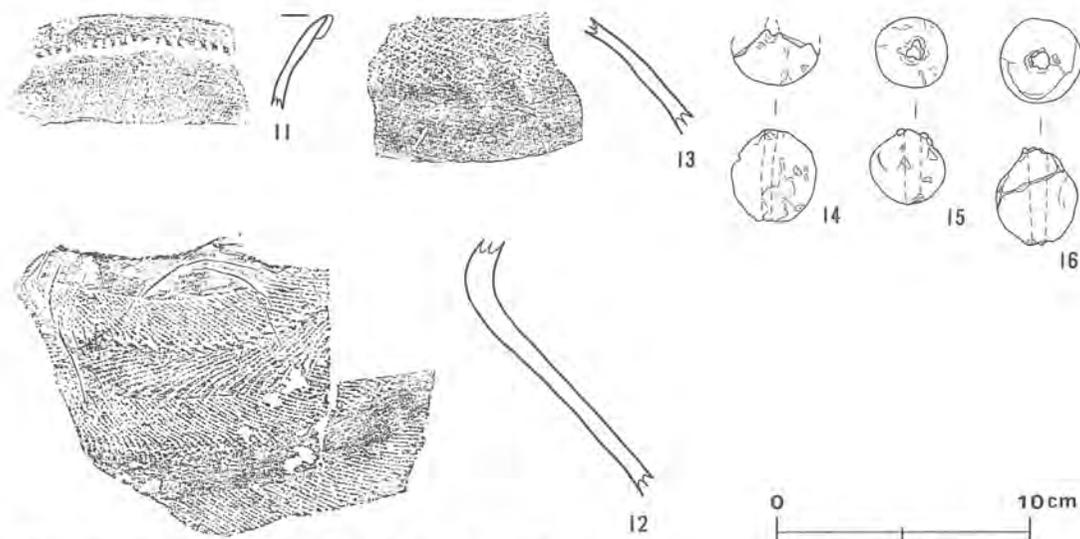
消している。無文帯は赤彩。13は胴部で、上位に網目状撚糸文が施され、以下へラ磨きで赤彩されている。

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	壺 土師器	A [14.6] B (5.9)	口縁部の破片。口縁部は頸部から内彎して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。外面まだらに剝離。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P 294 5% 南東壁中央部付近覆土下層
2	壺 土師器	A [17.6] B (6.5)	口縁部の破片。口縁部は頸部からやや内彎して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面ナデ、内面へラ磨き。内面赤彩。	砂粒・雲母・長石 外-にふい黄褐色 内-赤色 普通	P 295 5% 南東壁中央部付近覆土下層
3	壺 土師器	A 16.8 B 15.6 C 6.8	突出した平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部ハケ目調整後ナデ、内面ナデ。胴部外面へラ磨き、内面剝離が著しく不明。	砂粒・長石 橙色 普通	P 296 PL63 90% 外面煤付着 南東壁中央付近床面
4	壺 土師器	B (10.3)	胴部片。胴部はやや下膨れで、最大径を下位にもつ。	胴部内・外面丁寧なへラナデ。外面赤彩。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P 297 20% 二次焼成 南東壁中央付近床面
5	高 土師器 坏	A 21.6 B (7.4)	坏部片。坏部下位に稜をもち、やや内彎気味に大きく立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。内面まだらに剝離。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 298 50% P ₁ 内覆土下層
6	高 土師器 坏	A 15.9 B (7.3)	坏部片。坏部下位に緩やかな稜をもち、内彎気味に立ち上がる。脚部上位に2孔確認できる。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。内面まだらに剝離。	砂粒・長石 赤色 普通	P 299 60% 東コーナー付近覆土上層
7	高 土師器 坏	D 12.8 E (5.3)	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。脚部と坏部の接合痕有り。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面へラナデ。外面赤彩。	砂粒・雲母・石英 赤褐色 普通	P 300 PL63 40% P ₁ 内覆土上層
8	高 土師器 坏	B (7.2) D 16.7 E 6.4	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ大きく開く。4孔。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目調整後ナデ。内・外面まだらに剝離。外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P 301 PL63 40% 北コーナー付近覆土下層
9	高 土師器 坏	B (8.2) D [14.6] E 6.8	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。3孔。	脚部外面へラ磨き、内面へラナデ。外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 普通	P 302 PL63 30% 外面煤付着 西コーナー付近床面
10	装飾器台 土師器	A [23.0] B (6.3)	器受部上半の破片。器受部は内面に稜をもち、外反して立ち上がり、楕円形の窓をもつ。口縁部は複合口縁で、下位にキザミ目をもつ。	器受部内・外面丁寧なへラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P 303 PL63 30% 中央部南西寄り床面



第157图 第36号住居跡出土遺物実測図(1)



第158図 第36号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第158図14	土玉	3.8	3.4	—	0.5	(17.7)	45	覆土中層	DP204
15	土玉	3.1	3.0	—	0.7	19.0	100	貯藏穴内	DP205
16	土玉	4.0	3.2	—	0.8	33.6	100	貯藏穴内	DP206

表7 北前遺跡古墳時代住居跡一覽表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m) [径]	壁高 (cm)						
1	A14a	[N-20°-W]	[方形]	5.55 × (2.84)	25~30	平坦	5	—	自然	土師器片204点, 土玉10点。	壁溝。第1号土坑より新しい。
2	A15gr	N-74°-W	隅丸方形	2.85 × 2.65	7~13	平坦	4	1	自然	土師器片233点, 土玉1点, 不明土製品2点。	
3	A15h	N-20°-W	隅丸方形	4.52 × 4.13	12~26	平坦	5	1	自然	土師器片261点, 土玉23点, 管玉1点。	間仕切り溝。
4	A15i	N-23°-W	方形	7.81 × 7.56	48~50	平坦	9	1	自然	土師器片789点, 土玉26点, 砥石1点, 浮石1点。	壁溝。間仕切り溝。貯藏穴。火災住居。
5A	A15eo	N-69°-E	[長方形]	[2.57] × 2.50	32	凹凸	2	1	人為	土師器片43点, 土玉6点。	第5-B号住居跡より古い。
5B	A15f	N-12°-W	長方形	5.92 × 5.25	40~55	凹凸	5	1	自然	土師器片207点。	壁溝。貯藏穴。第5-A号住居跡より新しい。
6	A15j	N-28°-W	方形	3.76 × 3.61	10~28	凹凸	7	1	自然	土師器片312点, 土玉3点。	火災住居。
7	A15r	N-44°-W	方形	5.47 × 5.35	30~35	平坦	5	1	自然	土師器片491点, 土玉19点。	壁溝。間仕切り溝。貯藏穴。火災住居。
8	B15c	N-17°-W	[方形]	7.44 × (4.21)	46~60	平坦	12	1	自然	土師器片391点, 土玉22点, 砥石1点。	壁溝。間仕切り溝。貯藏穴。火災住居。
9	B15b	N-27°-W	隅丸長方形	3.53 × 2.88	8~13	平坦	—	1	自然	土師器片85点。	
10	B15b	N-24°-W	方形	3.30 × 3.20	12~14	平坦	—	—	人為	土師器片32点。	
11	B15d	N-26°-W	長方形	5.10 × 4.18	23~31	平坦	5	3	自然	土師器片117点, 土玉3点。	壁溝。間仕切り溝(2)。火災住居
12	B15e	N-12°-W	隅丸長方形	2.60 × 2.31	12~20	平坦	—	—	人為	土師器片43点。	
13	B15g	N-33°-W	長方形	5.51 × 4.97	41~44	平坦	7	1	自然	土師器片283点, 土玉7点。	壁溝。間仕切り溝(2)。貯藏穴。火災住居。
14	B15h	N-23°-W	隅丸方形	4.44 × 4.30	43~52	平坦	4	1	自然	土師器片109点, 土玉7点。	壁溝。間仕切り溝。
15	B15e	N-9°-W	隅丸方形	3.45 × 3.24	22~26	平坦	4	—	自然	土師器片65点。	壁溝。火災住居。
16	C15d	N-35°-W	方形	5.78 × 5.44	35~47	平坦	8	1	人為	土師器片176点, 土玉55点。	壁溝。間仕切り溝(2)。貯藏穴。火災住居。

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規 模			床面	柱穴数	炉	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m) (径)	短軸(m) (径)	壁 高 (cm)						
17	C16e	N-57°-E	[隅丸方形]	3.94 × (3.85)	18~30	平坦	1	1	人為	土師器片136点、土玉1点、刀子1点。	壁溝。	
18	A14i	[N-21°-W]	[隅丸方形]	5.89 × (2.02)	13~14	平坦	2	-	人為	土師器片98点、砥石1点。	壁溝。火災住居。	
19	B14e	N-23°-W	隅丸方形	3.66 × 3.56	28~31	平坦	2	1	自然	土師器片42点、土玉5点。	壁溝。	
20	B14g	N-16°-W	隅丸方形	3.04 × 2.85	20~24	平坦	3	1	自然	土師器片51点、土玉1点、砥石1点。		
21	A14e	N-28°-W	長 方 形	5.40 × 3.76	13~24	平坦	8	1	自然	土師器片212点、土玉5点。	壁溝。間仕切り溝。貯蔵穴。火災住居。	
22	A13g	N-24°-W	隅丸方形	4.08 × 4.00	15~26	平坦	6	1	自然	土師器片44点。	壁溝。	
23	B13d	N-39°-W	隅丸方形	4.69 × 4.43	54~71	平坦	6	1	自然	土師器片77点、浮石1点。	壁溝。間仕切り溝。貯蔵穴(2)。火災住居。	
24	B13b	N-48°-W	方 形	3.50 × 3.33	47~54	平坦	8	1	人為	土師器片5点。	壁溝。火災住居。第25号住居跡より新しい。	
27	A15h	N- 6°-W	隅丸方形	3.35 × 3.30	26~32	平坦	1	1	人為	土師器片135点、不明土製品1点。	壁溝。貯蔵穴。火災住居。	
28	A14i	N- 9°-W	[隅丸長方形]	[2.25] × [2.00]	-	凹凸	-	1	自然	土師器片232点、土玉2点。	火災住居。	
29	A12j	N- 5°-W	隅丸方形	3.73 × 3.69	45~60	凹凸	20	1	人為	土師器片595点。	貯蔵穴。火災住居。	
31	A12j	N-45°-W	隅丸方形	3.00 × 2.85	12~25	平坦	4	1	人為	土師器片33点。	壁溝。貯蔵穴。	
32	B11a	N-29°-W	隅丸方形	3.10 × 3.00	26~34	平坦	5	1	人為	土師器片67点。	壁溝。間仕切り溝。貯蔵穴。	
33	A12i	N-70°-W	隅丸方形	6.45 × 6.35	24~34	平坦	13	2	自然	土師器片39点、土玉1点、砥石1点。	壁溝。間仕切り溝。貯蔵穴。火災住居。第34号住居跡より新しい。	
35	B11d	N-63°-W	隅丸方形	4.46 × 4.40	46~54	凹凸	4	1	自然	土師器片362点。	壁溝。貯蔵穴。火災住居。	
36	B11f	N-33°-W	隅丸方形	6.44 × 6.40	50~54	平坦	7	1	人為	土師器片312点、土玉3点。	壁溝。間仕切り溝。貯蔵穴。	

(2) 土坑

第2号土坑 (第159図)

位置 調査区の北東部、A15i₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 径1.85mのほぼ円形を呈し、深さ28cmである。

長径方向 N-58°-E

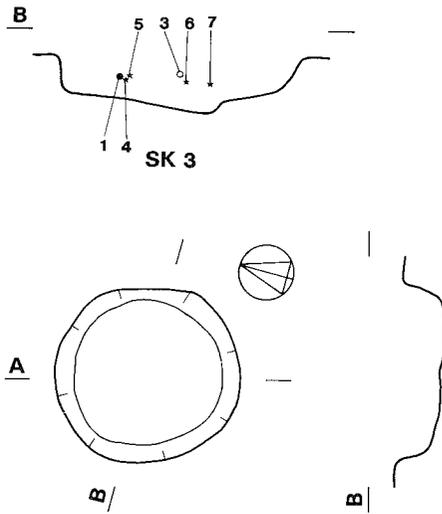
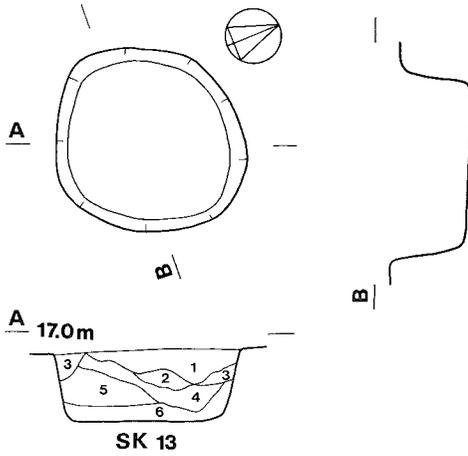
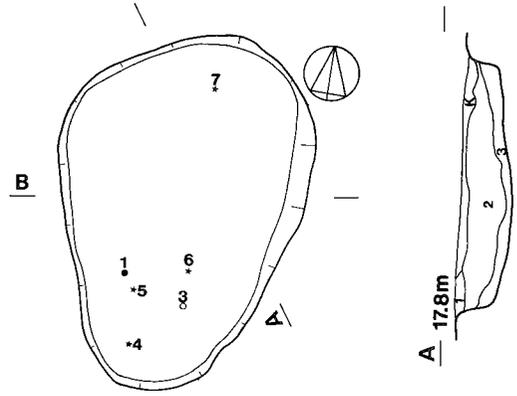
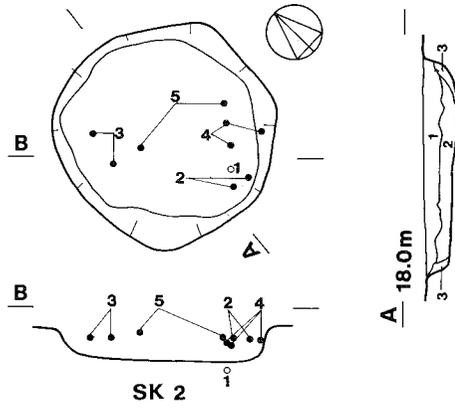
壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 ローム小・中ブロックや焼土粒子、炭化物を含み、人為堆積と思われる。

遺物 覆土中層から上層にかけては、土師器片(壺1, 甕1, 台付甕3)や土師器の細片(53点)が出土している。第160図3の台付甕の台部は北西壁付近の覆土中層から、第160図5の台付甕の台部は中央部の覆土上層から、第160図1の壺の口縁部片は床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物の特徴から古墳時代前期の土坑と考えられる。



第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 焼土・炭化物多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック少量。縮まり有り。
- 2 褐色 ローム小・中ブロック中量，焼土・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 炭化物極少量。縮まり有り。

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土・炭化物中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック・木炭片極少量。縮まり有り。
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土・炭化物少量。縮まり有り。
- 3 褐色 炭化物少量，ローム粒子極少量。縮まり有り。
- 4 暗褐色 焼土・焼土小ブロック多量，炭化物中量，ローム粒子少量。縮まり有り。
- 5 褐色 焼土・焼土小ブロック多量，炭化物中量，ロームブロック・ローム粒子少量。縮まり有り。
- 6 褐色 ロームブロック中量，焼土・炭化物少量。縮まり有り。

第3号土坑土層解説

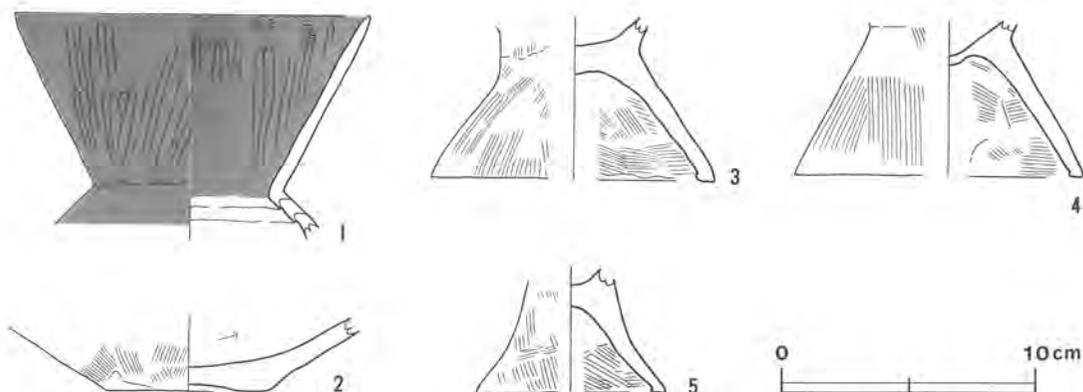
- 1 褐色 ローム小・中ブロック・焼土・炭化物少量。硬質。
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・炭化材少量，ロームブロック極少量。縮まり有り。
- 3 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物極少量。縮まり有り。

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 木炭片多量，ロームブロック・焼土少量。縮まり有り。
- 2 黒褐色 炭化粒子多量，ロームブロック中量。縮まり有り。
- 3 褐色 ロームブロック・焼土・炭化物少量。硬質。



第159図 第2・3・13・19号土坑実測図



第160図 第2号土坑出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 1	壺 土師器	A 14.0 B (9.0)	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面へラ磨き。輪積み痕有り。内・外面まだらに剝離。内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P308 PL65 20% 床面
2	甕 土師器	B (3.0) C 6.2	底部片。やや上げ底。底部から外傾して立ち上がる。	胴部外面ハケ目整形。内面へラ削り。	砂粒・スコリア 黒色 普通	P304 5% 南壁付近覆土中層
3	台付甕 土師器	B (6.5) D [11.1] E 5.3	台部片。台部は「へ」の字状に下方へ開き、下位はやや内彎する。台部底面に粘土紐貼付を確認できる。	台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P305 10% 北西壁付近覆土中層
4	台付甕 土師器	B (6.2) D [11.3] E 5.6	台部片。台部は「ハ」の字状に下方へ開く。	台部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・石英 にふい黄褐色 普通	P306 10% 東壁付近覆土中層
5	台付甕 土師器	B (5.0) D [7.6] E (4.5)	台部片。台部はラッパ状に下方へ開く。台部底面に粘土紐貼付を確認できる。	台部内・外面ハケ目整形。	砂粒 にふい褐色 普通	P307 5% 内・外面煤付着 中央部覆土上層

第3号土坑 (第159図)

位置 調査区の北東部、A15f₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.95m、短径2.04mの楕円形を呈し、深さ45cmである。

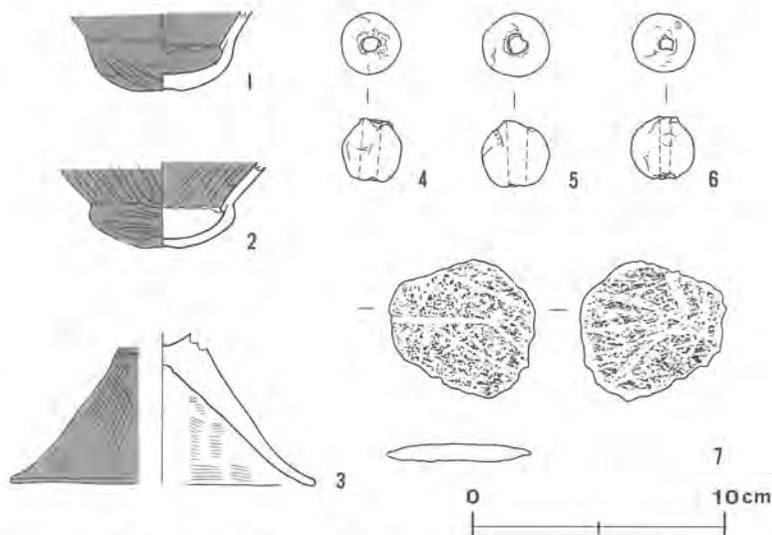
長径方向 N-13°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや凹凸。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけては、土師器片(埴2、高坏1)や土師器の細片(231点)が出土



第161図 第3号土坑出土遺物実測図

している。その他、土製品は覆土下層から出土している。第161図3の高坏は南壁付近の覆土上層から、第161図1の埴は南壁付近の覆土下層から出土している。土玉は南壁付近の覆土下層から2点出土している。また、第161図7の不明土製品は北壁付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物の特徴から古墳時代前期の土坑と考えられる。

第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 1	埴 土師器	B (3.1) C 1.6	体部片。やや上げ底。体部は扁平な半球形を呈し、口縁部内面に稜をもつ。	体部外面へら磨き、内面へラナデ。内・外面赤彩。	砂粒 暗赤褐色 普通	P309 40% 南壁付近覆土下層
2	埴 土師器	B (3.4) C 1.3	体部片。やや上げ底。体部は扁平な半球形を呈し、上位に最大径をもつ。口縁部内面に稜をもつ。	体部外面へら磨き、内面ナデ。体部内面除き赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P310 30% 北壁付近覆土
3	高坏 土師器	B (6.1) D [12.0]	脚部片。脚部はラッパ状に下方へ開く。	脚部外面へら磨き、内面ハケ目整形。外面赤彩。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P311 30% 南壁付近覆土上層

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第161図4	土玉	2.6	2.3	—	0.8	11.8	100	覆土下層	DP207
5	土玉	2.7	2.7	—	0.8	15.0	100	覆土下層	DP208
6	土玉	2.6	2.5	—	0.5	13.3	100	覆土下層	DP209
7	不明土製品	5.5	5.8	0.7	—	20.6	100	覆土下層	DP210

第13号土坑（第159図）

位置 調査区のほぼ中央部，B14c₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.68 m，短径1.48 mの楕円形を呈し，深さ63 cmである。

長径方向 N-69°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけては，土師器の細片（26点）が出土している。赤彩された土師器の細片も出土している。

所見 本跡は，出土遺物の特徴から古墳時代前期の土坑と考えられる。

第19号土坑（第159図）

位置 調査区のほぼ中央部，B13d₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.50 m，短径1.45 mのほぼ円形を呈し，深さ35 cmである。

長径方向 N-74°-W

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけて土師器の細片（6点）が出土している。流れ込みの縄文式土器片が1点出土している。

所見 本跡は，出土遺物の特徴から古墳時代前期の土坑と考えられる。

表 8 北前遺跡古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向 〔長軸〕	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径(軸) (m)	短径(軸) (m)	深さ(cm)						
2	A15 ₆	N-58°-E	円 形	1.85	1.75	28	外傾	平坦	人為	土師器片58点。	古墳時代前期。	第159図
3	A15 ₄	N-13°-E	楕 円 形	2.95	2.04	45	外傾	凹凸	自然	土師器片234点，土玉3点，不明土製品1点。	古墳時代前期。	〃
13	B14 _c	N-69°-E	楕 円 形	1.68	1.48	63	垂直	平坦	自然	土師器片26点。	古墳時代前期。	〃
19	B13 _d	N-74°-W	円 形	1.50	1.45	35	外傾	平坦	自然	土師器片6点。	古墳時代前期。	〃

3 その他の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

当調査区からは、調査区の南部を中心に掘立柱建物跡が3棟検出されている。しかし、これらの掘立柱建物跡は、遺物がほとんどなく時期等については不明である。

第1号掘立柱建物跡（第162図）

位置 調査区の南部，D13j₃区を中心に確認されている。

規模 柱穴数は21か所（P₁～P₂₁）であり、長方形に検出されている。南側に幅1.50mの庇をもっている東西5間（約9.28m）、南北2間（約3.00m）の建物である。柱間寸法は、桁行1.75～1.92m、梁行2.95～3.24mである。柱穴の掘方は、平面形が長径25～65cm、短径18～45cmの楕円形を呈し、深さ18～60cmである。

長軸方向 N-79°-W

覆土 暗褐色土の自然堆積である。

遺物 西部端，P₉とP₁₀の間に第170図7の砥石が出土している。

所見 本跡は、出土遺物等がほとんど検出されず、構築時期は不明である。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第170図7	砥石	8.1	3.8	3.6	84.6	凝灰岩	床 面	Q30

第2号掘立柱建物跡（第163図）

位置 調査区の南部，D13h₄区を中心に確認されている。

重複関係 第49号土坑と重複している。

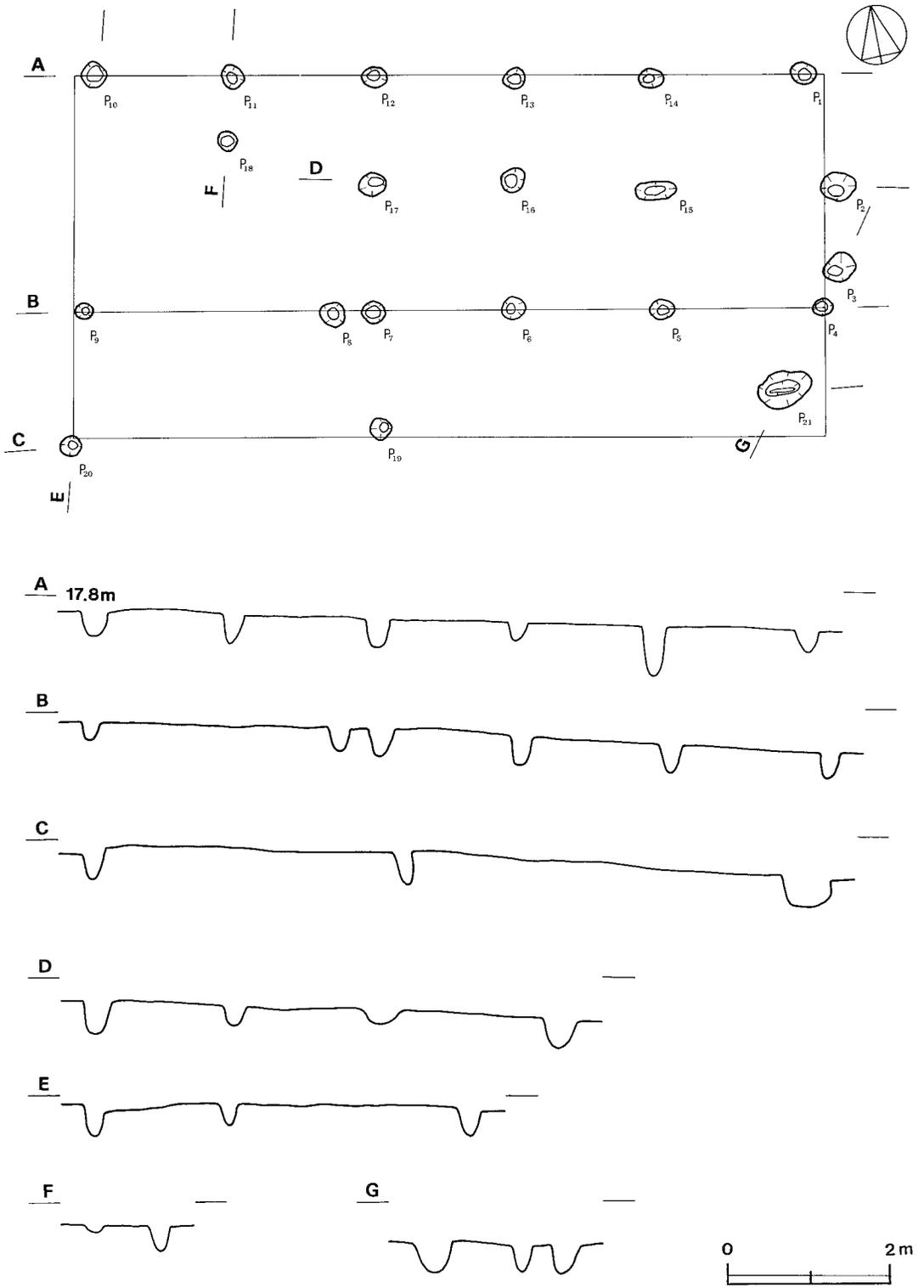
規模 柱穴数は4か所（P₁～P₄）であり、長方形に検出されている。東西1間（約2.52m）、南北1間（約1.45m）の建物である。柱間寸法は桁行2.41～2.45m、梁行1.28～1.46mで、柱穴の掘方は、平面形が長径18～39cm、短径16～28cmの不整楕円形を呈し、深さ6～33cmである。

長軸方向 N-76°-W

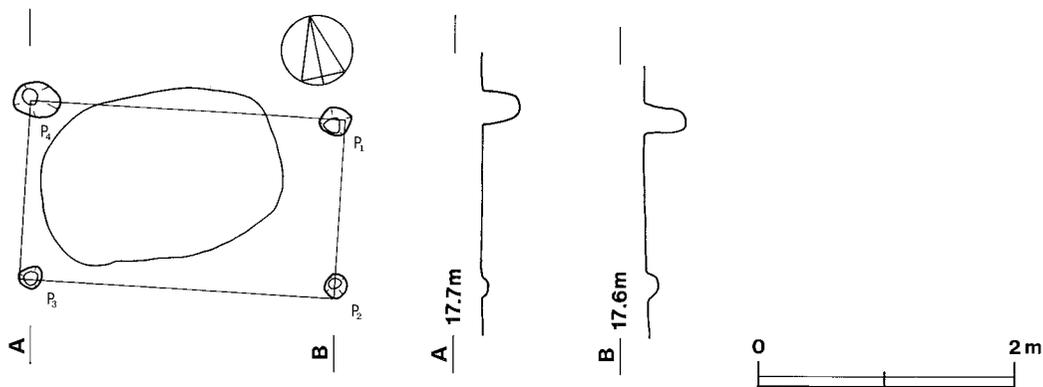
覆土 暗褐色土の自然堆積である。

遺物 P₂の底面から石が出土している。

所見 本跡は、出土遺物がなく構築時期は不明であるが、第49号土坑の上屋になる建物と推定される。また、P₂内の石は、柱を支える礎石と思われる。



第162图 第1号掘立柱建物跡実測图



第163図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第164図)

位置 調査区の南部, D12f₈区を中心に確認されている。

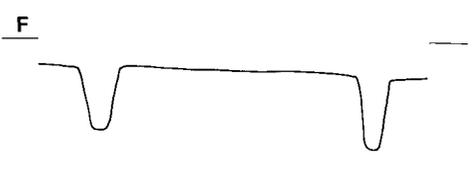
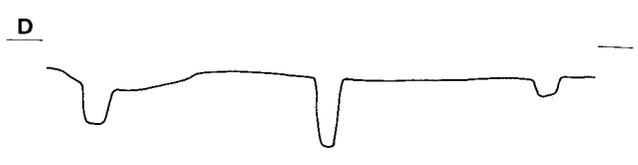
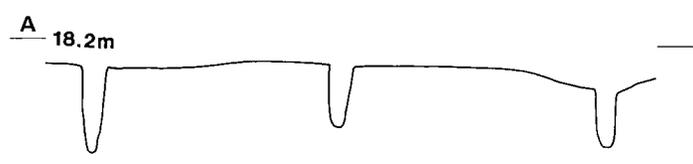
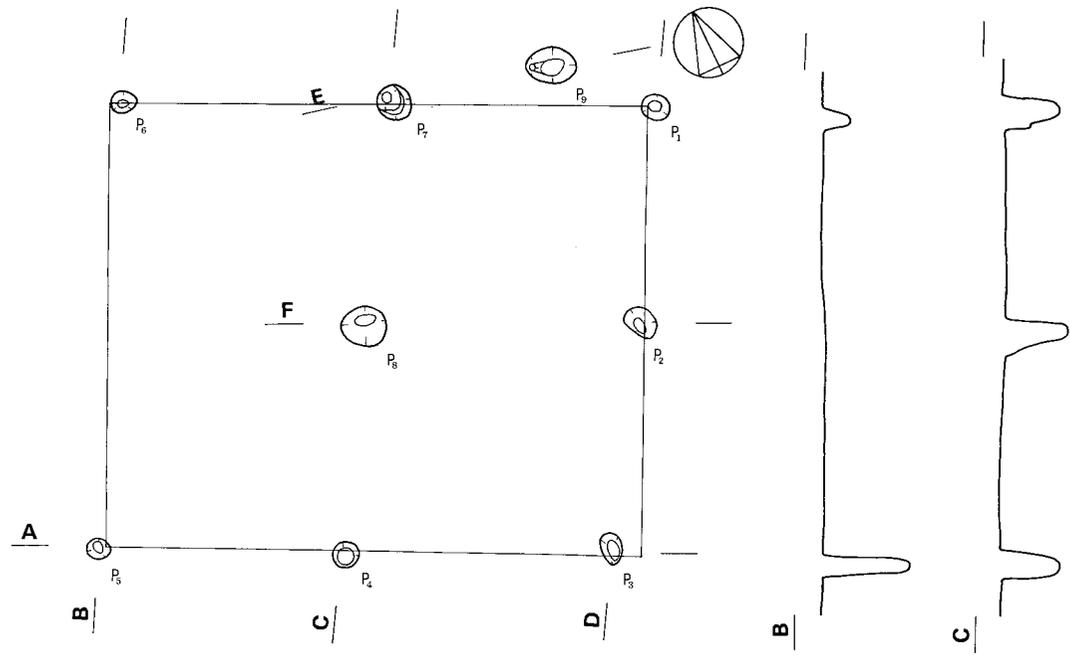
規模 柱穴数は9か所 (P₁~P₉) であり, 長方形に検出されている。東西2間(約4.25m), 南北2間(約3.60m)の建物である。柱間寸法は, 桁行1.96~2.10m, 梁行1.76~1.82mで, 柱穴の掘方は, 平面形が長径22~35cm, 短径17~33cmの楕円形を呈し, 深さ14~68cmである。P₉は, 平面形が長径44cm, 短径29cmの楕円形を呈し, 深さ約20cmで, 性格不明である。

長軸方向 N-73°-W

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物はない。

所見 本跡は, 出土遺物等が検出されず, 構築時期は不明である。



第164图 第3号掘立柱建物跡実測図

(2) 土坑

当調査区から検出された最終的な土坑数は80基である。ここでは、縄文時代・古墳時代の土坑6基を除いた74基について、調査結果を一覧表にまとめて掲載する。なお、土坑番号は、調査当初に付した番号である。

第9号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	壺 土師器	B (6.0)	口縁部の破片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は内面に緩やかな稜をもち外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒にふい黄橙色普通	P313 10% 覆土
2	甕 土師器	A [19.4] B (18.1)	胴部下位から口縁部にかけての破片。胴部は球形を呈し、最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。単口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形後ナデ。胴部外面ハケ目整形、内面ナデ。口縁部内・外面赤彩。	砂粒・雲母にふい赤褐色普通	P312 20% 外面煤付着 北壁付近覆土上層

第86号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第170図3	土器片 錘	3.6	4.4	1.2	—	(17.8)	60	覆土上層	DP211

第6号土坑出土遺物観察表

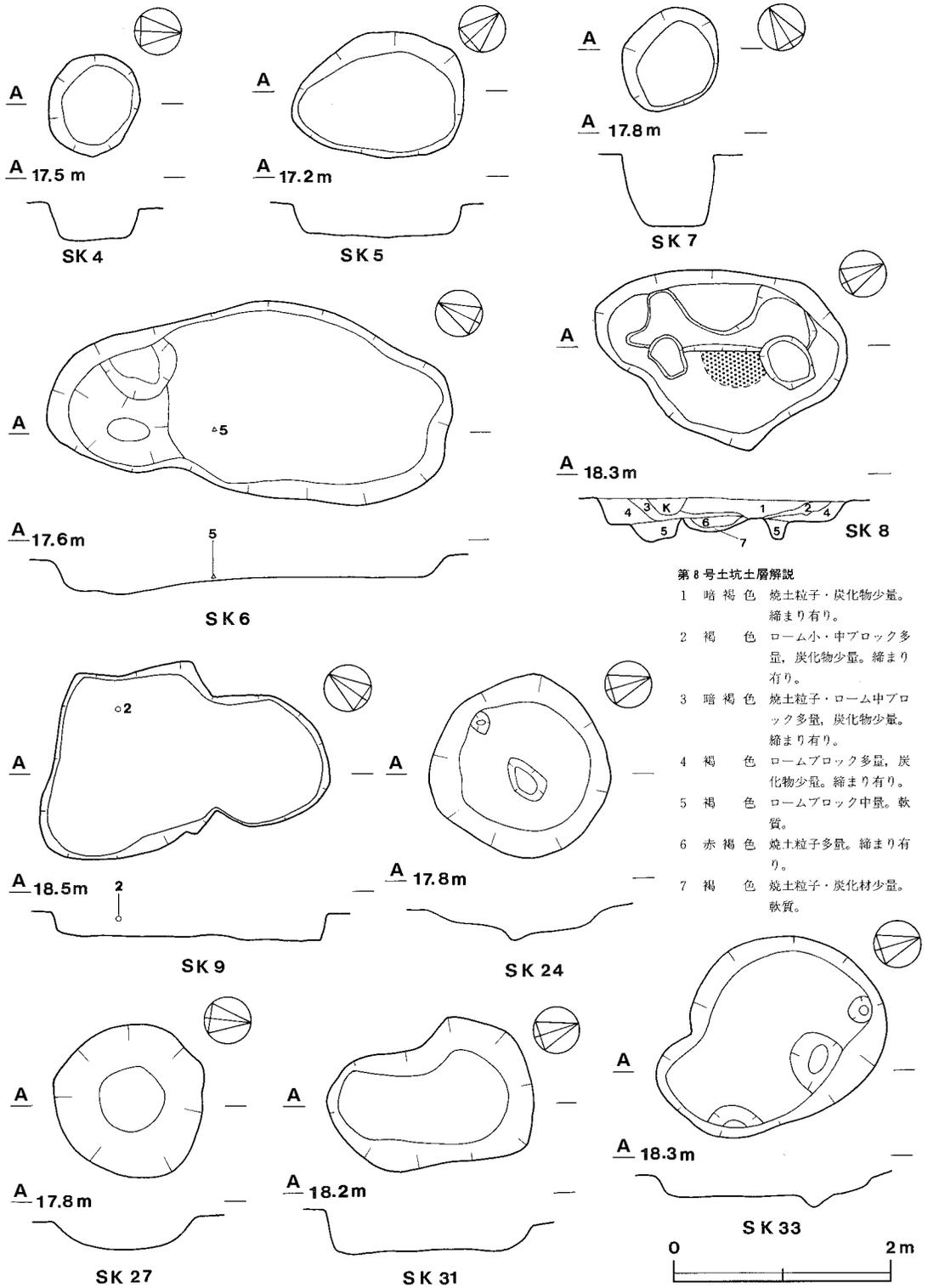
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第170図5	石皿	(17.6)	(11.5)	4.9	(913.0)	安山岩	覆土上層	Q31

第37号土坑出土遺物観察表

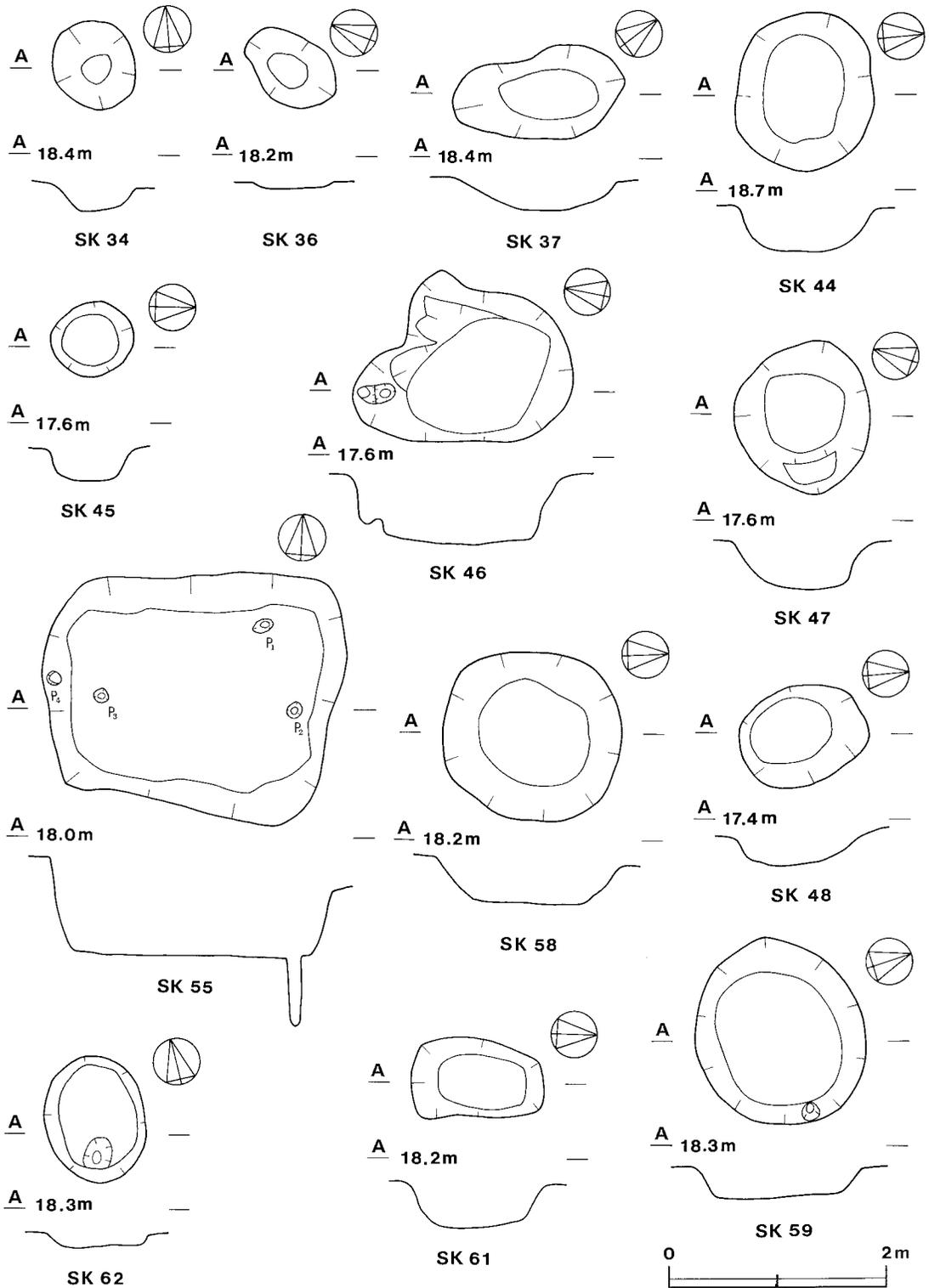
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第170図4	石皿	(7.5)	(7.1)	8.0	(475.5)	安山岩	覆土上層	Q33

第74号土坑出土遺物観察表

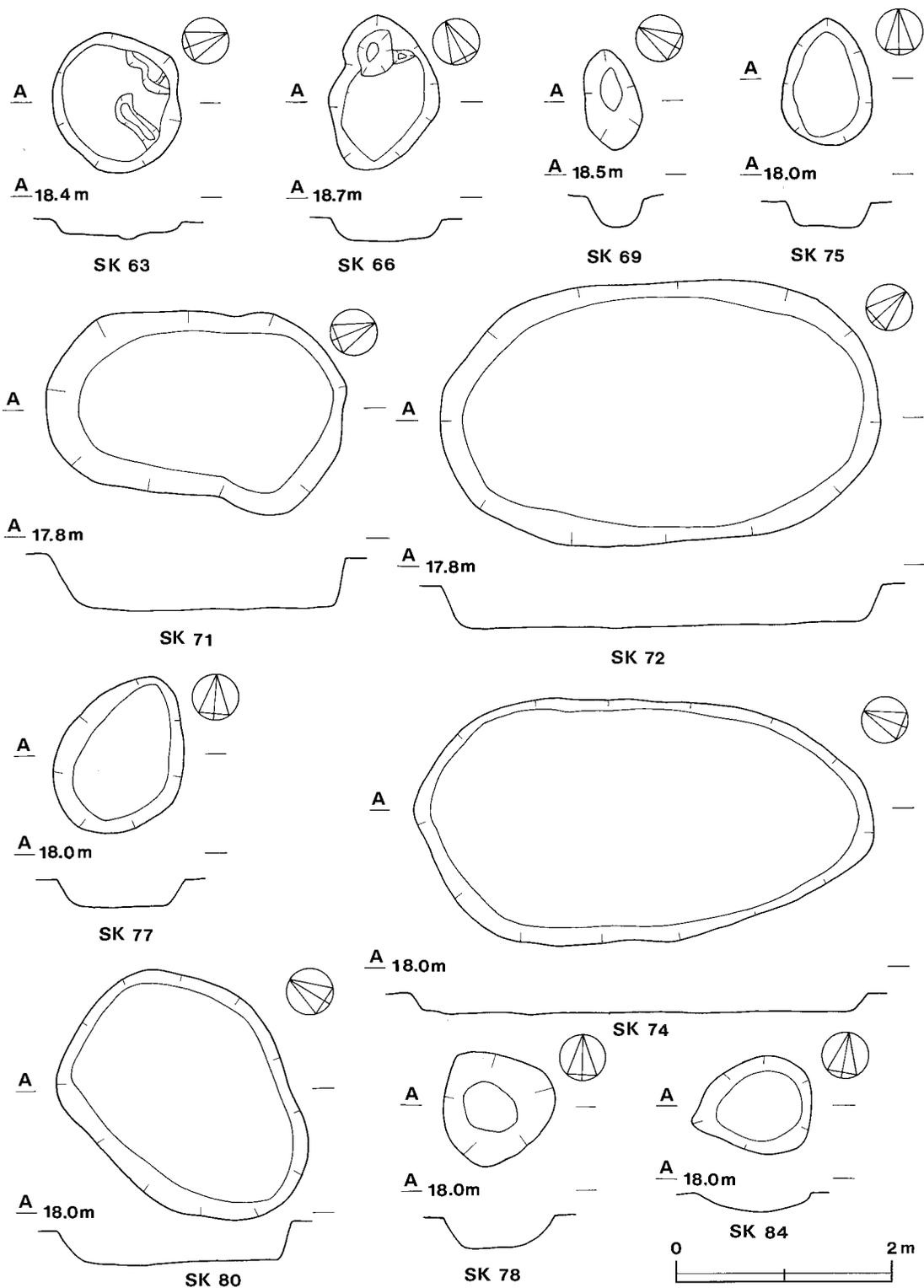
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第170図6	磨石	(6.1)	6.6	3.8	(194.2)	安山岩	覆土上層	Q35



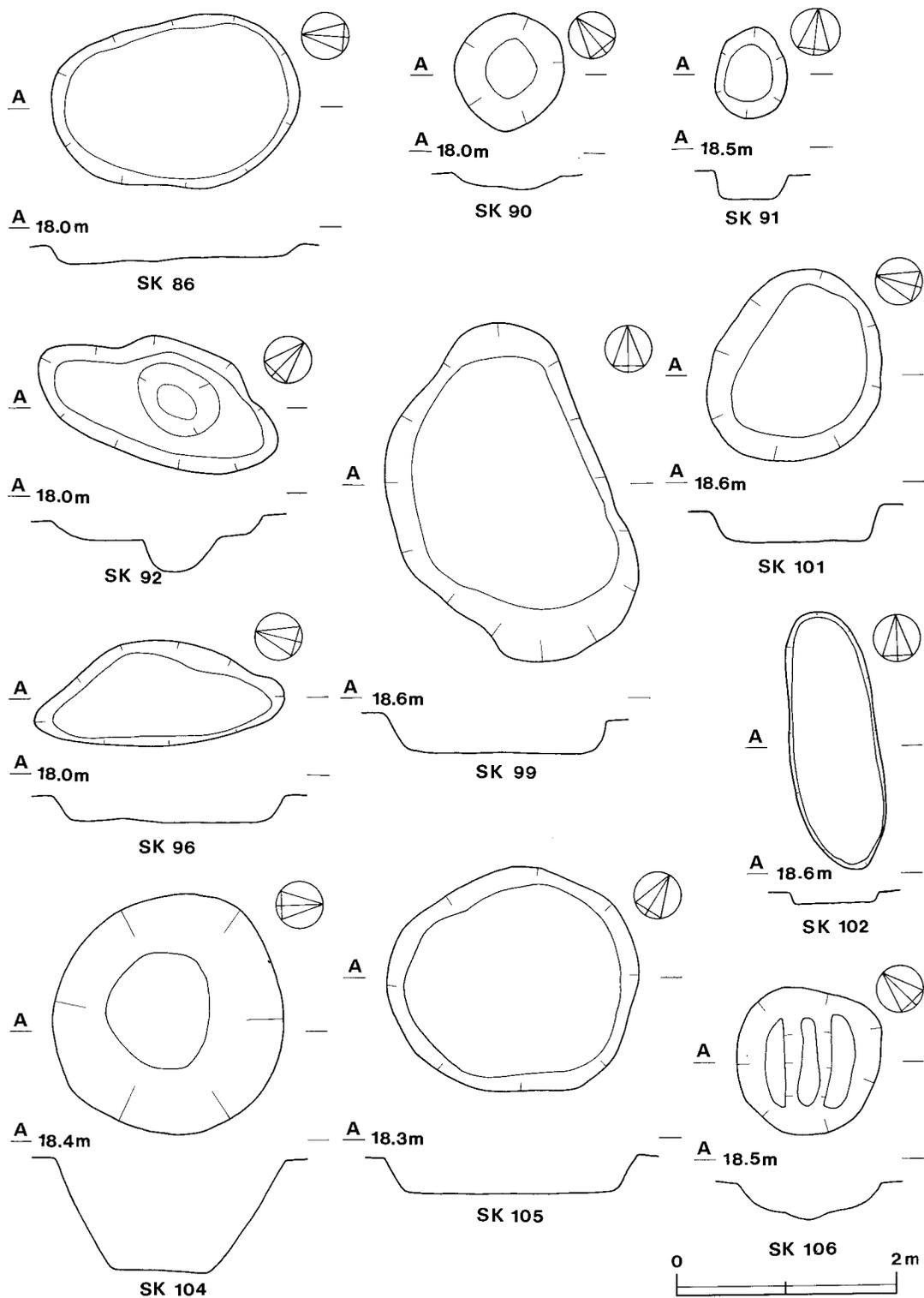
第165図 第4~9・24・27・31・33号土坑実測図



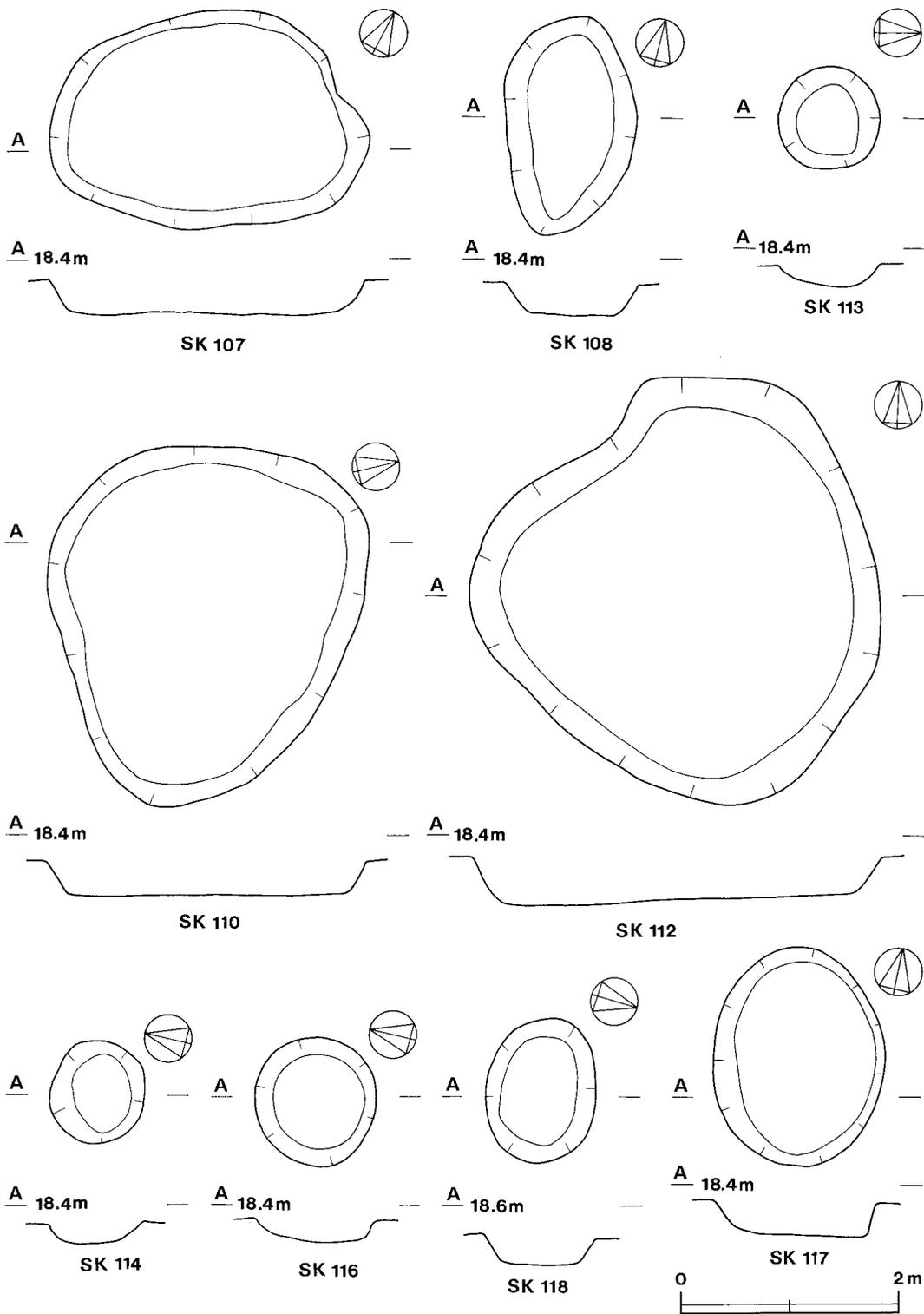
第166图 第34·36·37·44~48·55·58·59·61·62号土坑夷测图



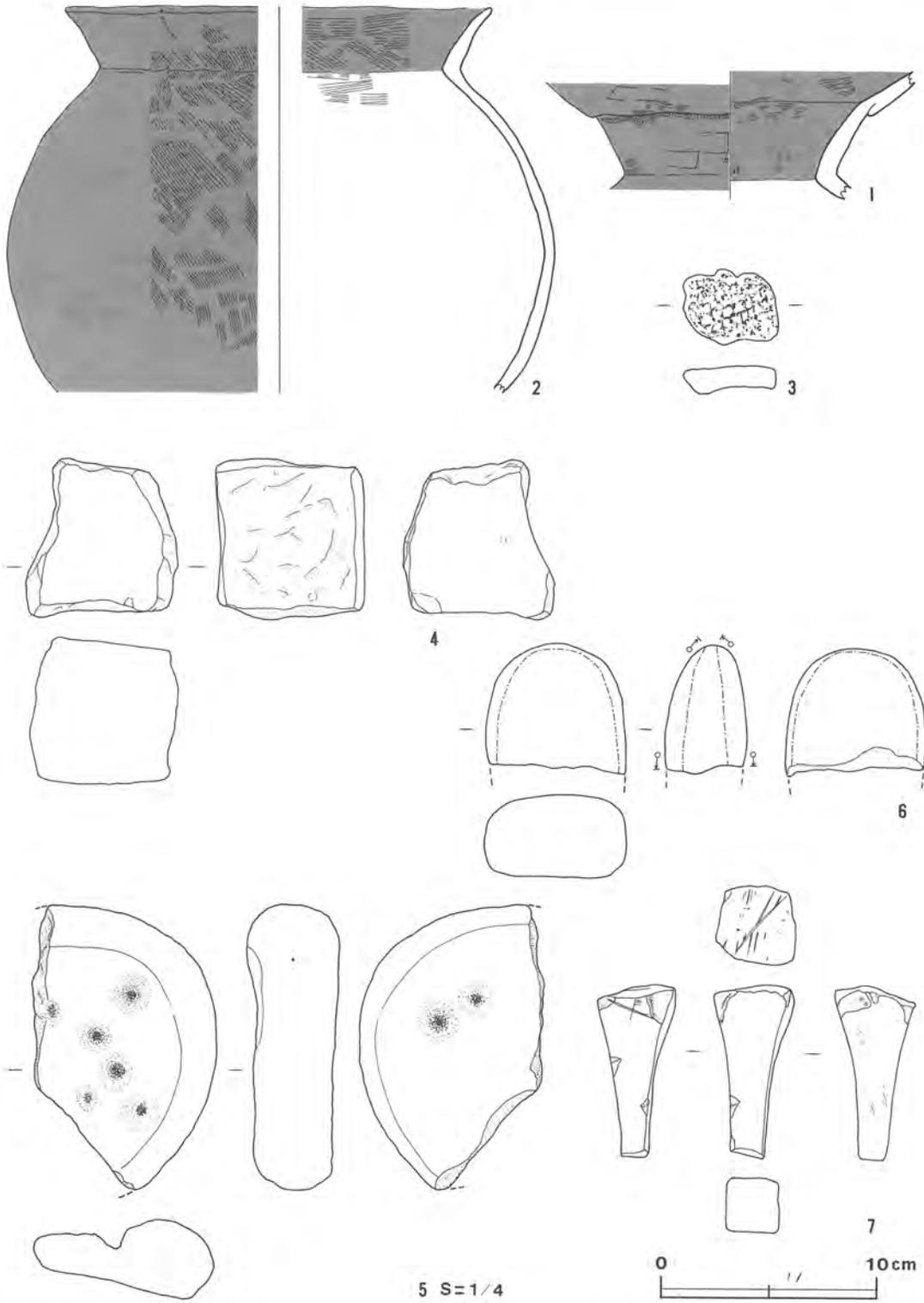
第167图 第63·66·69·71·72·74·75·77·78·80·84号土坑实测图



第168图 第86·90~92·96·99·101·102·104~106号土坑实测图



第169图 第107·108·110·112~114·116~118号土坑实测图



第170图 第6·9·37·74·86号土坑·第1号 掘立柱建物跡出土遺物実測図

表9 北前遺跡その他土坑一覧表

番号	位置	長径方向 (長軸)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径(軸) (m)	短径(軸) (m)	深さ(cm)						
4	A16g ₁	N-82°-W	楕円形	0.98	0.86	35	外傾	平坦	人為			第165図
5	A16f ₁	N-33°-E	楕円形	1.60	1.20	35	外傾	皿状	人為	縄文式土器片2点。		"
6	B16a ₁	N-29°-W	楕円形	3.81	1.80	50	外傾	平坦	人為	縄文式土器片4点, 石製品1点。		"
7	B16f ₁	N-40°-E	楕円形	1.04	0.87	68	外傾	平坦	人為	縄文式土器片2点。		"
8	B15b ₁	N-36°-E	楕円形	2.38	1.57	43	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片51点, 土師器片2点。		"
9	B15j ₁	N-31°-W	不定形	2.57	1.72	26	外傾	平坦	自然	縄文式土器片13点, 土師器片20点。		"
24	C13e ₁	N-72°-W	円形	1.72	1.71	30	緩斜	凹凸	自然			"
27	D13a ₁	N-56°-E	不整円形	1.48	1.45	26	緩斜	皿状	自然			"
31	D12b ₁	N-22°-E	不整楕円形	1.94	1.43	42	外傾	平坦	自然			"
33	D12c ₁	N-5°-W	不整楕円形	2.22	1.74	35	緩斜	凹凸	自然			"
34	D12d ₁	N-37°-W	円形	0.87	0.80	23	緩斜	皿状	自然			第166図
36	D12f ₁	N-13°-E	楕円形	0.95	0.64	6	緩斜	皿状	不明	馬骨, 馬歯。	覆土, 耕作により攪乱。	"
37	D12f ₁	N-28°-E	楕円形	1.65	0.88	28	緩斜	皿状	自然	石製品1点。		"
44	D13e ₁	N-81°-W	楕円形	1.50	1.23	43	緩斜	皿状	人為			"
45	D13g ₁	N-4°-W	楕円形	0.80	0.70	28	緩斜	皿状	人為			"
46	D13g ₁	N-12°-W	不定形	2.0	1.63	66	外傾	凹凸	人為			"
47	D13h ₁	N-74°-E	楕円形	1.45	1.23	46	外傾	皿状	人為	縄文式土器片2点。		"
48	D13h ₁	N-8°-E	楕円形	1.18	0.97	26	緩斜	皿状	人為			"
55	E13d ₁	N-86°-E	隅丸長方形	2.84	2.38	75	外傾	平坦	人為	縄文式土器片2点。		"
58	E12b ₁	N-40°-E	円形	1.79	1.65	43	緩斜	平坦	人為			"
59	E12c ₁	N-84°-E	楕円形	1.78	1.54	41	緩斜	平坦	人為			"
61	C12d ₁	[N-6°-E]	[隅丸長方形]	1.25	[0.78]	40	緩斜	皿状	自然			"
62	C12b ₁	N-5°-E	楕円形	1.20	0.95	48	緩斜	凹凸	人為			"
63	C12d ₁	N-82°-W	楕円形	1.35	1.21	15	緩斜	凹凸	人為			第167図
66	D12f ₁	N-38°-E	楕円形	1.49	1.01	23	緩斜	凹凸	自然			"
69	C12h ₁	N-60°-E	楕円形	0.95	0.47	26	緩斜	平坦	人為			"
71	A12f ₁	N-28°-E	楕円形	2.80	1.75	48	外傾	平坦	人為			"
72	A12f ₁	N-37°-E	楕円形	4.10	2.44	42	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片10片。		"
74	B12b ₁	N-23°-W	楕円形	4.31	2.28	22	緩斜	平坦	自然	石製品1点。		"
75	B12f ₁	N-2°-E	楕円形	1.20	0.85	25	外傾	平坦	人為			"
77	B12g ₁	N-26°-E	楕円形	1.61	1.20	26	緩斜	平坦	自然	石1点。		"
78	B12h ₁	N-49°-E	不整円形	1.10	1.08	30	緩斜	皿状	人為			"
80	B12g ₁	N-23°-E	楕円形	2.60	1.95	32	緩斜	平坦	自然			"
84	B12e ₁	N-71°-E	不整楕円形	1.13	0.93	19	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片6点。		"
86	B12d ₁	N-6°-W	楕円形	2.30	1.58	17	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片4点, 土器片鏝1点。		第168図
90	B12f ₁	N-50°-E	円形	1.10	1.00	15	緩斜	皿状	自然			"
91	B11f ₁	N-3°-E	楕円形	0.82	0.66	28	外傾	平坦	人為			"
92	B12e ₁	N-72°-E	不整楕円形	2.34	1.15	50	緩斜	凹凸	自然			"
96	B11a ₁	N-18°-W	不整楕円形	2.35	0.94	27	緩斜	平坦	人為			"
99	B11g ₁	N-15°-W	不整楕円形	3.21	2.01	37	緩斜	平坦	自然	石3点。		"
101	B10e ₁	N-70°-W	楕円形	1.77	1.58	33	緩斜	平坦	自然			"
102	B10f ₁	N-10°-W	楕円形	2.42	0.80	11	外傾	平坦	自然			"
104	C11a ₁	N-48°-W	円形	2.30	2.18	116	緩斜	平坦	人為			"
105	C12a1	N-57°-E	楕円形	2.34	2.10	34	緩斜	平坦	人為			"
106	C11b ₁	N-30°-E	円形	1.41	1.37	35	緩斜	皿状	人為			"
107	C11c ₁	N-61°-E	楕円形	2.95	1.97	30	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片8点。		第169図
108	C11d ₁	N-5°-W	楕円形	2.04	1.23	30	緩斜	平坦	自然			"
110	C11b ₁	N-60°-W	楕円形	3.44	2.86	38	緩斜	平坦	人為			"

番号	位置	長径方向 (長軸)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径(軸) (m)	短径(軸) (m)	深さ (cm)						
112	C11c ₀	N-16°-W	不整円形	4.00	3.70	40	緩斜	平坦	人為			第169図
113	C11e ₀	N-64°-W	円 形	0.99	0.93	22	緩斜	皿状	人為			"
114	C11e ₃	N-87°-W	楕 円 形	0.97	0.85	20	緩斜	平坦	自然			"
116	C11d ₃	N-56°-E	円 形	1.22	1.14	20	緩斜	平坦	自然			"
117	C11g ₉	N-14°-W	楕 円 形	2.03	1.59	52	緩斜	平坦	人為			"
118	C11h ₉	N-81°-W	楕 円 形	1.35	1.04	27	緩斜	平坦	人為			"
119	C11h ₀	N-54°-E	楕 円 形	1.20	0.90	20	緩斜	平坦	人為			"
120	C12j ₁	N-64°-E	楕 円 形	1.10	0.93	26	緩斜	平坦	人為			"
125	C11e ₂	N-34°-E	円 形	2.09	1.93	28	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片1点。		"
126	C11d ₁	N-79°-W	楕 円 形	2.31	2.05	19	緩斜	皿状	自然	縄文式土器片7点。		"
127	C10e ₀	N-79°-E	楕 円 形	1.75	1.18	43	緩斜	凹凸	人為			"
128	C10f ₀	N-89°-E	不 整 形	3.47	1.90	58	緩斜	平坦	人為			"
129	C10f ₃	N-50°-E	楕 円 形	1.38	1.10	24	緩斜	平坦	人為			"
130	C10f ₈	N-31°-W	不整楕円形	2.10	1.45	30	緩斜	凹凸	人為	縄文式土器片2点。		"
131	C10g ₈	N-47°-W	楕 円 形	1.60	1.08	16	緩斜	平坦	自然			"
132	C10f ₇	N-78°-W	楕 円 形	1.15	1.00	17	緩斜	平坦	自然			"
133	C10g ₆	N-9°-W	円 形	1.97	1.84	26	緩斜	平坦	自然			"
135	C10h ₆	N-78°-W	楕 円 形	2.42	1.14	48	緩斜	凹凸	人為			"
137	C10d ₃	N-84°-E	楕 円 形	1.83	1.45	37	外傾	平坦	自然			"
139	C10b ₂	N-85°-E	楕 円 形	1.72	1.34	41	外傾	平坦	自然			"
141	C10a ₃	N-71°-W	不整楕円形	1.52	1.24	48	緩斜	凹凸	人為			"
142	C10a ₃	N-18°-E	不整楕円形	1.13	0.92	45	緩斜	平坦	人為			"
146	D10a ₇	N-8°-W	楕 円 形	1.67	1.32	45	緩斜	凹凸	自然			"
148	D11a ₃	N-43°-E	不整楕円形	2.47	1.83	97	外傾	凹凸	人為	縄文式土器片3点。		"
150	D11e ₁	N-43°-E	楕 円 形	1.84	1.10	14	緩斜	平坦	自然			"
151	D10e ₈	N-29°-E	楕 円 形	1.73	1.21	26	緩斜	平坦	自然			"

(3) 溝

当調査区からは、溝が5条検出されている。いずれも他の遺構との重複関係や出土遺物がないため、それぞれの構築時期や性格をとらえることができない。

第1号溝（第171図）

位置 調査区の南部，C12区に確認されている。本跡の両端は，調査区域外に延びている。

重複関係 本跡は，C12d₆区で第61号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約25.00mで，上幅1.86～2.97m，下幅0.16～0.89m，深さ28～67cmである。底面は凹凸で，断面形は皿状を呈している。

方向 C12c₆区からほぼ南方向（N-6°-E）へ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物はない。

所見 本跡は，重複関係から第61号土坑より新しい時期のものである。しかし，出土遺物がなく，構築時期及び性格は不明である。

第2号溝（第171図）

位置 調査区の南南西部，C12・D11・12区にかけて確認されている。本跡の両端は，調査区域外に延びている。

規模と形状 全長は41.27mで，上幅0.72～1.04m，下幅0.34～0.43m，深さ10～28cmである。底面は平坦で，断面形は皿状を呈している。

方向 C12h₆区から南南西方向（N-32°-E）へ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から，流れ込みの縄文式土器片が極少量出土している。

所見 出土遺物は，いずれも流れ込みと考えられ，構築時期及び性格は不明である。

第3号溝 (第172図)

位置 調査区の南部，C12・13・D13区にかけて確認されている。本跡の両端は，調査区域外に延びている。

重複関係 C13j₄区で第4号溝と重複している。

規模と形状 全長は20.18mで，上幅0.34～1.23m，下幅0.13～1.08m，深さ18～34cmである。底面は凹凸をしており，断面形は皿状を呈している。さらに，溝の底面の中央から南東側は，幅7～15cmで，ベルト状に良く踏み固められて硬い。

方向 C12i₆区から東南東方向（N-101°-E）へほぼ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物はない。

所見 本跡は，出土遺物がなく，構築時期及び性格は不明である。

第4号溝 (第172図)

位置 調査区の南部，C13・D13区にかけて確認されている。本跡の北東端は，第3号溝に，南東端は調査区域外に延びている。

重複関係 C13j₄区で第3号溝と重複している。

規模と形状 全長は約10.56mで，上幅0.65～1.34m，下幅0.22～0.92m，深さ21～34cmである。底面は平坦で，断面形は皿状である。

方向 C13j₄区から南東方向（N-126°-E）へ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物はない。

所見 本跡は，出土遺物がなく，構築時期及び性格とも不明である。第3号溝との新旧関係は不明である。

第5号溝 (第173・174図)

位置 調査区の西部，B10・11区に確認されている。

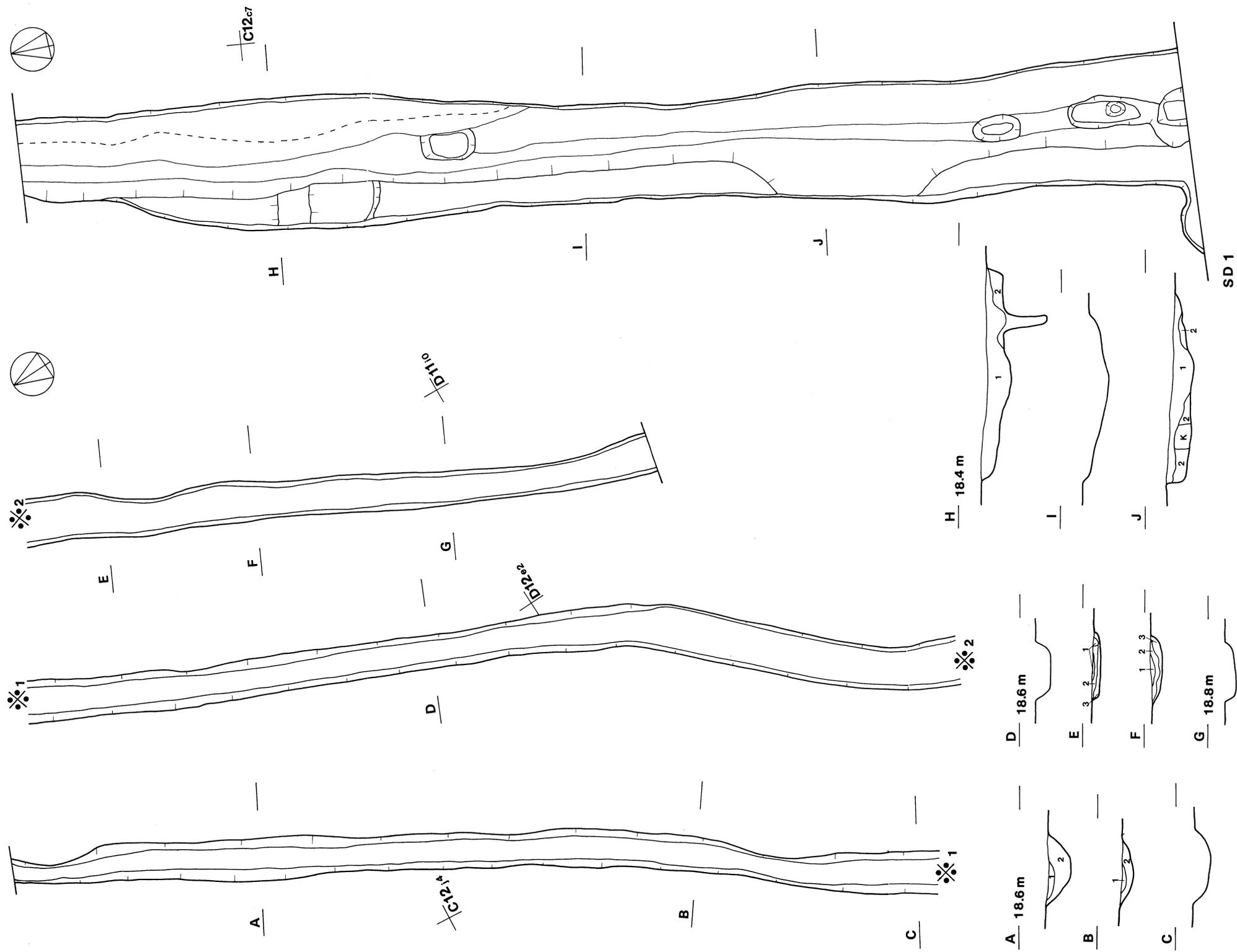
規模と形状 全長は約69.46mで，上幅0.82～1.08m，下幅0.58～0.79m，深さ18～27cmである。底面は平坦で，断面形は皿状を呈している。

方向 B10g₂区から東南東方向（N-84°-W）へ直線的にのびている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から，流れ込みの縄文式土器片が極少量出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ，構築時期及び性格は不明である。



溝土層解説 (A・B)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。縮まり有り。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量。軟質。

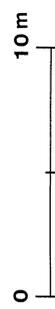
溝土層解説 (E・F)

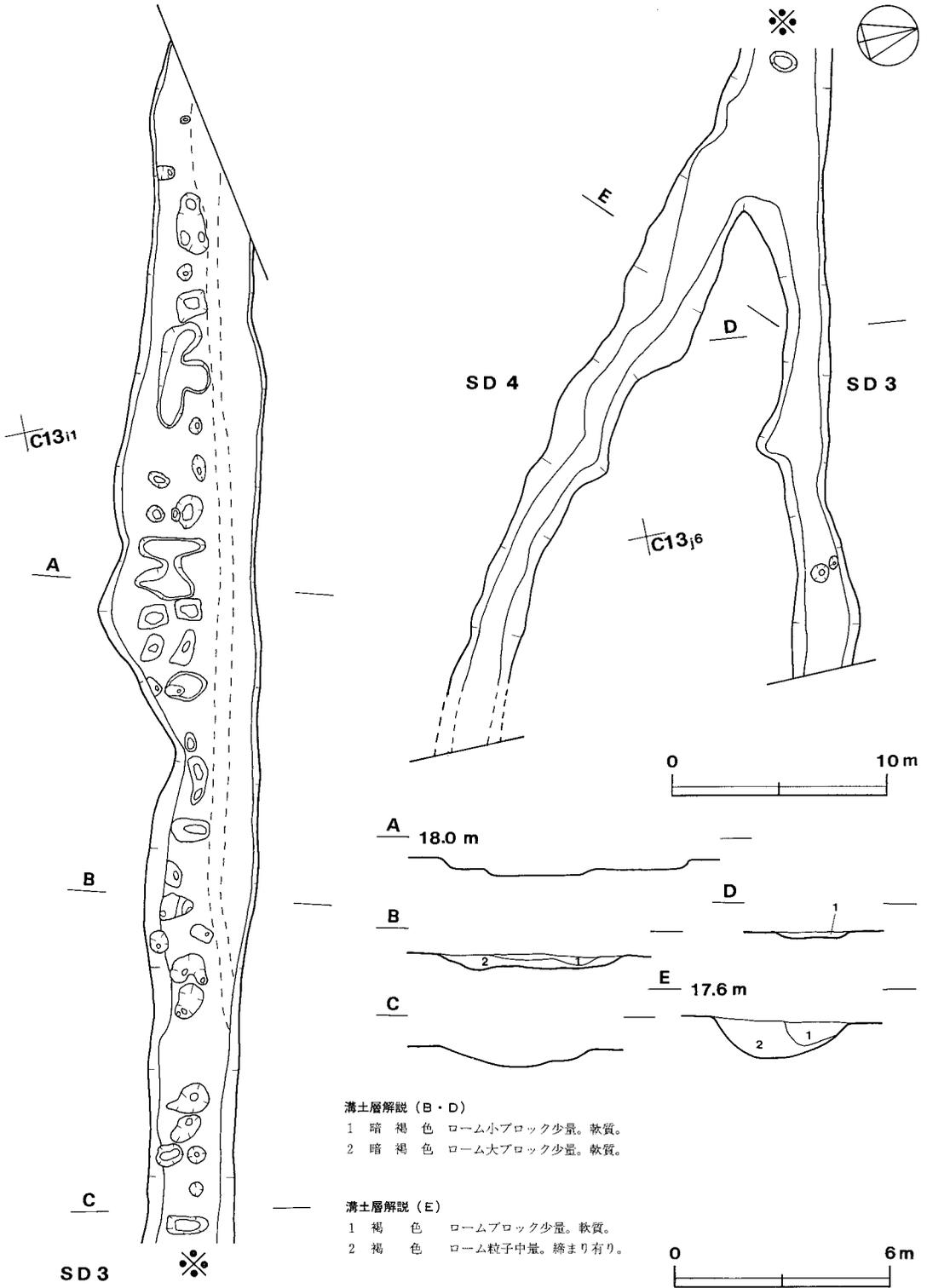
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭土粒子・炭化粒子少量。軟質。
- 2 明褐色 ローム小ブロック少量。軟質。
- 3 明褐色 ローム小ブロック少量。縮まり有り。

溝土層解説 (H・J)

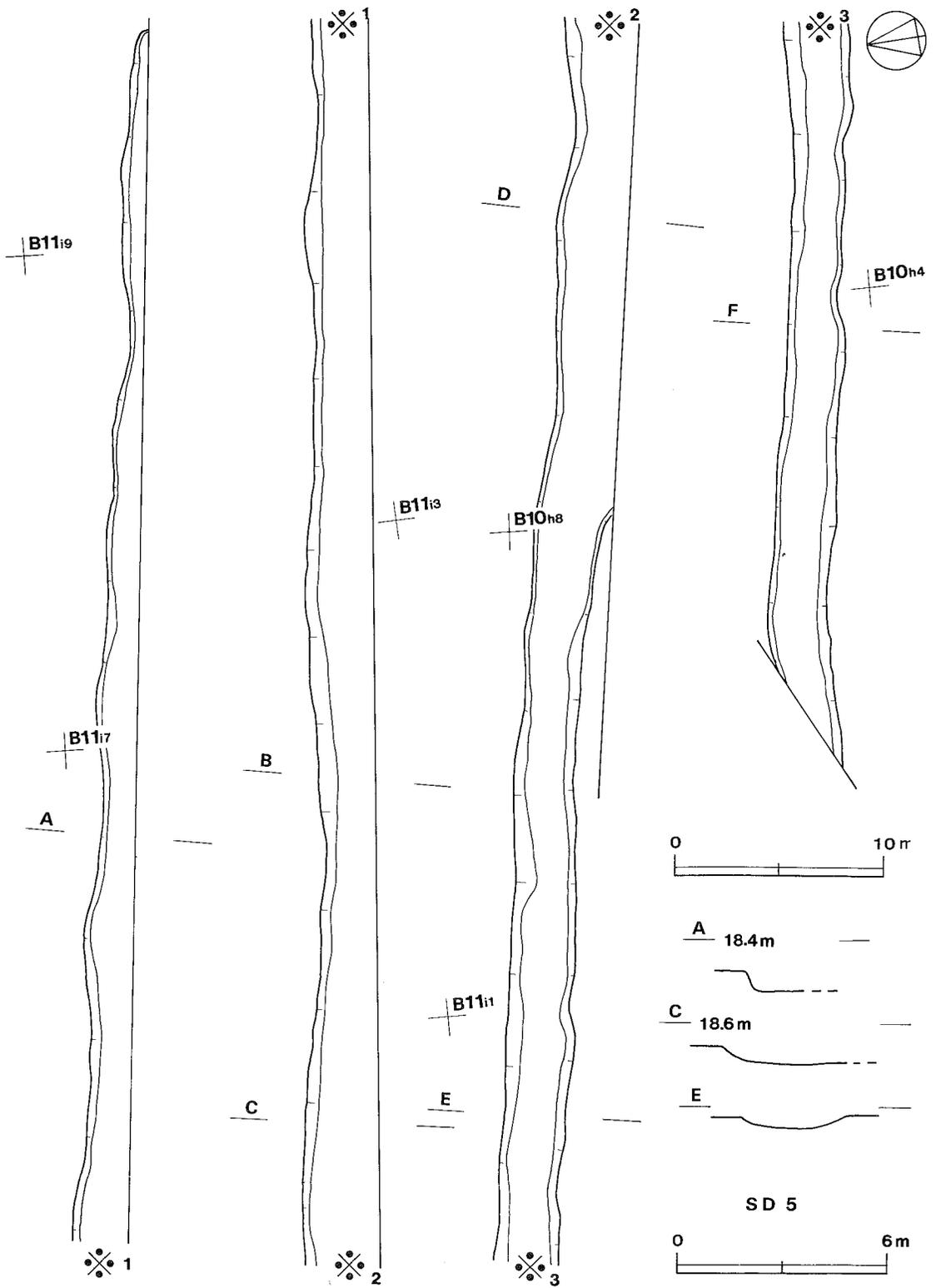
- 1 暗褐色 ローム粒子少量。炭化粒子極少量。軟質。
- 2 褐色 ローム粒子多量。ロームブロック少量。軟質。

第1711図 第1・2号溝実測図

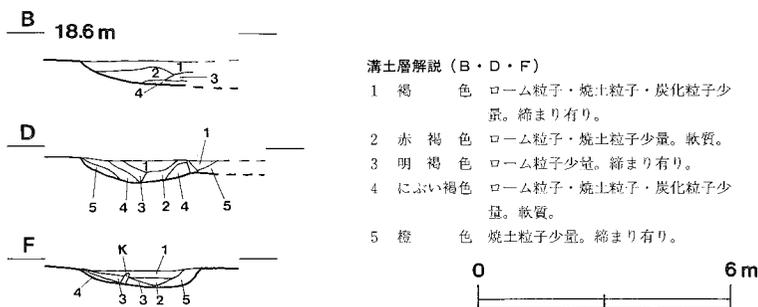




第172図 第3・4号溝実測図



第173图 第5号溝突測図(1)



第174図 第5号溝実測図(2)

(4) 井戸

当調査区からは、調査区の中央部及び西部から2基の井戸が検出されている。調査途中、壁の崩落もみられたため、最後まで調査することができなかった。

第1号井戸 (第175図)

位置 調査区の中央部、B14e₁区を中心に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径1.70m、短径1.41mの楕円形を呈し、確認面から35cm前後の深さまでなだらかに掘り込まれ、そこから下は深さ約3.00mまで円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ約1.90mの壁に崩落のき裂が見られたため調査することができなかった。

覆土 ローム小・中ブロックを含む褐色土で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

所見 本跡は、形状から井戸と考えられる。時期不明。

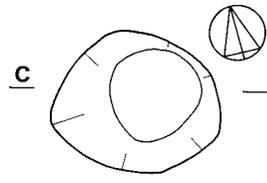
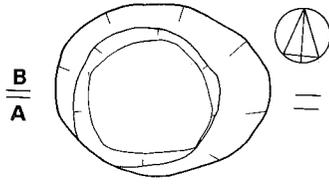
第2号井戸 (第175図)

位置 調査区の西部、B12h₇区を中心に確認されている。

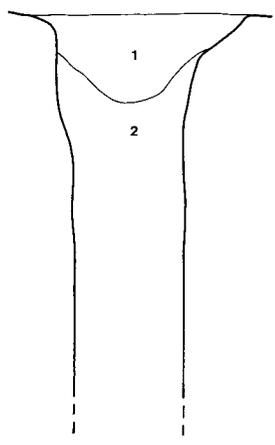
規模と形状 掘り方は、上面が、長径1.34m、短径1.17mの楕円形を呈し、確認面から20cm前後の深さまではなだらかに掘り込まれ、そこから下は深さ約3.50mまで円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ約2.50mの壁に崩落のき裂が見られたため、掘り切ることができなかった。

覆土 ロームブロック、ローム粒子や焼土粒子を含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

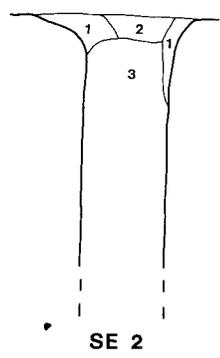
所見 本跡は、形状から井戸と考えられる。時期不明。



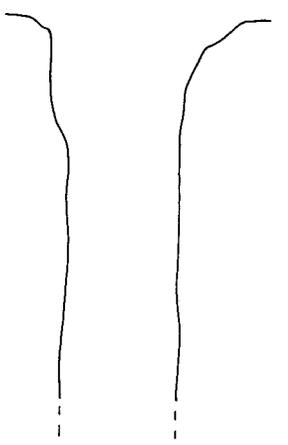
A 17.2m



C 18.1m



B



SE 1

第1号井戸土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック・炭化物少量、
焼土粒子極少量。軟質。
- 2 褐色 ローム小・中ブロック少量、焼土粒
子・炭化物極少量。締まり有り。

第2号井戸土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック・ローム粒子・炭化
粒子少量。締まり有り。
- 2 にぶい褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。締まり
有り。
- 3 褐色 ローム粒子極少量。軟質。



第175図 第1・2号井戸実測図

4 遺構外出土遺物

当調査区からは、直接遺構には伴わない縄文時代・弥生時代及び中世からの土器片や土製品・石製品等が出土している。ここではこれらの出土遺物のうち特徴的なものについて取り上げて記載する。

(1) 縄文式土器

出土した土器は、縄文時代前期から後期の土器片である。縄文式土器を時期や特徴から第1～3群に分類し記載する。

第1群 前期の土器群 (第177図4～15)

1類 中葉の土器

すべての土器片に繊維が含まれている。4～7は口縁部で、4・5は横位回転の単節縄文LRが施され、5の口縁上位に補修孔があげられている。6は無節R、7は無節Lが施されている。8～14は胴部で、半截竹管による沈線が曲線に施されている。9は縄文が施され、ループ文がともなっている。10は異方向の斜縄文が施され、11は異方向の斜縄文に横位の沈線が施されている。12は撚糸文、13は2本1対の撚糸文が施され、14は網目状撚糸文が施されている。

2類 後葉の土器

15は口縁部で、棒状工具で押圧を加えキザミ目状に刺突し、口縁上位に斜位の沈線が施されている。

第2群 中期の土器群 (第177図16～22)

1類 中葉の土器

16は口縁部で、断面三角形の隆帯を弧状に貼付し、口縁上位や隆帯に沿ってキャタピラー文が巡っている。17は胴部で、断面形が蒲鉾状の隆帯を逆「U」字状に貼付し、キャタピラー文が施されている。

2類 後葉の土器

19は胴部で、縄文を施し沈線を垂下させ、沈線内は磨消している。20～22は口縁部で、20・21は口縁上位に微隆起線を横位に巡らし、以下横位回転の単節縄文LRが施され、22は縄文を地文として沈線を斜位に施し、口縁上位に沈線を巡らしている。

第3群 後期の土器群 (第177・178図23～32)

1類 前葉の土器

23は口縁部で、縄文を施し口縁上位に沈線を横位に巡らしている。24は波状口縁で、縄文を地文として口縁上位に沈線が巡り、波頂部から沈線が垂下している。頂部は凹んでいる。25は胴部で、条線文が施されている。

2類 中葉の土器

26は口縁部で、縄文を地文として沈線が横位に施されている。27は胴部で、沈線を斜位に施し連続指頭押圧による微隆起線を施している。28は壺形土器の胴部で、横位回転の単節縄文LRを地文として沈線が曲線に施されている。29・30は口縁部で、縄文を地文とし斜位に沈線を施し、口唇部にキザミ目が施されている。

3類 後葉の土器

31・32は口縁部で、31は弧状に沈線、32は斜位に沈線を施し平行沈線を垂下させ沈線間は磨消されている。

(2) 弥生式土器 (第178図33~36)

出土した土器は弥生時代の極少量の土器片である。33は中期の胴部で細目の単節縄文が施され、沈線上位に円形の刺突文をもつ。34~36は後期の胴部で、付加条縄文が施されている。

(3) 中世の土器 (第177図1~3)

土師質土器 (3点) は、一覧表に記載した。

(4) 土製品 (第178図37~43)

土玉 (5点)、紡錘車 (1点) は、一覧表に掲載した。

(5) 石器・石製品 (第178~181図44~72)

磨製石斧 (3点)、石鏃 (6点)、石皿 (3点)、凹石 (1点)、硯 (1点)、磨石 (3点)、敲石 (5点)、スクレイパー (3点)、剥片 (42点) は、一覧表に掲載した。

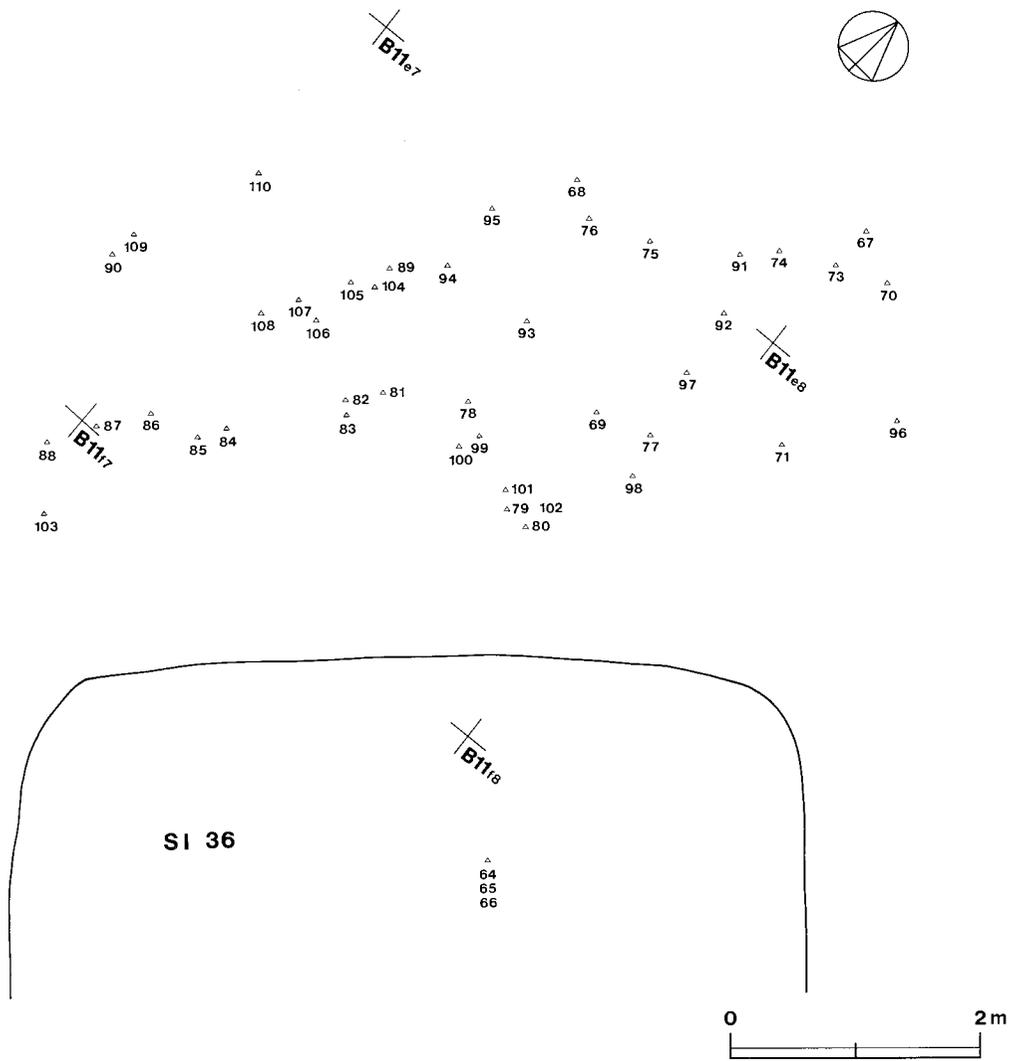
(6) 金属製品 (第181図111~114)

古銭 (2点)、煙管 (2点) は、一覧表に掲載した。

遺構外出土物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	皿 土師質土器	A 6.0 B 1.4 C 3.3	体部一部欠損。平底で、体部は直線的に外傾して開く。	内・外面ナデ調整。底部回転糸切り。	砂粒にふい橙色普通	P315 80% B区表採
2	皿 土師質土器	A [6.0] B 1.4 C [3.5]	体部片。体部は直線的に外傾して開く。	内・外面ナデ調整。底部切り離し不明。	砂粒・スコリアにふい橙色普通	P316 20% C区表採
3	皿 土師質土器	A [6.6] B 1.3 C [4.4]	体部片。体部は直線的に外傾して開く。	内・外面ナデ調整。底部回転糸切り。	砂粒にふい橙色普通	P317 20% C区表採

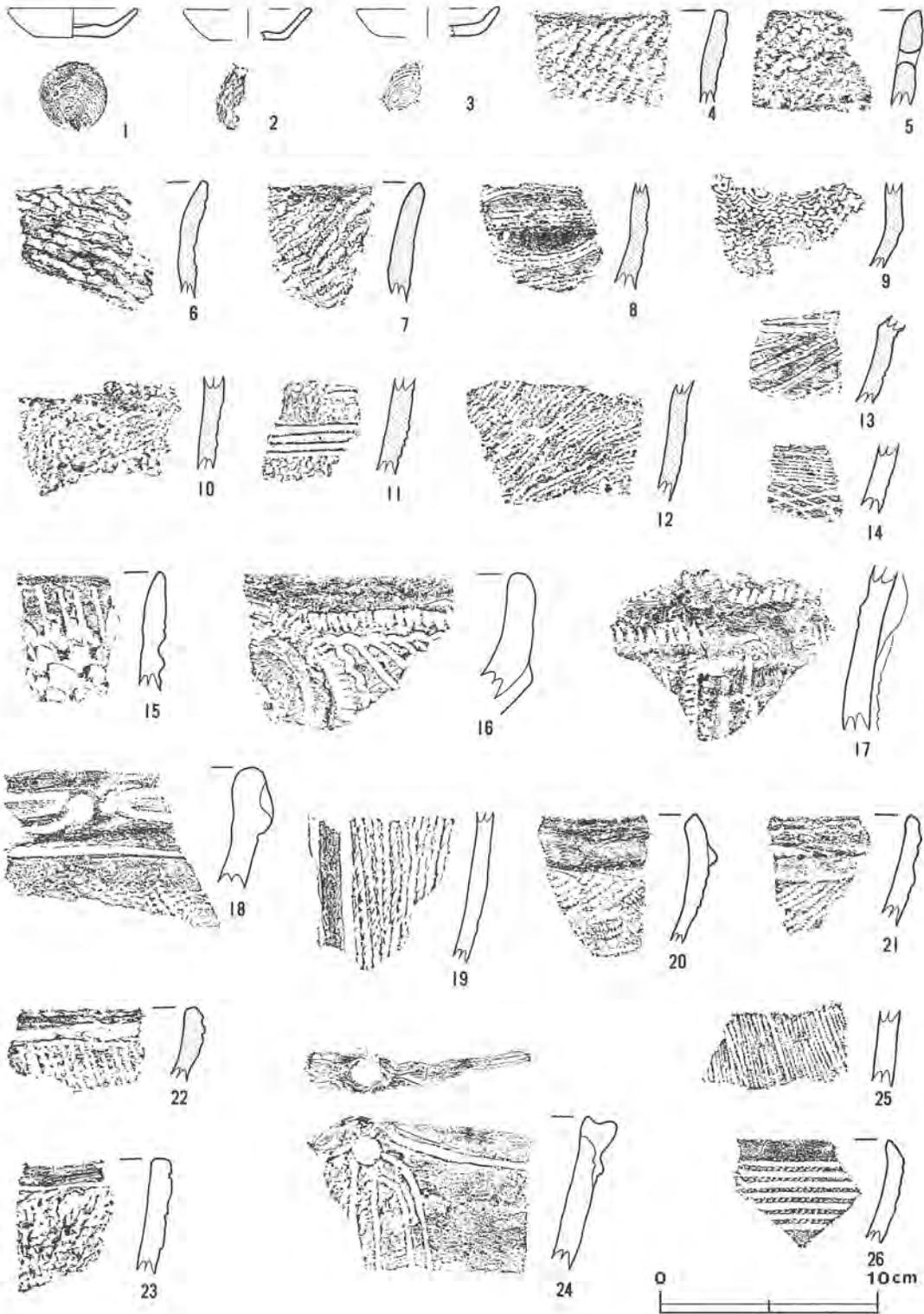
図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第178図37	土玉	3.0	2.4	—	0.5	21.5	100	表採	DP212
38	土玉	2.6	2.6	—	0.6	13.8	100	表採	DP213
39	土玉	2.6	2.6	—	0.6	11.0	100	表採	DP214



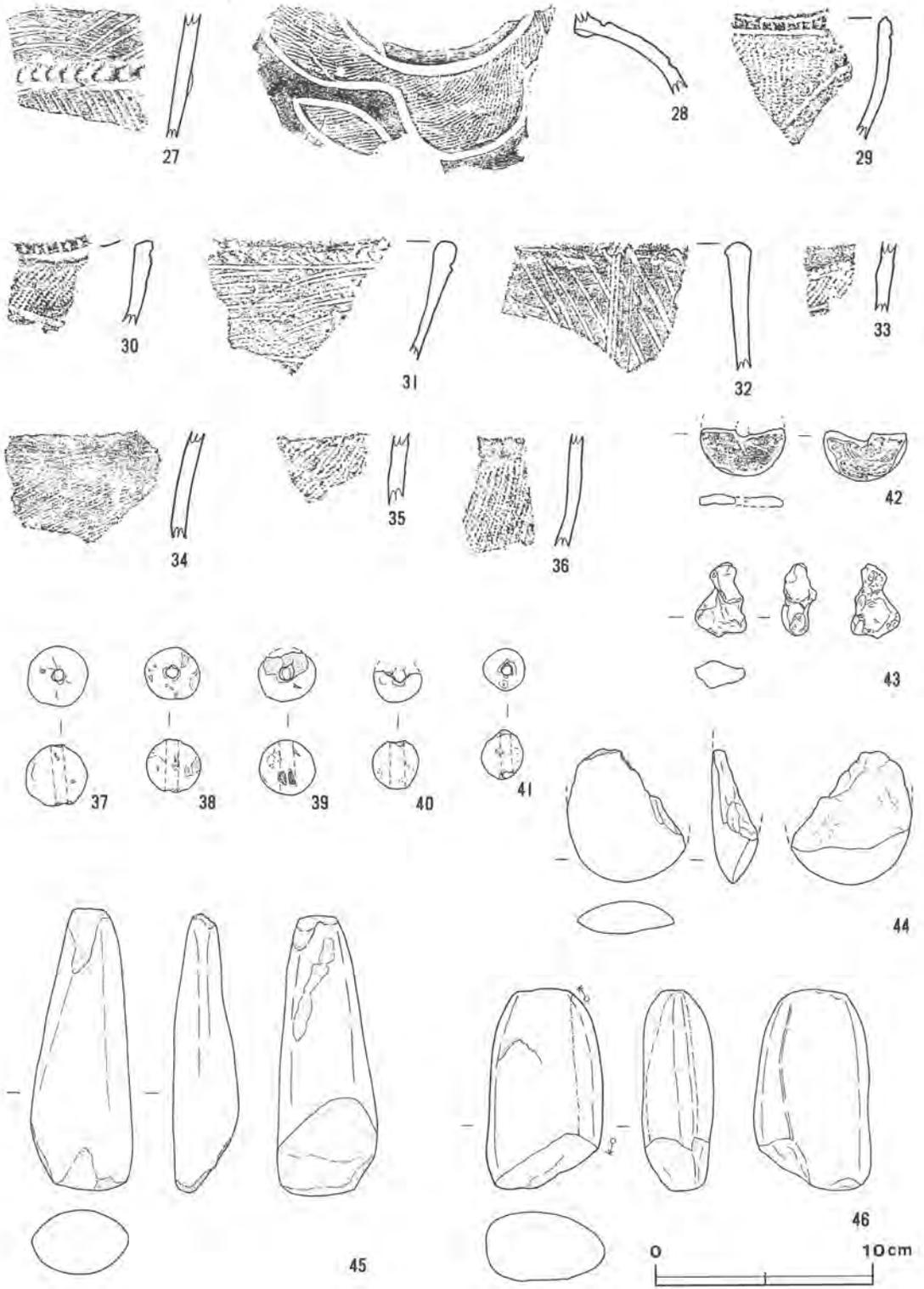
第176図 遺構外（D区）石器集中出土地点

図版番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第178図40	土玉	2.3	2.2	—	0.5	(5.4)	60	表採	DP215
41	土玉	2.4	2.0	—	0.5	7.0	100	A区	DP216
42	紡錘車	2.2	3.9	0.5	(0.6)	(4.5)	50	D区	DP217
43	不明土製品	3.5	2.3	1.6	—	6.6	100	SI-7	DP218

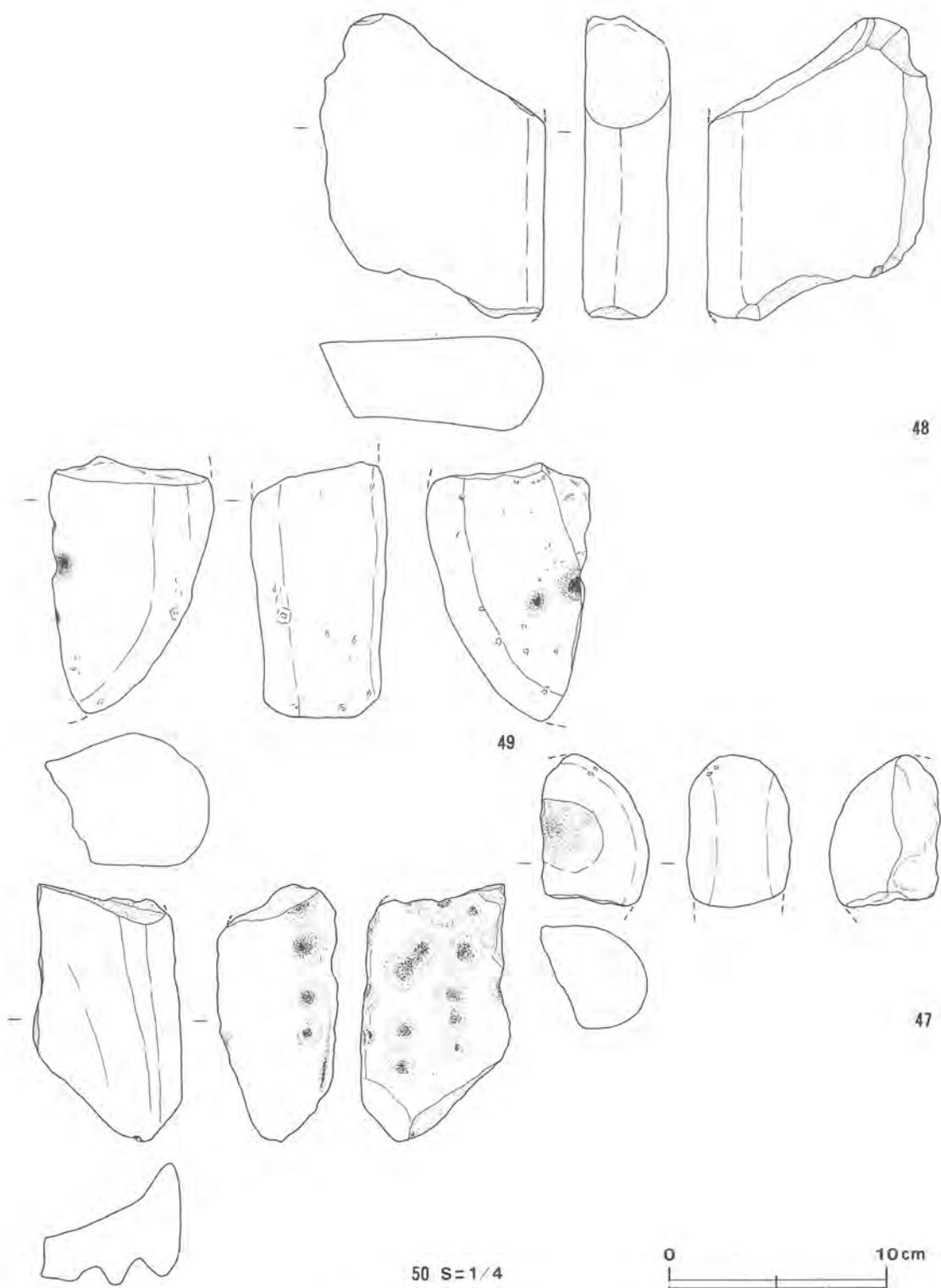
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第178図44	磨製石斧	(6.3)	(5.6)	(2.1)	(66.4)	輝綠岩	SI-23	Q13
45	磨製石斧	13.2	4.8	3.2	269.9	綠泥片岩	B区	Q36
46	磨製石斧	9.5	5.5	3.3	252.9	輝綠岩	B区	Q37
第179図47	凹石	(7.2)	(5.2)	4.9	(234.2)	安山岩	SI-6	Q6



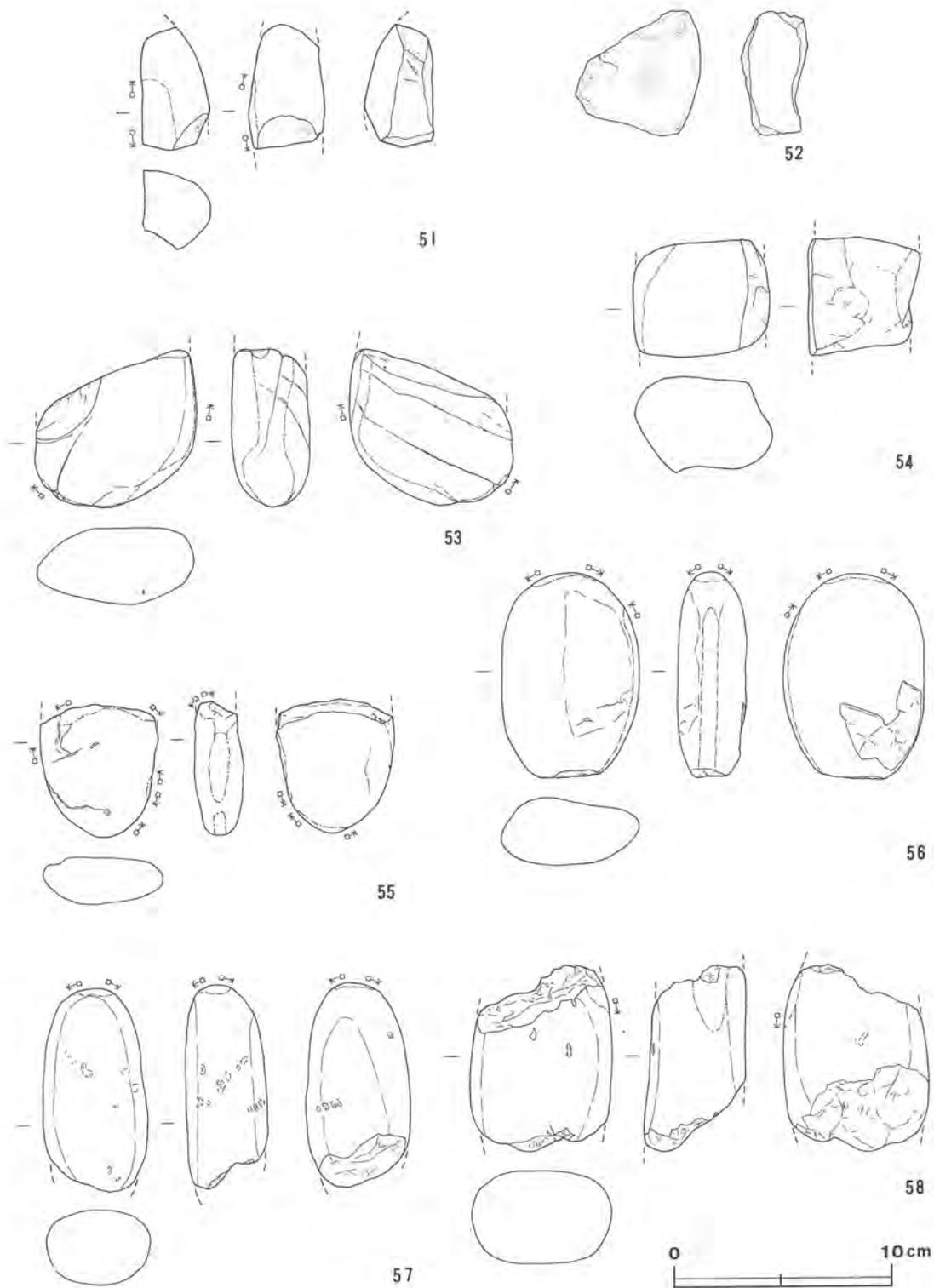
第177图 遺構外出土遺物実測・拓影图(1)



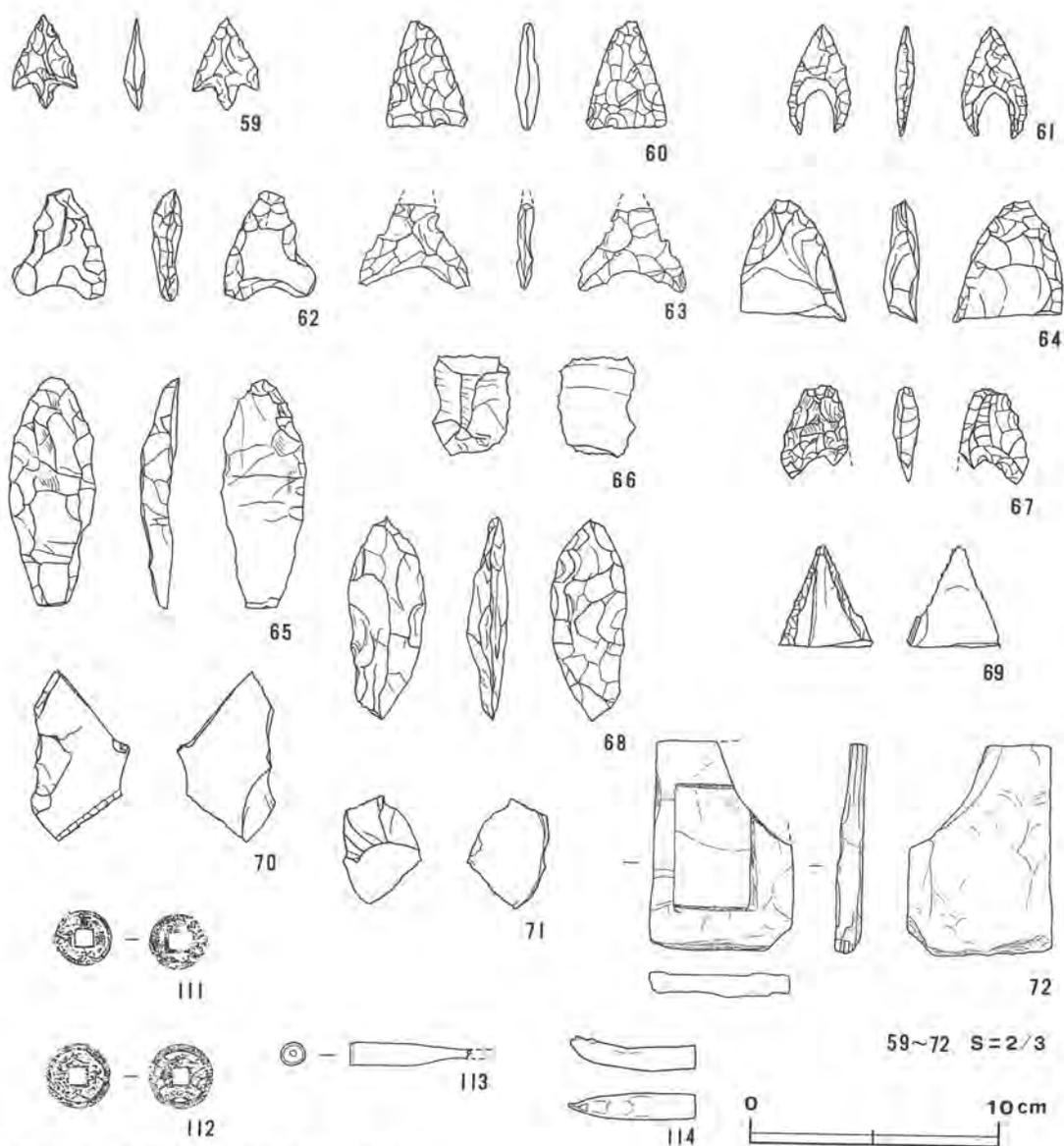
第178図 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第179図 遺構外出土遺物実測図(3)



第180図 遺構外出土遺物実測図(4)



第181図 遺構外出土遺物実測図(5)

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第179図48	石 皿	(14.1)	(10.5)	4.0	(896.4)	安山岩	表 採	Q38
49	石皿凹石	(12.2)	(7.7)	6.3	(691.2)	安山岩	C 区	Q39
50	石皿凹石	(11.2)	(9.3)	7.6	(836.3)	安山岩	表 採	Q41
第180図51	磨 石	(5.8)	(3.2)	(3.7)	(76.0)	安山岩	S I - 4	Q 4
52	磨 石	5.8	3.1	5.9	111.2	砂 岩	S I - 4	Q 5
53	敲 石	(7.4)	(7.5)	3.7	(272.6)	砂 岩	S I - 22	Q11
54	磨 石	(5.5)	(6.4)	(5.1)	(274.1)	砂 岩	S I - 22	Q12

図版番号	器 種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第180図55	敲 石	(6.3)	5.5	2.4	(110.5)	砂 岩	S I - 33	Q27
56	敲 石	(9.7)	(6.4)	(3.3)	(293.8)	砂 岩	S I - 35	Q29
57	敲 石	(8.6)	(4.9)	(3.8)	(231.5)	安 山 岩	表 採	Q40
58	敲 石	(8.8)	(6.6)	(4.7)	(344.2)	安 山 岩	表 採	Q42
第181図59	石 鏃	1.9	1.3	0.5	0.6	チャート	S I - 8	Q 8
60	石 鏃	2.2	1.6	0.5	1.2	チャート	S I - 33	Q26
61	石 鏃	2.3	1.3	0.4	0.5	頁 岩	表 採	Q44
62	石 鏃	2.3	1.9	0.6	2.2	チャート	表 採	Q45
63	石 鏃	(1.6)	2.3	0.3	(1.0)	チャート	C11a ₈	Q46
64	スクレイパー	(2.5)	2.2	0.7	(3.3)	メノウ	S I - 36	Q47
65	スクレイパー	4.7	1.8	0.7	5.0	チャート	S I - 36	Q48
66	剥 片	1.6	2.1	-	0.9	チャート	S I - 36	Q49
67	石 鏃	2.6	(1.8)	0.7	(1.7)	黒 曜 石	B11d ₈	Q50
68	スクレイパー	4.1	1.6	0.8	4.6	安 山 岩	B11d ₇	Q51
69	剥 片	2.1	1.9	-	1.1	メノウ	B11e ₇	Q52
70	剥 片	3.5	2.0	-	2.5	安 山 岩	B11d ₈	Q53
71	剥 片	2.2	1.1	-	0.9	メノウ	B11e ₈	Q54
72	硯	8.6	5.7	1.1	61.2	粘 板 岩	D12d ₇	Q43
73	剥 片	2.2	1.0	-	0.9	メノウ	B11d ₈	
74	剥 片	1.3	1.1	-	0.2	メノウ	B11b ₇	
75	剥 片	1.2	0.9	-	0.1	頁 岩	B11b ₇	
76	剥 片	0.8	0.7	-	0.1	頁 岩	B11e ₇	
77	剥 片	1.3	1.1	-	0.2	頁 岩	B11e ₇	
78	剥 片	1.0	0.8	-	0.1	頁 岩	B11e ₇	
79	剥 片	1.1	0.8	-	0.1	頁 岩	B11e ₇	
80	剥 片	1.3	1.0	-	0.2	頁 岩	B11e ₇	
81	剥 片	2.1	1.2	-	0.5	頁 岩	B11e ₇	
82	剥 片	1.8	1.1	-	0.6	メノウ	B11e ₇	
83	剥 片	1.0	0.8	-	0.1	頁 岩	B11e ₇	
84	剥 片	1.6	1.3	-	0.4	凝 灰 岩	B11e ₇	
第176図85	剥 片	1.2	1.0	-	0.1	メノウ	B11e ₇	
86	剥 片	1.2	0.4	-	0.1	黒 曜 石	B11e ₇	
87	剥 片	2.0	1.6	-	0.5	頁 岩	B11e ₇	
88	剥 片	1.7	1.5	-	1.0	砂 岩	B11f ₆	
89	剥 片	1.8	1.2	-	0.4	頁 岩	B11e ₇	
90	剥 片	1.2	0.4	-	0.1	頁 岩	B11e ₆	
91	剥 片	1.0	0.4	-	0.1	凝 灰 岩	B11e ₇	
92	剥 片	1.3	0.4	-	0.1	頁 岩	B11e ₇	
93	剥 片	1.4	1.0	-	0.2	黒 曜 石	B11e ₇	
94	剥 片	0.9	0.6	-	0.1	凝 灰 岩	B11e ₇	

図版番号	器種	法 量				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第176図95	剥片	1.0	0.5	—	0.1	凝灰岩	B11e ₇	
96	剥片	1.1	0.8	—	0.1	頁岩	B11d ₈	
97	剥片	0.6	0.5	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
98	剥片	1.0	1.0	—	0.1	メノウ	B11e ₇	
99	剥片	1.0	0.9	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
100	剥片	1.1	0.7	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
101	剥片	1.1	0.7	—	0.1	メノウ	B11e ₇	
102	剥片	0.9	0.6	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
103	剥片	1.2	1.1	—	0.3	頁岩	B11f ₇	
104	剥片	1.0	0.7	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
105	剥片	1.1	0.6	—	0.1	頁岩	B11e ₇	
106	剥片	1.1	0.7	—	0.1	黒曜石	B11e ₇	
107	剥片	1.2	0.5	—	0.1	凝灰岩	B11e ₇	
108	剥片	1.5	0.8	—	0.2	メノウ	B11e ₇	
109	剥片	0.9	0.4	—	0.1	頁岩	B11e ₆	
110	剥片	1.3	0.9	—	0.1	メノウ	B11e ₇	

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備 考
第181図111	寛永通寶	1668	日 本	表 採	M3
112	文久永寶	1863	日 本	表 採	M4

図版番号	器種	法 量				備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第181図113	煙管	(5.0)	0.9	—	(4.2)	M5 M15b ₅
114	煙管	(5.0)	1.0	—	(8.2)	M6 B15f ₅

第3節 考察

北前遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡37軒、土坑80基、掘立柱建物跡3棟、溝5条、井戸2基である。竪穴住居跡からの出土遺物は、縄文時代前期と古墳時代前期に大別される。ここでは、土器をⅠ～Ⅳ期（縄文時代Ⅰ期、古墳時代Ⅱ～Ⅳ期）に区分し、各期ごとに住居跡の特徴を述べ、集落の構成についても若干の検討を加えていくことにする。

1 縄文時代

調査区の中央部から北西部にかけて竪穴住居跡が4軒検出されている。そのうち2軒の住居跡は、古墳時代の住居跡と重複している。出土土器は、すべて縄文時代前期の黒浜式期のものである。黒浜式土器については、新井和之氏の5段階の分類を基準に考えていくこととしたい。また、2軒の住居跡内から貝のブロック（地点貝塚）が出土している。

(1) 縄文式土器について

北前Ⅰ期（縄文時代前期中葉）

本期には、第25・26・30・34号住居跡の4軒が該当する。黒浜式土器は、ほとんどすべての土器片に繊維が含まれ、土器の胎土及び焼成が良くないものが見られる。文様をもつ土器には、地文として縄文・撚糸文・沈線文等が施文されており、さらに縄文を地文として沈線文や刺突文及び貝殻文等をもつなど、1個の土器には文様が複合して組み合わせられているものが見られる。縄文だけが施された土器が多く見られ、単節縄文（羽状縄文を含む）、無節縄文（羽状縄文を含む）ループ文また回転縄文だけでなく縄文圧痕が施されている。撚糸文（付加条縄文を含む）が施される土器は、縄文だけが施される土器の次に多く、2本1対の撚糸文や第26号住居跡出土（第50図29）のように網目状の撚糸文などが施されている。沈線文は、棒状工具又は半截竹管等によって施され、口縁にそって横位の平行沈線文や短沈線文、波状や弧状に沈線が施されるものも見られる。第30号住居跡出土（第54図27）の肋骨状沈線文や第26号住居跡出土（第54図45）の斜格子目文なども出土している。貝殻文には、貝殻腹縁文と貝殻背圧痕文があるが、北前遺跡では各住居跡から貝殻腹縁文が出土している。新井和之氏の5段階の分類基準は、「先行型式の関山式に類似点の多いものを黒浜式の古い部分、諸磯a式に近い文様を施したものを黒浜式の新しい部分とした。⁽¹⁾」としている。第53図8のループ文や第25号住居跡出土（第47図43）のコンパス文、第46図15の組紐文等は、関山Ⅱ式の要素が残るものである。さらに、第26号住居跡から出土している無繊維土器の尖底土器片（第46図1）も古い段階のものと考えられる。撚糸文は、東北地方の大木2a式の土器からの類似が見られ、茨城県西部地方は、地理的に東北地方からの影響を受けやすいものと考えられる。

本期は、黒浜式期のⅠ～Ⅱ段階の関山式期の要素を残している古い段階、縄文時代前期中葉の



第182図 縄文時代住居跡分布図

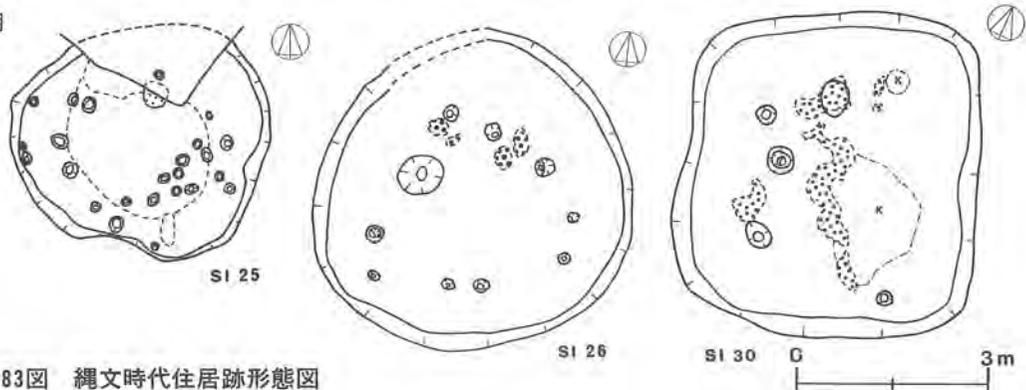
中でも前半の時期と考えられる。

(2) 竪穴住居跡の形態と集落の構成について

4軒の住居跡は、ほぼ同時期のものと考えられ、調査区の中央部から北西部の台地にまとまって検出されている。平面形は、第30号住居跡が隅丸長方形、第25・34号住居跡が不整形楕円形、第26号住居跡は円形である。炉跡は、すべて地床炉で住居跡の中央部付近及び北寄りに検出されている。第26号住居跡では、地床炉が中央部からやや北寄りに4か所検出されている。柱穴は、すべての住居跡から検出されているが主柱穴と考えられるものがない。田中和之氏の「黒浜貝塚群・天神前遺跡⁽²⁾」の住居跡形態の分類では、「Ⅱ類—柱穴は検出されているが、その主柱穴関係が判然としないもの。」に含まれることになるだろう。また、天神前遺跡では「Cピット」(「Cピット」という名称は、笹森健一氏の論考⁽³⁾の中で仮称で述べられた施設である。)についてふれられており、「Cピット」は「炉跡付近から検出されるピット」で袋状を呈したり、柱穴状を呈するものが存在する。初現は現在のところ関山Ⅰ式期に求められ、諸磯式期では存在が認められるようであるが、全ての住居跡から検出されるというわけではなく、またその機能についても現段階では推測の域を脱しえない施設である。」としている。北前遺跡の第26号住居跡のP₆は、炉3・4の南西寄りに検出され、径76cm、深さ66cmで他の柱穴と比べると大きく貯蔵穴と思う程であり、「Cピット」の性格と似ているものと思われる。「Cピット」の機能について第26号住居跡の場合は、上屋を支えるための主柱穴の可能性が考えられる。

集落は、調査区の中央部から北側に所在し、住居跡は菅生沼の西側から緩やかな傾斜地に面して、楕円形に7~45mの間隔で検出されている。住居跡内の地点貝塚は、ともに南側の第25・30号住居跡から検出されている。4軒の住居跡は、出土土器からほぼ同時期であると考えられる。楕円形の内側は、4軒の住居跡にとっての広場と思われる。

地点貝塚は、第25号住居跡が炉跡の北西側と南側の2か所から貝のブロックが検出され、第30号住居跡は床中央部から貝のブロックで7か所検出されている。ともに鹹水産のカキ・アサリ・ハマグリ・アカニシなどが主体であるが、ヤマトシジミ・オオタニシなどの汽水・淡水産の貝もI期



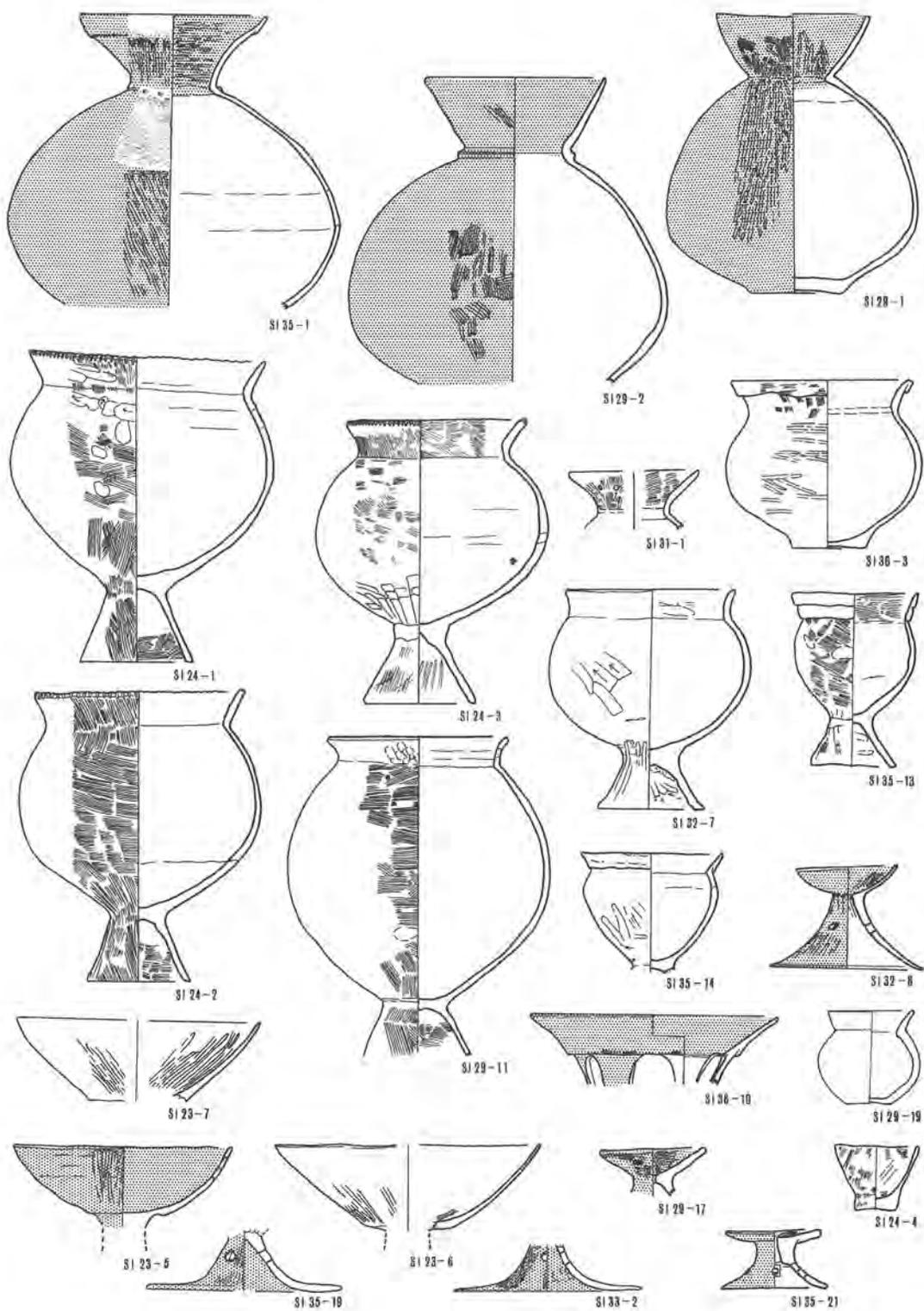
第183図 縄文時代住居跡形態図

北前Ⅱ期

本期には、第23・24・29・31～33・35・36号住居跡が該当する。壺や甕・台付甕等は、壺の口縁部や胴部上位に網目状捺糸文が施されていたり、甕の口唇部にキザミ目をもつなど弥生時代後期の系統を残す土器と考えられる。第35号住居跡の壺は、幅広の複合口縁部と胴部上位に網目状捺糸文、頸部にそって円形の浮文が貼付され、胴部下位に最大径をもち下膨れであり、へら磨きで網目状捺糸文帯を除いて赤彩が施され、さらに口縁部の網目状捺糸文帯に円形の赤彩をもつなど東京都八王子市の神谷原遺跡⁽⁴⁾と類似している。また、第146図1の壺は、第35号住居跡の土器片と接合でき、複合口縁で網目状捺糸文を施し、胴部は下膨れでへら磨きで赤彩が施されている。これらの壺は、南関東地方の手法をとり入れた土器で、千葉県や埼玉県などから搬入された可能性のある土器と考えられる。また、単口縁の壺では、第29号住居跡のように胴部はともに下膨れで、頸部が強く縮り断面三角突帯のあるものとなないものがあり、口縁部はやや内彎気味に立ち上がっている。底部は、平底で木葉痕をもつものもある。甕は、球形の胴部を呈し、外面ハケ目整形またはへら削りで、口縁部は頸部から外反してたち上がるが、頸部のしまりは少なく口唇部にキザミ目をもつものが多い。キザミ目の施し方には、横から押圧しながら付けるものと口唇部の下から上への方向及び上から下への方向へとキザミ目を付けるものなど2つに大別される。横から付けたキザミ目には、施文する工具の木目痕を残すものもある。台付甕は、「ハ」の字状に台部が開き、胴部は球形を呈し、口唇部にキザミ目をもつものが多い。第153図13の台付甕の口縁部には、外面に輪積み痕を残すものなど、東京湾岸地域や印旛・手賀沼周辺地域及びつくば市境松遺跡との関係などが考えられる。台付甕は、甕に比べて多く出土している。高坏は、坏部片や脚部片が多く出土し、外面へら磨きで赤彩が施されている。脚部は裾部を大きくラッパ状に開き、脚部高が低く赤彩されているもの（第149図2・第154図19）など弥生時代後期の系統を残している。坏部は、下位端部に稜をもつものがほとんどであり、第23号住居跡（第130図7）や第36号住居跡（第157図5）は、脚部との接合点から大きく開き坏部高もやや深く、東海地方の元屋敷系高坏と類似しておりその系統の土器と思われる。器台は、器受部の中央に単孔をもち皿状を呈している。第36号住居跡出土の装飾器台（第157図10）は、床面に細かい土器片で出土しており、複合口縁で器受部に楕円形状の円窓をもっている。これは、千葉県柏市戸張一番割遺跡や龍ヶ崎市屋代A遺跡のものと類似している。しかし、本期のなかでは器台の出土量は少ない。

北前Ⅲ期

本期には、第1・5-A・6・18～20・22・28号住居跡が該当する。第5-A号住居跡は、出土遺物が少量であるが、第5-B号住居跡に掘り込まれているなど本期に含めて考えることにする。壺の口縁部には、複合口縁のものと単口縁のものが出土している。第18号住居跡の複合口縁の壺（第117図1）は、平底で外面へら削りが施され、頸部の内面に胴部との接合部と思われる稜

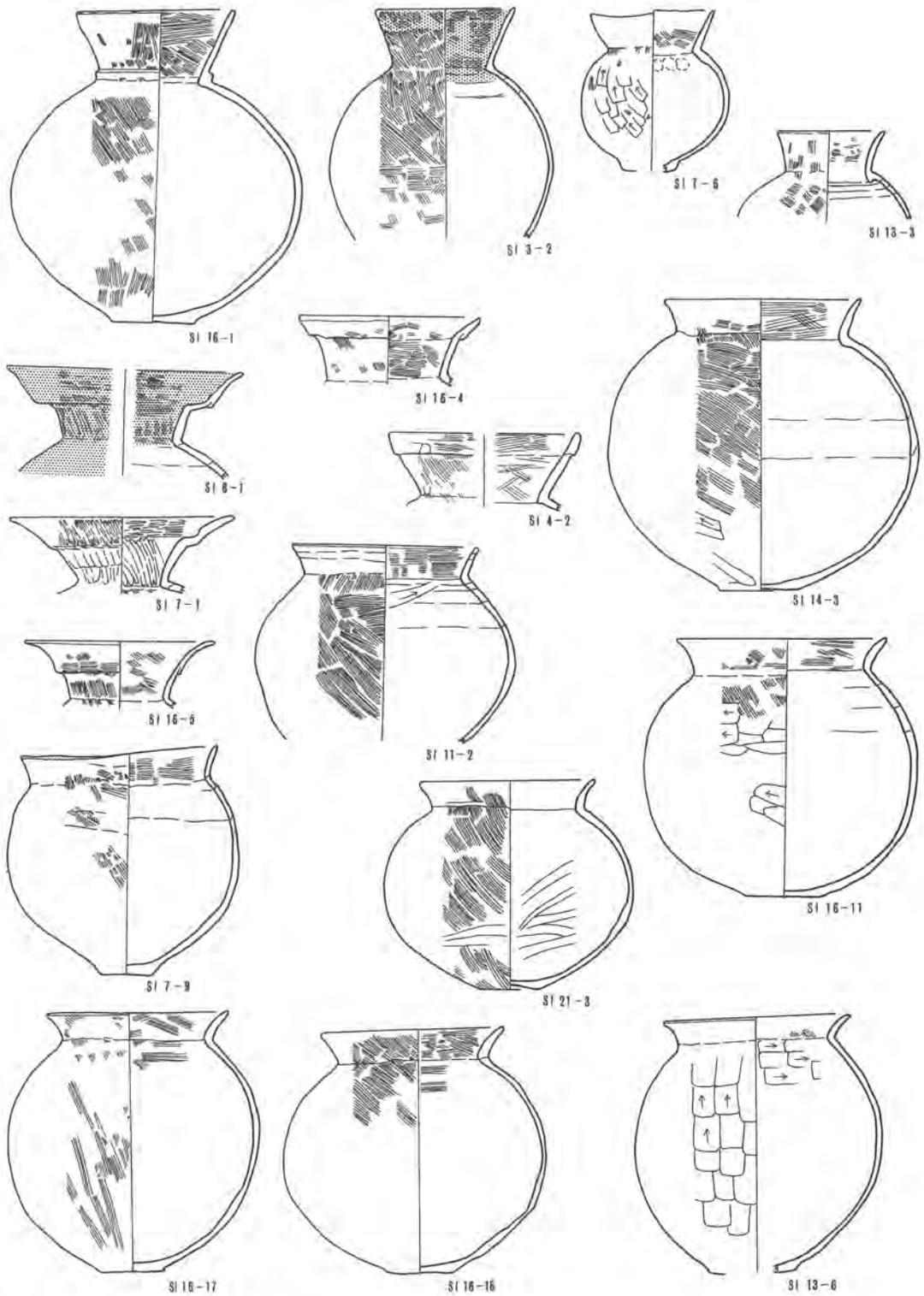


第185图 北前II期土器集成图

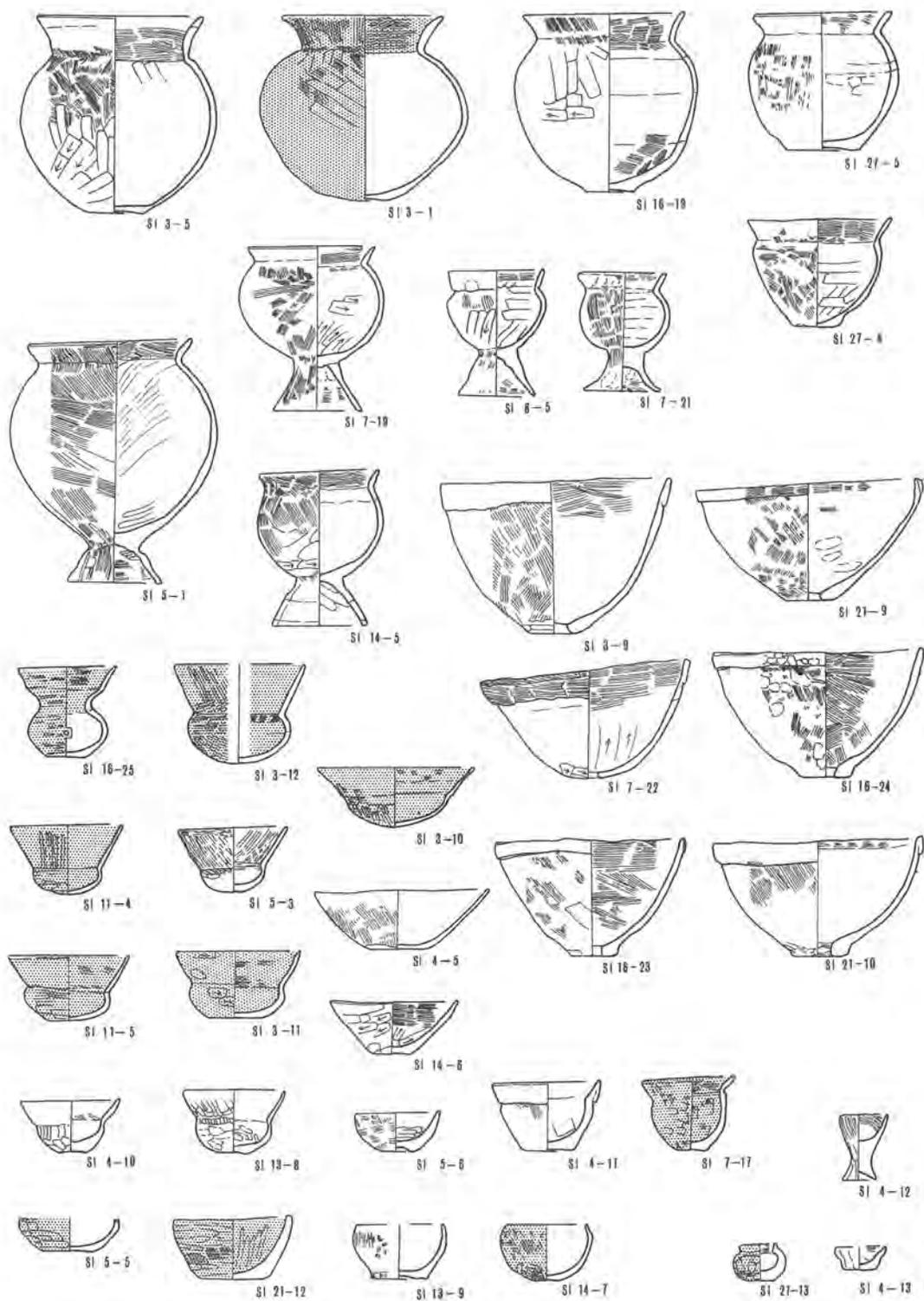
滝台遺跡にも見られ、北前遺跡の性格を考える上での一つの手掛りとなると考える。高坏は、坏部片や脚部片である。坏部は下位に稜をもちへら磨きで赤彩が施され、坏部高はやや低く浅い。脚部は、ラッパ状に開くものと中実柱状の脚部が出土している。この中実柱状の脚部をもつ高坏は、IV期の主流をなすものと考えている。器台は、器受部の中央に単孔をもち浅く皿状を呈している。ミニチュア土器は、底部に小さな窪みをもち、ハケ目整形を施している。

北前IV期

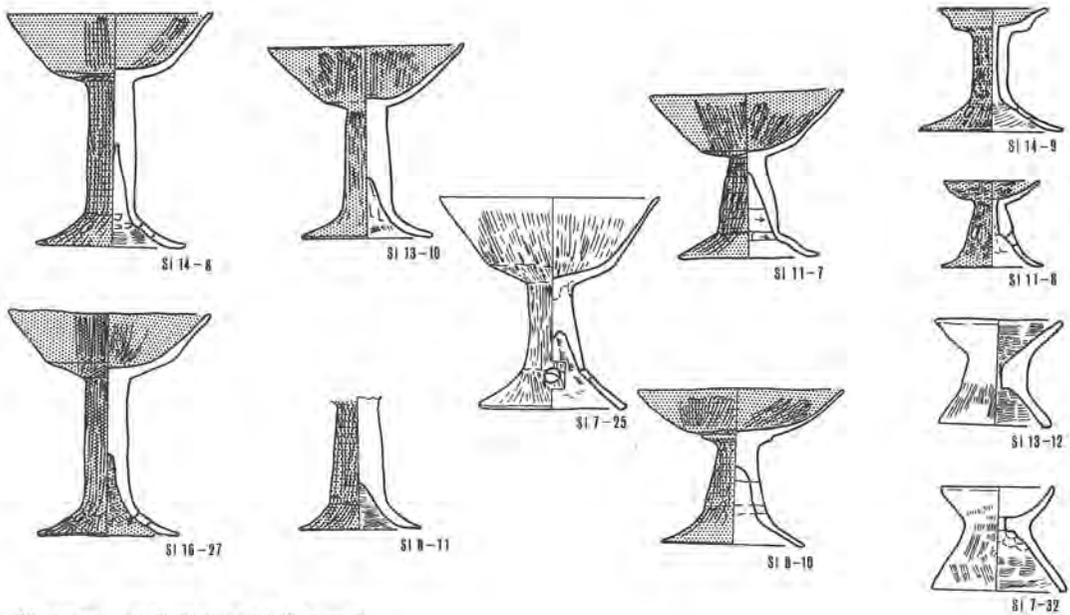
本期には、第2～4・5-B、7～17・21・27号住居跡が該当し、北前遺跡の中心的な時期と考えられる。第7・16号住居跡は、特に甕を主に多くの土師器が出土している。壺は、有段口縁、複合口縁、単口縁などの口縁部片が多く見られる。有段口縁の壺は、へら磨きであるがハケ目整形を残し、頸部のしまりが弱くなり大きく外反して立ち上がる傾向が見られる。しかし、第16号住居跡の壺（第106図1）のように頸部に断面三角突帯をもつなど古い時期のものも残っている。甕は、底部が平底や突出した平底などで、胴部は球形でハケ目整形を胴部中位から口縁部にかけて施し、胴部下半にはへら削りのものも多く見られる。口縁部は、頸部から「く」の字状を呈し、やや器厚を減じながら外反して立ち上がっている。胴部の整形手法や頸部から口縁部の立ち上がりなどが緩やかな傾向をもち新しい時期の要素が考えられる。台付甕は、II・III期よりも小形化し、出土量が少なくなる傾向にある。甑は、いずれも単孔で、ハケ目整形を施した鉢形の複合口縁である。甑が出土するのは、本期が主である。甑は、第3・7～9・16・17・21号住居跡から出土しており、そのうち第16・21号住居跡からは、甑が2点ずつ出土している。埴は、小形丸底埴や体部が扁平な半球形の埴の2つの器種が出土している。第16号住居跡の埴（第111図25）は、胴部中位に小さく穿孔されており、住居跡内祭祀に関係する埴と考えられるが、類例がなく今後の検討が必要と思われる。高坏は、中実柱状の脚部が主で、いくつかの器種に分けられる⁽⁶⁾が、第101図8のように坏部高に比べて脚部高がかなり長いものも出土している。また、器台にも中実柱状の脚部をもつものが見られる。岩崎卓也氏は、この高坏について「塩釜式や五領式期の後半には北関東東部や東北部に脚部が中実な高坏が出現する。この祖形は畿内にあり、古墳文化の東北地方への拡大と関連する。」という見方を報告している⁽⁷⁾。中実柱状の脚部をもつ高坏の類例は、利根川流域から南部の千葉、東京方面では現在のところ類例が極めて少ない。関東東部の太平洋岸や利根川から鬼怒川流域の栃木県、群馬県及び福島県の太平洋岸や会津地方に多く出土している。これらの遺跡の中には、「S」字状口縁の甕や台付甕と共伴しているものも見られるが、北前遺跡では共伴していない。北前遺跡と類似している周辺の遺跡では、鹿島町木滝台遺跡、千葉県我孫子中学校校庭遺跡、栃木県花の木町遺跡などがある。ミニチュア土器は、壺形、甕形、鉢形、碗形等で、ハケ目整形が施されている。第4・21号住居跡からは、特に多く出土している。



第187图 北前IV期土器集成图(1)



第188图 北前IV期土器集成图(2)



第189図 北前Ⅳ期土器集成図(3)

(2) 住居跡の形態と集落の構成について

北前遺跡の調査区から出土した古墳時代前期の住居跡は33軒で、標高18~19mの台地上に所在している。これらの住居跡は、ほとんど重複がなく出土した土師器からⅡ~Ⅳ期の3期に分類し、その住居跡の形態について述べるとともに集落の構成について若干の検討を加えてみたい。

北前Ⅱ期 (古墳時代前期前葉)

第23・24・29・31~33・35・36号住居跡

北前Ⅲ期 (古墳時代前期中葉)

第1・5-A・6・18~20・22・28号住居跡

北前Ⅳ期 (古墳時代前期後葉)

第2~4・5-B・7~17・21・27号住居跡

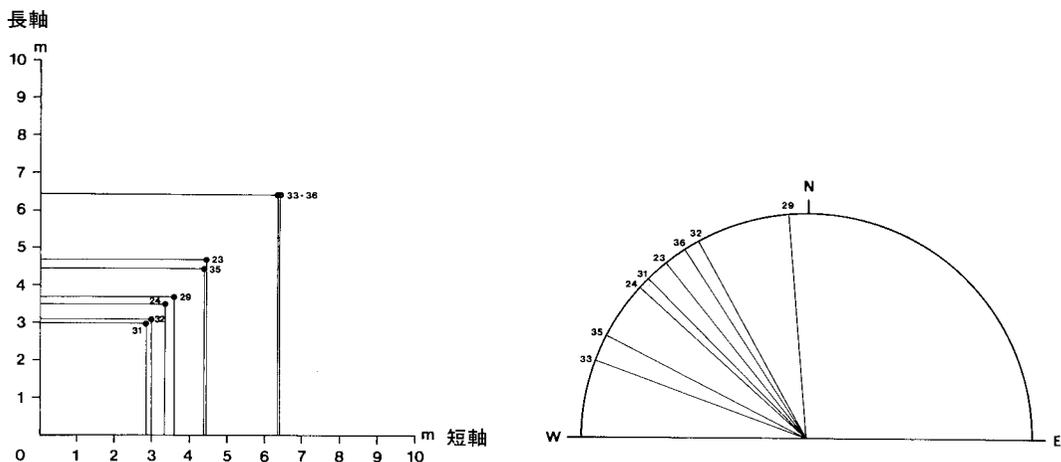
北前Ⅱ期

当該期に比定される住居跡は、調査区の中央部から北西部にかけて8軒検出されている。平面形は、隅丸方形を呈するものが7軒、方形を呈するものが1軒である。本期では、隅丸方形が住居の平面形の基本と考えられるだろう。また、火災住居跡は、第23・24・29・33・35号住居跡と8軒のうち5軒と多い。炉跡は、すべて地床炉であり、床中央部から北西寄りに検出されている。しかし、第31・32号住居跡の炉跡は、南東壁寄りに検出され、他の住居跡と異なっている。

支柱穴は、第36号住居跡を除いて、必ずしも4か所は検出されていない。第36号住居跡は、支柱穴が4か所検出され、掘り方も楕円形を呈して大きい。また、P₁の覆土上層から高坏をはじめ土

師器片が出土している状況から柱の抜き取りをした可能性のある住居跡と思われる。出入口ピットは、すべての住居跡から検出され、炉と対面する位置にある。また、貯蔵穴は、出入口ピットの左右どちらかに検出されている。第23号住居跡では、貯蔵穴が2か所ある。床面は、すべての住居跡で各コーナーまで良く踏み固められ、特に中央部は硬い。住居跡内の部屋を区切るための施設と考えられる間仕切り溝が、第23・32・33・36号住居跡の出入口ピットの近くから検出されている。住居跡の主軸方向は、N-29°-W~N-70°-Wの範囲にあり、南東側からの出入口を考慮することができる。しかし、第31・32号住居跡は、他の住居と違い反対方向になってしまう。第29号住居跡は、N-5°-Wではほぼ南北の向きである。住居跡の規模は、36㎡以上が2軒、10~25㎡が4軒、10㎡未満が2軒である。大形の住居跡を中心として、中形住居跡や小形住居跡が集落を構成していたと考えられる。第35号住居跡と第32号住居跡は、出入口の方向が違うが、互いに床面からの資料である壺の接合ができ、少なくとも住居の廃絶期は同時期と考えられる。第29号住居跡は、この集落の中では特異な存在と考えられる。壁高は、45~60cmと深く、焼土が厚く床面を覆う火災住居跡である。炉跡は床中央部に位置し、西部の床面は高床部（ベット状）になっている。柱穴が多く検出され、その多くは壁柱穴である。出入口ピットは、南壁の東コーナー寄りにあり、貯蔵穴は東コーナーにある。とくに土器片が、床中央部から南部にかけて赤彩の土器片を含めて多く出土している。北壁寄りの床面には、高坏・器台の脚部や甕が東西に一列に置かれた状況で、特に北コーナー付近から甕、台付甕が重なり、甕の中からミニチュア土器が出土している。本期の集落の中では、ほぼ中央に位置し、このような住居跡の形態や出土土器の状況から住居跡内で祭祀を行った可能性が考えられる。

II期



第190図 北前II期住居跡規模・主軸方向

本期の集落は、調査区中央部北側に所在し、住居跡は菅生沼西側から入り込む緩やかな傾斜地に面して形成されている。集落は、大形の住居跡を中心に水田耕作を営む「世帯共同体⁽⁸⁾」と考えられる。

北前Ⅲ期

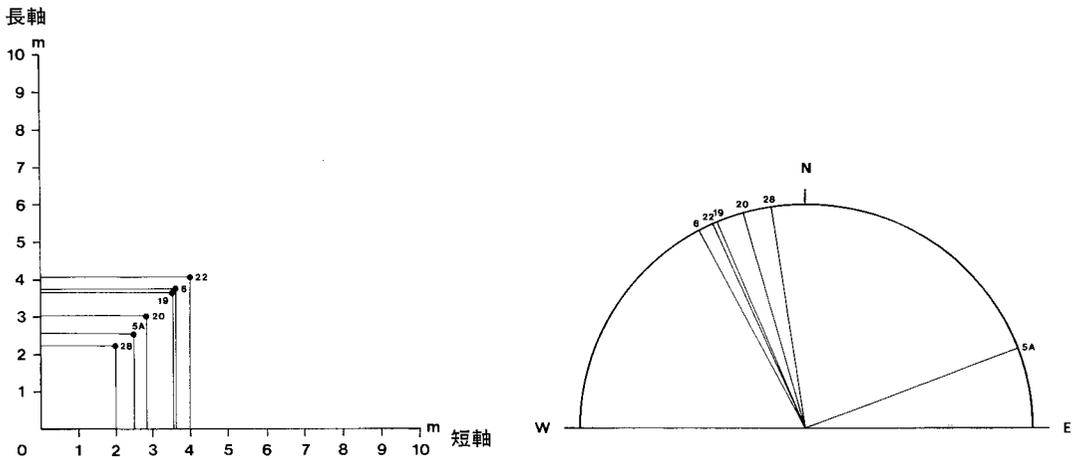
当該期に比定される住居跡は、調査区の中央部から北東部にかけて8軒検出されている。平面形は、隅丸方形が3軒、隅丸長方形が1軒、方形3軒（第1・18号住居跡は、推定であるが方形とした。）、長方形1軒の8軒である。また、火災住居跡は、第6・18・28号住居跡の3軒である。炉跡は、地床炉であり、床中央部から北西寄りに検出されている。第18号住居跡は、調査区外にのびているため検出されていない。また、第5-B号住居跡の炉跡は、南東壁寄りに検出されている。主柱穴は、Ⅱ期と同様に4本検出される住居跡が少ない。第6・18・22号住居跡は、主柱穴が4本検出されている。主柱穴の位置は、住居跡のコーナーに寄って検出されている。出入口ピットが、はっきりと検出されているのは第22号住居跡だけで、炉と対面する位置にある。他の住居跡は、出入口ピットがなく、Ⅱ期に比べて住居跡の形態の違いが見られる。床面は、軟らかく炉の周辺や床中央部が踏み固められている程度である。壁溝は、ほとんどの住居跡から検出されているが、全周しているのは第6・18・22号住居跡である。ほとんどは住居跡の主軸方向は、N-20°-W～N-28°-Wの範囲にある。第5-A号住居跡は、N-69°-Eと反対の向きを示しているが、本期の集落は、中央部に広場をもち、長楕円形状を呈しているため、第5-A号住居跡は中央部の広場を向いていることになる。住居跡の規模（第1・18号住居跡を除く。）は、10～17m²が4軒、10m²未満が2軒であり、大形と考える住居跡がなく中形が多くなる傾向が見られる。

本期の集落は、Ⅱ期の集落の東側に所在し、住居跡は菅生沼から入り込む緩やかな傾斜地に面して形成されている。人々は台地上における畑作だけでなく、目の前に広がる湿地帯の開墾による水田耕作も行っていたものと思われる。

北前Ⅳ期

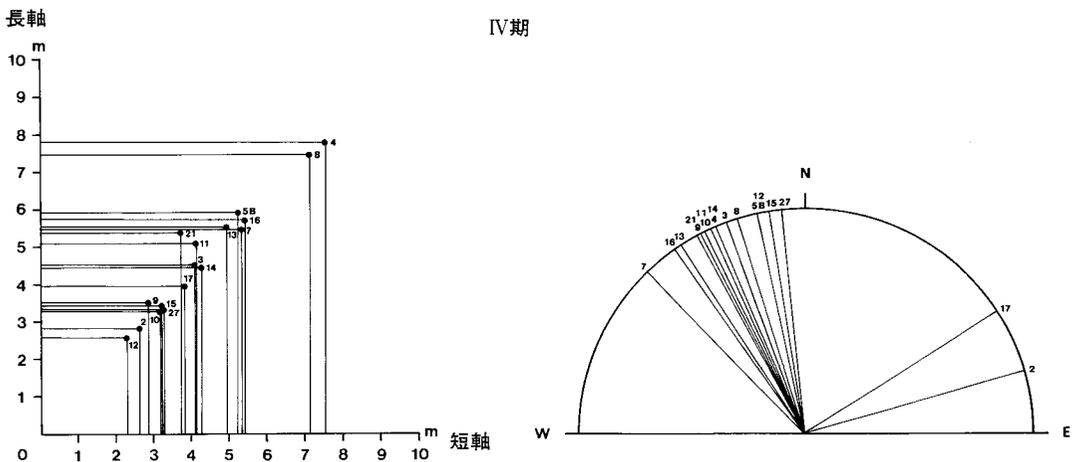
当該期に比定される住居跡は、調査区の東部から南東部にかけて17軒検出されている。平面形は、隅丸方形5軒、隅丸長方形2軒、方形6軒、長方形4軒である。本期では特に方形や長方形の住居跡が多く見られている。また、火災住居跡は、第4・7・8・11・13・15・16・21・27号住居跡で17軒中のうち9軒である。炉跡は、すべて地床炉であり、床中央部から北西寄りに検出されている。しかし、第10・12号住居跡には、炉が検出されていない。主柱穴は、多くの住居跡から4か所検出されているが、第9・10・12号住居跡から全く検出されていない。また、主柱穴は、Ⅲ期に比べてやや内側の中央部寄りに検出されている。出入口ピットは、炉の対面に位置している。また、第4号住居跡の出入口ピットでは、角度をもって検出されており、当時の壁高を推測することができるだろう。貯蔵穴は、円形や楕円形の平面形を呈しており、出入口ピットの左右のどちらか

III期

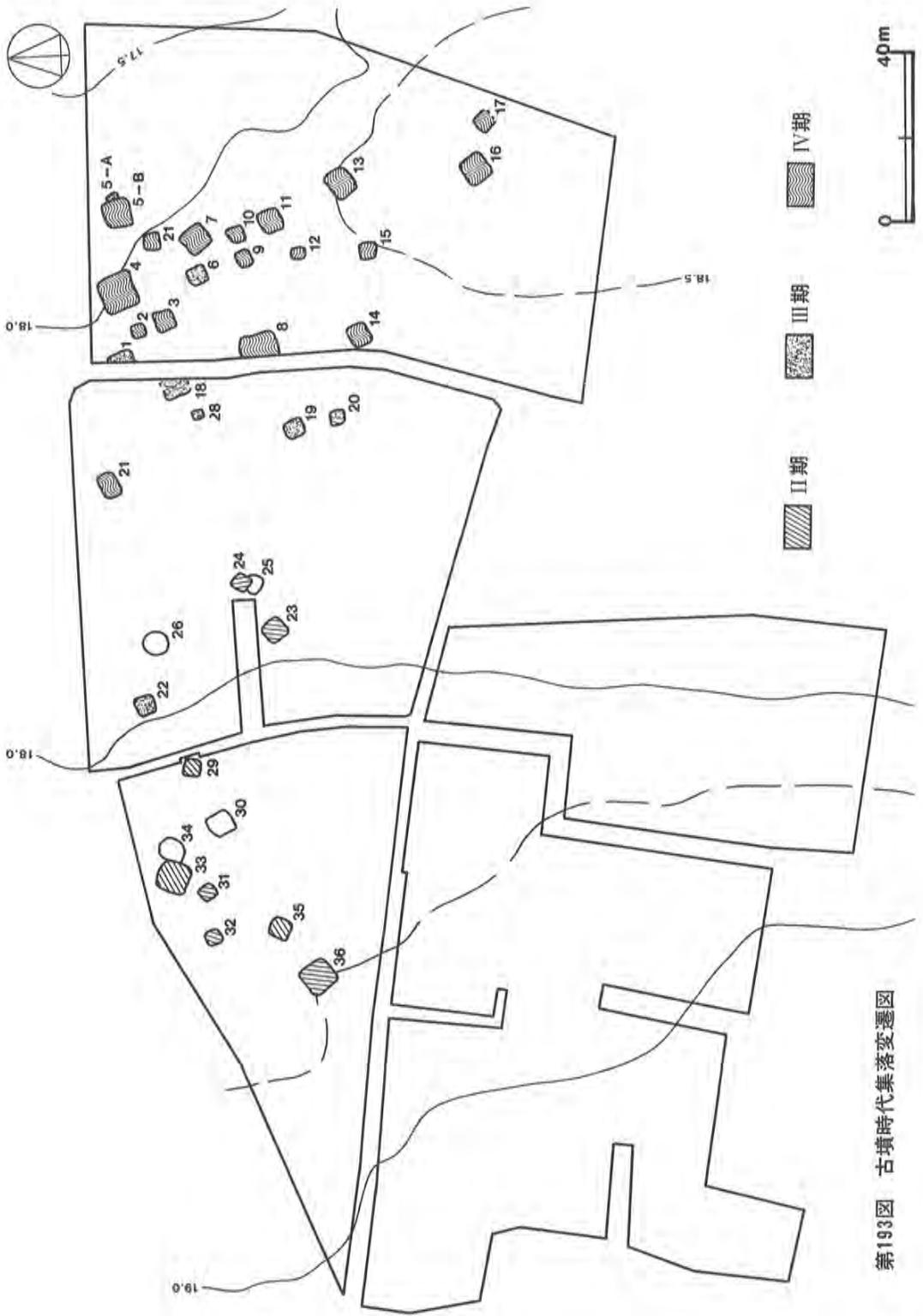


第191図 北前III期住居跡規模・主軸方向

に位置している。また、床の構造のうえで特徴的なことは、貯蔵穴の周辺の床面が楕円形又は長方形の高まりをもって検出されていることである。壁溝は、ほとんどの住居跡から検出されており、間仕切り溝も第3・4・8・11・13・14・16号住居跡から検出されている。とくに第13・16号住居跡からは、コーナーを区切るように2条検出されている。この間仕切り溝は、石野博信氏がいう「柱壁間溝」⁽⁹⁾のように、支柱穴と壁溝をつなぐ溝ではないが、同じように屋内を区切る施設と考えられる。主軸方向は、N-12°-W~N-44°-Wの範囲にあるが、第27号住居跡は、N-6°-Wでほぼ南北を示している。また、第2号住居跡は、N-74°-Eで、炉と出入口ピットが対面する北前遺跡のパターンで考えると第4号住居跡を向いていることになる。住居跡の規模は、50~60㎡



第192図 北前IV期住居跡規模・主軸方向

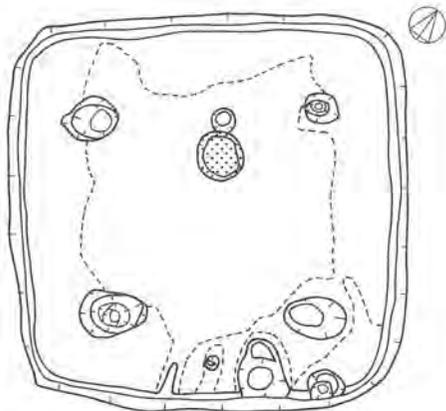


第193图 古墳時代集落変遷図

II期

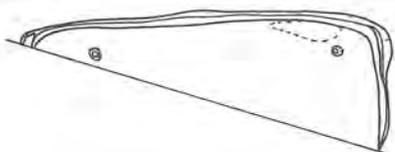


SI 33

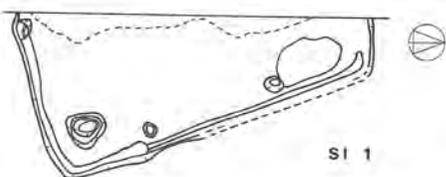


SI 36

III期

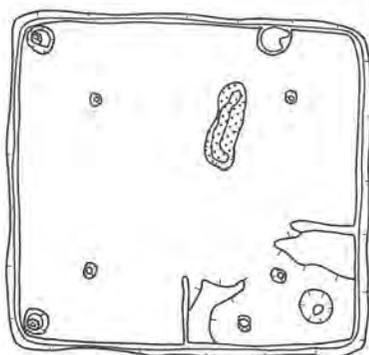


SI 18

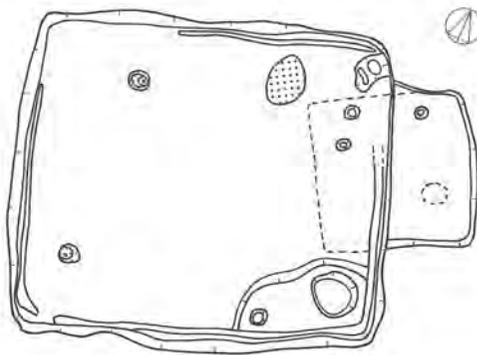


SI 1

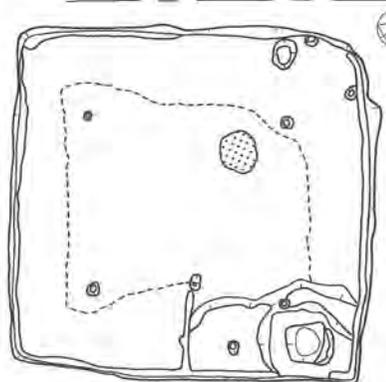
IV期



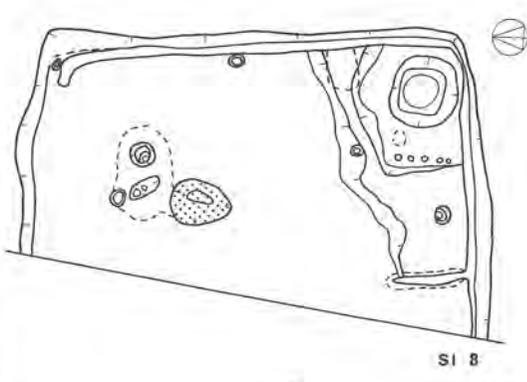
SI 16



SI 5



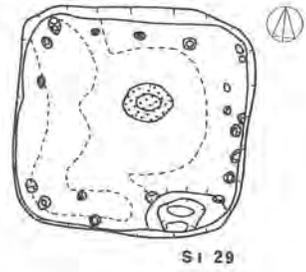
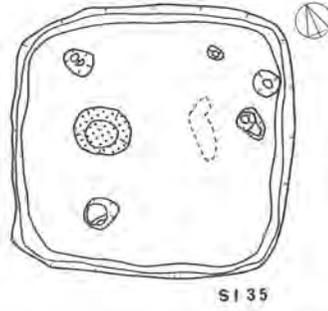
SI 4 0 4m



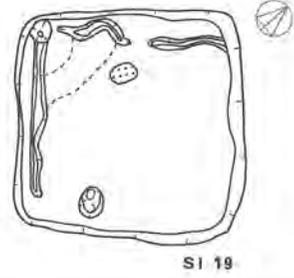
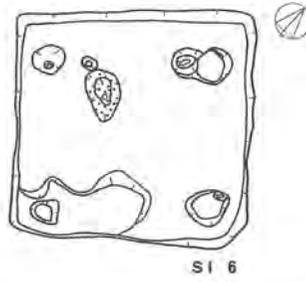
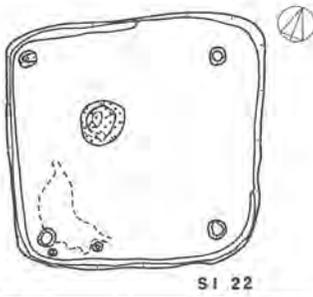
SI 8 0 3m

第194図 古墳時代住居跡形態図(1)

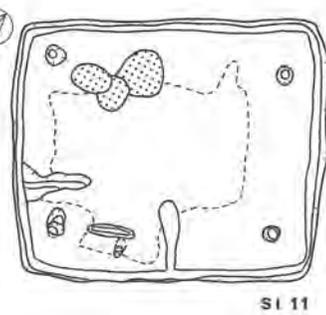
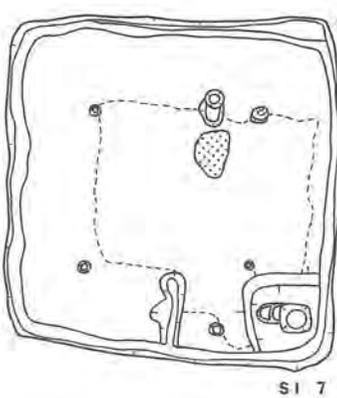
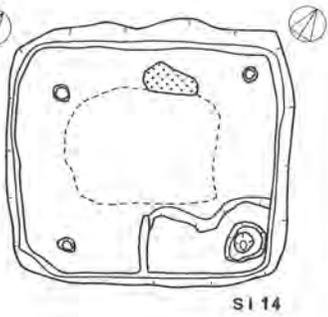
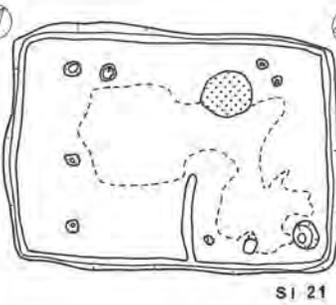
II期



III期



IV期

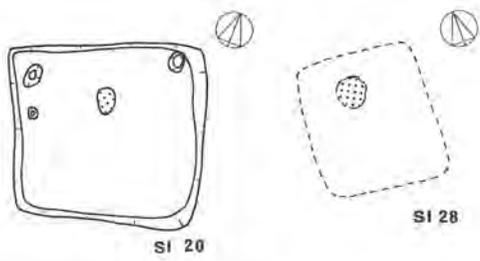


第195図 古墳時代住居跡形態図(2)

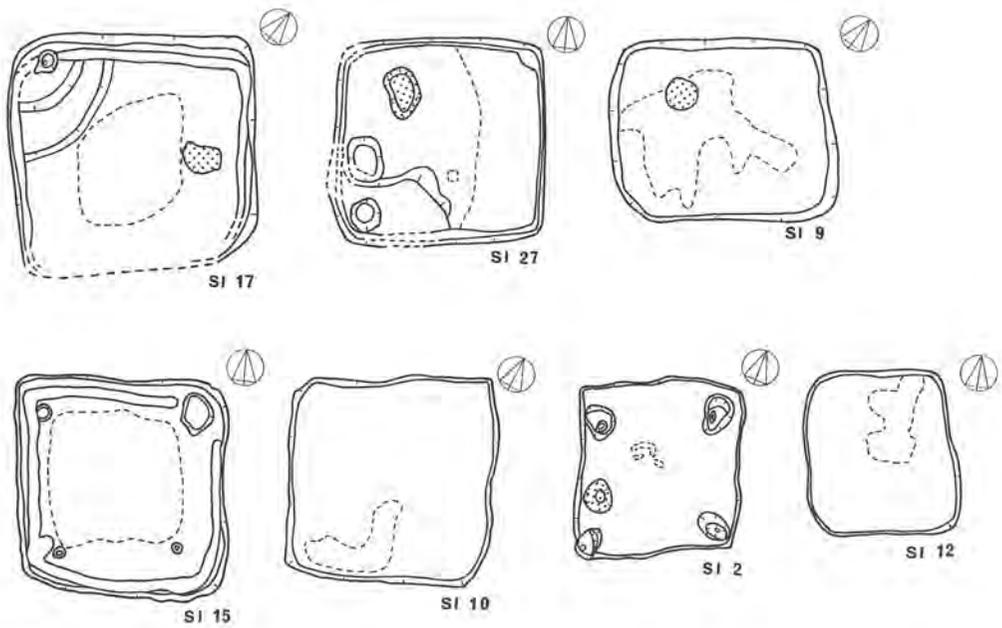
II期



III期



IV期



第196図 古墳時代住居跡形態図(3)

が2軒で、北前遺跡の中では超大形の住居跡である。中形の住居跡は細かく、25～30㎡が4軒、15～24㎡が5軒、10～12㎡が4軒と3つに分けられる。10㎡未満の住居跡は、2軒である。超大形の住居跡を中心として、中形の住居跡や小形の住居跡が3～10mの間隔で、まとまりをもって小集落を構成している「世帯共同体」と考えられる。大形の住居跡の間隔は、約21mである。この超大形の住居跡である第4・8号住居跡からは、炭化米が炉の焼土内や床面、床内及び貯蔵穴の覆土から出土している。本期から米作りが本格化してきていることは、甗が出土していることから窺われる。さらに、甗が一つの住居跡から2個も出土することからも推察することができる。第7・16号住居跡は、中形の住居跡で、甗を中心に特に多くの土師器が出土している。特に第16号住居跡は火災住居跡で、方形の平面形で、支柱穴を中央寄りにもち、間仕切り溝を2条もっている。遺物の出土状況は、甗が支柱穴上に逆位に置かれ、甗の中が中空のもの（第108図11）や壺、甗、胴部穿孔の埴、中実柱状の脚部の高坏、小形器台などの出土状況から柱を抜き取っていると考えられる。これらの出土状況からなんらかの祭祀行為を行ったと思われる住居跡である。第7号住居跡も同様に考えられる。

本期の集落は、東側の菅生沼へ延びている台地縁辺部に所在し、集落は大形の住居跡を中心に小形及び中形住居跡で形成されている。本期の人々は、台地上の畑作はもちろんのこと菅生沼周辺の湿地帯における水田耕作等に生活の基盤があったものと考えられる。

以上のように北前遺跡から検出された住居跡は、縄文時代前期、そして古墳時代前期のⅠ期からⅣ期の4期に区分することができる。当台地上に集落が形成されるのは、縄文時代前期（黒浜期）で、その後長い空白を経て古墳時代前期（五領期）に集落が形成されている。古墳時代前期のⅡ期からⅣ期という限られた時期の集落を考えると、Ⅱ期は、台地のほぼ中央部に2軒の大形住居跡を中心として、小集落が形成されている。この小集落は、2～4軒のグループで生産をともにする「世帯共同体」と考えられる。Ⅲ期は、台地の中央部からやや東部の菅生沼近くに集落が形成され、大形住居跡がなく中形住居跡が多く見られる。その中でも第18号住居跡は、「世帯共同体」の中心的な住居と考えられる。Ⅳ期は、中実柱状の脚部の高坏などに見られるように特徴的な土師器をもっており、台地の東部に2軒の超大形住居跡を中心として、中形住居跡や小形住居跡が列状に集落を形成している。超大形住居跡は、「世帯共同体」と「世帯共同体」が共業する「農業共同体」の中心的な存在の住居と思われる。北前遺跡の周辺で同時期の住居跡が報告されている県内の遺跡は、奥山下根遺跡、奥山A遺跡、小田林遺跡、神谷森遺跡や千葉県野田市三ッ堀遺跡、我孫子中学校校庭遺跡、柏市戸張一番割遺跡などがある。

表10 北前II～IV期住居跡別出土土師器一覽表

時 期	II 期						III 期						IV 期																				
住居跡 器 種	23	24	29	31	32	33	35	36	1	5-A	6	18	19	20	22	28	2	3	4	5-B	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	21	27
複口合縁 壺				1			1	2				2							2				1							3	1		
単口縁			4	2	3		4	1			2	1		1	1		1	3			6		1		1		3	2		1	1		
有 段																					1	1								1			
甕	1		3				4		2			1		4	2	1	1	4	2		9	3	1	1	3	1	2	2	13	1	5	1	
中形甕	1																1	1			1				1		1		1	1	3		
小形甕																					1												
台付甕	1	3	2		1	1	3			1										2	1				3				1				
中形台付甕							2														2												
小形台付甕																					1	1											
甗								1										1			1	1	1					2	1	2			
鉢										1									1								1	1			1		
埴																					1	1				1	1						
高 坏	5		4	1		2	5	5	1		2			1	1				1		2	1		1				2		1			
中高実柱状 器 台											1	1							1		5	1				2	1	1	1				
中器実柱状 器 台			2		1		3	1				1	1	1	1				2		1	1		2		2		3					
ミニチュア土器										1								1								2	1						
甕形			1																														
埴形																		1															
埴形																		1	1	1											1		
鉢形		1									1							2				1									1		
壺形																																	
丸底										2							2		2	2				1		1		1			1		
平底																	1		1		2			1					1				

中形甕・台付甕

口縁部径10～14cm

小形甕・台付甕

口縁部径10cm未満

注

- (1) 新井和之 「黒浜土器について」『縄文文化の研究』 1982年
- (2) 蓮田市教育委員会 「黒浜貝塚群天神前遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集 1991年
- (3) 笹森健一 「縄文時代前期の住居と集落(I), (II), (III)」 1981～1982年
- (4) 八王子市栢田遺跡調査会 「神谷原III」 東京都八王子市栢田遺跡群の調査 1982年
- (5) 立花 実 「東日本の屈曲口縁鉢」『西相模考古』 第1号 1992年
- (6) 高橋 和 「東北地方南部の古墳時代前期高坏に関する一視点」『法政史論』 第13号法政大学大学院日本史学会 1985年

- (7) 万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会 「シンポジウム 福島県に於ける古代土器の諸問題」 1989年 岩崎卓也 「二古墳分布の拡大」『古代を考える古墳』 1989年
- (8) 都出比呂志氏の「世帯共同体」は『家長世帯を核とし、その兄弟や父母の世帯を合わせた複合家族である可能性が高い』とされる。
- (9) 石野博信 「日本原始・古代住居の研究」 1991年

参考文献

- (1) 茨城県教育財団 「上片田A・B・C遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第53集 1988年
- (2) 茨城県教育財団 「大生郷遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告XII 1981年
- (3) 鳥羽正之氏 「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」『埼玉考古』 第28号 1991年
- (4) 埼玉県教育委員会 「黒浜貝塚群宿上貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第十六集 1987年
- (5) 千葉県文化財センター 「関宿町飯塚貝塚」千葉県文化財センター調査報告書第156集 1989年
- (6) 野田市遺跡調査会 「半貝・倉之橋・勢至久保」 1982年
- (7) 野田市遺跡調査会 「梅の台遺跡」遺跡調査会報告第6冊 1987年
- (8) 野田市本郷遺跡調査団 「本郷遺跡発掘調査報告書」 1980年
- (9) 野田市郷土博物館 「野田と貝塚」 1989年
- (10) 石下町史編纂室 「鴻野山貝塚発掘報告書」石下町史資料第2集 1987年
- (11) 宇都宮市教育委員会 「茂原古墳群」宇都宮市埋蔵文化財調査報告第28集 1990年
- (12) 我孫子市教育委員会 「我孫子中学校校庭遺跡」我孫子市埋蔵文化財報告第7集 1985年
- (13) 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団 「赤羽根」栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 1984年
- (14) 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団 「花の木町遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第83集 1987年
- (15) 栃木県文化振興事業団 「烏森遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第80集 1986年
- (16) 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「荒砥前原遺跡」 1985年
- (17) 松戸市教育委員会 「諏訪原遺跡」松戸市文化財調査報告第5集 1974年
- (18) 向原遺跡調査会 土浦市教育委員会 「向原遺跡」 1987年
- (19) 福島県河沼郡会津坂下町教育委員会 「若宮地区遺跡発掘調査報告書 樋渡台畑遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第17集 1990年
- (20) 福島県いわき市教育委員会 いわき市教育文化事業団 「龍門寺遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第11集 1985年
- (21) 栃木県教育委員会 「溜ノ台遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第107集 1990年
- (22) 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 「大崎台遺跡発掘調査報告I」 1985年
- (23) 千葉県教育委員会 千葉県文化財センター 「公津原II」 1981年
- (24) 日本考古学協会編 「シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題」 1988年

- (25) 石川県立埋蔵文化財センター 「漆町遺跡Ⅰ」 1986年
- (26) 石川県立埋蔵文化財センター 「漆町遺跡Ⅱ」 1988年
- (27) 野田市桜台遺跡調査会 「桜台遺跡発掘調査報告書」 1979年
- (28) 勝田市教育委員会 「三反田遺跡1・2次」 1978年
- (29) 成増一丁目遺跡調査会 板橋区教育委員会 「成増一丁目遺跡発掘調査報告」 1987年
- (30) 益子町教育委員会 「向北原 古墳時代前期集落跡発掘調査の記録」 1988年
- (31) 東海埋蔵文化財研究会 「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」 1991年
- (32) 市原市文化財センター 「北旭台遺跡」 1990年
- (33) 那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会 「那珂湊市部田野山崎遺跡」 1990年
- (34) 愛知県埋蔵文化財センター 「廻間遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
1990年
- (35) 茨城県教育財団 「松葉遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ 1979年
- (36) 茨城県教育財団 「屋代A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告XⅣ 1982年
- (37) 茨城県教育財団 「奥山A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第31集 1988年
- (38) 茨城県教育財団 「奥山下根」 茨城県教育財団文化財調査報告第29集 1985年
- (39) 茨城県教育財団 「小田林遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第51集 1989年
- (40) 茨城県教育財団 「境松遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第41集 1987年
- (41) 茨城県教育財団 「長峰遺跡(上)(下)」 茨城県教育財団文化財調査報告第58集 1990年
- (42) 茨城県教育財団 「神谷森遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第66集 1991年
- (43) 比田井克仁 「古墳出現段階における伝統性の消失」『古代』 第91号早稲田大学考古学会
1991年
- (44) 茨城県教育財団 「志筑遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告Ⅴ 1980年
- (45) 鹿島町木滝台遺跡発掘調査会 日本文化財研究所 「木滝台遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 鹿島町の文化財第6集 1978年

結 語

茨城県自然博物館（仮称）建設用地内に所在する原口遺跡、北前遺跡の発掘調査は、平成2年4月から平成3年6月末日までの1年3か月にわたって実施した。調査の結果、縄文時代、古墳時代の遺構・遺物を検出し、多くの貴重な資料を得ることができた。

原口遺跡は、縄文時代後期の竪穴住居跡11軒、土坑60基などが検出されている。遺物は、縄文時代後期の堀之内式期と加曾利B式期の土器が中心であるが、同時期に併行の三十稲場式期の蓋なども出土している。住居跡は、ほぼ円形を呈し、床中央部に地床炉をもっている。また、地点貝塚が、住居跡1軒、土坑2基から出土している。貝は、ヤマトシジミを主体としている。また、貝とともに魚骨や獣骨も出土している。これらのことから縄文時代に原口地域に住む人々の生活や他の地域との交流、さらに当時の古環境などを窺い知ることができる。

北前遺跡は、縄文時代と古墳時代の複合遺跡であり、縄文時代前期（黒浜期）の竪穴住居跡4軒、古墳時代前期（五領期）の竪穴住居跡33軒が検出されている。縄文時代前期の2軒の竪穴住居跡内から地点貝塚が検出されている。貝は、カキ、ハマグリ、アサリ、アカニシ等であり、縄文の「海進期」を知る手がかりとなる。古墳時代は、前期という限られた時期であるが、遺物は、壺、甕、台付甕、甑、鉢、埴、高坏、器台、ミニチュア土器など多くの器形とともに、弥生時代の系統を残す土師器も出土している。古墳時代の竪穴住居跡の平面形は、隅丸方形、隅丸長方形および方形や長方形と様々である。住居跡内には、壁溝や間仕切り溝又は出入口ピットなどを検出している。第35号住居跡からは、口縁部や胴部上位に網目状燃糸文、頸部に円形の浮文をもち赤彩された南関東系の壺が出土している。また、住居跡間での土師器の接合も見られる。調査区の東部、菅生沼寄りの多くの住居跡からは、中実柱状の脚部をもつ高坏など特徴的な土師器が出土している。また、33軒の住居跡のうち17軒が、火災住居跡である。第16・29号住居跡は、遺物の出土状況から住居跡内祭祀について考えるときの貴重な資料となるものと思われる。

原口遺跡、北前遺跡の調査と整理を担当し、多くの資料をより客観的に報告できるように努めて編集した。今後、さらにこの地域の調査が行われ、岩井市の歴史が詳細に解明されることを期待し、この報告書が、ささやかな一助となれば幸いである。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで、岩井市教育委員会をはじめ、関係各位から多くの御指導、御協力をいただき、文末ながら深く感謝の意を表す次第である。

附 章

原口遺跡・北前遺跡出土動物遺体について

埼玉大学教養部 教授 小池 裕子

ウラジオストック・ロシア科学アカデミー
極東民族研究所 研究員

Vera Tolostonogova

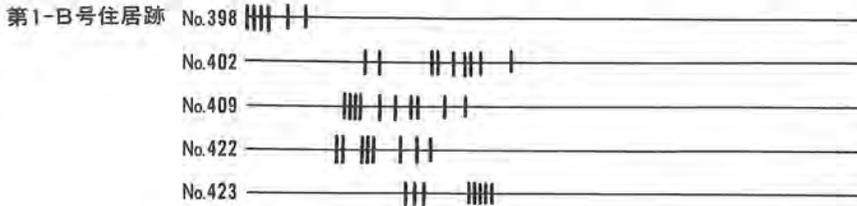
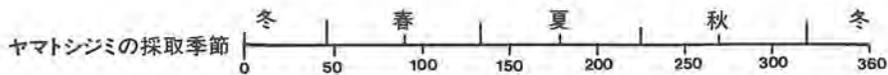
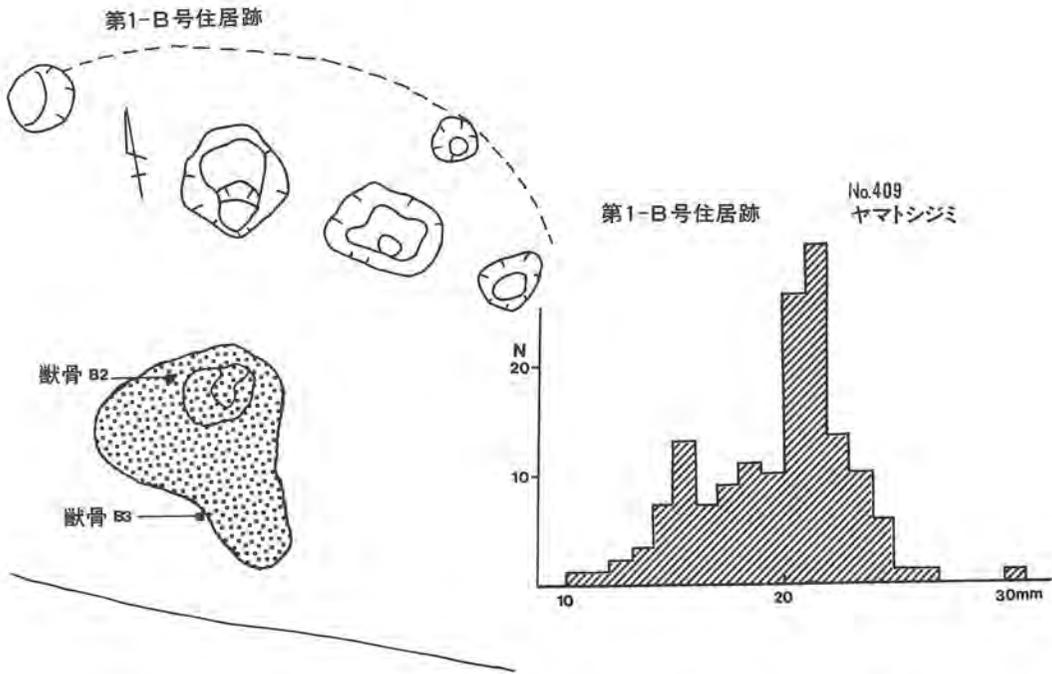
〈原口第1-B号住居跡内貝層〉

原口遺跡東端部に位置する第1-B号住居跡の中央部の覆土から、ヤマトシジミを主体とする貝層と獣骨数点が出土した。この住居跡の時期は縄文時代後期堀之内I期に属すると考えられた。炉付近の獣骨片B2(17.308)はニホンジカ中指骨の遠位端破片で、骨端縫合が完成していない若い個体のものである。壁面付近の獣骨片B3(17.558)はイノシシの右肩胛骨破片であった。

貝層サンプルは、貝層上面のNo.395サンプル(SI-1-B-395)、炉直上のNo.398, No.402, No.409, No.416, No.423(SI-1-B-398, 402, 409, 416, 423)、炉付近の上層に位置するNo.421(SI-1-B-421)、No.421より数cm上部のNo.422(SI-1-B-422)の8サンプルであった(表1)。これらの貝サンプルの貝類組成はヤマトシジミのほか、ハマグリ・シオフキ・オオタニシを含んでいた。

ヤマトシジミの殻高は10mmから32mmまでの範囲にあり平均20.4mmとやや小型であった。分析貝の大半において殻頂付近の外層が消失していたので正確な年齢は査定できなかったが、ほとんど貝縁付近の冬輪だけの2年貝と推定され、その成長経過は非常に順調な生育であった。

ヤマトシジミの貝殻成長線の示す採取季節は、第1-B号住居跡内中央部貝層の最下層に位置するSI-1-B-423がほぼ90~130日目までの春期後半に採取された貝で構成されていた。同じく炉直上と記載されていたSI-1-B-398ではほぼ冬輪中心前後から30日目までの2・3月に採取された貝で構成され、同じく炉直上のSI-1-B-402では冬輪中心から70~150日目までの春期に採取された貝を含み、同じく炉直上のSI-1-B-409が60~120日目の同じく春期を示した。炉付近のより上層に位置するSI-1-B-422では50~100日目までの春期を示した。



第1図 原口遺跡第1-B号住居跡出土具分析図

〈原口遺跡第35号土坑内貝層〉

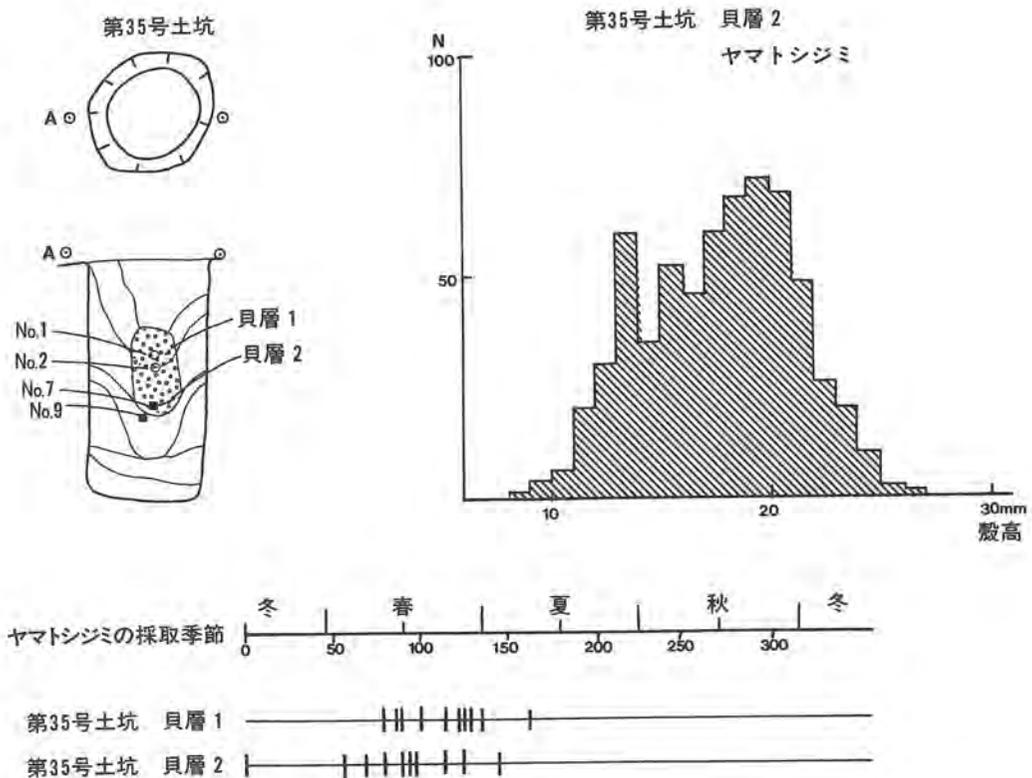
原口遺跡西端部に位置する土坑群のひとつ第35号土坑の覆土からは、ヤマトシジミの貝層のほか魚骨・獣骨が検出された。この土坑の時期は伴出土器片から縄文時代後期堀之内I期に属すると考えられている。図1の第35号土坑セクション図に示したように、貝層は第1層(SK-35-1)と第2層(SK-35-2)に分かれ、その間層に魚骨No.1とNo.2が発見された。また貝層下の第3層からは獣骨No.7とNo.9が出土し、第4層には魚骨の集積がみられた。

これらの貝サンプルの貝類組成(表1)はヤマトシジミの単一種で構成されていた。獣骨No.7はイノシシ左下顎第1後臼歯で、咬耗度VIIIの老齢個体であった。獣骨No.9焼骨破片で、シカの中指骨または中足骨の遠位端破片で、縫合未完成の若齢個体であった。魚骨No.1はクロダイ第1きりよこ鰭棘で全

長64mmを計る大型のものであった。魚骨No2は同じくタイ科の鱗棘であった。最下層の第4層から出土した魚骨は、いずれも体長約7cm以下と推定される小型魚に属するもので、前上顎骨左1、歯骨左1右2、前鰓蓋骨右1、間鰓蓋骨右1、腹椎22、尾椎20など頭部・体部とも出土していた。前上顎骨や歯骨の形態からハゼ科の稚魚などが該当すると考えられる。

SK-34-2で調べられたヤマトシジミの殻高は8mmから26mmまでの範囲にあり平均18.6mmとヤマトシジミとしては小型であった(図1)。分析貝の大半において殻頂付近の外層が消失していたので正確な年齢は査定できなかったが、ほとんど貝縁付近の冬輪だけの2年貝と推定される。その成長経過は全般的に順調な生育であった。

ヤマトシジミの貝殻成長線の示す採取季節は、下層に位置するSK-35-2のサンプルでは冬輪中心60日目から150日目の春期を示し、その上層のSK-35-1サンプルでは90日目から160日目、若干季節が推移するのが認められた。



第2図 原口遺跡第35号土坑出土貝分析図

〈北前遺跡第30号住居跡内貝層〉

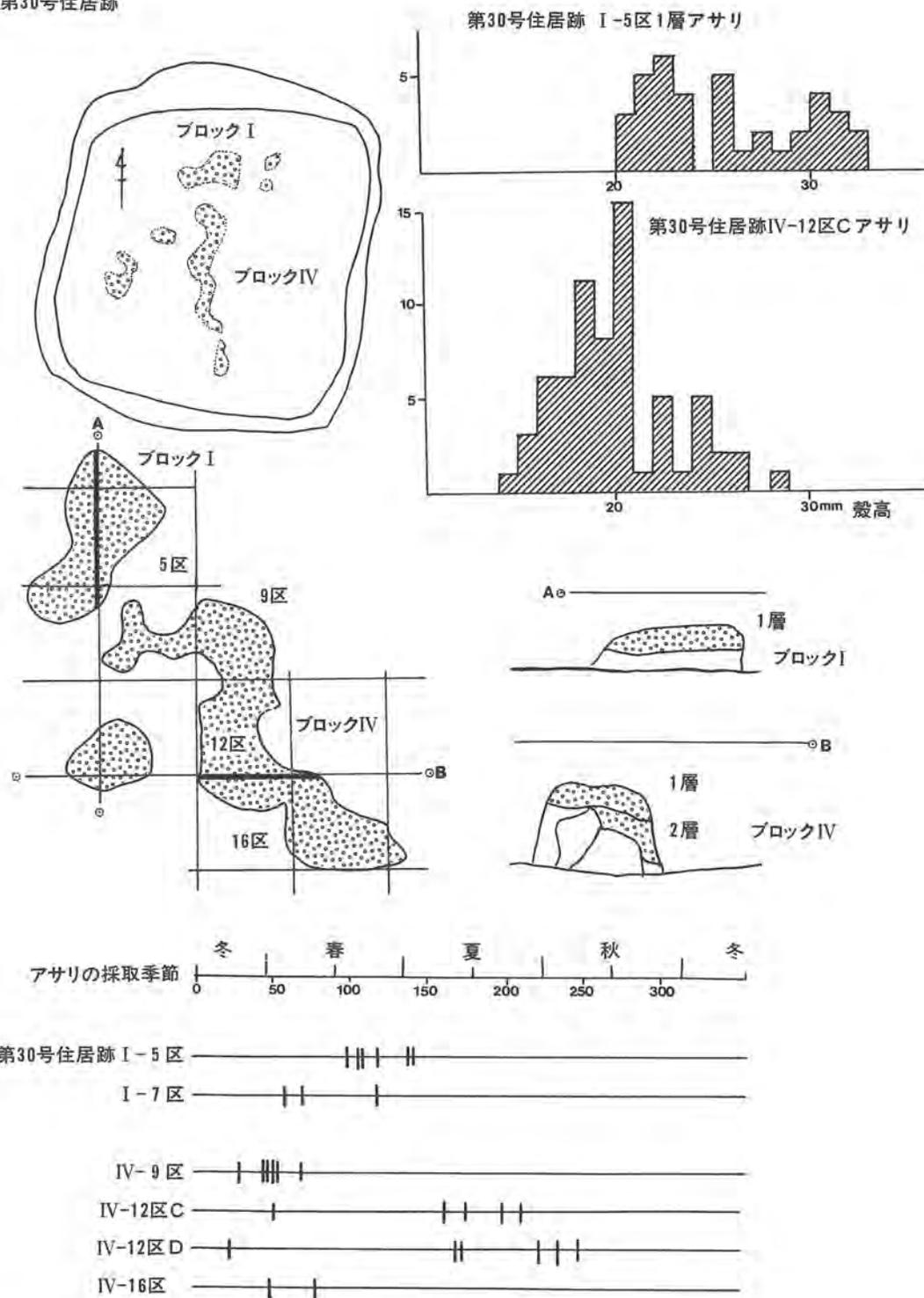
菅生沼西岸に位置する北前遺跡のほぼ中央から縄文時代前期黒浜式土器を伴出する第30号住居跡が発見され、その覆土中にマガキを主体とする貝層が検出された。貝層はブロックIからブロックVIIまで7箇所の地点貝層として残存し、そのうち中央に位置するブロックIとブロックIVに関して、ブロックIに属する5区の貝層(SI-30-I-5)、同じく貝層1層(SI-30-I-5-1)と7区の貝層(SI-30-I-7)、ブロックIVに属する9区の貝層(SI-30-IV-9)、同じく貝層2層(SI-30-IV-9-2)、12区の貝層(SI-30-IV-12)、16区の貝層1層(SI-30-IV-16-1)、同じく貝層2層(SI-30-IV-16-2)、同じく貝層3層(SI-30-IV-16-3)の計9サンプルを分析した(図3)。

これらの貝サンプルの貝類組成(表3)はいずれもマガキを主体とし、それにアサリ・ハマグリ・オキシジミが混じり、層によってはサルボウ・シオフキやアカニシ・ウミノナ類がかなり含まれており、またヤマトシジミ・オオタニシといった汽水・淡水産の貝やハイガイ・オオノガイなど鹹水域など幅広い生態域の貝が含まれていた。獣骨魚骨は特に検出されなかった。

アサリの殻高はブロックIとブロックIVでかなり大きさが異なり、ブロックIでは20mmから34mmと比較的大型で、ブロックIVでは14mmから30mmと比較的小型であった(図1)。アサリの年齢はブロックIでは年齢を経た個体が多かったが、ブロックIVでは若齢化していた。その成長経過をみると、第1年目・第2年目は比較的順調な生育であるが採集年に入ると成長速度が減少し、夏期に採集された個体には2・3箇所の成長遅延がみられた。

アサリ貝殻成長線の示す採取季節は、貝層ブロックIのSI-30-I-5では冬輪中心110日目から140日目の夏期を示し、同じくSI-30-I-7では分析例は少ないが60日目から120日目であった。貝層ブロックIVのSI-30-IV-9では冬輪中心から30~120日目の範囲にあり、50~60日目の春期後半に採取された個体が多かった。SI-30-IV-12では30~190日目にあり、180日目前後に集中した。SI-30-IV-16-1では分析例は少ないが50~80日目の春期を示した。それぞれ各分析単位ごとに特徴的な季節性を示したが、各貝層ブロックが点在し層位的関係が把握できなかった。全体の堆積期間を推定することはできなかった。

第30号住居跡



第3図 北前遺跡第30号住居跡出土具分析図

〈まとめ〉

原口遺跡出土貝層と北前遺跡出土貝層では時期が異なり、縄文前期黒浜期に属する北前遺跡出土貝層では獣骨・魚骨は検出されず、貝類ではマガキが主体で次いでアサリが多くそのほか純鹹域に生息する二枚貝を種多く含んでいた。アサリの年齢組成はブロックⅠでは年齢を経た大型貝がみられたが、ブロックⅣでは比較的若い個体が多かった。殻成長は捕獲2,3年前は順調であったが、捕獲前年から障害輪が認められた。

縄文後期堀之内Ⅰ式土器を伴出した原口遺跡の第1-B号住居跡内貝層と第35号土坑内貝層とともに、ヤマトシジミが優先した汽水域の貝類種に変わり、また獣骨・魚骨の出土もわずかながら伴うようになる。ヤマトシジミの特徴は非常に小型であることでその大半が1年目の冬輪のみの2年貝で若齢化が相当進行し捕食圧が高かったことをうかがわせた。

北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定

はじめに

北前遺跡（岩井市大字大崎所在）は、菅生沼西岸の台地上に位置する。台地を東西に開析する谷を挟んだ南側には、縄文時代から古墳時代の集落址である高崎貝塚が存在する。本遺跡では、発掘調査により縄文時代と古墳時代の遺構・遺物が検出され、古墳時代前期終末期に相当する住居址（D地区29号住居址、35号住居址）の床面直上から炭化材が検出された。これらの炭化材は、住居址の建築材と考えられている。

今回の分析調査では、D地区29号住居址および35号住居址から検出された炭化材について材同定を行い、建築材の樹種を明らかにすることを目的とした。

1 試料

試料は、D地区29号住居址の床面直上から検出された炭化材1点（No.3）と、35号住居址の床面直上から検出された炭化材1点（No.247）である。

2 方法

試料を乾燥させたのち横断面（木口）・放射断面（柎目）・接線断面（板目）の3断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

3 結果

試料は2点ともコナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種であった。同定根拠とした主な解剖学的特徴や現在種の一般的な性質を以下に記す。なお、一般的性質などについては「木の事典 第2巻」（平井，1979）を参考にした。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟する

グループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州 (岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州 (山形・静岡県以西)・四国・九州 (北部) に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

4 考察

同定されたクヌギ節は建築材としてよく用いられ、関東地方の遺跡からは同属のコナラ節やクリと共に、建築材として多く出土する樹種である (例えば、高岡, 1984; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1984, 1987など)。クヌギ節は、本遺跡と谷をはさんで南側に隣接する高崎貝塚のA区8住居址でも認められており、住居の建築材として一般的に用いられていたことが予想される。しかし、今回の分析調査では各住居址から1点のみ採取された試料に対して同定を行ったため、建築材の樹種構成については不明である。

焼失住居址では、建築材の多くは火災やその後の埋積過程で失われており、樹種構成や傾向などを知ることは容易ではない。したがって、建築材に関する検討を行う際には、各住居址ごとに可能な限り多くの試料について材同定を行うことが望ましい。

文献

平井信二 (1979) 木の事典 第2巻. かなえ書房.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1984) 古墳時代の樹種鑑定. 「尾ヶ崎遺跡—縄文・古墳時代集落跡の調査—」, 埼玉県庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会, P.159-162.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1987) 炭化材・炭化種子同定 「一字都宮競馬場附属総合きゅう舎建設地内遺跡—御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第85集, P.193-197.

高岡正之 (1984) 赤羽根遺跡出土の炭化物について. 「赤羽根 一般国道50号 (岩舟~小山バイパス) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告〈本文編〉」, 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団, P.360-361

写真図版

原口遺跡

北前遺跡



北前遺跡出土 中実柱状の脚部をもつ高坏・器台



作業風景(1)



作業風景(2)



完掘全景

トレンチによる試掘

第1-A号住居跡

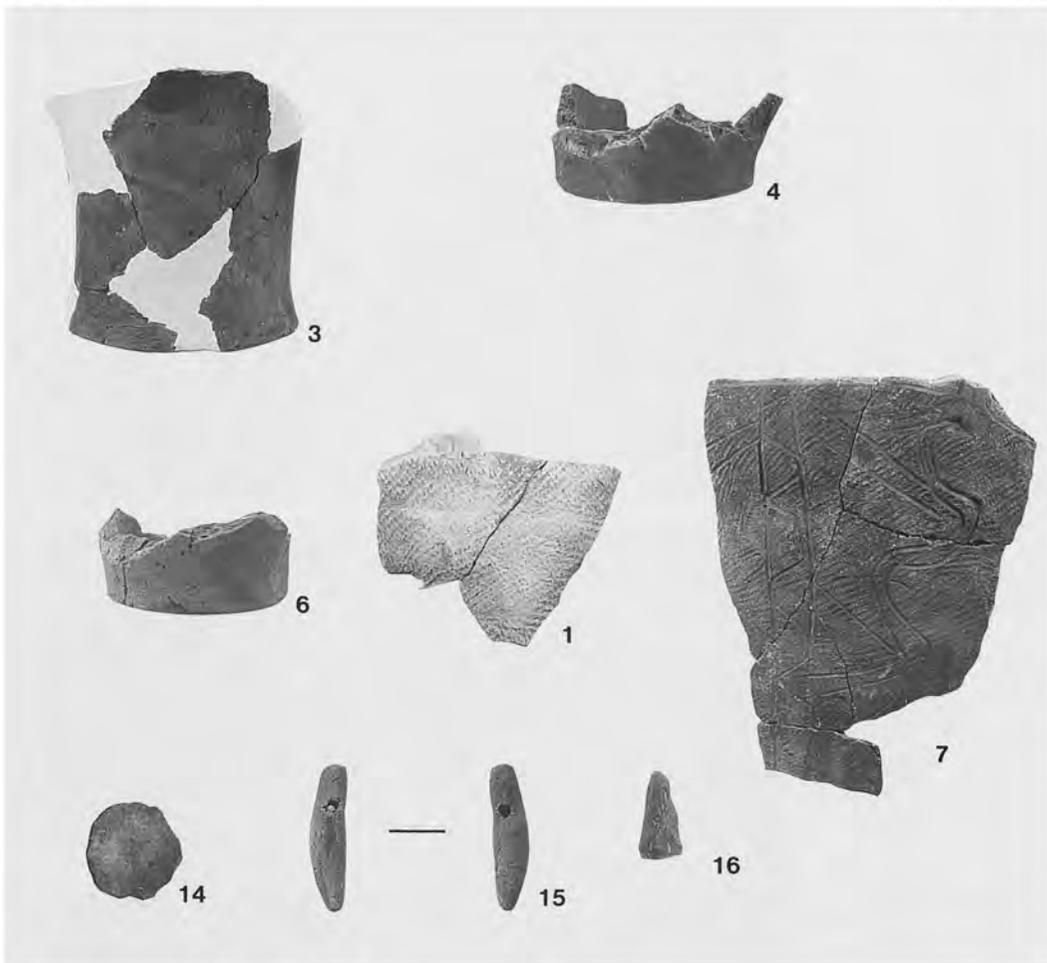


第1-B号住居跡



第1-B号住居跡
貝出土状況

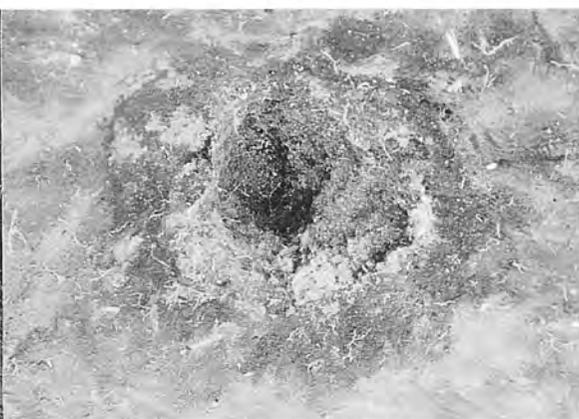




第1-A・1-B号住居跡出土遺物



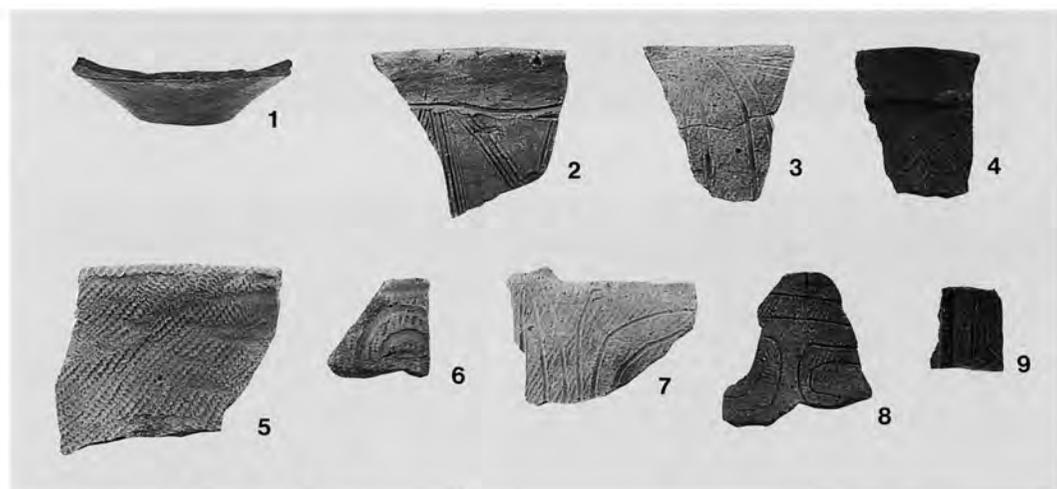
第1-B号住居跡遺物出土状況



第1-B号住居跡炉



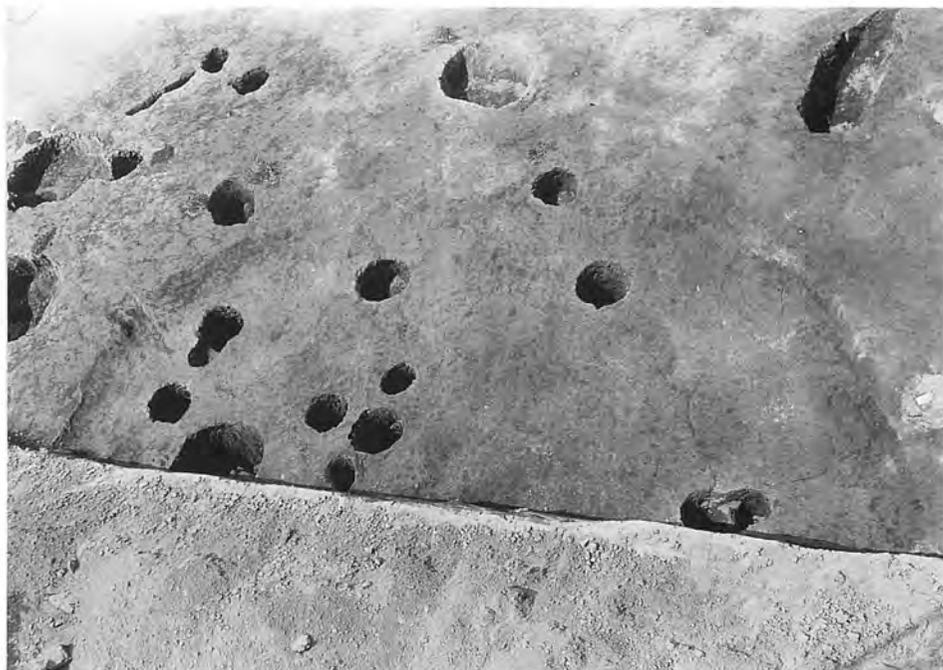
第2-A・2-B号住居跡



第2-A・2-B号住居跡出土遺物



遺構説明風景



第3号住居跡



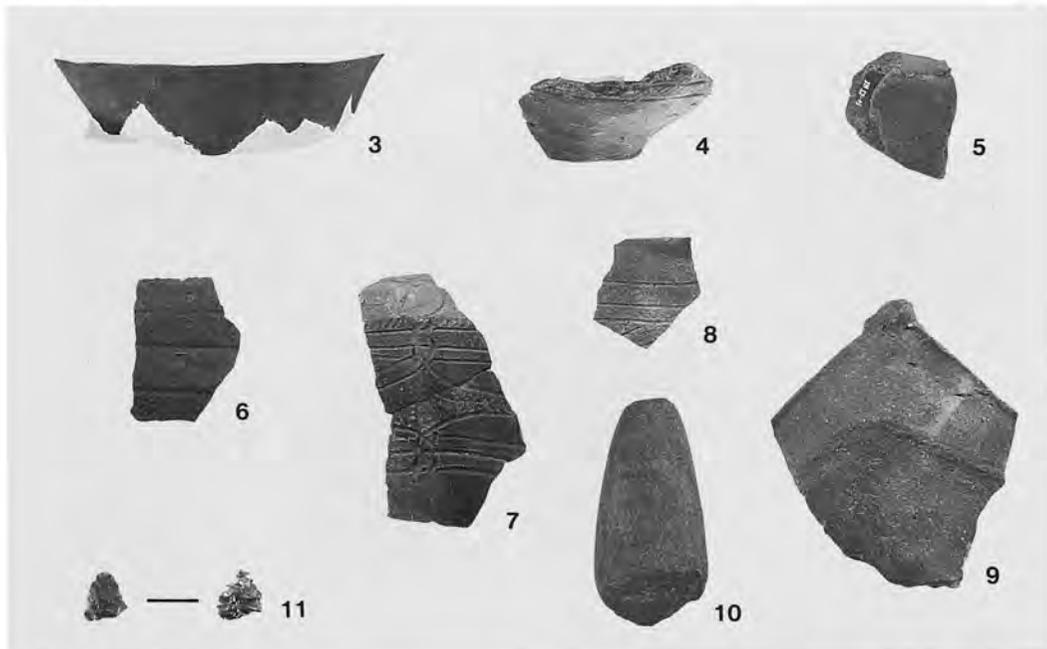
第3号住居跡遺物出土状況(1)



第3号住居跡遺物出土状況(2)



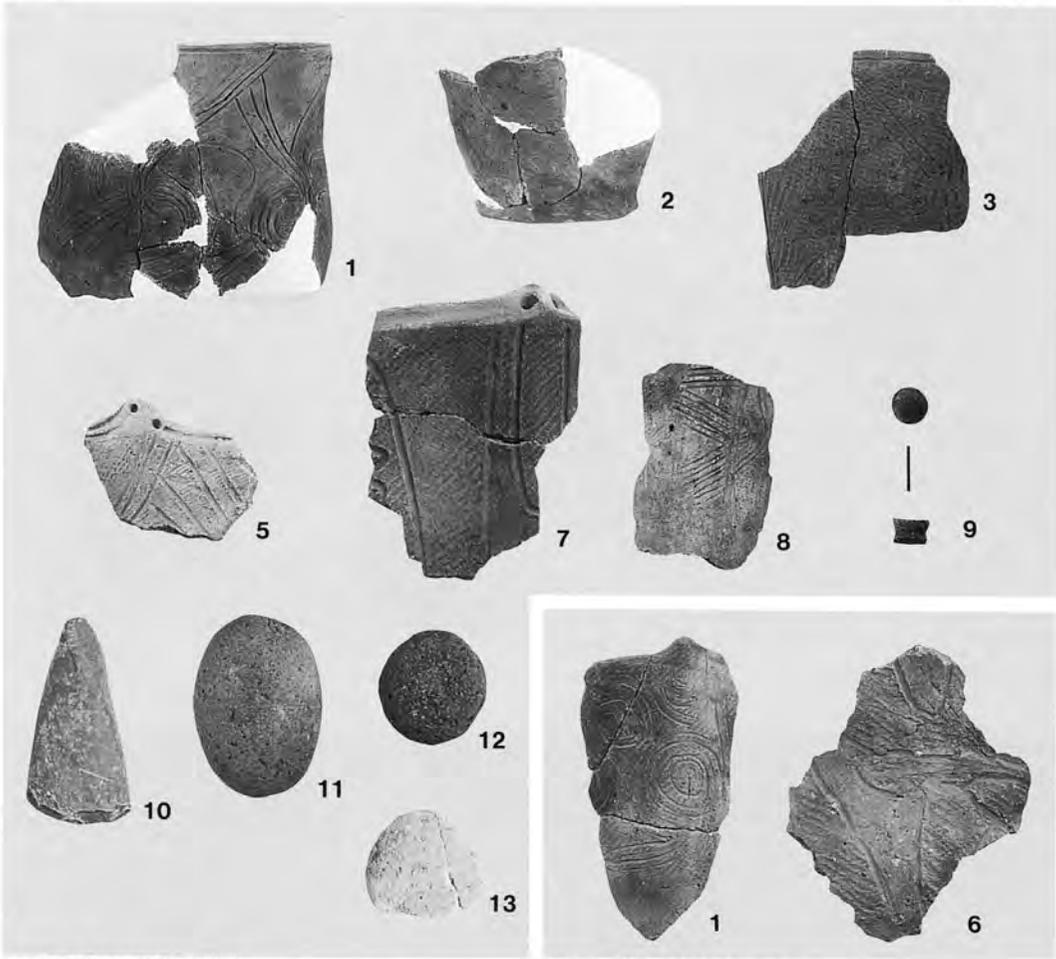
第3号住居跡出土土器



第3号住居跡出土遺物



第4・5号住居跡



第4号住居跡出土遺物

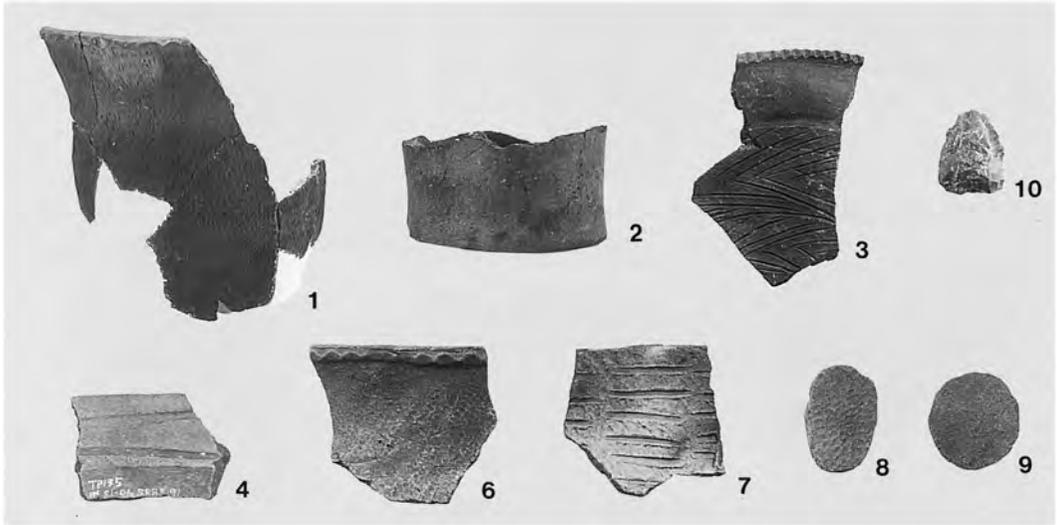
第5号住居跡出土土器



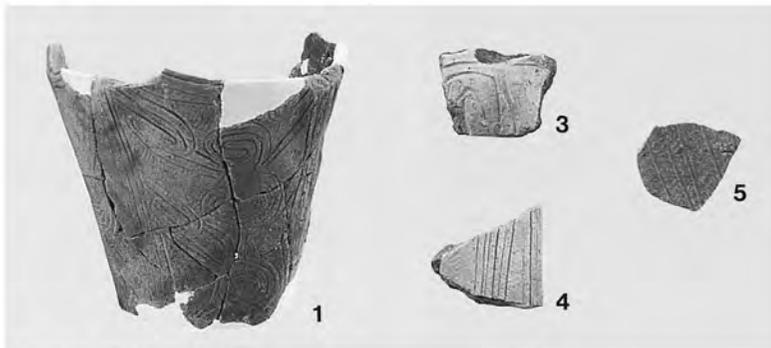
第4・5号住居跡遺物出土状況



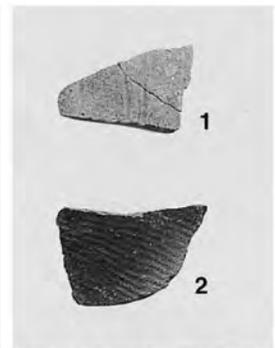
第6号住居跡



第6号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土土器



第9号住居跡出土土器



第14号土坑遺物出土状況



第14号土坑出土土器



第20号土坑出土土器



第30号土坑出土土器



第37号土坑出土土器



第38号土坑遺物出土状況



第39号土坑出土土器



第35号土坑貝・魚骨出土状況



第35号土坑貝出土状況(1)

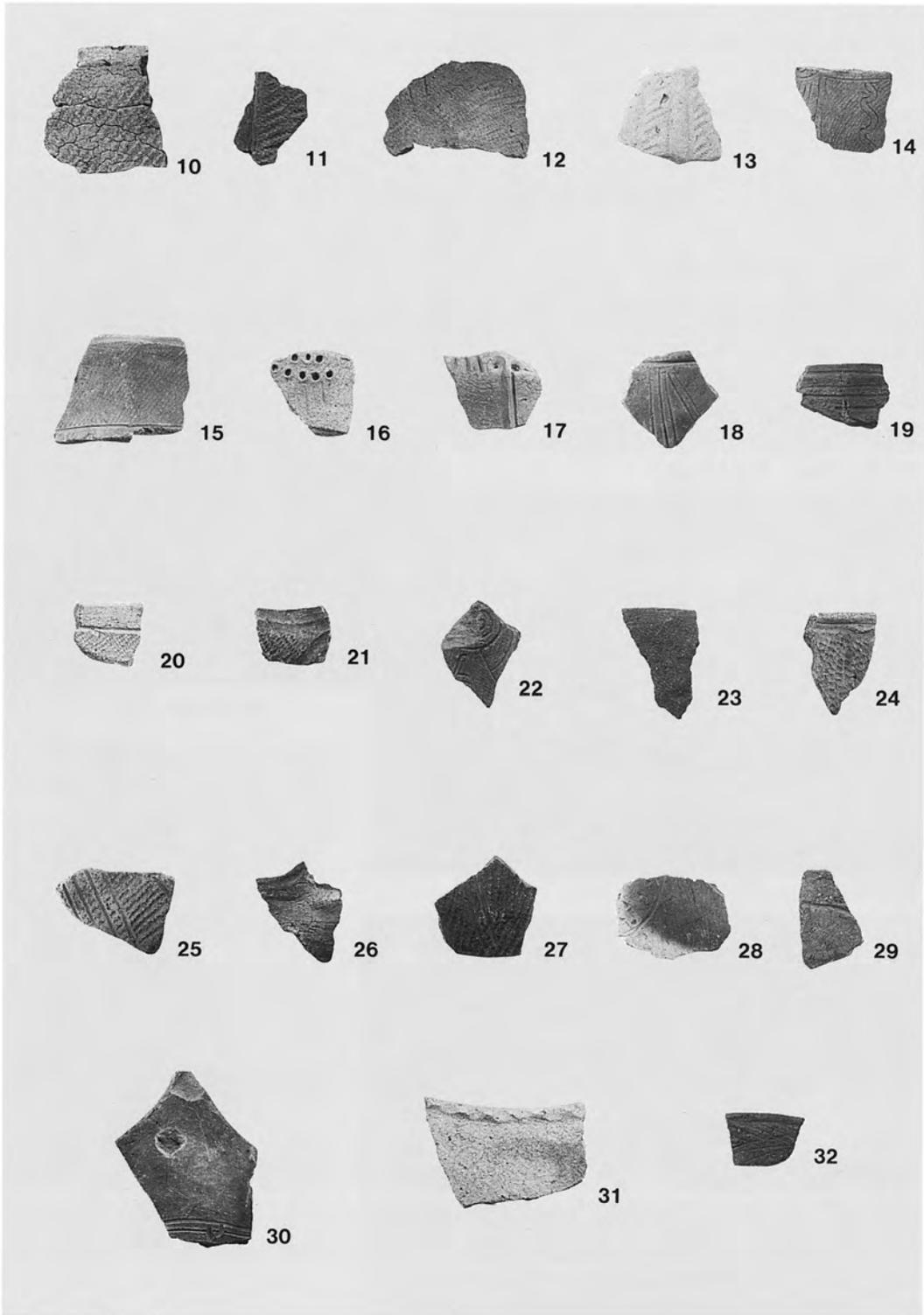


第35号土坑貝出土状況(2)

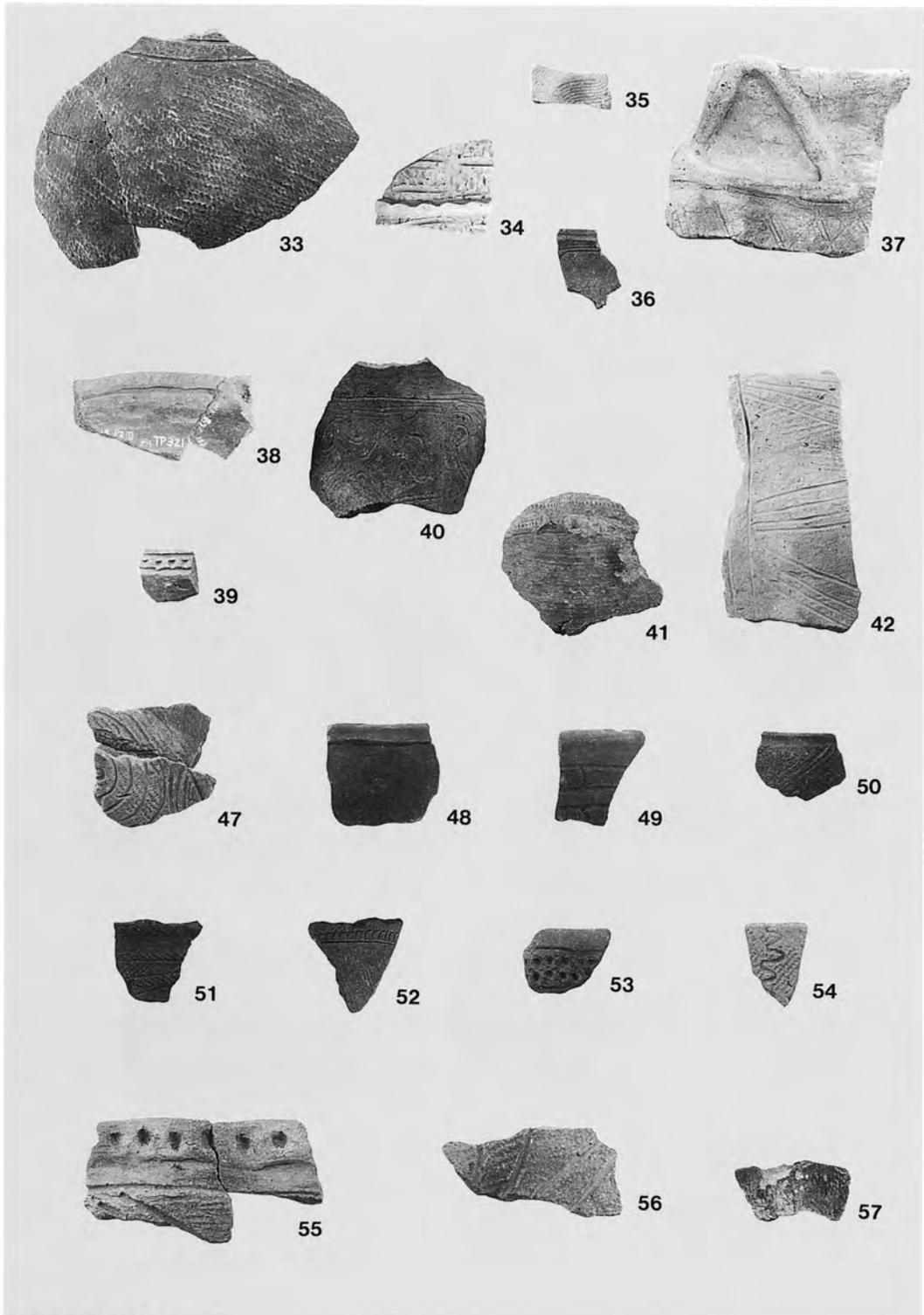


第48号土坑貝出土状況

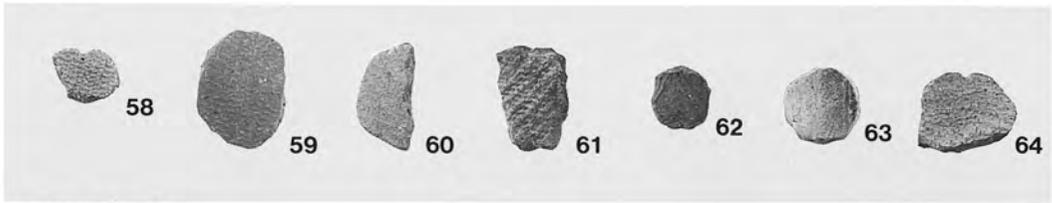




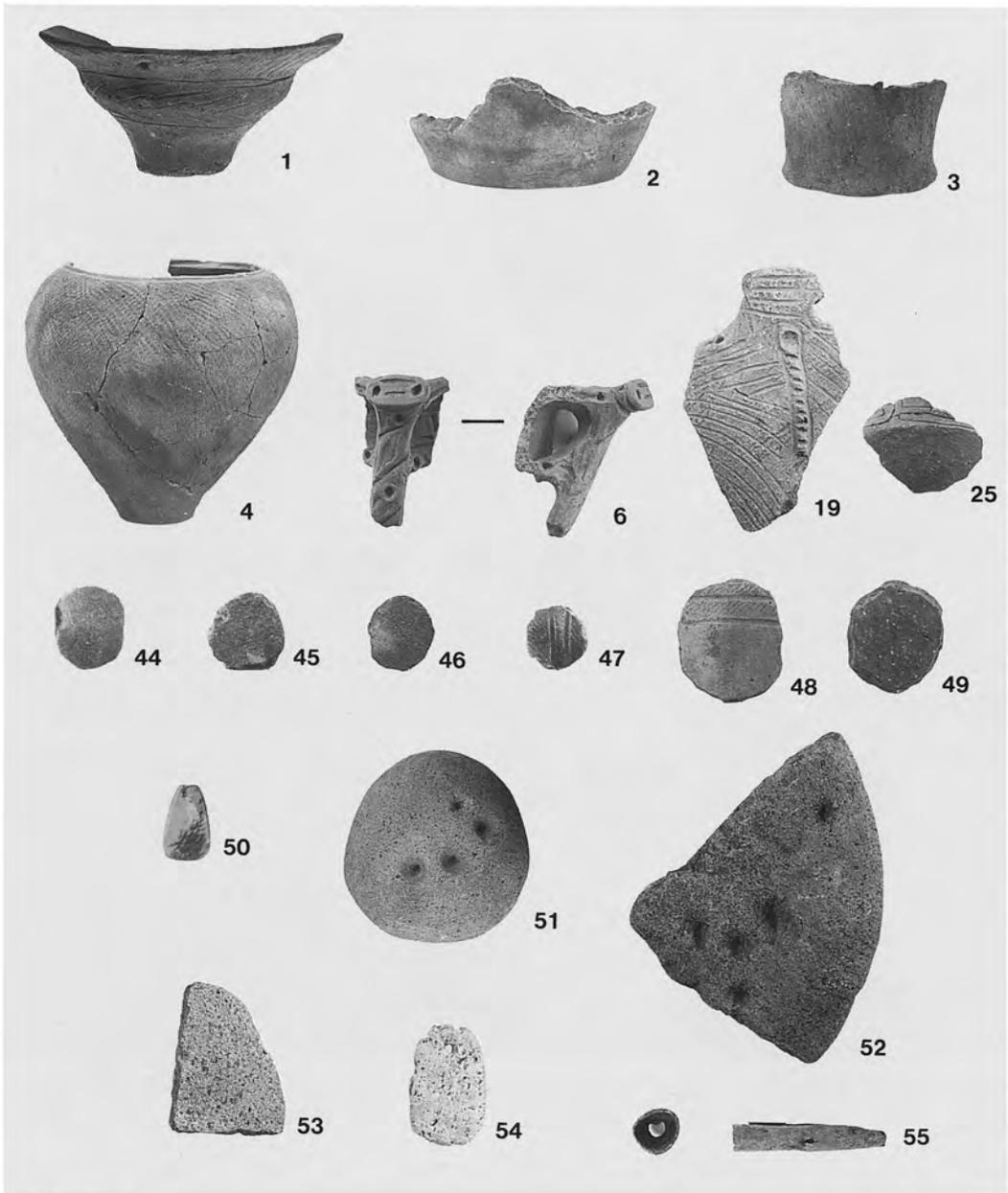
土坑出土土器(1)



土坑出土土器(2)



土坑出土土製品



遺構外出土遺物



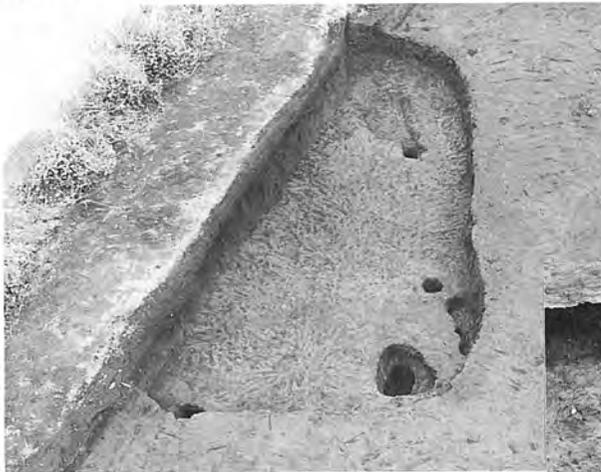
遺跡遠景



調査前全景



完掘状況



第1号住居跡



第1号住居跡出土土器



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡出土土器



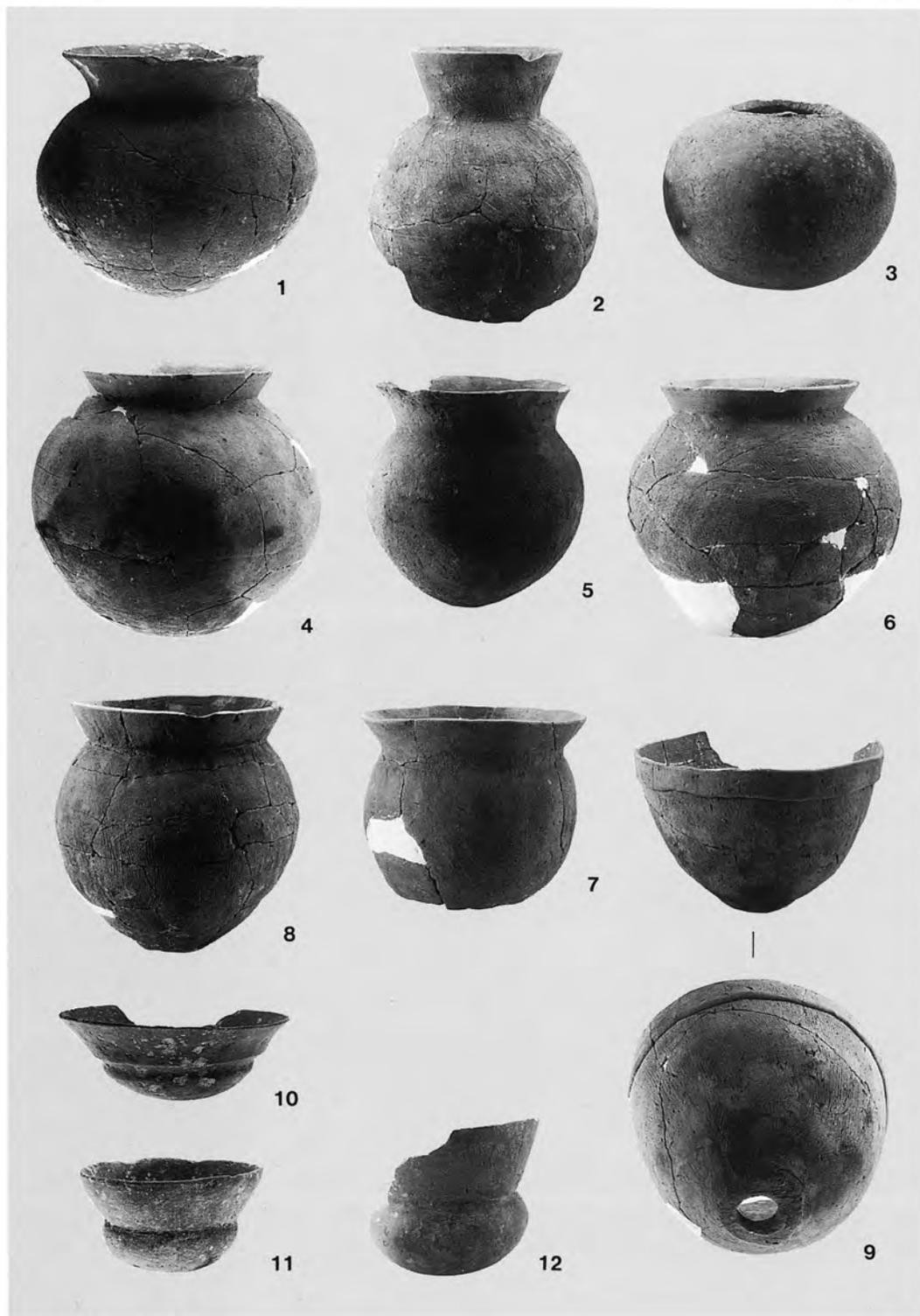
第3号住居跡遺物出土状況



管玉出土状況



第3号住居跡



第3号住居跡出土土器



第4号住居跡



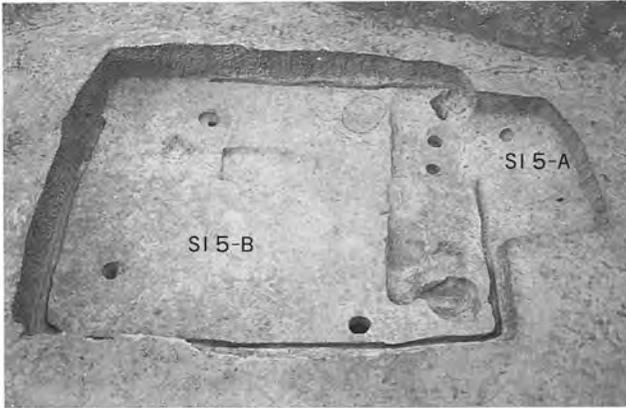
第4号住居跡遺物出土状況(1)



第4号住居跡遺物出土状況(2)



第4号住居跡出土遺物



第5-A・5-B号住居跡



第5-A・5-B号住居跡出土土器



第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土状況

第6号住居跡出土土器



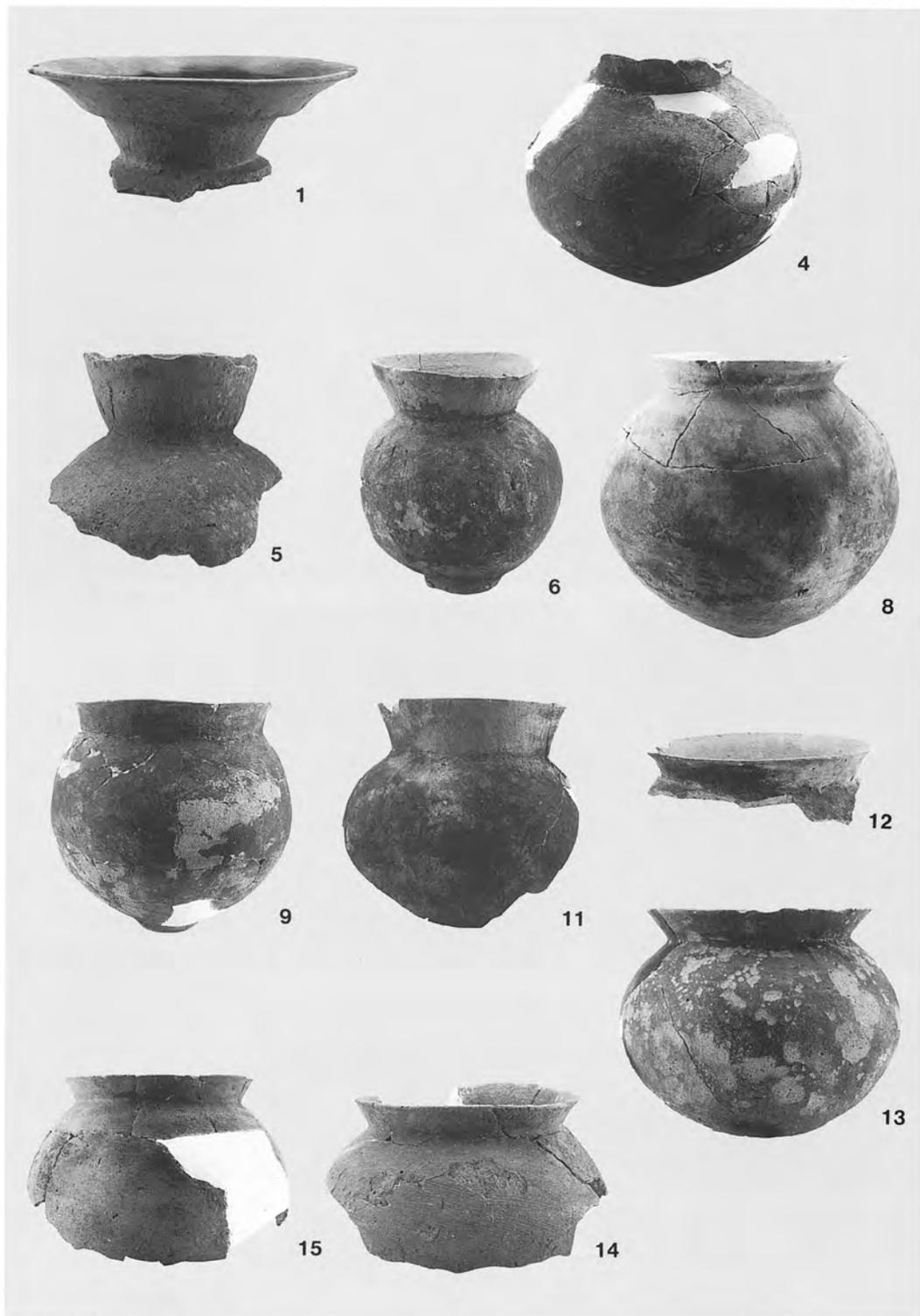
第7号住居跡



第7号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
出土土器(1)



第7号住居跡出土土器(2)



第7号住居跡出土土器(3)



第8号住居跡出土土器

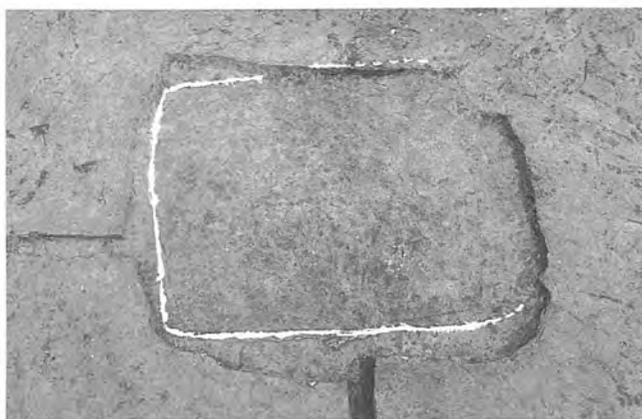


貯藏穴内高坏出土状況

第8号住居跡
遺物出土状況



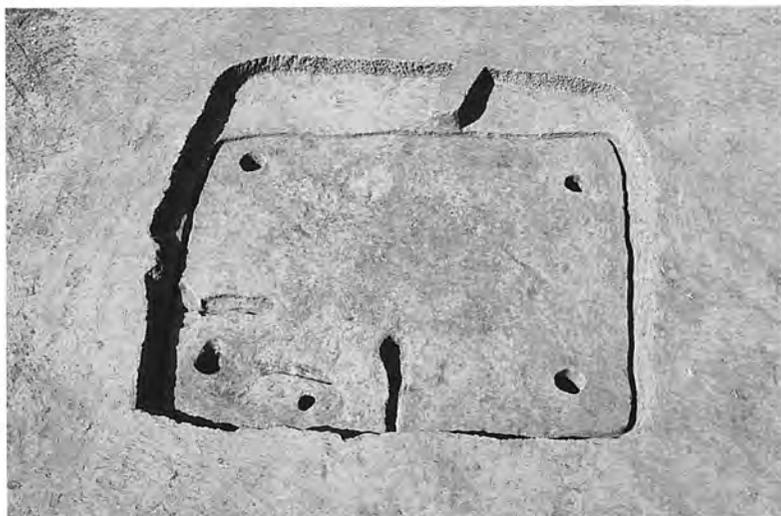
第10号住居跡



第9号住居跡



第9号住居跡出土土器



第11号住居跡



第11号住居跡
遺物出土状況(1)



第11号住居跡
遺物出土状況(2)



第11号住居跡出土土器(1)



第11号住居跡出土土器(2)



第12号住居跡
遺物出土状況(1)



第12号住居跡
遺物出土状況(2)



第12号住居跡出土土器



第13号住居跡遺物出土状況(1)



第13号住居跡遺物出土状況(2)



7

6



1



8

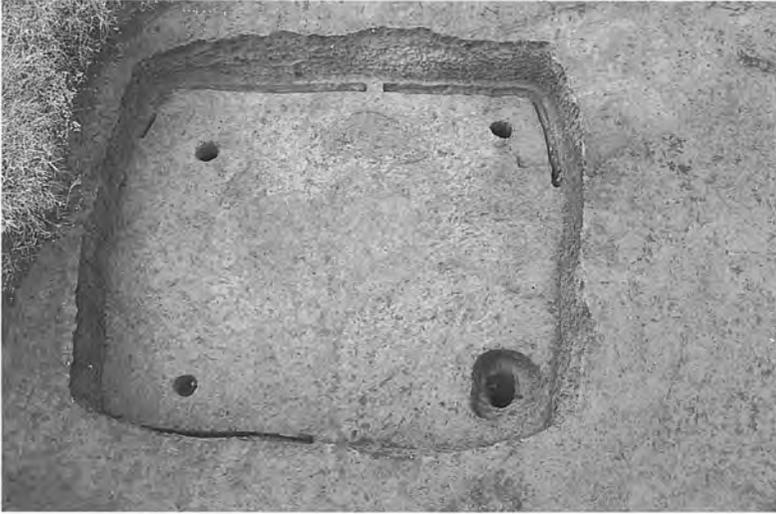


12



10

第13号住居跡出土土器



第14号住居跡



第14号住居跡
遺物出土状況



P₂内器台出土状況

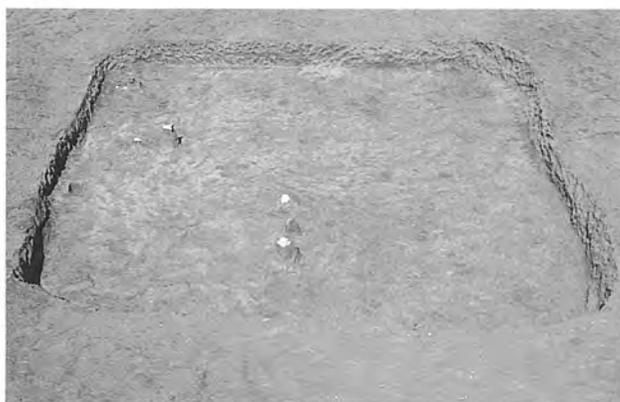


第14号住居跡
出土土器(1)

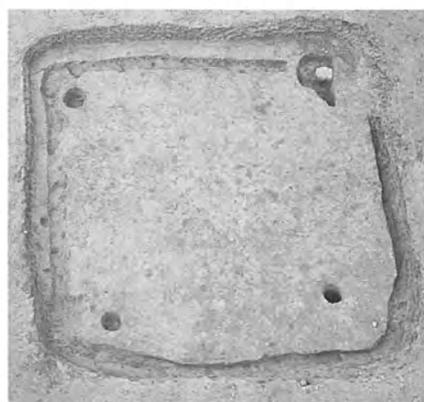


第14号住居跡出土土器(2)

第15号住居跡出土土器



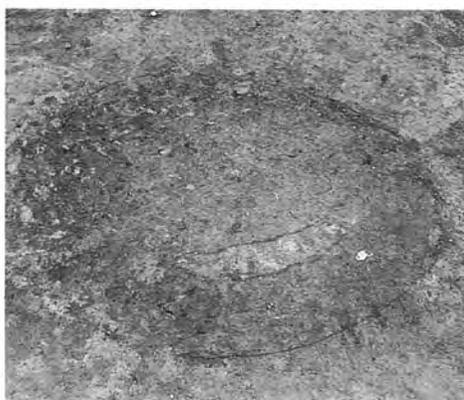
第15号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡炉



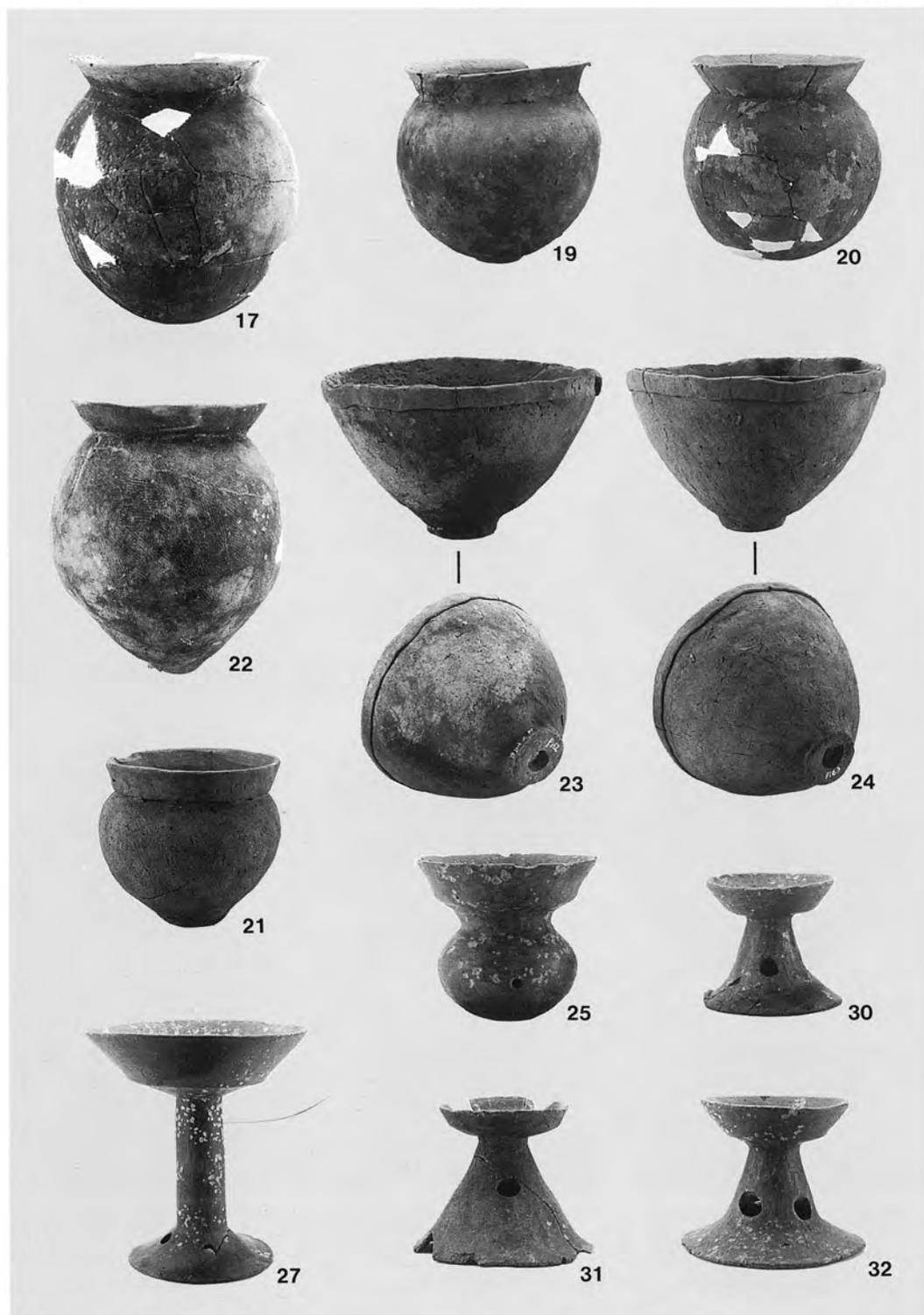
第16号住居跡



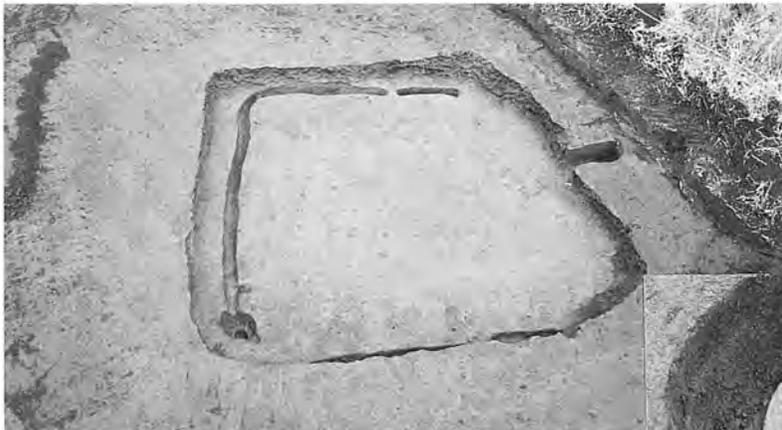
第16号住居跡出土土器(1)



第16号住居跡出土土器(2)



第16号住居跡出土土器(3)



第17号住居跡



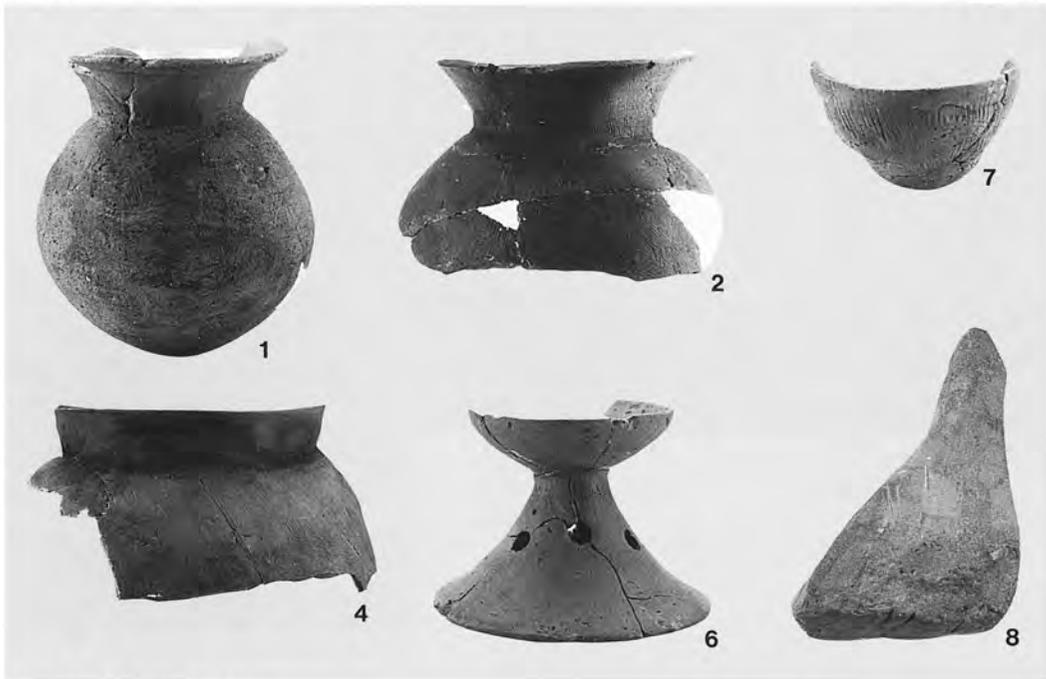
第17号住居跡遺物出土状況



第18号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況



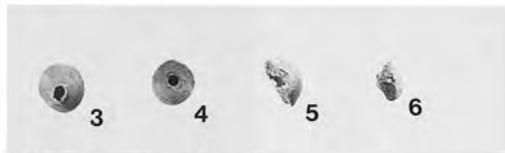
第18号住居跡出土遺物



第19号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡



第19号住居跡出土土製品



第20号住居跡
遺物出土状況(1)



第20号住居跡遺物出土状況(2)

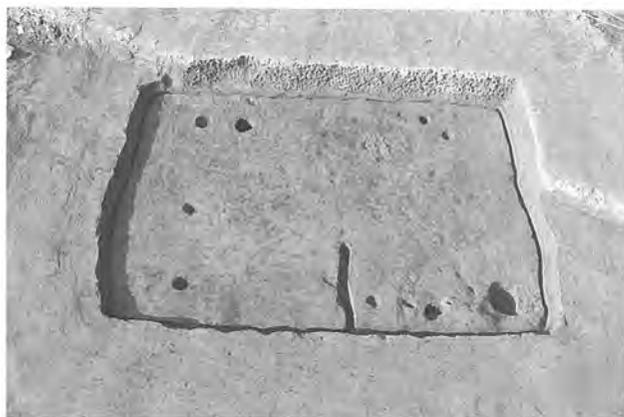
第20号住居跡



第20号住居跡出土遺物



第21号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡



第21号住居跡出土土器(1)



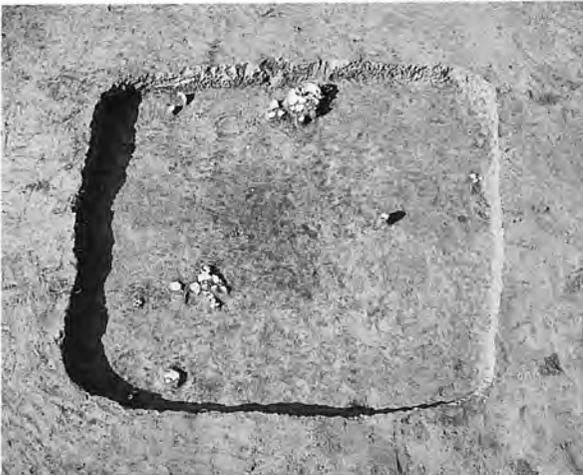
第21号住居跡出土土器(2)



第21号住居跡出土土器(3)



第22号住居跡



第22号住居跡遺物出土状況(1)



第22号住居跡出土土器



第22号住居跡
：遺物出土状況(2)



第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡



第23号住居跡炭化材出土状況



第23号住居跡出土遺物



第24号住居跡遺物出土状況(1)



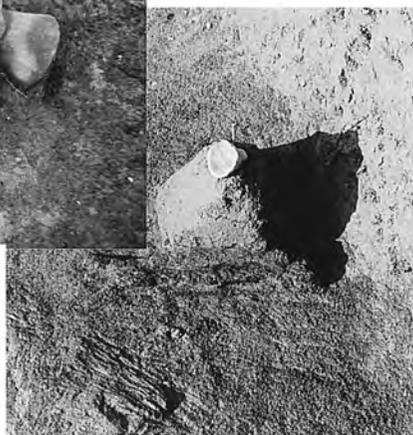
第24号住居跡



第24号住居跡
出土土器(1)



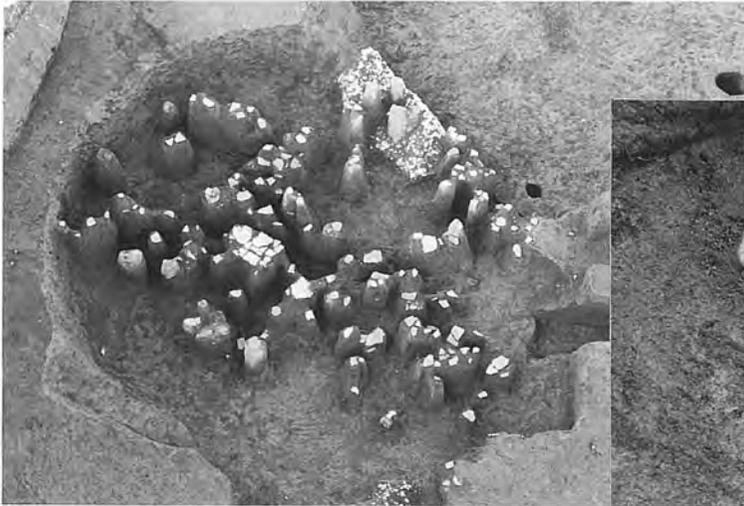
第24号住居跡遺物出土状況(2)



ミニチュア土器出土状況



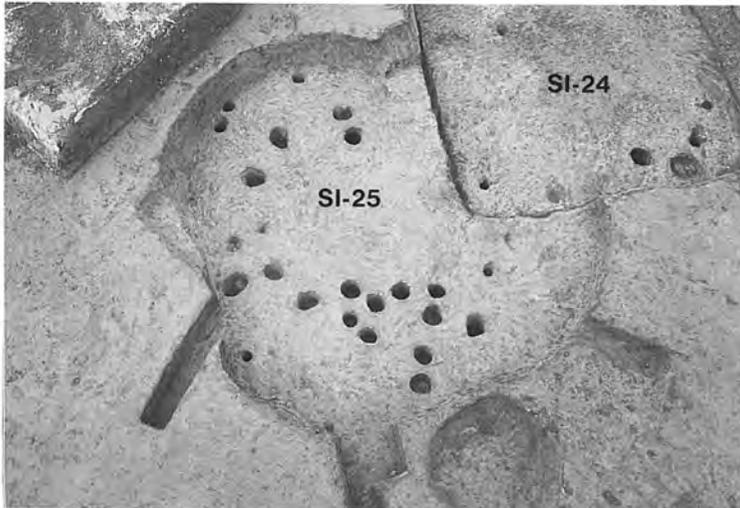
第24号住居跡出土土器(2)



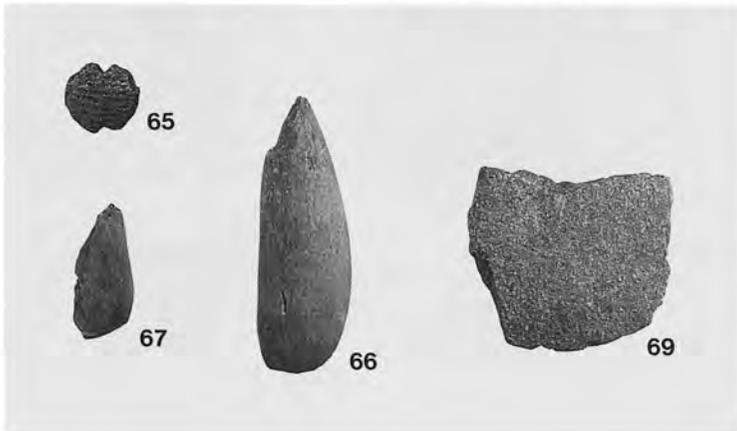
第25号住居跡遺物出土状況



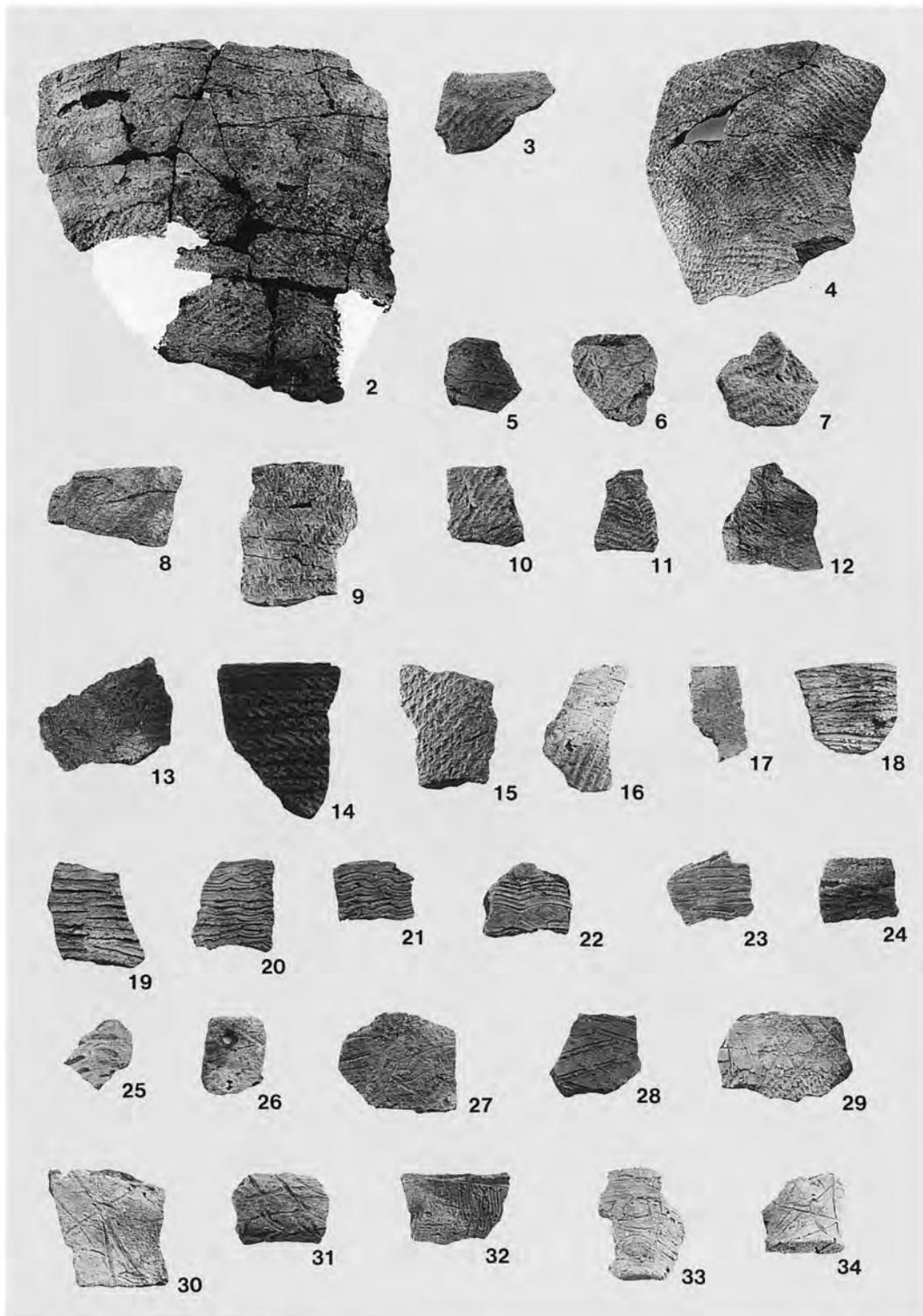
磨製石斧出土状況



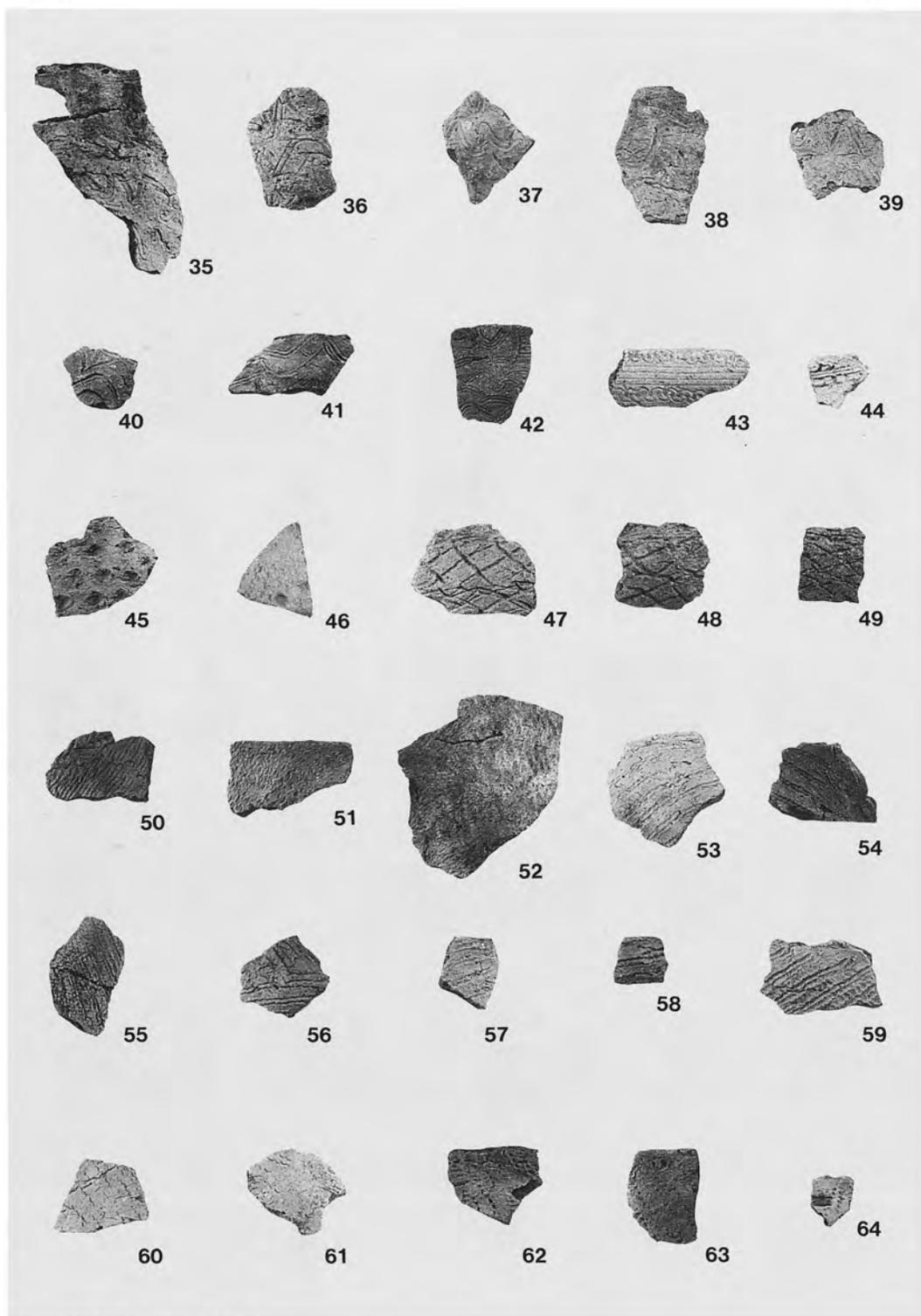
第25号住居跡



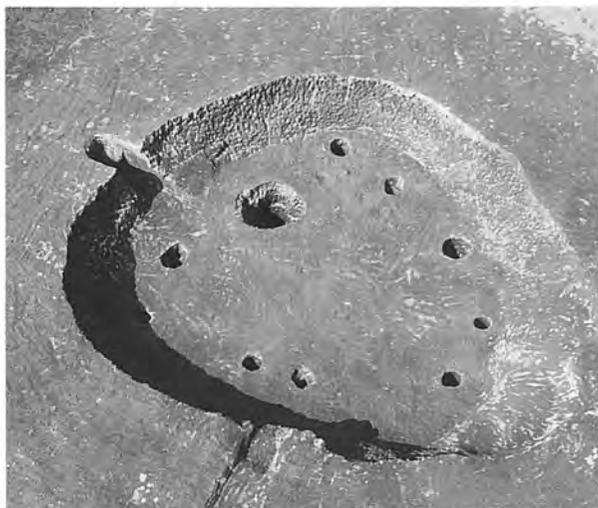
第25号住居跡出土遺物



第25号住居跡出土土器(1)



第25号住居跡出土土器(2)



第26号住居跡



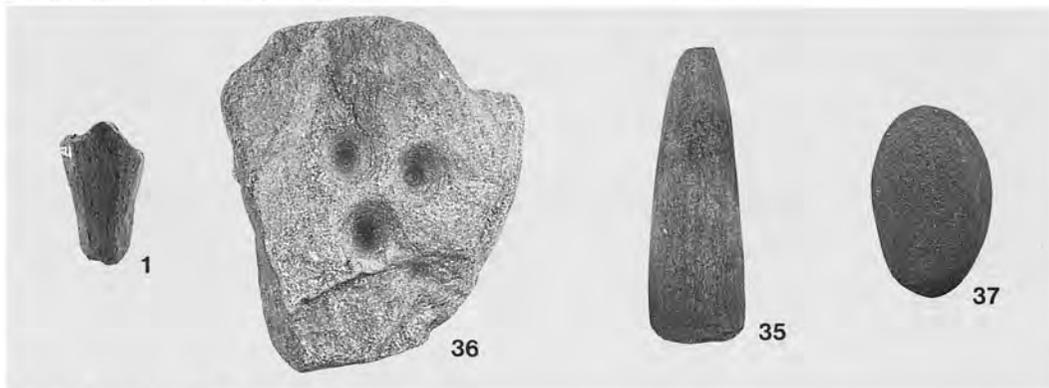
第26号住居跡遺物出土状況(1)



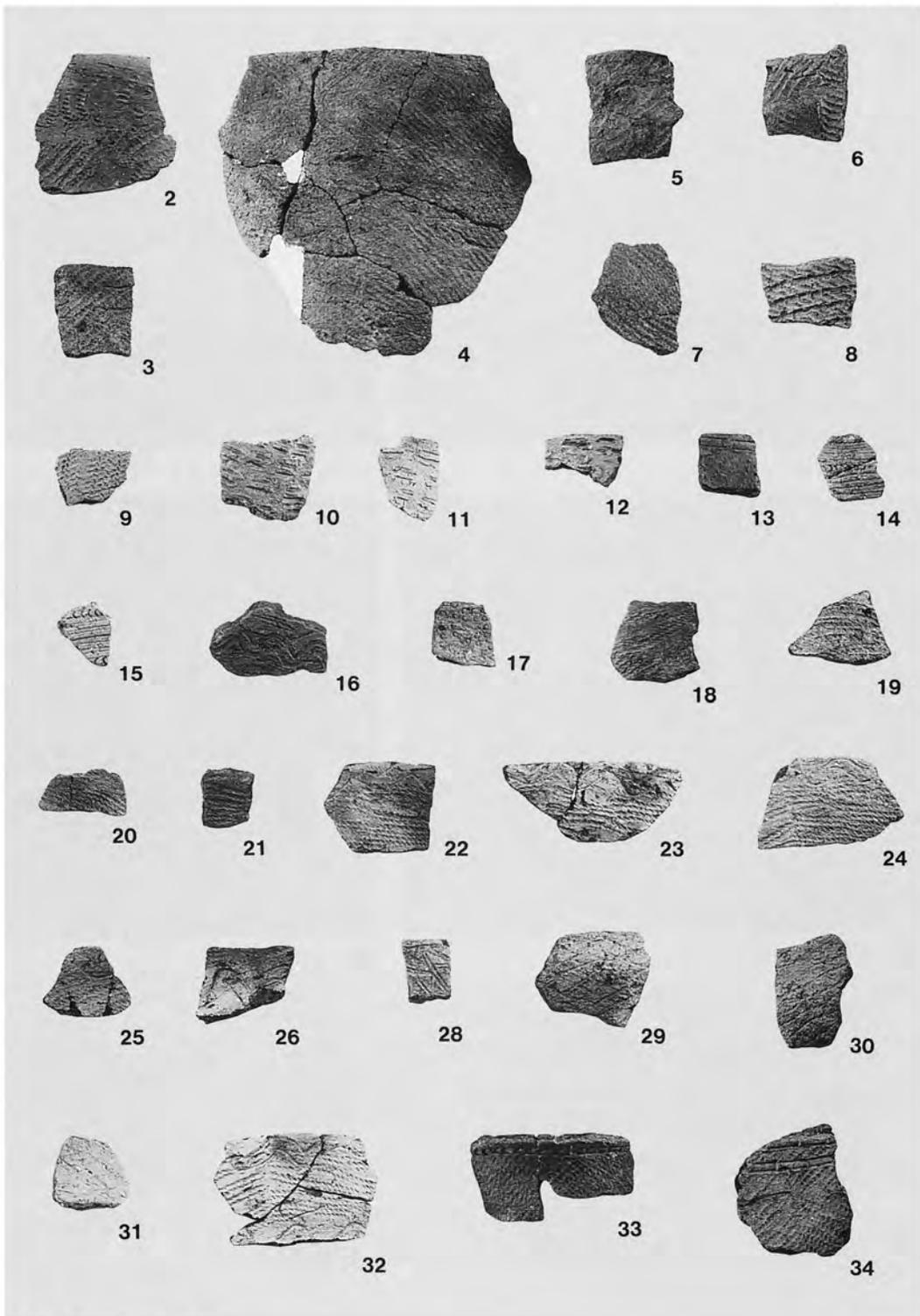
第26号住居跡遺物出土状況(2)



磨製石斧出土状況



第26号住居跡出土遺物



第26号住居跡出土土器

第27号住居跡
遺物出土状況(1)

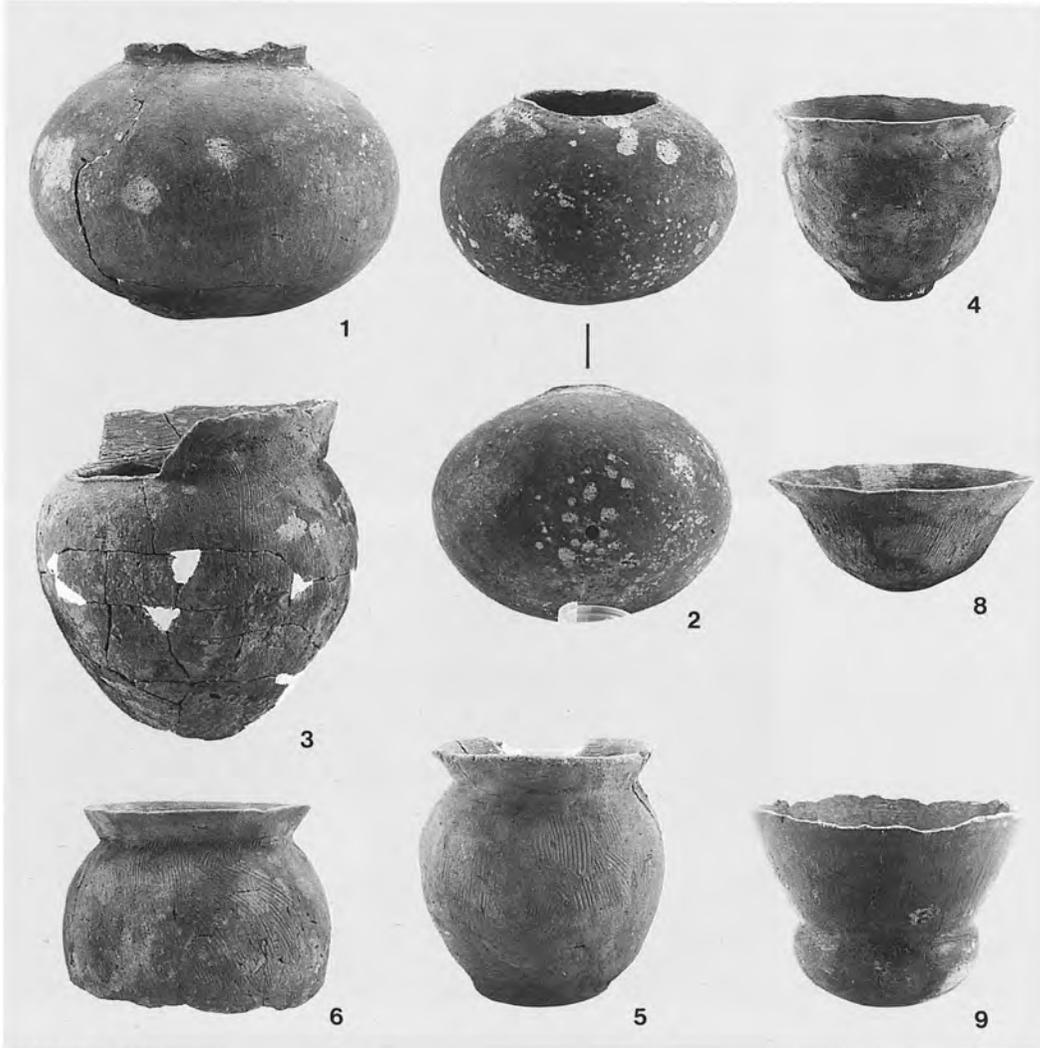


第27号住居跡
遺物出土状況(2)



第27号住居跡
遺物出土状況(3)





第27号住居跡
出土土器(1)



第27号住居跡出土土器(2)



第29号住居跡遺物出土状況(1)



第29号住居跡遺物出土状況(2)



第29号住居跡



第29号住居跡出土土器



第29号住居跡遺物出土状況(3)



第30号住居跡遺物出土状況



磨製石斧出土状況



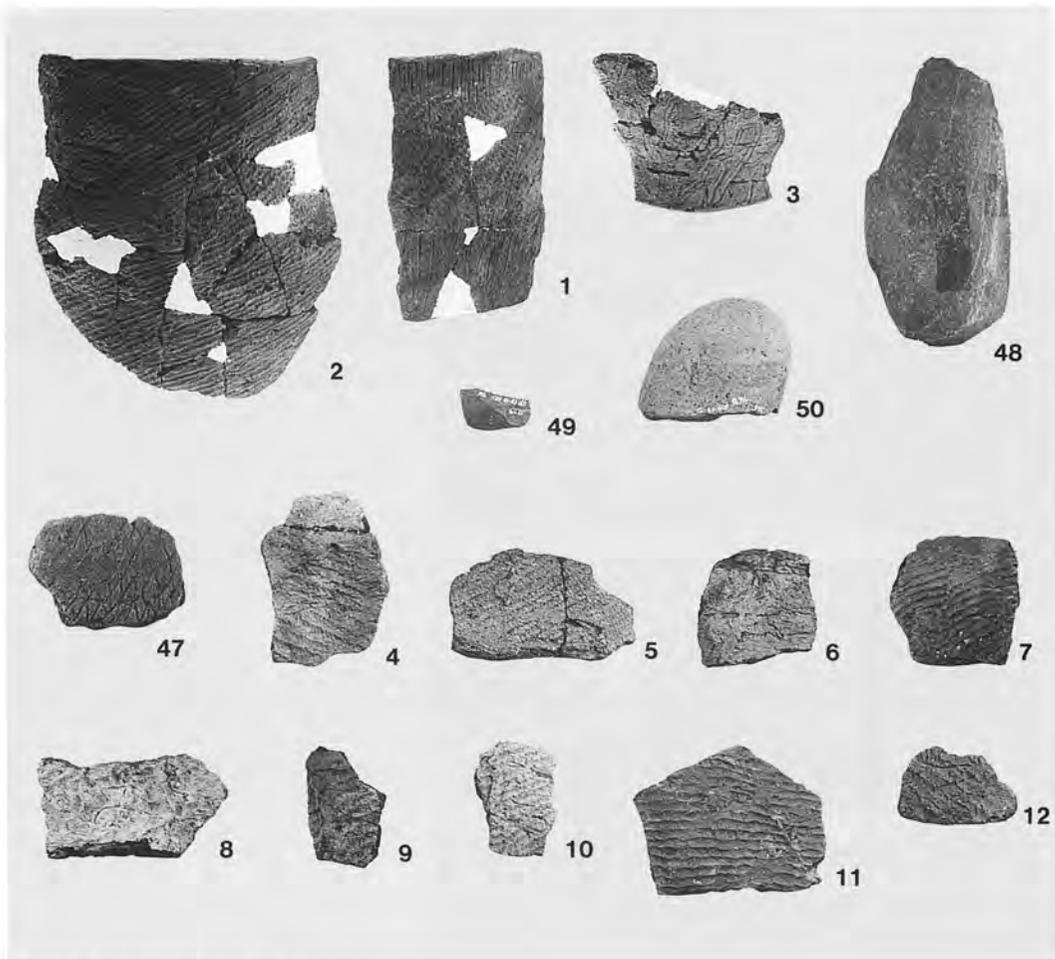
第30号住居跡具出土状況(1)



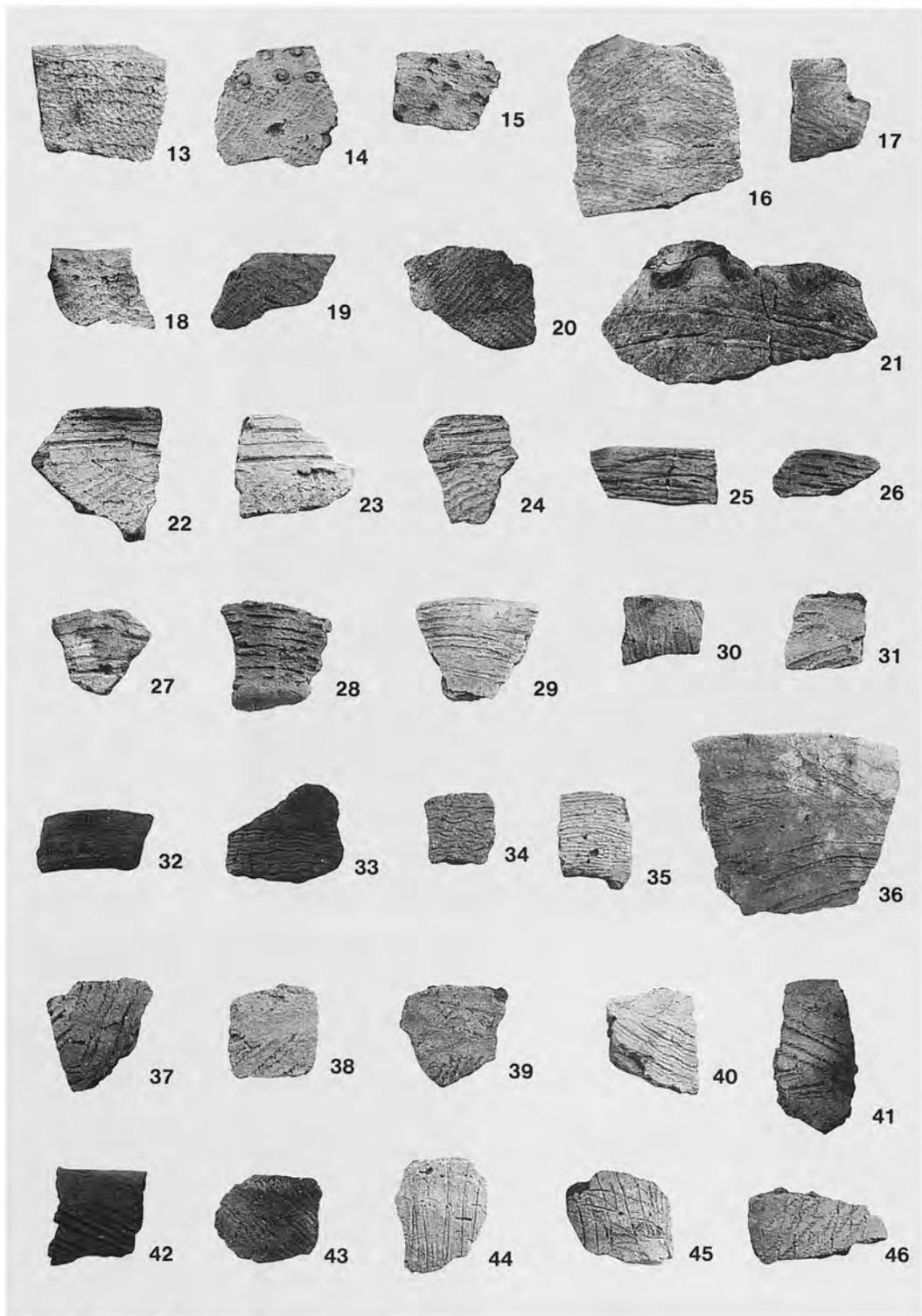
第30号住居跡



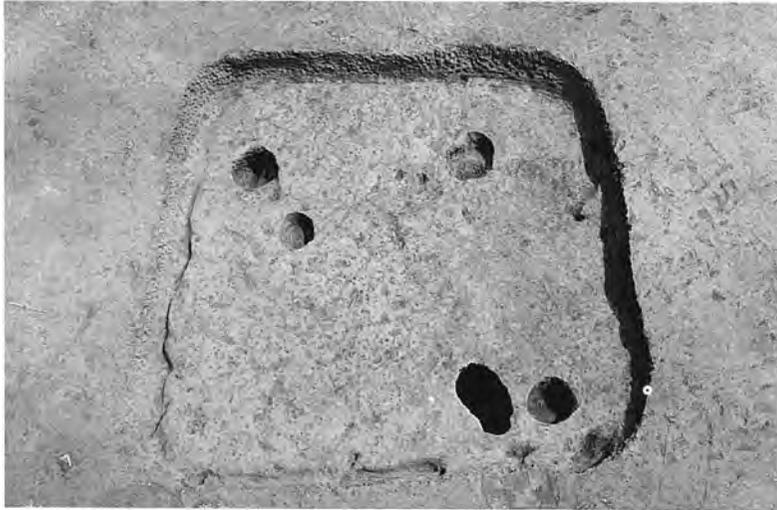
第30号住居跡
貝出土状況(2)



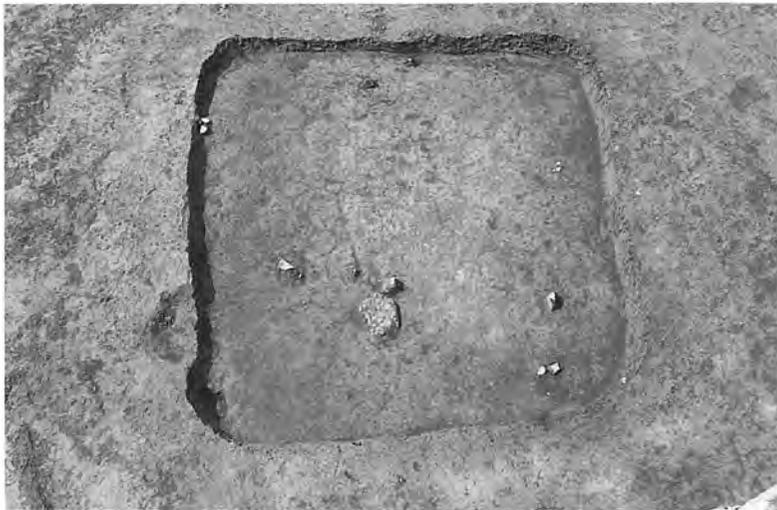
第30号住居跡出土遺物(1)



第30号住居跡出土遺物(2)



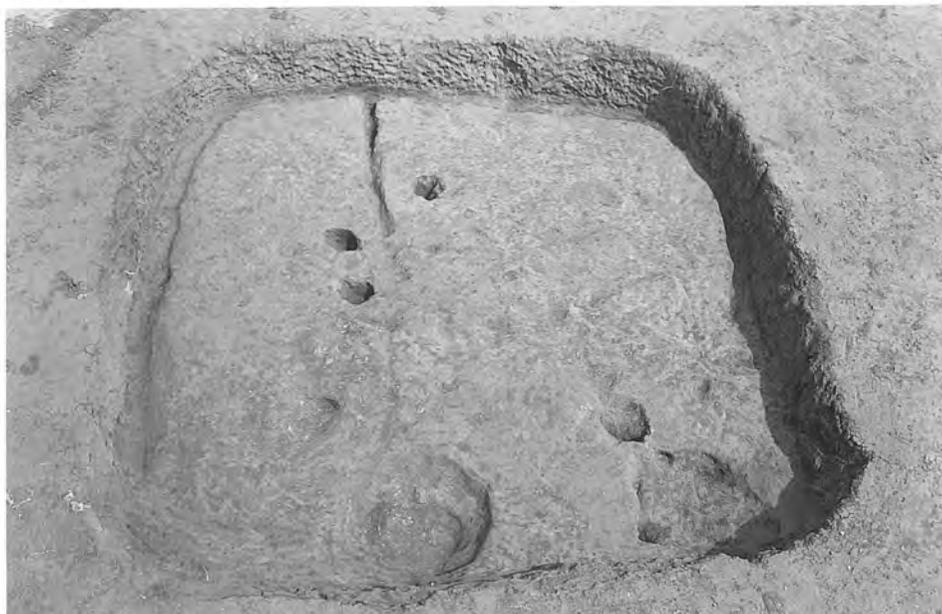
第31号住居跡



第31号住居跡
遺物出土狀況(1)



第31号住居跡遺物出土狀況(2)



第32号住居跡



第32号住居跡遺物出土状況(1)



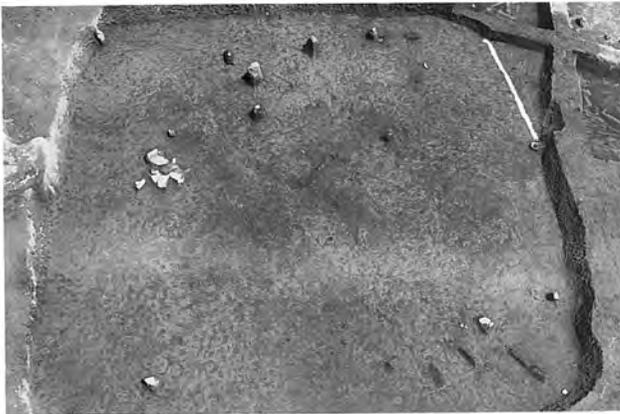
第32号住居跡遺物出土状況(2)



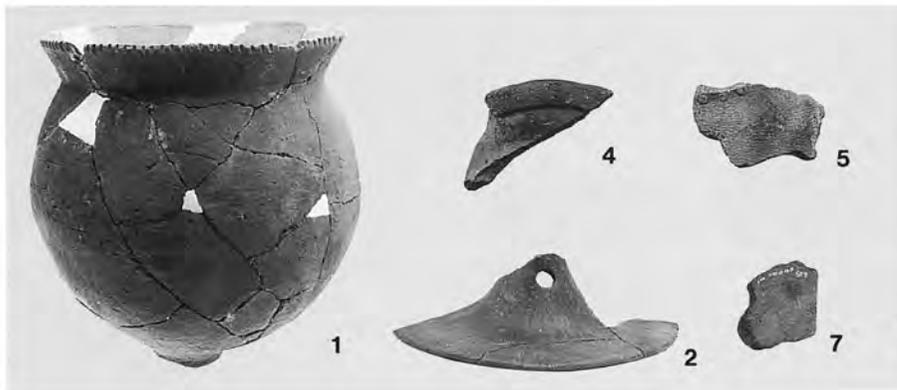
第32号住居跡出土土器



第33号住居跡



第33号住居跡遺物出土状況



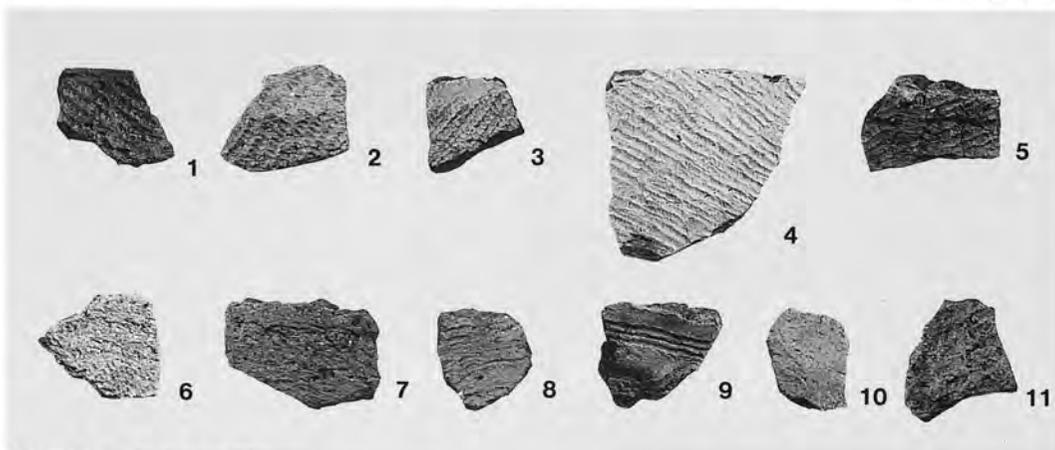
第33号住居跡
出土遺物



第34号住居跡
遺物出土状況(1)



第34号住居跡
遺物出土状況(2)



第34号住居跡出土土器



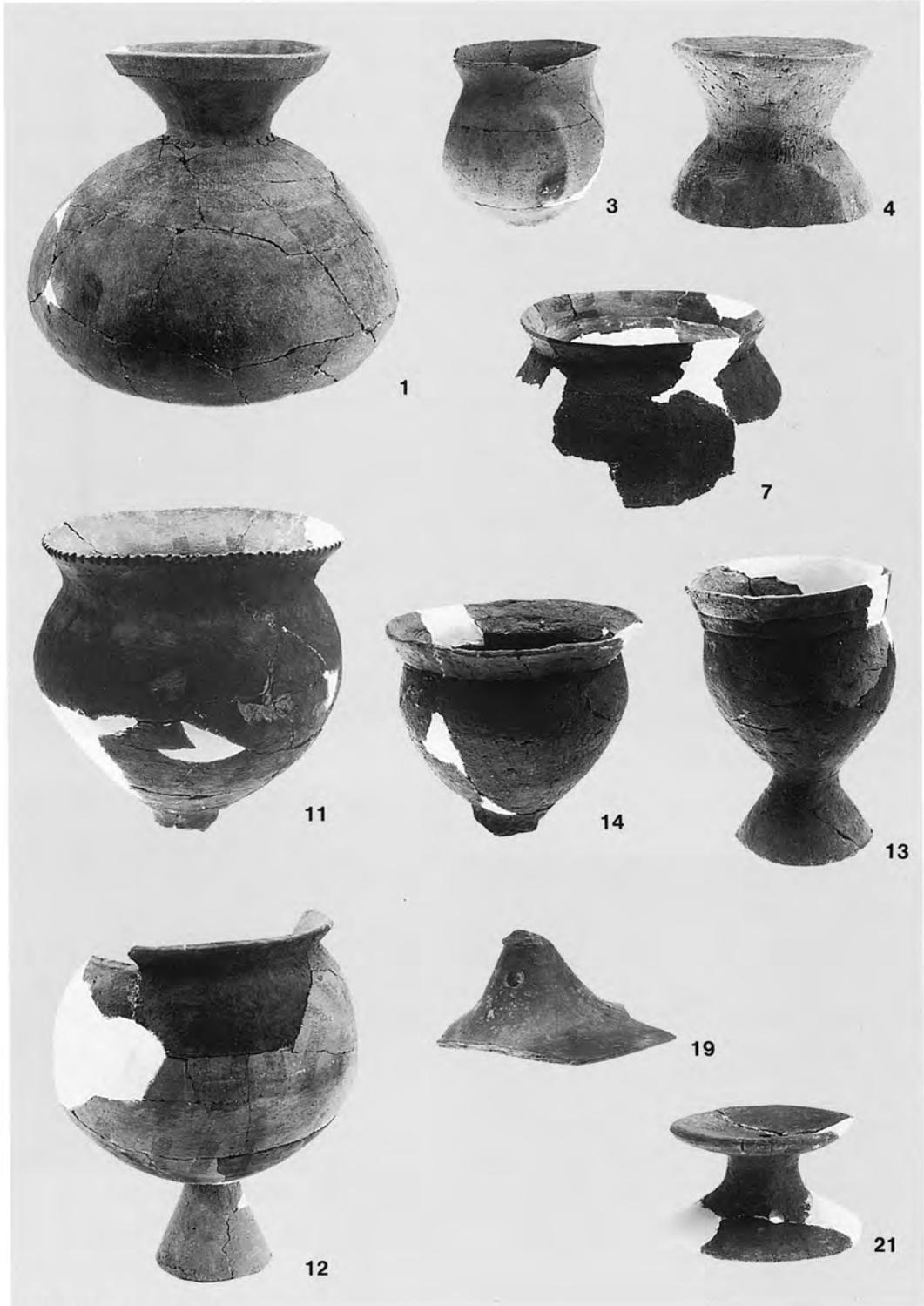
第35号住居跡遺物出土状況



壺出土状況



第35号住居跡



第35号住居跡出土土器



第36号住居跡遺物出土状況



第36号住居跡壺出土状況



第36号住居跡
P₅内高坏出土状況



第36号住居跡出土土器



第36号住居跡



第36号住居跡出土土器



第36号住居跡



第2号土坑



第2号土坑
遺物出土状況



第10号土坑
遺物出土状況



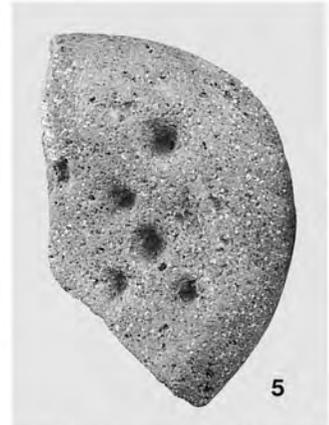
第13号土坑
遺物出土状況



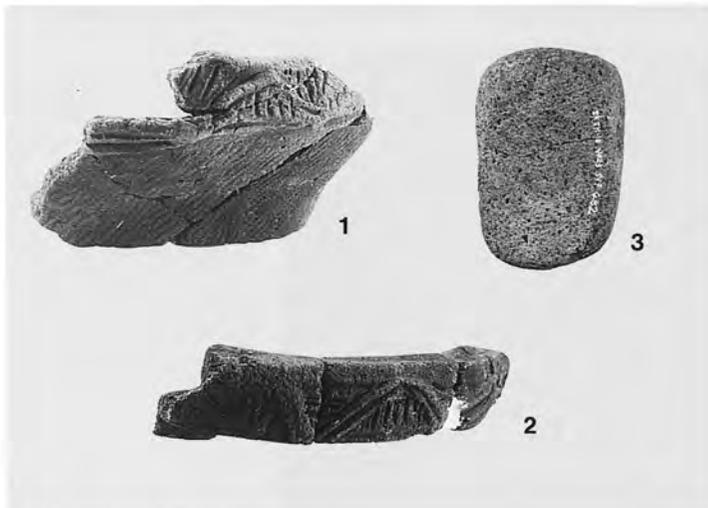
第1号土坑出土土器



第2号土坑出土土器



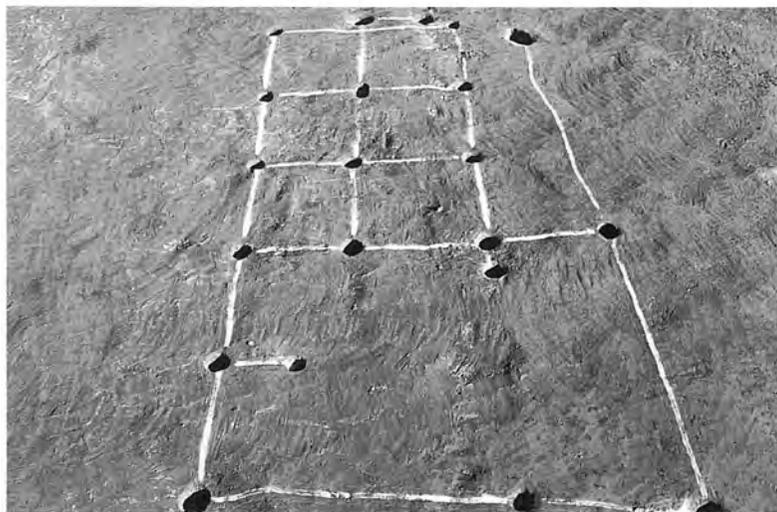
第6号土坑出土石製品



第10号土坑出土遺物



第1号掘立柱建物跡出土石製品



第1号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡



第1号溝



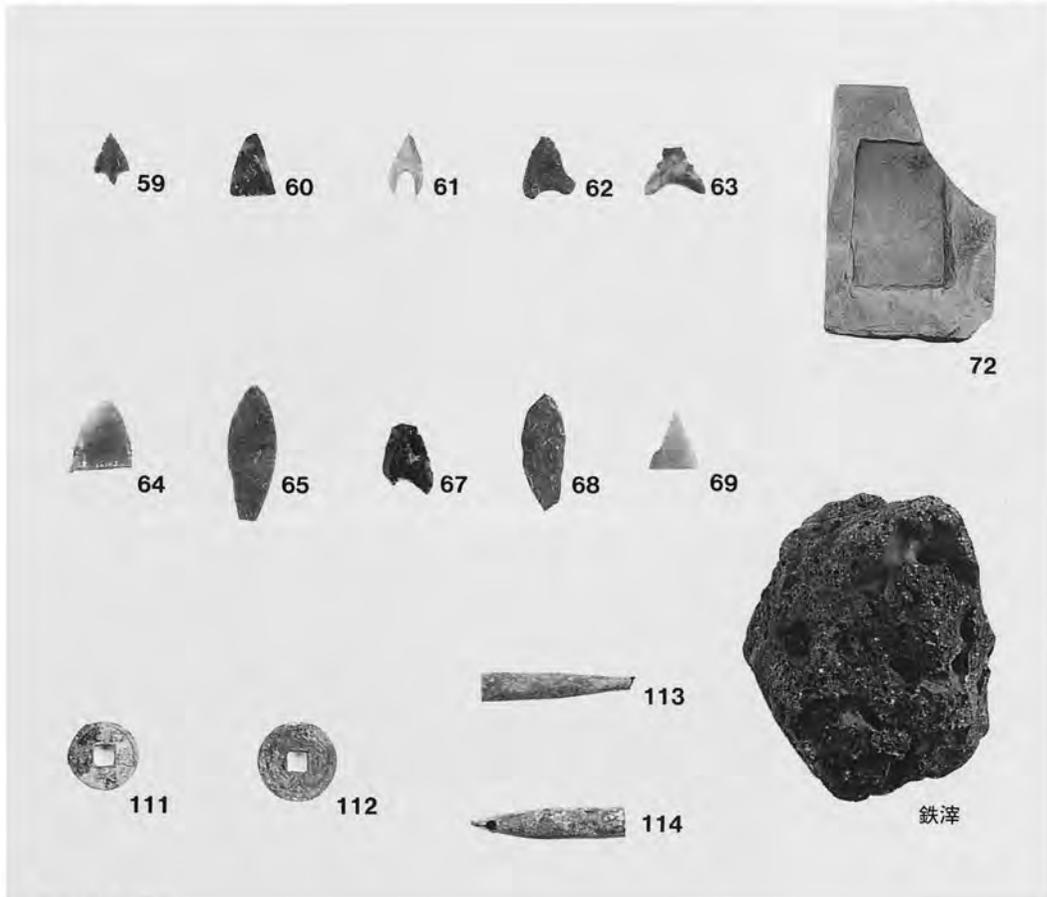
第2号溝
遺物出土状況



第1号井戸

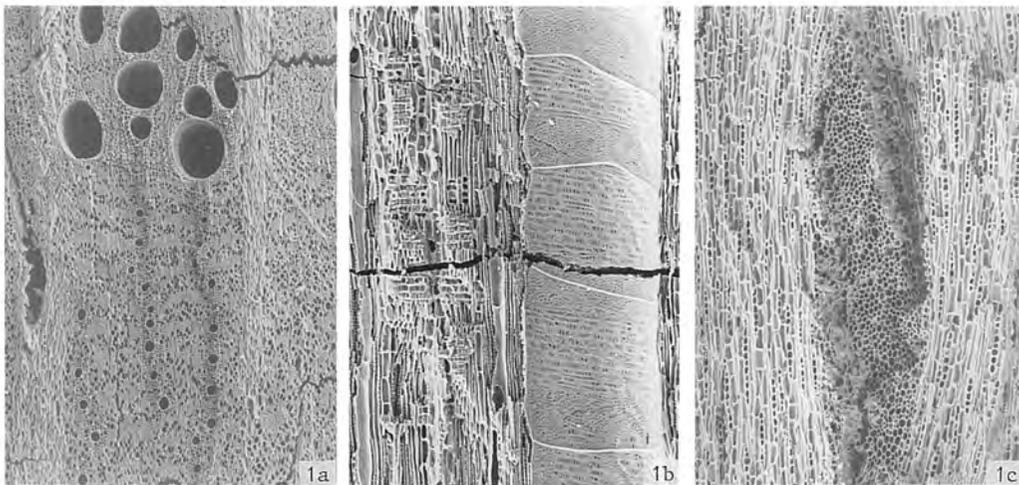


第2号井戸



遺構外出土遺物

北前遺跡・炭化材の顕微鏡写真



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種(35号住居 床直)
a : 木口、b : 柁目、c : 板目

200 μ : a

200 μ : b、c

茨城県教育財団文化財調査報告第83集

茨城県自然博物館（仮称）建設
用地内埋蔵文化財調査報告書

原 口 遺 跡

北 前 遺 跡

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番2号
TEL 0292-25-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社
水戸市根本3丁目1534-2
TEL 0292-31-4241

付図 北前遺跡全体図



